



同志社百史



圖書 館藏

80-110.217

題字
上野直藏

同志社百年史 通史編 二

目次

第四部 戦時下の学府

序	章	1005
第一章	昭和前期の国際交流	1009
第二章	岩倉校地と同志社高等商業学校	1033
第三章	社会的キリスト教運動	1069
第四章	神棚事件と「国体明徴」論文事件	1094
第五章	チャペル籠城事件	1121
第六章	キリスト教主義の後退と湯浅総長の辞任	1137

第七章 同志社専門学校の变迁と終息.....

1151

第八章 太平洋戦争下の学園——男子諸学校.....

1164

第九章 太平洋戦争下の学園——女子部.....

1209

第五部 再生と発展

序 章.....

1235

第一章 財団法人から学校法人へ.....

1239

第二章 大学.....

1285

第三章 中学・高等学校.....

1368

一 同志社中学・高等学校.....

1368

二 女子中学・高等学校.....

1395

三 香里中学・高等学校.....

1408

四 商業高等学校.....

1428

第四章 女子大学.....

1438

第五章	大学院	1458
-----	-----	------

第六章	紛争下の同志社大学	1470
-----	-----------	------

第七章	研究施設と研究活動	1508
-----	-----------	------

第八章	同志社の現況と課題	1549
-----	-----------	------

編集後記		1592
------	--	------

掲載写真一覧		59
--------	--	----

事項索引		48
------	--	----

人名索引		29
------	--	----

通史編 一

第一部 創業と成育

序 章

第一章 ラットランドにおける新島襄

第二章 新島襄の教育理念

第三章 同志社英学校の開校

第四章 初期の同志社——神学教育と伝道活動

第五章 熊本バンドと各種演説会活動

第六章 新島の自杖

第七章 同志社女学校の開校

第八章 同志社大学設立運動

第九章 大学設立義捐金募集運動

第十章 仙台・東華学校

第十一章 京都看病婦学校と同志社病院

第十二章 『同志社文学』

第十三章 新島襄の遺言

第二部 キリスト教教育の受難

序 章

第一章 ハリス理化学校

第二章 同志社政法学校

第三章 キリスト教主義学校同志社の苦悩

第四章 外国人の財産権問題

第五章 キリスト教社会主義と社会事業

第六章 同志社普通学校

第七章 同志社幼稚園

第八章 専門学校令による同志社

第九章 『同志社新聞』『同志社時報』

第十章 外郭団体の創設と活動

第十一章 同志社の宣教師たち——明治期

第三部 大学への道

序 章

第一章 原田総長時代の同志社

第二章 同志社女学校専門学部が発足

第三章 大学令による学園その一

第四章 大学令による学園 その二

第五章 大正デモクラシーと同志社

第六章 『同志社論叢』と『基督教研究』

第七章 京都学連事件と同志社

第八章 大正・昭和前期の宣教師たち

第九章 同志社専門学校の再生

第四部

戦時下の学府

序 章

第四部で取り扱うのは、一九二八(昭和三年)一月から一九四五年、敗戦を迎えるまでの一七年の「戦時下の学府」同志社の歩みである。

この時代はキリスト教を掲げて辛苦を味わった創業期や、明治後半期の国家主義思想の台頭のもとで、苦難の岐路に立った時代とまた異なっており、吹き荒れるファシズムのもとで、つぎつぎに起こってくる困難な学内外の出来事によって、新島襄以来のキリスト教主義教育の維持がきわめて困難な状態におかれ、同志社はずぶるという危機がもたれた時代であった。

一九二八年十一月、海老名弾正の辞任後、中村栄助が原田助の辞任後について、再び総長事務取扱を一年間担当し、一九二九年十一月、九州帝国大学総長を定年で退官したクリスチャンの大工原銀太郎を同志社は総長に据えた。大工原の総長在任期間は五年にみたく、かれは現職のまま一九三四年三月死去した。大工原総長の時代は、かつて代議士西原清東を迎え、衆議院議長片岡健吉を総長にして、事態の好転を計った姿勢と同一轍と称してよい。

大工原総長の死後、過渡的に三たび中村栄助が臨時総長事務取扱をつとめ、そのあと、京都帝国大学教授湯浅八郎が同大学を退官して約一年間総長事務取扱をつとめ、一九三五年一月から総長に就任した。湯浅の総長在任期間はわずか二年間である。湯浅八郎の辞任後、約半年間、理事の上谷統が総長事務取扱をつとめ、一九三八年七月から牧野虎次がこれを継承する。牧野の総長事務取扱在任期間は三年

におよび、一九四一年七月から引き続いて総長をつとめた。この牧野総長の時代に、日本は太平洋戦争に突入し、そして敗戦を迎える。したがって、この「戦時下」の一七年間、事務取扱を含めて、総長の交替すること六人であり、正式に総長の存在していた期間は十年余に過ぎない。時代のはげしい嵐のなかに翻弄され、同志社の命脈はわずかに維持されるというきわめて苛酷な状態にあった。

さて、中村栄助が海老名弾正の後をついだ一年間は、一九二九年七月に発足した民政党の浜口雄幸内閣によって緊縮财政政策がとられたが、この年一〇月にはじまった世界恐慌のなかで、不況を一段と深刻化するのみで、社会不安は増大する一方であった。大工原総長の四年間には満州事変がおき、ついで血盟団事件、五・一五事件などが相次ぎ、一九三三年三月には、日本は国際連盟を脱退する。その年四月におきた滝川事件は官立大学における学問研究の自由が喪われて行く象徴的な事件であった。国家や政府の庇護をえていない私立大学の、文教の府としての根基はまさに風前のともしびに近かった。

この滝川事件にさいして、当時農学部教授であって、評議員として京都帝国大学法学部教授団の辞表を提出して滝川幸辰の休職発令に反対した立場に与した湯浅八郎が、大工原の後をうけて同志社の責務を担当した。湯浅は同志社の創業期から、その運営に尽瘁した湯浅治郎の息子である。同志社はかれに起死回生の妙手を期待した。しかし、国の内外、そして同志社の学内のうごきは、時勢とそれに応じた対立する勢力の分布図がすでに形成され、とくに法学部においては海老名の辞職以来、教員が対抗、分裂し、その抗争は触発の危機をはらんでいた。したがって、湯浅八郎の就任は軍部ならびに右翼関係団体からすれば、キリスト教を徳育の基本とし、国際平和主義、自由主義を標榜した同志社の姿勢とともに、きわめて目障りな存在になりつつあった。しかも、一九三六年二月二六日、皇道派青年将校たちの

起こした二・二六事件を契機に日本は戦争への傾斜の道を加速度に進め、一九三七年七月蘆溝橋事件を境にして中国との戦争は本格化していった。湯浅総長は高等商業学校武道場神柵奉斎事件、『同志社論叢』への「国体明徴」論文の掲載問題に端を発した法学部教授の対立抗争とその措置、配属将校の主導した学生のチャペル籠城事件、さらに治安維持法違反の廉によって予科教授が逮捕されるなど、困難な事態に逢着してついに退陣した。湯浅の後をついだ牧野虎次の総長事務取扱、ついで総長の時代は最早私学同志社が依拠する「外濠」はすでに無いに等しい状態にあった。

このような状況のなかで、一九四一年一月、第二次世界大戦ははじまり、学生生徒の修業年限の短縮、繰上げ卒業、さらに「戦時非常措置方策」、「学徒勤労令」などによって、学園は戦争のために教育機関としての機能を喪失してしまうにいった。

このような同志社の「戦時下」の歩みにおいて、その時代を最も濃厚に反映している事象は一九三七年三月に発表された「同志社教育綱領」であろう。その教育綱領は次の通りである。

- 一、同志社ハ敬神尊皇愛國愛人ヲ基調トシ之ヲ貫クニ純一至誠ヲ以テスル新島精神ヲ指導原理トス
- 一、同志社ハ教育ニ関スル勅語並詔書ヲ奉戴シ基督ニ拠ル信念ノ力ヲ以テ聖旨ノ実践躬行ヲ期ス
- 一、同志社ハ基督ノ真精神ヲ信奉ス

一、同志社ハ敬虔自治日新中正ヲ以テ学風トス

一、同志社ハ良心ヲ手腕ニ運用シテ国家社会ニ貢献スル人物ヲ養成スルヲ目的トス

これを発表した湯浅の真意は、一八八八(明治二一)年制定の「同志社綱領」を変更し、あるいは廃棄することなく、しかも同志社の教育方針は教育勅語の精神を一層よく發揮するものであることを表明す

ることであつた。しかし、この教育綱領が公表されると、同志社はキリスト教を放棄したといい、総長は同志社精神を裏切つたという非難も生まれ、湯浅はその渦中に身をおくことになった。苦境に立つた同志社は「教育ニ関スル勅語並詔書を奉載シ」、これによつて軍部からの圧力をかわし、他方「基督ノ真精神ヲ信奉スル」ということによつて、創業以来の依拠を譲ることなく、しかもこの両者をいかに双方とも両立させるかという命題を背負つたわけである。

大塚節治はこの命題の討究を続け、この両者が根手的に相容れないものであることを確認して、「以後思想的調節の努力は放棄した」（回顧七十七年）と一九四〇年二月二六日の日記にしている。それは大塚節治における内なるキリスト教信仰は堅く持ち続けつつ、同志社としては教育勅語とキリスト教という、それぞれ本来的に絶対性の主張を隠約する両者を両立・併存させるという命題を鮮明にすることをしなかつたことを意味している。かかる意味では「同志社教育綱領」は神学科関係教員からの積極的な支援もなく、正に戦時下の苦悩する窮境の同志社の呻吟であつたと言つてよいであらう。

湯浅はかかる事態を後年になつて次のように回顧する。

都合のいい時は皆、同志社精神は分かっているようなことをいっていますがね。（中略）流れに逆らつて行くということは、殊にあのような時代には本当にむずかしいことではないですか。（『あるリベラリストの回想 湯浅八郎の日本とアメリカ』）

戦時下の同志社をふりかえってみるとき、大塚節治が日記にしろした「思想的調節」を放棄した姿勢と湯浅八郎が述懐する「都合のいい時は皆、同志社精神は分かっているようなことをいっていますがね」という言葉とは、干釣の重みをもつて我々にせまってくるものを感じざるをえない。

第一章 昭和前期の国際交流

国際交流の土壌

昭和初年から日米開戦に至る時期は、同志社教育の支柱の一つである国際主義にとって記念すべき施設が建設された時代である。栄光館、アーモスト館、ハワイ寮の設立は、それらを代表する。本章ではこれらの施設の設立を中心にして昭和前期における同志社の国際交流を述べるのであるが、この時期に栄光館、アーモスト館、ハワイ寮が、偶然創設されたのではない。そのいずれもが、同志社創立以来のアメリカ・ボード、カとのかかわり、とりわけ新島襄の母校アーモスト大学、同志社創立以来の協力者であったアメリカン・ボード、さらにこの両者を中心にして広がった日米間の人的交流の果実として、昭和期に至って同志社に実現した国際的企てなのである。栄光館、アーモスト館、ハワイ寮を中心にとりあげるこの意味は、第一に、新島襄ついで原田助以来の同志社の国際的伝統を見直すことにあるといえよう。

第二に、昭和前期の国際交流を見る場合には、第一次世界大戦後の国際主義の高揚と、それに呼応した海老名弾正総長時代における同志社の気風を念頭におかなければならない。海老名が同志社を辞任したのは、一九二八（昭和三年）のことであるが、アーモスト館やハワイ寮が同志社に設立されるに至る直接の契機も、海老名時代にある。

海老名は総長就任にあたって、人格主義、デモクラシー、インターナショナルイズム、男女平等主義の四つを同志社教育の新しい眼目として唱えたが、昭和初期の同志社には、インターナショナルイズムへの関心が具体的なプログラムを実現させる土壌に育っていたのである。これを反映して、学生や教職員の間にも自発的な国際交流促進の試みがなされた。それらは、今日から見れば規模も小さく、また具体化しなかったものも多かったが、この時期における国際交流の裾野の広がりを思わしめるものである。

第三に注目すべきは、いうまでもなく、この時期は、同志社における国際主義的気風が、わが国の進路と激しい緊張、対立をはらんでいた時代だということである。湯浅八郎が総長に就任した一九三五（昭和一〇）年は、同志社高等商業学校にいわゆる神棚事件がおこった年であるとともに、アーモスト館の献堂式がアーモスト大学理事長G・A・プリンプトン博士を迎えて盛大に挙行された年でもある。キリスト教精神に基づく国際平和の願いをこめてハワイ寮が設立されたのは、翌一九三六年で、同志社に対する軍部および右翼国粹主義の圧力が学園をゆさぶっていた。栄光館に念願のパイプ・オルガンが米國太平洋婦人伝道会の寄附によって設置され、贈呈式が催されたのは、一九四一（昭和一六）年六月である。これを誰よりも望んだクラブ、ヒバードら同志社女子部で働いていた米人教師が、険悪化する日米関係のためやむなく帰国したのは、これより数カ月前の三月であった。日米開戦に向かうきびしい時代の中で、これらの国際主義を象徴する施設が、その目的たる国際理解と友好促進のために果たした役割は、いかにささやかなものであったとしても、同志社の歴史にとって見落すことのできない貴重な一ページである。

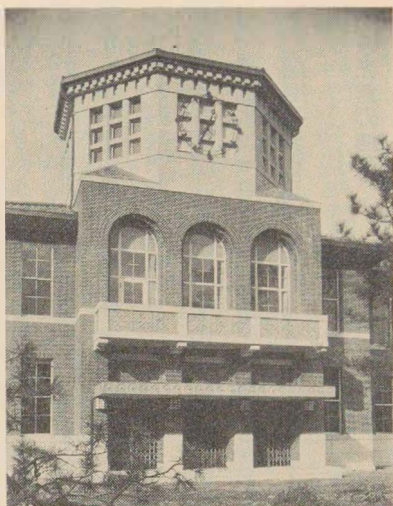
第四に、かかる時期に、困難な国際交流の任にあたった人びとの努力を、われわれは想い起こさなければならぬ。昭和初期は、同志社教育に尽力した初代の宣教師たちが去り、次の世代へとうつりかわっていった時期である。ラーネッドが一九二八（昭和三）年に八〇歳で同志社を去って帰国したのは、これを代表する。この時期に同志

社で働いた宣教師たちは、初代の宣教師に比して中心的役割を果たしてはいないように見えるが、学園の発展にとってなくてはならない存在であった。とくに、ようやく成果をあげはじめた国際主義の教育にとって、宣教師たちの果たした貢献は大きい。女子部のみならず同志社全体にとって、日米を中心にして人的交流に情熱を傾けたデントンの名は周知のところであるが、バートレット、ロンバード、カーブをはじめとする宣教師たちの働きも、忘れるわけにはいかない。またアーモスト館やハワイ寮に国際交流をすすめるために派遣されてきた米国籍の青年たちにも眼を向ける必要がある。従来、宣教師を中心になされてきた外国との関係に加えて、この時期には、国際理解を直接の目的とした交流計画が実現し、これに基づいて、同志社はアメリカ人を学園に迎えたのである。昭和初期は、この意味で同志社の国際交流にとって、画期的な時代だといえよう。

最後に言及しなければならないのは、この時期の国際交流の高まりといっても、それは日米間に限定されたものではないかという点についてである。同志社創立以来の伝統を思えば、これは当然のことだし、万国旗的国際交流はいかに資金をかけても、具体的成果をのこせないものである。また日米間の交流は、第二次世界大戦前には、今日では想像しがたいほど大きな意義をもっていた。しかしここで忘れてはならないのは、この時期に同志社がもっていた国際主義的気風は、日米間に限られたものでなかったことである。ハワイ、中国や朝鮮、台湾から来た多くの青年が同志社諸学校に学んでおり、これを積極的に歓迎する態度が同志社にあったことも、その証左といえよう。具体化に至らなかったが、中国における燕京大学との交流が教職員有志によって検討されていたということも、国際交流を見るにあたって強調されてよいであろう。

栄光館の建設

同志社女子部に栄光館が建設されたのは一九三二（昭和七）年のことで、同年二月一日、当時の紀元節の佳日を選んで献堂式が挙行された。わが国における女子教育の多くが、アメリカ人宣教



栄光館（竣工当時）

師の力によってはじめられたが、同志社の女子教育もまた、その例外ではない。一八七六（明治九）年、新島とデイヴィスの念願がかなって、スタークウェザーのちにパーミリーが招かれ、この二人のアメリカ人女性宣教師によってデイヴィス邸内で同志社の女子教育がはじめられた。これ以来、女子部の発展は、宣教師として渡来したアメリカ人の女性教師に負うところ大である。また女子教育に熱心な関心を抱いていたアメリカの宗教団体、婦人団体や篤志家が、これらのアメリカ人教師の働く同志社の女子教育のために、多大の援助を寄せてきた。同志社におけるこの伝統は、昭和期に入ってもたえることなく、太平洋戦争勃発直前まで続いたのである。

昭和初年の女子部では、アメリカからの寄附による建物为主要な教育施設として並んでいた。代表的なものをあげれば、米国太平洋婦人伝道会の寄附による静和館（一九二二年）、D・W・ジェームズ夫人（Mrs. D. W. James）およびその息子A・C・ジェームズ（Arthur C. James）の寄附によるジェームズ館（一九一四年）、アモスト大学理事長プリンプトン（G. A. Plimpton）の寄附によるプリンプトン寮（一九一九年）等である。同志社、とくに女子部の発展がいかにアメリカの援助に負っているかを知るため、ジェームズ館にその名を留めているA・C・ジェームズについてふれておこう。彼は米国屈指の富豪で、ジェームズ館のほか多額の援助金を同志社に贈り続けた。女子部の教育に長年尽力した中瀬古六郎は、一九四一（昭和一六）年ジェームズの死を弔って次のように記している。

同志社の興隆発展の事はジェームス氏の念頭を断へず去来してをつたもので、明治四十二年には母堂の名を以

て約一万円を寄贈せられて、女学校平安寮の建築に資され、翌明治四十四年の夏には、(1)女学校新教室(ジェームス館)の建築費と、(2)女学校一般経費に充つべき基本金と、(3)女学校々々長俸給費のための基本金との三大綱目の下に、合計金貨十萬ドルを寄贈せられ、その後大正二年より同七年に亘り五回に跨りて、女学校常盤寮、家政館及びその他建築設備、修繕、土地購入費等のために、約四万六千円を提供せられ、別に同志社男子部のためには土地購入費として大正二年に四万八千余円を贈られ、其後アムハースト(アーモスト)館建設費中へも約その半額を醸出されたのである(『同志社新報』第六〇号 昭和一六年七月二〇日)。

A・C・ジェームズ自身アーモスト大学の出身者で、彼の父もアメリカン・ボードと関係深い人物であったから、もともと彼が同志社に関心を持っていたことは容易に推測される。しかし、同志社の女子教育に尽力するデントンがA・C・ジェームズの父と面識があり、その縁故でA・C・ジェームズが一八九六年夫人同伴で来日の際、同志社を訪問してデントンと親交を深めたことが、彼を同志社に強く結びつけることになったといわれる。このように、多くのアメリカ人の協力者を同志社、とくに女子部に結びつけるのに、いつも大きな役割を果たしたのは、周知のようにメアリー・フローレンス・デントンである。栄光館の建設は、このようなアメリカ人の間に見られた日本におけるキリスト教に基づく女子教育に対する強い関心と、デントンの役割が代表するような、アメリカ側の関心を同志社に結びつける努力、すなわち同志社教育に献身したアメリカ人宣教師の働きとを象徴するものである。

しかしアメリカ側の関心と、これを同志社に結びつける役目だけでは、実のある国際的事業は遂行できない。それだけなら、デントンの働きで、同志社がアメリカ人から資金を得たというだけのことで、同志社とアメリカとの関係の多くが、残念なことに、この段階にとどまってきたのも事実として認めなければならない。しかも、寄附金を受けいれる同志社の態度には、あとから見れば好ましくない場合も少なくなかったようである。さきにあげた中

瀬古の文章には、次のような言葉が記されている。

ジェ氏（ジェームズ氏）の数年に亘る多額の寄贈金に対して、之を受けた方からは、時としては第三者から見ても背信忘恩の行為に近しとさへ思はるゝ様な所作が一度ならずあつたに拘はらず、氏は一言も之に就て不満を言はれたことがなかつた。また数疋の犬の間に一塊の肉を投げたとき犬と犬とが互に牙をむいて之を争ひ、相反しあふが如き浅ましき光景さへあつた時にも、氏の方からは全然左様な事を見やうとも聞かうとも為られなかつた。

太平洋戦争直前に、ジェームズに対する感謝と反省をこめて書かれたこの文章は、本章でとりあげてよい、同志社の国際交流に関する資料であらう。

いうまでもなく、アメリカから財政的援助を受けることが、国際交流としての意義をもつためには、受け入れる側の同志社が明確な事業遂行の意欲と計画を持っていなければならない。寄附金に対する同志社の責任ある姿勢が必要なのである。栄光館の建設はこの点で、幸いにも成果をあげた国際的事業といふことができる。栄光館建設に要した費用は総額約一八万円であつたが、アメリカの篤志家ファウラー氏の寄附金はその三分の一にあたる。といふのはファウラーの好意に対して、これと同額の六万円を女子部卒業生と在校生が醸金し、さらに同額の六万円を同志社が負担して栄光館ができあがつたからである。すなわち、ファウラー家、同窓会、同志社の三者による協力事業として、同志社の女子教育の発展を物心両面で支える偉大な事業が実現したのである。当時の関係者は栄光館の建設に関して、この点を等しく強調している。その例として末光信三の文章を引用しよう。

同志社教育の中心たる礼拝に関し、吾人は今日まで適當なる場所なくして、体操のための建築物を用ひて來たわけである。体操場必ずしも悪いと云ふのではない。併し吾人は、よりよき場所を望んで已まなかつたのである。而して茲に多年の冀願が達せられて新しく栄光館ファウラー講堂が与へられた事は実に吾人絶大の喜びとす

る処である。而も其建築総額拾八萬円の三分の一が米人ファウラー氏の寄贈にかゝり、他の三分の一は同志社財団法人の出資により、残りの三分の一は同志社女子部同窓会並に学友会の醵金によるものであつて、悉く愛校精神の発露と相互扶助の結晶とも云ふべきもので、たゞ感激の外はないのである（『同窓会・学友会期報』第五六号）。

末光が記しているように、主要な校舎がようやく整つてきた女子部にとって、チャペルあるいは講堂を持つことは、何より強い意願である。たえず夢を描いて実行にとりかかるデントンが、この必要を説いてファウラー家から二万ドルの寄附金を得たのは一九一七（大正六）年であつた。ファウラー家と同志社の関係は、デントンとの個人的結びつきがきわめて強く、栄光館の中心にあたるファウラー・チャペルに名を留めるエルドリッジ・ファウラー（Eldridge Fowler）は、デントンの許婚者であつたとも伝えられている。そうでないという見方が、真相のようであるが、ともあれファウラーは、彼女と若き日に知りあい、終生にわたり友情厚い理解者であつた。ファウラーは材木商として成功した人物で、一三歳の娘ケートを伴つて訪日した際、青年時代に知りあつたデントンの勤める同志社の客として二週間以上も滞在している。これによつて、同志社とデントンの働きに、彼は深い共感を抱くようになった。これに加えて、彼が最初の妻を亡くして再婚した相手が、アメリカン・ボードを通して同志社に関心を持っていた人の娘でもあつた。このような関係からデントンは、一九一七年に休暇で帰米したとき、エルドリッジ・ファウラーはすでに他界していたが、彼の娘のケートを訪ねることができた。結婚してマールスミス夫人（Mrs. Van S. Merle-Smith）となつているケートに、このときデントンは、念願の講堂建設のための寄附を訴えた。この願ひに対して彼女は、義母にあたるファウラー未亡人と両名で、亡き父の記念として二万ドルをデントンの事業のために贈ることを約束した。

デントンはこの二万ドルをすぐに用いず、アメリカン・ボードに託して利殖をはかる方針をとつた。それにして

も、なぜ講堂の建設が十余年も先に延びたのか。その次第は明らかではないが、個性が強く、夢の大きいデントンは、友人ファウラーの贈物を、同志社が誇るにふさわしい大殿堂のために用いようと心に期して、時の来るのを待ったためと見てよいであろう。一九二七年に静和館に火災が起きた際、保険金と寄附金を合わせて、修復費用に余裕ができたことがある。このとき、海老名総長はこれを資金として、講堂建設事業を起こそうと計画したが、デントンがこの案に強く反対している。静和館の火災は、デントンがファウラーから二万ドルの寄附金を得てから一〇年後のことであるが、彼女は海老名の計画にこの資金を用いようとしなかった。『デントン先生』の著者中村貢は、この一件をデントンが新講堂に対してよせていた壮大な意図を示す例としてあげているが、これは適切な見方といえよう。

栄光館は一九三〇（昭和五）年一二月に着工し、三二年二月に落成式が行われた。設計は京都帝国大学教授の武田五一、施工を受け負ったのは大倉土木株式会社である。栄光館の名称は、旧約聖書エゼキエル書第四章四節「エホバの栄光東向の門よりきたり家に入る」と、ハガイ書第一章八節「殿を建てよ、さすれば我これを悦び又栄光を受けん」からとられ、中心をなす大講堂は、ファウラー・チャペルと名づけられた。落成式の席で寄附者に代って祝辞を述べたデントンは次のような簡潔な言葉を残している。

ケートとわれわれとの間を、広い大洋と、大きい陸地が分けてはいますが、今日このチャペルを神のご用のために捧げるに当って、彼女の想いと祈りが、われわれと共にあることを信じます。この建物の中で神のみ言葉が読まれ、説かれる時、それを聞く人々は、何をなすべきかを知り、それを行なう力と勇気が与えられることを祈ります（中村貢『デントン先生』に引用の邦訳による）。

ジェームズ館と静和館の間に位置する栄光館は、アメリカ復興式の建築様式の二階建、中央出入口の上に八角形

の塔を配し、女子部中央の主要建築としての威容を感じさせる。座席数約二〇〇〇を擁するファウラー・チャペルは、同志社のみならず、当時京都においても比類のない立派な講堂である。栄光館の建設は、キリスト教精神に基づく日米友好の絆を、多くの人びとに広く印象づけるものであった。

この講堂にパイプ・オルガンの据付けが完成したのは日米の間に戦いの火ふたが切られる一九四一年の初めである。栄光館落成時の工事概要には、「パイプオルガン装置、ステージ背部に据付の予定」と記されているが、当時パイプ・オルガンはわが国ではきわめて少なく、本格的なものは東京以外には一台もなかったといわれるから、その実現の可能性も、またデントンの夢と、これに望みを託する同志社の願望でしかなかった。しかしデントンは太平洋婦人伝道会の決定で、カリフォルニア州オークランドのオーガスタ・コリンズ夫人(Mrs. Augusta Collins)の遺産五〇〇〇ドルをパイプ・オルガンのために贈られた。デントンの協力者として女子部で教鞭をとっていたクラブによれば、この決定がなされたのは一九三〇年の暮で、これが事実なら、栄光館建設時にデントンはパイプ・オルガンを備える具体案をもっていたわけであるが、中村貢はクラブの記している年代を疑問視している。ともあれデントンは五〇〇〇ドルをもとに利子を積みたて、これに加えて再びファウラーの娘マールスミス夫人に寄附を頼み、総額八五〇〇余ドルをもって、アメリカのモラー・オルガン製作会社に、栄光館のためのパイプ・オルガンを発注する日を迎えた。それが完成して太平洋を渡り、同志社に到着したのは、一九四〇年八月である。こうして国際情勢がますます悪化するなかで、やっとパイプ・オルガン据付けの事業は実現することになった。このオルガンに対して教育上の備品として特別に課税免除の計らいがなされたことや、わが国の船会社が運賃無料でこれを輸送する好意を示したことなど、当時の国際情勢を考えれば、ここに記す価値があろう。

オルガン組み立てには主任として東北学院教授のゾーグ(E. H. Zaugg)があたり、同志社のクラブや勝俣敏

子などがこれを助けた。勝保は同志社女子専門学校卒業後、この日のあるのを予期して、ベリア・カレッジでオルガンの学習をした人である。組み立てが完成し、一九四一年二月二日ゾーグの送別感謝の会が催され、ここでパイプ・オルガンが正式に演奏された。演奏台の側面には、太平洋婦人伝道会から贈られたプレートがはめこまれ、これには、「日本への五二年間の献身的な奉仕を表彰し、太平洋婦人伝道会は、このオルガンをメアリー・フロレンス・デントンに献げる」と英文で記されていた。オルガンの贈呈式が正式に行われたのは同年六月六日である。前年の暮までに二度にわたってアメリカ大使館より引揚勧告を受けながら頑張りを続けていたアメリカ人宣教師たちも、この記念すべき贈呈式の数カ月前に、デントンを除いてほとんど全員が同志社を去らねばならなかった。しかし翌七月に催された勝保敏子による公開演奏会には、アメリカから渡来した楽器の調べを聞こうと、多数の窓生や市民が栄光館につめかけた。

アーモスト 新島襄を記念し、彼の母校アーモスト大学と同志社との友情を深めるため、アーモスト館が同志社館の設立に設立されたのは一九三二（昭和七）年である。この前の年、一九三一年一月二九日に定礎式が行

われ、翌三二年六月四日、完成したアーモスト館で、新島襄と初代アーモスト大学学生代表スチュアート・バートン・ニコルズ（Stewart Burton Nichols）を記念するタブレットの除幕式が挙行された。アーモスト館の設立は、いうまでもなく、昭和初期の同志社における国際交流事業を代表するだけでなく、新島襄以来、今日に至るまで続いてきた同志社とアーモスト大学との親密な関係を象徴するものである。この深い関係をここでふりかえる余裕はないが、新島の在世中より昭和初期に至るあいだに同志社に来て教鞭をとったことのあるアーモスト大学出身者の名前をあげると、オーテス・ケリー（Otis Cary）、アーサー・スタンフォード（Arthur W. Stanford）、モートン・ダニング（Morton D. Dunning）、フランク・ロンバード（Frank A. Lombard）、エドワード・カープ（Edward



S. B. ニコルズ

S. Cobb) がある。いずれも同志社の発展に貢献しただけでなく、同志社とアーモストを結ぶ絆となった人たちであった。しかし、アーモスト館設立の直接の契機は、一九二二年に始まったアーモスト大学学生代表を同志社へ派遣する計画にあり、第一回代表がアーモスト館のタブレットに名を留めているニコルズである。

一九二〇年秋ごろから、アーモスト大学の学生のあいだに、同志社との関係を密接にするため、二年ごとに卒業者を同志社に送ろうという運動が起こった。一九二一年に、同大学は創立百周年祭を迎えたが、この機会に数名の校友から、アーモストは世界的教育の使命を果すべきだとの提唱がなされた。この訴えは、アーモストの伝統と第一次世界大戦後の国際主義のたかまりを背景として、学生の心をとらえた。こうして学生たちが同志社に代表を派遣することを決議し、これに必要な基金を自分たちで醸出する運動にのりだした時、当時の総長ミークルジーン (Alexander Meiklejohn) は、次のような趣旨の言葉で、これを祝福している。

アメリカは大戦に参加した経験によって、大きな希望を抱き、熱情を呼び起こされたが、その希望を実現さす力に欠け、情熱を行為に表わす明確な手段を持っていないため、国民は困惑と懷疑にとりつかれている。このような状態にあるアメリカにあって、アーモスト人こそが、自分を捧げる目的を見出すべきであり、同志社プログラムは、まさにその必要に応えるものであると。ウィルソンによる国際連盟の提唱に目をそむけ、孤立主義へ向かいはじめた当時のアメリカの世論の中で、彼は、アーモストの学生たちによる運動がもつ意義を明らかにしたのである。ミークルジーンは、アーモスト大学の出身者ではなく、また敬虔な信仰者というよりは、知性派の教育者であった。このような人物を総長にもつアーモストで、同志社に学生を派遣する運動がはじまったことは、注目してよい。初代のニコルズをはじめ、アーモス

トが同志社に送ってきた代表たちの多くが、キリスト教的人格を備えてはいたが、いたって知性豊かな青年であったことは、当時のアーモスト大学の気風と無関係ではない。宣教師中心の交流から、新しい世代の交流へと時代は変りはじめていた。

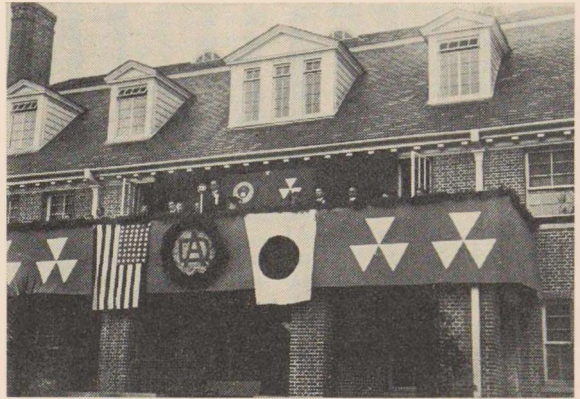
一方同志社では、海老名を総長に迎えて、大学令による大学として発展期にあり、また時代を反映して国際主義と民主主義の気運がひろまっていた。教職員も学生も、アーモストの友愛運動を受け入れる素地を養っていたといえよう。ここで海老名とアーモスト大学との関係にふれる必要がある。彼は総長就任の前年、一九一九年に、欧米歴訪の途についたが、そのおりアーモスト大学を訪ねる機会を得、学生を前にして、アーモストと同志社がさらに密接な関係に入るべきときに至っていると訴えた。この訴えは、当時の国際主義的風潮とあいまって、アーモストの学生の心をうち、同志社に学生代表を送る運動は、海老名のアーモスト訪問に端を発するともいわれている。ニコルズも、海老名の講演からうけた感銘を心に留めた一人である。アーモストの学生たちは、毎年二〇〇〇ドルを醸出することにし、スチュアート・バートン・ニコルズが初代の代表として、同志社に來たのは、一九二二年秋のことである。

ニコルズは、この光榮ある使命を果すにふさわしい人物だった。信仰に厚く、しかも知性にあふれ、スポーツにもすぐれていた。そして何よりも、公正な精神と愛情深い心をもって、国際友愛に尽そうとの使命感にあふれていた。「高貴で清らかな愛情深い青年であり、昔の清教徒と現代人の中にある最良のものを所有している」と海老名はニコルズについて記している。彼に対する同志社の期待は絶大であったといっても過言ではない。彼の手紙や日記には、着任するや、全同志社の各学校で歓迎せめにあった様子が記されているが、その多くは学校主催による公式の催しではなく、自発的な学生の集まりの場であった。日がたつとともに、彼の日課は多忙をきわめていった。

一週一〇時間、教鞭をとったが、八時間は中学で英会話、二時間は大学の文学部で古典文学を担当した。課外では英語クラブの学生を指導し、テニス、バスケット・ボール、野球など運動部のコーチ役もひきうけている。さらに同志社以外にYMCAのプログラムも手伝っている。今日と比較すれば同志社の規模は遙かに小さかったとはいえ、ニコルズの影響は驚異的である。しかしこれはニコルズの資質と努力に負うだけでなく、当時の同志社学生がいかに国際的な交流を歓迎したかを示すものであろう。

彼は最初ロンバード邸の一室を借りて住んでいたが、烏丸通り今出川下の地にあった同志社YMCA会館（聖山寮）にアームスト代表のために整備した居室を持つようになった。ニコルズのアームスト代表としての二年間は、同志社にとっても彼自身にとっても大成功であり、アームスト・同志社プログラムの将来を約束するものと思われた。しかし彼自身にとっては、思いもよらぬ不幸が待ちうけていた。ニコルズは二年間の義務を果たして一九二四年に帰国し、ユニオン神学校に入学したが、肺結核のため翌二五年、二五歳で生涯を終った。初代のニコルズに続いて太平洋戦争勃発まで、同志社はアームストから学生代表をほぼ二年ごとに迎えた。アームストの代表たちはニコルズ同様、同志社YMCA会館に居住し、日本の学生と生活を共にして国際理解と友情を深めていたが、最愛の息子スチュアートを失ったニコルズ夫人は、アームスト代表の活躍がよりよい環境のもとでなされるため、愛息の記念として会館設立のための寄附を申しでた。これと同時に同志社に記念館を寄贈しようとする計画が起り、大いなる努力の末、六万五〇〇〇ドルが集められ、アームスト館の設立が実現することとなった。

設計・工事監督にはヴォーリス建築事務所があったり、清水組が施工を請負った。設計にはアームストの建築家の意見が取り入れられた。こうして、ニュー・イングランド・ジョージアン様式の赤煉瓦三階建のアームスト館が完成したが、内部装飾に至るまで細心の注意が払われ、ベッドや家具も特別あつたものが用いられた。アームスト



アーモスト館献堂式

出身のカーブ神学部教授が、建築の完成まで、助言と監督に心を配った。こうして、当時としては、ユニークかつ最良の環境を与えられて、アーモスト第六代代表トロッター (Jesse M. Trotter) は、一九三一年五月、厳選の末入寮することになった学生二名と、アーモスト館で起居をともにすることになった。

アーモスト館の献堂式が行われたのは三年後の一九三五年一〇月二九日で、アーモスト大学は同志社創立六〇周年の式典への参加を兼ねて、この献堂式に理事長プリンプトンを派遣した。理事者、教職員、校友、学生等三百余名の出席者のまゝで、カーブ教授が同館設立時にアーモスト大学より同志社に送られた贈呈書簡を朗読、続いてプリンプトンが贈呈の辞で、日米友好と世界平和に寄与すべきアーモスト館設立の意義を強調した。これに対して湯浅八郎総長が受領の辞を述べ、「アーモスト精神、すなわち相互奉仕と善意の新しい表現たるこの建築物をして、不断にその建設目的をカーブによって読まれた贈呈書簡は、一九三三年アーモスト大学ピーズ総長 (Arthur S. Pease) から当時の同志社総長大工原銀太郎にあてられたもので、そこには、同志社が新しく竣工した建築物と基金を受けいれ、これを管理する意志があるならば、新島とニコルズの記念としてこれを同志社に寄贈する旨、明記されている。

しかし少数の選ばれた学生とアーモスト代表が起居するアーモスト館は、ややもすると学園内の別天地となり

がちであり、献堂式の翌年、湯浅総長は次のような一文をアーモスト館居住の学生に寄せている。「在館者にして特権を専有しつつ何ら会館の精神と目的に副う如き理解もなく、努力もなく、協力もなきが如きものありとするならば、そうしてそれが現行制度の欠陥より生ずる一悪弊であるとするならば、之は一日も早く是正せられなければならない」と反省をうながし、湯浅は総長として適当な解決の途を学生自身の手で見出すよう訴えている。このようなアーモスト館自体の問題に加えて、日米友愛の証となるべき館の役割を阻んでいたのは、いうまでもなく、日米開戦に向かう時代の流れであった。

かつてニコルズが代表であった時も、一九二四年のアメリカにおける排日移民法可決をめぐって反米の世論がたかまり、ニコルズはアメリカと日本の良心を信じつつも、心を痛める日々を送った。彼は、国際的緊張のたかまりが、かえってアーモスト代表に日米相互の理解のために尽す機会を与えろと考え、できる限りの努力を傾けた。しかし一九二〇年代前半と三〇年代末とは、状況はあまりに違っていた。日本が中国に戦乱を広げた一九三七年に代表として派遣されたメリット (Richard A. Merritt)、その後を継いだホール (John W. Hall) は、太平洋の両側でたかまる反日・反米の世論の波を身をもってうけとめなければならなかった。彼らが日本を理解し、日本人にとけ込もうと努力を払ったことはいうまでもない。しかし同志社本部の中にさえ、代表派遣の停止を望む声があったと伝えられる。ホールは一九四〇年七月、『同志社新報』(第四九号)に「同志社学園に訴ふ」の一文をのせ、日米関係が緊張して以来「同志社との関係に無関心な(アーモスト大学の)学生の中に彼等の金が日本に送られるといふ事に疑ひを持ち異見を抱くものが出来て来た」ことを告げている。彼は、同志社側にも自分に十分働きをさせるだけの理解と関心がない、「近年アーモスト大学内に醸し出された好ましからざる空気も」そうした現状の反映である、「この運動が一つの新しい段階に入らうとしてゐる際に、吾々アーモスト代表とアーモスト会館の存在意義に就て、

(中略) 御再考を煩はし度い」と訴えている。ホールは帰国後日本研究に進み、戦後のアメリカの学界における指導的日本人研究者となったが、青年ホールがしたためたこの一文は、貴重な資料である。この頃、同志社の校友と職員あいだで結成された「アーモスト新島クラブ」は、こうした立場におかれた代表をできるだけ激励し、援助することを目的としていた。それは微力ではあったが、同志社の中で国際交流の火を消しさらぬよう願う人々による最後の働きであった。ホールは、本国からは帰国をきびしく促され、身辺には特高警察の監視の目が光るようになったが、代表としての使命を果たすまで同志社にふみとどまろうとした。ついに彼は一九四一年九月、アメリカ行の最後の便船で帰国の途についたが、彦根高等商業学校にいた前代表のメリットも、職を解雇されて同じ船に乗っていた。ホールが帰国してほどこなく、太平洋戦争が勃発した。一九四一(昭和一六)年二月九日、米英両国に日本が宣戦を布告した翌日、同志社総長牧野虎次、総長秘書・外事係森川正雄、総務部長奥村龍三の三人は、陸軍憲兵隊京都分隊へ出頭を命じられ、「日米両国の親善増進のために設けられたアーモスト館は対米英宣戦が布告された以上、今日限り戦時中閉鎖のこと、但し平和回復後は再び国民外交の第一戦に立ち、大いに尽してもらわねばならぬ機会が来るであろう」という意味の申渡しを受けた。即日アーモスト館の同志社における機能は停止され、在館していた学生は下宿に移った。戦争中アーモスト館は新島記念館と改称して同志社本部が使用することになり、美しいアーモスト館を維持するため細心の注意が払われたのは不幸中の幸いであった。

日系二世フェロー

とハワイ寮

同志社布哇寮(Friend Peace House)はアーモスト館同様、国際親善を増進する目的で設立された機関で、献堂式は一九三六(昭和一一)年一〇月三日に挙行された。このハワイ寮が設立された背景には、同志社の国際交流史上、忘れられないユニークな一齣がある。ハワイ寮はホノルルにあるフレンド平和奨学会(Friend Peace Scholarship Committee)の創立者、セオドア・リチャーズ(Theodore



入浴したリチャーズ夫妻(於京都駅)
1936年10月

(Richards) 夫妻が御所に隣接する「梨ノ木屋敷」を買い取り、これを同志社に委託したものであるが、同志社とリチャーズ夫妻ないし同奨学会とは、これ以前から長年、密接な関係にあった。

フレンド平和奨学会は、リチャーズ夫妻が、日米相互の理解を促進するため私財を投じて創立した国際友好の事業で、一九一一(明治四四)年大隈重信らの有力者の協力を得て東京で組織された。それ以来リチャーズ夫妻は、太平洋のかけ橋として日米親善に力を尽してきた。リチャーズ夫人がハワイ寮献堂式にあたって語ったところによると、彼女は、すでに奨学会創設の一〇年前に新島襄について知り、同志社に対しても特別の関心を抱いてきた。フレンド平和奨学会の主要な使命は、アメリカ人学生、とくに日系アメリカ人学生と日本人学生にそれぞれ留学の機会を与えることであったが、同志社との関係が密接になったのは、一九二八(昭和三年)年から同奨学会がハワイ出身の二世を選んで日本に派遣し、これを同志社に託すことにしたからである。この制度でハワイから派遣された二世はフレンド・ピース・フェローと呼ばれ、同志社で英語を教え、かたわら日本語を学び、日本文化に対する理解を

深めることを使命とした。同志社が同奨学会とかかる関係をもつに至ったのは、リチャーズ夫妻が以前から同志社に関心を寄せていたことに加えて、原田助の助力があったからと思われる。原田は当時、同志社総長辞任後ハワイ大学にあって東洋研究の発展に尽力していたときで、日本に派遣されるフェローの選考にも、ハワイ大学総長クロウフォード (David L. Crowford) らとともに名を連ねている。

ここでフレンド・ピース・フェローに関連してふれておかねばならないのは、「スチューデント・プロフェッサー」の制度である。この

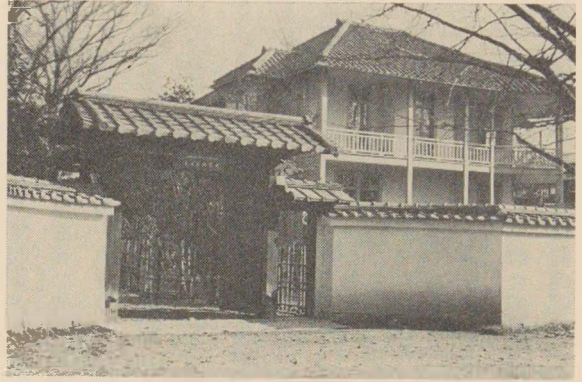
制度は、海老名弾正総長のもとで一九二七年、すなわちフレンド・ピース・フェローが派遣される一年前に実現を見たもので、アメリカ本土とハワイ出身の日系アメリカ人を同志社に招聘して英語の教授にあたらせ、同時に彼らに日本文化を理解する機会を与えようというのが目的であった。この計画のもとでカリフォルニア出身のジュン・ゴトウ（後藤順）とハワイ出身のレイモンド・K・オオシモ（大下角一）が、初代のスチューデント・プロフェッサーとして同志社に赴任した。この制度自体は長続きせず、第一回の後藤と大下の二人だけに終わったが、同志社独自の構想で国際交流を積極的に計ろうとしたことと、計画のユニークさにおいて、スチューデント・プロフェッサー制度は意義深い試みであった。またフレンド・ピース・フェローは、ハワイ出身の二世に限って、スチューデント・プロフェッサーを継承したものと見ることができ。

一九二六年に作成されたと見られる英文の「スチューデント・プロフェッサー要項」には、「同志社大学は、同志社の英語教育を発展させ、かつアメリカおよびハワイの二世に日本語と日本文化を研鑽させるため、『英語スチューデント・プロフェッサー』（A Chair of Student-Professorship of English）を提供する」と記している。資格としては、キリスト教会の会員であること、同志社の認める大学出身者で英語を教授する能力があること等があげられ、義務としては、同志社に属する学部・学校で週一五時間以内でも英語教授にあたることが定められている。任期は三年で、年俸一二〇〇円と渡航費の支給および居室の提供を受け、同志社大学のほか京都帝国大学等他大学で聴講することができるとも記されている。後藤順の父に宛てた海老名総長署名の英文の手紙（一九二六年九月二九日付）によると、この計画は意欲的な構想にもとづいており、初年度は五名程度、数年後には少なくとも一五名をスチューデント・プロフェッサーとして招きたいとし、もしこれが同志社で成功すれば日本の他の大学でも同じような計画をたてるであろうと期待している。とくに強調されているのは、アメリカにおける日系人の向上に役

立つ若い指導者を養成することを念願して、この制度が考えられたということである。「二世が適切な訓育を受けられれば、彼らは百パーセントアメリカ人になることができるだけでなく、日米両国を繋ぐ貴重な役割を果たすことができる、ひいては、これによって人種問題の解決と世界平和に貢献するであろう。(中略) このためには、とくに二世の指導者となる者が、アメリカにおける教育のみならず、日本の学芸と文化とを身につけることによって、日本をアメリカに、アメリカを日本に紹介する能力を養うことが、何よりも望ましい」とこの手紙は述べている。

この計画は、以上で明らかなように、排日移民法実施まもないアメリカにおける日系人の必要に応え、かつ同社社の英語教育を充実させ、ひいては国際友好を計るという、いたってユニークな内容をもっていたが、しかしこれを実施するには、初めからいくつか難点があったようである。第一に同志社側の資金的裏付けが不十分であり、第二に、三年間の日本滞在は若い二世には負担が重すぎた。長期間アメリカを離れることは、アメリカ社会への復帰を困難にするため、スチューデント・プロフェッサーに適当な候補者が得難かったようである。資金の面では、最初から教会を中心にアメリカの援助を期待していたようで、一九二九年の大恐慌により、その可能性はほとんどなくなった。これらの点に、計画が不成功に終わったおもな理由があると思われる。

さて、フレンド平和奨学会は、スチューデント・プロフェッサー構想を継承するかたちで、一九二八年のジョージ・サカマキ(阪巻護造)、シュンゾウ・サカマキ(阪巻駿三)兄弟に始まり、一九三九年に來日のジョージ・キヨシ・クマイ(熊井キヨシ)に至るまで、ほとんど連続して一名のフェローを同志社に派遣した。彼らはハワイ出身の二世で、二年間の滞在を原則とし、前記のスチューデント・プロフェッサー規定とはほぼ同じ義務を果し、待遇を受けた。フェローに支払われた滞在費の四分の三と渡航費を同志社が負担している。フェローには週六時間英語を教える義務が



寮 ハワイ

あったから、同志社がフェローの費用を一部負担するのは当然ではあるが、同奨学会と同志社が相互協力の精神で費用を分担して有意義な企画を持続させたことは注目に値しよう。

フレンド平和奨学会は、一九三六年に創立二五年を迎えるため、これを記念する恒久的事業を検討していた。ちょうどそれが同志社の創立六〇周年記念事業と時期を同じくした結果、両者のあいだで話がまとまり、ハワイ寮設立のはこびになった。同奨学会は京都駐在委員として黒川直也を派遣し、同志社と協力して計画の実現にあたらせた。そこで「梨ノ木屋敷」と呼ばれる旧宣教師館をリチャーズが買い取り、これを改修して、フレンド・ピース・フェローと同志社の学生が起居をとにする、国際親善の施設にすることになった。リチャーズはこの土地、建物を「同志社ハワイ寮」として使用するべく同志社に委託し、もしこの目的のため使用されなくなつた場合には、これを同志社に寄附する旨発意し、同志社は総長、財務部

長およびリチャーズと関係の深かつた中瀬古六郎、社友下村正太郎を受託人にて、この委託を受け入れた。

「梨ノ木屋敷」は同志社病院院長ベリー(John C. Berry)が建てたといわれる洋風木造建築物で、敷地も六〇〇坪という広さで、国際親善を計るハウスとして利用するには好条件を備えていた。改修にあたっては、建物内外の色調にイギリス人の女流版画家エリザベス・キース(Elizabeth Keith)の意見を求めるなど、細心の配慮がなされた。家屋、土地の買収には七万数千円が投じられ、改修費には一万数千円を要した。

献堂式は一九三六年一〇月三日、リチャーズ夫妻の出席をえて行われ、ハワイ寮は正式に同志社に委託された。この建物の財源として母の遺産を投じたりリチャーズ夫人は、ハワイ寮が友愛と平和のために貢献するよう訴え、また、第一回フレンド・ピース奨学金留学生であった柏木隼雄（義圓の子息）は献堂の辞を述べた。

初代ディレクターにはフレンド平和奨学会の黒川直也が就任した。彼は、同志社ハワイ寮を「キリスト教的国際親善の増進機関であって（中略）『国際親善のため努力しよう』という学生同志諸君を中心にした寄り合いホーム」と規定し、ハワイ寮が果すべき機能として次の三つをあげている。第一に、フェローと寮生が中心になって同志社学生間に国際的プログラムを遂行し、とくに米国の事物、文化紹介や研究に注意を払う。第二に、活動を同志社外に広げ、海外よりの留学生、とくに関西に滞在する二世に対して便宜を計る。第三に、学生の宗教生活に貢献するため、精神的会合やミーティングを催し、日常的プログラムとして家族礼拝を行う。以上からわかるように、ハワイ寮ではアーモスト館と異なり宗教的性格が強調されている。

ハワイ寮では、献堂式にさきだつて寮生を選び、九月からディレクター黒川のもとで、フェローと学生十数名が共同生活を始めた。寮生には、同志社大学各学部および予科、専門学校、高等商業学校の学生生徒の中から、寮の目的と事業に理解と協力を惜しまない学生が選ばれた。

しかし、このような小集団では、フェローの考え方や人柄、あるいは学生の生活感情によって、寮機能がいつも円満に果されとは限らない。また学園内外の情勢は、国際親善活動の発展を困難にする時代に向かっていた。アーモスト館同様、新設されたハワイ寮も順調な道を歩んだとはいえない。フェローが日系アメリカ人であることも、ときには普通のアメリカ人の場合よりも難しい問題を生む可能性があった。日米二重国籍であったフェロー候補者が日本国籍を放棄したため、徴兵拒否の疑いで日本へ上陸できなかったこともあった。一九三八年には、ディレク

ターと寮生の意見の対立がもとで黒川が辞任し、文学部助教授の上野直蔵が臨時ディレクター（一九三八年九月―三九年八月）としてハワイ寮に住み込み、寮生活のたてなおしに尽力したこともあった。しかしハワイ寮は、ユニークな国際交流の場として、日米間の戦争勃発まで目的を遂行した。フェローとして同志社に來た二世たちの多くは、日本研究者となつたシュンゾウ・サカマキやミノル・シノダ（篠田稔）、牧師になつたマサイチ・ゴトウ（後藤政一）のように、その後ハワイにあつて日米の相互理解のため、貴重な働きをすることになった。ハワイ寮は日米開戦とともに、アーモスト館同様に閉鎖され、梨木寮と改称し、日本赤十字社に貸与されることになった。

その他の 昭和初期の同志社では、国際交流の一環として学生の英語クラブあるいはESSの活動が活発であつた。従来から英語教育に努力した宣教師に加えて、アーモスト大学代表、スチューデント・プロフ

エッサー、フレンド・ピース・フェローが学生の英会話の向上に果した役割は大きい。これらの若い指導者を迎えて、同志社各学校の英語クラブの活動が盛んになった。同志社の学生たちは、全国的な英語弁論大会において優位を占めただけでなく、一九三〇年にはハワイに学生四名（野井正澄、橋本一雄、中村均、中村健蔵）を送つて同地の学生と弁論を競うなど、当時としては稀な企画を実行して、国際交流の実をあげた。戦前の日米関係が険悪化の一途を辿つた時期、両国の学生同士の率直な話しあいによつて日米親善を計る目的で定期的に学生会議が催されたが、この会議にも同志社の学生が代表として活躍している。一九四〇年、東京で開かれた日米学生会議には厳重な選考を経た一四名の学生が京都から参加しているが、一四名中一名までを同志社勢が占めていた。

ESSの活動に関連して記録にとどめたいのは、一九三〇年、岩倉に建てられた語学寮である。高等商業部の岩倉校地への移転に際し、当時法学部経済学科の学生であつた福井（重本）信一は、大学および高商の語学部（ESS）の寮を岩倉敷地内に設置したいと考え、学校当局に土地の分譲を願ひ出て、父の田畑を担保に銀行から資金を借り

受け、語学寮を建設することに成功した。すでに就職していた福井は、この寮の管理・運営を同志社に委託し、学校当局が寮費収入を福井の借金返済にあて、これが一五年間継続された晩には語学寮を同志社高商の所有とすることにした。こうして建てられた語学寮が、今日の大成寮の前身である。当時同志社の学生約一〇名が、前記のスチューデント・プロフェッサー大下角一を指導者としてアメリカへ研修旅行をしたことがある。福井はこれに加わった一員で、アメリカの大学で寮が果している役割を見て大いに感ずるところがあった。福井が語学寮の建設に情熱を燃した背景には、彼のアメリカ旅行の体験があったといえよう。

最後に、昭和初期の国際交流は、すでに述べてきたように、同志社にとっては受け身の一方的交流にとどまったことを強調しておきたい。歴代のアーモスト代表は、同志社からも学生を母校に送りたいと念願していた。一九二八年に来た第四回代表モズレー (Harold W. Moseley) も、これを実現さす企てに熱心であった。当時学生であった生島吉造が同志社を中退してアーモスト大学へ留学を決意したのは、モズレーの願いを知ったことにもよるということである。戦前最後の代表となったホールは、前記の同志社学園への訴え(『同志社新報』第四九号)において、「最初アーモスト側の希望は両学園が代表を交換するにあつた。しかしこれは同志社側に幾多の計画があつたといへ遂に実現を見ず、結局一方的な運動として今日に至つた」と述べている。当時の同志社にとっては、学校の實力と内外の情勢から、先方の交流計画を受け入れ、その責任をとるだけが精一杯であつた。

しかしいづこにあつても、国際交流の企ては、多くの場合、個人的な交流に端を発するもので、大学間協定によつて行われるようになったのは、第二次世界大戦後のことである。しかも素地のないところでなされる提携は、必ずしも成果をあげるとは限らない。こうみてくると、昭和前期の同志社における国際交流は、困難な時勢に向かつたにもかかわらず、恵まれた条件のもとにあつたといえよう。この条件とは、本章各所でとりあげたような、意欲

アーモスト大学学生代表 (1922—41)

Stewart Burton Nichols	1922-24
Allen I. Lorimer	1924-26
Milton S. Mulloy	1926-28
Harold W. Moseley	1928-29
Donald L. Zoll	1929-31, 1932-33
Jesse M. Trotter	1931-32
Lyman D. Westfall	1933-35
Arthur R. English	1935-37
Richard A. Merritt	1937-39
John W. Hall	1939-41

ハワイ寮歴代ディレクター (1936—69)

第 1 代	Colbert N. Kurokawa	1936-38
臨 時	上野直蔵	1938-39
〃	Harry Komuro	1939-41
〃	熊井キヨシ	1941-42
第 2 代	John G. Young	1947-54
事務取扱	Mineo Katagiri	1952-53
臨 時	Gwilym G. Lloyd	1954-56
〃	土肥昭夫	1956-56
第 3 代	John G. Young	1956-61
臨 時	Robert M. Fukada	1961-61
第 4 代	John M. Rasche	1961-64
第 5 代	Jon Gunnemann	1964-65
第 6 代	John M. Rasche	1965-69

にみちた個人的努力が同志社の国際交流を支えていたということなのである。さらにこの個人的努力は、同志社の国際性を発揮したいという抱負、あるいは夢に裏づけられていた。創立六〇周年を記念した『我等ノ同志社』に掲げられた生島吉造の文章「アーモストと同志社」によると、生島や有賀鉄太郎が「アーモスト——同志社——燕京の三学府」を同志社の若い学徒の手で結び、アメリカ、日本、中国の友好と理解を計りたいという抱負をもっていったことがわかる。そのために彼らは燕京大学から除宝謙を招くために努力をしている。これは、同志社の国際交流の地下水ともいえる国際的抱負を示す、数多い事例の一つであろう。

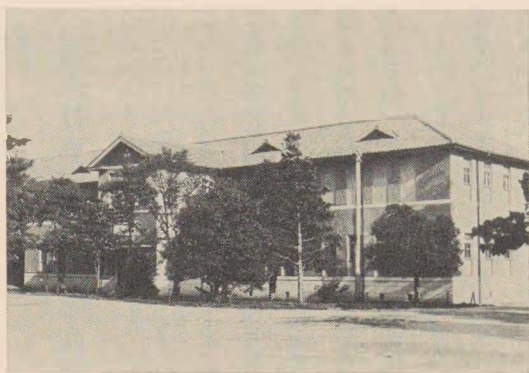
終りに歴代のアーモスト大学学生代表およびハワイ寮ディレクターの一覧表を掲げておく。

第二章 岩倉校地と同志社高等商業学校

同志社専門学校高等商業部

一八八六（明治一九）年に制定された「帝国大学令」によって、日本の高等教育機関として、東京大学は帝国大学となり、その後、京都・九州・東北・北海道などの帝国大学が設立されたが、私立大学は「専門学校令」による大学であって、帝国大学とは区別されていた。一九一八（大正七）年に「大学令」が公布され、官公私立大学が法規上はじめて平等となった。同志社では、一九〇四（明治三七）年に、「専門学校令」による同志社神学校と同志社専門学校が設置されたが、八年後の一九一二（明治四五）年には、この両校を合併して、「専門学校令」による同志社大学が創立され、神学部・英文科（のちに文学部）・政治経済部（のちに法学部）が置かれた。

一九二〇（大正九）年、「大学令」による同志社大学（予科・文学部・法学部・大学院）が発足した。そこで、「専門学校令」による同志社大学を、一九二二（大正一一）年に、同志社専門学校と改称し、神学部と高等商業部を置き、さらに一九二七（昭和二）年には、英語師範部と政治経済部を開講した（第三部第九章）。このうち、神学部は一九三七



北側から見た徳照館（昭和初期）

（昭和一二）年に廃止、英語師範部（のちに高等英語部と改称）と政治経済部（のちに法律経済部と改称）は、一九四四（昭和一九）年に統合されて同志社外事専門学校となり、これは一九五二（昭和二七）年に廃止された。

専門学校高等

商業部の設置

同志社専門学校高等商業部（以下、高商部と略称）が設立されたのは、教育制度の変更が直接の原因であったが、新設高商部への入学志願者が激増したのは、当時の日本の経済状態が背景となっていた。大正時代（一九一二―二六年）は、第一次世界大戦によって日本経済が飛躍的に発展し、農業と軽工業中心の経済から、重化学工業経済への第一歩をふみ出した時代である。この新しい経済を運営するためには、従来の「読み・書き・そろばん」の商業教育だけでは追いつけないようになり、より高度の商業教育を受けた人材が必要とされた。このことが高商部発足の背景であり、以後の発展を約束したものであった。

しかし、同志社の高商部の創設は、キリスト教主義教育の理念に立脚した高等商業教育の必要を感じ、時代にさきがけてそれを展開しようとする確たる見通しがあつてのこととは思われない。むしろ、全国的に高等商業学校が歓迎される風潮があつたので、それに便乗して多数の生徒を吸引し、財政を豊かにしようというものであったと思われる。『同志社大正十二年度報告』中の「総長報告」によれば、「専門学校は神学高商の二学部を設置したる以来、日尚浅いのである。神学部は入学生も僅少なるが故に、大学神学科に併合されて居るやうなもので、監理上差したる困難はないことと思ふ。高商部に至りては本年新入学者が三百にも達したる程なれば、久しからずして同志

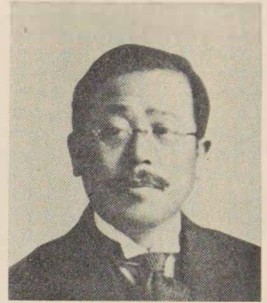
社教育に亦一新生面を開くことは間違ない。其精神的教育は未だ何等の効果を示さないやうなれども、此部の設置を氣遣ふたる人の予想したる程物質的傾向を有するものとは思はれない。中には氣概に富みたる学生もあつて、寧ろ精神的渴仰は多いかとも思ふのである」と記されており、また『同志社昭和二年度報告』中の「総長報告」では、「高等商業部は入学志望者最も多く、而して入学者の品質は年一年と優良となるが故に、当初の憂慮は年を追うて杞憂となりつゝある。この高商部に於て、特に宗教的熱情勃発し、教師は基督教研究に留意し、生徒は毎日正午礼拝を執行し始めたのである」とある。

これらの記録から見れば、高等商業教育の展開は、キリスト教主義教育となじみにくいという考えが根底にあり、従つて、高商部の発足に當つて、その精神的教育をいかに貫徹するかという危惧があつたことが知られるのである。

さて、高商部は志願者が急増するので、一九二三（大正一二）年には生徒定員を八〇〇名に増加した。また翌年には、高商部卒業生は高等学校・大学予科と同等以上と指定され、一九二七（昭和二）年には、商業英語・商事要項・簿記につき、実業学校教員無試験検定を受ける資格あるものと認可せられ、ようやく学校の体裁をととのえてきた。高商部は一九二五（大正一四）年に第一回卒業生六三名を社会に送り出した。第二回は一六三名、第三回は一八四名、第四回は二〇三名、第五回は一七七名、第六回は二三一名の卒業生を出し、以後漸増して第一回以降は三〇〇名前後となっている。

教員と施設

同志社専門学校の校長は同志社総長が兼任し、各部に部長が置かれたが、高商部には主任が置かれ、瀬谷佐次郎が主任となり、一年後に部長と改められ、中川精吉が就任した。教員は、はじめの間は同志社大学法学部の教員が兼任したが、毎年新任者を採用して、スタッフの強化をはかった。しかし、急増す



中川精吉

る生徒数に比べて、徳照館（一九二三年三月落成）はあまりに狭かった。大教室二、小教室七、校長室・教授室・事務室各一、計一二室では、せいせい三〇〇名ほどの収容力しかないのに、その倍以上を詰め込んだのであるから、教職員や生徒たちは不満を訴えた。当時の生徒の次のような思い出話がある。

校舎は相国寺門前通の東門から入った北側にあって、徳照館と呼んでいた。コの字形の木造二階建、モルタル塗りのお粗末なもので、教室は一、二階合わせて九室、そこに四、五人掛の長机と長椅子が並んでいた。さしずめ、飯場の食堂というところである。

一年生の入学者は三〇〇名、選択した第二語学別に五クラスに分けられ、一年のうち三分の一以上欠席すると期末試験の受験資格がなく、四〇点以下の学科目が一つでもあると落第となった。それほど厳格であったから、二年生に進級するとき半数近くが落第し、三年間で卒業する者は一五〇名を割り、なかには六年もかけて卒業する豪の者もあった。

当時の教授陣は大学との兼任者が多く、授業は午前九時から午後四時まで、ときによると五時までのこともあり、二時間ぶつ通しのこともあった。また、よくよくのことでもないかぎり、休講はなかった。

しかし、設備はお話にならないほど悪かった。長椅子に四人座ると、ノートもろくすっぱ取れない。着物にはかまをはいた学生が遅刻してきて、下駄をがたがたいわせてのし歩くから、講義も聞きとりにくい。試験のときなど全員が出席すると、かける椅子もない。ところが、同じ構内でも、大学予科になると、設備が驚ろくほどよい。机や椅子も一人掛である。授業料は高商部も予科も同額の八五円である。この差別待遇に、高商部学生は不満をつのらせた（平山玄『同志社高商・商学部物語』）。

『同志社大正十四年度報告』においても、この設備不十分は認めている。すなわち、「今後、年を追ひて大学及び専門学校入学志願者が引続き増加するの見込みあるを以て、三百人を収容し得る教室二個と、他に専門学校の為め一大校舎の新築（中略）が当面の急務となりたるは、同志社教育面目の一新の時に際し、吾々が大に留意すべきことにして、前途をして光明あらしめるものである」といつている。

徳照会・樹徳会

一九二五（大正一四）年三月に第一回卒業生が出た当初から、同窓会を作ろうという気運があった。同志社には、大学・専門学校・中学の全卒業生を包括する「同志社校友会」という同窓会がある。しかし、新しく生まれ、差別待遇されたと感じている卒業生たちの間には一種の連帯感があり、校友会のほかにわれわれの同窓会を、という気持があったわけである。一九二六（大正一五）年の春、一六三名の第二回卒業生を出した機会に、校舎名にちなんで「徳照会」という同窓会が組織された。母校の発展を援護し、会員相互の社会的活動に資するという目的を掲げ、その発会式を兼ねて第一回総会を京都ホテルで開催した。

戦前の同窓会がそうであるように、この徳照会も、会長は母校の校長であり、事務所も母校内に置かれ、会員中から選出の役員のほかに、母校から二、三名の教員が役員に選ばれてその世話をした。したがって、これは学校外の団体というよりも、学校の延長団体である。一九二九（昭和四）年に、高商部の新校舎が岩倉に建てられて樹徳館と命名されたので、「徳照会」は「樹徳会」と改称した。

樹徳会は毎年三回、機関誌として『樹徳』を発行し、学校のニュースや教員のエッセイあるいは会員の消息や論

説を載せて豊富な情報を提供していた。だから会員間の団結も固く、同志社における特異な同窓会であり、その伝統は現在の「商学部樹徳会」に流れている。

校舎移転問題

高商部は、高等商業教育という理想を掲げて創設されたとは思われない。制度が変わったためのあと始末として作られたものであるから、設備も教員組織も間に合わせのものであった。したがって、生徒たちのあいだに、いろいろな不満が積み重なったであろうと想像できる。ことに、高等商業教育が時流に乗った時代であり、生徒たちは希望に燃えていたから、その不満はいつそう深いものになった。

悪条件の下で勉強しながら、卒業生も二回を数え、「徳照会」という同窓会も組織されると、われわれの学校と
いう意識が強くなる。

学校の設備を改善せよ。今出川のキャンパスは狭いから、適当な地に移転新築せよ。専門学校の一部ではなく、独立の高等商業学校に改組せよ。

という議論が出てくるのは自然であった。

一九二六（大正一五）年六月二五日の『京都日出新聞』（のちの『京都新聞』）に、つぎのような記事が掲載された。

夕刊所報Ⅱ府刑事課が、去る十九日不良学生の一斉取締りを行った結果、同志社高商部の学生で説諭を受けた者は、自宅には登校を装い遊惰にふける者一、早引きして遊惰にふける者一、飲酒喫煙した者二、その他六、合

計一〇名あり。

このことが発表されるや、学友会と応援団では、高商部全体の名誉にかゝるものであると奮起し、二十四日午前十一時から第一教室で学生大会を開き、当日警察官に取調べを受けた者から事情を聞くと同時に「時に鑑み、学生の反省奮起を望む」「吾校の将来は、一に現在学生の双肩にかかる」などと大書したビラの下で、各自反省して将来かゝることの絶無を期するやう、熱心に演説を行ふ者もあつて緊張した。

このような学生大会が開かれたのは、高商部創設以来、はじめてのことであり、自分の学校のことを真剣に考えるきっかけとなった。当時、生徒の組織している団体は、運動部と文化サークルの連合体である学友会と応援団だけであつたので、この年に、各学年から一、二名の学生幹事(自治委員)を選出して学生会(自治会)を作り、組織的な学生運動がはじまつた。この学生運動は、政治的な色彩は全くなく、愛校運動であつた。

校舎新築促進運動

前述の学生大会が契機となつて、学生会・学友会・応援団の委員を中心として「校舎新築促進委員会」が結成された。過去において、先輩たちがこの運動に手をつけながら成功しなかつた原因を反省し「高商部の強固な団結と、一步も引かぬ決意をもつて運動を進めなければならない」というので、委員たちは連署血判して目的達成を誓ひ合つた。当時、同志社の学生は自由主義の風潮の中にあつて、とすればまとまりが悪いという定評があつたから、高商部生徒のこの団結ぶりは驚きの目をもつて見られた。

まず、理事会の理解をうるために、委員たちは手分けして、当時の理事一人一人を訪問した。海老名正総長をはじめ、京都在住の大沢徳太郎・中村栄助・西村金三郎の各理事、阪神在住の三宅驥一・橋本喜作・加藤小太郎の各理事、東京在住の麻生正蔵・小林正直・津下紋太郎・ローランド(George M. Rowland)の各理事を自宅に訪問し、高商部の現状を訴え、設備改善に対する高商部生徒全員の決意を表明し、協力を請願した。

はじめの間は門前払いされたり、面会が許されても頭から受け付けられなかったが、かげになつて応援した高商部

教員の動きもあって、ようやく生徒たちの熱意が実を結び、一九二七（昭和二年）一月三〇日の理事会の追加議案として、「高商部設備調査を西村・大沢両理事に依頼する」ことが議決された。

両理事は新築促進委員会と交渉し、つぎのような条件を委員会に示した。すなわち「校舎新築資金八万円のうち、半額を委員会が寄附するならば、今出川の校地はせまいから、他の適当な土地に移転新築する。移転先の土地は、募金完了（申込みでよいが、少なくとも六割ぐらゐは現金が集まっていること）のときに決定する」というのである。

新築促進委員会は新築募金委員会に変わり、委員たちは授業も放り出し、日曜も祭日も返上して募金運動に熱中した。学生大会を開いて在学生全員が一人三〇円ずつ寄附することを満場一致で決議した。映画会や音楽会を開催したり、当時は珍しかった百貨店でのアルバイトをしたり、父兄・卒業生・縁故者の間を駆けまわって寄附金を集めた。

募金運動を開始してから半年もたないうちに、第一次募金目標額の二万円が集まったので、委員会は移転先の選定と校舎新築の期日決定を、理事会に強く要請した。

あとで詳しく述べるように、一九二七（昭和二年）五月八日の理事会では、高商部土地問題に関し、候補地である岩倉と向日町の調査委員として、小林・西村・ペドレー（Hilton Pedley）の各理事と西山教充監事を委嘱した。同年六月二六日の理事会で、岩倉を可とする調査委員の報告を承認した。同時に金策を小林理事に依頼し、損害保証を小林・津下・大沢・西村の四理事が引受けることになった。同日の午後五時に、理事一同は岩倉に行き、買収予定地を視察した。

同年十一月二二日に、高商部生徒から、敷地決定、校舎建築即時着手の請願書が理事会に提出されたので、翌日

に緊急理事会を開き、岩倉の土地一〇万坪を、坪価七円以内で買収することを、西村理事に一任した。財源は買収土地の一部売却と、同志社が所有する不用土地の処分によってまかなうことを決定した。

岩倉土地の買収

西村理事は隠密に土地買収に着手、二五、二六の両日で、まず五万坪を、坪当たり五円八〇銭ないし六円八〇銭で買収した。ところが高商部生徒や教員たちは「理事会は高商部との約束を實行することができず、西村理事は逃亡した」といううわさに疑心暗鬼となり、当局を追及した。そこで隠密行動を取っていた西村理事を探し出し、高商部生徒・教職員に事情を説明させた。同年一月二八日付の『京都日出新聞』は「同志社高商部移転敷地七万坪買収終る」という大見出しで、この状況をつぎのように報じている。

同志社高商校舎の移転問題に關し、理事西村金三郎氏等により適任地の物色中であつたことは、屢報の如くであるが、愈々洛北岩倉村に於て敷地十萬坪買収の案をたて、二十三日開会の理事会に提案の結果決定し、地主約八十名との間に調停が出来、二十五日に至り七萬坪の買収を終つたので、明春一月中旬頃から高商部校舎だけの建築に着手することになった。尚、残り三萬坪については徐々に買収に取りかゝるらしく、二十七日午前十一時を期し、全学生主催になる学生大会が同校々庭に開かれ、海老名総長以下教職員並びに西村理事等列席の上、西



西村金三郎

村理事は岩倉に於いて敷地買収に至つた顛末をのべるや、学生側は何れも満足の面持ちで同氏の斡旋を感謝し、一同同志社チーアを高唱して引き上げた。西村理事は語る。

敷地を買収する迄には、あらゆる苦心をなめ、これがためには二十五、六兩日は自分の行動について家人に知らさず、全く無断家出の姿であつた。併し自分は飽迄も故新島襄先生の遺志により、物質文明より離れて精神教育に幾分なりとも

貢獻したい宿望から、同志とも慎重協議の末、岩倉の地に同志社百年の計画をたてたものである。買収費は絶対秘密になってゐるが、建築総経費は約百五十万円を計上してゐる。その他の具体案も、略出来上がつてゐる。近く教育部とも協議の上、最後の理事会を開いてその承認を求めることになつてゐる。

右の記事中に七万坪買収とあるが、実際は二六日までに買収したのは五万坪であり、建築費の一五〇万円というのは、西村個人の腹案として同志社諸学校のうち、いくつかをここに移す計画があり、それをふくめての金額であつて、高商部校舎だけの建築費は約一〇万円であつた。

募金運動の概況 一九三五（昭和一〇）年六月発行の、樹徳会の会報『樹徳』第二二号に、「感謝とご報告―同志と樹徳館の建築 社高商部校舎新築募金委員会解散に際して―」という次のような報告書が載せられている。

これは高商部長であつた中川精吉の書いたもので、募金委員会の公式報告書である。

同志社専門学校高等商業部なる名称の下に吾等は同志社構内なる徳照館に在りて授業せし事も今は昔の物語となつた。当時高商部は六百有余名の生徒を收容して京都に於ける唯一の高等商業教育機関として発展の途上にありながら、其校舎は狭隘にして設備不完全到底他の学校と比較して貧弱なりしかば、在校生徒一同は学校当局に向つて新校舎の建設を嘆願したるに、幸ひ時の総長始め財団理事の同情と理解に其建議は容れられて新校舎建築の運動となり、教職員と生徒は一体となりて協力し、建築資金の一部として金四万円の寄附募金を誓ひ、遂に昭和二年の春より之れが運動に着手、各部署を定め仕事を分担して東奔西走、寄附金の募集に熱中したり。然も其の活動の有様は今も尚彷彿として涙を催すものあり。（中略）

昭和二年に於ける寄附金の申込額は式万円に達し、昭和三年には約九千円あり、吾人の希望は満たされて現在の新校舎建設となり此に移転して同志社高等商業学校の新設をみるに至りしは、実に神の恵と新島先生の御導き

と同志社財団理事各位の同情に拠ると同時に、多大なる同情と犠牲精神を發揮せし在校生徒諸子並に父兄の方々と当時の教職員各位の御努力の賜と言はざる可らず。新校舎に移転後猶寄附金は壹万円の不足あり、吾等委員は其責任を感じ引続き在校生徒父兄各位の同情を仰ぎ昭和四年には約参千円、五年には貳千五百円、六年には貳千参百余円の寄附金を得て、結局金参万七千八百六拾一元八拾銭を建築資金の一部として同志社本部へ寄附した。り。(中略)

本年は同志社創立六十周年に相当し、種々の計画あるを聞き茲に高商建築募金の運動を打切り別項の如く収支を報告し多大の同情を與へられ寄附せられし各位に感謝して募金委員会を解散す。

これには一九三五(昭和一〇)年六月の日付で、委員長として中川精吉、委員として五名の教員が連署している。さて、買収した岩倉土地のうち、二万八四一六坪を高商部の敷地とし、第一期工事として本館延坪数約四二一坪、講堂一九五坪、特別教室一〇四坪などを新築することになり、一九二八(昭和三年六月三〇日)に定礎式を行い、それは翌年三月三一日に落成した。本館は樹徳館と命名された。この新築費は一一万一四五五円、校庭整備費四二一九円、工作物費三万〇六七五円、備品費一万三三四一円を加えて、総額一五万九六九〇円に達した。

岩倉校地

以上の経過を詳述すると次のようになる。一九二七(昭和二年一月三〇日)の理事会で、追加議案として、高等商業部設備調査を西村・大沢両理事に委嘱することが決定された。さらに同年五月八日の理事会で、高商部校舎新築の候補地である岩倉・向日町の調査委員として、小林正直・西村金三郎・ペドレーの三理事と西山監事が任命され

た。同年六月二六日の理事会は岩倉を可とする調査委員の報告を承認し、同時に土地買収費の金策を小林理事に依頼し、土地買収から生じる恐れのある損害の保証を小林・大沢・津下・西村の四理事で引き受けることになった。

理事会で承認された土地委員会(西村・大沢・津下・小林の四理事)の構想は、一九二八(昭和三年)六月二四日の臨時理事会に提出された「岩倉土地計画報告書」にまとめられている。この報告書は、同志社財団の財務部長であった西村金三郎理事の書いたもので、その概要は次のとおりである。

岩倉土地計画

第一に、岩倉土地計画は同志社の発展に伴い、施設上やむをえないものであった。

近時同志社は非常に発展し、大学・男女の専門学校・中学・女学部を合わせて学生生徒の数は、五〇〇〇人に達している。それらの学校敷地としては、二万坪があり、さらに相国寺領約五三〇〇坪を借地しているが、非常に手狭になっている。

その上、夜間校であった高商部を昼間校に改めてから、京都における唯一の高等商業教育機関として、入学志願者が殺到し、入学試験で厳選しても、在学生は八〇〇名にも達している。昨年は大学预科も一学級増加し、専門学校に新に英語師範部と政治経済部が増設され、学生会館の建設もあって、もはや敷地は行き詰っている。

このとき、高商部の教員学生などから「寄附金四万円を学校に納めるから、学校はこれに四万円以上を補足して、高商部のために教室と運動場を施設してもらいたい」という意見書が理事会に提出された。理事会もこの意見書に同意したが、問題は財源である。寄附金募集もこの不況時代には見込みがないし、学債も返済の見込みがあるわけでもないのに発行するわけにいかない。西村は当時財務部長として、土地一〇万坪を買収、学校の一部移転、寄宿舎の復興、余剰地分譲によって理想的学校町を創造すると同時に、財源を地価騰貴によってまかなうという案を理事会に提出して可決されたのが、この岩倉土地計画である。

第二に、岩倉を選んだのは、この地が土地計画の目的を達する上で最適と考えたからである。

同志社の買収した土地は、三宅八幡社の西南部一帯の地である。この三宅八幡社は、参詣客も多いが、この付近には誘惑的な飲食店などはない。東に比叡山を望み、遠くは愛宕・鞍馬の連峯を眺め、近くは松の生い茂る丘あり川あり池あり、京都付近でも、とくに山水に富む清地であり静地でもある。また、新島先生を理解し、その事業を間接的に援護した岩倉具視公の旧蹟地である。交通では、比叡山鉄道の三宅八幡駅が近く、さらに、同志社が本計画を決定すれば、鞍馬電鉄が松ヶ崎經由線を変更して岩倉線（同志社買収地の東側に沿うて北上する線）にすると信ずる理由もあった。それに地価も本計画に適当な程度であり、村長はじめ村民も、同志社に好意をもっていた。このような周囲の事情が、この地を選んだ理由である。

第三に、同志社教育に適する学校敷地を開拓するということである。

明治時代の同志社は、緑の豊かな御所と相国寺に挟まれた静かな清らかな地であった。烏丸通や今出川通に電車や自動車が行き回るようになり、かつての静寂さは失われ、付近はすっかり俗化してしまっている。これに反して、岩倉は歴史と自然に恵まれ、青年の心身を養うのに最適の条件を具えている。しかし、周辺に無頓着では、近い将来に現在の同志社と同じような環境に変わってしまうから、本計画では広い土地を求め、学校敷地の周辺を同志社教育に理解ある人たちの住宅と、学生の必需品店舗にかぎって分譲するのが本計画の特色である。いわば「同志社町」を作るのが理想である。

第四に、岩倉土地計画は同志社の財源を作り出す一手段である。

現在の同志社に欠けているものは財力である。現在、同志社維持基金募集はすでに行き詰っており、学費募集もできない。岩倉土地計画では、昨年投じた約五〇万円の資金は、地価騰貴の結果倍額にはなっている。近く高商部

校舎・寄宿舎の建築がはじまり、道路計画が行われて分譲地に住宅と店舗が建築されるようになれば、地価はますます騰貴すると思われる。また、鞍馬電鉄も予想通り岩倉線が実現し、目下同志社買収地の東側に沿って軌道建設中で、十一月の御大典までに運転を開始するそうであるから、これも本計画にとって好都合である。

第五に、この計画では同志社財団に少しの損失の危険もなく、収益の全部が財団に入るようにしたことである。

さて、この岩倉土地計画は、本来は同志社教育の理想実現のためのものであるが、周辺の余剰地の価格騰貴を利用しようとする点では、一種の土地事業である。地価は経済事情のいかんによっては下落しないとも限らない。そこで小林・大沢・津下と西村とが、個人の資格でこの価格下落の損失を保証することにした。

岩倉土地買収

高商部の生徒たちは、前述のように、一九二七（昭和二年）一〇月までに、理事会に約束した寄附金四万円の半額を集めることに成功したので、一月二二日に「新校舎の敷地を早急に決定し、即時建築に着手されたい」という請願書を理事会に提出した。そこで、翌二三日に緊急理事会が開かれ、西村理事に土地買収を一任した。その内容は「岩倉で一〇万坪を、坪当たり七円以内で買収すること。財源は買収土地の一部売却と、同志社の現有する不用土地の処分によってまかなうこと」というものであり、さらに、この岩倉の土地に高商部の校舎を建築することも決定された。

西村理事は、さっそく土地買収に着手した。以前から内密には工作してあったようであるが、一月二四日に岩倉村役場で、西村理事は村長・関係区長などの立会いの下に、土地所有者と会見し、つぎのように提案した。

(一)私は、かねて土地を買収したいという希望を申し出ていたが、同伴の二、三氏を通じて、高橋龍造^{りゅうぞう}村長から、岩倉村に売却を希望する者多数あり、土地所有者が会見したいということであったので、ここに出向いてきたわけである。

(二)私の土地買収の目的は、公表する程度には決定しておらず、各位の自由な想像推測に任せる。自分としては、他に二カ所の候補地があるので、各位は自己の計算で、自由に決定されたい。

(三)私の買収土地の広さは十萬坪、三宅八幡社の西部一帯の地であり、希望価格は一坪につき五円である。

(四)各位の決定は二週間以内にかぎる。

(五)ご質問の、同志社の移転とか鞍馬電鉄の松ヶ崎線を岩倉線に変更するかどうかは、各位の自由な推測に任せたい。ただ、もし私が買収すれば、私が完全な土地所有者として、煮て食おうと焼いて食おうと、全く私の自由であることをご承知下されたい。

この第五項は、将来買収価格以上の価格で分譲する場合に、売主から文句の出るのを予防するための発言であった。西村理事は、のちに代議士選挙に立候補したほどの政治家であり、押し出しもよく、この折衝にはなかなかの迫力があつたようである。この年は昭和金融恐慌の年であり、土地を買いいたいという申し出は、土地所有者にとつては好都合なことであつたにちがいない。西村理事の退席のあと、村長・区長・柏村府會議員・土地所有者が協議の上、一三名の土地売却交渉委員を選び、何回かの会合の結果、西村理事の指定区域を三等級ぐらいに分け、五円八〇銭——六円八〇銭に決定したことが、高橋村長を通じて西村理事に伝えられた。

西村理事はただちに片務的契約（西村理事が買収の意志を表明し、手付金を渡すことによって成立する契約）を結んだ。この契約者が相当数に達したのと、高商部生徒からの請願書が出されていて、これに早急に答えなければならぬという理由から、理事会に計つて承認を取り、小林理事の尽力で三井信託から五〇万円の借入が確実となつたので、西村理事は買収に着手した。

一月二五、二六の両日で約五萬坪の買収に成功した。ところが西村理事が隠密行動を取つていたために「理事

会が高商部との約束を実行することができず、西村理事は逃亡した」というデマが飛んだ。そこで海老名総長は西村理事の所在を探し出し、「直ちに帰校しなければ学校に騒動が起こる」と告げたので、西村理事は買収を中断して帰校した。一月二十七日、前述のように、学生大会において、買収の成功したことを報告し、西村理事の表現を借りれば「高商部学生など、涙をもって謝辞を述べる」ことになった。

ところがこの記事が、『京都日出新聞』に大見出しで報道されたために、岩倉に土地ブローカーが入り込み、その思惑買いで、一躍坪一二、三円ないし一六、七円の高値を呼ぶようになった。したがって、予定の買収が困難となり最後の数百坪は、坪当たり一五円を支払わなければならなかった。そこで、西村理事は、坪当たり七円以内という理事会での決定を超える価格については、理事会で一定範囲の権限を土地委員に与えてもらい、急を要する買収土地については大沢理事と協議し、時間的に余裕のある場合は小林理事とも協議し、買収済みの土地の中にある未買収の土地全部を買収した。この土地買収には、西村理事も相当に苦労したようで、買収終了後一カ月ほど病床にいつている。一九二八（昭和三年）一月二十九日の理事会において、西村理事は買収地は約七万坪が決定し、三井信託から不用土地を担保とし、小林・大沢・津下・西村の保証により、年八分の利子で五〇万円の資金借入のできたことを報告した。

岩倉土地の経営

岩倉土地計画は同志社に前例のない出来事であった。今出川の薩摩屋敷跡を中心に、その周辺だけに目を向けていた同志社が新天地を開拓したことがその一である。学校の収入は、学生生徒の納入する授業料か有志の寄附が中心と考えられていたのに対して、土地経営に乗り出したのがその二である。

現代からみれば、学校が新天地を求めて移転拡充するのは、目新しいことではない。時代の変化発展に対して、いつまでも古い校舎や校地にしがみついている方がおかしい。しかし、当時としては新しい構想であった。

岩倉土地勘定収支表
自1927年11月 至1931年3月

収入の部	金額
(1) 借入金（三井信託）	355,000
(2) 借入金（本部）	101,879
(3) 分譲地代金	152,062
(4) 工事代未払金	33,342
(5) 諸収入	6,555
(6) 本部へ仮移譲分	286,392
（計）	935,230

支出の部	金額
(7) 土地買収費	452,832
(8) 諸経費	177,866
(9) 分譲地代金未収金	16,185
(10) 道路費	1,955
(11) 本部移譲地未精算	286,392
（計）	935,230

（円位未満四捨五入）

本表および以下の計算書は1934年に、当時の財務部長上谷統が、岩倉土地問題について、評議員の有志に説明したときの原稿（メモ）から採ったものである。

同志社町の建設という形で、学校が広い土地を求め、その周囲の諸条件の変化を予見して収益を求めるというやり方は、それまでの学校経営者にはない着想であった。この事業には優秀な経営者が必要とする。土地委員に選ばれた小林は三井物産の取締役、大沢は大沢商会の社長、津下・西村も、それぞれ実業界にあった人たちであるから、人材は揃っていた。しかし、教育関係者と実業家では、物の考え方がちがう場合が多い。この岩倉土地の経営には、疑惑の眼が向けられがちである。しかも、土地委員は会社の経営者のように、職務権限あるいは責任が明確でない。同志社のためを思う気持だけでつながっており、計算に徹するきびしさに欠けているのは自然である。

岩倉土地の経営は、学校教育とはなじまないものである。その点を考慮して、損失が生じた場合、四名の土地委員が損失を補償することを確約したわけである。同時に、財団の会計と区別して「岩倉土地勘定」を設け、収支を明らかにすることにしたのである。

一九三〇（昭和五）年度の岩倉土地勘定の収支表は、前ページの通りである（円位あるいは銭位未満は四捨五入）。

この収支表については、説明を要する。

(1) 借入金

三井信託よりの借入金は、不用土地を担保とし、土地委員四名の個人保証により、年八パーセントの利子で一九二八（昭和三年）一月二三日に五〇万円を借入れ、その後四回に分けて一部返済した残額である。また、本部よりの借入金は、諸支払に当てるために、本部から融通されたものである。

(2) 分譲地代金

岩倉土地勘定で買収した土地六万三七九八坪のうち、二万八四一六坪は高商部敷地として本部に移譲し、残りは分譲することにした。一九三〇年度末までに七五九七坪を、同志社教職員や関係者五四名に、坪当たり平均二〇円二銭で分譲した。

(4) 工事未払金

支出の部の諸経費中の未払金。

(5) 諸収入

この内訳は、分譲地代未払金に対する利子四四一一円、寄附金一一〇四円、雑収入一〇四〇円である。

(6) 本部へ仮移譲分

高商部敷地二万八四一六坪（金額にして二八万六三九二円）は、岩倉土地勘定から本部に対して売渡したのであるが、未清算であるために、この収支表の収入と支出の欄に「仮移譲分」と「未清算分」として計上してある。だから、精算が済めば相殺されるべきものである。

(7) 土地買収費

買収することのできた土地は、六万三七九八坪で、内約五万坪は最高六円八〇銭、最低五円八〇銭で買収することができたが、土地買収の件が新聞に大きく報道され、土地ブローカーが乗り込んできて地価をつり上げたので、残りについては、最高坪一五円を支払わなければならなかった。このために、平均坪価は七円一〇銭となった。この買収土地のうち、高商部敷地として本部に移譲した残り三万五三八二坪を分譲地とした。

(8) 諸経費

分譲地は道路をつけ区画整理をした。この費用に、借入金の子、買収のための諸費用、事務費などを加えると、一九三〇（昭和五）年度末までに総額一七万七八六六円に達した。そこで、これから諸収入六五五五円を差引いた一七万一三一円を、工事施設の状況を参酌して、次のように土地原価に割り当てた。

(イ) 分譲地三万五三八二坪に対しては、八万六六一三円を割り当てる。これは坪当たり二円四五銭弱となり、分譲地の総価額は三一万九七一七円、原価は坪当たり九円四銭である。

(ロ) 高商部敷地二万八四一六坪に対しては、八万四六九七円を割り当てる。これは坪当たり二円九八銭となり、本部への移譲地価額は二八万六三九三円、原価は坪当たり一〇円八銭弱となる。

(9) 分譲地代金未収分

分譲地には分割払いを認め、未払金に対しては利子を徴収した。収入の部の諸収入中の収入利子がこれである。

(10) 道路費

道路をつけるために買収した土地代であり、村道として無償提供した分である。この収支表を基にして、一九三一年（昭和六）年三月末日における貸借対照表を作れば、上記のようになる。

岩倉土地勘定貸借対照表

1931年3月31日 (単位円)

資 産 の 部		金 額
(1)	所有土地	267,185
(2)	本部へ仮移譲金	286,392
(3)	分譲地代未収金	16,184
(計)		569,761
負 債 の 部		金 額
(4)	三井信託借入金	355,000
(5)	本部より借入金	101,879
(6)	工事未払金	33,341
(7)	剰余金	79,541
(計)		569,761

分譲地の分譲は一九三〇（昭和五）年度に集中し、これによって八万円近い収益をあげることができた。もし分譲地二万七八〇〇坪を坪価二五円で売却することができたと仮定すれば、その原価は一〇円未満であるから、一坪につき一五円、総額にして四〇万円以上の収益となり、現在の貨幣価値に換算して数十億円の資金を獲得することができたであろう。しかし、事はそのようなには運ばなかった。

岩倉土地の結末

岩倉土地勘定は、一九三〇（昭和五）年度には黒字であったものが、翌年からは赤字がつづ

いた。一九三一（昭和六）年度の赤字は一万五二六四円、一九三二（昭和七）年度は三万三四三〇円、一九三三（昭和八）年度も二万七六四〇円の赤字を出し、赤字累計は七万六三三四円となり、一九三〇年度末の黒字七万九五四一円を帳消にしてしまった。

このように、赤字つづきになった理由は簡単である。すなわち一九三一（昭和六）年度以降、ほとんど分譲希望者がなかった。しかるに三井信託からの借入金三五五〇〇〇円に對する年間約二万八五〇〇〇円の利子と、事務費約三〇〇〇円が経常的に支払われたので、その分だけ赤字が出るわけである。

利子のつく借入金で土地を買えば、この土地利用による収益がなければ、利子だけの損失が出るのは当然である。もし金利と同じ割合で地価が騰貴すれば、保有地の評価替えによって赤字は出ないが収益はえられない。土地保有によって利益がえられるのは、他の費用は不要として、地価が金利以上の割合で騰貴する場合だけである。こ

のことは、理事会も知っている。そこで、三井信託からの借入金は、できるだけ早く分譲地の売却金によって返済することを決定していた。

同志社財団は、当時、校地のほかに、宣教師や教員の住宅用土地約七〇〇坪を所有していた。これは今出川校地付近に散在しており、広いもので二〇〇坪、狭いもので二〇坪ほどである。これは同志社が買入れたものもあるが、アメリカン・ボードが金を出して買ったものの、外国人は日本の土地を所有することができないために、同志社の所有名義となり、結果的に同志社に寄附されたものが大部分であった。このうち、処分可能なものが約三〇〇坪あり、これを不用土地と称していた。これは時価にして坪七〇円から一〇〇円であったから、これを全部処分すれば借入金返済は可能であったが、分譲による収益を期待したためか、借入金返済は実行されなかった。もっとも、一九三〇（昭和五）年度に六五六坪、一九三一（昭和六）年度に一一五六坪、一九三二（昭和七）年度に二二坪が売却され、金額にして一五五〇〇〇円ほどの収入があったが、そのうち四万円だけが借入金返済に当てられただけで、大部分は高商部建設関係や栄光館の建設費に使われている。

一九三〇（昭和五）年度岩倉土地勘定の決算で八万円近い余剰が出たのは、好条件に恵まれたからである。第一に、坪当たり七円という安い価格で土地を手に入れたことである。第二に、一九二八（昭和三年）二月一日に、山端・市原間の鞍馬線が開通し、翌年一二月には鞍馬まで全線開通するとともに、一九二九（昭和四）年に高商部校舎が新築され、地価が急騰しそうな諸事情があった。そこで、将来なお騰貴するだろうという見込みで、分譲希望者がふえたわけである。

しかし、実際に分譲地に建築されたのは飲食店ぐらいで、住宅はほとんど建てられなかった。その理由も簡単である。当時は、岩倉は田舎であって、都会の利便さは何もない。京都市内には、遊んでいる土地がいくらでもあつ

たから、鞍馬線が開通したからといって、わざわざ岩倉に住もうという人はいなかった。だから、分譲地を買った人たちも、何年か後には、ほとんど土地を手離している。また、一九三五（昭和一〇）年ごろ、西村は建売住宅を作る案を出したが、だれも賛成しなかった。

岩倉土地については、もう一つの事件がわざわいした。一九二七（昭和二）年度末に、財団の庶務主事と会計出納係が共謀して、伝票をごまかしたり電話売却金を横領したりした上に、岩倉土地会計の小切手を盗用して二万四〇〇〇円余りを盗んだ事件が発覚した。当時財務部長であった西村金三郎と内藤隆行庶務部長は、責任を取ってその職を辞した。この犯人には一万四〇〇〇円ほどの不動産を弁償金として提供させ、不足分は欠損として処理することで結着をつけたが、岩倉土地のイメージを損ない、岩倉土地の実質上の責任者である西村の財務部長辞任という痛手を与えた。

岩倉土地計画の推進者であった西村金三郎は、一九三〇（昭和五）年一〇月には、理事をも辞任している。土地委員は囑託という形で勤めていたが、権限もない形だけのものであり、一九三五（昭和一〇）年には、この囑託も解かれて、岩倉土地計画は実質的に頓挫した。この後、三井信託からの借入金については、いくらかのトラブルもあったが一九四〇（昭和一五）年度に完済された。それより以前に、特別会計であった岩倉土地勘定も、財団の会計に吸収されている。

岩倉土地勘定は、理事会の決定通り、ほとんど収益のない不用土地を処分して三井信託の借入金を返済しておれば、赤字を出すこともなかった。それが実行されなかったために帳簿上では赤字となり、失敗とされて、とかくの批判を招いたようである。しかし、土地計画の失敗は、同志社町の建設とか、収益を財団にもたらしすという点の失敗であって、この計画が同志社にとってマイナスであったとはいえない。高商部の校地は、現在、同志社高等学校

の校地となっており、その他の保有地も、時価にして数十億円の価値あるものが同志社に残されている。

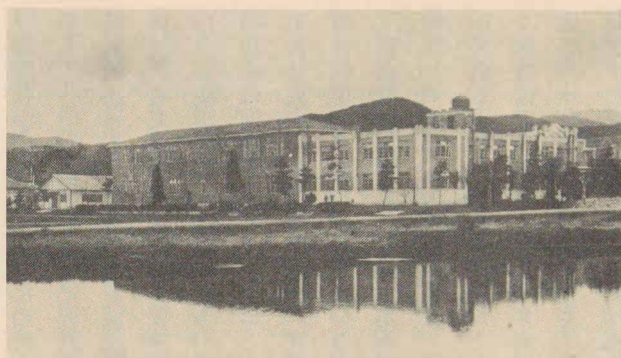
同志社高等商業学校

同志社が土地買収をした当時の岩倉は、京都府愛宕郡岩倉村である。京都市内からの交通機関は一九二五（大正一四）年九月に開通した比叡山鉄道（出町柳・八瀬間）の三宅八幡駅か、一九二八（昭和三年）一月一日に一部開通した鞍馬電鉄（山端・市原間）の八幡前駅を利用するだけである。比叡山鉄道（後の京福電鉄）の始発駅である出町柳駅から新校舎までは、約三〇分を要するだけであるが、交通機関はこの電車しかなかったから、朝夕のラッシュ時の電車は、高商の通学生で満員であった。

現在はいよいよ開発されているが、当時は民家もなく、鞍馬線の八幡前駅と岩倉駅間の南側は畑と田んぼだけで、そのまんに校舎が建っていた。岩倉村には下宿もなく、一九三〇（昭和五年）にキング寮や語学寮が建てられたものの収容人員はかぎられている。大部分の生徒は京都市内から電車通学した。

岩倉村は幕末に岩倉具視がかくれ住んでいたところである。東に比叡山系が連り、北から西にかけて北山山系がせまり、南は松ヶ崎の低い丘で京都とへだてられている盆地である。冬の気温は京都市内より数度低く、低地は湿地であるから、快適な住宅地というわけにはいかなかった。

岩倉は田舎であったが、今出川で徳照館に押しこめられていた高商部生徒たちにとっては、希望にあふれた新天地であった。一九二九（昭和四年）四月に移転が完了し、生徒定員も九〇〇人に増加が認可された。五月には校旗が制定され、一月三〇日には盛大な新校舎落成式が挙行された。翌年四月には、運動場竣工式とキング寮落成式が



南東から見た高等商業学校の校舎（樹徳縮）

行われている。

キング寮

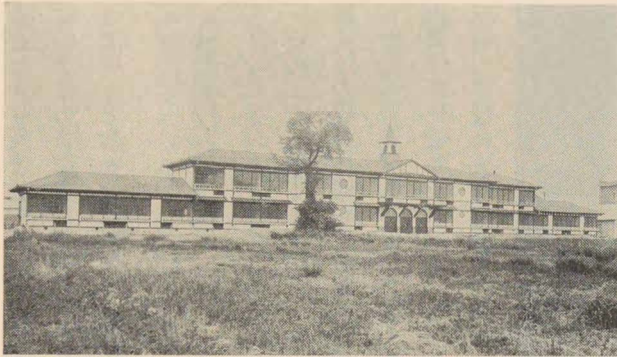
キング寮は新島襄の母校アーモスト大学の総長となったスタンレー・キング (Stanley King) の寄附によって建てられた。そ

の由来はつぎのようである。

キングは一九〇三年にアーモスト大学を卒業、弁護士資格をえたのち実業界に入ったが、一九二七年にアーモスト大学の常務理事となり、一九三三年に総長に選出された。

一九二八年に、キング夫妻は世界漫遊の途中日本に立寄り、同志社大学を訪問した。数日間の滞在中、同志社はキング理事を当時岩倉村に校舎新築中の高商部敷地に案内し、校舎の予算はあるが寄宿舎は予算がないために建設できない状態にあることを説明した。キングは小人数教育の必要を主張する教育観をもっており、ことに寄宿舎における教育に関心があったので、岩倉から帰る自動車の中で「寄宿舎の件はボストンに帰ったのちに、その実業家たちと話し合ってみましょう」という言葉を残して帰米した。

翌一九二九（昭和四）年五月に、キングから八年前に永眠した妹を記念するために、両親と共同で、高商部の寄宿舎を寄附したので、大体の見積りを送ってほしい、と申し出てきた。そこで、同志社では京都帝国大学の武田五一に依頼して、理想的な寄宿舎の設計図を作り、これをキングに送ったところ、非常に満足し、一万二〇〇〇ドルの寄附を申し出てきた。この寄附金によって翌一九三〇（昭和五）年に建てられたのが、建坪一七五坪のキング寮で



キング寮 (竣工当時)

ある。

寄附者の希望として、できるだけ住み心地のよいものをというので、この寮の内部はもとより、外観もすこぶる明るい感じの建物にして、他の学校にもこれほどのものは見当らないようになりっぱなものであった。

寮生の居室は六帖間で、階上・階下合計三〇室、他に集会室・応接室・舎監室・浴室・脱衣室・湯沸場各一、便所・洗面所各二があった。居室は三〇室全部が南向きであり、前面に開けた広い田んぼ、はるかに見える大文字山や比叡の眺望は、すばらしい勉学の場合を与えるものであった。

このキング寮は一九三四（昭和九）年の室戸台風によって惜しくも倒壊した。翌年に、二階の一部を削り、一一五坪に建坪を減らして再建されたが、昔日の面影を一部残して戦後まで存続した。

醇化館と語学寮

一九三〇（昭和五）年一二月に、かねて申請していた専門学校高等商業部を廃して同志社高等商業学校を設置する件が認可され、専門学校学則中から高等商業部の項が削除され、一九三一（昭和六）年四月から、正式に校名を同志社高等商業学校と改称した。そして一九三一年度以降の卒業生に対しては、商業・簿記・英語の中等教員無試験検定資格が認定され、専門学校の一部ではなく、独立の専門学校としての形式と内実を具えるに至った。

この年には、即位大礼のときの建物が下賜されて移築され、醇化館と命名

された。この醇化館は一九三四(昭和九年九月)の室戸台風で大傾斜したのを、翌年復旧して柔剣道場とした。同じ年に語学部(の寄宿舎として、一二八坪の語学寮が建てられ、翌年四月から正式に学校の管理に移された。この語学寮は、一九三七(昭和一二)年に大成寮と改称して一般の寄宿舎となっている。

鷺尾校長時代

一九三一(昭和六)年四月から、高商部は同志社高等商業学校として独立の形式を整えたが、専門学校の創設以来、その校長は同志社総長が兼任していた。しかし、生徒数が一〇〇〇人近くなり、本部と離れた岩倉に独立の校舎をもち、社会的評価が高まるにつれて、兼任校長では運営することが困難になった。そこで当時の総長大工原銀太郎は専任校長を物色し、山口高等商業学校の校長であった鷺尾健治に白羽の矢を立て、島本徳三郎理事を山口に派遣して校長就任を懇請した。



鷺尾健治の胸像

鷺尾は第五高等学校から京都帝国大学法学部を卒業した敬虔なクリスチャンであり、名校長の評判があった。同志社諸学校の中で、もっとも入学者が多く、またもっとも在学生の多い高商が、岩倉の新天地で大きく伸びることを期待して、当局は鷺尾の来任を熱望した。鷺尾はその熱望にほだされたのと、新島襄の教育方針に共鳴し、官立学校にはない私立学校の良さを育てようと決意し、一九三二(昭和七)年四月に、高商の初代専任校長として就任した。

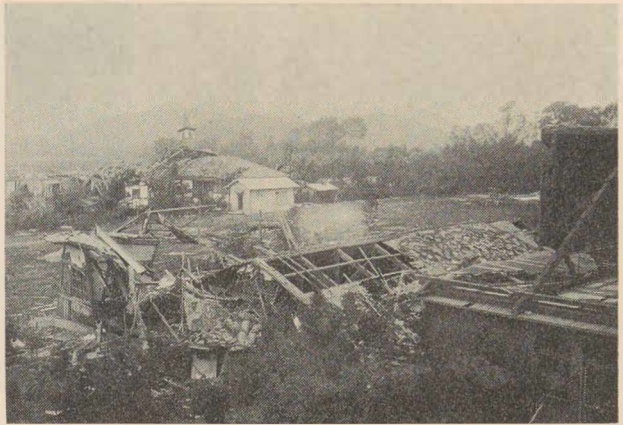
当時の教員や生徒たちの証言によれば、鷺尾校長は高い理想を温かい心で包んだという感じの人柄であった。この新しい専任校長を迎えて、同志社高商は新たな発展期を迎えた。

一九三二（昭和七）年から一九三七（昭和一二）年に至る五年間は、一九二七（昭和二）年に起こった金融恐慌に引きつづき、第一次世界大戦後における世界的大不況の影響を受けた、いわゆる「昭和恐慌時代」である。右翼や軍の一部は、この不況は財閥や財閥と結託する政治家のせいであるとして、一九三二（昭和七）年二月には井上蔵相を、三月には岡田啓介首相を暗殺した。

一九三六（昭和一一）年には、皇道派の陸軍青年将校が近衛兵一〇〇〇人を率いて斎藤内大臣、高橋蔵相、統制派の渡辺陸軍大将を殺害するという二・二六事件が発生した。これは陸軍皇道派によるクーデターであり、これを契機として、軍部のファシズム的支配体制が確立した。

鷺尾校長時代（一九三二―三七年）は、国家主義思想が軍国主義に発展し、軍部の発言力が増大して行った時代であったから、熱心なクリスチャンであり、新島襄のキリスト教主義教育の実践を自己の使命として来任した鷺尾にとっては、意に満たぬものが多かったにちがいない。しかし、学校は人間を教育する場であり、政治や主義によって左右されるべきものではないと考えていた鷺尾は、生徒に対して「高等教育を受け、やがて社会の指導者となる位置にあることを自覚せよ」、「力いっぱい一日を生きよ。その正否をきめるものは神である」という教育方針を説いて生徒たちの奮起を促した。

キリスト教主義教育を建て前とする同志社では、精神教育が大切に実業教育は二義的であると受けとられがちであり、それが本部に対する不満となっていた高商生たちには、鷺尾校長の教育方針は大きな刺激になった。そして、若さを精一ぱいぶっつけて人間錬成をやるうという雰囲気、自然に学校内に生まれた。したがってスポーツも天



室戸台風の被害（岩倉校地）

下に覇を唱えるようになり、同志社大学に進学するよりも、官立大学の狭い入試の門に挑戦して入学することをほこりとするような気風が生じた。あるいは勢いあまってばんからな風体で市中を闊歩したり、いたずらがはげしかったりしたが、関西における私立高商の名門という声価と内実を具えるに至った。

神棚事件

一九三四（昭和九）年の室戸台風によって、近畿地方は前例のない被害を出したが、岩倉でもキング寮と柔剣道場が倒壊し、醇化館が大傾斜した。翌年に醇化館を改築し、これを柔剣道場とした。そして六月一日に剣道部の道場開きを、関西学院と山高商の剣道部を招待して、挙行した。従来の柔剣道場では、正面に新島襄の肖像が掲げてあったが、当時は、日本古来の武道である柔剣道場には、神棚が祀ってあるのが普通であった。そこで「従来の道場は学校の構内にあるから、そこでは新島先生の肖像でないといけないだろうが、新道場は道路で隔てられた構外の醇化館だから、神棚を祀

る方が、格好がつくだろう」という単純な理屈で、古道具屋で買ってきた神棚を道場にとりつけた。

ところが道場開きの儀式のとき、当時宗教部長であると同時に剣道部長であった教授喜多直之助は、はじめて神棚のあることを知り、驚いて席を立てて帰ってしまった。そして剣道部員に神棚を撤去せよと厳命した。しかし、納得しない一部の生徒が配属将校の三浦国雄中佐に告げたことから事件が大きくなり、こちこちの軍国主義者であ

る三浦中佐は、神棚を撤去せよとは反国体的であるとして、配属将校を引き上げるといふさわぎになり、新聞がトップ記事に取りあげた。加えて、大日本生産党とか洛北青年同盟などの右翼団体が配属将校を支持して、さわぎはますます大きくなった。そこで、当時の総長湯浅八郎は第一六師団司令部に向いて話合った結果、ついに神棚を祀ることになった(詳しくは第四部第四章で述べる)。

この神棚事件は、時代の側面を浮彫りにしたと同時に、同志社の置かれている苦しい立場が表面化したものであった。剣道部の部員たちは、なんらかの意図で、このような事件をひき起こしたのではない。剣道は日本の武道だから、神棚をまつるのが普通であり、自然だろうという気持でやったことであつたから、事件が大きくなったのは困惑したのが実情であつた。なお、右翼団体からの挑発に乗らないよう、極力自制につとめた。

鷺尾校長は在任五年目の一九三七(昭和一二)年八月に、病気のため永眠した。教職員や生徒の信望を一身に集めていた鷺尾校長の死は、各方面から惜しまれ、九月一八日に学校葬で送るとともに、翌年には生徒たちの寄附金によって胸像(陶器製)が作られ、校門を入った西寄りの場所にたてられた。

戦時下の高等商業学校 一九三七(昭和一二)年は、蘆溝橋事件をきっかけに日中戦争がはじまった年である。また、この年に結ばれた日独伊三国防共協定は、資源をもたない枢軸国対連合国という敵対関係を作り出し、第二次世界大戦に次第に近づいていった。このような状況を背景に、日本は臨戦体制に入った。すなわち一九三八(昭和一三)年には国家総動員法、一九三九(昭和一四)年には国民徴用令が公布され、価格統制令が施行された。

また、この年には日本は日米通商条約を破棄し、日米会談も決裂した。一方欧州ではこの年の五月に独伊友好同盟条約が成立し、八月に独ソ不可侵条約が結ばれると、九月には独ソがポーランドに侵入して、両国で分割してしまつた。そこで英仏はドイツに宣戦し、第二次世界大戦が始まつた。翌年にはイタリアも参戦した。

このような状況は、教育の世界にも反映する。一九三七（昭和一二）年には、高商の学則が一部改正された。すなわち、学則第一条は、

本校ハ智徳並行ノ主義ニ基キ実業学校令、専門学校令ニ拠リ、商業上必要ナル高等教育ヲ施スヲ以テ其目的トスとあつたのが、

本校ハ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉戴シ実業学校令、専門学校令ニ拠リ、商業上必要ナル高等教育ヲ施シ以テ国家社会ニ有用ナル人物ヲ養成スルヲ目的トス

と改められた。これは高商自身の主張ではなく、軍に指導された文部省の指示によるものであり、これに従わなければ、学校の存続さえあやぶまれる時代であつた。

野手校長時代

鷺尾校長の死後一年あまり、中川精吉が校長事務取扱であつたが、一九三八（昭和一三）年一二月に、新校長として野手耐を迎えた。野手は一八八九（明治二二）年に同志社普通学校に入学、第二高等学校を経て一九〇四（明治三七）年に東京帝国大学法学部を卒業して大蔵省に入り、税務・税関畑を歩き、一九二七（昭和二年）に埼玉県知事、さらに和歌山県知事に転じて一九二九（昭和四）年に退官した。以後広島市で弁護士として活躍、同志社の懇請によって第二代高商校長となった。

野手校長は同志社普通学校出身のエリート官僚であり、同志社ではその手腕を見込んで校長に迎えたのである。しかし、教育ことにキリスト教主義の私立学校の教育は、官僚の経験しかない野手校長には勝手のちがう仕事

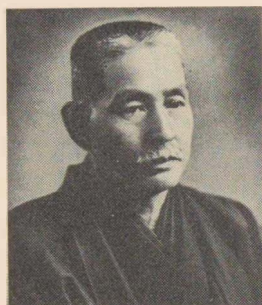
であった。

鷺尾前校長の「積極的に人生に挑戦せよ」という教育によって、高商生たちはそのエネルギーをスポーツや学業に注ぎ込んで特異な校風を作ったが、反面において「大学や予科何するものぞ」「不正や不義に対して徹底的に戦う」というような、若者に特有な気分も醸成された。野手校長の就任当時は日中戦争が始まり、生徒たちは卒業すれば直ちに軍隊に召集されるという状況の中で、考え方も行動も、とかく極端になりがちであった。

そのころ、樹徳会の会報『樹徳』に、「高商の黒字を大学の赤字埋めに使はずに、高商の貧弱な設備の改善に使え」とか、「高商に運営・財政の自治を与へよ」というような論説が載せられ、本部に抵抗しようというムードがあった。これは具体的な運動となつて現われたわけではなかったが、強硬派と穏健派に意見が分れてしまった。

野手校長は本部への対抗意識が強く、官僚的なやり方で本部に自治論をぶつつけたため大きな摩擦を生じた。樹徳会の会長は学校長であつたから、卒業生の側からもいろいろな意見が出た。教授会の一部が牧野虎次総長事務取扱に直訴するというような事件も起こつた。

本部は、この非常時に学校に騒動が起れば、神棚事件の例が示すように、軍が乗り出してきて、キリスト教主義学校は取り潰せということになりかねないことを恐れた。それで、定年制を適用して、一九四一（昭和一六）年八月に、野手校長を退職させてしまった。そして総長自らが乗り出して校長事務取扱となり、事態を収拾した。

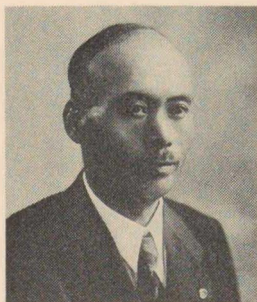


野手 耐

島本校長時代

一九四一（昭和一六）年一〇月に、近衛内閣が倒れて東条内閣が成立、一二月八日ハワイ真珠湾を攻撃すると同時に、日本は米英に対して宣戦を布告し、太平洋戦争に突入した。開戦直後、日本軍はインドシナ、フィリピン、マレー、インドネシアなどへ戦竹の進撃をつづけたが、戦線が広がるにつれて補給路は延び、人も物も不足する。そこへフィリピンから撤退した米軍が態勢を立て直し、南太平洋から反撃に転じた。一九四二（昭和一七）年八月には、日本軍は攻撃から防御にまわるようになった。

この年の六月に、和歌山高商の教頭であった島本英夫が、高商の第三代校長に就任した。島本は同志社中学の出身で、第三高等学校から京都帝国大学法学部を卒業後、神戸高商・長崎高商を経て和歌山高商教授となった。前校長野手の経歴は申し分なかったが、畑ちがいの人は学校長に不向きであったことから、鷲尾校長の前例にならう。高商の校長や教頭を物色したのであろう。島本は神戸高商時代に、高商部で講師を勤めており、政治的に動いたり我意をむき出しにするタイプではなかったので、そこに目についたのであろう。



島本英夫

一九四二（昭和一七）年は太平洋戦争の第二年目であり、初戦のはなばなしは戦果のあと、米軍が南太平洋から反撃に移っていたが、とにかく講義をつづけることはできた。しかし、一九四二（昭和一七）年三月卒業予定者は、卒業が三カ月繰り上げられて、前年の一二月に卒業した。一九四三（昭和一八）年三月卒業予定者以降は、

卒業が半年間繰り上げられ、前年の九月に卒業した。一九四三（昭和一八）年九月には、学生の徴兵猶予制が廃止されて学徒出陣がはじまった。一九四四（昭和一九）年八月には学徒勤労令が公布され、翌年からは全面的に授業は停止された。

同志社経済専 門学校と改称 一九四四（昭和一九）年四月から、同志社高等商業学校を同志社経済専門学校と改称した。これは、国の総力を結集して戦争を遂行するには、不生産的なものを廃して生産的な方に向けなければならぬという軍部の考え方によるものである。商業が不生産的かどうかは別として、このとき全国の高等商業

学校は高等工業学校・工業経営専門学校に変わったのもあったが、大部分は経済専門学校となった。

商業といっても経済といっても、軍事力増強の点からは、あまり生産的とはいえない。そこで定員が、一学年三〇〇名から一五〇名に半減され、学科目も整理された。英語は敵性語であるという理由で縮小・廃止された。しかし、そのころになると授業はほとんど行われず、教員も生徒も勤労動員で工場に行っていたから、学科目の整理は書類上だけに終わった。また、生徒の授業料で経費をまかなねばならぬ私立学校では依然として旧定員で入学させており、文部省もとがめ立てしなかった。学科目の整理はあっても、教員の仕事は勤労動員先の工場に、生徒の監督として出かけることであつたから、減員も行われなかった。ただ、学校に見切りをつけて実業界に転出した教員が何人かあつた。

一九四三（昭和一八）年度中は、休暇を利用して農村へ勤労動員された程度であつたが、一九四四（昭和一九）年度に入ると、四月から六月まではなんとか授業が行われたものの、それ以後はほとんど行われなかった。鳥居松・赤穂・枚方の軍工場、神戸製鋼・大同製鋼・土山の軍需工場などに、学年単位やクラス単位で勤労動員された。枚方は通勤であつたが、他は各工場の寄宿舎に入れられ、教員も監督のために、生徒といっしょに行動した。教員も生

徒も、訓練なしでいきなり工場に配置されたが、生徒は割合に早く順応できた。生徒は工場内では工場側の管理下にあったが、工場側では生徒についてよく知らないために、ときどきトラブルが起きた。ことに軍工場の管理者は軍人であって、すべてが命令であり、生徒の間にはこれに反発する気分もあって、監督の教員も楽ではなかった。

一九四四(昭和一九)年十一月から、サイパン島を基地とする爆撃機B 29の東京空襲がはじまり、日を追うてはげしさを加え、翌年三月からは大阪を中心とする西日本の諸都市への空襲もはじまった。

一九四五(昭和二〇)年四月には米軍が沖縄に上陸、五月にはドイツが無条件降伏したので、日本は完全に孤立した。七月二六日には日本の降伏条件であるポツダム宣言が発せられ、八月六日と九日に広島と長崎に原子爆弾が投下されたので、日本はポツダム宣言を受諾、八月一日の玉音放送で、国民は日本の降伏を知った。

戦後の経済 一九四五(昭和二〇)年に入ってから、授業は全く行われず、岩倉の高商校舎は三菱発動機の疎開
専門学校 工場として供出された。何台かの機械が講堂にすえつけられたが、試運転が行われた程度で、ほとんど稼働しなかった。

終戦時の混乱した状況の下では、新学期の開始も危ぶまれた。交通・通信が混乱し、極度の食糧難である。下宿している生徒は、食糧確保のために走り回らねばならない。インフレが日ましにはげしくなり、生活が不安定であった。

一〇月に入ってから岩倉の校舎が返還されたので新学期が始まったが、召集されていた生徒が復員してきたり、学校間の大幅な転校が認められて、生徒はふえたり減ったりした。復員してきた者のために、特別クラスも作られた。講師を頼むことも困難であるから、残存の教員でまかなえる程度の一時的カリキュラムを編成した。

当時の生徒は、正規の授業を受けていないので、工具あがりや軍人あがりの集まりという状態であった。食糧が

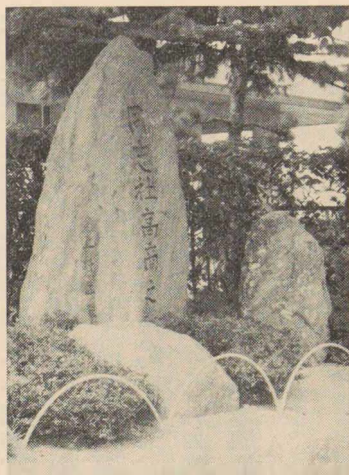
ないので、学校にも出たり出なかったり、教室の中で物資のヤミ取引が行われるというありさまであった。

一九四六（昭和二一）年一月には日本国憲法が公布され、一二月には六・三・三制教育が決定した。翌一九四七（昭和二二）年三月には「教育基本法」と「学校教育法」が成立して、四月から実施された。

この混乱と変革の中で、経済専門学校も大きくゆれ動いた。大部分の生徒はその日の食糧に関心があり、農業の時間に畑作業をした者には雑炊券が渡され、収穫された芋や雑穀で作った雑炊に舌つづみを打った。

このころ、西沢という生徒が首謀者になって「学生審議会」という組織を作り「学生の審議によって反動教授・無能教授を追放せよ」というアピールの壁新聞を張ったり、集会を開いて氣勢をあげたりした。大部分の生徒はこの運動に無関心であったが、かれらは教員のところに押しかけて、現代のいわゆる大衆団交のようなことをやった。教員の中には「ふとどき者」と叱りつける人もあったが、大部分の教員は相手にしなかった。この組織は二〇名そこそこのもので、生徒代表などというものではなかったので、学校側は相手にせずという態度を取った。それにしても、それから二〇年後に、学園紛争という同じようなことが起ころうとは、だれも予想しなかった。

西沢という生徒は、共産党員というふれ込みであった。当時は治安維持法や特高が一齐に廃止され、共産党員が刑務所から釈放されてマッカーサー司令官に感謝状を奉呈したというような時期であったから、みんなはこの西沢に引きずり回されたわけである。しかし、復員軍人の一団、中尉や少尉であった生徒たちにとっては「けしからん奴だ」ということになる。そして一九四六（昭和二一）年三月の卒業式が済んで卒業証書もらった直後に、この復員軍人の一団が西沢とその一味を講堂裏に連れ込み、難詰して鉄拳制裁を加えて、組織解散を誓わせるという一幕があつて、けりがついた。



高商記念碑（岩倉校地内）

経済専門学校の
の廃校 一九四七（昭和二二）年から六・三・三制の教育制
度が発足した。したがって、同志社経済専門学校の

は自然に廃校となる。同志社経済専門学校も一九四八（昭和二三）年
度まで旧制度の入学試験を行なった。したがって、経専は一九五一
（昭和二六）年三月に、最終の卒業生を送り出したわけである。

学からは、経専は異端児と見られていたから、一九四七（昭和二二）年に開かれた新制大学設立準備委員会では、単
科大学案も岩倉設置案も、もってのほかという取扱いを受けた。経済学部の一学科なら認めてもよいという議論ま
で飛び出した。島本校長はしぶん頑張ったが、文部省の大学設置審議会は「商学部については学内に異論がある
ようであるから、その調整をするように」ということで保留になった。

神・文・法・経済の旧制大学を基礎とする四学部は一九四八（昭和二三）年四月から開校されたが、商学部と工学部
は、一年おかれて、一九四九（昭和二四）年四月に開校した。

かくして一九二二年四月に開設された同志社専門学校高等商業部は、同志社高等商業学校、同志社経済専門学校
と、その名称と内実を変えながら、時代の流れの中を流転すること二七年、一九四九年四月に新制同志社大学商学
部として再生したのである。

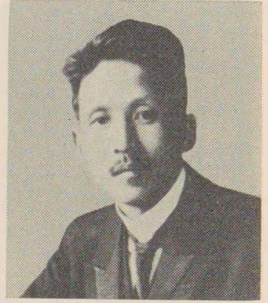
第三章 社会的キリスト教運動

中島重の「社会的基督教」の提唱

昭和初期の同志社には、その特徴的な社会科学の実践課題として「社会的基督教」の問題がある。

同志社の学園にこれを運動として点火した一人は大衆福音伝道者、賀川豊彦であった。彼は一九二五年、学内の伝道集会で無神論によらずに無産者大衆を救済するイエス・キリストの道を提示した。これによって覚醒された教師や学生は少なくなかったが、そこから、最も深い理論的確信と実践的な示唆とを強く受けた一人の教師が少壮の法学部教授中島重であった。

中島は一九一六年、東京帝国大学法学部を卒業し、その翌年から同志社の教壇に立っていたが、すでに大学入学前の高校時代（旧制・第六高等学校）の一九〇九年に、郷里岡山県高梁の組合教会（現、日本キリスト教団高梁教会）で溝口貞五郎牧師より受洗していた。その翌年上京するに及び、同じ組合系教会の本郷教会に通い、海老名弾正牧師の指導を受けてきた一人である。大学では、政治学の若手教授である吉野作造から指導を受け、また、吉野が本郷教会



中島 重

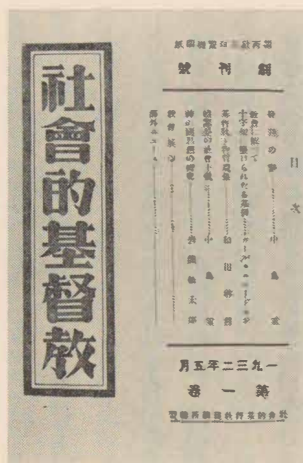
の執事（書記役）であつた関係もあつて中島は特に親交があつた。

ともかく一九一七年中島はこの二人の恩師、海老名と吉野の推輓を受けてキリストの良心を体現させようとする学園（同志社大学政治経済部）に赴任して来たのである。彼は法理学のほか、国家論、憲法論（大学）、また倫理学（予科）を講じていたが、とりわけ自身のキリスト教信仰と社会科学との関連については熱情をこめて内省していた。例えば、同志社時代の代表的論文「国家本質に関する二大思潮の対立」（『同志社論叢』第一号 一九二〇年三月）においても、中世の教会教父トマス・アキナスの神学的法思想を近代国家論に援用しながら、法は「道徳と異なるも団体の特殊目的は構成員たる各人格者の至高善の窮極目的に貢献してのみ意義あるものにして至高善は各人に内在する人格的価値なるが故に各人は此理想実現の為に団体の特殊目的を利用するの権利あり」として、多元的な社会団体の存在目的を人間存在の「究極的」な価値実現に向けてとらえ、ここに生ずる団体と個人間の権利、義務の道義的關係に法の本質をみようとしている。

そこで中島は、各人に内在する人格的価値を実現する基礎に「生命的具体的実在者」（『開拓者』第二〇巻一二号 一九三〇年）として遍在する神を求めてゆく。ここから中島は、自己ではなく、真に愛すべき『社会を発見して、社会を実現せん』とする考え方（『社会的基督教』第八巻一〇号 一九三九年）に開かれてゆくのである。

われわれの生きているこの社会は、究極的には至高善の神の支配のもとにあるのであつて、人間はそれを社会生活で具現すべき責任と特権をもっている。ここに信仰と道徳と法による人間の日常の働きが政治や文化を通して機能的にとらえられてゆくのである。

さて、このようにして中島は、従来のキリスト教の個人主義的な側面を批判して、その信仰を全体社会発展のた



『社会的基督教』(創刊号)

めに機能させ、社会化させようとする立場を鮮明にする。この同志社の精神風土を組織理論としたのは、一九二八年七月二七日より五日間の同志社労働ミッション主催の「基督教夏期大学」(於滋賀県坂本、出席者七六名)であった。彼はそこで「社会的基督教概論」なる講義をなし、個人主義的(自由資本主義的)信仰生活を否定し、キリストの贖罪愛に従う社会主義的实践が「イエスの宗教」であると主張した。

同志社労働ミッションは、冒頭にあげた賀川の学内伝道集会に刺激されて、法学部長であった中島を中心に三〇名前後の教職員、学生らより成る「雲の柱会」という「マルキシズムの正しい批判と基督教の再認識」の研究会発足(一九二五年一月一九日)に端を発したと考えられる。さらにこれが一九二七年、ハワイ伝道より同志社宗教主任として戻ってきた堀貞一牧師を中心に起った学内のリバイバル(信仰復興)を契機として、より社会献身的な団体として再編された。つまり同年一二月九日、前記の研究会は都市、農村、漁村の人々と連帯する(今日のオルグ活動の)「同志社労働ミッション」と改名された。これが坂本での夏期大学後、同志社の枠を越えた全国的、地域的な社会实践活動を志向する「日本労働ミッション」(一九二九年一月三日)として整備されるのである。

ちなみにその担い手たちは、中島重(幹事長)と、のちの消費者組合運動家、田原和郎と小谷信市(共に幹事)、のほか、委員として竹中勝男、大塚節治、石田秀一郎、宗藤圭三、高橋貞三、大江直吉、野村治一、田中光三、山路順吉、佐藤茂見、十川十二、加藤謙爾が当った。また、彼らに影響を与えていた人々として前記同志社労働ミッションの夏期大学講師陣をみれば、中島自身を別にして賀川豊彦(講義は「主観経済の原理」、杉山元治郎(理想主義と社会運動)、

吉田源治郎（『兄弟愛運動史としてのキリスト教史』）、大塚節治（『宗教本質を論じて教会に及ぶ』）、河上丈太郎（『社会運動と余の信仰観』）、山谷省吾（『イエスの福音における社会的要素』）、升崎外彦（『農民工芸と農村伝道』）、米沢尚三（『キリスト教の新見解』）たちであった。

この組織とそこで培われた社会的基督教の理論的展開は、当時の学生であった中村遙、岩井文男らを、後に水上生活者の群れ（大阪）や小作農紛議の村（綴喜郡田辺）へ送るのであるが、一九二九年、日本労働ミツシヨンの本部がある同志社に「騒動」が起り、いわばこれに巻き込まれた形で、その時解体してしまったのである。

岩倉校地問題と海老名 社会的な愛と正義をキリスト教信仰の立場から主張し、実践しようとする中島重たちの総長辞任のなかで 膝もとに降って湧いたような学園財政上の事件は、意外にも彼らの生活までも大きく転

換させてしまうのである。

それは一九二九年三月に、当時の学園理事の洛北岩倉に校地購入をなす際に非難されるところがあったということで、中島をはじめ法学部教授たちや学生たちが理事会と対決してしまったのである。報道機関も「自治学園に紛争の渦巻き」（『大阪朝日』四月二六日）との見出しで詳細な記事を載せている。

事件はもともと一九二八年一月二三日夜半に、たまたま天皇即位の大典が行われた直後の京都御所に隣接の有終館から火の手があがったことにある。同志社は陳謝の誠意をこめて二五日、海老名弾正総長以下理事、監事の総辞職に踏みかった。

そして中村栄助総長事務取扱時代に前述の岩倉校地購入、専門学校高等商業部を今出川校地から岩倉に移転（一九二九年四月）する大事業に関連して、その衝に当たった一理事（西村金三郎）と職員の間が、学生の『同志社新聞』で非難されることとなるや、理事者側は、この動きは海老名総長の「中島一派及びマルキスト」の「引留策」（若松華瑠

『同志社問題の経過報告』であり、理事会の新総長(大工原銀太郎)選出への妨害であるとして、両者の対立はエスカレートしていった。

そこで理事会は『学生新聞』に關係してきた法学部の若手教員(高橋貞三、高橋信司両講師)に四月一三日の理事会決議として「自発的な辞表提出」を要請し、次の二二日の理事会では、さらに先の兩人と共に能勢克男教授(民法)も、「総長選挙問題や岩倉の土地問題につき厳正なる批判を下した」ことおよび「この前の代議士選挙(一九二八年、最初の衆議院普通選挙)に民政党の西村金三郎理事を応援せずして、社会民衆党の吉川季次郎氏を応援したこと」(能勢克男談『大阪朝日』一九二九年四月二七日)が理由となつて、高橋講師らと同様な通告を受け、ここに法学部教員三名の解雇をみるに至つた。

中島重にとっては、海老名にせよ、またこの三教員にせよ、公私共に最も共鳴し合う師であり同僚である。彼が先頭に立つて理事会に抗議声明書(法学部一三名の教授連名)を発表したことは言うまでもない。また高橋貞三(行政法)、高橋信司(法学通論)の両講師は、その後も学生たちへの講義を続けて抵抗を示した。

また西村理事が言及したとされる法学部教員の社会民衆党の帰属の問題については、ことさら同党京都支部が、その教授たちは党員名簿にも登記されていない旨の声明書を発表させられるほどにまで発展していた。

さて、四月二五日の同志社チャペルでの海老名弾正前総長およびみや子夫人の送別会(二七日、東京へ出発)は、別れを惜しむ六千名に近い全学学生生徒をそこには収容しきれないので、教職員代表一五〇名と各学部一〇〇名づつの構成で挙行された。入堂できない他の学生生徒たちはそれぞれ校庭に集まつて、そこに前総長夫妻が歩を進めて来るのを待つという状況であつた。しかしこの送別会も野外での集会も、いつか理事会に向けて抗議する学生大会という様相を呈するほどになつてしまつた。

受けて立つ海老名辞任後の理事会についてみると、中村栄助（総長事務取扱）も一理事として岩倉に新築落成した高等商業学校校舎が西村理事の努力によることを感謝し、伝えられる法学部三教員の「臧首」は西村理事の独断でなく、同志社理事会決議であり、撤回はできないという立場をとっていた。

もともと中島重は、海老名牧師から個人的観念にとどまらず、実に全体宇宙体験的な神観を譲り受け、さらに、信仰と理念の機能化、多元化、つまり社会化を賀川をはじめ牧野英一、美濃部達吉、吉野作造らの教えによって深め、かつまた同志社での先輩、同僚たちと連帯しながら聖書が示すイエスの贖罪愛の社会正義に奉獻する情熱をもやしていたのであるから、同志社内部の事態は憂慮されるものがあつた。

しかも中島のその方面での感化は、前述の法学部若手教員や学生であつた中村、岩井などを筆頭に女子部生徒にまで広く及んでいくのである。

中島重の辞職

さて、中島重の同志社で提唱した「社会的基督教」という石の叫びは、学生たちをはじめ、日本のキリスト教界のみならず、一部思想界にまで伝えられてゆくことになる。

すなわち、後の一九三二年より一〇年間、中島を中心に同志社で学んだ者や協力者が月刊誌として出版する雑誌『社会的基督教』の中心の主張、つまり自己奉獻の「社会化」の贖罪愛は、すでに一九二九年に理事会との対決をなしたところからかなり鮮明にされている。たとえば、法学部教授らによる「声明書」（一九二九年四月二四日付）にしても、それは筆頭者、中島自身の筆に十二分にうかがい知れるものであつた。

その「声明書」の末尾のところで、「かゝる腐敗の罪は、啻に西村氏のみにあるにあらずして、実にわれ等の裡にこそ、根ざしてゐるのである。新島先生の学生を処罰するに際して、杖を以て先生御自身の腕を打たれた物語は、決して唯の空念仏ではない。親愛なる全同志社の学生諸君よ、敬愛する同志社校友同窓諸兄姉よ。（中略）態度

を明らかにして、集り来られよ。西村氏の弾圧と利権の学校行政下に、萎縮せんとする我々の腕を、杖の折れて寸断するまで、打ちのめさうではないか」と。また「声明書」は法学者集団のものらしく、第一回普通選挙に理事の西村が、同時に財務部長の地位を得て立候補していることに、「政治的自由を、その醜悪なる私情と、暴戾なる圧迫によつて、完全に、汚し去つた」と非難する。今日の公職選挙法の法理を、すでにそこでは展開しているのであるが、時代的にもそれは未だ一つの戦闘的な訴えでしかなかった。

従つて、そこに連署した中島重、能勢克男、住谷悦治、難波紋吉、林要、宗藤圭三、和田武、石田秀一郎の八教授、高橋貞三、高橋信司、長谷部文雄、松山斌の四講師、田畑忍助手らは理事会のみならず、学内外の非難に今後一層さらされてゆくことになるのである。そして、その最初の印象的な出来事が中島重の教授引責の事件であった。

すなわち、先の法学部一三名教授団声明は同学部の他の教員や理事会はもとより、文学部や予科の教授会も連名でそれが「合法的ならず」（五月一日）として、その運動の中断を求め、西村理事にも学内行政からの辞任をうながし、事態の調停に出た。反面、学生たちは理事会の態度を批判して授業ボイコットを始めた（四月二七日学生大会）。そこで校友たちの動きもあらわれ、あるいは理事会の断行に賛意（在京校友有志）を表わすもの、他はこれに対立するものという事態にまでなった。その中で石川京、中瀬占六郎ら「先輩団」の調停工作も始まる。

紛争が次第に深刻化してゆくのを見た中島は、一度は「和田（武）法学部長の手許迄辞表を提出した」（中島の『声明書』五月三日）のであったが、一三名の教授団が先輩団に「白紙一任」をした（五月四日）こと、学生大会では調停には乗らないが戦術転換をはかり、「ボイコットを解除し以て恒久的組織体を中心として益々活動を、戦闘に戦闘を進めんとするものである」（五月八日、学生大会実行委員会声明）としたことで中島は辞意を翻す。いわく「私どもは

此の運動が同志社将来の進路の決定にとりて重大なる意義あるものなることを確信して居る。同志社精神の爲めの啓蒙と戦とは寧ろ之より始まるといふべきではあるまひか(中略)理事会の弾圧下に於て真剣に深刻に持久的に。私は斯く考ふるに至りたるが故に茲に学生大会の留任決議を容れて辞意を翻し心機一転して更に此精神戦を続行せんとするものである。私一個としては(中略)一意神と人類社会との爲めに最善の道を選ばんことを希ふのみ、以て御挨拶に代ふ」(「声明書」)とある。

中島としては決して「調停団への委任を運動本来の意義を没了するもの」として満足しないのであるが、次善策としてやむを得ないという立場であつた。

しかし学校当局側の意見は、このような中島個人の「声明書」の意味するものとは別に冷たくなつてきた。すなわち、理事会の辞職勧告の方針がまとまつた段階で、連合教授会(一九二九年五月三日午後三時)が神学館楼上(現クラーク記念館二階)に三八名の教授を集めて開かれ、中島解職を決定した。

その「記録」によれば、総長事務取扱中村栄助の提案は「中島教授ハ大学ノ秩序ヲ妨ゲルモノナル故ニ理事会ニ於テ之ヲ解職スルコトトナレリ之ニ付諸君ノ御意見或ハ質問ノ有無ヲ諮ラル」にはじまり、「行動不可解」、「教育上の見地」という発言などあつて、ともかく中島声明書への批判は強く、また一部に慎重論や法学部教授会への差戻しという理事会決定批判の提案もみられたが、結局のところ可とする者三〇、否とする者五、棄権は三の票決で解職は決定し、午後四時一五分同会は散会している。

理事会および

教員一般の動向

中島重を中心にした一連の運動に反対したのは、実は理事会やあの連合教授会の過半数の者たちよりも一層身近にあつた法学部の五名の教員であつた。いまだその方面から中島たちをみてみよう。すなわち、古屋美貞、河原政勝、瀬川次郎の三教授、村井藤十郎講師、野村重臣助手の五名は一九二

九年四月二六日、中村栄助総長事務取扱に「連名辞表」を提出している。その理由は西村理事を糾弾する同僚教授たちが、学生を煽動して半ば暴力的に学内で振舞っているということにある。古屋らが公にした「発表」文（四月二九日午後一時）は、同年四月二一日および二四日の法学部教授会の状況から書き起こされている。

そこで、必要と思われるところを引用すれば、（二四日の教授会のことについて）「一、教授会は一教授二講師の解職方法に就き理事会に抗議文を提出することに決した。一、右抗議文を学内に掲示する為め、教授中疊大の洋紙に大書する者あるを以て、吾等は之に反対した。一、議終るや突如、中島重教授は兼ねて用意せる西村理事排斥の長文の声明書を配布し、論議を許さず、吾等に即刻署名せんことを要求した。一、一派（中島たち二三名のこと）は予め期待せるものの如く、何等内容を吟味する模様もなく、直ちに署名を了した。然れ共吾等は事の意外なるに驚き且その方法あまりに直接行動的なを以て、之が署名を拒絶した。（中略）一、中島教授は同志の懇談に移るべきを告げ、署名せざりし吾等の退席を求めた。（中略）一、法学部の重鎮と認められ且予科に於て修身を担任せる某教授は、校庭本部掲示板に於いて学生環視の中に、宗教主任堀貞一氏の胸倉を捉へまさに鉄拳を加へんとした。鹹首された某教授も亦これに加勢して堀牧師を突き飛ばした事実すらある」などが列挙されている。なお、右の「発表」文によれば、四月二五日の海老名弾正前総長の送別会において、中島、高橋貞三、数名の学生らがこの会を中途から妨害し、これを「理事弾劾演説会と化し」たと難じている。

もちろん、他方から見れば、前述したように、海老名前総長送別会は、学校当局の管理体制の中で形式的に各学部、教職員代表者たちだけがチャペルに集まってなされてしまったという実情も無視できない。先の法学部一三名教授団声明にも、「海老名先生の送別会は当局一流の戒厳令下に教授学生の送別の辞を、各一名づゝに局限しようとし、参加学生の数をも限定しようとしてゐる。チャペルが狹隘であるならば、何故に校庭に於て別れの宴をも

たないか。時は陽春四月である。そしてわれ等の先生を慕ふの至情は、(中略)全同志社の構内、残る隈もなく、溢れてもまだ足りないものがある」と訴えている。また、これによれば海老名の送別会は「恰も刑事犯人を護送するか如く、警戒され、弾圧されねばならないか」と極言されるほどに、主催者側に異常な冷たさがあつたことを指摘している。それは、あの失火の当座は、全理事が「皇室」に対する謹慎の意を表わして、辞任したが、その後、海老名だけが、「殆んど全部の旧理事が——失火の責任から免れて——旧地位を恢復したにも拘らず、全学園にみなぎり溢れる再建希望の教授学生の鯨波にも拘らず、追はれて、同志社を出て行かれんとしてゐる」(同上声明書)との見地からは当然の指摘と思われる。

そのような対立の中で、当時は学校の行政権の側でない中島ら教授会有志の言動は、ことごとく処罰の対象にされることはまた当然の成り行きである。中島辞任の事情にはこのような背景があつたのである。

思えば中島が同志社に赴任したのは大学法学部の昇格前であり、まず予科の法学通論、経済通論、後には倫理学、法学部では憲法、法理学などを担当した。一三年間の同志社における教壇生活を去ることになるや、前記学生たちは「同志社の熱愛者であり、正義の戦士であり、法学部の宝である中島重教授の辞職に吾が実行委員会は絶対に反対である。吾々は此度の戦の門出に一人の犠牲者をも出さないことを誓った。今や校祖新島襄先生の像の前で誓った誓を死守し実現せなければならぬ時が来た」という文書を配布して訴えた。また校友たちや学生の一部(責任者、田原和郎、同志社消費組合内)は「教授の講義は、私共にとって真理に向かつての真の誘導であり、鞭撻であり、鼓舞でありました。私共は時間毎に、真理の聖火によって燃えてゐる人を、目のあたりに見ることが出来たのであります」と綴って、「慰労金募集」の文書を配った。

消費組合運動

なお、この頃の同志社消費組合については、次のような点で「社会的基督教運動」との関連からとらえておきたい。



消費組合購買部

すなわち、同組合は、もと安部磯雄がアメリカ留学より帰国直後、社会主義者を自覚して二度目の同志社教師となったとき手がけたが（一八九八年）、そのときは間もなく失敗したと伝えられる。そして改めて一九二〇（大正九）年に同志社構内に創設されたのである。これはおもに学生教職員の生活上必要な食糧関係（精米場、食堂、雑貨、薪炭、文具などを低廉に供給するための初期の生活協同組合であって、当初の理事には、藤田萬右衛門（同志社主事）、津田三郎、塩瀬千治（同志社中学教諭）、和田琳熊（後の『社会的基督教』同人で教授）、竹崎八十雄、会沢清、本宮弥兵衛が当り、監事には、広瀬源次郎、足利武千代（同志社庶務部長）、今井隆吉（同志社会計）らの名がみえる。二年後には理事の竹崎に代わって、賀川門下の寺田徳太郎が当る。つづいて一九二八年一〇月に「組合整理ノ結果」再出発した組合理事として、これに専念する田原和郎のほか喜田直之助（同志社専門学校教授）、石田秀一郎（大学教授）、藤田萬右衛門、中島重、

堀貞一（宗教主任）、塩瀬千治が当り、監事は前記、足利、今井のほか上嶋敢（会計士）が任じられ、翌年の理事補欠選挙において、武藤欽、磯田義治、中村熊吉が加えられた。事業は、たとえば一九二八年上半年を「第八回事業報告書」（一九二九年二月一二日開催の組合総会資料）によってみると、「前年度同様ソノ売上高極メテ少ナク、シカモ多大ノ経費ヲ用ヒ損失ニ損失ヲ重サネタレバ、七月京都府庁農務課産業組合ノ監督官ヨリ今后之以上放任スルトキハツヒニ社会ニ害悪ヲナガス不良組合ナリトシ、ソノ損失ヲ負担シテ任意解散スルコトヲ再三勧告シ、モシ之ニ応ゼザレバ官庁ヨリ解散ヲ命ズベシトノ強硬ナル勧告アリ」とある。このような苦難の中で、いわゆる「昭和三年」の同志社は、労働ミツシヨンの社会的実践の追求も加えて、社会的キリスト教運動の成長期を迎えていたのである。

そのことは同報告書にも次のようにある。「カク不利益ナル事情ニモカカハラズ吾々ハ何故ニ消費組合ヲ興セシカト云フニ、英国及ビ欧州各国ノ強大ナル消費組合ノ歴史及ビ理論シカシテソノ社会的機能ノ大ナルヲ思ヒ我国ニ於テモ社会改造ニ極メテ重要ナル働キヲ消費組合ガナスモノナルヲ感じ、是非共之レヲ興サザルベカラズトスル理想ニ燃ユル熱意ト、（中略）之レコソ神ヨリ与ヘラレタル使命ナリトノ燃ユル信念ニヨルモノナリ」と。また、彼らのその信念は、一九二八年度末現在における会員二〇五名と、出資金一〇〇〇円余りという背景によって支えられていた。

さらに法学部教授陣は、消費組合理事中島の訴えもあって、石田のほか、宗藤圭三、難波紋吉、さらに法学部経済学科学生山本是郎、塚越貞雄も「学業ノ余暇ノ殆ンド全部ヲモツテ煩雜ナル事務ヲ援助」されたとある。またこの上に、「雲の柱会」以来、同志社にその良心とアカデミズムの社会実践を叫ぶが如く説いた賀川豊彦をはじめ、本位田祥男（東大教授）、福井捨一（神戸消費組合長）、間所兼次（消費組合協会主事）らのほか中山日吉、矢上英太郎、金子忠吉といった人々、京都購買組合などが応援、援助したことが記録されている。たとえば、賀川は一九二八年一〇

月四日、さきの法学部教授たちと市内（同志社公会堂——現中学校の同志社礼拝堂、平安教会、洛陽教会、マクリン幼稚園）で消費組合についての講演会を催している。

こうした経緯のなかで、一九二八年八月七日の臨時総会は出資金二円を一〇円に変更し、同志社購買組合を有限責任購買組合同志社消費組合と改称して、本格的に社会事業としての性格をもたせてきたことを注目したい。この理念を支持した法学部の人々（同志社法学会）は同年度組合に一六三七円七四銭を出資をしているが、それを他の出資先との比較においてみると、同志社会計課（二九九〇円）、足利武千代（二九円一一銭）、佐々木久弥（一〇〇〇円）、同志社労働ミッジョン（五六円三九銭）となっており、かなりの部分を占めていることが知られる。また組合員は教職員および広くその推薦者（定款第六条）として、学生以外のこれら有志から「一口拾円」分納で払うことになっていた。

「社会的基督教運動」の一環としてみられる同志社消費組合の学生、教職員たちの生活擁護運動は、このようにして中島重の在職した法学部の同志たち、また学内労働ミッジョンに集まる社会志向の若いグループ、さらに同志社を支える校友、理事の力が地味な形ながら、よく集められていたとみられる。その時期よりこれに専従した組合長、田原和郎（一九二八年九月—一九二九年七月）および藤田萬右衛門の努力は評価すべきである。同志社理事会としては、借財をかかえるこの運動を同志社と無関係のものとして、「同志社」の三文字も取り消させ、市中に転出させようとした。大工原総長と組合との間には深刻な交渉があったが、それは中島辞職後の一九三〇年、三一年のことであった。学内「学生食堂」の問題は今日も論議されるが、これはその最初のものであったといえる。

ともあれ、労働ミッジョンにせよ、消費組合にせよ、また「社会的基督教」の主張などはこれを担う学生たちの直接的な社会行動（社会事業、農民組合運動など）や、教授や牧師、YMCA主事の理論的、思想的啓蒙活動の展開のなかで、この運動は同志社の構内から外へ進出し、いろいろな形に分岐していったという実態もここで見ておかな

ればならないのである。

その点からしても中島重の辞職（一九二九年）を一つの転機として、リベラルで社会的な同志社の精神的風土は、中島自身の社会改良思想の限界も手伝って、国家主義の方向に流れてゆくのである。

そこには、新島襄以来、この学園に培われてきたキリスト教の会衆派的思想（コングリゲーションリズム）とその民主主義が日本の社会主義の種として十分に発芽しえない茨の道があったといえる。

中島重のキリスト教思想とその影響

一九二九（昭和四）年五月二五日、法学部、文学部および予科の連合教授会は理事会の決定を承認した。中島は一三年間にわたり、新島襄の信仰と同志社の自由教育を希求し、これがギルド・ソーシアリズム、多元的国家論あるいは明治帝国憲法中に見られる自由権への探求として、学問的にもキリスト教の自由主義、贖罪愛的社会主義（平等主義）の社会哲学の法的、宗教的一大体系を構築しはじめたのであったが、今やその現場から離れるのである。

同僚や教え子の学生、卒業生たちが「慰労金募集」に立ち上った。しかしこれに対して、理事会側は「中島重前教授に対する慰労金募集文に就て 同志社総長事務取扱 中村栄助」と名付けられた文書を配布している（『校友同窓会報』第三二号に転載）。これによれば、募金運動の趣旨そのものには賛同できるとしつつ、その募金文（配布月日不明）には「過般本社 of 紛擾問題に付、同氏等の之に對して取りたる方法がさも正しくて同志社理事会が飽迄横車を押し通したるが如く述べて居るのは事実相違の甚しき事なり」とある。なお、前記募金文書の中に「同志社よりは、鏹一文の解職手当も、慰労金をも受くることなく」とあることについて、中村総長事務取扱の文書には、その

時の中島の行動、つまり和田武法學部長に辭職願を提出したにも拘らず和田部長はこれを保留して「総長」に提出せず、そのうちに中島が留任の声明書を發表し、その後、大學連合教授会の承認事項としての解職を學校側が「依頼」の形式にしようと和田部長立会いで伝達しようとしたが、今度は「同氏は何故か之を拒絶されしを以て遺憾ながら『本社は同氏の解職に付』何等支給の方法を取り得なかつたのである」と中村は前記釈明文で事態の経緯をのべている。

いづれにしても、無一文同然で同志社を去る中島には、しかしまた新しい決意が靈能によつて湧き上つていた。すでにこの紛争の寸前、彼の代表的著作の一つとされている『神と共同社会』（新生堂、一九二九年）で、階級意識が支配的なマルクス主義に対抗して、「もっと大きい全体意識、宇宙意識」による人間としての営みを提案している。それは社会哲学的、社会神学的提案でさえある。すなわち贖罪に生きたキリストの社会化愛が全てを連帶させ、和解させ、労働者小作人はもとより救いに近いが、資本家地主もまた救われるべきものだと思ふのである。それが不幸にも足許の学園では成功しなかつた。しかし、中島のめざすものは、単に労働者小作人と資本家地主を調停し、妥協させるという政治ではなく、貧しき者が解放される運動を真に「インスパイアする所の、而して社会の一々の細胞そのものを社会化して奉仕と協力の新社会を実現せしむる所の神の国運動を為さんとするもの」という。

そもそも中島が自己のキリスト教信仰を社会正義と犠牲愛実現の生命力として公的にとらえたのは同志社在職中であつた。とくにそれが明らかにされたのは、一九二八年一月に東京帝国大學基督教青年会の四〇周年記念の大会が、単に同大學関係者のみならず、広く全国のキリスト教学生運動の同志に呼びかけて開かれた「全国基督教学生討議会」（於静岡県御殿場日本YMCA同盟学生部、東山荘）であつた。



岩井文男

彼はそこで「基督教と現代社会思想」と題して講演した。そしてこれまでの信仰が個人本位を第一義としてとらえ社会全体本位を信仰の第二義としてきたことに對し、そのような従来の内省的、非社会的なプロテスタント宗教を法哲学者らしく、いささか伝統的な自然法（信仰・理念の社会秩序）の方向に引き寄せて再改革しようとしたのである。

しかしそのようなキリスト教の改革的な動きは、この中島やその周辺の人々の特異なものではなくて、広く世界教會的な傾向でもあった。すなわち、一九二八年三月には、世界のキリスト教會各派の代表が一同に会する世界宣教會議がエルサレムで開かれ、日本からは中島重の關係する大学基督教青年会の代表中原賢次も、他の日本の諸教會の代表たちと共にこれに参加し、キリスト教の歴史的、社会的使命の自覚ということで大きな刺激を受けて帰っている。またそれと共にアメリカの学生YMCAを指導するJ・R・モット(John R. Mott)博士がこの世界宗教會議の推進役(議長)をしてきたが、モットは翌一九二九年四月、同世界會議の決議(人種、労働、經濟援助、農村の諸問題や諸宗教協力への開拓者の役割について)の趣旨を日本においても一層浸透させるため来日している。

そして一九二九年一月に前述の全国基督教学生討議大会が開かれ、中島がその指導者の一人として立たされているのである。モットの世界的レベルで平和主義とキリスト愛の為に展開される青年の信仰や運動が中島を勇気づけないはずはなかった。それはモットの来日を機会として開かれた「日本基督教青年会同盟組織二十五年記念協議会」(一九二九年四月)とその結果として東京に組織された「社会的宗教運動としての基督教学生ミッション」(大井蝶五郎『社会的基督教』一九三三年)が、すでに成立していたキリスト教学生消費組合運動を發展させてゆく全国的キ



賀川豊彦

リスト教学生運動の核となる東京中心の一連の動きに呼応していた。さらに社会福音の伝道者、賀川豊彦の提案する三カ年計画の「神の国運動」もその際に開かれた日本基督教連盟主催「基督教新運動協議会」（一九二九年七月）で、同じくモットにより強く支持され、翌年から同連盟の事業として取り組むこととなった。ここにその後も日本キリスト教史上注目すべき、日本基督教連盟の「社会信条」（同年一月総会）がみられることになるのである。

これは賀川の社会的実践的信仰の組織的展開であったと言つてよいが、中島はまさにこの時、同志社大学辞職の苦難を背負いつつ、正義と犠牲愛のイエスの生き方に一層深く追従しようとしていたところであった。それは前述の滋賀県坂本における同志社労働ミツシヨンの夏期大学で、自らの悩み求めている信仰が賀川の求めるものの中にあることを発見して歓喜の告白をなした翌年のことであった。したがって中島は、その後同志社での体験を良き踏み台として、その社会的法哲学を社会神学的に展開し、「社会的基督教」の学理的骨組をつくつてゆくこととなるのである。

ちなみに、賀川の「神の国運動」を生かす前記連盟の「社会信条」によれば、具体的には、人間の権利と機會の平等、人種及民族の無差別待遇、婚姻の神聖、男女同等の責任、家庭生活の保護、女性の社会的地位改善、少年児童の保護、最低賃金法、小作法、社会保障法、国民保健法の完備、協同組合の奨励、労使協調機関の設置、税制の民主化、軍縮、仲裁裁判の確立、無戦世界実現、といったものであった。

社会科学者である中島重にすれば、このような「社会信条」こそは、自己の学問の全集積を要約するものとして、きわめて実存的に、しかも勇躍して受けとったことである。彼の学位請求の業績にされた『社会哲学的法理学』（一九三二年）の序文にお

いても、「宗教の理解には、基督教仏教を通じて多くの先達に依りて啓発せられたのであるが、就中、海老名弾正先生、賀川豊彦先生等に負う所が大である」と記するほどに、恩師海老名をのぞけば、後の出会いをなした賀川から強烈な印象を受けていたことになるであろう。

歴史的にみても奇しき事であるが、中島の同志社辞職の一九二九年五月より上述のようなキリスト教の社会的主張が、ついには賀川の「神の国運動」の旗印に象徴されるまでに普及した。そしてこの要をなしたものが、その前年（一九二八年）から中島の信仰の同志の身边で展開されはじめた学生キリスト教運動の社会本位思想の盛り上りであった。そこでは個人主義的自由主義の従来 of 欧米型信仰が厳しく批判され、日本で生まれるべき新しい宇宙的、全体社会的神体験のいわゆる「社会的基督教」が主張されてくるのである。

すなわち、先の東大で開かれた「討議会」（一九二八年）に集まった学生たちや教授たちは、「今やマルクス主義と全体主義の間でわれら何をなすべきか」という叫びを上げ、これが翌年春のモット博士の来日によるYMCA同盟の「協議会」を生み、そこから真の学生運動を起すことが切実に求められた。他方、日本基督教連盟の教会運動においても、賀川の「神の国」三カ年運動が、これまたモット博士の支持によって議決されたという事実が、その一カ月後の五月より奇しくも自由の身となった中島に一層活動の場を与えたことは疑えない。

一九二九年七月には中島自身の「イエスに依る生活」（徹底的自己奉獻の他者愛こそ真の自己を他者との社会的な連帯の中で生かす）という提唱をテーマとした全国的な学生集会がもたれた。すなわち、日本基督教青年会同盟主催、第三九回夏季学校（同年七月）がそれであった。

S C M

これはその後研究会活動として各地のキリスト教に関心をもつ学生たちを指導してゆく基督者学生運動（SCM——Student Christian Movement）とな⁹⁰。この中でも中島の「マルキシズムに対

する宗教の立場」の主張、階級闘争主義を否定した宗教的な自己否定による贖罪愛の社会連帯主義が、やがて中島自身を東亜共同体構想に誘導してゆくものとはなるが、マルクス主義一辺倒の立場から距離をおこうとする社会運動として評価され、SCMのテキストとされていたことは注目したい。

そして同青年会同盟の機関紙『開拓者』もこの年から、このSCMの戦闘的なジャーナリズムの傾向を帯びてゆくのである。そして翌一九三〇年の同紙は第四〇回夏期学校の講演を集録して、中島の「キリスト教の社会的立場とその使命」（九月号）、また「社会的基督教と新しき神観」（二月号）が掲載されるほどであった。ここから中島の「社会的基督教」の提唱は全国的なレベルで話題とされることになる。しかしやがて彼らの学生運動（SCM）はとくに関西においては、すでに一九二五年頃より一般の学生運動を指導していた三木清や、福本和夫らのプロレタリア党派性の強い理念（福本イズム）が全ての学生運動を無産階級解放闘争として位置づける中へと、組み込まれてゆくのである。

中島のもとで、この動きに敏感に反応した代表的人物は同志社大学聴講生清水義樹であつたろう。清水は神学を学びつつ、哲学的にマルクス主義を追求し、その共通性を確信して学生間に少なからざる感化を与えた。しかし一九三一年末、SCM京都支部と左翼運動との共同戦線が学生たちの間で結成され、同志社大学学生西川某の拘引事件が起るや、苦悩に耐えかねた中島は、同支部長を引責辞任する（二月）のである。

この頃から、キリスト教本来の姿で社会主義を求める動きがみられる。すなわち、賀川の推薦もあつて中島は一九三〇年より関西学院に奉職するが、生活は厳しく、京都の自宅（上京区塔之段毘沙門町）を移ることもなかった。

そのような中で翌三一年はキリスト者学生運動が本格化（七月二〇日、日本SCM研究会誕生）し、その翌日から開かれた第四一回、前記同盟主催の夏期学校はその知的、内省的傾向を自己批判して中途閉校の事件を起す。それは日本

のファシズムがあつた。「満州事変」(九月)を引き起こして本格化してゆく前夜であつた。「我らキリスト者は行き詰まれる現資本主義社会を揚棄して、より高き共同社会を実現することを一大使命とするものである」との決議(基督教青年会臨時全国協議会、同年一月二二、二三日)が行われたのも、世界平和のため「満州事変の発生を遺憾」として「内外の基督教徒に訴え」(第九回日本基督教連盟の「宣言」、二月一日付)をなしたことも、すべて中島をとり囲む一つの情況として把握できるであらう。

さて、先の第四一回夏期学校において、マルクス主義勢力と共同戦線を組み、「政治運動」化しようとする学生層に中島は批判されつつも、あくまでもこれこそ「宗教運動」であるというとらえ方で、その「閉校」直後(八月二三日)、その出席者のうちから同志を神戸雪内教会に集めて、新しい組織を結成した。参加者は学生を指導していた若手の牧師や大学教師たち(岩間松太郎、末包敏夫、田中左右吉、竹内愛二および、すでに解散していた前記日本労働ミツシヨンの仲間たち)であつた。その過半数の者が同志社卒業生であることにも注目しておきたいが、彼らは、その集まりを「社会的基督教連盟」創立準備会として性格つけた。彼らには学生たちを正しく指導する責任感が充満していた。

そしてこの組織は実際には政治運動化してゆく学生たち(現在もSCM同志の会を続けている岡村信太郎、武田好一ら)から離れた一面があるが、イエスの宗教運動として、またさらに賀川の「神の国運動」の流れをまもって貧民救済の事業やそのための研究、牧会へと輩出してゆく人々を含み込んでいった。

社会的基督教

徒関西連盟

そこで正式に中島を委員長とする「社会的基督教徒関西連盟」が同年九月二四日、京都基督教青年会館(中京区三条通柳馬場角)に五〇名の同志を集めて発足する。事務局は前記中島宅である。な

おこの会の英語のイニシャルは、前記学生運動のSCMと同じだが、これ以後の中島たちのSCMは社会的キリスト教運動(Social Christian Movement)のそれとなつた。

そこで決議された綱領にまず、「我々はイエスに従いて神を人類共同の父と信じ、『神の国』の実現をもってキリスト教徒の根本使命なりと信ず」とする点からしてこの会の目的、性格を知り得る。さらにその実践上の手段、方法についても「イエスの十字架に顕わされたる贖罪愛の実践」に徹し、「自ら贖罪愛の生活者」として、「すすんで全体社会を贖う愛の主イエスに従い、人格形成社会に障害となる現存体制（一切の社会組織及制度）への根本的な改革を試みる者たらしとする。そして新しき共同社会」の担い手たろうとする理想を掲げるのである。

このような傾向が先の学生たち、とくに清水義樹らの求めているものと異なっていることは当然であった。彼らは「社会的基督教の伝道をなすと共にあらゆる分野におけるプロレタリア解放運動に参加」（SCM全国支部責任者会議、一九三二年三月の「宣言」）する方向を開拓した。そこで、「SCM京都支部」長（一九三一年一〇月同中央委員会承認）としての中島は間もなく（同年二月）彼らと離れ、「キリスト教をポジティブに、社会主義をネガティブに」展開するキリスト教社会倫理の実践団体、「社会的基督教連盟」（全国連盟）育成のためその精力を傾ける。

そこで同連盟の結成（三二年）を機に、中島は翌三二年五月より月刊の機関誌『社会的基督教』（平均二五頁、A5版）を発行する。発行人・中島重、発行所・社会的基督教全国連盟（京都市上京区塔之段毘沙門町四六一番地、中島宅）、またここが連盟の書記局となり、石田英雄、竹内愛二（庶務、会計、竹内は三六年二月より廃刊までその自宅に書記局を移し、編集をもち）、高橋貞三、溝口靖夫（編集など、溝口は三六年より）が局員として働く。いずれも同志社卒業生である。執筆陣においても、竹内愛二（筆名岡田山人）、佐藤健男、三浦清一、井伊玄太郎、小田信士、岩間松太郎、和田琳熊、山本是郎、田原和郎、友井禎、大下角一、有賀鉄太郎、原田信夫、榎本修、中原賢次、末包敏夫、竹中勝男、今中次麿、高橋乙治、大井蝶五郎、田中左右吉、榊原敏、菅田吉、賀川豊彦、杉山元治郎、松沢兼人という人々で、同志社教員、卒業生が大半であるが、大井、小田、田中、菅、賀川、榊原などは東京におけるこの運動の推進者、とく

に菅田吉は神学者として、すなわち中島がイエスの贖罪愛実践の歴史的な「社会化」とするに對して、菅は教会の「社会化」として相違するが、協力した人々である。榊原はSCM(學生)の指導者である。また中島門下の高橋(貞)、溝口、石田はもとより、岩井文男、中村遙、金田弘義、嶋田啓一郎、清水義樹、竹内信、栗原陽太郎、涌井安太郎、駒井四郎らも執筆している。同誌は一九四一年一二月号が太平洋戦争の開始時期に、関係当局から思想取締りの対象として警告されたことが一つの動機となつて廃刊される。

戦後は、中島なき後、竹内が中心となり『社会基督教』として五号まで(一九五〇年九月号より五一年一月号)再刊された。ともあれ、本誌によつてこの集団は同志社を組織的な基盤として誕生しながら、雑誌の対象が全国的な広がりを持ち、キリスト教界、知識人に向つたことから、独自のキリスト教社会思想団体となつてゆく。そこには、また同志社を離れた中島や高橋貞三らの立場が、清水などをはじめとする学生運動家層との間に思想的距離を鮮明にしてきたことも考慮される。

また同誌の主張が、とくに中島に顯著にみられるのだが、反資本制の社会主義を志向しつつも、階級闘争主義を超克しようとする結合連帯の全体主義にあり、また東洋的神秘主義に浄化させる共栄圏構想へと政治神話化されてゆくものとなる。そして次第に日本の国家イデオロギーに埋没してゆく軌跡を残したことを指摘しておきたい。

この点で一方は前述してきた闘争史観のマルクス主義を、他方はヨーロッパの弁証法神学(カール・バルトら)のキリスト中心の終末論の倫理を個人的として、英米型の機能的な連帯性と東洋的(といっても静的、非歴史的仏法ではない神道的な)全体社会性の立場から批判してきた論調の経過は見逃せないことである。田辺元から菅田吉に至るバルトの日本的受容に社会的基督教の面々は十二分には対応できなかったことも首肯される。中島の大学時代の恩師の一人に寛克彦(「惟神之道」提唱)がいたことも、その全体観形成と結んで捉えなくてはならない。しかし、この中島

が一九二九年の同志社内での紛争にマルクス主義者に並ぶ危険な思想と行動の教授として扱われていたことは事実である。

社会的基督教の本質

同志社から生まれた中島重たちの「社会的基督教」という一つの小さな社会思想は、「キリスト教主義」、「自由主義・進歩主義」、「大学主義」という柱をもっていた。これはすでに一九二九年に同志社内になされた中島重の演説が高橋貞三の手でまとめられている文書「同志社精神擁護のために」(一九二九年五月四日付)にみられる。すなわち、第一はキリストが物質主義や俗悪成功主義(利己主義)に敢然として一人高く反旗をかがけて徹底的な他者愛のため自己をそこに奉獻したという、同志社の名にふさわしい精神主義の連帯観である。そこで、「金権者流の理事たちが学校を彼ら資本家の意のままに動く、丁稚小僧養成所たらしめんとしてゐる」ことが、新島襄の同志社創立の意義を全く没却させるものだという。第二は永遠に開拓者の精神をもつことで、「却って迫害のさ中に、僅かに豆腐屋の二階で、かくれる様にしてバイブルが講ぜられた」歴史を生かし、逆境の中であえて時代の先駆として、全体社会発展のため進み來ったことを言うのである。そして最後に、一見無用の長物とされる大学で学問的にも一世を指導すべき人物の養成をなすことの意義を「新島先生」の意思として訴える。中島自身、「同志社をその様な学校と確信して今日に至った」と結んでいる。ここにも理想が生きていた。社会的基督教の理想主義が「昭和初期」の軍国主義の国家権力という現実に入入してゆくように、その基点となった一九二九年の同志社精神興隆の訴えも私学の現実の諸相から「石の叫び」に似た状況であつたといえる。

しかしその時の訴えの中には、総長選出規定に關して、同志社寄附行為改正の叫びがあったことにも注目しておきたい。すなわち「紛擾の根本原因は財団寄附行為及同志社職制の不備にある」としてその至急改正の要求をすでに理事会に「了解」させた（文学部および予科教授会、一九二九年五月一日付声明書）というものや、校友（秋守常太郎「同志社校友各位に檄す」五月一日付）より同様の改正が願望されている。また校友の一人で賀川のもとで社会救済運動に走った詩人の高橋元一郎（牧師）も、「同志社憲法（財団寄附行為）の改革（立憲合議制）を目標とす」（同志社聖十字団「声明書」一九二九年五月一日付）といっている。彼はすでに「同志社行政を原則として公選公開の議會制度となすべき仮建議案」を、四月二七日朝中村米助総長事務取扱に提出している。

この件について先の法学部一三名教授団は、総長、学長の選挙選任は「一応学校行政」（法の執行）の問題と認めているが、これを理事会当事者が学園世論を無視して独断的なすことは「教育行政の正道ではない」と判断する。そして密室政治は排するが法改正の動きには組しない。ここからも、後の「社会的基督教」運動に共通する法学的で非政治的な運動原理をみることができるのである。

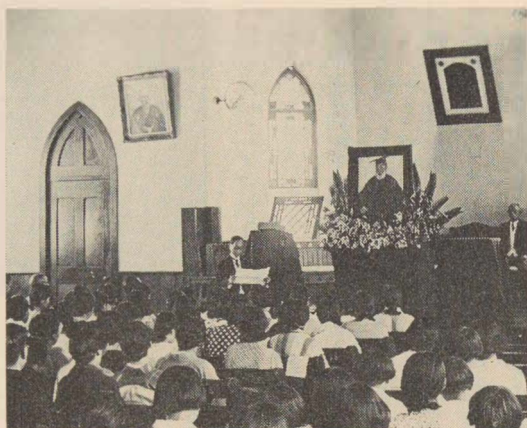
中島重と

さて、第二次世界大戦直後の同志社は戦前の有力教授を再び教壇に迎えたが、中島重も一九四六年壇に立つことができないまま、五月二十九日に永眠した。

同志社

二月、法学部「比較憲法学」の教授として復帰することとなった。しかし病氣には勝てず、一回も教壇に立つことができなかった。五月二十九日に永眠した。

海老名弾正総長に従った中島重の生涯は、同志社で終ることになった。中島の学問的真価を世に問うたのは同志社時代に著した『多元的国家論』（一九二三年）の小著であろう。これは英米仏流の社会学的な機能論（神話批判）の方法論で多元的に国家の職能を論評してゆくものであって、決して権力主義的な全体国家観を許さないもの、それを自由に越えて包摂するキリスト教の法神学的、倫理的社会全体観（神国観）が基底にあった。このような学風



海老名弾正追悼式 (1937年6月)

が当時の同志社大学法学部の、とくに政治学、国家学の学問的地位を世に確立したことは特筆しておかなくてはならない。

要するに中島の社会科学は同志社の気風の中で生まれ育った。すなわち海老名弾正の神秘的な結合全体の神学から、中島自身の贖罪愛実践者(イエス・キリスト)への徹底的、一体化的追従が、東京帝国大学学生時代に受けた科学的分析と目的的综合の方法論的感化と共に、さらに同志社の教壇で出会った講師賀川豊彦を始め前記の同志の人々との共同体験によって学問的に肉づけられていったことは否定できない。

海老名弾正の同志社行政をみるならば、その大きさの中に生活した中島重の同志社的リベラル・アカデミズムとその実践——それゆえにまた理想の悲しさをすでに内包していた——の一面をも見逃してはならない。彼が熱愛を込めて闘った一九二九年の学園からの解職は、彼自身の文章から創立者新島襄の高い精神主義に対する畏敬と同志社を去ることとなった恩師海老名への慕情に助けられていたことは否定しえない。一九三七年七月『社会的基督教』で、彼は海老名を評して、自己の時代への焦燥感をしめしながら告白する、「先生の気魄と見識とを以て若くして再び今の時代に立たしめば、先生は必ずや、我等の暗中模索してゐるとははるかに明確に、力強く、社会的基督教を絶叫せられたであらうと私は信ずる」と。

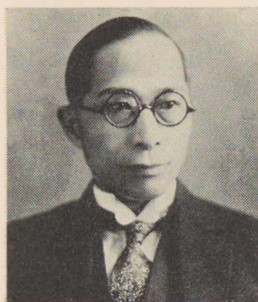
第四章 神棚事件と「国体明徴」論文事件

神棚事件

湯浅八郎総長の就任 この章の対象とする時期は、いわゆる「神棚事件」（一九三五年六月）から「チャペル籠城事件」（一九三七年七月）に至る僅か二年余にしか過ぎない。しかし、この時期ほど時代の支配原理から狂

暴な挑戦を同志社が受けたことは、一〇〇年の歴史の中でも稀であろう。就任間もない第一〇代総長湯浅八郎をはじめ学園当局者の苦悩や、時代の病理が生み出すさまざまな人間模様は、キリスト教学園同志社の「黙示録」時代と呼んでも差し支えないとさえ思えてくる。

発端となる神棚事件はどのような時代の背景から生まれてくるのかを一瞥しておこう。すでに一九三一（昭和六）年九月、関東軍の手によって惹起された満州事変は、翌一九三二年上海に飛び火して上海事変となり、日本軍部の大陸経営への暴走が始まっていた。国内的に見れば経済恐慌・農村恐慌を背景にして起こった前蔵相井上準之助や三井合名理事長団琢磨の右翼テロリストによる殺害に続き、総理大臣犬養毅が海軍軍人の手によって暗殺（五・一



湯浅八郎

五事件〕されるといふ衝撃的な事件がつづいて起こっている。狂信に鎧われた軍部と右翼との急速な台頭が、対外的危機感を国民に煽りつつ、日本はファシズム体制への傾斜を深めていった。軍国主義、国家主義がその精神的基盤をなした国家神道の噴出が瞬時にしてデモクラシー、自由主義、個人主義の思潮を圧し去ってゆくのだが、その最も象徴的な出来ごとが、一九三三（昭和八）年五月の京都帝国大学の滝川事件、一九三五（昭和一〇）年にはじまる憲法学者美濃部達吉の「天皇機関説」排撃事件であろう。

こうした流れの中に、大工原銀太郎総長の永眠（一九三四年三月九日）のち一九三五年四月二四日、第一〇代総長として就任式にのぞんだ湯浅八郎の就任演説を置いて見ると、あたかも激流にさからって同志社は自らの道を歩もうとする毅然としたものがうかがえる。湯浅は新島襄の創業の昔を回顧しながら、次のように語っている。

我等は今、同志社の建設が、校祖の宗教的信念に基づけるものであつた事を忘れてはなりません。同志社は先人生一の幻でありました。神につける冒険でありました。先生は実にこの神聖なる冒険を果敢に神と俱に為されたのであります。斯の故に同志社の校祖は新島先生でありますが同志社の校主は神であるといふ事が出来ると思ひます。我学園は実に神に属けるもの、その御経綸の中に胚胎し、御摂理に導かれて今日あるもの、従つて同志社教育は神より信託せられたる神聖なる事業であると申さねばなりません。何人と雖も之を等閑にし、之を私し、之を害ふことは許されないのであります。

（『同志社第十代総長就任式々辞』）

湯浅はしかし自らを総長として迎える目が決して歓迎のそればかりでないことを熟知せしめられていた。彼の回想は雄弁である。

同志社総長としての第一日目に総長室に入りましたら、事務の人が「きょうの

文書です」と言つて書類を持ってきました。その日に来た手紙などがあり、いちばん上に葉書がありました。その葉書は無名の葉書でした。署名はしてなかった。内容がね、「お前みたいな野郎が、どのツラさげて、のこのこと同志社総長なんてところへ乗り込んで来たんだ」と、こう書いてあるのです。（中略）これが三年間の同志社総長の体験のナンバー・ワンでした。オーメンという言葉がありますね、前兆という意味の。この葉書はまさにそれなのです。

それから毎日のように問題が出てまいりました。いうまでもなく、二千年の日本の歴史のなかで、最悪の社会情勢と言いますか、あの太平洋戦争の前夜なんですからね。日本がだんだんに軍国主義化していく。官僚主義、権威主義、右翼の台頭がはなはだしくなっていく時期です。京都大学では、あの滝川事件がすでに起きていました。滝川事件で、官学における民主的、自由主義的なものを弾圧してしまった文部省、政界、官界、そういうものから見ると、さきにお話しましたように、とにかく滝川事件で黒星をつけた湯浅（筆者注、京大評議員の一人として滝川を守ろうとしたこと）という者が、ところもあろうに同志社に行ったということですね。

（同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想 湯浅八郎の日本とアメリカ』）

滝川事件に対する主体的関与がのちに湯浅の退陣を求めるものの有力な論拠となるのだが、彼の就任演説の中には当時の時代への顧慮が全く見当らない。かえってすでに禁句とさえなりかけていた「自由自治」「デモクラティックな学風」「愛と正義の社会秩序」「四海同胞主義に立つ国際愛」という言葉が、校祖新島襄の遺風の上に立つ同志社の学風であると断言されていて、そのために「暗い谷間」といわれる時代に鮮明な輝度を感じさせる。

私は同志社学園に、自由にして敬虔なる学風の樹立を提唱し、之を熱求して止まぬ者であります。次に学生に關しては、気品あり含蓄ある同志社学生々活の実現を冀求致します。学園生活が同志社の徽章が表徴する様に、



醇化館（武道場）

多角多面、変化の中調和あり、複雑の中統一あり、自制自治以て若き同志社学徒の矜持に価する豊富にして充実したる内容を贏ち得ん事を切望致します。（前出、「同志社第十代総長就任式々辞」）

自由にして敬虔なる学風の確立、この言葉の中に同志社の生命がある、と湯浅は覚悟しているようである。この生命線を守るためには官学追尾の悪弊を断ち切り、学園の理想に献身しなければならない。それがお題目に終ることがないように、財政の基盤を確立し、「共励互助」を支えるべき「同志社に真の生活の保証」を約束しよう。たまたまこの年の秋に迎えるべき創立六〇年の祝典を通して一大募金運動の展開を、と彼はこの日校庭を埋めつくした約五千の学生、生徒、教職員を前にして訴えた。同志社は久し振りにやる気十分の総長を迎えたと言える。

神棚事件

しかしこの日の昂揚した祝典気分の醒めやらぬ中に、ファシズムの第一波が学園を直撃した。それが当時武道道場問題とよばれた「神棚事件」である。事件の渦中舞台となった岩倉の同志社高等商業学校校長鷲尾健治名で、学校当局側の公式の経過が発表されているが、それによると、岩倉の高等商業学校では前年九月二一日に関西を襲った台風のため、校舎数棟が倒壊するという被害を受け、その中に柔剣道場も含まれていたためその復旧工事を急いでいたが、完成を待つて一九三五年六月一日に工事請負者より受渡しを完了した。その際、従来旧道場の正面に掲げられてきた新島襄の肖像額を再び掲げる方針を決め、その旨関係者に通達しておいたところ、一部の剣道部員は六月一日夜無断で神棚を安置し、また一柔道部員もこ

れに同調しようとした。このことは六月二日朝になって学校側（喜多直之助剣道部長）の知るところとなったが、恰も同日は剣道大会の開催日に当たっていたため当日は不問に付され、同月三日に至って報告を受けた鷺尾校長が事情を剣道部理事学生に徴したという。神棚は設けたが厨子の中には神体が納められていないということであった。そこで校長自ら「本校の教育の精神」を詳しく説いたところ生徒は素直に納得し、自発的に神棚を取り下げることを約し、当日夕刻このことが実行された。

以上の経過を見る限り、事件は当時学内的には処理されている問題でしかなかっただろう。しかし、このあと配属將校三浦国雄中佐が登場、彼の強硬な介入が局面を一転させ学園は未曾有の騷擾に巻きこまれてしまった。

鷺尾校長は事件の処理を見た日の翌四日、三浦中佐に神棚問題につき面会を求められている。この日は校長より事情の説明を受けた三浦は、「判りました」と明言して辞去したというが、翌五日、第三学年の軍事教練にあたつて再び三浦より次のような申し出があったという。「剣道部の理事が御厨子の中に御神体を御納めせずと云いしは誤りにて、最初より之を御納めせり。よつて之を取り下ぐることは甚だ不都合なり。是非神棚を挙げられたし」と。

パンフレットの形で配布された鷺尾校長の経過報告は、控え目な表現ながら三浦中佐の学生煽動の事実と偏狭な態度、そしてそれがついに学内問題の枠を越えて時のジャーナリズムの恰好の話題となつていく経過にふれてゐる。

このことがついに新聞報道として大々的に取りあげられた六月二日朝、鷺尾校長は全校生徒を二回に分ち、自ら事件の経緯とその真相とを訴え、この際生徒の本分を誤らないように訓している。生徒がよく冷静に事に処するという態度を見せていることが、わずかに校長の心事を和らげたことであろう。同日朝の新聞の一部を挙げて見よ

う。六月二一日『京都日日新聞』朝刊は「同高商の武神撤去事件」という大見出し八段抜きの報道を行なっている。

洛北岩倉のミッシン・スクール同志社高商内に捲き起つたキリスト教主義と神道の相剋。即ち新築道場に祀られた武神の撤去問題は、時節柄意外の反響を呼んで、世論嗷々一学園内の問題に止まらずして教育界宗教界にまで大きく波紋を描かんとしている。

と冒頭におかれたこの記事の中の、両者側の談話の要旨をそのまま引用して見よう。

▽学生は別に騒いでゐぬ

鷺尾同高商校長談

全く困つた問題です、祭壇を撤回するに至るまでの事情は御承知の通りですが、私の方で撤退させたのはその手段方法に対して非合法だつたからです、勿論新装道場に校祖新島先生の肖像を掲げて、祭壇に代るべき神聖を表現すべき意向であつただけに、今日の結果をみたことは心外です、その間の事情を学生達は承知だつた筈ですが……私一個の考へでは道場といふものは祭壇がなければ道場でないといふ風には考へてゐません、もつと自由に、もつと深い信念があるべきだと思ひます、……学生も別にこの問題について騒いではゐません。

▽国体精神に反する 反省せねば引揚も已を得ぬ

三浦配属将校の談

道場に神棚を掲げさせぬといふことは、敬神崇祖を根本主義とする我國の国体精神に反することも甚だしい、軍部当局が学生に軍事教練を課したのは、単に教練ばかりに重点を置いてゐるのではなく、敬神崇祖の国体精神をも涵養させるにある。然るに学校当局はこれを無視して只柔剣道部員が学校に無断で神棚を掲げたことは校規に反するとの理由一点で、今尚反省せぬのは誠に怪しからぬ、今日（廿日）鷺尾校長に再度猛省を促すため面談し

たが、その理由とするところは前と違ひ更に悪く、校祖新島襄先生の写真を掲げても神棚は掲げられぬと述べられ、聞き棄てならぬ一言だつた、……今後なほ猛省するところがないならば、協議の上、学校から引揚げるより致方がない。

鷲尾校長には苦渋の色の中にもまだ毅然としたところもある。これに対して三浦中佐の態度の中には軍部の強権を背景にした威丈高なものをしか見ることではない。問題はそれぞれ同志社当局と、師団司令部の中にもちこまれた。当時の新聞の報道を見ると、師団司令部側には三浦の態度を否とする良識も半数を占めていたようだ。二一日付『京都日出新聞』の夕刊は「師団側も協議、二派に分れて纏まらず」という見出しで、「同志社高商校長の敬神の念のないのも甚だしいと極度に憤激するもの」と、「学校精神と軍人精神との意見の一致しないのは或いは当然かも知れない」との二派に分れ、最終的決意を定めることができなかったと報道している。その師団側の態度を、にわかに硬化させたのは、六月二一日、緊急に招集された同志社の教育部会の意外に強い態度であつた。教育部会の招集者は湯浅総長であつたが、本部における五時間の協議の末、『京都日日新聞』の報道によると、次のような結論を出した。

校祖中心主義に基いて初期の方針通り道場には新島襄氏の肖像を掲げ、配属将校の指摘する三宅八幡の神体を撤去せしめたことに対しては、一部学生の公明を欠く手段によつてなされたことに起因してをり、学校としてはこれを以て国体精神に反するとは思へない。日本精神と同志社精神は完全に一致してゐるものである旨を力説して軍部の諒解を求めるとともに世間の疑惑を一掃することに大体意見の一致を見た。(六月二二日付)

しかし、その下段に、校長の態度が意外に強硬のため「師団側俄かに硬化す」と見出しがある。

師団側にして見れば、学校当局の穩便な妥協案を予想していたのであろう。あくまで新島像にこだわるとあれば

配属将校の面子もあることだ。中藺参謀が東上して陸軍省に報告の上、最終的に配属将校引き上げの手段をとる、と態度を決定してしまった。第二の「上智大学事件」と新聞が騒ぎ立てたのも、その前年に神社参拝拒否問題で上智大学の配属将校が引き上げ、これによって学校側が屈伏したいきさつがあったからである。配属将校はもとと一九二五年四月の「陸軍現役将校学校配属令」によって中等学校以上の学校の中に機能していた。当初は激しい軍国主義教育反対の烽火が上ったが、一九三三年八月、滝川事件の余燼の中で起こった東京帝大の配属将校増員拒否を最後の戦いとして、以後正面切った反対は望むべくもなかった。陸軍省が配属将校を引き上げるならばその学校の生徒は徴兵猶予の特典をうばわれる。幹部候補生となる資格も剝奪されてしまう。同志社に集う男子学生生徒の不安も大きいであろう。それは国家権力の庇護からの完全な決別であるからである。

「配属将校或は引揚」か、という見出しで六月二二日『大阪毎日新聞』の報道のあった当日の午前、湯浅八郎総長と鷲尾校長は連れ立って伏見の師団司令部を訪れた。湯浅は「話せば分ってもらえる」と信じこんでいたようである。

「話し合へば分ることだ」という見出しで、『京都日出新聞』は彼の談話をのせている。

同志社のキリスト教的精神の中には厳として敬信崇祖の念が存在してをり、我々日本民族として神を崇め祖先を尊び国を愛するの念に於ては少しも変らない……然し同志社には同志社としての方針があり校是がある、神棚を道場に設置するかしないかの問題は形式の問題であり、同志社としてはその形式をとることが出来ないことになるかも知りません、配属将校にも或は軍部の方にも又一般識者にもよく話をすれば理解して貰へると思ひます。

このことは湯浅の戦う姿勢であったのかも知れない。和田洋一は書いている。

六月二日の午前、二人は師団司令部を訪れ、河村少将等と会見したあと、自動車で同志社に帰ってきたが、そのときの場景を、筆者は今でもまだはつきりとおぼえている。二人をのせた車は黒の大型でオープンだった。当時オープンには珍らしくもなかつた。私は車に近より、のっている二人の表情を通して、会談の結果をよみとろうとした。今出川御門の前で車は一時停車していたが、初夏の陽光がギラギラする中で、黒の三つぞろいを身につけた湯浅は、前方を直視し、肩をはって昂然としていた。会談をおわって、ほっとしたような様子はなく、たたかう意志、たたかいつづける意志をそのときの私は感じとった。『湯浅八郎』『同志社の思想家たち』一九六五年

しかし会談は不調だった。司令部は数日前の態度を、強硬一本やりにあらためていた。湯浅はじめて無言の権力機構の重圧を感じとったに違いない。彼はインタビューにきた記者に向かって次のように語っている。

私は同志社の教育精神についてお話し上げましたが、師団側では事情はどうであらうとも柵をあげたらうからうといふ御意向のやうです。『大阪毎日』六月二日夕刊

非常に重大な問題です、六十年間新島襄氏の精神によつて培はれて来た同志社が今かうした形によつて一つの困難にぶつかった。『京都日出新聞』二二日夕刊

問題は深刻な様相をおびて翌二三日の理事会にもちこまれた。けれどもすでに軍部の態度が硬化化してしまっている以上、どのような解決の曙光が見えるというのか。当日の理事会は遂に軍部の意向に屈伏し、ジャーナリズムの注視の中で同志社は「柵」を新学期より設置することに決定したのであった。

「道場の柵問題、朗らかに落着 柵を掲げること決る」と、翌々日の『大阪朝日新聞』は報道しているが、湯浅と理事会の心中は決して「朗らか」ではなかつたに違いない。

「国体明徴」論文事件

問題の発端

神棚事件の経緯は、軍部の強硬な介入によって一応の落着を見たけれども、この事件の背後には、洛北青年同盟や興国青年同盟という地域右翼団体が「国体」をふりかざして蠢動した事実があったことに注目して置きたい。

日本における抵抗の存在を最終的に侵食し、抵抗の事実そのものを陰微なものに追いこんだのは、「国体明徴」のかけ声であつたと言われる。権力の直接的な攻撃に対しては日本の知性はあるかに顕在的な抵抗を示すことができたであろう。たとえば戦前の思想弾圧のメルクマールと言われる滝川事件（一九三三年）における抵抗の花々しさがそれを物語っている。それと同じエネルギーの発動が、なぜ美濃部達吉の天皇機関説事件（一九三五年）には見られないのだろうか。学説に対する権力の介入という点ではこの二つの事件は同質のものである。滝川教授を擁護した知性の結集は、その些を完全に占領しつくされていたこともあるだろう。けれども美濃部達吉を孤立に追いこんだのは、この学説が「わが国体にもとる」という政府見解の表明と、この見解そのものをもつタブー性にあつたのではないだろうか。タブーは共同体秩序の神聖を維持するための呪術的原理である。これに触れないかぎり、すべての思想は寛容によって包まれる。しかしこれに敢えて触れるものは死によって酬われる。権力とこの呪術との融合は、日本が破局にのめりこんでゆく過程の中でふたび大きく機能した。国体明徴問題は一九三五（昭和一〇）年三月、美濃部事件で揺れた衆議院において「国体に関する決議案」すなわち、「国体ノ本義ヲ明徴ニシ、人心ノ帰趨ヲ一ニスルハ、刻下最大ノ要務ナリ、政府ハ崇高無比ナル我国体ト相容レサル言説ニ対シ、直チニ断固タル措置ヲ

取ルヘシ、右決議ス」の採択となった。中島健蔵はその折の衝撃を次のように録している。

それまでは、ますます政治の波がゆれ動いているにしても、そこに首を突っこまず、口を出さえしなれば、完全に第三者でいられたのである。つまりそういう中で右でもない、左でもないというところに身を置いていた人間が、国民の大部分をしめていたのであるが、この決議と政府の声明によって、局面は一変したと考える（『昭和時代』岩波新書）。

つまりそれは、政府によって巧妙に仕立てあげられた思想的「踏み絵」であって、国民の一人一人がその前に自己の断罪の幻影に脅えながらひき出されたのだと彼は言っているのである。権力による異端審問といいかえてもよいのではないか。そして目をさましてこの法廷に立つことによって、知性はどのような代償をはらわねばならなかったのだろうか。

神棚事件に揺れた一九三五年を送り、一九三六年を迎えた同志社に、はからずもその存立を揺さぶるような学内紛争が再燃した。いわゆる「国体明徴論文掲載拒否事件」がその発端である。『同志社九十年小史』によるとこの事件は次のように説明されている。

『同志社論叢』第五一号のために「日本国民社会科学の建設と国体の事実」と題する論文を法学部の一助教授が寄稿しようとしたのであるが、論叢の編集委員は右の論文が「国体ヲ明徴ナラシメントスル点ニ於テハ吾人モソノ信念ニ於テ変リハナイガ、右論文が徒ラニ他ヲ誹謗スルノ態度アルノミナラズ、學術論文タルノ体裁ヲ有スルヤ否ヤニ関シ疑問アリ」という理由によってその掲載を拒否したのであった。この処置を不満とした助教授はまた、次のような声明書を發表して編集委員を攻撃したのである。すなわち、本稿は、同志社大学法学部機関雑誌『同志社論叢』第五一号のための指名寄稿である。然るに同志編輯委員は不当にも本稿を以て「徒らに他を誹謗

せるもの」と断じ、且つ「學術論文たるの体裁を有するや否や」の疑ありとなし直ちに同誌評議員会の問題にした。即ち、評議員会は三日間に亘りて討論を続けたが遂に僅少の差を以て掲載拒否の決定をした。惟うに教授団所属の一員の指名寄稿に対し斯くの如き運命を与へたるは同誌発行以来未曾有の事である。掲載拒否論者は概してマルキスト及び其のシンパである。(中略)要は、国体中心の社会科学が学問的に非ずといふにある。一般社会科学界に国体明徴の学問的進出を阻みこの種言論の圧迫を敢へて為すものと見るの外はない。

『小史』は名前をあげていないけれども、ここでは以後の経過を説明するのに不便であるので実名を挙げることにする。この論文の執筆者は、『我等ノ同志社』(同志社校友会同窓会編・同志社創立六十周年記念誌)の人物点描に「その巨軀をファシズムのイデオロギーで包み」と紹介されている野村重臣助教教授であり、編集委員としてこの論文の掲載にはじめに疑義をはさんだのは松山斌教授である。この論文は二月一七日の評議員会で一一对五で掲載を否決された。ちなみに『同志社論叢』は一九二〇(大正九)年三月に第一号を発行したが、その年輪は同年の「大学令」による同志社大学の開設とともに古い。

先にもふれたことであるが、同志社のアカデミズムが画期的な躍進の勢いを示した時期が大正の後半期におとずれた。林要、長谷部文雄、河野密、高木庄太郎、恒藤恭、阿部賢一に加えて、当時第八代総長であつた海老名弾正の本郷教会時代の教員であり、またその主宰する『新人』同人として活躍した人々、すなわち中島重、今中次磨、山本亀市、古屋美貞、住谷悦治が相ついで就任したことがその活況の源泉であつた。『同志社論叢』はこの産物であり、学界に対する評価も十分に定まっていたものである。編集委員の慎重な態度も諒とせられるところであろう。

ただしこの問題には一つの大きな底流が伏在している。一九二九(昭和四)年春の学園紛争である。今このことを

詳細にする煩は避けたいけれども、寄附行為の改訂問題、会計上の不正事件、岩倉土地買収問題およびいわゆる御大典当時の有終館失火により引責した海老名弾正の退任問題を、理事西村金三郎の独裁的行政とその弾圧であるとして、大学の自治擁護の名で立った法学部の一三名の教員（中島重、能勢克男、住谷悦治、高橋信司、高橋貞三、難波紋吉、松山斌、林要、長谷部文雄、宗藤圭三、和田武、石田秀一郎、田畑忍）のストライキ参加、これをめぐる不参加教授との対立抗争の表面化がこの事件の核心である。この時同志社は中島重、高橋貞三、高橋信司、能勢克男らの人材を失った。そしてあとには法学部内の左右両派の対立という黒い遺産がのこった。

就任の時、「自由にして敬虔なる学風の確立を」と熱求した湯浅には、いつかはこの禍根を一掃することの悲願があったらしい。彼には彼なりの理非曲直の判断の基準があったのだらう。和田洋一は次のように書いている。

一方、大学の法学部教授会は、内部が二派に分裂したまま、一九三五年の春、湯浅新総長兼学長を迎えたが、一方の派が新総長を自分の側にひきこんだのか、あるいは、新総長自ら判断してその派を支持したのか、外部の者にはよく分らなかったが、いずれにしても新総長は一方の派を味方、一方の派をはっきり敵としてしまった。敵のグループの中には、リベラルな人もいたが、保守反動もいたし、国策に迎合する人もいた。そして全体としてこのグループは、研究業績の上で反対派（つまり総長派）のグループに劣っていた。反対派のグループの中には、自由主義者もマルクス主義者もいたが、湯浅総長がこれを可成り公然と支持したため、湯浅総長の敵は、総長を赤だといひだした。学外の右翼団体がその機会に動き始め、湯浅総長排斥のパンフレットを作製してばらまいたり、脅迫めいたことをやりだした（和田洋一「一九三七年夏の同志社チャペル籠城事件」『キリスト教社会問題研究』第八号）。

いずれにしても湯浅は結局野村助教授を、「学問識見共に大学教授たるに適せず」として解職処分にし、同時に

野村を擁護し共同の戦線を張った教授団の指導者古屋美貞教授を「学内の行政について当局と意見を異にしかつ自己の主義実行を強要した」という理由で退職せしめた。古屋の解職については『同志社問題批判』（大学擁護叢書 第一輯）という小冊子の中で山部隼介は、「ところでこの二人は何故臧首されたのであるか。これは先にも一寸触れたように、ストライキ不参加組が参加組とは勢力の均衡を得た機に乗じ、新総長を不参加組に抱き込むことによつて、一挙に、参加教授一派を追ひ出し法学部内の指導権を獲得せんと企図したところにあつた。この暗躍の先頭に立つて活躍したのが外ならぬ古屋美貞教授、野村重臣助教授の二人であつたのである」と説明している。

当の古屋は『我等ノ同志社』の中で「同志社風景一束」という随想風の一文をのせ、その中で湯浅の「自由にして敬虔なる学風の樹立」という一節にふれ、「これではつきりしたと思つたら、思ふ方の認識不足。まだまだブツブツいふものがあると聞く。曰く、マルキシズムはいけません、とはまだいふてないから、その抱懷、宣伝は依然として自由であると。なるほどネ……だが、いかにも三百的だ」と書いている。マルキシズムとあつて名差しはされていなければならない、これは林要をさしていることは明らかであろう。同じページに林要の「最後に笑ふもの」という一文が寄稿されているが、その含蓄あるファシズム批判の一文と好対照である。

吾々は余りにも多くの自由を保證され、いまや遂にあらゆる自由を禁圧する「自由」までを謳歌しなければならぬ世の中となり、ともすればラヂオ体操の号令に合せて飛んだり跳たり考へたりしなければならぬ有様である。ところで、この号令どほりに職に就いたり飯を食つたりできない失業者やルンペンが無暗にふえるのを一体どうしたらよいのか？ もとより今日「人格の独立」をもち「意志の自由」を認められた人間がルンペンにならうと餓死しようと、それは自分の責任であつて国家の負担すべき責任でないこと、あたかも工場で日用品が作られやうと殺人光線が作られやうと敢て国家の関知するところでないのと同然である。

この二教授の解職問題と湯浅の決断的行為とは、「国体明徴」問題とからみ合わされて遂に最終的に同志社の学園を軍部の支配にゆだねしめる渦紋のひろがりとなっていく。

二教授解職問題は一般にどのようなうけとられたのであろうか。『大阪朝日新聞』の一九三六年四月一四日付京都版はこれに関して次のような記事をのせている。

伝説を誇る同志社は、一両年立命館に押され気味であったが、昨春湯浅先生の総長就任以来回生の意気に燃えてきた。着々刷新が行はれつつある。同大を弱めたものは学校騒動であったが、湯浅総長は固い決意の下に禍根を絶つ工作に取りかかられたと聞く。大学にとって一ばん邪魔になるのは大学の内部に巣喰って内部から大学の本質を啄むもの、即ち時流を追って権勢に阿ねる学者である。それにしても同大学生諸君に望ましいことは、この際あくまでも沈着な態度を持し、正邪の判別を誤らず、正に味方し邪を斥ける者に力を添へることを心がけて貰ひたいことである。

さらに数日をへた『大阪毎日新聞』四月一八日京都版は、由比黄二の署名入りで「同志社のために」を書いてゐる。

年若く頭脳明晰しかして真の新島精神の継承者として湯浅博士の全人格は、非常時同志社学園にとって『生命の烽火』と云うていいほど、期待されるものであった。われわれの期待に背かず博士の手腕は今や現実には現はれた。「同志社の癌」の最初の手術が行はれた。われわれの喜び——真に同志社学園を愛する者にあらずんばこの喜悅は分るまい。

筆者はともに同志社の出身者と思われるけれども、両者とも湯浅の措置を学内刷新、肅学の一步として評価している。けれどもこの肅学は、「同志社の国体不明徴事件」という名の下に、洛北青年同盟、大日本生産党、愛国青

年会、西陣青年同盟、京都帝大清明会、愛国公正会、労働同盟京都支部、興国青年同盟、在郷将校有志をそれぞれ呼称する右翼愛国同盟を激昂させ、これら諸団体を中心に退職教授をふくめた怪文書が学の内外にみだれとぶとう大混乱が始まった。これらのうちの一つを抜粋的に収録してみよう。

全同志社学生諸公に檄す!!!

親愛なる全同志社学生諸公! 今日諸公は関知すると、否とにかかはらず、社会的糺弾の俎上に上つてゐる。今日迄、幾度か惹起した不祥事件は、我々の光輝ある同志社の歴史を汚せしのみならず、剩へ、我々の先輩が尽くして来た国家的貢献の数々も、一部左翼教授や、社民の一連の亡国的策動に依つて全く水泡に帰せんとしてゐる。今般野村助教授が同志社論叢に発表せんとした「日本国民社会科学の建設と国体の事実」と言ふ論文が左翼教授及び之を庇護せる拜欧毎日の自由主義一連の教授に依つて拒否された事に端を発し、古屋・野村二教授の罷免となり、引いては、同志社が「国体明徴国体顕現」てふ国家総動員の大運動に反対した事は、歴史の必然日本民族の飛躍を拒否する亡国的態度として識者の憤激的となり、或は「左翼教授の巢窟」と迄極言せられて、一般国民の反感を買ひ、又当局の峻烈なる忌憚に触れて、今や、我等の同志社は「浮沈」の最後の危局に直面してゐるのである。……同志社の根本的刷新を断行する以外に最早や道はないのだ。又これこそ我等に荷せられた重大使命なのだ。マルキスト社民亜流教授に依つて占拠されてゐる変態的同志社を、真に「飛躍日本」を指導すべき學術維新の学府として再建する事こそ、真に「新島魂の真精神」を生かし、又同志社更生の唯一絶対の道たる事を自覚せねばならぬ。……敢て檄す一、即時学生大会を開催し、学内刷新を謀れ! 一、野村・古屋教授と、林・田畑等マルキスト教授との立合演説を要求し、真相を知れ! 一、事件の責任者及び湯浅総長及び此れを庇護する一連の引責辭職を迫れ!

昭和十一年四月廿九日

同志社卒業生有志

洛北青年同盟本部

これらの文書の中で、野村重臣自らの手になる「林要はマルキストである」という一〇銭パンフが事柄の本質を語っているようだ。要するに林を「赤化教授の巢窟」の中心にすえ、総長湯浅の「兇虐思想」とむすびつけることによってねらい打ちにし、失地の回復をはかったのである。湯浅はここでは滝川事件の時の態度がねらわれている。

右翼の動きは直接権力の中枢に及んだ。五月五日、大阪八月会を代表して吉田賢一、高山久蔵の二名が「建白書」をふところに文部省思想局長、内務省警保局長、首相官邸を歴訪、陳情に及ぶ。建白書は同志社の「非国体的教育方針」の例証として神棚問題から論文掲載拒否事件を報告、

其の影響する処在学五千の子弟に止らず、実に非常時局に於ける文教刷新上、忽諸に附す可からざる重大問題にして、まさしく其非国体的違非の根本的に糾さるべきは言を俟たず、因りて此際政府当局は緊急其の声明する処に従い断然之れを処理し、文教刷新の実を挙げられん事を要望す、右建白す。(中川裕『同志社ヲ暴露ス』昭和一年六月)

と結ばれている。ここに至って湯浅の苦衷はきわまってくる。林要は『同志社時報』(第一五号、一九六五年)誌上に当時の想い出を書いている。

一九三六年、昭和十一年の二・二六事件のあと、わたしもやめることになった。千円ほどの退職金をもらった。そのまえから湯浅総長にわたしの進退はまかせてあったが、五月七日、もうこれ以上は守れないから(傍点

筆者）といわれて正式に辞表を出したが、四月もすぎ五月の声をきいてから、あらためて辞表をもとめられたのは、せめて一と月分の給料でも保障してやろうとの総長の好意によるらしかった。（中略）わたしのサヨナラ講義のあるとき、運動場では軍事教練をうけるクラスがあった。わたしのやめることが、その日の朝の新聞でわかったので、教練のクラスの学生たちも、教練をすっぱかして、わたしの最後の講座になだれこんだ。気の毒に、その学生たちは、あとで軍事教官から、ひどいめにあったそうである。

「もう守れない」という言葉は守ろうとする姿勢のあるものの言葉である。クリスチャン湯浅がマルクス主義経済学者を守ろうとした事実は評価されてよいことであろう。しかし林要は去った。

右翼の攻撃はなお執拗を極める。五月一四日、折からの特別議会で江藤源九郎代議士によって「同志社問題」が文部大臣に詰問される。翌日、大阪八月会、洛北青年同盟代表者の総長訪問、次のような退任要求決議文（中川裕『同志社ヲ暴露ス』の手交がなされた。

決議文

曩ニ神棚問題、御真影問題ニ付テ国体ニ対スル理解ノ不十分ナルヲ暴露シ、京大滝川問題ニ於テ左翼シンパ的傾向ノ濃厚ナルヲ実証シタル貴下ハ今マタ、マルキスト林要教授一派ノ策動ニ呼応シテマルキシズム反対者古屋美貞教授、国体明徴ノ主張者野村重臣教授ヲ職首セリ、教学刷新日本精神ノ作興ヲ目下急務トスル非常時日本ニ於テ貴下ノ如キハ一日モ青年国民ノ訓育機関タル総合学園ノ当路者タルヘキモノニアラス、ヨツテ八月会ハ貴下ニ次ノ要求ヲナス

一、同志社大学法学部ニ於ケルマルキスト教授（林要、田畑忍、具島兼三郎）及国体明徴論文ノ拒否事件ノ責任者（松山颯）ヲ職首スルコト

貴下ハ今度ノ不祥事件ノ責任ヲ負ヒテ同志社総長兼大学長ノ職ヲ即時辞スヘキコト

右決議ス 昭和十一年五月一日

八月会

同志社総長兼大学長 湯浅八郎殿

右の決議文の日付は五月一日である。それを林要の退職後の一五日に手交するということは、林さへ辞職したら、という湯浅をのぞく関係者たちのひそかな幻想を打ちくだくものであった。

攻撃はますます露骨となってきたのである。前後するけれども、右の決議文中にふれられている「御真影問題」は前年の秋におこった。このことに関しては退職教授瀬川次郎および村井藤十郎連名の声明書（一九三七年二月三日付・湯浅総長退陣を求める性格のもの）の中の文章を引く。

この神棚問題後、其の年の夏期休暇に、湯浅総長は法文、予科の緊急教授会を召集して、所謂、御真影奉戴問題を起こすに至った。要は、同志社大学が御真影を五十年間も奉戴しなかったが、軍部が正式に意思表示をなす前に「軍部に先手を打って奉戴せん」という如き、奉戴の真意誠意の那辺にあるやを疑わしむるものがあったのである。

当時少壮の教授として渦中にあつた和田洋一は次のように述べている。

同志社はこのままゆくとつぶれるのではないかという不安が、三六年から三七年にかけて学園をおおっていた。このままというのは、湯浅総長があのように頑張っていたのでは、ということであった。林教授がやめただけではやっぱり駄目だ、総長がやめなければ、攻撃の火の手はおさまるまいと教職員の中では小さい声でささやき合うものもいた（和田洋一「一九三七年夏の同志社チャペル籠城事件」）。

「勅語誤読」事件

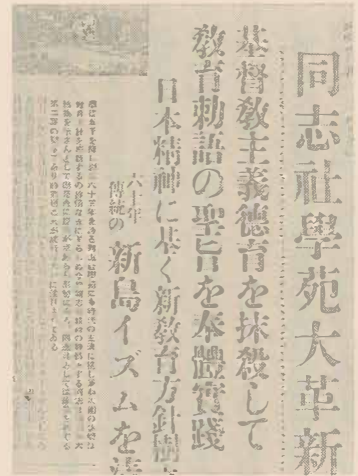
たまたま一九三七(昭和一二)年二月を迎えた同志社では、紀元節を迎えて総長の「勅語誤読」事件がおこった。本文の間違ひではない。最後に御名御璽「ぎよめいぎよじ」と読むべきところ

を彼は「おんな、みしるし」と読んだというのである。湯浅はこれについて誤読ではなかった、と語っている。

この事件は、実はあまり馬鹿馬鹿しい、つまらないことで騒ぎたてるから、この際一つやつつけてやろうという、わたくしの小児病的な現象と関係があるのです。まあ、レジスタンスですかね。(中略) いちばん問題を起しているその軍人たちにたいする勅諭には「御名御璽」とはあるけれども、「御名御璽」では、徴兵でとられて来ている農村の青年たちにはむずかしすぎてわからないんですね。それだから、何と読んでいたかというところ「おんな、みしるし」なのです。(中略) わたくしも、一つそう読んでやろうと思った。もちろん、そう読んだら、必ず問題を起す。そして軍人がいちばんうるさく言ってくるにちがいない。だからね、軍人が文句を言ってきたら、逆に「あなた方には、それじゃ、陛下は何と読めとおっしゃっているのだ」と言ってみよう(同志社大学アメリカ研究所編、前掲書)。

ピューリタンの家庭に育ち、アメリカの農場で長く働いた経験をもつ湯浅にとって、余りにも時代の病理を顧慮しない不用意なアイロニーの駆使である。果たしてこの事件は新しい総長攻撃の火の手となって燃え上がった。愛国団体の代表が日本刀を引っ提げて総長室に押しかけ、湯浅に速やかな退陣を求めるといふ事件も教職員の耳に伝わってきた。いわゆる二・二六事件の勃発で国内が異様な昂奮と緊張に包まれたところである。湯浅が身辺に危険を感じ、また彼に心を寄せる学生が自発的に警備を申し出、湯浅を感激させたというエピソードも伝わっている。

「同志社教育 狂信的な学内配属将校草川靖中佐が公然と挑発的活動を始める。草川は同志社綱領第三条の「綱領の」制定 志社はキリスト教をもって徳育の基本とす」の改正を総長に迫り、学生を前にして同志社のキリ



『京都日日新聞』
(昭和12年3月3日夕刊)

スト教主義、自由主義の排撃を叫び始めた。

すでに勅語誤読事件以来ひしひしと学内に充満した危機感の中で、湯浅の苦悩は深まった。同志社綱領改正問題では、同志社はすでに苦渋を味わっている。かつて横井時雄社長時代、徴兵猶予の特典をうるため、綱領中の第二条の末項および第六条を削除して、学園に大きな混乱を惹き起こした記憶もある。しかし今回は同志社の船体は大きく傾き始めている。同志社がぶつかった最初の暗礁は「神棚問題」であった。つづいて「国体

明徴」「御真影」「教育勅語」である。今は最後の砦である「本財団ノ維持スル学校ハ基督教ヲ以テ徳育ノ基本トス」という綱領が挑戦されはじめている。この激流に掉さして不易の綱領を操守し、学内を混乱に陥れないために何らかの方策が立てられねばならぬ、と湯浅は苦慮し、その挙句自ら筆を取って練り上げたのが「同志社教育綱領」であった。この草案は一九三七年二月二五日の常務理事会で正式に承認をうけ、三月三日午後五時を期して発表されたものであるが、その内容は次の五カ条である。

- 一、同志社ハ敬神尊皇愛國愛人ヲ基調トシ之ヲ貫クニ純一至誠ヲ以テスル新島精神ヲ指導原理トス。
- 一、同志社ハ教育ニ関スル勅語並詔書ヲ奉戴シ基督ニ拠ル信念ノ力ヲ以テ聖旨ノ実践躬行ヲ期ス。
- 一、同志社ハ基督ノ真精神ヲ信奉ス。
- 一、同志社ハ敬虔自治日新中正ヲ以テ学風トス。
- 一、同志社ハ良心ヲ手腕ニ運用シテ国家社会ニ貢献スル人物ヲ養成スルヲ目的トス。

この新「教育綱領」の制定について、一九三七年三月五日付『中外日報』が湯浅の心根をほぼ正確に伝えていると思える。

湯浅総長は語る

この「綱領」は従来の財団機構の第三条にある方針を變替するものでなく、従つて六十年の方針を一步も變えるものでもなく、新島精神を抹殺したり基督教精神を放棄するものでもない。同志社が教育勅語渙発以來これを奉戴してその実現につとめ來つた教育方針を、時代に應ずる表現で表明したまでである。(傍点筆者)

しかし日本におけるキリスト教の死命の鍵をにぎるものとして同志社の動きをつぶさに追つてきた『中外日報』は、この「綱領」發表をもつて「同志社の自殺？」とかかげ、次のように報道し批判した(三月五日付)。

創立六十余年の歴史と伝統をもつて関西に於ける私学の權威たる同志社は、明治二十一年九月に制定された財団機構の中の第三条「同志社は基督教をもつて徳育の基本とす」とあるため種々なる疑惑を生ぜしめ、誤解を招く如き傾きがあるので、これらを一掃するため種々なる既報の如く予てより教育綱領の成文化を企てつゝあつたが去る三日午後五時之を一般に發表した。……過ぐる数年間の同志社は人知れず時代の重圧に喘いで來た。而して終に堂々たる声明の下、基督教主義を清算するに至つた。けれども唯だ表からと裏からの表現法に異なるだけで、そこに当局の言ひ知れぬ苦心の痕が見える。同時に斯る訂正に於て或る方角は果して満足するや否や、マサカこれで六十三年の新島イズムがムザンの最後を遂げたとも考へられず、況んや同志社の自殺を云々するは少し早計のやうだ、が併しながらここまで胸を割つて出て來た以上、寧ろ思切つて「基督教の信念」など一句も挿まなかつた方が男らしいと思ふ。(傍点筆者)

同志社新「教育綱領」の發表は、同志社の変節と誰の目にもうつつたに違いないし、今日でもこの「綱領」發表



『京都市日日新聞』(昭和12年3月17日)

については権力への屈伏として記憶されている。当時の新聞にも、「同志社学苑大革新・基督教主義徳育を抹殺して教育勅語の聖旨を奉戴実践」(『京都市日日』三月三日)といった見出しがかかわれている。けれどもその真相は、キリスト教主義を堅守しようとする湯浅らの苦肉の発想にもとづくものであった。すなわちこの綱領の制定は、在来の教育綱領を財団綱領として残し、関係諸学校に対する新「教育綱領」の設置によって軍部の目をそらすという意図の生んだものである。順応の姿勢における防御線の構築であった。ただこの偽装によって瞞着されず、これをもって同志社の屈伏とは夢にも考えなかったものがあった。それは「軍」である。次章のチャペル籠城事件がそのことを明らかにするであろう。

の趨勢に鑑み、同志社の使命の愈々遠大なるを達観し、過去、現在、未来を一貫する同志社の根本精神を現代的に表現し、時代的に発展せしめたもの」という湯浅総長の談話とともに発表された。

「上申書」問題

しかしこの「綱領」問題が、反総長運動のからめ手戦術として利用され、彼を最終的に追いつめてゆく次の一波となることを、湯浅は洞察することができなかった。「綱領」の発表は意外の発展をとげた。一九三七年三月一六日、法学部四教授連名による、いわゆる「上申書」問題である。

「同志社の内部紛争爆発」とかかげて三月一八日の『中外日報』はこれを大々的に報道している。

同志社では既報の如く六十年に亘るその教育精神を時代に適応せる表現として「同志社教育綱領」を発表して一部の誤解を解くこととなつた折柄、法学部教授会にてはかねてより保守、進歩の兩派に分れ事毎に反目抗争をつゞけ來つたが、その保守派と見られる教授瀬川次郎、村井藤十郎、助教授土井十二、佐藤義雄の四氏は湯淺総長にあて左の上申書を十六日夜法学部長河原政勝氏に提出して湯淺総長に取り次ぎ方を求めたが、河原法学部長は昨十七日これを総長に宛て提出した。

上申書内容

下名等は豫てより同志社教育の根本方針は唯物思想、反国体思想を齎蔽して敬神尊皇、教育に關する勅語の聖旨を奉体し以て真に良心を手腕に運用する国家有為の人材を養成するに在りと信じ、之が実現に微力を捧げて今日に至りました。然るに過去數年、殊に最近一ケ年にはこの方針に反することが多く甚だ憂慮に堪へなかつたのでありますが、今度同志社教育綱領として下名等年來の主張と合致せる教育方針の公表を見ましたことは同志社の為め、国家の為め慶賀に堪へません、依つて此新方針に遵ひ左の事項を實行せられんことを要望致します。

一、田畑忍助教授、具島兼三郎助教授、林信雄助教授は其思想傾向、同志社教育綱領に反す、依つて其職を免ぜられたし

一、宗藤圭三教授、林信雄助教授は風教上、同志社教授として適當ならず、依つて其職を免ぜられたし

一、法学部充実の為め、学識、人物共に大学教授たるに適はしく且つ思想、信念共に同志社教育綱領に合致する人物を招聘せられたし

昭和十二年三月十六日

問題は全国に報道されたが、ジャーナリズムは、比較的冷靜を持して成り行きを見守つた。その取り扱いも「同

大左右教授の内訌」(『大阪朝日』三月一九日)、「同志社教授間の軌轢表面化」(『神戸新聞』三月一七日)、「同志社の内紛暴露」(『福岡日日』三月一八日)と、いずれも思想対立を事件の本質と見据えている。ジャーナリズムもこの種の報道にはウンザリしたことであろう。雑誌『土曜日』はこれをもって大学の凋落と歎いた。

大学の教授に限られたことではないが、殊に大学では「同僚の友誼」といふものは大学の歴史と共に尊ばれてきた。それは真理を探究する身は、互ひにその受持ちの領分での權威を認めて、尊敬し合ひ、助け合わなければ総合された真理を見出すことは出来ないからである。われわれは怪しげな名目で同僚に対する誹謗を世間に発表されるやうな人々の、此の「同僚の友誼」に反するやり方に賛成し難い(『土曜日』一九三七年四月五日)。

上申書の組上にのぼった人のうち黙殺をもってこれに對する人々が多かつた中で、一人、思想・風教において攻撃の対象となつた林信雄は、四月五日付「挨拶」状を発送してこれに對抗している。

私は、私の思想傾向が同志社新教育綱領は勿論、国家思想に反するとは毫も考へて居りませんし、未だかつて学界においてかかる批判に接したことは断じてありません。次ぎに風教上同志社教授として適當ならず依つてその職を免ぜられたしとされる上申項目についても、如何なる点が風教上同志社教授として適當でないのかについて、一言半句も責任ある理由を明示されて居りません。(中略)こうした内容しか持たない上申書並びに補足的声明が、私の先輩であり同僚である四氏によつてなされたことはまことに遺憾の極みに存じます。顧みれば、昨春、古屋美貞、野村重臣両氏御退職を契機として我等の学園を組上にのせた各種の印刷物が作製散布されたことは今尚記憶に新しいことであります。それ等の中には、不肖林の風教上の問題と称するものに言及したものがありません。(中略)しかしながら、該印刷物は全く一個の興味本位的な創作に過ぎず、従つて私は私の名誉にかけてこれを全面的に否定致します。当時私がこれに對して何等の反撃をも試みなかつたのは、該印刷物の性質に依拠す



中島今朝吾

ることは勿論、また沈黙は常に必らずしも事柄の肯定を意味するものではありませんし、学園内外の諸事情から見て、専ら沈黙を守ることこそ私の採るべき態度であり、またそれが学園を守り平和を維持してその将来の発展飛躍の為に役立つものであるとの固い信念に基いたからであります。(林信雄『同志社紛争史の一齣』昭和二十三年)

この事件はやがて文部省思想局の調査を誘発し(『京都日出』三月二十六日)、同志社は一八九八(明治三十一)年の綱領変更問題以来の混沌とした状況にまきこまれてしまった。湯浅総長は当初より上申書の内容を事実とは認めず、「静観」(『福岡日日』三月十八日)の態度をくずしていなかったが、この問題の調停へのきっかけは、湯浅と当時友人関係にあった憲兵司令官中島今朝吾によってもたらされた。すなわち、四月一〇日の「個人の資格」をもっての中島の来洛である。中島憲兵司令官の「本心」を『中外日報』(四月一四日)は談として載せている。

単なる一同志社の内紛としてでなく同志社の一挙一動が広くキリスト教全般の指標として重視せられつつある実情に鑑み、キリスト教が最近真に日本のキリスト教たんとする動きを認めこれを大局より指導すべく、徒らに他を責めるより、先づ自己を責めるべきだといふ日本精神の立場から乗り出した。

「先づ自己を責めるべきだ」という憲兵司令官の言葉は実に皮肉と言うべきではないだろうか。

調停は一〇日、京都ホテルにおける湯浅総長、上谷理事、浅野恵二庶務課長、森憲兵隊長、下田鍬之亮配属将校との意見交換、一一日上申組教授および河原法學部長との会見、次いで被上申組教授との会見、なお一貫して事件の黒幕として暗躍した若松華瑤(兎三郎)との会見、という経過をたどったが、上申組教授の強硬な態度は第一回の調停を不成立におわらせた。「白紙一任できぬ」という河原法學部長談と「円満解決のため努力中」という当局談が、四月一三日付『中外日報』に載って

いる。解決は翌一四日にもちこされたが、午後五時、中島憲兵司令官代理森京都憲兵隊長、神谷分隊長、若松華瑤の三者が中島司令官調停案を提示、折衝の結果、解決を見るに至った。「同志社騒動円満に解決」と翌一五日の『大阪毎日』は報道している。

中島憲兵司令官は公正な人物であつたらしい。しかし状況変革の主体として、この時期においてたとい「個人」としての資格であっても「軍」の介入によってしか解決の道が見出せなかったことは、大学の自治の破壊度の深さを深く考えさせる事件であつた。もしその「軍」が破壊の一方的意図をもって介入したならばどうなるのだろうか（高道基「同志社の抵抗」『戦時下抵抗の研究』Ⅱ）。

なお、「上申書」問題については、次章で詳述する。

第五章 チャペル籠城事件

予科学期末 一九二九（昭和四）年、理事会を相手にしての同志社大学の全学的な抗争、ストライキは、法学部の

試験の混乱 教授、学生が中心であったが、予科生ももちろん参加した。一九三一（昭和六）年、予科生は予科教

授会の学生に対する処分を不満として、予科生独自のストライキを行なった。一九三七（昭和一二）年、予科生は総長の退陣、キリスト教的儀式の廃止、誤まれる国体観念を有する予科教授の処分などを望んでもう一度ストライキを行なった。一九三一年のときは、満州事変の始まる三カ月あまり前で、主として左翼の学生がリードした。三年のときは、日中戦争開始の前前日で、国防研究会のメンバー（右翼）が主導権をにぎり、例外的に三名の学部学生が先輩としてこれに参加した。

左翼学生の指導によるストライキのあと六年目に、右翼学生の指導によるストライキが行われたということは、日本全体の思想状況、学生の思想状況が、その間激しく揺れ動いたことと関係がある。一九三一年のときに同志社大学予科の配属将校であった池田賢十郎中佐は、まことに温厚な人物であった。学生の思想と行動に対しての積極的な発言は一切さし控えていたが、一九三七年のときの草川靖中佐は、狂信的な国粋主義者であり扇動家でもあつ

てストライキの当日こそ学校に姿を現わさなかったが、事件の首謀者であり、かげの主役であることは誰の目にも明らかであった。

一九三七年七月五日、その日は予科の学期末試験が開始されることになっていて、学校当局は、何らかの妨害工作が行われるのではないかという不安を、ばく然といだいていた。しかし第一、第二、第三時限の試験までは無事におわり、ほっとしかけた頃、校門が閉ざされている、帰宅しようとする学生が足どめをくらっているという情報が入ってきた。

同じ時刻に、第四時限の試験を受けようとする学生が、教室の中で待っていたところへ、突如として棒ぎれをもった学生、あるいはバケツをもった学生など二、三名が現われ、「試験をボイコットして、ただちにチャペルへ集まれ」と命令した。バケツをもっていた学生は、机の表面をバケツの水でぬらして答案を書くことを不可能にし、棒ぎれをもった学生は威嚇的にふりまわしたので、一般学生はなぐられることを怖れて教室の外に出、チャペルの方に向かってあるき出した。その棒ぎれには白い紙がまきつけられていて、その上にスミで指揮棒と記されていた。指揮をするための棒であって、なぐるための棒ではない、という言いわけができるように、あらかじめ用意されていたのである。

学校側は、チャペルの中へぞろぞろ入ってゆく学生に対して、教室へもどって試験を受けるよう説得につとめたが、効果はなかった。このときの事情を、柴山健三予科長は全学生の父兄に知らせるため七月七日付で文書を郵送したが、その中では次のように記されている。

試験第一日（五日）第四時限の開始せんとする瞬間、少数の予科学生が数名の学部学生と予て極秘裡に準備したりし計画を疾風迅雷的に実行に移し、多数の学生を強行的に公会堂に收容し竟に之を占領するに至り中候

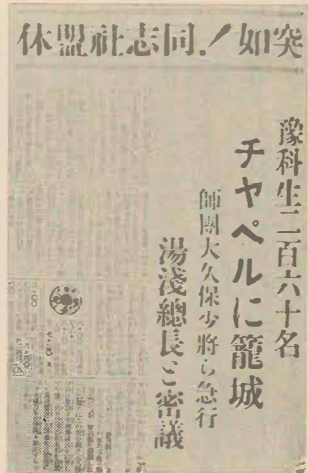
一般学生の中には、試験が流れるということで助かったと思ったもの、指揮棒をふりまわした国防研究会のやり口に腹を立てたもの、チャペルへなんか行くものかと思つたもの、なぐられるのがこわいから、あるいは好奇心からチャペルへ入つたもの、国防研究会に共感をよせていたもの、いろいろあつたであろう。ただ、指揮棒をふりまわして試験をぶつつぶした学生と配属将校草川中佐との日頃からの深い關係を一般学生はよく知つていた。一般学生は草川に対しては、反感、軽べつ、恐怖感などをもつていて、それだけにチャペルの中へ追ひこまれた彼等の心情も複雑だつたと思われる。

ともかくも、全予科学生数七〇〇名のうちの半数弱がチャペルに入場し、チャペルの中は、ぱらつといっぱいになつたのであるから、そして試験は流れたのであるから、草川を中心として練られた策略は、第一段階において成功したといわねばならなかつた。

湯浅総長への勇退勧告

同志社のチャペルは、現在は中学校だけが使用しているが、戦前は大学も専門学校も共同で使用していた。一九三一年六月の全予科生のストライキのときには、チャペルで連日集會が開かれ、当局を弾がする演説が行われ、ワアワアとにぎやかであつた。

その場合、予科生の出たり入つたりは自由であつたが、一九三七年七月のときには、予科生たちが一通り入つたところで、入口の扉を内から閉ざし、釘を打ちつけた。「チャペル籠城」ということが生れたのはそのためである。



『京都日出新聞』
(昭和12年7月5日夕刊)

籠城した学生の総数は、当局の公式発表によれば三三〇名、『朝日新聞』の報道によれば二五〇名、国防研究会側の文書によれば四〇〇名であった。学生の中には臨時学生大会の開催に強硬に反対するものもいて、国防研究会のメンバーは手こずってしまい、これら邪魔ものの約五〇名を裏の出口から退出させる、ほり出すということもあえて実施せねばならなかった。

予科の教師たちはチャペルの正面のあたりにたむろし、内心では学生大会の不成立を願っていたが、なかなかそういう事態にもならず、そのうち同志社付近の住民たち、予科生の父兄などが噂をききつけてぞくぞく集まり、やがて新聞記者、カメラマンまで現われた。毎日新聞の京都支局長岩井武俊^{いわい たけとし}の姿を発見した一教師は、近づいていって、「同志社の恥だから、新聞に書かないようにしてほしい」とたのむと、岩井は、「ここまで大きくなった事件を書かないわけにはいかん」といってことわった。岩井の息子は予科の学生であったが、チャペルの中に入っているのか、いないのか、岩井支局長も教師も判らなかった。

臨時学生大会開催の主目的は、湯浅八郎総長の退陣を決議することであった。草川中佐としては、湯浅が同志社のキリスト教主義の看板をおろそうとしないことが気に入らなかったし、マルクス主義者の教授をよう護しようとする態度も気に入らなかった。そこで予科の学生に排斥の決議をさせようとたくらんだのであるが、これはどうにか筋書き通りにいった。ただことばづかいは鄭重になり「湯浅総長のご勇退を勧告」する決議となった。選ばれた数名の代表は、裏の出口から出て総長室に向い、湯浅に直接決議文を手わたそうとした。

しかし、学校当局の許可なしに非合法的に開催された学生大会の決議文を受理することはできないといってこと

わられると、代表たちはとうにくれ、そのままチャペルに引きかえした。そのあと籠城している学生のあいだからさまざまな意見が出たらしく、かなり時間が経過したのち、第二回目の代表団が出ていって、湯浅総長にぜひ会いたいということだねばり、湯浅も今度は面会を了承し、決議文を受取った。そのときはすでに午後五時だったので、湯浅としては、決議文を受理するかわりに、一刻も早く解散させるつもりであつたらしいが、代表はもちろん解散しますという約束はしなかった。湯浅は退陣するとも何とも言わず、ただ「善処しましょう」と言っただけなので代表は、善処ではハッキリしない、ご勇退願えるのかどうかと訊くと、「総長自身が善処すると言っているのだから、それでいいではないか」と突っぱねられ、学生は空しく引きあげていった。

代表団が持参した決議文の中には、総長の側近と見なされている上谷統財務部長、浅野恵二庶務部長、奥村龍三事業部長の罷免も含まれていたが、学生たちとしてはこの件にかんしても、何らよい返事をきくことはできなかった。

キリスト教的 儀式廃止の決議

籠城している学生は、ひるの食事をとっていないのだから、いずれそのうち解散するだろうと飯がはこばれてきた。準備万端ゆきとどいていて、教師たちは呆然としたが、チャペルの中では歓声があがった。チャペルの中は電灯がついて明るくなり、大会は当初とちがつてしだいに熱気をおび、もりあがった空気の中で続行されているらしく思われた。

同志社の西南、現在図書館のある場所には当時華族会館と称される木造の建物があり、そこに中立売警察署員が多数つめかけているという話、署長自らも乗り出してきていて籠城学生に解散するよう勧告しているという情報が見え入り、教師たちは望みをつないだ。しかし学生側の代表は、自分たちの考えだけで解散を決めることはできな

いと言ひ、誰かが草川中佐の自宅まで意向を打診にいったということだった。左京区下鴨北園町の草川宅に出かけていった使者がまもなく帰つてきて、草川中佐は、大体目的を達したようだから、そろそろ解散してもよからう、という意見だったという情報がまた伝わり、それからすこしたつて、全籠城学生は、正面の二つのドアを開いて、ぞろぞろと出てきた。真夜中の午前一時二〇分であつたが、学生たちはたいして疲れたような顔もしていなかった。

湯浅総長に手わたした決議文以外に、学生たちは柴山予科長あての決議文をもとどけていたことが判つたが、それは次の七項目から成立つていた。

- 一、四大節の儀式に際し、祈禱、讃美歌を廃すること
- 二、必要事項を議するため一学期に一度学生大会を議すること
- 三、誤れる国体観念を有する教授、学生の断乎たる処分
- 四、徳学生主事および山田教務主任の辞任
- 五、有能教授の招聘
- 六、長髪を許可されたいこと
- 七、今回の問題に関して処分をなさざること

同志社では、新年拝賀式、紀元節、天長節、明治節の式典にさいして、一九三七年においてもなお、讃美歌、祈禱を廃するということはしていなかった。ただ同年四月二九日の天長節に当つては、ご真影の開帳、閉帳がおわつたのちに讃美歌をうたうという新しい形式が採用されたのであるが、予科の学生大会は新たに、四大節の儀式に際し、讃美歌と祈禱を廃止することを決議したのである。草川中佐ならびにキリスト教嫌いの学生は満足だつたと思

われる。

次に、「誤れる国体観念を有する教授、学生の断乎たる処分」であるが、一九名の予科教授のうち真下信一（哲学）、新村猛（フランス語）、和田洋一（ドイツ語）の三人は草川ならびに一般学生からマルクス主義者、左翼、赤、反軍主義者という風に思われていたので、断乎処分せよということになったのであろうが、しかし三人の名前を表面に出すことを、学生大会の出席者は差しひかえたものと思われる。

「長髪を許可されたい」というのは、当時同志社大学では、学部 of 学生は髪をのばしてよろしい、予科生はしかし五分がりという風に決まっていたからで、国防研究会学生 of 原案の中には長髪 of 件は、はいつていなかったということである。籠城に参加した学生が後日語ったところによれば、自分たちは最初、指揮棒におびえてしかたなしにチャペルに入り、学生大会に参加したが、そのうちにだんだん愉快になり、空腹のところへ握り飯の差入れがあったりして、あとは面白くて面白くてたまらなかったとのこと、おそらくそういう空気の中で、長髪を許可されたいという動議が出て、賛成多数ということになったと思われる。ただ、決議七カ条が翌日の新聞に発表されると、長髪にかんしては嘲笑する人が多く、国防研究会 of メンバーが後日刊行した印刷物の中にはこの項目ならびに第七の「処分をなさざること」は外されている。

予科教授会 籠城が解かれた直後、予科 of 教師たちはその日の午前一一時に臨時教授会が開催されることを知の足なみ らされ、家路についた。

同志社大学では一九二九年 of 騒動いらい法学部教授会は深刻な内部分裂を起こし、まっふたつにわれた状態は六年、七年とつづいて、大学全体を不安の中におとしいていたが、予科教授会 of 人間関係はさいわい良好であった。同志社出身者と京大出身者との派別的対立、クリスチャンとノン・クリスチャンとの間のみぞもなく、左翼、無



柴山健三

色、右翼の色わけはできないことはなかったが、その場合右翼というのは、左翼を不快視している、日本軍の中国進出に精神的支持を送っているという程度のものであった。配属将校の草川中佐と意気投合している者は一人もいなかった。誰もが草川に対しては顔をしかめ、同僚としてのおつき合いをしなかった。深草の第一六師団司令部ですら草川には手をやいていることをみんな知っていて、籠城のあと始末にさいして、会議で多少意見は分れるとしても、草川が元兇だ、草川がわるいという点で一致するだろうということは前もって予測できた。

定刻前に集まって、互いに意見を交換しあっている教授たちの雑談を通して、リーダー格の学生たちを断乎処分すべきであるという空気は早くも感じられた。リーダーだとか首謀者だとかいっても、実際は草川の命令で動いているのだから、きつい処分をするのはかわいそうだが、しかし処分はやむをえないという空気も感じられた。

草川中佐は、教授会には必ず出席し、必要とあれば意見をのべることを常としていたが、この日は顔をみせなかった。連絡がなかったためであろが、もしあれば出席しただろうが。

出席者全員が比較的陽気な顔をしている中で、柴山健三予科長だけは疲労と苦悩の色をみせていた。柴山は気だてのやさしい人で、できることなら学生の処分はしたくなかったのである。しかし山田貞夫教務主任は断乎処分すべきだという意見だったし、徳武義生徒主事も表現はおだやかながら強硬意見だった。クリスチャンで初老の速水藤助、南石福二郎両教授、左翼で若い真下教授も手短かに強い意見をのべ、反論は全くなく、大勢は会議開始後一〇分ですでに決まった感があった。柴山予科長はありありと当惑の色をみせていたが、どうしようもなかった。

大方針は決まったとして、次にどの学生にどのような処罰を加えるかが問題であったが、速水は、学生大会が続

行されているあいだ、チャペルの裏側の窓にひとりでよじのぼり、内部をずうっとのぞきこんでいたので、どの学生が議長をつとめ、どの学生が激しいアジ演説をやり、どの学生が議事運営をやったというようなことをくわしく知っていた。窓の外からのぞかれていることを知らないでいた学生のリーダーたちは、うかつであったといわねばならないが、予科教授会は速水の証言をもとにし、それに国防研究会のメンバーの日頃の行動を参考材料にして処分の軽重、誰を処分するか、誰をしないかを審議した。

教授会は暑いさ中、七月六、七、八、九の四日間ぶつつつで開催された。新聞記者は会議の進行状況に探りをいれようと努力し、処分についての予測記事をかき、会議は何時に始まって何時に終わったということも報道した。

三日目の会議の途中、京都府特高課長より予科長あてに電話があり、お話したいことがあるので至急出頭された。いとこのことであった。話というのが、学生の処分と関係があるらしいということで、教授会は一時中断され、予科長が帰学するまで休憩ということになった。永岡特高課長は柴山予科長にたいし、学生たちの処分はしない方がよいのではないかと、と勧告をしたらしく、柴山は困惑の色を深くして教授会の席にもどってきた。このことはただちに翌日の新聞にも報道されたが、特高課長が大学の責任者を会議中に呼出し、警察へ出頭させ、教授会の審議内容に干渉するという途方もないことがこの時おこなわれたのである。

配属将校の草川は、当初、予科教授会は弱腰で、処分などするはずはない、お前たち安心してやれ、と学生にハッパをかけていたのであるが、教授会が意外に強硬で退学、無期停学処分が多数学生に加えられるので、すっかりあわててしまった、それで草川が府の特高課へ出かけていって、教授会に圧力をかけるよう懇請したにちがいないという推測も行われた。

第四日目に、主だった学生六名を諭旨退学、一一名を無期停学に処することを決め、会議はおわった。そのあと

草川から、処分は苛酷に過ぎる、再考慮してもらいたいという申し出があり、柴山予科長ひとり神経衰弱気味となつたが、ひらの教員たちは気らくに夏休みを迎えた。学生を処分するに当って直接事情を聴取せず、一方的にやつたという批判は受けねばならなかつたであろうし、非は学校当局にもあるという言い分もあつたであろう。配属学校の命令通りに動いた学生を退学、無期停学などにするのはひどすぎるといふ声が学生の父兄たちの中からあがつたということも事実であつた。その点、教員たちは、一にも二にも草川中佐がわるい、草川が無茶苦茶をしたので、こういうことになつたという風に思いこんでいたので動揺はしなかつた。

「上申書」事件

上申書問題

チャペル籠城事件のリーダーたちは処分され、草川中佐は第一六師団司令部の命令によって三重解決の困難さ 県津の連隊に移され、予科に関する限り問題は解決したが、同志社全体の上には依然として暗雲が低迷していた。法学部の上申書問題は、四月一四日をもって円満解決をみたと同志社当局は発表したけれども、それは希望的観測に過ぎなかつたのであつて、現実的、具体的な解決では全くなかつたのである。

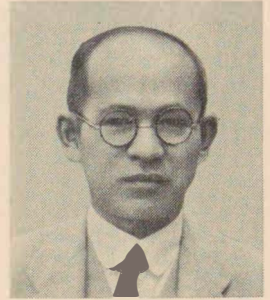
上申書を提出した法学部の教授瀬川次郎、村井藤十郎、助教授土井十二、佐藤義雄等は、自分たちが上申書提出という方法を選んだことは穩当ではなかつたこととあとで認めたが、自分たちの国家主義的、反共的思想信念は今後ますます徹底、実現を期する覚悟であつたということがある、同僚であり思想的同志であつた古屋美貞、野村重臣が湯浅総長によってクビをきられたということで強い闘争心を燃やしていたということがあり、日本の国全体の流れはいよいよ国家主義、反共の方向に向かいつつあつたということもあつて、上申組は意気さかん、闘志満まんとい

うありさまであった。

一方、被上申組の田畑忍、具島兼三郎、林信雄の三助教授は、容共派よばわりされ、それに対して沈黙を守っていたのであるから、同情もされ、またかれら三人は学問上の実力も認められているということもあったが、対立抗争の面では弱いという印象を与えていた。いっぽう文部省は、田畑、具島両助教授を思想的に好ましくないとみて教壇から一時退かせようとしているということもあり、従って上申組の意向を全部通し、三助教授を休職処分にし、国民精神文化研究所へあづけて洗脳してもらうということも一つの解決方法であったが、そのような、なりふりかまわぬ「粛学」を行うほど当時の同志社は理性と良心とを失ってはいなかった。

では逆に、自分の同僚のクビを切れとせまった上申組を、きれいさっぱり処分する方針であるかといえば、それは国家主義、右翼が一日一日と勢いをつけてきている状況の中では、あまりにも無謀というほかはなかった。そこで現実的な解決方法としては、喧嘩両成敗しかないという声も出たのであったが、被上申組は、けんかを売られただけで、買ってはいない、上申書が出されたあとずっとおとなしくしているのだから、けんか両成敗などというのはおかしいという声があり、いや、ここ数年両派が抗争をつづけてきたのだから、やはりけんか両成敗だということもあった。

どのような解決方法を探るかに関し、同志社内ではいちばん力をもっている人は誰かといえば、それはもちろん湯浅総長であった。当時同志社では理事会は年に二回しか開かれず、常務理事会が月一回開かれて重要な問題をすべて処理していた。総長はこの常務理事会の長であった上に、さらに大学長をも兼務していたのであるが、大学に次から次へと困難な問題が起り、湯浅総長兼大学長に対する攻撃の火の手が強くなってきたため、湯浅総長は大学長の地位を手ばなすことを決意した。学内では、これは湯浅総長の後退策であり賛成できないとする人、いや賢明な



大塚節治

策だとする人、新しく選ばれる大学長と総長と意見がくいちがった場合どうなるのかと心配する人、いろいろであったが、五月一八日、文学部、法学部、予科の専任教員が集まって投票し、文学部の大塚節治教授が最高点で大学長候補に当選した。そういうことがあって、湯浅総長の権力はいくらか弱まっていたということはあった。

大塚は大学長就任をためらうことふた月の長きにわたったが、七月一五日の常務理事会において、湯浅総長の大学長兼任解除と大塚大学長就任がようやく決定した。大塚がなぜためらったかについては、上申書問題の解決の方針に堪して、湯浅と意見を交換した結果、考え方の相違を認めたからだと彼の著書『回顧七十七年』の中に記されている。

この意見交換は書簡によって行われたもので、大塚は湯浅宛の六月一〇日付書簡のなかで、自分は学長就任のため心の準備をしているが、同志社の採るべき方針は次の三つのうちのどれかであるとのべ、

一、時勢に順応して国体明徴の旗印の下に当局の要求に速かに応じて学校教育行政に対する社会の疑惑を一掃する事

二、或いは時流に抗し飽くまで思想の自由を擁護し、当局の求めに従わざる事

三、或いは両者の中間を行き、ノラクラ主義で行く事

目下同志社のやり方は第三と存じ候、第三は常にゴタゴタの連続を覚悟いたしての上と存じ候。

の三項目をあげている。そしてさいごに、「常務理事及び同志社諸校長の連合協議会を開き、右の内何れかに確定してそれに従って断々乎として進む外、学園の騒擾は絶え申さずと存じ候」と記し、方針がどう決定されるか、

「その如何によりて学長に就任つかまつる可く候」と結んでいる。

大塚は、一、二、三とならべているが、彼自身内心は一を望ましいと思っていたと推察され、二は同志社をつぶすことであり、あまりにも非現実的であり、一にも二にも徹底できないでゴタゴタの連続をつづけている同志社のやり口(湯浅のやり口)に対する批判がここに出ているものと思われる。

ゴタゴタの連続は大塚の指摘通りであつたけれども、同志社を創立した新島の精神を守り抜こうとして苦しい闘いをつづけ、不本意な後退と妥協とをよぎなくされてきた湯浅にとって「ノラクラ主義」は何ともカンにさわる言葉だつたのではあるまいか。湯浅の大塚への返信は資料として現在同志社に保存されていない。しかし大塚は返信を受取つて、湯浅と自分との考え方のちがいを改めて感じ、これでは大学長に就任してもしょうがないと思つたことは、ほぼ見当がつく。

では大塚は大学長就任拒否の決意を固めたかというところ、それもできなかった。なぜかといえば、同志社の従来の慣行、理事会が決めた総長が自動的に大学長を兼任するというのは、大学自治の立場からみて好ましくないという見解を大塚はもっており、自分は文学部、法学部、予科の専任教員の投票によつて大学長候補に選任されたのであるから、そしてこのような選任は同志社大学の歴史の上で始めてのことであるから、かるがるしく就任拒否などできないと考えていたからである。そのことは彼の著書『回顧七十七年』の中で明らかにされており、大塚は、現在の同志社の難関切抜けを総長兼大学長の湯浅ひとりにまかせて傍観していることは許されないと観じ、さんざんためらつたあげく、七月一四日、大学長就任受諾の意向を、総長湯浅に伝え、一九日辞令を受取つたのである。

喧嘩両成敗

喧嘩両成敗論の根拠は、左右のバランスをとらねばならない、右派に対してだけ酷であつてはならないということのうちにあつた。

一九二九（昭和四）年の同志社大学ストライキの時と法学部教授会内に生じた亀裂、両派のにらみ合いは、当時の文学部教授大塚節治にとつただけではなく、ほとんどすべての文学部教授、予科教授にとつて、よそごとながら何ともこまつた事態であつた。それでも一方がはつきりと多数派、一方がはつきりと少数派であるうちはまだよかったが、一九三三（昭和八）年住谷悦治、長谷部文雄両教授が共產党に資金を提供したこのために検挙され、同志社を去つていったあとは両派の数の差がちちまり、一人、二人の欠席によつて人事の決定が左右されるという事態になつた。

仮に、二つの派を容共派と反共派と呼ぶならば、一九三五年に同志社大学長となつた湯浅は、はつきりと容共派を支持した。そして翌年には反共派の二名をクビにした。数的バランスは再び崩れたようにみえた。反共派の人たちは当然地位の不安定を感じ始めたであろう。表面に出たのは洛北青年同盟などと称する右翼団体の出版する湯浅攻撃のパンフレット、クビを切られた野村重臣執筆の『林要はマルキストである』、同じく右翼系の出版物『左翼教授の巣窟同志社を暴露する』などであつたが、そうした怪文書が効を奏して、容共派のキャップともいふべき林要は辞表を呈出して同志社を去つていった。自分がいつまでも同志社にとどまつておれば、紛争はつづくであろうし、やめれば相手もおとなしくなるだろう、と思つた上での行動だつたと思われる。あるいは単にいや気がさしてやめたのかもわからない。

しかし、林がやめても事態はちつともよくならず、湯浅総長に対する攻撃の火の手はかえつて勢を増した。それは日本の国全体がじりじりと右傾化していったために、同志社内外の反湯浅派がますます元気づいてきたためである。そのような空気の中で上申書が呈出されたのであるから、大塚学長として左右のバランスを考えずにはいられなかつたのであろう。大塚は「余は予てより、喧嘩両成敗のほか途なきを説く。但し犠牲は可能なるだけ少なきを

望む旨」を湯浅総長にのべたと書いていっている（『回顧七十七年』）。のべられた日は、八月一日比叡山で開かれた常務理事会の前日であって、湯浅としては学長の意見には賛成できなかったにしても、学長の意見を全く無視するとは到底できなかったであろう。かくして喧嘩両成敗の実現となったのであるが、反応としては元京大法学部教授滝川幸辰が、『大阪朝日新聞』京都版にのせた次のような投書があった。

八月十二日の夕方同日の理事会で決定された処分を知り失望した。否失望を通り越して啞然となった。上申組および被上申組の双方から二人ずつの退職者と一人ずつの休職者を出している。これでは何のための処分か全くわからない。人は喧嘩両成敗を口にするかも知れない。武田信玄以来喧嘩両成敗の法度は武家法の一部を構成している。が、これは武人にあるまじき失態が双方にあることを前提とし、その限度において行われたのである。理非が明瞭なのに拘わらず両成敗に付するという法は絶対でない。同志社は学園である。学園は理論と共に立ち共に倒れる。同志社が理論をも捨てて非理に組したことは学園の名誉をも捨てたものである。

湯浅は、すっきりした形で上申組を処分するつもりだったが、大塚に引きずられて不本意ながらけんか両成敗に踏み切ったということではなく、湯浅もある程度の妥協はやむをえないと思っていたのであって、彼は滝川を批判し、私学の苦しい立場、弱い立場は、官立大学の教授であった滝川には判らないと発言したこともある。

同志社大学法学部は一九三三年に住谷悦治、長谷部文雄両教授を失い、三五年に古屋美貞、野村重臣、三六年に林要を失い、三七年には上申組の瀬川次郎、村井藤十郎、被上申組の具島兼三郎、林信雄を失ったのである。さらに上申書をとついだ法学部長の河原政勝、被上申組の田畑忍は翌三八年三月まで休職処分になったのであるから、あとに残って講義をしたのは何名かといえ、上申書に名をつらねながら助教であるためにクビ切りからはずされた土井十二、佐藤義雄、名をつらねなかった松井七郎、上申組が風教上の理由により罷免せよといった宗藤

圭三、罷免のリストからはずされた難波紋吉、松山斌、両派の争いに加わることを極力避けてきた黒川芳蔵、若手専任講師の黒田謙一、野村治一、このさいごの二人は右派からはプロマルキストと見なされていたのであるが、全部あわせて九名に過ぎず、夏休みのおわり頃、主として京大法学部教授に嘱託講師を依頼して一時を糊塗したものの、全くむざんな姿であり、一〇〇〇名を越える法学部学生にたいしては何とも申訳のないいたらくであった。

七月、八月の定例理事会は、市中の暑さを避け、場所を叡山ホテルに移したため、当時叡山会議と称せられたがとられたようであるけれども、被上申組の田畑忍には半年間東京へ出、国民精神文化研究所に入所して思想をきたえ直せという条件のついた休職処分が課せられ、上申組の河原政勝の休職には何の条件もついていないというアンバランスもあった。

第六章 キリスト教主義の後退と湯浅総長の辞任

キリスト教主義の後退

浸透する

夏休みがおわって、一九三七（昭和一二）年九月一日、予科の始業式がチャペルで行われた。草川

国家主義色

中佐の後任として新たに予科に配属された鈴木友吉^{すずきともきち}少佐は、かたくなな感じ、こわい感じはなく、

愛想のいいあいさつをして全予科生をホッとさせた。

同志社は、創立いらい六〇年、儀式にさいしてご真影を拝するということをしてこなかったが、神棚事件の直後軍部・右翼に対する気兼ねから、ご真影の下付をうけた。ただし奉安殿を新築しようとはせず、彰栄館の一室を改造して奉安室とした。宿直制度が新たに設けられ、大学をはじめ今出川校地の教職員が交替で寝とまりをすることになり、最初の日、一九三七年九月一日には学長であり神学科の教授である大塚節治が宿直の任を果たした。教授たちの中にはご真影の番人をするに内心抵抗を感じている者もいたかもしれないが、特に反対の声をあげる者はいなかった。ただ、同志社のキリスト教主義的特色が今後ますますすすっていくのではないか、日華事変が

つきりと全面戦争の様相を呈してきているので、この秋はいやなことが次つぎと起こるのではないかという予感をこの時期にもつ者もあったと思われる。

上申組問題の解決の仕方に関しては、同志社の教職員は多かれすくなかれ不満であった。湯浅八郎総長を支持し、湯浅がきれいさっぱり上申組のクビを切ってくれることを期待していた者は、裏切られた、前途に望みはないと感じた。けんか両成敗論を支持していた者は、両成敗が実現されても同志社大学の雰囲気はいっこうに明るくならないので失望した。上申組の支持者は、戦闘的な反共主義者である瀬川教授がクビを切られ、レーニン主義憲法の田畑忍助教授がクビにならなかったことをいまいましく思った。

同志社大学の三つの教授会のうち、文学部の構成メンバーは、一名をのぞいて他は全部クリスチャンであり、会議を始めるに当っては誰かが必ず祈禱をするということを習慣としていた。法学部はクリスチャンが少数だったのでそのようなことはなく、予科はクリスチャンとノン・クリスチャンが半はん、会議を始めるに当っては、日野真澄^{まさを}予科長時代は予科長自身が祈禱を行い、ノン・クリスチャンの柴山健三教授が予科長に就任したあと祈禱の習慣は消滅した。

一九三七年の文学部教授会記録に目を通してみると、一〇月三〇日の「教育勅語奉読式」、十一月三日の「明治節拝賀式」に、讃美歌をうたうべきであるか、うたうべきでないかについて議論がなされたが、結論は得られなかった、と一〇月一四日のところに記されている。

一八九〇（明治二三）年一〇月三〇日に発布された教育勅語の奉読式典を、日中戦争が始まった年の秋、新たに実施せよという命令が文部省から出たためか、そして四日後にはまた明治節拝賀式をとり行わねばならないということがあったためか、それらの場合、讃美歌を従来通りうたうことの可否が文学部教授会で検討されたのである。キ

リスト教主義大学の悩みが、こういうところにも現われているのであるが、その年、一九三七年一〇月一日から末日までのあいだに同志社大学内でとり行われた国家主義的ないし軍国主義的行事は左の通りである。

一三日、戊申詔書奉戴式、予科と高商はそれぞれ独自、学部と専門学校とは合同。高商以外はチャペルで開催
一六日（土）、湯浅総長以下教職員一同樞原神宮及び畝傍山陵参拝

一七日（日）、神嘗祭、学部学生、予科生、専門学校生は今出川校庭に集合、下鴨神社参拝

二三日、栄光館にて校友徳富蘇峰の講演会、題は「精神日本の発見とその扶植」

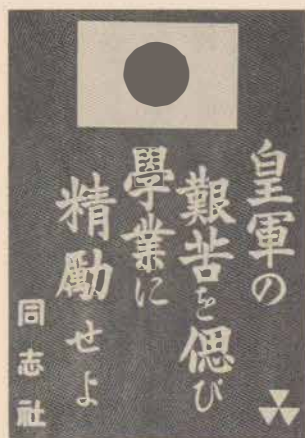
三〇日、教育勅語奉読式、今出川烏丸運動場において、大学、専門学校、高商合同

三一日、栄光館にて校友戦没者慰霊祭

なお翌月三日の明治節拝賀式は大学、専門学校合同、場所は栄光館、始めに堀貞一宗教主任の祈禱、そのあと大塚節治学長が御真影の御開帳、教育勅語奉読、御開帳を司り、おわったあと湯浅総長の式辞、讃美歌という順序であった。選ばれた讃美歌は四一二番（戦後版では四一五番）で、歌詞は「わがやまのくにをまもり あらぶる かせをしづめ よやすくく をさめたまへ わがかみ」で、これなら

国家主義者も文句をつけにくいということだったのであろう。湯浅は、今までのように教育勅語をよまなかったのであるから、一般教職員、学生には、総長のかげがうすくなったという印象を与えたかもしれない。

なお、このほかに同志社本部は、トタン張り立看板八枚を作成し、それぞれ各部に配布した。記入標語は「至誠奉公」、「和協一心」で



同志社が配布したポスター

あった。また色刷りポスター四〇〇枚を印刷し適宜配布した。記入標語は「皇軍の艱苦を偲び学業に精励せよ 同志社」であった。大学図書館屋上の国旗掲揚台は改築され、新たに使用されることになった。これらは一〇月二二日の常務理事会で報告されている。日中戦争が始まった年の秋には、同志社のキリスト教はどこへ行ったか、ほとんど判らなくなっていたのである。

戦時体制への道

予科に不祥 日独防共協定がベルリンで調印されたのは一九三六年一月二五日、日独伊防共協定がローマで調印されたのは翌三七年一月六日である。「防共」といえば、共產主義思想が日本・ドイツに流入

するのをふせぐぐらゐの意味に解されるが、ドイツ側はアンチ・コンミンテルン・パクト(反国際共産党協定)という強い表現を用いていること、この協定は、日独両国が共同して国際共産党を相手にたたかうという約束であり、単にわるい思想をふせぎましようという程度のものではないことは、日本の知識人のあいだでもある程度知られていた。

同志社の湯浅総長が、一九三七年の暮に、日本の「国家が国運ヲ賭シテ戦争ノ目標トシテ居ル共產主義」と発言したとき、日独防共協定、日独伊防共協定がそう言わせたのかどうかは全く判らない。しかし、ともかくも一月六日に日独伊三国の防共協定が結ばれ、翌七日はロシア共產主義革命二〇周年記念日、そして八日には同志社大学予科教授新村猛、真下信一の両名が共產主義運動を行なった疑いで検挙され、この不祥事件発生のため湯浅は責任を感じ、総長をやめなければならぬと考え、事実やめたのである。

一月八日(月)の朝、フランス語担当の新村、哲学概説担当の真下は、それぞれ授業があるにもかかわらず姿をみせず、欠勤しますという電話もかけてこなかった。これはおかしい、と予科当局者は考え、次のしゅんかんには警察、検挙ということばを思いうかべた。新村、真下と特に深い関係のあった同僚の和田洋一が柴山予科長と話しあった上、ようすを見に行くことになり、まず真下の家を訪ねた。二階では家宅捜索が行われているらしく、一階にはひと目みて特高警察と判るような男がひとりいた。和田にとっては初対面であったが、相手は和田を知っていた。

「調べは相当ながいことかかりますやろう。中井正一先生を含めてお三人とも、ちょっとやそつとでは帰れんと思ってもらった方がよろしい。和田先生もいっしょに来てもらおうかと思うたんやが、まあ今度はやめておくことになりました」。

特高はにやにやしながらそんなことを語った。中井、新村、真下、和田はそれぞれ反ファシズム的傾向をもった月刊雑誌『世界文化』の同人で、特高が検挙にふみきったのは『世界文化』の編集活動、執筆活動に目をつけた上でのことにちがいないと思われた。

和田は新村の家を訪ねることをせず、そのまま同志社に帰って、柴山予科長と山田教務主任の二人に事情を報告した。山田は「夏に特高課長の言うことをきかなかったので、かたき討ちをしよったなあ」と語り、柴山も「そういうことだらうなあ」と溜息をついた。チャペル籠城事件の学生を処分しなければ、こんなことにならなかった、と柴山は心の中で思っていたのかもしれない。

特高警察は、体質的にキリスト教主義の学園同志社に好意をもたなかったであろうし、法学部の容共派を支持し、反共派の教授のクビを切った湯浅総長に対しても非好意的であっただろうし、予科の愛国的学生を処分するな

と言っているのに処分した予科の教授会をいまいましいと思つていたであらう。しかし、一方『世界文化』は、共産主義の宣伝など一切していなかったし、反戦のさけび声をあげていたわけでもなかったが、にもかかわらず、日本の国策に逆行していることは誰の目にも明らかであった。反ファシズム、そして容共の編集方針が特高警察を刺激してはいはずはなかったし、『世界文化』の同人めいめいは、留置場にほりこまれ、いじめられるとか、職を失うとか、そういうことも起こりえないではないと覺悟していたのである。治安維持法、新聞紙法の存在について一通りのことは知つていて、自分たちは共産党という結社とは何のかかわりをもっていないし、リベラリズム、ヒューマニズムの立場に立つてファシズム反対の文化運動をやっているに過ぎないのだから、法に触れることはないはずだという安心感ももっていた。検挙をまぬがれた『世界文化』の同人たちはひそかに出あつて、中井、新村、真下の身の上についた出来事について話しあつたが、どういふことなのか要するに判らなかつたのである。

湯浅総長

退陣を決意

ところで湯浅総長は、新村、真下の両教授が共産主義者の嫌疑で検挙されたと聞いたとき、もうだもう頑張れない、退陣するほかないと決意したというのである。湯浅は、いよいよ同志社を去るとき、公の席でそのことを語っており、同志社の学生への「訣別之辞」の中でものべており、さらに、それから四〇年あまりのあいだ、くりかえし機会あるごとに自分は予科の二教授が共産主義者の疑いで逮捕されたために総長の地位を去つたと語っている。湯浅の退陣の日は一九三七年一二月末日であるが、一二月二九日、財団法人同志社の評議員会の席で彼は次のようにのべている。

然ルニ不幸ニシテ十一月八日ニ一ツノ問題ガ予科ニ突発致シマシタ。問題ハ唯今極秘ニ付セラレテ居リマスルカラ公ニ之ヲ発表スル訳ニ行キマセンガ、学園ノ総長ガ辞表ヲ提出シナケレバナラナイト考ヘル如キ重大ナル関

係ヲ有チマスルカラ、此ノ席デ触レルコトヲ御赦シヨ願ヒタイト思ヒマス。

十一月八日ニ、予科ノ教授眞下信一君哲學担当者、新村猛君佛蘭語担当者、此ノ二君ガ突如トシテ檢束サレマシタ。殆ド檢束ト同時刻ニ京都府警察部長ハ大沢理事ノ出頭ヲ求メラレテ事件ノ内容ニ付テ洩ラサレル所ガアリマシタノデ、私共ハ初メテ事件ノアツタコトヲソノ方面カラ知り、又学校ニモ檢察当局ノ方々ガ見ヘテ必要ナル御調ベヲサレルト云フ様ナ事態ガ發生致シマシタカラ、問題ノアルコトヲ確認致シマシタ。聞ク処ニ拠レバ、共產主義者ノ嫌疑ヲ蒙ムツタル檢舉デアルト云フコトデアリマス。従来同志社学園ニ対シテ、容共赤化ノ学園デアアル、或ハ総長ハ容共赤化ヲ建前トスルモノデアアル、或ハ之ヲ庇護シ或ハ之ヲ奨励スルモノデアアルト云ツタ如キ私共カラ申セバ中傷誹謗ガ横行シテ居リマシタケレドモ、之等ハ皆、根拠ナキモノト考ヘテ其ノ意味ニ於テ対応酬シテ居ツタニ過ギナイノデアリマス。

十一月八日ノ問題ハ、国家ノ権力ト權威ニ於キマシテ同志社ニ共產主義者ノ嫌疑ガカケラレタ訳デアリマス。之ハ極メテ重大ニシテ嚴肅ナル問題デアルト存ジマス。此ノ責任ヲ一早く感ゼラレテ予科長ハ即日、大学長ハ十一月十日付デ辞表ヲ提出セラレテ居ル様ナ次第デアリマス。総長ト致シマシテモ、学園カラ共產主義者ヲ出シタト云フコトハ誠ニ恐懼ノ至リデアアルノデアリマシテ、責任ヲ感ズル次第デアリマス。(中略)昭和十二年七月以降ハ共產主義ヲ以テ国家ハ戦争ノ目標トシテ居ルノデアリマシテ、(中略)国家ガ国運ヲ賭シテ戦争ノ目標トシテ居ル共產主義ノコトデアリマスカラ、仮令嫌疑ト雖モ、同志社カラ共產主義者ノ嫌疑ヲ受ケルモノガ出タト云フコトハ、取モ直サズ国賊的嫌疑ガ同志社ニ投ゲカケラレ、国賊ノ嫌疑ヲ受ケタモノガ同志社カラ出タト云フコトニナルノデアリマス。

総長のあいさつの全文は速記録の形でこの通り、量的には、ここに引用した部分の三倍に達しているが、総

長はこのあとただちに会場を去り、評議員会は総長の辞任を事後承認したのである。

湯浅がここで示した判断に関しては、若干批判の余地は存在する。共産主義者の疑いがかけられ検束されたというだけで、すべてはおわったかのように思いこむというのは、あまりにも思想検事や特高警察を信用し、あまりにも同志社の教授を信用しなかったということになりはしないか。林要の場合、湯浅は個人的に親しい関係にあったこともあって、マルクス主義者ではないと思うといって擁護し、予科の二教授の場合は親しい関係にはなかったで「国賊的嫌疑」ということになってしまったのであるが、うなづけない部分もないではない。一九三七年七月から日本が共産主義を戦争の目標にして国運を賭してたたかったという断定は正確ではないといわねばならないが、湯浅の主観においてはそうなっていたのであろう。

ともかくも湯浅にとっては、神棚事件いらい悪戦苦闘の連続であって、敵は時流にのってますます執拗に攻撃をかけており、湯浅自身は本来共産党のシンパサイザーではなかったが、赤化教授擁護者のレッテルをはられ、つらい思いをさせられた。湯浅は、新島襄のつくった同志社、そのキリスト教的独自性はどうしてもまもりたい、もらねばならぬと決意し、使命感にもえて奮闘してきたのであるが、第三者からみれば驚くべき精神力であって、よくもからだがつづいたと思われるようなたぐいのものであった。そこへ予科の二教授が共産主義者の嫌疑で検挙された、検事や警察官が研究室を搜索にきたという情報を耳にし、もうこれ以上たかえないと湯浅が観念したということは、じゅうぶん理解できるのである。

新村、真下

柴山予科長は、新村、真下両教授が検挙されたその日、一月八日、大塚学長は一〇日に辞表を両教授の辞表

出したというのであるが、これは責任を感じて責任者の地位から退くという意志表示であって、教授をやめるということではなかった。

予科長は次に、新村、真下両教授がちょっとやそつとでは復帰できないとすれば、休講のまゝいつまでもほっておくことはできない、後任者の選定もせねばならない。とすると両教授の留守宅へ行って、辞表を呈出してもらう交渉をせねばならない、しかしそんなことをうかつに言い出せないと思い、予科の評議員たちの意見をひそかにきいていたようであつた。ただし、予科から赤化教授が二人も出たという噂がひろまるのを怖れ、一日も早く同志社との縁を切りたいという気持があつたかどうかは全く判らない。

真下夫人のところへは予科長自ら出むいたのか、教務主任が代理でいったのか、評議員の誰かが付きそつたのか、そのへんのところは明らかでないが、辞表を出して頂けないかという意向が伝えられ、真下夫人は警察へ行ってそのことを夫君に伝えた。真下は、かつとなつたが、出せというなら出してやるという意味の返事をした。そこで真下の岳父が辞表を作製して警察に持参し、真下が署名捺印し、日付は一月一日とされ、その書類は予科長にとどけられた。

新村にかんしては、辞表提出の話は父君の新村出博士いづものところにもちこまれ、出博士は、辞表提出を勧告する手紙をしたためて警察に留置されている次男猛にとどけた。新村猛は怒って父君の手紙をその場で引きさいたが、あとで弱気になり、辞表に署名捺印し、真下の辞表同様予科長にとどけられた。予科長から学長、学長から総長の手にわたり、同月二二日の定例常務理事会で辞表は正式に受理され、両教授と同志社との縁は切れた。

それにしても検挙後わずかに二週間、事は何とスピーディーに運んだことであろう。せめてさいごの常務理事会で、軽がるしく辞表を受理すべきではないという声が出てよかったのではないかと思われるが、この二年間、常務理事会は、右派であれ左派であれ教授の辞表の受理を可決決定しすぎてきたので不感症になっていたのかも判らない。予科の両教授が湯浅総長支持の線で動いてきたことは誰の目にも明らかであつたが、共產主義者の汚名をき

せられたとたん、もはやいたし方ないという空気、そういう空気が常務理事会の中にもあったのではあるまいか。

当時の同志社人一般は、同志社はつぶれるのではないか、つぶされるのではないか、軍部からはいらまされてい、文部省も同志社に悪意をもっている、右翼は同志社を敵視している、財界は同志社の卒業生を採用しないと言っている、ということでおびえていた。同じ時期に、関西大学では一人の若い教師が治安維持法違反の疑いで検挙されたが、大学当局は辞表の提出を求めたりせず、裁判所が判決を出すまで毎月の俸給を支払った。関西大学の社会学の教授岩崎卯一はそのことを語って同志社のやり方は不可解であると言ったが、同志社大学の空気はまさしく異常であって、よその大学のようなゆとりをもって判断を下すことができなかったのである。

警察に留置されていた真下の側からすれば、自分は法律に違反しているようなことは何もしていないし、明日にも釈放されるかもしれない、それにいきなり辞表を出せとは何事だ、ということだったと思われる。

敗戦後、GHQの意向にもとづいて、日本の諸大学は、進歩的思想のために学園から追放された教授たちに対して、復帰して頂きたいという手紙を出した。同志社大学も、元教授だった一二名に対して手紙を出したが、真下は、京都での留置生活を始めるか始めないうちに辞表を出せといわれた時のことを思い出してにがい気持ちになり、復帰などするものかと思った。

『世界文化』同人は中井、新村、真下につづいて半年のあいだに九名が追加的に検挙された。取調べる側は、治安維持法を常識では考えられないような拡大解釈をして一人でも多く起訴にもちこもうとし、調べられる側は多かれすくなかれねばり、真下も新村もねばったが、ついにはあきらめて、特高の思う通りの共産主義者に自らをしたてあげる結果となった。

新村、真下の二人がねばりにねばって無罪をかちとり、湯浅総長に対して、大変ご迷惑をおかけしましたが、結



南京陥落を報じた新聞

局何でもありませんでした、とあいさつできれば言うことはなかったのであるが、残念ながらそういう風にはならなかった。二人はいずれも法廷で懲役二年、執行猶予三年の判決を申しわたされたのである。

湯浅総長 一九三七年一月一日には、クリスチャン教授として知られている矢内原忠雄が東大を去らねばならないことになった。

一三日には日本軍が南京を攻略した。同志社では一七日午後一時から今出川運動場で「南京入城祝賀式」が行われた。この日、大塚学長は同志社を代表して南京入城のおよろこびを申しあげるために、深草の第一六師団司令部にうかがったところ、師団長閣下は「世界の歴史はこの日を起点として大きく変化するであろう」と仰せられた、ということであった。夜は日本の各地で祝賀のちようちん行列が行われた。

一月二二日午前一〇時より定例常務理事会、午後二時より臨時理事会が開催されたが、主な議題は何れも湯浅総長の辞表を受理するかどうかであった。この件については各教授会で意見が求められるということとはあったが、強く留任を求める声はなかったもようである。

常務理事会は辞任やむなしの結論を出し、午後の理事会、これには一八名の理事中一三名、四名の監事中一名が出席し、審議した結果は正式記録には次のように言いあらわされている。

一、総長進退ニ関スル件

総長ハ予科不祥事件ノ責ヲ負ヒ、大義名分ヲ学園ノ内外ニ明カニセンカ



湯浅八郎夫妻慰労お茶の会(1938年1月22日)

タメ十一月八日付ヲ以テ理事会宛辞表ヲ提出ス

右ハ理事会トシテ頗ル遺憾ナレドモ総長ノ真意ヲ諒トシ辞表受理

ニ可決々定ス 但本月末日迄在任ノ事

三、大学長進退ニ関スル件

大学長大塚節治氏ヨリ予科不祥事件ニ関シ統督不行届ノ責ヲ負ヒ
辞表ヲ提出アリタリ、右取扱ニ付審議シ度右ハ頗ル遺憾ナレドモ
辞意ヲ諒トシ辞表受理ニ決定ス、但シ後任者選定マデ就任ノ事

予科長の人事に関しては理事会の議題とならず、常務理事会で片付
けられた。柴山予科長の後任者を予科教授会は、英語担当者、陸軍予
備大尉の木畑浩四郎（はたこうしろう）を選び、それが常務理事会によって承認された。

一二月二三日の新聞は、湯浅総長の退陣が理事会によって可決決定
されたことを報じ、同志社騒動に関しては大きなピリオドがうたれた
と思われたのであるが、同志社当局は実は一つのミスを犯していた。同志社財団寄附行為第三二条に「総長ノ選挙
及進退（中略）ハ評議員会ノ諮問ヲ経ルコトヲ要ス」という一行があるにもかかわらず諮問がされていないこと、こ
のことを誰かがおくれて気付いたらしく、評議員会はおしせまった一二月二九日に召集された。

評議員四三名中出席者二六名、過半数で会は成立したと宣言され、そのあと湯浅総長は先に引用したようなあい
さつをし、問題は身辺のことでありますからと言って退席した。

そのあと出席評議員のあいだから強い不満が次つぎと表明された。自分たちは理事会が湯浅総長の辞任に可決決

定したことを新聞によって知らされた。そのあとに評議員会を開いて諮問とは何事か、評議員会が総長の辞任を承認しないという結論を出したら一体どうなるのか、この三年間学園はもめつづけ、われわれは頭をいため、憂えていたのに、評議員会を一度も開かなかったのはどういうわけかなどの糾明が、山本美越乃、猿丸吉左衛門、瀬川次郎、中塚種夫から次つぎと出た。

戦後の学校法人同志社において、評議員会の存在が重きをなしているかどうか、極めて疑わしいが、戦前戦中の同志社財団において評議員会は形式的に存在させられているだけであって、原田助社長時代にも評議員のあいだで、当局は評議員会を開いてわれわれの声をきこうとしないという声が出たことがある。海老名弾正総長時代に、理事会は年二回開催、常務理事会は毎月一回開催が寄附行為によって定められたのであるから、理事会そのものが形式的な存在と化し、評議員会はあつてなきがごとき扱いをうけたのも当然であつたかもしれない。総長をある程度制約しえたのは常務理事会であり、一方正式の大学評議会機関も成立していなかったのであるから、大学長を兼任する総長としての湯浅は独裁者としてふるまおうと思えばふるまえたのであり、事実ふるまつたのである。私利私慾によってではなく、誠心誠意、神のみ声をききながら、そして偏狭な国家主義、軍国主義から同志社を守ろうとしたことは認められねばならないが、一般教職員の声、財団評議員、校友の声をきく姿勢にかけたこと、激しく分裂抗争している法学部の一方の派の一、二の教授の声をきくとどまつたということには問題があつた。

戦前の京都帝国大学教授は学者として最高の地位であり、定年退職後、私立同志社の総長も教授も恩給ゼロであつたのに対し、帝大教授の老後の生活は十分に保証されていた。同志社総長をわずか二年と一ヵ月で去つていった湯浅に対して、同志社が退職金という形でどれだけのことをなしたか、今日明らかにされてはいないが、お粗末しごくであつただろうという見当はつく。同志社の無事安泰だけをひたすら願っていた同志社人は、湯浅の退陣

でホッとしたかもしれない。しかしそのような人たちの上にも湯浅の精神力、激しい使命感は何らかのものを遺したかと思われる。湯浅は、自分は最高責任者としてやるべきことはやったと思って同志社を去っていったにちがいない。

湯浅総長が辞任したあと、財務部長上谷続がしばらく総長事務取扱をつとめ、一九三八（昭和一三）年七月から牧野虎次が総長事務取扱に就任した。牧野の総長就任は、一九四一年七月である。

第七章 同志社専門学校の変遷と終息

英語師範部の改称と学則変更

一九三七（昭和一二）年三月二七日付で、神学部と英語師範部第二部（夜間）の廃部について認可をえた同志社専門学校は、以後、英語師範部（昼間）と、同年三月二七日付で法経部を改称することを認可された法律経済部（昼間）の二つの部を設置するだけの学校になった。

一九三八（昭和一二）年度の専門学校入学者は、英語師範部（定員、一学年四〇名）の志願者四九名、入学者二八名。法律経済部（定員、一学年一〇〇名）の志願者一四九名、入学者八三名だから、いずれも定員を下まわっており、決してかんばしい状態とはいえない。特に英語師範部が相かわらず伸び悩みの状態を続けていて、志願者全員を入学させても定員を少し超える程度にすぎない。しかし、先の舟橋雄の「報告・意見書」^{ふなはしたけし}（第三部第九章）にあったように、一定の学力のレベルを維持するためには、ある程度選拔せざるを得なかった。

そういう状態ではあったが、英語師範部の同年三月以降の卒業生に対して、五月六日付で英語科中等教員等無試

験検定取扱について文部省の認可をえた。昼間部を設けてから五年目であった。

この一九三八年には、英語師範部内で部名の改称と学則変更について検討され、結論をえて理事会へ提出された。翌一九三九（昭和一四）年二月五日の常務理事会および定例理事会において、「専門学校英語師範部」『専門学校高等英語部』ト改称シ、支那語及支那事情講座ヲ増設」する件を審議決定した。これは当然ながらさつそく文部省に認可申請がおこなわれ、「予テ申請中ノ英語師範部ヲ高等英語部ト改称シ毎週六時間支那語及東亜事情講座ヲ増設ノ件ハ三月二日付京專十三号ヲ以テ文部大臣ヨリ認可セラレタリ」と、同年三月一二日の常務理事会に報告されている。認可を得た段階で変っているのは、「支那事情」が「東亜事情」になっている点のみで、「支那語」は各学年毎週四時間、「東亜事情」は各学年毎週二時間の授業で、いずれも必修科目になっている。部名の改称および科目の増設は、入学志願者の増加を意図してのことであった。時代の趨勢を明らかに考慮にいられている。また、英語師範部という名称は、英語教員の養成機関と狭く限定して受けとられる可能性が多分にあった。

右の部名改称と学則改正について、『大阪毎日新聞』（昭和一四年二月二二日）は、「同志社に支那語——新学期から専門部に——」という見出しで、次のように報じている。

同志社専門学校では時代の要請に応じて支那語講座の新設を企図してゐたが、いよいよ来る新学期から従来の英語師範部を高等英語部と改称、同部に毎週六時間の支那語と東亜事情を増設し、これを必須科目として課し同校卒業生に大陸進出への有力なる武器を与へることになった。

認可を得るまえに、すでにこのように報道されているところから察して、認可の見通しを得た段階で「入学案内」などで公表したものと思われる。かなりセンセーショナルな、新聞記事独特の表現ではあるが、このような見方をされたという事実は看過しがたい。専門学校英語師範部にかぎらず、同志社全体が一九三八年以降急速に時局の影

響をあらわに示すようになる、つまり、戦時体制の圧力をもろに受けて変貌していった事実是否めない。しかしそれは、一同志社にかぎられる変動でなかったことは断わるまでもない。

一九四二(昭和一七)年一月に発行された「同志社専門学校入学案内」に掲載されている学科課程表には、先の「東亜事情」が見当らず、「支那語」も各学年毎週二時間に時間数を削減し、しかも選択科目に入っているだけである。この学則改正の経過と理由については詳らかにしがたいが、時代に逆行するような方向を高等英語部がとりつつあったのではないと言って、おそらく間違いないだろう。大局的にみれば、科目の改変などは些細な問題にすぎなかったのである。

同志社専門学校から外事専門学校へ

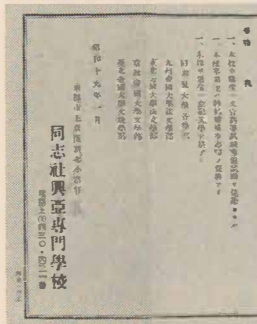
一九四三(昭和一八)年一二月二一日の閣議で決定された「教育ニ関スル戦時非常措置方策」の影響は、同志社に限らず全国の私立大学・専門学校などにとって、実に決定的致命的であった。それは、文科系の学生定員的大幅な削減と、それに伴う学部・学科の閉鎖や統合、教職員の解職を余儀なくせしめたのである。同志社でも、大学学部の定員削減はもちろんのこと、予科の定員は三分の一、専門学校の定員は二分の一にせざるを得ないなど、まさに存亡の局面に立たされることになった。

同志社興亜 この政府の方針を受けて、同志社専門学校も抜本的な改組に着手することになった。一九四四(昭和一九)年二月一〇日の臨時理事会で決定をみた改組方針は、高等英語部と法律経済部を合体した

「同志社興亜専門学校」の設立であった。

改組の主旨は、「教育ニ関スル戦時非常措置方策」の方針に従い「これに即応するため、従来の学科内容を根本的に一新して学校の性格をより明確ならしめ、以て教育目的の徹底を期せんとするものである」とのべている。それに応じて同志社専門学校という校名も改め、「興亜教育を主眼として学科目に一大変改を与へ（中略）日本国家及び国民の対外的発展並に大東亜共栄圏の確立に必要なとされる基礎的理論と応用とを総合的に学修せしめ」ようという教育方針にふさわしい名称として、「同志社興亜専門学校」という校名を採用することになった。同志社は伝統的に語学とくに英語について優秀であることは社会的にも承認されているところであり、さらに、設立以来の「進取開拓精神」を有する人材の育成と、「諸外国との交渉や関係が比較的に濃厚」である点でも、「伝統を保持し、その教育的特色を発揮する所以」であると、右の改組原案には書かれている。非常事態のもとで大学予科の存続を決めた同志社は（廃止するなら学生は帝国大学に委託し、退職せざるを得ない教員に対する退職手当などは、国が補助するという方針が文部省から通告されていた）、極力自活の方途を講じなければならなかった。牧野総長自身が会長になって「同志社維持会」を発足させ、募金運動を再開したのは一九四三年秋である。右の一月一〇日の臨時理事会では、「興亜専門学校」は国家の目的に添うために設立するのだから、「改組後の学校の性格」なども斟酌して、学生定員は二五〇名とすることで認可を得ようということになった。

この臨時理事会で決定をみた改組案が、申請書にどうまとめられ、文部省でどのように扱われたかは詳らかでないが、後述する工業専門学校設立のため同志社から設立委員を委嘱された小山熊治郎は、同志社事務局田中良一宛の書簡（一九四四年二月四日付）のなかで、次のように伝えている。「先般牧野総長が永井局長に会はれ専門学校は英語科と厚生科と二科とし名称を『興亜専門学校』とし新しく募集人員を一〇〇名とし度」旨、希望を申しのべ、局長も内諾したようである、しかし、その後の担当事務官の意見では、「興亜」という名称は適当でないとのことだか



「興亜」を「外事」に訂正した入学案内書

ら、「其内容に適したる名を選定」したほうがよいと思う、と書いている。総長牧野虎次が教育局長と話合った内容は、先の臨時理事会の決定とかなり違う。とくに大学の文化学科に厚生学専攻を設けているにもかかわらず（一九四四年一〇月、同専攻は法文学部厚生学科となる）、専門学校にも設置したいというのも不審である。小山は担当事務官からの又聞きなので、会談の正確な内容は把握していなかったのだろう。しかし少なくとも、「興亜専門学校」という校名は適当でないという事務官の意見は、直接聞いたにちがいない。それで田中に情報を伝え、再考をうながしたものと思われる。だが、同志社ではすでに、右の校名で生徒募集の印刷物まで用意していた（写真参照）。

外事専門学校への改組と同校の発足 おそらく右のような事情もあってのことであろうが、理事会では改組案を再検討し、手を加えて文部省と折衝し、一九四四（昭和一九）年三月に同志社外事専門学校の設置認可を得た。

同月に印刷公表された「外事専門学校学則」の第一条には、「本校ハ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉戴シ、専門学校令ニ拠リ興亜教育ヲ施シ、併セテ基督教主義人格教育ノ特色ヲ發揮シ、以テ国家社会ニ有用ナル人物ヲ養成スルヲ目的トス」とうたっている。入学定員については、「第一学年ニ入学セシムヘキ生徒定員ハ百人トス」とあるから、かなり多い数である。ただし、二年生・三年生の定員は記されていないので、総数は不明である。

なお、この学則および同年度の「入学案内」には、設置科目を羅列した「学科課程表」は掲載されているが、同校の設置学科は明示していない。従って単科の専門学校のような印象を受ける。文部省の認可を得る前に印刷したせいかもしれない。実際には支那科とマライ科の二科が設けられ、英語科は設置されなかった（同年九月二六日付「同志社外事専門学校増科案稟議」外専校長難波紋吉起案、総長牧野虎次宛）。難波は露西亞科、英米科、独逸科の三科増設を提案

し(同「稟議」)、もし三科の認可がえられないなら「露西亜科と英米科」、それも駄目ならば「英米科」の増設を実現するよう尽力して欲しいと書いている。この要請は理事会で審議され、一月三〇日付で文部省に申請されたけれども、翌一九四五(昭和二〇)年二月八日付で、「露西亜科一科ノミ増設」が認可されただけであった。

外事専門学校の初年度の志願者数は、徴兵猶予の特典もなくなっていたにもかかわらず、一〇六四名という多数にのぼっている。この数は専門学校にとって、高等商業学校が独立して以来の記録的なものである。兵役までの僅かな年月を、せめて勉学で過ごさせたいという父兄の思いやりや、入隊後の昇進の関係などが、おそらくこの飛躍的な増加をもたらしたのであろう。しかし、入学はしても、教室で静かに勉学しうるような時代ではなかった。彼らを待っていたのは、ほとんど連日にわたる勤労働員であった。同年度には第一次合格者二三六名、第二次合格者及び補欠一三一名に入学許可を与えている。このうちの何名が実際に入学したかは詳らかでない。

ちなみに、高等商業学校は一九四四年四月から、文部省の指示もあって経済専門学校と改称した。

工業専門学校の設立

文科系の大学や専門学校に反して、理科系・工科系については、「学生ニ対シテ入営延期ノ制度ヲ設ケ、理工科系統ノ学校ノ整備拡充ヲ図ル」(「教育ニ関スル戦時非常措置方策」)、つまり徴兵猶予の特典も与えるなど、国家はその人材養成をむしろ奨励した。同志社も理工系の学部を設けることによって、経営難打解の一助たらしめようと考えた。

一九四三(昭和一八)年には、専門学校レベルの農学部の新設が検討され、その青写真がつくられた。岩倉校地の



加藤与五郎



小山熊治郎

放置されている部分を実習農場とし、その近辺の山林を借地あるいは買収する予定もあった。しかしこれは計画のみに終わっている。おそらく文部省が難色を示し、また、適当な教員スタッフも得がたかったのであろう。

同志社大学理工学部設置の企て 一九四三年七月二四日の理事会（昭和一八年度第一回）では、「理工学部設置並ニ此レニ関連シ現

教育再興調査委員会」を発足させていた。ハリス理化学学校廃校の後、しばしば懸案事項として協議され、校友会などからも建議された問題である。新設といわずに「再興」と称しているのは、そうした歴史的経過があることや、

ハリス理化学館が十分使用に耐えること（中学校が使用していた）、再興としたほうが文部省の認可を得やすいのではないかといった思惑からであろう。右の委員会の委員長には中瀬古六郎、委員には秦孝治郎、石川芳次郎、三宅驥一、加藤与五郎、鈴木達治、奥村龍三、黒川芳蔵、山田貞夫をそれぞれ委嘱し、幹事は総長秘書森川正雄であった。後に小山熊治郎にも委員を委嘱した。文部省との折衝には主として小山が当たったようである。彼は逓信省の技師を勤めたこともあり、中部共同火力発電株式会社取締役の要職を経験していたので、官庁関係にも知人が多かったようだ。また、京都帝大総長鳥養利三郎と同期だったから、その援助を得ることもできた。

同委員会がまとめた最初の計画は、大学の一学部として理工学部を置き、一九四四年四月から大学予科に理科甲類を設けて、一学年一組四〇名を四組、合計一六〇名を入学させて、その入学者が大学に進学する一九四六（昭和二一）年四月に応用化学科、航空工学科、電気工学科、工業経営学科の四学科を発足させる、施設はさし

あたり理化学館、学生会館、梨木寮（元ハワイ寮）、新島会館など既存のものをもって充当する、という原案であった（「同志社理工学教育再興草案」一九四三年七月二四日付）。先の理事会では、この案をめぐる懇談したと思われる。

工業専門

学校の設立

右の「草案」をもとに、文部省との予備折衝がおこなわれたようだが、それは同省の認可を与える見込みがほとんどないものであった。同省には、たとえそれが、国家が必要とする理工学教育のためのものであると、この非常時局に五年も六年も修業年限を必要とするような私立大学の学部の設定を認可する意思は、最初からなかったのである。幹事森川正雄宛の小山の書簡（一九四四年二月二日付）には、「文部省の方針としては専門学校は最早学を詰込む処に非ず、国の為実際工場にて仕事する人を養成する処にて」などと書かれている。専門学校でさえそうである、大学学部の設立認可など期待すべくもない状態であった。文部省は、可能な限り短期間に、工場など現場で役立つ人材の養成を希望したのであった。

そこで右の調査委員会では、「草案」を根本的に練り直して、名称を「同志社高等工業学校」とし、修業年限は三カ年、「学科ハ通信工学科、機械工学科、応用化学科ノ三科トス。但シ航空工学科、土木工学科ハ可及的速ニ設置方考慮ノ事トス」、定員は各学科それぞれ五〇名、という新しい計画をまとめた（右調査委員会「第十三回学内委員会記録」一九四三年二月一三日）。なお、理工学系統の学科には実習工場が必要だったので、株式会社島津製作所、日本電池株式会社、松下電器株式会社、松下電器産業株式会社、松下無線株式会社、京都技術科学館、マルキイースト菌研究所などと交渉し、その援助を得ることになった。

こうして、一九四三年二月二四日の理事会において、「国家ノ要求ニ対応センガ為メ同志社ハ此際理工系専門学校ヲ開設スルコト、シ、昭和十九年四月ヲ期シ先ヅ応用化学、機械、電気通信ノ三学科及時宜ニ依リ工業経営科

ヲ加へ、工業専門学校又ハ適當ノ名称ノ下ニ政府ニ出願スルコトニ関シ一切ノ措置ヲ為スコト」を決議した。同日の常務理事会で、名称は同志社工業専門学校とし、通信工学科、機械工学科、応用化学科の三科設置（定員はいずれも一学年五〇名）について申請することを決定、右の新設が認可されたならば、工業経営学科については「学則中一部変更手続ニ依リ追加申請スル」という方針で、年の暮が押し迫った一二月二七日付で、文部省へ認可申請の手続きをとった。そして、委員小山熊治郎らの奔走で、翌一九四四年二月二五日付をもって、電気通信科、機械科、化学工業科の三科の設置が認可された。認可通知書には、専門教育局長名で、「一、速ニ校長ヲ定ムルコト。二、教員組織、設備等ノ充実ニ付テハ計画通り其ノ実施ニ遺憾ナキヲ期スコト」という条件付で認可されたという文書が添えられていた。教員、設備ともに、決して十分な要件を備えてはいなかったのである。「工学」の文字を削除したのは、「教育ニ関スル戦時非常措置方策」に、私立大学の文科系の学部を、工業専門学校に転換する場合、「新設スベキ学科ハ概ネ機械科、航空学科、電気科、電気通信科、採鉱科、冶金科、金属工業科、土木科、建築科等現下緊要ナル学科トスルコト」とされているので、名称も文部省の指示に従ってであつたろう。また、それに合わせるため「応用化学科」は「化学工業科」と改められた（森川正雄宛小山書簡 同年二月一八日付）。

五月六日、工業専門学校の開校式が同志社公会堂で挙行され、一〇月三一日付で教授小山熊治郎（教員を得がたかつたので、彼も教授となり電気通信科の主任をも兼ねた）の専門学校校長就任が認可（申請は七月三二日付）され、それまで校長を兼務していた総長牧野虎次に代わった。

小山は後に往時を回顧して、新設の認可を得てさっそく学生募集をしたところ、「各科共定員の十数倍にも及び関西方面私学の『トップ』を切った訳である。当時理科系の学生には徴兵猶予の特典があった訳でもあるが軍部からは同志社は米国系の学園であるとの理由で特に風当たりが強かった様でもあるが、私学では関西で其起因も旧く内



同志社工業専門学校開校式記念

容も充実して居るので世間から相当信用のあったお蔭であらうと思はれる。其証拠には翌二十年の初にあたり突然軍部が新しく出来た理科系の専門学校に対し其特典を取上げることを発表し、其れが二年目の学生募集をせんとする直前の二月八日のことであるから吾々学校当局者は其対策を練ったが及ばず観念を決めて居ったが、夫れでも応募の結果は平均七倍の多数に及んだ」と言い、また開校前後のことについて、「何分戦争中理工科系の専門家が引張綱で、学校の先生に来る様な特志家がなく、私の外に電気 of 立石玄三郎教授、機械の田中昇教授、化学の内藤省三教授の四名で専門学校を受持つて居たのだから、其苦勞も思ひやられる」（『同志社に於ける理科教育の復活に就て』『紫工芸報』創刊号 一九五〇年）と書いている。教員人事についても、小山は随分尽力したのである。

なお、一九四四年一月二六日の常務理事会では、土木科と工業経営科の二科（定員いずれも一学年五〇名）を増設し、一九四五年四月より開講することを決議したが、果たして認可申請をしたのかどうかさえも詳らかにしがたい。

戦後の各専門学校

一九四五年八月一日の敗戦当時、同志社の男子校はまことに淋しいかぎりで、大学には予科と法文学部だけしかなく、専門学校の生徒たちも応召や勤労動員で、キャンパスは深閑としていた。教員も多数が退職し、まさに廃校寸前の気配であった。

生徒たちが徐々に復員して学校へ帰り、退職した教員もぼつぼつ復職して活気を取りもとすようになったが、しばらくは混乱状態がつづいた。そうした状況下で、すっかり荒廃していた学園をたてなおし、戦前の同志社を回復しようとする動きが開始され、徐々に整備されることになった。教員たちは学業の途中で応召された教え子に連絡を取り、復学をすすめるといった努力も払った。

学制の上では、まず外事専門学校が、一九四五年二月に支那科を中国科に、マライ科を米英科にそれぞれ改称した。前年四月に開設したばかりの同校は、支那科、マライ科とも一名の卒業生も出さないうちに、学科名称と学則を変更したのである。

工業専門学校電気科 工業専門学校については、小山熊治郎が先の回想文のなかで次のように書いている。
と製菓分科の新設 「昭和二十年の春から製菓科と電気科が増えて五科となったこと等は報告しておかねばな

らない。戦時中凡の工業が軍需用に切替えられて居た関係もあり、終戦と同時に我國の諸工業がまひ状態に陥り多数の技術者があふれ出された上に、沢山の理工科系の学校から卒業生が多数押出される影響等もあって、理科系の人気が悪くなった反対に文科系万能の時代となり、工業専門学校の存廃が論議されたというのである。理工系の学校は設備などのほか維持にも多額の費用を必要とすることも問題だったのであろう。「技術者」の需要が増大するのは、一九五〇（昭和二五）年ころからではないかと思う。

小山は右の文章（同志社に於ける理科教育の復活に就て）で、「昭和二十年の春から製菓科と電気科が」増設されたと書いているが、それは記憶ちがいである。実際には、一九四五年に校友篤志家より製菓実験設備に対して相当の寄附申し出があったので、それを基礎にして、化学工業製菓分科として新設の申請をし、翌一九四六年三月三〇日付で電気科の増設とともに文部省から認可されたのである。工業専門学校「昭和二十一年度入学志願者心得」には、

「電気科二五名（増科申請中）、電気通信分科二五名、機械科五〇名、化学工業科五〇名、化学工業製薬分科二〇名（増科申請中）」となっている。翌一九四七年四月からは、電気通信分科を電気通信科と改め、三科二分科から四科一分科に改組された。製薬分科は、一九四八（昭和二三）年六月九日付で、「薬剤師法」第二条第一号の指定を受ける申請（私立薬学専門学校規則に依り指定を受け度件申請）をおこない、同年九月一〇日付で「学生の実験実習は万遺漏なきよう特別の御配慮を願う」という条件で、卒業生に対して薬剤師資格付与について認可をえた。ハリス理化学校にも薬学科があった点からいえば、文字通り同志社理化学教育の再興であった。なお、右の「申請」書には、岩倉校地の岩倉農園の一部を薬草園にする計画だとして、その資料も添付している。岩倉農園といっても、それは実質的には、食糧不足を補うための戦時中からの手造りの菜園であった。

同志社大学

先の小山熊治郎の回想でもふれられていたことだが、敗戦後の数年間は「技術者」の需要がな
工学部への昇格 く、従って志願者も激減した。しかし財団法人同志社には、工業専門学校の施設充実などに十分な予算を割く余力はなく、その維持さえも困難をきわめ、小山ら工専関係者は廃校について理事会に提案したことさえあったようである。しかし理事会でも、折角ここまで維持してきたのだからと、廃校には踏み切れなかった。

そこで工業専門学校も、神、文、法、経済各学部と同様、一九四八年四月から新制大学への昇格を文部省に申請したが、施設不備などで同年は見送りになった。同校教員は父兄会役員のバック・アップも得て（卒業生の組織はまだ整備されていなかった）、鋭意設備の改善充実と教員スタッフの補充に力を傾注し、同年ようやくハリス理化学館を中学校から全面的に譲りうけるなどして、翌一九四九年四月から、電気学科、機械学科、工業化学科の三科をおく同志社大学工学部への昇格が認可された。電気通信科、化学工業製薬分科については、設備および教員スタッフの関係で申請を見送り、ついに、工業専門学校廃校とともに姿を消したことが惜しまれる。

工業専門

工業専門学校は、一九四九年三月より入学者の募集を停止し、在学生は、新設された工学部の当該学校の廃校 学科へ編入した者もあるが、一九五一（昭和二六）年三月を以て全員卒業した。そして同校は自然廃校となり、工学部長（第一代）兼工業専門学校校長小山熊治郎は、同校廃校と同時に退職した。工業専門学校のために同志社に在職したようなかたちになった。なお、同校の電気通信科卒業生に対しては、一九四七年四月一九日付で、「電気通信技術者資格検定規則第十六条第一項に依る認定校」として「第二級の資格を付与する」旨、逓信省工務局長より認定の通知を得ていたことを付記しておく。

外事専門

学校の廃校

外事専門学校および経済専門学校（元高等商業学校）も、工業専門学校とおなじく、一九四九年四月より募集を停止したので入学者はなくなった。その前年度に入学した専門学校一年生については、一九四九年三月に入学試験を受けさせて、新制大学教養学部一年次に入学させた。同年四月からは、外事専門学校の生徒は、一九四八年四月に発足していた新制大学に吸収された。経済専門学校の生徒は、翌四九年四月に発足した大学商学部、各学年次に応じて編入学試験を受け、同校一年修了者は一年次に、二年修了者は二年次にといた要領でそれぞれ編入学した。大学の各学部吸収あるいは編入学した以外の生徒たちは、そのまま専門学校にとどまり、一九五一年三月をもって全員卒業した。そして、翌一九五二（昭和二七）年三月、最も困難であった激動の時代に幾多の変遷をとげた同志社専門学校は、ついにその幕を閉じた。

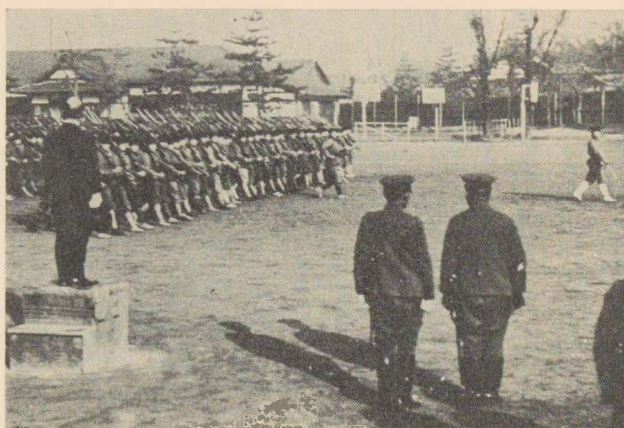
第八章 太平洋戦争下の学園——男子諸学校

「同志社寄附行為」の改正

日中戦争が長期戦の様相を呈し、戦況が年々悪化するに従って、教育と教育機関に対する政府の方針は加速度的に変化した。法的規制その他のコントロールが厳しくなり、教育機関も完全に戦時体制に組み込まれざるをえなくなった。たとえば、一九三九（昭和一四）年二月には「国民精神総動員強化方策」が閣議で決議され、同年五月二日には「青少年学徒ニ賜リタル勅語」が下賜される。文部省の主権によって、中国北部などへ長期間にわたる学徒勤労報国隊が派遣されるようになるのもそのころからである。

翌一九四〇年には、「修練組織強化ニ関スル件」や、大学での研究と教育の一致を要請し「大学教授ハ須ク国体ノ本義ニ則リ教学一体ノ精神ニ徹シ愈々教育者タルノ自覚ヲ振起シ師弟同行ノ間ニ（中略）負荷ノ大任ニ堪フベキ指導的人材ヲ育成スルニ力ムベシ」（文部省訓令第二九号）といった方針を打ち出した。

さらに、翌一九四一年には、「学校報国団体制確立方」（文部省訓令第二七号）とその具体的な規定、「女子学校報国



「青少年学徒ニ賜リタル勅語」拝読式後の分列行進
(1939年6月)

隊ノ実践訓練ニ関スル件」などが通達される。

寄附行為改正の 経過と内容

こうした時局下において、同志社理事会は「財団法人同志社寄附行為」の大幅な改正を行なった。一九四〇年度のことである。

おそらく相当時間をかけて検討されたものと思われるが、一九四〇年一月二七日の常務理事会に、改正案が提案された。その要点は、第一条「智徳並行ノ主義ニ基キ教育ノ業ヲ挙クルヲ以テ本財団ノ目的トス」とされていたのを、「教育ニ関スル勅語ヲ奉戴シ聖旨ヲ遵守シテ教育ノ実績ヲ挙クルコトヲ以テ本法人ノ目的トス」と改め、第四条「本財団ノ維持スル学校ハ基督教ヲ以テ徳育ノ基本トス」とうたっていたのを、「本法人ノ維持スル学校ハ皇国民ノ練成ヲ目的トシ之ニ適合スル基督教ノ精神ヲ採ツテ徳育ニ資ス」と改めたのである。

他の条項で大きく改変されたのは、資産に関する部分で、「基本財産ト普通財産トニ区分シ之カ管理方法ヲ定ム」(第六条)とし、新たに「事業ノ拡充、改善ノ必要アルトキハ(中略)主務大臣ノ承認ヲ経テ起債ヲ為スコトヲ得」(第一条)という条項を設けている。基本財産を確保し経営の基礎を強固にするとともに、新しい事業などを行う際の資金確保について配慮したもののだが、岩倉校地、アメリカン・ボードの資産処置の問題なども考慮してのことと思われる。他の改正条項に

ついでには、さほど大きい問題はないといつてよいだろう。

改正条項中、最も重要な点は、なんといつてもやはり第一条と第四条である。これは一八九八（明治三二）年の横井時雄社長の時代に、校友会も反対し、ついに大紛擾をひきおこしたいわゆる「同志社綱領」削除問題以来の大改革であつたといわねばならない。「不易ノ原則」（「同志社綱領」第六条）を、こゝでついに理事会は改変したのである。問題の重要性の認識は、理事会にもあつた。常務理事若松兎三郎は、改正案を審議した常務理事会の席上、次のようにその改正理由を説明している。

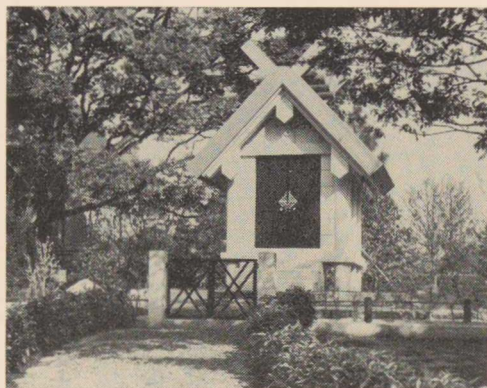
同志社ノ寄附行為ハ教育ニ関スル勅語渙発以前ノ制定ナルヲ以テ、条文中ニ勅語ノ聖旨奉戴ニ関シタル文言無カリシモ同志社教育ノ精神ハ元ヨリ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ニ悖ルモノニ非ザルハ勿論、同志社教育ノ精神ハ其中ニ含まレタルモノナルニ付、今日改正ニ当リテ此ノ点ヲ明瞭ナラシムル為、第一条ヲ別紙改正案ノ如ク改正セント欲スルモノナリ。歴史的ニハ同志社寄附行為制定当時以來、本条ハ不易ノ原則トサレ居ルモノ今回ノ改正案ハ文章上ノ改正ニシテ實質上ニ於テハ不易ノ原則ヲ破ルモノニ非ザルナリ。

そして、第四条に関しては、次のとおり述べている。

「皇国民ノ練成」ハ教育ノ全目的ニシテ且ツ監督官庁ノ希望モアリタルニ依リ此ノ文字ヲ用ヒタリ。

この説明からも、文部省、京都府庁などからの強い要請があつたことが察せられるが、さすがに「基督教ノ精神」という文言は残している。しかし、「皇国民ノ練成」に「適合スル」と限定しているところに問題があり、改正の苦心のあとがうかがえるともいえる（なお当時は「練成」と「錬成」のどちらも用いている）。

すでに一九三七年三月に、同志社諸学校の学則第一条については、「教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉戴シ」という文言を挿入する改正を行なつていた（中学は一九三五年三月）。これも文部省の要請にもとづくものであつたろう。「寄



奉安殿（1938年10月竣工）

附行為」第一条および第四条の改正は、実質的にはそうした実情に合わせた面がなかった。「文章上ノ改正」といつてしまふにしては、同志社にとって極めて重大な問題であつたが、そういう説明で一般の了解が得られるような状況に学校はたち至つていたともいえる。ただ、「総長ハ基督教信徒ニシテ本寄附行為第一条及第四条ノ主旨ヲ貫徹スルニ適當ナル者タルコトヲ要ス」（第一条）という条項は残された。しかし、その第一、四条の「主旨」が大きく改変されてしまったことは右にみたとおりである。

一九四〇年一月二日に右の改正案を常務理事会から諮問された評議員会では、開会前に昼食をはさんで四時間にわたる懇談会（理事も一緒であつたと思われる）をもっているが、その席上、「総長は規定によれば基督教信徒たる事を要するとあり、かくては広く人材を求める意味から不当であらう、財団経営にあつては財政的行政的手腕を必要とするのであるから信徒といふ狭い範囲に限らない事が適當ではないか（之に対して又反対の意見あり）」（『同志社新報』第五三号、以下『新報』と略称）など、有力な意見があつたと記されている。理事会、評議員会および学内の大勢がいかなる状況にあつたか、その一端を推察しようと言つてよいだろう。明治期の「同志社綱領」削除問題とは、事情が一八〇度転換していた。一八九八年のばあいは文部省も翌年、削除した部分を復元した「同志社寄附行為証」を認め、かつ徴兵猶予の特典もみとめたのである。

一九四一（昭和一六）年二月二七日に、寄附行為改正について申請し、文部省は四月一七日付をもって、ほとんど無条件にこれを認可した。総長事

務取扱牧野虎次は、「此改正に依りて同志社教育の目的は皇国民の鍊成であり、その目的を達成する為には、基督教の精神を以て徳育に資することを明白にした」とのべ、それは同志社教育が目指してきたものと抵触するものではないと書いている。なぜなら、「憂国愛国」が新島を「熱心なる基督教信者たらしめ」る動機となったのであり、「先生に取つて愛国心と信仰とは相依り相輔け」、決して矛盾するものではなかったことによって明らかだと、牧野は強調している（『皇国民鍊成と基督教精神』、『新報』第五八号）。

だが、牧野の新島解釈にはかなりけん強付会の面があることは否みがたく、同志社がいよいよ戦時体制に組み込まれ、創立以来の教育の精神をかなり大幅に喪失するに至った事実は否定しがたい。キリスト教主義教育は、決して「皇国民ノ練成」のためのものなどではなかったし、同志社の伝統的な校風ともいうべき自由も、ほとんど完全に失った。もちろん同志社の主体的な意思だけでそうした結果を招いたのではなかったが、「寄附行為」の改正は、象徴的な出来事であった。同志社はここで、戦時体制への最後の曲り角をまがったのであった。

新島先生永眠五〇周年記念事業

「同志社寄附行為」の改正が理事会その他で審議された一九四〇（昭和一五）年は、たまたま新島襄永眠五〇年に当たる年であった。

同志社は同年一月、次のような記念行事をおこなった。

1 講演会

一月二十日午後六時、三条基督教青年会館

挨拶 牧野虎次総長

魚木忠一教授「教育の一流流として見たる新島先生」

難波紋吉教授「新島精神の現代的展望」

2 ラヂオ放送

一月二十三日、牧野総長「新島精神に生きよ」

3 若王子早天祈禱会

一月二十七日

4 記念式

一月二十七日、栄光館

5 記念伝道

一月十八日、すえまつ二十八日、木村清松牧師、吉田清太郎牧師

6 洗礼式

一月二十八日、堀貞一牧師

7 学生信徒大会

一月十八日

(『新報』第四四号)

講演会は市電にポスターを掲げるなど宣伝につとめたせいもあってか、開演前に満員になったとのであり、洗礼式では学生主事青井厚はじめ一三一名が堀牧師から受洗している。当時としては、少なくとも人数のうえでは画期的なことであった。一九二七(昭和二年)に同志社教会牧師および宗教主任に就任した堀貞一は、老齢(八〇歳)のため一月末日をもって退任し、二月二日に京都を去った。右の洗礼式が同志社での彼の最後の勤めになった。

記念事業の特質

この一連の行事は、戦時下における同志社が放った最後の光彩でありフィナーレであった。就任以来、精力的な教会活動をおこなった堀の退任が、いっそうその感を深くさせる。

だが、魚木の右の講演は、「新島先生が明治の実利主義的大勢に抗して勇敢に標榜せられた精神主義は、儒教によつて洗練された我国の伝統的精神主義を、基督教によつて深めたものであつた」といった解釈をおこない、そういう新島に対して、福沢諭吉の教育思想は、精神主義と呼ぶのは正しくないと断定したものである(『新報』第四四号に全文掲載)。両者の対比に関するかぎりにおいては、魚木の見解は誤りとはいえない。しかし、伝統的な儒教倫理を前面に押し出した解釈は、新島の一面を誇張したものであり、やはり時代の影響がかなり濃く影をおとしている

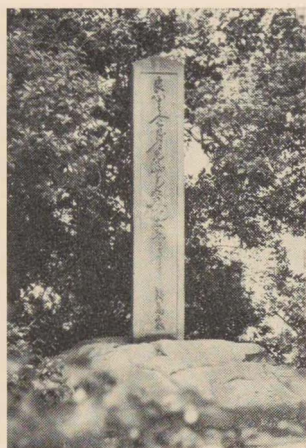
と言わざるをえない。「斯くの如き教育は、決して一方に偏したる智育にて達し得可き者に非ず、又た既に人心を支配するの能力を失ふたる儒教主義の能くす可き所に非ず」(同志社大学設立の旨意)といった新島の一面には、まったく言及していない。同じときの難波の講演は、右の『同志社新報』に概要が紹介されているだけだが、それによると、「(新島)先生の精神要素を日本武士道の死して生きる精神と基督教の十字架愛の結晶」としてとらえ、その精神は「昭和維新即ち新東亜建設に当つて如何に重要な役割を果すか」を、難波は強調したようである。魚木以上にその解釈はゆがんでいる。

こうした講演が行事のプロローグを飾っていることは、おそらく新島五〇年記念行事の性格を、大なり小なり象徴的に物語っているはずである。純粹に新島追悼の行事を遂行し、新島の全体像とその念願を正しくとらえなおすとしては、時代的狀況があまりに悪化していたといわねばなるまい。

校友会主催 学校の記念行事と並行して、校友会でも事業を計画し、徳富猪一郎、牧野虎次、若松兎三郎の三名の**記念事業** が発起人となつて、一九四〇(昭和一五)年三月および四月(『新報』第四五、四六号)、校友に募金をうっ

たえている。その文章には、「新島先生記念集及書簡集発行の計画実施有之候得共尚私共の胸裡に予ねて往来しつつある新島先生遺邸の修繕及遺品庫の建築等を有志同人間の記念事業として施設し以て能ふ限り先生の遺芳を後昆に相伝へ申度存候」とあり、募金の目標額は三万円で、右の他に新島遺跡五カ所に石標を建てること、遺品展覧会、講演会などの計画があることを明らかにしている。翌一九四一年六月二〇日現在の申込総額は一万九三六五円三〇銭であり、支出予定額になお九八八円足りないと報告している(『新報』第六〇号)。しかし、所定の事業は着々と実現したのであった。

たとえば、一九四〇年十一月二九日には、社友半田善四郎から石材の寄贈をえて、同志社構内に建てられたいわ



良心碑

ゆる良心碑の除幕式が挙行され、『新島先生記念集』（一九四〇年一月）、『新島先生書簡集』（一九四二年六月）その他の記念印刷物が、用紙不足にもかかわらず相ついで刊行された。また、波多野培根にとくに依頼して、『新島先生の生涯の意義』という長編論文を執筆してもらい、『同志社新報』第四四号付録（一九四〇年二月）八ページだてで一挙に掲載したほか、同年一〇月には東京と大阪のデパートで大々的に「新島襄五十周年記念展覧会」を開催し、東京での展覧会初日には、永井柳太郎と徳富猪一郎の記念講演会がおこなわれた。また、校友池田庄太郎の一万円の寄附により、一九四二（昭和一七）年一月に新島先生遺品庫が完成し、室内の乾燥を待って、同年一月二八日に開館式と遺品の展示公開がおこなわれた。

こうした一連の行事は、校友が純粋に新島追慕の心情から行なったものであり、しかもそれらの事業の多くは後世に残った。あの暗い政治的社会的状況下における一服の清涼剤という感じを覚えるが、その衝にあつた人たちの苦心はなみ大抵ではなかった。たまたま新島五〇年記念の年は、政府が強調した「紀元二千六百年」に当たっていた。記念事業委員会委員長徳富猪一郎は、「展覧会趣意書」を次のように書き起している。

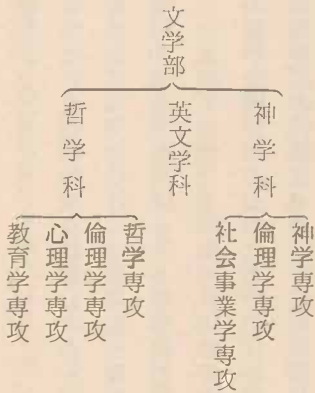
紀元二千六百年即ち昭和十五年は新島先生が大いなる壮図を抱きつゝ大磯の客舎に永眠せられてより五十年忌に到来した。（中略）先生の純粋基督教者たることは吾も人も皆知る処であるが同時に極めて熱烈なる我が皇国の愛国者であつたのである。

同志社でも、「紀元二千六百年」奉祝の式典と一連の行事を、一一月一〇日を中心に実施している。国民の戦意を鼓舞しようとする政府の方策に従つてのことである。新島五〇年記念事業は、そうした式典や

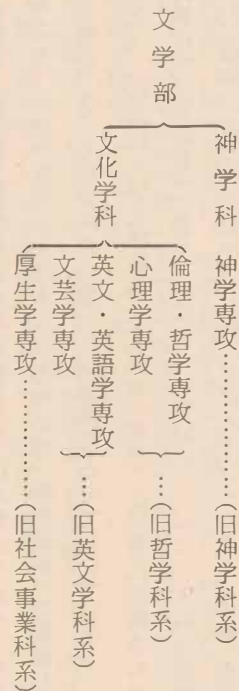
諸行事と重なりあうことになった。しかし、記念事業の内容そのものは、時代の影響をさほどあらわには留めていない。物資が豊富でより自由であつたならばと、その点が惜しまれるのである。

大学文学部の改組

日中戦争開戦前後から、同志社専門学校をはじめ諸学校の学則はしばしば改正されてきたが、「寄附行為」改正案を議決した一九四〇（昭和一五）年一月二七日の常務理事会で、大学文学部学則のきわめて大幅な改正が決定された。それまでの大学には、大学院および法学部（法律学科・経済学科・政治学科）と文学部（神学科・英文学科・哲学科）が設置されており、一九四〇年四月改正以前には文学部の学科・専攻組織は、次のようになっていた。



これを大幅に整理統合して、次表のように改めたのである。



学科のこのような整理統合について、当日の常務理事会では、「右ノ如ク整理ヲナシ時間数ヲ減ジ専攻課目ヲ整理シ神学科ニ於テハ文化学科ト三科目ヲ共通トシ、文化学科ニ於テハ六科目ノ共通科目ヲ設ケ単位ヲ三十、総時数ヲ六十時間トナシタリ。右整理ニ依リ前年度ニ比シ経費金参千円也ヲ減少スルコトヲ得、又従来ハ神学科单独ニテ金一万七千円也ノ経費不足ナリシガ右整理ニ依リ神学科单独ノ不足経費ハ金壹万円トナル」と説明されている。

文学部改組の特質

ここに、「文化学科」という学科がはじめて現われ、神学科の規模はいちじるしく縮小され、英文学科は一専攻として位置づけられることになった。常務理事会では、もっぱら経費節減についてしか言及していないし、おそらくそれが重大な関心事であつたであらうことは、当時の教員数と学生数の比率などからも推察しうる。法学部についてはなんら改正のあとが見られないのも、理由のひとつはその点にあつたものと思われる。しかし、文学部改組つまり学則改正について当然審議したであろう文学部教授会が、常務理事会とおなじ問題意識しかもっていなかったとは考えがたい。残念ながら、教授会記録にもとづいてのべることができないけれども、おそらく文学部所属のしかるべき職責にあつた教員が書いたものと思われる「文学部改正学制」

『新報』第五六号)では、改正の要点を次のように説明している(1—4項はすべて抄録)。

1、将来国民の指導者として処する為めには、文学部卒業者と雖も社会経済に関する基本的素養を必要とするとの見地より各専攻を通じて社会学、経済原論を必須科目」として加えた。

2、「専攻制度の確立を図つた事、(中略)学の蘊奥を究むるには専攻制を適當とするに外ならぬ」。

3、「新専攻講座を設置した事、英語英文学専攻、文芸学専攻、厚生学専攻を新設し時代の要求に」応じた。

4、「女子入学範囲の拡張を図つた事、(中略)従来は同志社女子専門学校英文科卒業程度を以て入学資格としたものを家政科卒業程度を以て入学資格とした」。

あまり満足すべき説明とはいいがたいが、これにつけ加えて、「之を要するに皇国民を鍊成し国家有用の材を養成せんとするものであり日本精神史、基督教通論を必須科目とした事も斯る点を配慮したもの」だとのべている。

改正の主眼は、客観的にみて(1)経費の節減、(2)神学科の縮小、(3)英文学科を専攻に格下げ、(4)学科目の整理などであつたと思われる。右の説明では、「専攻制度の確立」と「新専攻講座を設置」したといっているが、学科を専攻の位置へおろし、神学科と哲学科の専攻を統合しているだけである。なお、一九四一(昭和一六)年四月に改正された学則をみると、心理学専攻と英語英文学専攻には「経済原論」は設置していない。他の三科目(日本精神史・基督教通論・社会学概論)は、文化学科の全専攻に必須科目として置いている。

ところで、「同志社大学入学案内」(一九四一年度)と同時に印刷されたものとみられる各学科・専攻の概要(印刷の時点では改正について申請中であつた)には、神学科について、「本科は我国唯一の大学程度の神学教育を施す所である。これは政府が我が同志社のみに許して呉れている特典で(中略)本邦最高の神学教育機関」であると書かれている。おそらく文部省などの指示によるものと思われるが、その神学科の規模を縮小し、文化学科の専攻になった厚



厚生学専攻実習室、のちの厚生館
(1941年 大沢徳太郎寄贈)

生学専攻の学科編成をみると、専攻独自に置いているキリスト教関係の科目は「基督教倫理学」のみとなり（従来は「神学通論」ほか五科目設置）、哲学倫理学専攻の場合には、わずかに「基督教倫理学」一科目が、それも選択科目の中に入っているにすぎない（それまでは選択科目に一〇数科目置かれていた）。この事実、文学部の学則改正の特徴の一面を端的に物語っているといつてよいだろう。

この改正案は、一九四一年一月三〇日の理事会でも協議され、「右ハ十一月常務理事会ニ於テ決議シタル事項ナルモ、本席ニ於テ改メテ文学部長ヨリ説明スル所アリタリ」と記録されている。部長は園頼三であつた。この改正

案は、同年二月一〇日付で文部大臣の認可をえた。

園部長の任期満了にともない、一九四一年四月から文学部長に就任した富森京次は、「元来総合大学に於ける文学部といふものは、これを一家に譬へて見るならば、床の間づきの御座敷のやうなもの」であつて、「如何に新体制の世の中であらうとも、また科学する時代であつても、一家の文化的生活の中心である客間なしで行くわけには参るまい。（中略）世が高度国防の超非常時であればある程、閑却することが出来ないであらう」（「床の間」方面を担当して『新報』第五七号）と書いている。富森のこの就任のこゝとばには精神的余裕のやうなものが感じられるが、神学者富森の自嘲がこめられているともみられぬではない。

いづれにせよ、文学部の改組は、一九三九（昭和一四）年三月に、専門学校英語師範部を高等英語部と改め、「支那語」および「東亞事情」を必修

科目とした学制改革とともに、当時の政治的社会的影響をつよくうけてのものであった事実は否定しがたい。
 なお、文学部を改組した一九四一年の四月に入学した学生数は、次のとおりであった。

法学部

経済学科 二五二名

法律学科 七五名（内女子二名）

政治学科 四〇名

文学部

神学科 一四名

文化学科 七五名（内女子九名）

英語英文学専攻 一七名（内女子三名）

哲学倫理学専攻 五名

心理学専攻 八名（内女子一名）

文芸学専攻 三名

厚生学専攻 四二名（内女子五名）

学園の戦時体制と学生生徒団体

同志社の戦時体制が決定的なものになるのは、一九四一（昭和二六）年一二月八日、すなわち太平洋戦争の開戦以

降とみてよい。しかしそれまでに、体制固めは急速度に進行していた。

大学修練団の発足 一九四〇年九月一七日付、文部大臣の指示による「修練組織強化ニ関スル件」（高等学校長会と学友会の解散 議ニ於ケル文部大臣指示事項）をうけて、同志社大学修練団が結成されたのは、その翌年二月一

日の紀元節（建国記念日）であつた。

右の文部大臣の指示には、「今や興亜ノ聖業日ニ進ミ皇国ノ使命益々重大ヲ加フルノ秋高等諸学校教育ヲ刷新シ以テ負荷ノ大任ニ堪フベキ人物ヲ鍊成スルコトハ現下喫緊ノ要務ナリ」とその目的が明示され、「即チ之ガ為ニハ学校ガ教学ノ本義ニ基ク修練道場タルノ体制ヲ確立シ学校長以下教職員一体トナリ生徒ノ全生活ヲ通ジテ其ノ教導ノ任ニ当」たることを要請し、修練組織やその規約のモデルまでも示している。学校を皇国民鍊成の「修練道場」たらしめることを文部大臣すなわち政府は要請したのである。

その要請に従つて、同志社が修練団の結成準備に着手したのは、右の指示があつた直後である。一九四〇年九月二六日の常務理事会で、「学生新体制ニ関スル件」が議題になっており、すでに「新体制即応ノタメ学生新体制委員会ヲ組織シ非常時下ノ皇民ノ養成ノ目標ヲ以テ」、禁酒禁煙断髪の勵行や、学生諸団体の一元化にむかつて施策の検討を始めていることが報告されている。学生生徒たちも「進ンデ学校当局ノ方策ニ従フ氣運ニアリ」とも報告されている。

その日の常務理事会では、修練団結成に関する準備委員を任命し、その準備委員会が組織や規約の原案を作成することになった。そして、一〇月三一日の常務理事会において、「大学学部及予科ヲ以テ一団トナシ学生ノ修練団ヲ組織シ、従来ノ学友会及之ニ属セザル各種学生団体ヲ之ニ包含」するような「修練団々則」案を承認し、修練団各班に教員を配置して学生生徒の指導に当たらせるといふ具体的な方針を決定した。さらに、修練団の総務、修

文、練成三部の部長に対しては、とりあえず、「本年度手当シテ金五百円也」の追加予算を組むことを承認した。ただし、修練団結成に関しては「大学連合教授会ニ諮問シテ実施」する予定であると、右の常務理事会記録にあるところを見ると、その手続きを経たうえで文部省に「修練団々則」の認可申請をしたようである。「団則」は、翌一九四一年一月三一日に認可された。

「同志社修 認可をえた「団則」によれば、その指導目標は、「尽忠報国ノ精神発揚。教学一体ノ実践。質実剛健練団々則」ノ氣風ノ振勵。強靱ナル意志力ト体力ノ鍛鍊」の四点であり、キリスト教主義という文言は、当然のことかもしれないが全く見当らない。

修練団組織の目的は、「国体ノ本義ニ透徹シ立学ノ精神ニ副ヒ国家ニ献身スル有為ナル学徒ノ練成ヲ期シ集团的修練ヲ行フ」(第二条)ことにあり、組織として「総務部、修文部、練成部」(第四条)の三部を置いている。総務部は「本団ノ一切ノ事業並ニ事務ヲ総掌シ基本的企画統制ヲ行ヒ事業運行ノ推進力タルモノトス」(第五条)と規定されており、いわば中枢神経に当たる部分で、その構成員は、修文・練成両部長、精神教育主任、学生主事一名、生徒主事一名および教職員若干名である(第四条)。修文部は「学徒ノ生活指導並ニ文化指導ニ当リ其ノ目的達成ノタメ左ノ班ヲ置ク」(第六条)として、厚生班、共済班、語学班、文芸班などの他七班を置いているが、これは現在の学友会に属する文化団体連盟と学術団傘下の各クラブのような班から成っている。それ以前の学友会所属団体および時代に適した任意団体をほぼそのまま修文部の班として位置づけたものである。練成部は「学徒ノ体練並ニ国防訓練ニ当リ其ノ目的達成ノタメ左ノ班ヲ置ク」(第七条)として、剣道班、柔道班、弓道班、相撲班の他一七班を置いている。現在の体育会に属する各部によって編成されたといつてよいだろう。本来、学生たちが学生たちの意思によって課外に活動していたクラブや団体が、こうして学校の正規の組織として位置づけられた。実質的には学友

会が学校の戦時体制組織として組み込まれたわけである。

修練団の役員は、団長は大学長（第九条）、副団長は法学・文学両学部長と予科長（第一〇条）、総務・修文・練成三部の部長は教授（第一一一三条）、各班の班長は大学教員（第五条）で、これは現在の各クラブの顧問教授に相当するとみてよからう。総務部および各班に配置される幹事、補佐幹事は「学生生徒中ヨリ之ヲ任命ス」（第一七条）となっており、学生生徒も役員として加わった。現在の各クラブの主将や主務に相当するとみてよいだろうが、その役割は、各班のとりまとめや、教員（役員）との連絡などであつたろう。

こうした「団則」にもとづいて、次のとおり役員が任命された（『新報』第五五号）。

団 長 大学長 牧野虎次

副団長 法学部長 松山斌

文学部長 園頼三

予科長 木畑浩四郎

参 与 配属将校（大佐） 三宅逸

総務部長 法学部教授 宗藤圭三

修文部長 文学部教授 有賀鉄太郎

練成部長 予科教授 山田貞夫

（以下略）

修練団結成式と 同志社大学修練団は、一九四一年二月一日に栄光館で結成式を挙行し、式後、学友会の解散学友会解散式が行われた。これについて、『新聞紙上ではやれ何大学の新体制と宣伝されてゐるが、腹案

か試案の程度であつて、正式に文部当局の認可を受けたものは無く、我が同志社の新組織は実に全国官公私立大学のトップを切つて正式承認を受けたものである」(『新報』第五五号)と、誇らしげに報じられている。事実「トップを切つて」の結成であつたのだとすれば、何が一体そうさせたのか。「教育勅語」誤読事件、神棚事件、チャペル籠城事件その他で、湯浅八郎総長時代に軍部や右翼などの風当たりが強かったキリスト教主義学園同志社の理事、教職員には、政府や社会の誤解を解き、世評を挽回したいという願望が、大なり小なりあつてのことではなかったかと思われる。まかりまちがえば、軍部や政府の手によって、同志社はつぶされるかもしれないという危惧を抱いていた者は、おそらく少なくなかつたろう。とにもかくにも学校を維持したいという念願が、理事をはじめ学校の首脳部、そして校友会幹部にあつたのは事実であらう。

同年三月一〇日より一四日にかけて、修練団活動の手始めとして、生島吉造、水内数之助両学生主事の指導のもとに、修練会が開かれた。道場(会場)は学生会館(現至誠館の位置)であつた(『新報』第五六号)。

報国隊の結成

大学修練団の結成に相前後して、同志社各校では報国隊が結成された。この報国隊も、やはり文部省の指示によるもので、先の「修練組織強化」に関する指示以後、官公立・私立大学、高等学校、各専門学校、などの校長会議をそれぞれ招集し、修練組織の実現と修練活動の実施について要請している。

そうした指示や督励を踏まえて、一九四一(昭和一六)年八月八日付で「文部省訓令第二十七号」により「学校報国団体制確立方」を要請したのである。それは、報国団結成の意義とその目的を明示したものであり、北海道庁長官、府県知事、直轄学校、公私立大学、高等学校、専門学校の校長宛に通達された。同日付発表の「文部省訓令号外」(件名は「学校報国隊本部及地方部規程」)は、右の目的を達成するための組織および規程のモデルを示したものである。同日付でこの「訓令」に関連する一連の指示があり、一〇月一日には、「女子学校報国隊ノ実践訓練ニ関ス

ル件」が、全国的女子専門学校校長、各地方長官、体育局長宛に通達された。

右の「文部省訓令第二十七号」は、「今次事変ノ勃発以来学徒ノ修練ヲ重視シテ或ハ集団勤勞ノ訓練ニ服シ或ハ国家奉仕ノ勞務ニ赴ク等只管実践鍛錬ニ力メシメ（中略）コレ固ヨリ皇国民鍊成ノ本旨ニ基クモノニシテ克ク規律ヲ重シ団結ヲ尊ビ困苦欠乏ニ堪フルノ心志ト尽忠報國ノ精神トヲ振起シ以テ挺身奉公ノ誠ヲ效サシメントスルニ在リ」と書き起こされており、修練団組織をそのまま修練の名において集団勤勞奉仕の体制に直結せしめようとする意図が、ありありとうかがえる。そして同時にそれは、学校の臨戦体制強化についての要請にほかならなかった。

同志社高等商業学校は、いち早く高商報國団の結成準備に着手し、一九四〇年一二月にその発足をみた。同報國団は総務部（部長黒田英三郎）、文化部（部長水野純）、生活部（部長原猛雄）、鍛錬部（部長林純蔵）、の四部の他に、国防部（部長足立順市）を設け、翌一九四一年四月から実践活動を開始することになった。高商の学友会は、この報國団結成と同時に解散した。

大学報國隊

大学の報國隊が編成され、その結成式が挙行されたのは一九四一年九月一日である。栄光館に学部および予科の全学生が出席し、大学長黒川芳蔵（隊長）が結成宣言をおこない、法学部長松井七郎（本部長）および予科長木畑浩四郎（支隊長）が、それぞれ報國隊組織ならびに編成報告を行なった。隊長（大学長）黒川芳蔵は、結成宣言のなかで、「報國隊は曩に結成した修練団の中に編成されたものであり、修練団の戦時国防的形態であることを注意して、修練団と報國隊の一元化を強調した」（『新報』第六一号）とのべている。修練団の場合と同様、あるいは以上に忠実に、文部省の方針に従って報國隊は編成され、性格づけられているといわねばなるまい。

報國隊の組織は、隊長のもとに本隊長をおき、本隊長のもとに第一大隊（隊長 園頼三）、第二大隊（隊長 河原政勝）、

第三大隊(隊長 宗藤圭三)の三大隊(学部)の学年次別による編成)をおき、各大隊にそれぞれ二箇中隊(隊長はすべて教授、各中隊のもとに三小隊(隊長は教職員)を置いている。小隊はさらに分隊に分れており、分隊長は学生である。この組織とは別に、隊長の指揮を直接うける形体で、特技隊(航空隊、自動車隊、自転車隊、乗馬隊、消防隊)、特別警備隊、予科支隊が配置されている。予科支隊は第二大隊(学制上の一部、二部を各一大隊とする)に分け、第一大隊(一部は二中隊、一五小隊。第二大隊(二部)は、二中隊、一〇小隊の編成になっている。

報国隊と修練団の組織上の基本的なちがいは、修練団が学友会の組織を踏まえたものであったのに対して、報国隊は学則に定めた学年、学科、クラスなどをそのまま組織として組み込んでいる点にある。

「報国隊要綱」によると、隊長が属する隊本部の構成は、「配属将校、修練団総務及教職員ノ一部」(第五条)であり、本隊長の属する本隊支部は、配属将校、文学部長、修練団総務部長、教練教師(軍事教官)、学生主事などをもって構成されている。配属将校の影響力は修練団以上に強く、しかも直接的であった。こうした報国隊の目的およびその性格は、「大学長ヲ中心トシ教職員及学生、生徒全員一体トナリ修練団ノ内ニ指揮系統確立セル編隊ノ組織ヲ樹テ、国家的要請ニ基ツク各種ノ要務ニ服シ、有効且敏速果敢ノ活動ヲ為シ得ル如ク編隊ス」(第一条)というもので、この組織が集団勤労奉仕などへの出動母体になった。

諸学校の報国隊

大学の報国隊結成と相前後して、他の同志社諸学校でも報国隊を結成している。隊長はいずれも校長である。

同志社中学は、一九四一年九月一日の始業式と同時にチャペルで結成。全生徒を第二大隊(第一大隊三、四、五年生。第二大隊一、二年生)に分け、各学年ごとに中隊を編成、各クラスを小隊として配置した。

高等女学部は七月一四日に栄光館で報国団結成式を行い、九月一〇、一一両日最初の実地訓練を実施している。

女子専門学校もまた、四月一四日に栄光館で結成式を挙行了。同「■則」第二条の目的には、「本団ハ国体ノ本義ニ透徹シ立学ノ精神ニ則リ国民ノ先覚母範タルベキ皇国女性ノ鍊成ヲ以テ目的トス」とうたっている。

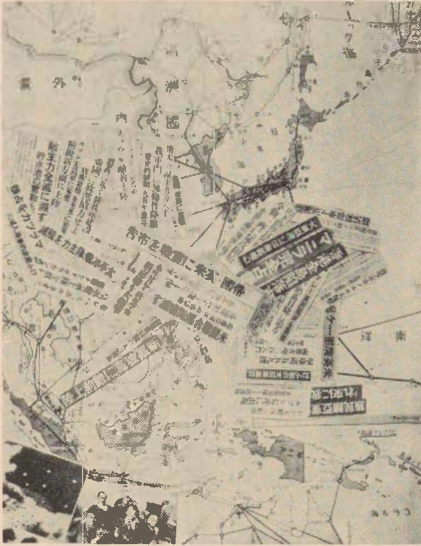
同志社専門学校は、四月一五日にチャペルで、大学の修練団とほぼ同様の組織の報国団の結成式をおこない、総務部長に桜井忠一、修文部長に吉川哲太郎、鍊成部長に岡村正人の三教授がそれぞれ就任した。そして、同年九月一日に、チャペルで報国■を改組した報国隊の結成式を挙行し、隊長に校長難波紋吉、本隊長桜井忠一、そのもとに四箇中隊と特技隊および特別警備隊をおいた（隊長はいずれも教授または教練教師）。すでに六月一〇日から■報「壮図」を発行している。高等商業学校は、八月の休暇中に報国■を改組し、九月の新学期から報国隊を発足させ、隊長には校長牧野虎次が就任し、実地訓練を開始した。各校の修練■あるいは報国隊役員名簿は、一九四一（昭和一六）年以降『職員録』巻末「附録」に掲載されている。

こうして、同志社のすべての学校は、一九四一年九月をもって報国隊（女子部は報国団）の結成式を終え、実地訓練に入った。学園の臨戦体制は、少なくとも形式的あるいは組織的には確立されたのである。

太平洋戦争開戦と学園

一九三八（昭和二三）年七月以来、総長事務取扱の任にあった牧野虎次の総長就任が、一九四一年六月二六日の理事会で決定され、同年一月二九日の創立六六周年記念日に就任式を行なった。同日、黒川芳蔵の大学長就任式も挙行された。太平洋戦争の開戦はその直後、二月八日であった。

開戦の報に接した同志社では、翌九日、各学校単位で「宣戦大詔奉読式」を行い、同日から一日まで戦勝祈願



戦争拡大を伝える新聞切抜



牧野虎次

左記注意ヲ喚起シ部下職員統督ト学生生徒指導上遺憾無キヲ期スベキ旨訓示シタリ」と、報告されているが、その「訓示」の内容は、右の常務理事会記録によれば次のとおりである。

などの行事があり、大学学部の子生は、報国隊の隊形を整えて下鴨神社に参拝し、一三日には修練団幹事の司会で学生大会を開き、「何時タリトモ蹶然起チテ銃ヲ把リ或ハ銃後ノ任務ニ挺身スルノ覚悟ト決意」をつねに具現するような日常生活を営むという「誓詞」が朗読されている(『新報』第六四号)。開戦は、学生生徒たちのみに多大の影響をおよぼしたわけでは、もちろんなかった。一二月二〇日の常務理事会では、「十二月十一日開催第二十三回教務部会ニ於テ総長ヨリ各部科校長ニ対シ

- (イ) 去ル八日米英兩國ニ対シ宣戦ノ布告アラセラレタルニ付爾今職員一同時局ニ対シ一段ノ覚醒ヲナシ以テ学生生徒ノ指導ニ当ルコト。
- 特ニ戦ハ支那事変ニ於ケルト全ク目的性質ヲ異ニシ、世界新秩序建設ノ妨害タル米英ノ撃滅ヲ本旨トセルコトヲ銘記シ、苟モ和平或ハ親善等ニ関スル言動或ハ文字ノ使用ニ関シテハ、戦ノ終局迄徹ニ之ヲ慎ムコト。
- (ロ) 外人教師ニ関シテハ各学校夫々適宜ノ処置ヲ講ズルコト。
- (ハ) 社ノ内外ヲ問ハズ外人トノ交際ヲ一切中止ノコト。

但シ、デントン女史ニ関シテハ例外ナレドモ、世間ノ誤解ヲ防グタメ職務ヲ以テスル応接以外ハ遠慮相成度。

以上のとおりである。総長牧野虎次をはじめ、理事、学校的首脳陣がいかなる姿勢で太平洋戦争に臨んだか、その一端がうかがえるといつてよいだろう。

外国人教師に 同志社は、開戦の日ただちにデントンに休職を命じ、さらに、一月一二日付で外国人教師の授対する処置 業を禁じた。また、帰国した教員に対しては解職の処置をとった。総長や校長、教頭などがアメリカ国籍の外国人教師に対して神経質になったのは、開戦と同時に敵国人として扱われることになり、政府や警察

の指示、監視が厳しくなったためである。一九四二（昭和一七）年以降、同志社の理事・教員の中から、アメリカ人は完全に消え去った。

建物名の変更と 同志社から消え去ったのはアメリカ人その他の外国人だけではなく、校内の外国名の建物の名繰上げ卒業式 前も改めてしまった。開戦と同時に、アーモスト館とハワイ寮については閉寮措置がとられ、

翌一九四二年四月には、アーモスト館は新島記念館に、ハワイ寮は梨木寮に、キング寮は友山寮に、女子専門学校のプリンプトン寮は寒梅寮に、ジェームズ館は至恩館に、それぞれ改名した。建物名からその寄附者の名前さえも抹殺するほど同志社は外国人、とくにアメリカ人と英語に対して神経をつかったのである。もちろん政府も敵国語の排除を要求した。

まだ、一九四〇年段階までは、たとえば日米両国の学生代表が話し合い、相互理解と親善をふかめようという目的で、日米学生会議が毎年一回開かれていた。一九四〇年には津田英学塾新講堂で、七月一〇日から八日間にわたって開催され、京都から一四名が出席した。そのうちの同志社は、一一名という圧倒的多数の学生を送ったのである（『新報』第四八号）。牧野虎次の総長就任式（一九四一年一月二九日）には、社友としてデントンが登壇者の一員に加え

られているが、これは異例のことであつた。太平洋戦争の開戦と同時に、掌を返すようにその態度や方針を、同志社は転換した。じつにあつて思えるほど、その変り身は早かつた。宣教師館などは同志社の資産として、総長公舎や修練団の道場、寄宿舎などに転用された。

一九四一年度の専門学校以上の諸学校の卒業式は、政府命令による臨時措置として操り上げて実施することになり、同志社では一二月二七日に行われた。翌一九四二年からは九月に行われることになる。

同志社中学校の発足

一九四三（昭和一八）年一月二一日に、文部省は「勅令第三十六号」として「中等学校令」を公布し、それまでの「中学校令、高等女学校令及実業学校令ハ之ヲ廃止ス」（同令 第一七条）という学制改革を断行した。戦時体制下の文教政策は、ついに中等学校をも容赦なく巻きこんだわけである。中等学校（中学校・高等女学校・実業学校）の修業年限は四年に短縮された（第七条）。この「中等学校令」が掲げた教育の目的は、「皇国ノ道ニ則リテ高等普通教育又ハ実業教育ヲ施シ国民ノ練成ヲ為ス」（第一条）ことであり、「文部省令第二号」（一九四三年三月二日制定）すなわち「中学校規程」では、その目的をいっそう具体的に、次のように規定している。

第一条 中学校ニ於テハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ヲ奉戴シ中等学校令ノ本旨ニ基キ左ノ事項ニ留意シテ生徒ヲ教育スベシ

一 教育ノ全般ニ亙リテ皇国ノ道ヲ修練セシメ国体ニ対スル信念ヲ深メ至誠尽忠ノ精神ニ徹セシムベシ

二 皇国ノ東亜及世界ニ於ケル使命ヲ明ニシ皇国民タルノ責務ヲ自覚セシメ職分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルノ

信念ト実践力トヲ涵養スベシ

三 学行ヲ一体トシテ心身ヲ修練セシメ皇国民タルノ徳操識見ヲ陶冶シ創造活用ノ能力ヲ養ヒ堅忍不撓ノ体力
氣力ヲ鍊磨スベシ

四 学校一体修文練武ニカムルノ風ヲ振作シ質実剛健ヲ尚ビ協同ト勤勞トヲ重ンズルノ氣風ヲ作興スベシ

五 教育ヲシテ国民生活ノ實際ニ適切ナラシムルト共ニ実践體驗ニ依ル學習ヲ基礎トシテ自發研究ノ態度ヲ育成
スベシ

六 教育内容ノ全体的統一ニ意ヲ用ヒ学校内外ノ生活ヲ挙ゲテ皇国民鍊成ノ一途ニ歸セシムベシ

ほぼ同様の学制改革が専門学校に關しても行われ、一九四三年一月二一日に公布された「専門学校令中改正」(勅令第三九号)により、「専門学校ハ皇國ノ道ニ則リテ高等ノ學術技芸ニ關スル教育ヲ施シ國家有用ノ人物ヲ鍊成スルヲ以テ目的トス」(第一条)と改められたのである。

ともあれ、正課の授業で「聖書」を教え、宗教的行事を生徒に課していた同志社中学および高等女学部は、「中学校令」や「高等女学校令」に適合せず、従つて、中学校、高等女学校という名称を用いることは許されなかった。いわば各種学校と同等の扱いを受けてきたのである。「中等学校令」でも、その点に關するかぎり、より厳しくこそなれ緩和されるはずはなかった。そしておそらく、「中等学校令」による中学校に改めるよう文部省その他の監督官庁からつよい要請があつたであらうことは想像にかたくない。宗教教育を廃止させ、教科その他について、中等学校を画一化し統制を容易にしようとする意圖が「中等学校令」にはかなり露骨にうかがえるといつてよい。

同志社中学 そうした問題を内包していたにもかかわらず、同令が公布された年の二月二四日、すなわち公布校の設立 から一カ月後に、同志社中学教員前窪勝之助以下二七名の連署による、「新中等学校令により速に

同志社中学を同志社中学校に改める手続を御取り被下度御願ひ申上げます」という「御願」書が、総長牧野虎次および理事會宛に提出されたのである。これが、自発的積極的なものであったか、同志社内外からの圧力による受け身の消極的なものであったかは詳らかでない。ただ、このような公的な文書が、しかも全員連署のうえ提出されている事実は覆うべくもないのである。

中学教員のこうした動向に対して、反対をとなえる者はもちろんいた。公然とは反対を唱えぬまでも、中学内にもおそろく批判的な意見をもっている者はいたに相違ない。当時西南学院にいた元普通学校教頭波多野培根は、「必親展」として次のような書簡(三月一八日付)を中瀬古六郎に送っているが、これは反対の意見を抱いている人たちの代弁でもあったろう。波多野は「中学の提案を躁急に可決すれば、之が直に女学校に飛火すべきは言はずして明かなり。かくして同志社の中等教育は法律上、無宗教主義の教育を施すこととなる。(中略)明かに新島先生の同志社建学の目的と精神とに背き、且つ理論上より見るも現在の同志社寄附行為証に抵触する憲法違反の嫌なきにあらず、誠に恐るべき事と言ふべし」と書き、中瀬古に「中学の提案」を理事会で拒否するよう尽力してほしいと要請しているのである。

「寄附行為」に抵触するか否かは見解の分かれるところであろうが、同志社教育の伝統の灯を消すまいとする波多野の衷情に対しては、真向からこれを否定しがたかったであろうと思われる。

だが、校外にあった波多野さえ、そうした意見の開陳をきわめて慎重に行なっているところに、同志社が置かれていた困難な状況と、社会的政治的影響による学内の動向が察せられる。

中学教員から「御願」書が提出された翌三月一八日の定時理事会に、「中等学校令ニ拠ル同志社中学校設立ノ件」が議題として提出された。四月開校の予定で急いだのであろう。提案された内容は、「中等学校令」に拠る中学校

を四月一日より開設する、ただし、その入学者は新一年生のみで、二年生以上は元のままとし、全員が卒業する一九四七（昭和二二）年三月末日をもって、同志社中学を廃止する、というものである。問題の焦点となる「聖書」の授業やキリスト教に関する宗教的行事については、「同志社寄附行為第一条並ニ第四条ニ示ス同志社ノ経営方針ヲ以テ同志社中学校ノ教育方針トナスコトハ従来ト異ラズ」と説明されているが、その「寄附行為」の第一、四条が、すでに一九四〇年度に改正されていたことはさきに見たとおりである。従ってその実質的な内容においては、「従来ト異ラズ」とは言いがたかった。

キリスト教主義 教育の課外化

新設される同志社中学校では「基督教ノ經典ヲ講義スル代リニ特志的方法ニ依ルコト及ビ朝会
盾した説明が同じ席上でなされており、さらに、キリスト教教育や行事に関しては、特定有志に対して「課外や校外」において「誘導奨励ノ方法ヲ講ズル」ことすると説明されている。「中等学校令」に拠る「中学校」にするかぎり、いわば当然のことであつた。

さすがに、理事会でも「強硬ナル賛否両論」があり、同日の評議員会に諮問した上で結論を出すという議事運びになった。つまり、理事会の結論を評議員会に諮問することができなかったのである。残念ながら、その「賛否両論」の内容は記録されていない。ただ、「学園内ニ誤解ニ基ク反基督教的運動並ニ之ニ類似ノ動向等アリトセバ右ニ付嚴重ナル補導ヲナシ」、新島の教育精神にもとづくキリスト教主義教育を一層徹底すべきであるといった趣旨の要望があつたことが、右の「理事会記録」に記されている。微妙な表現だが、反対者の立場を尊重して右のような記録をとめることになったものと察せられる。

評議会でも事態は同様であつた。しかし、「大多数ハ之ヲ諒トシ進ンデ賛成シタルヲ以テ更ニ理事会ヲ続行シ右

再議シ原案可決決定」(同記録)したと記されている。「評議会記録」にも、「強硬ナル賛否両論」があったと書かれており、後に京都府および文部省に同志社中学校設立について申請したときの添付書類のひとつである「理事会記録」「評議会記録」にも、同様の文言の記載がある。ただ、右の問題を審議したときの「評議員会記録」には、全員で四八名のうち、原案賛成を委任した者もふくめてわずか二五名の名前しか記されていない。出席あるいは委任のうち、賛成者の氏名のみを記載したのであろうか。かろうじて過半数に達している人数なのである。

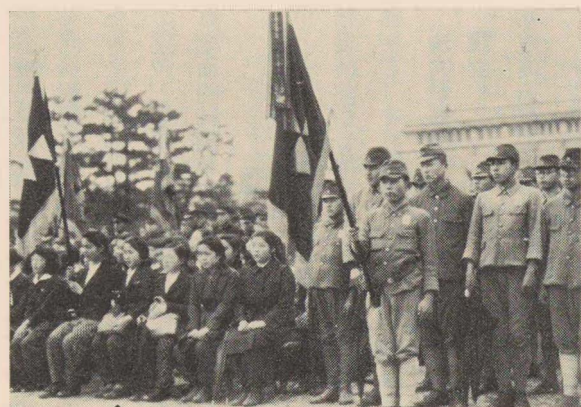
ともあれ、こうして一九四三(昭和一八)年三月三〇日付をもって、同志社は「中学校設置ニツイテ申請」をすると同時に、「中学廃止認可申請書進達願」を提出し、その手続きを終えたのである。一カ月後の四月三〇日付で、四年制の中学校設立が文部大臣から認可された。京都府からは、「生徒定員ハ之ヲ八百人トスルコト」(六月一五日付)という通告があった。初代校長にはそれまでの中学長野村仁作の就任が、おなじ四月三〇日付で認可された。

「本校ハ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉戴シ中等学校令ノ本旨ニ基キ皇国ノ道ニ則リテ高等普通教育ヲ施シ皇国民ノ鍊成ヲ為スヲ以テ目的トス」(第一条)と、「中学校学則」にはうたわれている。授業科目の中には、当然ながら「聖書」はなく、一年生から四年生まで「修身」を置いているが、その内容は、「皇国ノ使命、学徒ノ責務、修練、礼法」などである。こうして、明治期の普通学校以来の伝統をうけついできた同志社中学は、時代の圧力のもとにその教育方針を大きく改変したのである。

大学法文学部の発足

「教育ニ関スル戦時非常措置方策」

戦況が急速度に悪化してきた一九四三（昭和一八）年一〇月一二日、閣議決定による「教育ニ関スル戦時非常措置方策」が公布され、これによって、専門学校以上の私立学校は、決定的なダメージを受けざるを得なかった。同年一〇月二三日には、文部次官



太平洋戦争下の学生生徒

通達「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ関スル件」のほか、「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基ク学校整備要領」（文部省公表）など一連の指示、通達があいつぐ。そして、一九四五（昭和二〇）年三月一八日には、やはり閣議決定による「決戦教育措置要綱」が施行され、中等学校以上の学校は同年四月から一年間、「授業ハ原則トシテ停止」し、勤労動員その他に従事せざるをえなくなった。勤労動員はそれまでもむろん実施されていた。

「教育ニ関スル戦時非常措置方策」の内容は、大雑把にいつてしまえば、理工系・理化学系の学校・学部・学科はこれを拡充し、学生生徒には従来どおり徴兵猶予の特典を与える。文科系については、学生生徒の定員を全国的に現行の三分の一程度に押える。そのうち私立大学については、極力専門学校に転換し、学生定員は現行の二分の一程度にするこ

と、廃止する私立大学の学生は国立大学に委託する。右の措置によって職を失う教員については、なるべく必要な部門へ配置転換を考え、専門学校以上の教員については研究が継続できるよう配慮すること。退職手当金は検討したうえ国が補助金を交付する、といった指令である。従って専門学校以上の学校については、理工・農学関係以外の学校・学部では、徴兵年齢に達しない学生生徒の授業しか、事実上でなくなった。さらに一九四五年四月からは全面的に授業を停止させられ、それに伴い理工・農学部門の、徴兵猶予の特典も撤廃された。

専門学校

右の「措置方策」が公布される以前に、同志社では農業専門学校の設立を検討していたが、途中でそれを断念し、一九四四（昭和一九）年四月から工業専門学校を設置した。一方、既設の高等英語部と法律経済部を合体して、小規模の外事専門学校とした。また高等商業学校は校名を経済専門学校と改称した（第四部第七章）。それらはいずれも、「教育ニ関スル戦時非常措置方策」にもとづいてのことだといつてよい。

法文学部の 理事会では、右の「非常措置方策」が公布されると同時に、まず常務理事会などで対応策の協議を**設立** 開始した。そして、専門学校に関しては右のような方針をうち出すとともに、大学については、一

九四四（昭和一九）年三月三〇日の常務理事会に、検討の結果が次のとおり報告されている。

大学予科ハ従来通り継続ス、但シ生徒定員ヲ三分ノ一以下ニ減ジ一学年八拾名トシ、目下定員變更認可申請中ナリ。

大学学部ハ学制ヲ變更セントス、其ノ要項ハ本日議案トシテ提出シアリ。右ノ他文部当局ノ補助ヲ得テ「同志社大学研究所」（仮称）ヲ設置シ現職教授ヲ研究員ニ任命予定ナリ。

当日は定時理事会も開催され、右の方針を承認するとともに、「大学学制並ニ学則中一部變更ノ件」については、常務理事会に一任することになった。そこで、大学学部教授会にも諮問し、教授会での数回の協議を経て、大学の

学部組織と学則の改正について成案をえ、これを文部省に申請して、同年九月に認可の内諾をえた。

九月三〇日の常務理事会に、右の経緯が報告されている。その席上明示された大学学則は、従来「本大学ニ法学部及文学部ヲ置キ法学部ヲ法律学科、政治学科及経済学科ニ、文学部ヲ神学科及文化学科ニ分ツ」（第二条）となっていたのを、「本大学法文学部ハ之ヲ法経学科、神学科及厚生学科ニ分ツ」と改められている。このとき、大学の英語・英文学関係の学科・専攻は完全に学則から消え去り、わずかに外事専門学校にその名残りをとどめるのみとなった。なお、改正された学則の末尾には「備考」として、「本学則ハ戦時中文部大臣指示ニ依リ其適用ヲ變更スルコトアルベシ」と付記されている点は注目するべきであろう。私立大学の生殺与奪の権は、ほぼ完全に文部大臣の手に握られていた。法文学部の初代学部長には、それまで法学部長の任にあった土井十二が就任した。

一九四四年一〇月一日に発足する同学部は、予科から進学する者以外に、九月一〇日から二五日まで補欠募集をおこなった。応募者は若干名の選科生を除くと、法経学科九八名（入学者八七名）、神学科一名（入学者一名）、厚生学科三八名（入学者三四名）であった。なぜか学部の定員は明示されていないが、実に寥々たる数である。ちなみに、同年九月の専門学校以上の卒業生の数は次ページの表のとおりである。人数の少なさもさることながら、「出陣中ノモノ」の数の多さに驚く。この表から察して、徴兵年齢以上の学年は有名無実に近い状態であったに相違なく思われる。

学部・学科の統合や廃止、入学定員の極度の削減によって、一九四四年から翌年にかけて、離職を余儀なくされる教員があいついだ。たとえば、一九四四年七月に文部大臣宛の「国庫補助申請書」には、「転業資金ヲ受ケル教員十五名、職員六名」、「退職金ヲ受ケル教員十四名、職員六名」の氏名、転職の要不要、在職年数、職名、退職金額などが明記されている。国から補助金をうけるために、こうした書類を提出しなければならなかったわけで、数回に

昭和十九年度専門程度各学校卒業式挙行並ニ卒業者数之件

左記ノ通り標記卒業式ヲ挙行シ夫々下表ノ卒業者ヲ出シタリ

学 校 名		卒業者及修了者数	挙 式 日
大 学	予 科	四九名	九月十四日
	文学部	四八名	九月十五日
	神学科	三名	九月十五日
	法律学科	九名	九月十五日
法 学 部	政治学科	四名	九月十五日
	経済学科	一七七名	九月十五日
	経済学科	一四七名	九月十五日
	政治学科	四名	九月十五日
外 事 専 門 学 校	(旧)法律経済部	四九名	九月十五日
	高等英語部	七名	九月十五日
	法律部	四九名	九月十五日
	経済部	四九名	九月十五日
経 済 専 門 学 校	政治学科	四名	九月十五日
	経済学科	一七七名	九月十五日
	経済学科	一四七名	九月十五日
	政治学科	四名	九月十五日
女 子 専 門 学 校	家政科	四九名	九月十五日
	家政科	一四三名	九月十五日
	家政科	一四三名	九月十五日
	家政科	一四三名	九月十五日
合 計		八九五名	九月十五日

(註) 右ノ中大学女子学生ハ下記ノ通りナリ (選科生一名、本科生二名)

(「理事会記録」昭和十九年度)

わたって報告ならびに申請がおこなわれている。学生生徒も激減したが、それにとまって、教職員もまた同志社を去らざるをえなかったのである。同志社大学および専門学校は、まさに廃校の瀬戸際へ追いやられていた。なお、一九四二年度からは、予科・専門学校以上の最終学年の授業料は、繰り上げ卒業のため、所定額の二分の六（但し一九四一年度は二分の一〇）しか徴収できなくなっていた。また、一九四二年度からは応召中の学生生徒の学費については、減免措置を講じねばならなかった。

研究活動および研究所

大学や専門学校における研究活動は、その諸条件が刻々と悪化したけれども継続されたことはいうまでもない。ただ、政府が研究と教育の一体化を要請して以降、公開講演会がかなり頻繁におこなわれているのは、おそらくなかば義務づけられてのことであろう。この時代に、各研究者の専門領域を超えていると思われる大小いくつかの研究会（たとえば楠公精神研究会、興亜研究会など）や学会がつくられたり、講座が開設されたりしているが、その内容は詳らかにしがたいものが多い。

同志社東亜研究所

そうした動きのなかのひとつに、同志社東亜研究所の設置（一九四〇年七月）がある。これは、専門学校高等英語部に「支那語」や「東亜事情」を必修科目として設置したことと、あるいは無関係ではないかもしれないが、同「研究所規程」が同年七月八日に制定されており、目的として「東亜研究所ハ東亜ニ関スル学術的研究ヲナス」（第二条）とうたっている。この研究所は、同年七月三〇日の常務理事会記録によれば、「東亜百年ノ大計ノ為学園ニ実施ス可キ諸件案ハ予テヨリ考慮中ノ所去ル六月三日大阪市株式会社大丸

(代表者下村正太郎氏)ヨリ金四千円也ヨ本年度本社内ニ於ケル東亜研究費トシテ指定寄附アリタルヲ以テ、六月の常務理事会において設立を決定したものと記されている。下村の寄附が基金となったのである。『同志社新報』第四九号にもほぼ同様のことが掲載されているが、その記事には、かねてより「支那語科、東亜事情の講座、東亜文化研究所等を設置して、着々興亜教育の振興に邁進して来た」ところ下村から寄附があり、「学園内の東亜研究は茲に俄然一大飛躍を遂げ全学園より成る東亜研究所を開設し」と、かなりセンセーショナルな書き方をしている。それはともかく、東亜研究所の設立以前に東亜文化研究所が設けられていたらしいのである。

東亜研究所が発足した年に委嘱された(七月一日付)研究員と研究のテーマは次のとおりである。研究所の性格の一端がうかがえるといつてよからう。

河原政勝(法学部教授)

「中華民國の對外貿易と日支事変に於ける我國の民國沿岸封鎖」

松山 斌(同右)

「東亜共栄圈に於ける經濟建設工作等特に東亜の資源と東亜交通政策の問題」

阿部矢二(高商教授)

「支那民族の性格」

水野 純(同右)

「支那の幣制、金融機関及為替問題の綜合的研究」

川村得三(同右)

「日本地理學建設の先覺者と興亜地理教育に就て」

以上は七月三〇日の常務理事会記録によるものだが、右の『同志社新報』には、難波紋吉「支那に於ける社会統制の特殊性」、松井七郎「支那紡績業の研究」、佐藤義雄「滿州国商法及經濟法の研究」、吉川哲太郎「支那社会の変遷と教育の理論及實際」、水野純「支那の幣制、金融機関及為替問題の綜合的研究」、原猛雄「(A)支那重要物産並に資源(差当り綿花、生糸、鉾産資源)に関する現地調査研究。(B)対支貿易業務の手續及貿易品(輸出)の市場的研究」となっていて、まったく異なっている。『同志社新報』第四九号の発行日は七月二〇日付であり、その一〇

日後に常務理事会が開かれているから、あるいは常務理事会記録のように変更されて決定をみたのかもしれない。同研究所が、これらの研究成果を『紀要』などにまとめて公刊したかどうかは詳らかでない。

同志社大学研究所

ついで、一九四三(昭和一八)年二月二十九日の臨時常務理事会で、「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基キ」同志社大学研究所の設置を決定し、設立認可を文部省に申請したことにふれておく必要がある。すでにみたように文科系の学校・学部・学科については大幅な縮小を要請されたが、おなじ文科系でも研究所の設置については文部省から補助金をえることができたのである。研究条件を整備充実するというのが文部省のたてまえであつたが、内実は学部・学科の整理統合によつて担当科目がなくなる教員の救済措置であり、不満解消策であり、さらには人文科学系の研究を国策に直結せしめようとしての奨励であつたろう。

一九四四(昭和一九)年九月三〇日の常務理事会に、「文部当局ノ了解ヲモ得本日現在左記ノ通り具体化シ居レリ、近ク開所式ヲ挙グル予定ナリ」と報告され、研究所の目的や事業について成文化したものが示されている。それによると、研究所の目的は、「同志社立学ノ使命ニ鑑ミ大東亜戦争ノ目的貫徹ニ資スベク精神科学ノ全般ニ亘リ研究ニ従事シ国家ノ要請ニ応セントスルニ在リ(従テ各研究員ノ研究ハ各自専門ノ立場ヨリスルモ此目的ニ依リ帰一スルモノナリ)」というもので、その目的に従つて、同年度に「企画並ニ実施中ノモノ」は、(1)研究調査ノ発刊、(2)研究所講座(講習会)ノ開設、(3)講演会、などである。調査研究活動よりはむしろ講座や講演会の開設と実施に重点がおかれているといつてよさそうであり、しかも校友会支部その他への出張講演に所員を派遣すると明記されている。

初代所長には、一〇月一日付で法学部教授田村徳治を任命する予定だと常務理事会記録に記されており、同年の研究員と研究題目については、次のとおり決定し発表された。この研究題目は、あらかじめ文部省の研究補助が

与えられたものであり、研究所が独自に決めることではなかった。

社会・国家・共栄圏——特ニ日本の理想ト大東亜建設トノ関係ニ就テ 田村徳治

日本美学ノ基礎ヅケ——美意識ノ構造 園頼三

八紘為宇ノ肇国精神ニ照ラシ觀タル原始基督教——神国思想ノ検討 富森京次

大東亜文化ノ哲學的基礎ヅケ——ハイデッカノカント研究ニ於テ看過サレタル「実践性」ノ検討 濱田與助

印度教ト基督教トノ接触 魚木忠一

江戸末期カラ明治時代ニ至ル東亜拓殖ニ関スル文献ノ調査・蒐集・整理 黒田謙一

戦時国民生活ニ於ケル貯蓄ノ意義 中島哲人

なお、研究会の部門およびその開催については、次のとおり定めている。

部門研究会ヲ月二回、綜合研究会ヲ月二回開催ス。

部門研究会
第一部 哲学、宗教、芸術、言語、等

第二部 行政、法律、経済、厚生、等

尚ホ研究会ハ適宜学内ニ公開ス。

ここである「公開」とは、おそらく講演会ないしは研究発表会であろう。

戦後、この大学研究所は人文科学研究所として生まれ変わることになる(第五部七章)。

戦時下の神学教育

一九四〇（昭和一五）年七月一〇日から一六日の一週間、同志社神学校夏期学校が神学館で開催された。講師と題目は次のとおりである（『新報』第四八号）。

アポクリファの研究（二時間）

カーブ

最近の新約研究（三時間）

富森京次

現代神学に於ける終末論（三時間）

大塚節治

現代の宗教哲学（二時間）

濱田與助

日本精神と基督教（三時間）

魚木忠一

学的研究法としての全体法（三時間）

本宮弥兵衛

オリゲネスの神学思想（二時間）

有賀鉄太郎

講演をはさんで行われた懇談会の指導は、鈴木浩二、海老沢亮、有賀鉄太郎、森本芳雄、小崎道雄らがつとめている。参加者は全国から集まった卒業生など一〇〇名を超える盛況であった。全体として、キリスト教神学と伝道の問題を主軸としての学習と研究討議（懇談）に終始した模様である。総長主催の歓迎会も行われた。

だが、こうした夏期学校は、翌年からは実施されていないようであり、各学校は修練団や報国隊の訓練、講演会などのプログラムを、夏期休暇にむかって用意したのである。

同志社大学神学教育

一九四三（昭和一八）年二月一二日に、同志社大学神学教育後援会が誕生し、組合教会系の

後援会の発足

信徒で、日本基督教団の役員である衆議院議員松山常次郎がその理事長に就任した。これ

は、キリスト教各教派の合同を機会に結成されたもので、その「後援会設立趣意書」には、「同志社大学神学科は新島襄先生が、我国に、基督教精神を普及徹底せしめ、以て新日本の向上に貢献せんとせられし、至誠に発源したるものにして、（中略）爾来七十年我国神学教育の最高峰として日本精神界並に日本文化に対するその貢献は、自他共に之を明識するところなり」とうたい、「一、日本基督教神学の樹立。二、神学の学的権威の高揚。三、基督教精神の国民生活への徹底。四、日本思想の発展に対する基督教神学の寄与。五、大東亜共栄圏の指導・教育に対する貢献」の五項目をあげて、これらは同志社神学科の負うべき重責であり、「本後援会の事業は、日本基督教団の発展に対して、多大の貢献を為すものたるを信じて疑はず」とのべている（『新報』第七七号）。

この後援会の発会式は、全国に散在する神学科卒業生の代表約八〇名が集まって、新島の生誕記念日に行われたのである。右の「設立趣意書」は、その発会式で公表された。式後、総長牧野虎次が「日本基督教と新島襄先生」（『新報』第七八号に内容抄録）という記念講演を行なっている。同志社の神学科を存続せしめようという念願が、後援会発足のモチーフであったことは確かだろう。戦争末期にも、神学科学生に対する奨学金としての指定寄附が、ときおり見うけられ、それが後援会会員からのものか否かはわからないけれども、後援会は、大学の神学科の存続ならびに後述の特別講座の開講にも協力した。

ただ、右の後援会発足と同時に会長にも就任した松山は就任挨拶で、かねがね有賀鉄太郎が「熱心に日本基督教神学の樹立」をとなえていることに共鳴していたとのべてから、「我国学と基督教神学とは相容れ相輔け、相補ふて大東亜建設及至世界新秩序招来の大使命を完遂するもの」だと力説している（前掲『新報』）。そういう松山を会長

にしているところに、後援会の性格の一端がうかがわれぬでもない。それが彼個人の意思にすぎぬとしても、後援会は政治家松山常次郎を会長に選ばねばならなかったのである。松山の解釈にも問題はあろうが、有賀が「日本基督教神学の樹立」をとなえていたのだとすれば、松山の意向はあながち彼個人の意向にすぎぬとも言いきれない。

宮川実践神学講座

右の後援会が発足した年の一九四三年一月一九日から二二日にかけて、大学神学科は「宮川実践神学講座」を開催している（『新報』第八五号）。これは、宮川経輝を記念して計画された

学徒練成会であり、此春寮を宿舍として「六時三十分勸語謹写、七時体操、七時三十分朝食、八時学課、十時講演、十二時昼食、十三時学課、十五時研究会、十七時夕食、十九時祈禱会並に各班会」といったスケジュールであった。

練成会としては神学科らしいユニークなものである。学課および講演は、魚木忠一「宮川経輝先生と日本基督教神学」、牧野虎次「宮川経輝先生の牧会」、せんだいひまたが沢潟久孝「上代の御製に拝する大御心」、小崎道雄「日支基督教徒の提携」、山口金作「牧師の自己修養に就て」などであり、練成主任には巣鴨教会牧師田口重良（校友）が当たっている。

同志社神学教 翌一九四四（昭和一九）年一〇月三十一日の常務理事会では、同志社神学教育協力委員会委員に、総**育協力委員会** 長牧野虎次、専務理事若松兎三郎、同奥村龍三の他、大学から法学部長土井十二ほか四名、教団

から茂義太郎他三名、神学教育後援会から松山常次郎、安東長義、以上一四名を委嘱している。背水の陣を敷いたといっても過言ではない。一九四二（昭和一七）年には、関西学院神学科との統合について日本基督教団の意思表示もあったが、同志社はそれに応じなかった。同志社神学教育を、とにも角にも守り抜きたいという関係教員および卒業生有志の熱意が、同志社当局者を動かした面もあったにちがいないが、牧野総長や理事会としても、決して進んで神学科を廃止する意思はなかったのである。

海老名日本神学講座 一九四四年一〇月一七日から二〇日にかけて、やはり大学神学科による「海老名日本神学講座」が実施されている。これは六月に実施する予定で、参加の申込み受付けまで済ませていたが、文部省

の意向や、防空体制などの関係があつてか、「戦局の急速なる推移」（同「案内状」）により二度延期した末に実施された。食糧は各自持参のことと「案内状」に書かれている。

学課として掲げている演題は、海老名弾正の神学や同志社との関係が中心になっており、関西学院大学へ移っていた中島重も「海老名先生の信仰と思想」という講演を行なっており、座談会では海老名みや子が「夫弾正の思ひ出」を語っている。鍊成主任は吉田隆吉牧師であつた。

「宮川実践神学講座」も「海老名日本神学講座」も、学徒鍊成の名目で実施されたものではあつたが、同志社神学の灯を、戦時下の最悪の条件下においても、ともしつづけた証しとして特筆されてよい。神学科は大学の一学科として残され、旧約・新約その他キリスト教神学関係の科目は、敗戦の日まで設置されていた。ただし、学生は皆無に等しかったし、授業はできなかった。もちろん神学科のみがそうであつたわけではない。

学徒出陣と勤労働員

一九四三（昭和一八）年一〇月二日付をもって、文科系の専門学校以上の学生生徒の徴兵猶予の特典は撤廃され、次々に召集された学生たちは、学生服を軍服に着替えて学園を去って行った。そして同時に、学生、教職員、校友の戦死の悲報もあいついだ。

すでに、日中戦争開戦の年、一九三七年一〇月三十一日には、戦没校友の合同慰霊祭をチャペルで行なっており、

以後毎年一回秋に開催されていたが、太平洋戦争開戦の翌年からは回数も多くなり、学生生徒の戦死者の数が増え
てくる。

一九四〇（昭和一五）年十一月二七日の常務理事会では、戦没者の葬儀について協議している。一九三八（昭和一三）年九月二七日に高商講師荻野勝太郎が戦死しており、また、一九四〇年一〇月一七日には、中学教諭加藤出雲（陸軍中尉）が、中国大陸で戦死した。加藤は専任教職員としては最初の戦没者である。学校としてはその葬儀をどう行うべきかが問題になったのであろう。専任教職員の出征者は多かったから、戦死した場合の扱い方については以前から問題になっていたにちがいない。右の常務理事会では、「社葬ノ礼ヲ以テ葬送ス可キ者ハ同志社財団ノ発展ニ貢献シタル者ニ限ル」という申し合せをしている。ただし、特別の必要がある場合は常務理事会の議を経て「夫々ノ学校ニ於テ学葬ノ礼ヲ以テ送ル」ことがある、という特例を認めている。政治的社会的配慮の点でも、国家のためと同僚から戦死者を出した当該学校教職員の意思の点でも、特例を認めざるを得なかったに違いない。中学は、翌一九四一年二月二二日に、加藤教諭の中学葬を栄光館で行なった。



出陣記念植樹の碑

出陣学徒壮行会

戦局がいよいよ苛烈になった一九四三（昭和一八）年十一月一日、全国の高校・専門学校以上の学校同様、同志社からも大量の学徒（人数不明）が出陣することになり、全学園の教職員・学生生徒が男子部グラウンドに集まって、出陣学徒の壮行会を挙行了した。

総長牧野虎次は出陣学徒に向かって、「新島先生在さば、恐らく『我も征くぞ』と仰せられ、諸君の陣頭に立たるゝことは

疑ひありません。(中略)一人死して無数に生き、肉魂の滅亡は心靈の更生なりとの確信の下に、各々の魂を磨きその身を清き器として大君に捧げんことを望みて已みませぬ」(『出陣学徒に饒す』『新報』第八六号)と、聖書の「一粒の麦地に落ちずばたゞ一つにてあらん、若し死なば多くの実を結ぶべし」という聖句をひいて、はなむけの辞をのべている。

これに對して、出陣学徒を代表して大坪幸弘(経済学科三課程)は、「時なる哉九月二十三日遂に待望の学徒出陣の大命下る。唯畏し。征かん哉。久しき月日未だ学窓に止まり、うつ勃たる殉国挺身の決意躍動し脾肉の嘆をかこつて居た我々に光榮の日は到来した。(中略)這般の真諦に徹せざれば敵米英完滅の目的達成は困難である。出陣に際し、我々は大和民族の生存力が必ず米英を克服せずんば止まずの信念に基き、この本質の発動する本然の姿が一億戦鬪の配置形態である事を自覚しなければならぬ。(中略)我々にとつては戦争そのものに文化的意義があり、我々の現実的行動理念がある。即ち戦争それ自体が我々の宗教であり、学問であり、哲学である。つくづく今戦争の苛烈さ、厳肅さを、又歴史的偉大性を身を以て感じてゐる」(『我等今ぞ征く』『同志社大学報国団報』昭和一八年一月二十九日)と応えてゐる。

戦場に赴いたのは専門学校以上の学生生徒のみではなく、中学校においても「野村(仁作)校長の硬教育大に効を奏し、戦局下最も緊要の陸海軍諸学校への入学者並に入隊者を多数出し国家の要請に應じてゐる」(『新報』第八六号)と報じられており、入学あるいは入隊先は、海軍甲種飛行予科練習生、陸軍少年飛行兵学校、海軍兵学校、海軍機関学校、陸軍士官学校などであった。もちろん志願によるものだが、一九四四年頃には、一クラスに四、五名以上そういう生徒がいた。

学生生徒の 勤労動員は、すでに太平洋戦争の開戦以前から断続的には行われていた。一九四四年三月七日に

勤労動員

は、「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」を閣議で決定し、中等学校以上については原則として通年動員とするという方針を打ち出した。さらに同年七月一日の閣議では、勤労動員を中学校低学年にまで拡大することを決定し、全国の各学校校長、監督官庁へ指示・督促した。

加藤延雄（中学校教諭・生徒監）の勤労動員に関する回想の手記によると、初期の勤労動員は市内各地および学校内の待避壕や貯水池掘り、近郊農家の手伝いなどであった。伏見の師団司令部内の防空壕掘りにも駆り出された。主要道路わきの通行人のための待避壕は、幅一メートル、長さ三メートル、深さ一・三メートルの無蓋のごく簡単なものであった。

一九四四年七月に「中学生に対しても勤労動員令が出て報国勤労隊として同志社中学校の三年生以上は伊丹の三菱電機稲野工場に出動した。私は当時生徒監をやっていた関係で動員主任を命ぜられていたが、下級生達の京都やその付近における動員のことは他の先生に委せて伊丹へ行った」（同手記）、伊丹工場では養成工のための建国寮に宿泊し、約一年間の動員生活中は、シラミやカイセンにさんざん悩まされたと書いている。同年七月七日に三年生以上の通年勤労出陣式が校庭で開催されたことについては、「中学校日誌」にも記述がある。加藤の右の手記によると、伊丹の三菱電機工場には数校から動員学徒が来ており、同志社中学校からは約五〇〇名で、人数は最も多く、また、全動員学徒数は工具数よりはるかに多かったとのことである。しかし、運輸事情などのために資材がなくて手すきの時間がはなはだ多く、仕事は断続的で時間をもて余し気味の状態が続いた。しかし、工場内では授業に類したことは一切許されなかった。そこで、学校の図書室から運び込んだ数百冊の図書をもって寮に臨時図書室を設け、それを読ませた。その図書室は同志社中学校生徒ばかりでなく、他の学校の動員学徒や工具にも活用されたそ

うで、予期せざる貢献をしたわけである。

同工場の食事は、全国どこでも大なり小なりそうではあったが実にわるく、医療面も甚だ不行き届きだったので、父兄の中の医者が医療班を編成して、月一回くらい交代で診療した。また、遮蔽幕のない宿舍から警戒警報中に灯がもれたというので警察からひどく注意され、二度目は「青年団の密告によるものであった。私はひどくなくられた、そして留置する時まで」警察に言われたと、加藤は書いている。警察へ同行した会社の責任者は、電灯の遮蔽設備が不十分であることについては、もしらぬ顔をしていたという。

加藤延雄は一九四五（昭和二〇）年三月末に帰校を命じられ、四月から教頭に就任した。交替に柳島彦作教諭が赴いた。一年の間には柳島の他、中堀愛作、秋山哲治、渡里森蔵、藤野惣太郎、森田寛太、梅原俊一など、ほとんどの教諭が交替で伊丹へ出張した。動員主任であった加藤だけが責任上長期間にわたって工場で寄宿舎生活をしたわけである。二年生以下の生徒は、防火のための強制疎開の後片付作業（釘抜を持参したので「釘抜動員」といったと、加藤は書いている）や、山科の海軍飛行機工場（元紡績工場）へ自宅から毎日通勤した。動員生徒に対しては、ごく僅かな手当が支給されたとも右の「手記」に記されている。

大学生の勤労動員については、出陣学徒の場合と同様、記録はほとんど残っていない。引率教員（隊長）の日記が若干あるが、ほとんど重要なことは記されていない。その中の一冊は、「宿営録」（一九四四年自三月一五日至二九日）で、最初の引率者（途中で交替している）は松井七郎教授、行先は滋賀県穴村、学生二十八名である。最初のページは出発した三月一五日の記録で、松井が書いている。その一節に、「午前七時二十分三条大橋発、同八時半浜大津発、九時半穴村着。村民の出迎を受く。直ちに村社神前にて請入式挙行。村長代理助役、地方事務所経済部長及区長の挨拶あり、之に対し学生の申告及び指導教官の答辞あり、式終了」、といった状態で始まり、湿

田の排水路作りや、農道の拡張作業に従事したようだ。食事もよく、村人からも感謝された。

おなじ時期に、滋賀県下田上村大字里へ動員された学生の場合は「訓練日誌」というのを残している。その「後記」に、「此度我等十名の熱汗以て完成せる農道の明細を此処に記し永遠に記念せんとす。位置、栗太郡下田上村大字里字塩尻」と書き起こし、石山駅から二一五メートル、幅二・二メートルの農道を建設した模様を、データをあげて詳細に記述している。おそらく、彼らだけが作業に当たったわけではあるまいが、学徒隊員一〇名以外の人員については記述がない。この「訓練日誌」は学生の手で書かれている。到着の翌三月一六日の項には、「早朝降雨の為六時半起床、八時作業開始。前日の作業続行大いに戦果上る。本分遣隊の作業目標は、能率主義を以て徹するものとす、訓練主義は往々にして労力の浪費を副ふものなり。吾人の農村に来れるは直接労力を国家の戦力増強に参与せんとするものなり、かゝる時に於て訓練主義の如き空理空論を以てその目標とするのは、既に時間の觀念の喪失せるものなり。然して能率主義は単に体力の消耗のみならず、智能の鍛錬となると信ず。然し能率主義の不徹底なるものは訓練主義よりも尚弊害あるものなれば、細心の注意を払ふつもりなり」などと記している。この「分遣隊」の場合、引率教官(隊長) 名が書かれていないので、誰が派遣されたか明らかでない。

能率主義に徹した彼らは、体力もかなり消耗したようで、「日誌」に経済学科一課程斎藤晃一は「感想文」を書き添えているが、勤労奉仕の意義を大いに強調しながらも、「体力は三日目にして消耗しつくし後二十四日迄惰性に依つて続行」などという記述が見うけられる。行先きや従事した作業によって勤労動員はさまざまな点で差があったようである。しかし、概して農村へ派遣された隊については、食糧事情だけは比較的よかったらしい。

一九四四年あたりから、中学校上級年次以上はほとんど授業らしい授業はなかった。動員先は右のような農村はまだ恵まれていた方で、神戸の造船所などへ長期動員されていた学生生徒は、空襲で怪我人が出る状態であつた

「教務日誌」一九四五年）。学生生徒は関西一円の軍需工場へ動員され、また一部は山陰方面の農村で、湿田の暗渠排水路工事などにも従事した。どの地区でも教員および動員学徒に病人が出たようだから、相当苛酷な労働および待遇だったのだろう。動員先で空襲にあい、死者を出した学校もあった。出陣した者も残った者も、程度の差はあれ苛酷で危険な状態に置かれたことに変わりはない。まさに、地獄の季節であった。

一九四四（昭和一九）年三月一日より同月二十九日に至る「同志社大学報国隊勤労出勤訓練規定」の第一項「目的」の全文を次に掲げておきたい。

学徒勤労出勤ノ本旨ハ単ナル労働ノ提供ニ非ズシテ、行学一体ノ精神ニ則リ勤労即教育ノ実ヲ挙グルニアリ。殊ニ教育ニ関スル戦時非常措置方案ニ伴フ学徒ノ軍事教育強化要綱趣旨ノ教練特別訓練、勤労動員等ト相俟ツテ軍事能力ノ向上ニ資スルニ在リ。トリワケ現戦局下ニ於テハソノ出勤使命正ニ聖戦完遂ノ聖業ニ参ズルノ自覚徹底ニアレバ、生活ノ基調ヲ茲ニ置キ、以テ集団的連続宿泊訓練ヲ行ヒ、内務ニ於テハ軍隊内務規律ニ準ジテ起居容儀諸勤務ヲ実習体得セシメ、厳正ナル隊紀ト命令ニ対スル服従ノ下逞マシキ実践力ヲ発揚セシメ皇国学徒戦士タルノ本義ニ徹セシメントスルニアリ。故ニ之ガ消長ハ一ニ国運ノ隆替ニ関ルヲ心シ、ソノ士氣正ニ旺盛ナラザルベカラズ。

新島の胸像

一九一六（大正五）年に、校友山本唯三郎から寄贈された新島の銅製の胸像（製作田中親光）は、金属回収令により供出することになり、一九四三年一月一日日の出陣学徒壮行会当日、その欲送式をあわせて行なった（『新報』第八六号）。現存の胸像は、石膏で型をとって残しておいたものを元にして、戦後改めて作製されたものである。ただし、型取りに手間違ったせいもあってか、銅像が実際に供出されたのは、敗戦の年の二月であった。

第九章 太平洋戦争下の学園——女子部

一九三〇年代の歩み

女専と高女 同志社女学校の名称は明治の草創期とともに古い。専門科（その後専門学部、高等学部、再び専門学部と部の分離 改称）と普通科（その後、高等普通学部、普通学部、高等女学部と改称）が併置されてからも、同志社女学校

は両者に冠される正式名称であった。一九三〇（昭和五）年両者を分離独立させ、それぞれ同志社女子専門学校（六月認可）と同志社高等女学部（九月認可。始め「同志社女子中学校」という斬新な名を出願したが認可は得られなかった）とし、以後同志社女学校の名は通称となった（ただ現在は同志社女子中学校、女子高等学校の「同志社女学校父母の会」にだけ正式名称として残っている）。文部省への校名変更認可申請には、同一校名による支障を理由としているが、実は、女子部の充実発展に由来するものであった。大正中期から昭和初頭にかけて、社会的評価も定まって生徒数は確実に増加していた。

名称変更に先立って、すでに一九二七（昭和二）年度以来、分離独立への布石となる機構改革に着手、財政はこの



女専バッジ

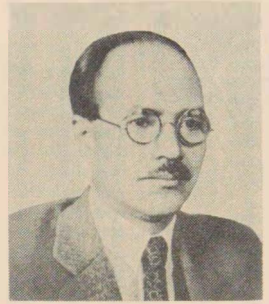
年度から分離して、共通部分も按分負担としている。さらに、教員組織にも及ぼして、海老名弾正総長は一九二八年一月早々、女学校教職員を召集して、女学校規則の変更を説明、訓示している。従来女学校長は松田道まつだみちであり、普通学部には主任を置いていたが、校長は総長兼務とし、専門学部長に松田、普通学部長に中桐道太郎なかぎりみちたろうをそれぞれ専任させた。なお、その後大工原銀太郎総長就任後は、総長が専門学部長を兼任し、校名改称後は女専校長となり、松田は女専主任教授に任じられた。松田が女専校長となるのは、一九三二（昭和七）年四月である。二八年の改組では、教員はそれぞれ専属を決め、女専には職制上教授、助教授、講師の三職名を設け、専属外については相互に兼任嘱託の形をとらせた。未分化だった教員会議も教授会と教諭会とに分離独立させた。一九二九年二月に女専専用の徽章を制定したのも趨勢を象徴しているであろう。

しかし、両者は依然不可分であって、文部省への年次報告でも、校地は「画然ト區別シ難キヲ以テ」女子部全面積を掲げ、校舎も音楽室、体操室、事務所などを共用としている。事実、両者は役員協議会を設けており、また必要に応じて専門、高女の「両学部連合職員会」（教員会）を開催するなど協調関係を維持している。一九三二年二月に竣工した栄光館は、同窓会を含め女子部の渾然一体の成果であった。一八万円を要した建築費はファウラー（Elbridge Fowler）の寄附を基にしているが、同窓会が数年来資金募集の中心となり、女子部を挙げてバザーなどを催して貯えたものであり、ここが共通のヘッドクォーターズとなるのである。そうした現象面を超えて、両者は教育の精神においても実態においても一体であった。毎日の礼拝は週一回を合同礼拝に充てたのを始め、女子部の諸式典、行事の大部分は合同の催しであり、さらに大きくは、全同志社の入社式（合同入学式）、卒業式、創立記念式とその周辺の同志社イヴ、早天祈禱会などを通してひとつの学園として連なっていた。

女子部は、大正の充実期を経て、昭和とともに、いわば順風の中にあつたように見える。

高女部は順調に生徒数が増加している。定員増認可の推移は、一九二三（大正一二）年五〇〇名から七〇〇名、一九三一（昭和六）年七〇〇名から七五〇名、一九三二（昭和七）年七五〇名から八〇〇名、一九三三（昭和八）年八〇〇名をこの年度より一九三六（昭和一一）年度まで、四年間毎年五〇名ずつ増加して一〇〇〇名となっており、実員もほぼそれに見合う増加を見せている。他方、女専の生徒数は昭和初期から減少し続ける。とくに英文科は著しく、卒業生数も、戦前のピークであつた一九二八（昭和三）年の一二八名が、一九四一（昭和一六）年には一九名に激減した。家政科でも、七五名から二分の一以下の三一名に落ち込んでいる。一九三五年以降は、両科を合せても卒業生は一〇〇名を割り、一九四一年には、さらに二分の一の五〇名にすぎない。財政状況を見ても、女専と高女部分離後、女専は一九三〇年度を除いて一九四二年度まで常に赤字であり、高女部が終戦の年の一九四五年度に始めて赤字に転じるまで、一貫して黒字であつたのとは対蹠的であつた。女専の経営上の苦難は深刻であつたが、ただ明治期のように存亡を厳しく問われるまでには至らず、むしろ戦時下に入学生数が、急増したことは後述する。

松田道は定年で、校長在任一年で退く。一九三三（昭和八）年四月片桐哲^{かたぎりてつ}が後を継ぐ（高女部長を兼任）。かれはこの時期を次のように評している。「昭和十年度は何んと云ふ希望に輝ける学年であらう。正に同志社は創立第六十年に相当し、而も湯浅新総長の下に、男女各学部は新に一千数百名の若き学徒を迎へ入れて、躍進の鋭気に満ち充ちて居る。我が女子部を顧れば、高等女学部今年度の入学志願者は嘗て見ざる多数であり、各教室は満員の状況である。更に今学年度よりは一ケ年の補習科を新設し、高等女学部教育の完成を図り、是に三十名の高等女学部新卒業生を収容したのである。又近年女子の専門教育の不況の徴を示しつゝあるも、猶吾が女子専門学校は各科共にそれぞれ相当数の有為なる入学生を迎ふる事が出来、女子部全体に互りて約三百五十名に近き新入生を加へられし事



末光信三

は、誠に歓喜に堪へない所である」(『学友会同窓会会報』第六一号、一九三五年)。多少の誇称は感じられるが、希望に溢れる女子部の状況をうかがいうる時期であった。

新しい陰影

同志社にも徐々に、時代の影がおちはじめた。
すえみつのおせう

末光信三が同志社中学長を更迭されて、中桐に代って高女部長に転じたのは、一九三一年四月であった。更迭は、末光が配属将校の勢力拡大に反対したことに起因する。初め、彼らは中学長の指導のもとに軍事教育を行うということであったのが、次第に様子が変わって、「礼拝などやめて天皇中心の朝拝に変えたらどうか」というような形で、逆に中学長をも指導するに至り、末光としては「同志社教育が日一日破壊されるのを黙視できず」、配属将校との衝突を避けられなくなった。若い末光はこれに抵抗し、それは、軍部から同志社本部への干渉となり、同志社としては新たな難題を回避するための更迭であった(末光信三「思い出を語る」『同志社創立九十周年記念誌』同志社同窓会、一九六六年)。

しかしそれだけではない。当時中学では、一学年四クラスあったのが二クラスも編成出来ないほどに不況の大波を破るなかで、「中学内の勢力のため窮地に立たされ」たことも、無視することは出来ない(海老沢有道「末光信三」『同志社時報』第五一号、一九七四年)。

高女部は末光を歓迎し、かれはその好意に対し心底から感謝感激を覚えて、及ばずながら女子部のため献身奉仕を誓わずにはおれなかった、と述べている。このやや大仰な感激ぶりは、軍部のことだけでなく、更迭の経緯が重いものであったことを物語るだろう。

女子部の事情にも厳しいものがあった。中途退学者のとくに多かった一九二七年には、高女部在学学生(新入の一年



片桐 哲

キリスト教主義は期待すべくもなくなっていたのであるが、この学園のもっていた宗教的特性には変りはなかった。

一九三〇年には、教職員三八名中、信者二一名、未信者一七名と記録されており、一九三五年では、同じく五六名中、受洗者三〇名、求道者一三名、その他一三名と分けられている。これは決して少ない数ではない。他方、生徒の信者は、一九三〇年で一割足らず、三五年にはさらに減少している。求道者を含めても二割には

生を除く五八八名中五二名が「退学及除名者」として同志社庶務部に報告されている。これも不況などによる学費支払い不能者を含むものであろう。いわば合理化を迫られていたわけであり、片桐校長就任を機に高女部長は校長兼任となり、末光は教頭に「格下げ」され、戦争末期終戦直前の一九四五年三月までその地位に留まった。末光がさらにそこを退けられることについては後述しなければならない。

キリスト教教育の問題

高女部におけるキリスト教主義は、当時どのように位置づけられていただろうか。高女部の「教育の方針」を見ると、「国民教育ニ留意シ現代女子ニ須要ナル知識ヲ練磨シ且ツ基督教主義ニ拠リテ婦徳ヲ涵養ス」(一九三〇年)としており、その後、「教育勅語ヲ奉戴シソノ御主旨ニ基キ現代女子ニ須要ナル知識ヲ施シ且基督教主義ニ拠リテ人格ノ向上完成ヲ期シ以テ円満適確ナル信念ヲ有スル日本婦人ノ養成ニ努ム」(一九三五年)となり、さらに「本学部ハ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉戴シ高等女学校令ニ準拠シ修業年限ヲ五ケ年トシ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施シ特ニ基督教主義ノ人格教育ノ特色ヲ發揮シ人物ノ養成ニ努ムルヲ以テ目的トス」(一九三八年)と、次第に時代の色を濃くしていくが、ともかく「基督教主義」が消亡することはなかった。もちろん当時の女子部は、中流の一般市民層に基盤をおくように変貌し、明治大正期のような濃密な

及ばない。

日本基督教聯盟よりの七二項目に及ぶ詳細な「基督教学校ニ対スル質問書」（一九三一年一〇月）では、謙虚で毅然とした応答をしている。生徒中の信者の比率と、それがキリスト教的雰囲気維持に充分かとの問いには、「信者ハ一割五分位」「コレ亦不充分、併シ学校ソレ自身ガ基督教の雰囲気ヲ有スルヲ以テ基督教者ノ実数ニハアマリ支配サレズ」とも回答している。末光信三は、同書中の「将来ニ対シテ」の項の第一に、「教師ヲ悉ク基督教者タラシメタキコト」を挙げている。次いで「生徒一同ニ今一層基督教の感化指導ヲ徹底シタキコト」、第三に「財政的基礎」、最後に「設備充実」とを付している。その抱負がよく示されている。

宗教週間などにおける、たとえば堀貞一牧師の、「神を信じる者は起立！」「神を求める心はあるか！」などの鋭く厳しい問いかけにたじろぐほどであったと回想する人もある。

末光の主催した高女部の聖書講義会ないし聖書研究会は、持続して行われ、「昭和十一年度」から「昭和十七年度」までの記録綴りによれば、ほぼ毎週、水曜日に開催され、初めは常に二〇名にちかい教員が出席している。その後は次第に減少し、太平洋戦争下の「昭和十七年度」では、専任教員も二六名に減っているが、参加者が一〇名を越すのは一回だけとなっている。末光は、この学校における福音的活動の中心に位置したと目されるが、「吾人の間からこそ真に立派な基督教者が出でねばならぬと言ひたいのである、この意味に於て吾人は特に諸子の覚醒と努力を希望してやまぬのである」と、端的に繰り返して訴えている。

また、同志社にゆかりをもつ各界の著名人士や、デントン(Mary Florence Denton)を介して多くの外国人が、頻繁に来校して「一場ノ演説」を行なっているが、これは、生徒たちに大きな感動と誇りを抱かせたのであった。一方、当時の官憲は、「我国特殊ノ国体、国情、国民性等ヲ明徴ニシテ日本国民タルノ自覚ヲ喚起シ又出来得ル

限り現時ノ思想問題ニ関シテモ公正穩健ナル常識ヲ涵養セシムルニ力メ又一般ニ体育ヲ奨励シテ剛健濶達ナル精神ヲ養ハシメ」(一九三〇年四月二日、京都府学務部長) などという通達を繰りかえし、府を通じて桃山御陵連合参拝、天皇、皇族の奉送迎参列や、さらには大阪城練兵場の親閲式などが強化されるなかで、世上、むしろ目障りとする勢力をつくり出した。やがて国体明徴を錦旗として、同志社に目をつける者があった。この外圧はまず大学、高商などに押し寄せ、内紛を伴った。その経緯は第四章以下に詳しい。

女子部「ナシ ヨナリズム」 ひるがえって、同志社内における女学校の別天地的認識は、古くからうかがうことが出来るよ

明治期、同志社当局から出された女学校廃止案に対しても、第二次世界大戦後の中学校との合併案に対しても、また、校友会の同窓会合併の働きかけに対しても、強い抵抗を見せ、それらを退けてきた。一八九五(明治二八)年の、同志社とアメリカン・ボードとの紛糾にも、「然るに、我女学校は同志社の一部とはいへ、殆ど別乾坤を開て内外教師能く調和し」(『同志社女学校期報』第六号、一八九六年)と述べ、「殊に女学校の如きは別乾坤を開き居ることとて、別に何等の影響も受けざりき」(同、第一〇号、一八九八年)と強調している。

女子部をこよなく愛し、文字通り献身を惜しまなかったデントンについての、周知の「世界でいちばん善い国は日本である。日本でいちばん善いところは京都である。京都でいちばんよい学校は同志社である。同志社でいちばんよい学校は女子部である」といういささか合理性を超えた信条も、係わりのあるところかも知れない。女子部構内をよぎって、デントンから追放された記憶をもつ男子学生も多い。

一九二九年四月、海老名総長問題をめぐって男子学生が二週間のストライキを決定したときも、松田部長は朝拝で「同大騒擾事件に付、女学校専門学部は厳正中立とする旨」(同学部「庶務日誌」四月二六日)を申し渡している。



慰問袋の発送（1937年）

一九三〇年代半ば以降、激流に翻弄される同志社大学の状況を息をつめて見つめながらも、首脳を通じて報告を聞き、それを通して緊張を強めていく以上には係わることはなかった。「文部省宗教局より千葉氏招かれ、反戦、祈願に反対する由誤解なき様にとの事有りし由、慰問袋に反対の同志社職員も有る由注意有る様」（女専「職員会誌六」一九三七年一〇月五日）、「時局に関し言動を慎しむ、造言蜚語無き様、反軍的なき様、同志社に注目する由なり注意する事」（同、一二日）。逆らえないまでも、小さくなって風雨に堪えながら、守って行かなければならないものがあった。ただ、三〇年代に限れば、女子部やその特定のスタッフを標的とする外部からの弾圧の痕跡は見られない。

その理由の一つは、攻撃する側からしても、女子部は攻撃目標としての効果の点で、いわば小さな補助船舶を雇ふる意味しかなかったし、いざとなれば、どうにでもできたからかも知れない。第二の理由は、配属将校という外圧を導入するシステムを女子部は課されていなかったことと異なるとは異なるそうした外部とパイプを繋ぐシステムが自治独立にと

行啓記念碑

こうしたなかで、同志社理事会は、天皇の御真影奉戴の決定（一九三五年）、同志社教育綱領の制定（一九三七年）などをもって、国体明徴に対して曖昧であり、「基督教ヲ以テ徳育ノ基本トス」るがゆ

えに、狙い撃ちされた同志社を、軍部、右翼などから遮蔽しようと努めている。それらは防衛であり同時に屈服でもあった。

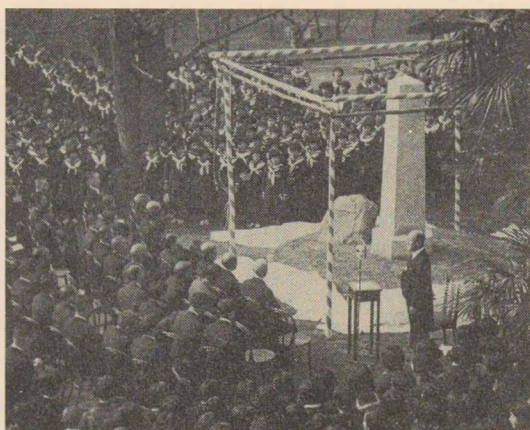
これらは当然全同志社に関することであり、『同志社高等女学部新聞』でも、「御真影奉戴」「奉安殿起工式」「古式床しき御真影奉安殿竣工」などを、小さな記事だが、そのつど最高の敬称で報じている。また「教育ノ方針」に早速、同志社教育と教育勅語とが背反するものではない、という同志社教育綱領を挿入して掲載したのは前記の通りである。「教育勅語遵奉」の文言は、明治末には入っていたが、大正期と昭和初頭の女学校規則から消えていた

ものであった。

女子部にとってもうひとつの重要な事柄は、皇后行啓碑建立のことである。

京都所在の学校にとって、皇族の奉送迎は学校の行事となっていた。とくに御所に隣接した同志社にとって、そのつどの警護には最大の注意を払わなければならないことであった。一九三七年六月、皇太后が入洛し、デントンは拝謁を仰せつかっている。皇后時代の行啓で知遇を得ていたからであるが、その直後の女専教授会(六月二日)で、片桐校長は警護当直に当たったことを感謝し、湯浅総長は一九二四年の行啓記念碑の建立を希望している。そして、一年半後の一九三八(昭和十三年)二月八日にその除幕式を挙げる。

行啓後一四年を経て、それを建立する理由は何だったのだろうか。



行啓記念碑除幕式

傍の銅板のタブレットには、「海老名総長以下一同感泣シ永ク陛下ノ鴻恩ニ報ヒ奉ランコトヲ誓ヘリ爾来十五年當日ノ感激今ニ忘ル、ヲ得ズ乃チ染毫ヲ時ノ宮内大臣伯爵牧野伸顯閣下ニ請ヒテ」建立した、と記している。

この日、片桐校長は次のように語った。「新島先生が教育報国の念願を起して基督精神による同志社学園を創立されましてから、幾多の迫害苦難と闘ひ漸く当初の目的を貫徹して、良心を手腕に運用する有為の青年男女を続々社会に送り出すに至つた功績が畏くも雲上に達しまして今の皇太后陛下の行啓を忝うする光榮に浴したのです。爾来本校生徒の胸には陛下の御坤徳を日本女性性の鑑と仰ぎ奉る敬虔の念が伝統となつて参りました。今後も此の記念の御碑を仰ぐ毎に更に感銘を新たに、教育の任に当り且つ愈々婦徳を磨き行く生徒を祝福する次第であります」。

『同志社高等女学部新聞』は、右の記事のほか、牧野総長の献上した当日の記念碑除幕式写真アルバムが陛下に嘉納され、「同志社が愈々発展し行く事を満足に思ふ」という言葉を得たこと、および行啓の際の「益々同志社教育の特色を発揮せよ」との言葉を併記して「御聖旨に応へ奉らん事を誓う次第である」と結んで報じている。

これを紹介すれば、行啓記念碑建立が軍部、右翼勢力などを超えて、同志社教育が高い所から是認されていることを顕示するものであったことが了解できるのではないだろうか。

こうした幾つもの遮蔽物を懸命に構築しながらも、国と時との趨勢に協力せざるをえないさまが、あらゆる記録から読みとれる。

『同志社高等 一九三五（昭和一〇）年六月創刊の『同志社高等女学部新聞』は、同志社教育の理念や方針を、生

徒と父母に徹底させ、相互理解を深めることを通して協力体制を得ようとしたものであった。それは確かに戦時下キリスト教学園のジャーナルとしてのすぐれた個性をうかがはせるものである。しかし、一九三



『高等女学部新聞』創刊号
(1935年6月30日)

七年の日中戦争の拡大のころから、この新聞も戦時色を強め、同時に「報国」体制を明らかにして行く。

一九三七年一〇月二五日発行の第一一〇号では、第一面上段に明治天皇御製、続いて退任の近い湯浅総長の「和協一心、忠誠奉公」と片桐校長の「皇后陛下の御歌を拝して」を掲載しているが、ともに第七二回臨時帝国議会開院式の際の勅語に則った文である。第二面は「非常時局と我が校」を特集している。他の見出しには、「全校を挙げて緊張・活躍、慰問袋一千個製作、慰恤金も献ぐ」「国民精神総動員週間、学校も家庭も非常時体制、一銭献金を本学期中継続」「父兄応召者芳名」「時局ニ対スル学校ノ措置事項ニ関スル件」などの記事で埋めている。最後の項は対時局教育教化委員会によって打ち出された事項を公表したものである。それらの立案、実践はすべて府への報告を課せられていた。国威宣揚武運長久祈願式、防空演習、出征軍人見送り、愛国大行進、神社参拝、勤労奉仕その他の諸行事は、府学務課が克明に指示し、かつ報告を課していたことを知らなければならない。

同じように、女専の場合は、文部省が通牒し管理していたが、ほぼ同等の対応をしている。同年九月四日「時局に関する協議会」が初会合し、一〇日の教授会では、これを同志社女子専門学校対時局委員会と定め、常置委員会として取り組む。

当時同志社創立六〇周年事業部は、「我等も又統後の赤誠を披瀝せんと欲し、茲に皇軍慰問事業の第一歩として」慰問袋募集を行う。九月末日で締め切った第一次募集には、「職員一一八箇、女専高女一二〇八箇、計一三二六箇」が集められている(同志社々報』第一一〇号 一九三七年一〇月一五日)。

一九三七年の創立記念週間は中止され、伝統の同志社イヴに代って一〇月三〇日に、愛国音楽会と銘打った学内一四団体の出演する音楽会が栄光館で催された（主催・創立六〇周年記念事業部、大学、高商学友会、校友会、同窓会京都支部、後援・大阪毎日京都支局）。純益金五一六円五五銭は「在支満皇軍慰問並ニ出征兵士遺家族救済資金」として毎日新聞に寄託された『同志社々報』第一一七号 一九三七年一月二十九日。

一月一五日発行の第一二号では、第一面の欄外に「祝南京陥落 賀皇国萬歳」と二号のゴチックで刷り込んでいる。第二面の「事変下の本校」には、時局献金八〇〇円の突破に続いて、時局認識を深めるために全校教職員生徒を挙げて胸に日の丸バッジを佩用し、各教室には日章旗の下に「皇軍の艱苦を偲び学業に精勵せよ 同志社」のポスターを掲げ、学生の本分に精勵していることが報じられている。栄光館の、水野恭介海軍中佐、志村卯三郎基督教連盟北支從軍慰問使の講演のことが報告され、在洛全公立女学生一万人の戦勝祝賀行列のことも記されている。第三面には「同志社より遣米使節、米国最高学府を通じて、支那事変に対する認識是正」の見出しの記事もある。

第一一号に顕著に現われたこれらの傾向は、以後失せることはなかった。そればかりか「主張」のなかにもこの傾向が色濃く忍び込んでいるのを知るのである。それと憂国の志士、愛国者新島襄がことさらに強調されたことである。この時局下でそれがなされるときに、特有の意味を帯びなかっただろうか。

このような状況のなかで、一九四〇（昭和一五）年一月二四日、女専・高女部全員の檀原伸宮参拝が実施されたのであった。

一九四〇年代に入って、第二二号（一九四一年七月）では、学友会を改組した同志社高等女学部報国団結成について述べ、認可申請中の団則を掲げてある。これを受けた第二三号（同年二月）では、報国の決意が全紙面に開陳さ

れている。

報国団結成式は、女専が一九四一年四月一日、高女部が七月一日であり、九月には報国隊が結成され（高女部三日、女専八日）、早々に担架、繃帯、防空などの訓練が開始された（旧都の学徒錬成・同志社女子専門学校「婦人公論」一九四三年一月号）。さらに、一〇月には同志社防護団女子部分団規定を制定し、翌年二月同志社女子部防護団規定に改め、翌々年五月には一層実際的なものに改めている。

時代の趨勢が痛いように察知できる。

暗い谷間の 今出川通りから校庭を眺めると、緑の芝生の奥に赤いレンガのジェームズ館と静和館が栄光館を中

なかの陽光 心にシンメトリーに並ぶ。栄光館が竣工したところ、その整ったエキゾチックな雰囲気は、御所の静

かさと共に、女生徒の春秋に相応しい教育環境をつくっていた。明治大正期の蓄積の上に、ようやく咲き出ずる趣は、花園であり、先の片桐校長の希望の言葉に領かせる。

外人教師との日常的な交流。春秋の近郊への遠足や陸上運動会。津の御殿場や淡路島などへの旬日をこえる臨海学舎。高野山や比叡山での修養会。東北、北海道、満州・朝鮮（女専や九州（高女部）への修学旅行。一九〇三（明治三〇）年デントンが創始し、以来断続して催されたバザー。文芸会や雄弁大会。イヴの全同志社音楽会。クラブ（Frances B. Clapp）が最初に構成し、一九三六年以後栄光館で催されたクリスマス・パーティー。スキー旅行。学内外の英語弁論大会でも活躍している。いまだ良き時代の鮮やかなスクール・ライフが彩っていた。

第一〇回オリムピック大会（ロサンゼルス）には、高女部四年生の横田操が水泳に出場する。

一九三六年度の第三回日米学生会議には、女専から小野寺久子が参加した。翌年のスタンフォード大学での会議には望月満子が代表に選ばれている。さらに、第五回には平田澄子、石田とし子が出席、この年の日比学生会議に

は川島フサ、伏見令子をフィリピンに送っている。一九四一年に中止されるまで、日米、日比両学生会議には毎年各数名が参加している。

また、昭和初頭の不況期でさえも、高女部の上級学校進学者は三、四割に達しており、女専からは数名ずつ大学に進学している。他方、一九三六年七月、女専卒業生に「時代の要求と就職戦線伸展のため申請中」であった尋常小学校本科正教員の無試験検定による免許状下附が認可されている。

この時期に注目すべきことは、女専において学術の面において研鑽する組織を企てていることである。すでに大正期に外国留学規定をもち、それ以前から歴代校長を始め多くの留学体験をもつ学術的に高い水準のスタッフを擁していたが、同志社女子部のもつ従来の役割は、学問的水準を追求するところにはなかった。

一九三六年度に教授研究発表会を発足させ、生徒にも聴講させている。ちなみに、第一回は六月一日、小崎千代教授「最近の榮譽學に関する二三事項について」と滝山徳三教授「英国小説の発生まで」が発表している。さらに、それとは別に生徒、卒業生をも正会員とする学術に関する会設立の検討を重ね、ついに一九三八年一〇月二四日女専英文学会の発会式に結実する。この日の発表者は舟橋雄同大教授「英語聖書の文体 その発達と影響」であった。以後一月二八日女専滝山徳三教授「デッキンズがデビッド・カパーフィールドを作るまで」、翌年二月一九日京大石田憲次教授「ヴィクトリア朝の社会情勢」、彦根高商高橋源次教授「ゴルズワージー『正義』を中心として」らが続く。発足の遅れた家政学会も、一九三九年五月一六日に創立され、活動を開始している。これらは、将来の女子大学の学統に繋がるものである。

さて、一九四〇年、女子部には二条の陽光がさす。春の同窓会館の竣工と、デントンを派遣している米国太平洋婦人伝道会から彼女の五二年の教育献身の功績に対するパイプ・オルガン贈呈である。これは翌四一年二月栄光館

講堂に組み立てを完了する。二月早々久邇宮家彦王はデントン邸に「御微行ニテ台臨」、パイプ・オルガンを視察している。すでに日米関係は險悪化し、クラップ、ヒバード(Esther L. Hibbard)、カーブ(E. S. Cobb)、トマス(E. Thomas)ら同志社の外人教師の帰米を見るなかで、六月六日「デントン先生功績表彰パイプオルガン贈呈式」が挙げられ、翌七日夜パイプ・オルガン演奏会が開催された。勝俣敏子(高女部教諭、女専講師)が演奏し、また女専と高女部生徒が合唱をした。

この年の秋には、日米開戦に備えて、大学高等専門学校の修業年限短縮の勅令が公布され、一二月に卒業式を繰り上げたのであった。同志社は、暮れのおしつまった二七日に専門学校以上のみの同志社第六四回卒業式を挙行した。元文相陸軍大将男爵の肩書の荒木貞夫が来賓代表として祝辞を述べた。女専の庶務日誌は「式後の午餐会本年は無し、同窓会入会式も無し単に記念品を卒業生に配布するのみ」と記している。

一二月一日付官報は、デントンを「指定外国人より除外ス」と載せ、在留を認めていたが、八日開戦と共に特高警察の監視下におかれた。

戦時体制の時代

戦時下体制

一九三〇年代を通して教育の国家統制、軍国主義化は強化徹底され、三〇年代は三九年の「青少年学徒ニ賜リタル勅語」下賜および修文練武の方針を文部省が各学校宛訓令することで括られる。大
学高専の修業年限短縮については前述したが、さらに、一九四二(昭和一七)年八月、閣議は中高等学校などの学年短縮要綱を決定、その行き着くところ一九四五(昭和二〇)年三月の国民学校初等科を除き一年間原則として授業を



岩倉農場（岩倉校地）の女専報国団

停止するという決戦教育措置要綱の閣議決定に至るのである。この間、学生生徒の錬成と戦時動員体制が確立され、その極限には学徒出陣があった。一九四三年十一月一日の同志社出陣学徒壮行会には、女子部も授業を中断して参加し、校門を出る男子学生を見送っている。しかし、女子にも、出陣しないまでも逃れる道はなかった。進学しなくても、未婚女性は女子挺身隊員として軍需工場などに動員配置され、一九四四年初めには、無職未婚女子の動員体制は一二・四〇歳に拡大されている。こうして、太平洋戦争下、学校教育は実質的に停止され、戦時下の極限状態に立ち至らしめられたのであった。

時局が教育のなかに持ち込んだ多くの負^ふ担^{たん}については前述もした。しかし、そのなかでもなお、女生徒たちにとって、春秋五日間の修練道場（女専、一九四一年より大沢寮を転用）の生活や、舞鶴軍港の見学（高女部五年生、補習科生、一九四二年巡洋艦吾妻 などは、一種の彩りを覚えさせた。

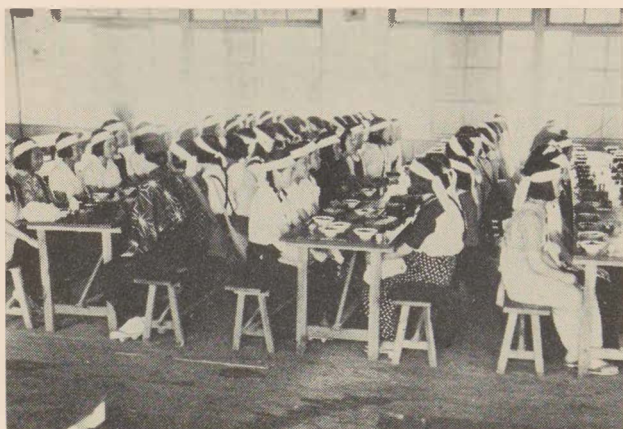
岩倉農場は、一九四一年二月の青少年学徒食糧飼料増産運動実施の文部省通達を契機に開かれることになったが、この他、下鴨の野々宮、加茂川畔（女専）にも農場を求めている。やがて校庭も芝生をはいで畑にした。この年の三月、高女部が祝園（大阪陸軍兵器補給廠祝園部隊）に出動して以来、女専も続いてしばしば出動を要請されている。また、学校農場だけでなく、農繁期援農勤労奉仕で各地に出動するようになる。教職員の防護当直も一九四二年から始められている。

それでもなお、授業は頻繁に中断されながらも、学校としての面目は辛くも保っていた。

しかし、一九四四年には戦時下体制強化への質的転換が決定的となり、生徒はついに学校のわくを越え軍需工場に動員されるに至ったのである。前年の「学徒戦時動員体制確立要綱」および「教育ニ関スル戦時非常措置方策」に加えて、一月一八日に「緊急学徒勤労動員方策要綱」が閣議決定され、二月一九日付文部省次官名で、これを「強力ニ実施シ戦力増強ニ挺身セシムルト共ニ戦局ノ現段階ニ処スベキ学徒ノ教育錬成ヲ完カラシムル」ことを命じた。

高女部は、すでに短期の祝園部隊の他、東亜機械、京都工作機械、草川電機、第一工業製薬、奥田電機、三谷伸銅所、日本冶金などの軍需工場に出勤していたが、ついに、七月一日、五年生が鐘淵工業京都工場(高野)へ、八月一日、四年生は三菱電機伊丹製作所(兵庫県塚口町)へ、それぞれ通年出勤することになった。一〇月には、三年生も一八日に京都精工(紫野、二組)、二三日に鐘紡(高野、一、三、四組)へそれぞれ出勤する。翌四五年には、残留生にも及び一月一八日に弱体学徒の学校工場受入壮行式を挙行、翌日から仕事を開始した。これに伴って二年生以下の倉農園作業は頻度を増し、ほとんど毎日一学級が交代で従事している。その他茶摘み、麦刈などへの出勤、校内での古釘打直し、古布の端縫作業などが課された。さらに、一九四五年度の新三年生も三菱重工業第二製作所(山科)に動員されることとなり、六月一四日の朝壮行式、午後には工場での受入式が挙行された。三月に四年を卒業した専攻科生は、伊丹から転じて七月一三日からは太秦青龍工場に出勤することになった。

女専の通年動員は高女部より遅れて、一九四四年九月に三年生が卒業した後、一月一日に英語科二年生が第三一海軍航空廠(府下与謝郡栗田村)へ、二三日に家政科二年生が三菱重工業京都発動機製作所(桂)へ、それぞれ動員されることになる。この学年はこれまでも学業はしばしば中断されてきたが、一九四三年四月の入学後一年八カ月で正規授業は全く打ち切られ、翌四五年九月に卒業するまで、実質的な授業を受ける機会はなくなったのである。



伊丹工場での高女部生徒の昼食

一年生は四四年五月入学後八カ月余で、四五年一月一八日に三菱重工業第一四製作所（太案）に出勤する。かくて、病弱の少数残留生徒を除いて、主人公を欠いた学校に非ざる学校となるのである。寮生は学寮から工場に出勤する。伊丹と栗田では、それぞれ現地の殉国寮と清明寮に入寮する。

工場には、深夜に及ぶ二直制から三直制に強化されていく苛酷な労働条件と食糧難、空襲などが待っていた。四五年五月、桂工場の一部は、逢坂山の旧東海道本線の大谷トンネルに疎開し、生徒も大谷工場に移った。

戦時下最後のクリスマス礼拝は女専・高女部合同で一二月八日午後の一時間を予定していた。しかし、早朝の大詔奉読式のあと、警戒警報が発令され中止された。二二日になって、午前中約一時間聖書朗読と音楽を中心にした讚美礼拝をまもることが出来た。この日も、直後に空襲警報が発令されている。合同とはいえ、もはや前年までのように女子部を挙げて行うことは出来ず、残留生によって空襲を避けながら辛うじて挙行できたのであった。

一九四五年二月四日からは防護団の宿直が始まる。出勤生徒は、動員先で時に音楽や国語などの授業を受けたが、しらみや蚊に悩まされながらも、『美術の武田（新太郎）先生から『最後のヨーロッパ旅行』をき』いたり、同級生の「鴛淵（おしんち 都子）わんこ」さんにヴァイオリンをきかせてもらう、曲はバッハのシャコンヌ、アヴェマリア」と日記に記

した生徒たち（同志社女子中高『同志社女子部の百年』一九七八年）、工場の休憩時間にイートンやオックスフォードを語り、ひそかに英書を読み「気障^{きさう}みたいに思われますやろが、私は若い日のことを大切にし、英語を忘れぬためにもと、平生努めているのです」（川村あき『あき句集』一九七七年）と弁解するように語る、武官としてイギリスに派遣された体験をもつ数学教師がいたことなどは、多分ユニークであったに違いない。動員先で讃美歌をうたい、ひそかに礼拝をまもって軍人からにらまれもした。この時期でも、高女部出身者は多くの外国人教師の記憶をもっていたし、後ろ髪をひかれるように退去させられる宣教師たちを見送ったのを思い浮かべることが出来た。デントン・ハウスには、特高監視下軟禁状態とはいえデントンは最後まで留まって、敬愛されていたのであった。こうした学校の教師集団、生徒たちにとって、祖国を思うことは別に、鬼畜米英的戦争観は生じようはずはなかった。時代を超えるものを知っていたといえよう。

一九四五年四月二一日の女子部創立記念日は、動員中の生徒を出席させるため、一七日の休電日に繰り上げて、女専高女が合同で挙式し、式後の演芸会は加藤さだ、加藤てい両教授が指導して催された。

本土決戦が日程に上がる情勢のなかで、六月二六日、同志社女学校学徒義勇隊結成式がファウラー講堂で行われた。片桐校長を大隊長に、両校とも学年、クラスを中隊、小隊に編成したのであった。さらに、女専の新一年生の入学式の挙行された七月一日の午後には、全同志社連合学徒隊結成式が挙行され、残留する全同志社の在校生が列席している。敗戦はもう目前に迫っていたのであったが。

女専の改組

女専の生徒数が減少し続けたことは前述した。しかるに、一九三九（昭和一四）年度を最低に実入学^{じっしやうがく}者数は反転して、以後は急増している。教育本来の目的に期待するところと共に、前年の国家総動員法、この年の国民徴用令の制定と無関係であったとは考えにくい。

男子校、とくに私立文科系にとっては、大学の専門学校への転換が企てられ、定員の二分の一削減、入営延期の中止などの苛酷な統制に呻吟しているときであった。これに対して、女専は「前項の整理の目標の外とし、其の教育内容に付ては男子の職場に代はるべき職業教育を施すが為に所要の改正を行ふ」（「教育ニ関スル戦時非常措置方策」一九四三年一〇月閣議決定）と、むしろ拡充を意図し、翌年一月「女子専門学校教育刷新」が発表された。

同志社女専でも、四三年度中から厚生科新設の準備が進められていた。文部省の意見を斟酌した同志社案が立てられ、看護婦保健婦養成の実習場には、同志社厚生館、佐伯病院が擬された。しかし、結局は、厚生科の学科課程は家政科と重複している嫌があり、文部省の示唆により育児、被服、家政などに分科して、家政科充実の改善の方針をとることにして、同志社女専は、一九四四年四月、新制度を発足させた。

これによれば、英文科は「文科外国語科英語科」に、家政科は「家政科育児科」および「家政科保健科」に改組され、また、従来四年制高等女学校卒業生のために設置していた一年制の英文科予科は、中等学校の学年短縮にもなつて廃止されることとなった。教授会では学力の低下を危惧している。

新制度最初の入学生は、英語科四九名（但し一三名は予科より進学）、育児科七四名、保健科一四五名で、家政科が圧倒的であった。

高等女学校の発足

同志社高等女学部が高等女学校と名告らなかつたことは、第一部の「同志社女学校の開校」の章で述べた通りである。一字違いの表面上の校名のことではなく、実は、宗教を主義とする諸学校にとって存立に係わることであった。このことが再び問題となる。

私立学校令のもとでは、授業料、入学料なども、学則変更認可の形で監督官庁の認可が必要であったが、当時、同志社から文部省に申請していた授業料値上げを機に、中学校令により、「同志社中学」を「同志社中学校」に、

高等女学校令により、「高等女学部」を「高等女学校」にせよと、京都府庁を通して伝達してきていた。末光教頭は、これを次のように受けとめている。

これまで、あえて高等女学部として「各種学校」の適用を受けていたからこそ、毎日礼拝が許され、聖書を講じ、自由なキリスト教活動が可能であった。しかるに当局の通達をのむなら「最早や一切の宗教教育を停止せねばならぬことになる。従って私共は何が何でも同志社中学、同志社高等女学部でおさねばならぬと覚悟したものである」(末光信三「新島先生の声をきく」『れんが』第二号、一九六三年)と。

しかし、同志社内にもキリスト教主義を返上して、外部からの圧迫を回避しようとする意見も決して少なくなかった。中学は、野村仁作中学長の提案で賛否両論の会議を重ねたが、ついに一九四三年四月、「同志社中学校」と改称した。

他方、女子部が果たして孤立しても抵抗していく主体であったかどうかは確かめることはできないが、少なくとも末光は最後までこだわり続けた。このため、文部省は督学官を派遣して、キリスト教主義の難詰を繰り返し、憲兵による追求も重ねられたのであった。末光がこうして国家権力と闘っていることは、教員一般には周知されなかったけれども、彼らは何となくわかっており、それを無言で支えていた。末光は、会議の席上で声高に、そして民主的に論議して、同志をかためて抵抗しようなどとは考えていなかった。また、それができる時代でもなかった。信仰は個人の独立した孤独なものと解していたのではなかったか。現世的な意味では、徹底して力行使しなかった人である。強大な外圧下で、会議を重ねるよりもかえって確信に支えられたし、ぶとい抵抗をなし遂げるという抵抗の一スタイルをかたくなに守っていたように思える。京都府学務課を通じて始末書の提出を求められたとき、これは、その「高等女学校の組織に行なはざる理由書」を、「新島先生の声を聞きつつ精神籠めて書き上げた」とい

う。この理由書は、片桐校長と連名で一九四三年一月二五日付で提出された。

しかし、文部省は改組要求をゆるめず、京都府内政部を介して牧野総長宛に「中等学校令ノ全面的ニ改正サレタル今日速ニ本令ニ抛リ改組ノ手續ヲ履マレ度特ニ本省ノ指示モ有之重ネテ右勸奨候也」（一九四四年三月二六日）などと繰り返し、理事会にも「速ニ履踐相成度右通牒候也」（同年一月六日）と迫っている。それを遷延していた同志社当局は、ついに一九四五年四月「同志社高等学校」と改称することとなり、学則第一条の「特ニ基督教主義人格教育ノ特色ヲ發揮シ人格ノ養成ニ努ムルヲ以テ目的トス」の文言は消失する。

他方、牧野総長を通して、高女部の責任者両名の引退を要求されていたが、当局は片桐校長を女専に専任させて高女と切り離し、新校長に末光を推した。これは府学務課の容れるところとならず、石塚多教諭いすまたもが新校長に就任することになった。

高等女学校としての新年度からは、もはや公然と礼拝をまもることはできない。有志生徒を糾合して同志社同窓会館を借用してこれを行い、聖書は同じようにして毎週研修の時間を設けて継続したのであった（酒井牧男「礼拝と朝礼」『同志社女子部の百年』一九七八年）。

明治草創期に引き戻された感があった。

いくさのおわり

一九四五（昭和二〇）年四月六日、高女は新一年生を迎えて、三学年が在校することとなる。四月一四日、片桐前校長、末光前教頭の送別式を行う。毎日一―二学級ずつ出勤する岩倉農園作業と頻繁な空襲警報で、ほとんど授業にならなかった。とくに、五月三〇日は府学務課から大空襲のおそれがあるから休校せよと指令され（六月四日再開）、七月二五日にも指令を受けて不安のうちに八月七日まで休校している。しかし、この間にも農園出勤は続けられた。六月に三年生が動員されたことは前述した。

他方、女専は、七月一日になってようやく新一年生を迎えることが出来て、臨時の時間割で二日から授業を開始した。新入生を歓迎すべき上級生はすべて出勤中であり、工場の公休日の七月二四日に歓迎音楽会を計画していた。しかし、当日は空襲警報発令で中止された。「敵機小型及ビ大型ノ編隊度々学園上空ヲ通過セリ」(高等女学校「日直日誌」)、この日は五回断続して空襲警報が発令された。歓迎会は次の公休日八月一四日に延期されたが、各工場が公休日を五日に変更したため、結局この日に繰り上げて催すことが出来たのだった。そして改めて六日以後二五日までの授業計画を伝達した。

八月一五日の後、高女は一七日午前九時、終戦の詔書奉読式を挙行、一年生から四年生まで全部が一堂に会し、石塚校長は詔書の趣旨を説明、生徒心得を指示した。二〇日朝、動員解除式が講堂で行われた。翌日から授業休止となり、二学期の始業式を挙行了したのは一〇月八日であった。しかし、この間も農園作業は継続され、学校防空壕埋めの作業は八月二七日から開始している。連合軍京都進駐前日の九月二四日、全校生徒を召集し、永島嘉三郎教頭ながしま かざぶろうが注意を与えている。このころから教師たちは各教科の研究会に手分けして出席し、新学期に備えた。

女専は、動員解除後、とりあえず月末までを夏期休暇とし、九月一日授業を開始したが、府学務課の注意を受け、六日から休業に入り、一〇月一五日に改めて始業式を行う。そこで加藤さだ教授が進駐軍に対する心掛けを話している。この間の九月二七日、三年生は卒業証書を授与されて卒業するが、卒業式は学校再開後の一〇月二九日であった。卒業生一七〇名中九七名が研究科に入る。これは、動員中の学力不足の補充を企図して、一〇月の始業式と共に始め、翌四六年三月まで開講されたものであった。

こうして、授業は再開されたが、食糧を始めあらゆる物資は窮乏していた。反古紙の利用はもとより、教材用の印刷用紙は生徒各人の提供をまたねばならなかったし、冬もストーヴの燃料は手に入らなかった。

ただ、宗教教育の復活は、こうした苦難のなかに光明を与えるものであった。一〇月に入って、牧野総長は東上し文部省と交渉していたが、信仰を強制しないことを条件に、学校での宗教教育を認めさせて帰った。一〇月八日の授業再開後は礼拝を同窓会館から講堂に移し、朝礼の前に有志の生徒を集めて行なったが、約九〇パーセントの生徒が出席していた。一月一日から、ついに朝礼を廃して礼拝に一本化したのであった。たまたま、この礼拝は進駐軍のコースによる讃美礼拝であった。そして、この日も高女二年四組は農園に出動している。女専報国団を解散して、伝統的な学友会を再発足させたのもこの日であった。

こうしたなかで末光信三の高等女学校への復帰が実現する。一月六日の礼拝時に末光の新校長就任が、片桐女専校長から生徒に伝えられた。末光自身が再び礼拝と聖書を担当することになるのである。

第五部 再生と発展

序 章

第五部は同志社の戦後、「再生と発展」の三十余年の歩みである。

一九四五（昭和二〇）年、敗戦の年の一月二十九日は同志社の創立七十周年記念日に当った。当日運動場で挙行した記念式典の次第の概要は「同志社設立の始末」を島本英夫経済専門学校校長が朗読し、牧野虎次総長が式辞を述べ、京都に進駐しているアメリカ軍兵士のブラス・バンドの演奏で式をとじている。戦場や動員先から復員し、復学した教職員や学生生徒が、どれほどそこに参集したか記録に徴することはできないが、それは長く、かつ重苦しかった戦時下の桎梏を脱して、同志社がその創業以来標榜してきた国際協調の旗幟を再びかかげて、「再生」の一步を踏み出す象徴的な姿であったといえよう。

一九四七年四月、牧野虎次総長の辞任後、湯浅八郎が再び総長の職についた。かれは一九三七年辞職後、アメリカに渡り、日米開戦後も敢えてアメリカにとどまって、在米日本人の救援活動に尽瘁した人であり、同志社がその出直しにさいして、国際的経験の豊かな、この総長を迎えたことは、その「再生と発展」の上できわめて大きな意味をもった。そして湯浅総長のもとで、戦後の教育改革にともなう種類の措置が進められていった。湯浅の辞任は一九五〇年六月であり、その後、総長事務取扱に大塚節治が就任し、翌年八月から大塚が総長になった。戦後の占領体制下にあつて、一九五〇年六月に起こり、翌年八月まで続いた朝鮮戦争は、占領政策ならびに戦後の諸改革における分岐点をなしたが、同志社における湯浅八郎の辞任と大塚節治の総長就任は奇しくも、こうした戦後の世界史の転換の局面と符節を

一致するものであった。

大塚節治の総長在任期間は一九六三年一月までの一二年間におよび、爾来住谷悦治がこれを継承し、一九七五年一月、百周年記念日に上野直藏総長と交替するまで一二年間総長に在任する。この間、日本の経済は戦後の極度のインフレ状態を脱して高度経済成長の政策が展開され、同志社は学園の組織・機構を急激に拡大していった。

いま一九六〇年代後半の大学紛争が起こるまでの学校法人同志社の大学ならびに諸学校の「発展」の経過をみると、一九五一年二月財団法人組織から学校法人のそれに変更（認可）になる前に、一九四七年四月には新制中学校、新制女子中学校がそれぞれ発足し、七月には幼稚園の経営を同窓会から移管し、翌年三月には神学部、文学部、法学部、経済学部、工学部からなる新制大学、七月には高等学校、女子高等学校、商業高等学校、一九四九年七月には商学部、工学部ならびに女子大学、一九五〇年三月には短期大学部（夜間二年制、一九五八年二月廃止）、新制大学院（修士課程）がそれぞれ認可された。一九五一年学校法人組織となった年の七月には学校法人香里学園と合併契約が結ばれ、一九五三年四月には大学院博士課程を開設し、翌年四月には大学第二部を開設して文学部（英文学科、文化学科国文学）、法学部、経済学部、商学部、工学部（電気、機械、工業化学、一九六〇年募集停止を置き、一九五七年四月には人文科学研究所、翌年三月にはアメリカ研究所を開き、一九五九年四月には新町校地を併せ、理工学研究所を開き、一九六一年八月には北小松の土地を購入し、一九六六年四月には田辺土地の買収を決定した。

新しい校舎施設も次々と建設された。その主なものを列挙すると、一九四九年に体育館（中学校）、一九五〇年に理科教室（高等学校）、同工館、一九五一年に体育館（女子中学・高等学校）、一九五二年には彰栄

館増築、一九五四年に明徳館（一九五二年第一期工事、この年第三期工事完了）、一九五五年にチャペル（高等学校、デントン記念館、一九五六年に寧靜館、一九五八年に尚志館（香里中学・高等学校）、一九五九年に弘風館（一九五七年第一期工事完了）、桑志館・鵜鳴館（高等学校）、一九六〇年に立志館（中学校、一九五五年第一期工事、この年第二期工事完了）、一九六二年に純正館、尋真館、一九六三年に柏心館（高等学校）、神学館、一九六四年に博遠館、一九六五年に大学会館、一九六六年に樂真館（一九六四年第一期工事、この年第二期工事完了）、扶桑館（一九六二年第一期工事、この年第二期工事完了）、一九六七年に至誠館、頌啓館の献堂、開館などが挙げられる。これらは大正期から昭和初期にかけてつくられた施設がすでに老朽化していたこともあるが、戦後のマスプロ教育の趨勢にのって、学生生徒数が急激に増加していった様相を端的に示している。それは大学において一層顕著であった。同志社の予科、専門学校卒業生をもって、大学を形成していた戦前の同志社大学とはまったく異なり、大学学生の大多数は同志社外の高校卒業生であるという事態であった。

ちなみに一九二一（大正一〇）年三月の同志社学生生徒数と一九五一（昭和二六）年度、一九六六（昭和四一）年二月のそれを比較すると、一九二一年は二一一三名、一九五一年は一万三三六〇名、一九六六年は二万六三五五名である。したがって一〇倍以上の膨張をきたしていることが知られる。それはキリスト教主義教育の一貫性を基本とする教学のあり方において、従来とはまったく異質化した大学の教学機能の課題が顕在化したことであった。

一九六八、九年に全国的な波及をみた大学の紛争は同志社大学も無縁ではなかった。しかも紛争の過程で提起された大学改革上の諸問題は、その後も十分な取組みもなされずに過ぎてきた嫌いがある。

かかる意味において、いま百年の同志社の辿った道を歴史的に反芻することは、この問題に対処する無益、不毛な営為とは思われない。現在、同志社が当面している問題は教学理念上の問題のほか、ことに大学は校地施設等の整備・拡充という課題もかかえている。したがって、同志社がその私立大学としての特徴を十分に把持する教学体制の課題は、われわれ同志社の教育と研究にたずさわる者に、同志社の育教と研究はどうなるのか、あるいはどうなるべきなのか、新島襄の掲げた教育理念はどのように現代に「再生」されるべきであるのか、一人一人の心に深く問われる時点に立たされているのである。

この課題に逢着するとき、金鍼の言葉と思われるのは一八九〇年一月二一日、新島襄がのこした遺言であらう。

百年史の序章を終わるに当たって、その数条を掲げて結びとする。

同志社の前途は基督教の徳化、文学政治等の隆興、学芸の進歩三者相伴ひ相待て行ふ可き事

同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に従事するニ係らず皆精神活力あり真誠の自由ヲ愛し、以て邦家ニ尽す可き人物を養生するを務む可き事

社員たるものハ生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事

同志社ニ於てハ個體不羈なる書生ヲ圧束せず務めて其の本性ニ従ひ之か順導し以て天下の人物ヲ養成す可き事

同志社は隆なるニ従ひ機械的ニ流るゝの恐れあり切に之を戒慎す可き事

第一章 財団法人から学校法人へ

財団法人時代の終末

その背景——一九四五（昭和二〇）年八月、日本はポツダム宣言を受諾、太平洋戦争は終結した。終戦とともに日本の動き　ダグラス・マッカーサーを総司令官とする連合国軍の進駐があり、日本はその占領下に置かれ、政治・経済・教育・文化などあらゆる分野においてその支配を受けることとなった。中でも教育界は文教政策を含め画期的な改革をみた。

終戦から一カ月のちの九月一日、文部省はとりあえず「世界平和と人類ノ福祉ニ貢献スベキ新日本ノ建設ニ資スルガ為メ従来ノ戦争遂行ノ要請ニ基ク教育政策ヲ一掃シテ、文化国家、道義国家建設ノ根基ニ培フ文教諸施策ノ実行」を志向して「新日本ノ教育方針」を内外に示した。一方連合国軍最高司令部は、終戦連絡中央事務局を通じて、日本政府に対し、「日本教育制度ニ対スル管理政策」（一九四五年一〇月二日）を指令、軍国主義および極端な国家主義的思想の禁止と排除を強く求めるとともに、この主旨にそつた諸政策を指示した。

これらは、国家の総力をあげて戦争貫徹の体制にあった日本の教育行政に対する当面の対応措置であつたが、翌一九四六（昭和二一）年三月、連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサーの要請を受けて米国教育使節団が来日、月末にはその報告書がマッカーサー司令官に提出された。この報告書は翌四月には日本側に提示され、日本の文教政策、教育制度の改革に大きな影響を与えた。その内容は「日本人が自らその文化の中に健全な教育制度再建に必要な諸条件を樹立するための援助」としていくつかの積極的提案を示している。これら提案のうち、中央集権化された教育行政の地方分権化、修業年限の延長——義務教育六年を九年にし、さらに、上級中等教育の三年を加えた六・三・三制の勧告——男女共学、高等教育の普及などは戦後日本の教育制度改革の主要な柱となつたのである。政府はこれをうけ一九四六年八月、教育刷新委員会（その後一九四九年以降は教育刷新審議会に改組）を設置し、日本の教育制度全般にわたる改革案の作成にとり組むこととなつた。

戦後日本の改革はまず憲法の改正によつてその基本方向が明示された。「日本国憲法」（以下新憲法と略称する）は、一九四六（昭和二一）年一月三日に公布され翌年五月三日施行された。主権在民、国民の基本的人権の尊重、非武装絶対平和主義が新憲法の三大特色といえよう。「教育を受ける権利」（新憲法 第二六条）を基本的人権の一つとしたことにも新日本建設のための決意がうかがえる。この憲法の中に新しい日本建設のための教育理念および教育行政の原則などを明示した教育関係法の根本法として、「教育基本法」（一九四七年三月三十一日公布、施行）が定められた。同法には特に前文が設けられ、「民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意」を表明するとともに、「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない」と、新しい教育理念を

宣言している。

新憲法と教育基本法とをうけて、教育基本法と同じ日に「学校教育法」が公布、施行された。同法は「学校」に関する規定で、幼稚園から大学までのほか、法律で「学校」と称する各教育機関の内容、形態など学校制度の基本を定めている。この学校教育法第二条には「学校は、国、地方公共団体及び別に法律で定める法人のみが、これを設置することができる」として、国立、公立のほか、私立の場合にはすべて法律で定める法人でなければ学校を設置できないことを規定した。このことは法律で定める学校が公の性質をもつものであるとの立場から、設置者についても一定の配慮が必要となることを示している。

新憲法、教育基本法、学校教育法をうけ、私立学校に関する制度その他に関する諸規定は、一九四九（昭和二四）年一月一日「私立学校法」（以下私学法と略称する）として公布、三カ月後に施行の運びとなり、さらに同法の施行令、施行規則が一九五〇（昭和二五）年三月一日公布、翌日施行された。

私学法は私立学校の自主性を尊重するとともに、教育の公共性を維持するため、その設置ならびに管理運営などに関していくつかの規定を設けている。その主なものは、

- ① 中央集権的教育行政を地方分権化し、所轄庁の権限行使に当り慎重を期したこと
- ② 私立学校の管理組織の整備と運営の民主化をはかったこと
- ③ 財政的支援のため私学に対する助成の途を開き、また収益事業を認めたことをあげることができよう。

① 所轄庁について

高等教育機関である大学、短期大学、高等専門学校およびこれらの学校を設置する法人の所轄は文部大臣とし、上記以外の学校および法人の所轄は都道府県知事として従来の中央集権から地方分権へ改め、文部大臣あるいは都道府県知事がその権限、すなわち私立学校の設置、廃止のほか重要事項にかかる学則変更の認可を行うとき、および閉鎖を命ずるときには、あらかじめ私立大学審議会あるいは私立学校審議会などの意見を聞かなければならないこととした（私学法 第八条）。これら審議会の委員は所轄庁の任命ではあるが、私学団体が推薦する私学の学校長、教員、理事のうちから委員総数（私立大学審議会は二〇人、私立学校審議会は一〇人以上二〇人以内）の四分の三以上、学識経験者のうちから四分の一以内を選ぶこととしている（同法 第一〇、一九条）。つまり委員の大半は私学関係者である。またこれら審議会は私学に関する重要事項について所轄庁に建議することが認められている（同法 第九、一八条）。このように教育行政の地方分権化と、所轄庁が民間有識者で組織された審議会の意見を聞くことによって、従来の中央集権的教育行政制度が、ともすれば陥りやすい官僚政治、統制政治の悪弊を防止することが期待できよう。

②管理・運営について

(1) 役員

学校法人には役員として理事・監事を必置の機関とした。役員として理事は五人以上、監事は二人以上を置くことと、理事のうち一人は理事長となること（私学法 第三五条）が定められている。財団法人にあっては理事は極端な場合一人でもよく（民法 第五二条）、監事は必ずしも置かなくてよかった（民法 第五八条）。また財団法人には同族者の役員就任について何ら制限がなかったが、私学法では法人役員（理事・監事）については同族者（配偶者又は三親等以内

の親族は二名までとすること、さらに学校教育法第九条の校長、教員の欠格条項(禁治産者、禁錮以上の刑に処せられたものなど)は私立学校の役員にも準用すること(私学法 第三八条)が定められ、役員に関する制限がきびしくなった。

また業務の決定は理事の過半数ですべきこと(同法 第三六条)としているが、これらのことは教育の公共性に鑑み私立学校の管理運営がワンマン化することを防止するための配慮といえよう。このほか理事の選任についても、私学が自主的に選任できる理事も認めているが、一方理事の中には必ず校長(大学長、幼稚園長などをふくむ)を一人または数名選任すべきこと、評議員(教職員、卒業生、その他から選任)中からも若干名の理事を選任すべきこと(同法 第三八条)を定めている。直接教育に責任をもつ学校長や教職員を、理事として私立学校の管理運営に参加させることを義務づけたのも私学法の特色であり、教育の現場にあるものの意見を尊重すべしとする立法趣旨と思われる。

(四) 評議員会

財団法人には評議員会、あるいはこれに類する機関の定めはなかったが、学校法人には評議員会を必置の機関とした(同法 第四一条)。

評議員会は理事選出の母体となり、また法人の運営に関する重要事項についてあらかじめ理事長から諮問を受ける機関で、法人が寄附行為をもって議決機関とすることができると重要な役割をもつ機関(同法 第四二条)である。

この評議員会を構成する評議員の員数は理事定数の二倍以上であること(同法 第四一条)、さらにその選任に当っては私学が自主的に選任できる評議員も認めているが、一方必ず私立学校の教職員のうちから、またその学校の卒業生のうちからそれぞれ評議員を選任すべきこと(同法 第四四条)としている。私学が少数者によって支配されることを防止するため理事・監事のほかに評議員会を必置の機関とし、教育の公共性を組織の上で確保しようとする配慮がうかがえる。

③ 助成・収益事業について

私立学校が健全に運営されるためには財政基盤の安定が不可欠の要素である。私学法では教育の振興上、必要な場合、国や地方公共団体は私学に助成をすることができ（同法 第五九条）として私学助成の途を開くとともに、学校法人が私立学校の教育に支障のない限り、その収益を私立学校の経営に充てるため法人が収益を目的とする事業を行うことができる（同法 第二六条）として、法人の収益事業を認めた。これらは私立学校に対する財政面の支援、配慮が公認されたものといえる。

同志社の動き

財団法人から学校法人への同志社の組織変更が認可されたのは、一九五一（昭和二六）年二月一日である。組織変更とともに寄附行為は私学法に基づき全面的に変更されたが、この法人組織変更までに、戦時中の寄附行為がどのように変更（改正）されてきたかを概観しておきたい。

A 一九四一（昭和一六）年四月変更された寄附行為（以下昭二六・四寄附行為という）は、法人の目的、教育方針などを戦時下の体制にそって変更したものであった。

B 一九四四（昭和一九）年二月および三月の寄附行為変更は設置学校の名称変更、新設によるもので、同志社中学を同志社中学校に、同志社専門学校を同志社外事専門学校に、同志社高等商業学校を同志社経済専門学校にそれぞれ変更、また同志社工業専門学校の新設によるものなどであった。

C 終戦の翌年、一九四六（昭和二一）年三月に改正された寄附行為の変更内容は、

(1) 教育方針として第四条に掲げた「本法人ノ維持スル学校ハ皇国民ノ錬成ヲ目的トシ基督教ノ精神ヲ採ツテ德育ニ資ス」のうち「皇国民ノ錬成ヲ目的トシ」を削除し、以下を「基督教ヲ以テ德育ノ基本トス」と改めた。

(2) 評議員、評議員会を廃して協議員、協議員会を設けた。それまでは評議員の大半は校友、同窓で若干名の社友

その他が加わっていたにすぎなかったが、新設された協議員には上記のほか同志社諸学校の校長および父兄が加わることとなった。

(3) 評議員制を廃したことにより、それまで理事会で選出していた理事七名については総長委嘱とし、評議員が選挙した理事一二名については理事会で選挙することとした。

(4) 各学校長は理事会、常務理事会に出席して意見を述べることもできることとした。

この寄附行為変更で教育方針を一九四一年四月以前の方針にかえたこと。学校長の理事会陪席が認められ、父兄をふくめ協議員として、法人運営に若干ではあるが関与の途が開かれたことに、再生同志社の曙光をみることでしよう。

D 一九四七（昭和二三）年三月二九日変更認可、四月一日実施の寄附行為変更の要点は、

(1) 常務理事を常任理事とした。

(2) 理事会長一名を置いた。

(3) 理事会長は常任理事会にも出席することから、常任理事を八名（従来七名）とした。

(4) 理事会、常任理事会の議長は従来総長であったが、今後理事会長が議長となることとした。

などであった。

戦時中総長を勤めた牧野虎次が退き、新時代を担う湯浅八郎総長を迎えるに際しての寄附行為変更である。

E 一九四七（昭和二三）年七月一五日変更認可の寄附行為は、同志社の目的がまだ、「第一条 教育ニ関スル勸誘ヲ奉戴シ、聖旨ヲ遵守シテ教育ノ実績ヲ挙クルコトヲ以テ本法人ノ目的トス」となっていたのを、「第一条 智徳並行ノ主義ニ基キ教育ノ業ヲ挙クルヲ以テ本法人ノ目的トス」と、同志社綱領第一条の本来の姿にかえす変更であった。



湯浅総長就任・牧野前総長謝恩記念大会

この変更は同志社の目的をとりあえずもとの姿に復旧したものであったが、新時代を迎える同志社にとって、寄附行為の全面的な見直しが必要であった。

一九四八年九月 湯浅総長は就任早々に寄附行為改正の委員会を設置して、改正寄附行為 その改正に取り組み、一九四九年八月には第一回委員会が

開かれた。委員長は若松兎三郎常任理事。委員は理事、評議員、学校長らが大半を占めていたが、教職員組合連合代表(法学部教授 高橋貞三)も加わっていた。委員会は一月一四日までに少なくとも七回は開かれており、その成案は総長に報告され、さらに理事会、校長会、教職員組合で検討され、翌年三月と五月の理事会の議を経てようやく、

点は、
F 一九四八(昭和二三)年九月九日寄附行為の変更が認可された。変更の要

簡素化し、「一、同志社大学及諸学校ノ維持経営。一、以上ノ事業ニ関聯スル諸施設」の維持管理とした。

(2)理事定数二〇名を一一名に、監事四名を二名に減らすとともに常任理事、常任監事制を廃止し、理事会を毎月開催することとした。

(3)協議員制を評議員制にもどし、評議員の定数を四七名とし、校友会から一五名、同窓会から七名、総長委嘱を一〇名としたほか教職員互選評議員を一五名とした。

(4)理事一一名は、総長一名、総長委嘱三名、評議員会での選挙による七名とした。

(5) 総長は、理事の中から専務理事を委嘱することができるとした。

(6) 寄附行為施行細則にあった「職員ハ理事ヲ兼ヌルコトヲ得ス但総長及本部ノ部長ハ此限リニ在ラス」として、教職員は原則として理事になれなかった規定を、この寄附行為変更の際に削除した。

ことなどがあげられる。評議員定数四七名中、約三分の一を占める一五名を教職員互選としたことは、従来校友、同窓、社友らで占められていた評議員会の構成を大きく変更するもので、理事一一名中七名は評議員の互選によるなど、法人の経営に教職員参加の割合を一段と増幅したことになる。ちなみに、この寄附行為にもとづく最初の選挙で選ばれた教職員互選評議員は次の通りであり、学校長等役職者のほか一般教職員が多数含まれている。

山田貞夫 高等学校長

末光信三 女子中・高校長

片桐 哲 女子専門学校長

加藤延雄 中学校長

永島嘉三郎 女子中学校教諭

桜井忠一 工業専門学校教授

盛口憲二 本部書記

島本英夫 経済専門学校長

岡本春三 商業高等学校長

篠田一人 経済専門学校教授

安藤唯一 厚生館主事・医務主任

佐立健雄 工業専門学校講師

岡谷元治 外事専門学校教授

加藤さだ 女子専門学校教授

中村 貢 女子専門学校教授

G 一九五〇（昭和二五）年七月六日変更認可の寄附行為の変更要点は、理事一名を一四名とし、増員の三名は理事会が委嘱することである。その際増員された三名のうち二名は教職員であった。

以上が財団法人時代の寄附行為の変遷であるが、戦後教職員が評議員となり理事にもなる途が開かれ、学校長も必要なときには理事会に出席して意見を述べるできるようになり、年を追うて学校長はじめ教職員の意向が同志社の運営に関して重視されることとなった。

大学長候補者選挙

この傾向は寄附行為変更のみでなく、重要人事の決定に際してもあらわれてきた。従来大学長の選任は、理事会の判断のみによって行われてきたが、一九四九（昭和二四）年一〇月、

理事会は大学教員の意向を聞く方針をとり、大学教授、助教授、専任講師の選挙による大学長候補者三名の推薦を求めた。選挙は同年一一月一七日実施されたが、その選挙方法は次の通りであり、任期は新総長が就任するまでであった。

被選挙人——第一次、全同志社専任教職員。第二次、第一次で選ばれた上位一〇名。

選挙人——第一次・第二次とも同志社大学専任教授、助教授、講師。

選挙方法第一次——無記名三名連記、得票数上位一〇名を選ぶ。

第二次——第一次で選ばれた一〇名中から無記名三名連記で、得票数上位三名を選ぶ。

大学長候補者——第二次の得票数上位三名を総長に推薦する。

総長は右三名のうち最高得票者であった神学部教授大塚節治を大学長に選任したい旨を理事会に提案、原案が可決され、大塚教授が一九五〇（昭和二五）年一月一日付で大学長に就任した。実質的に選挙によって大学長が選任されたのは、一九四九年のこの選挙がはじめてである。

また大塚大学長は一九五〇（昭和二五）年七月一〇日の選挙でも、大学長候補者として選出されたが、その際の実挙方法は次の通りであった。

被選挙人——第一次、専任教授。第二次、第一次の得票数上位三名。

選挙人——第一次・第二次とも助手以上の専任教員。

選挙方法——第一次、無記名三名連記で上位三名を選ぶ。

第二次、無記名单記で最高得票者一名を選び総長に推薦。

一九四九年には大学長候補者として三名が推薦されたが、このときからは一名に選ばれた点、選挙人が助手までに範囲が拡大された点が注目される。

財団法人時代の大学長候補者選挙は以上であるが、その後の大学長候補者選挙についても説明し、選挙方法の変更を紹介しておきたい。

学校法人になってはじめての大学長候補者選挙は、一九五二（昭和二七）年二月に実施された。大塚大学長が六五歳を迎え、定年により辞任することとなったためである。選挙方法は次の通りであった。

任 期——三年

被選挙人——第一次、大学専任教授（六五歳未満）。第二次、第一次の得票数上位二名。

選挙人——大学の助手以上の専任教員。

第一次投票——単記無記名で得票数上位二名を選ぶ。右のうち最上位者が有効投票数の過半数を得たときは二次投票をまたず大学長候補者とする。

第二次投票——第一次投票で選ばれた二名について、単記無記名で決選投票により一名を選ぶ。

このときの選挙から一次二次とも単記投票となった。このようにして法学部教授田畑忍が大学長に当選した。次は一九五四（昭和二九）年六月に選挙があった。大学長が都合により任期途中で辞任したためである。その選挙方法は、

任 期——三年、但し任期中六五歳となったときはその月の終りまで。

被選挙人——第一次は六五歳未満在職一年以上の大学専任教授。第二次以後は第一次投票、第二次投票で選ばれた者。

選挙人——第一次は二〇歳以上で一年以上在職又は在学の専任教員、専任職員および学生。

第一次投票——教員の実効投票数を二〇〇。

職員の 〃 一〇〇。

学生の 〃 一〇〇。

にそれぞれ換算、総有効票数の三分の二以上を得た者を大学長候補者とする。もし前記得票者がないときは得票上位三名を選ぶ。

第二次投票——右三名を被選挙人とし、専任教員のみが選挙人となって投票、最高得票者が有効票数の過半数を得たときは大学長候補者とする。

第三次投票——第二次で大学長候補者が得られないとき、第二次の得票上位二名について決選投票、得票上位者を大学長候補者とする。

このときの選挙から第一次投票の際だけではあるが、職員のみならず学生も選挙に参加することとなった。当選したのは神学部教授大下角一であった。

以後はほ同様の選挙方法が採られてきたが、一九五七（昭和三二）年には第一次投票で実効投票総数の過半数を得た者を大学長候補者として改め（大下大学長を再選）、一九六五（昭和四〇）年には専任研究員を専任教員と同様に扱うこととし、一九六八（昭和四三）年には第二次、第三次投票に専任職員の参加を認めた。但し、教員の実効投票数を二〇〇、職員の実効投票数を一〇〇に換算することは第一次と同様である。

大学長候補者を選挙によって選ぶことになってから、大学以外の学校長選任に当って、総長はあらかじめ該学校から候補者の推薦を求めるか、あるいは学校長予定者を示して当該学校の意向を聞くことが慣行化した。女子大

学でも、一年間の期限付で就任を承諾していたエスター・ヒバード学長の後任を選ぶに当って、総長から「総長が之を決定するのであるが女子大学の協力と理解と支持を必要とするので学長推薦に対し教授会の意見を求め」（「女子大学長候補者推薦書」）られ、一九五〇（昭和二五）年三月二八日の教授会の席上投票を行い、最高得票者片桐哲と次点のヒバードを大学長候補として、同年四月一日付で総長湯浅八郎に推薦している。

総長候補者選挙

さらに同志社で最も重要な人事である総長選任についても、財団法人時代最後の総長選定に当り、一九五〇（昭和二五）年六月、理事会は学内外の意向を広く聞くこととした。すなわち学内（教職員）、校友会、同窓会に対し総長候補者として三名ずつの推薦を求めたのである。校友会は校友会理事会で、同窓会は各支部の意見を聞いて同窓会評議員会で、それぞれ三名の総長候補者を選定して理事会に推薦。教職員はあらかじめ各学部、学校から選ばれた委員によって構成する銓衡委員会において新総長候補者一〇名を選び、この一〇名を対象に、七月一五日全教職員の単記無記名投票（七月一七日開票）によって総長候補者三名を選び（投票の結果同数得票者があったため四名となった）理事会に推薦。七月二五日理事会は右の推薦にもついで、湯浅八郎総長の後任者として教職員、校友会、同窓会三者がこぞって推薦し、なканずく教職員の投票で最高得票者であった大塚大学長を総長に選定、八月の評議員会で賛同を得て、八月一日付をもって新総長就任の運びとなった。総長選任に当り理事会が広く学内外に意見を求めたこと、なканずく全教職員の投票によって総長候補者が選定されたことは、同志社の歴史上はじめてのことであった。

このように財団法人時代の終りの頃には総長、大学長など重要人事についても教職員の意向が尊重されることとなった。

学校法人時代の開幕

新寄附行為作成の経過

「私立学校法」は一九四九(昭和二四)年二月一日公布、翌年三月一日施行、同法「施行令」、同「施行規則」も三月一四日公布、翌日私学法とともに施行された。私学法附則には、財団法人である学校は私学法施行の日から一年以内に学校法人へ組織変更することができるとされていた。

財団法人であった同志社は私学法公布とともに早速学校法人への組織変更、寄附行為改正に取り組み、まず寄附行為改正委員会を設け、改正草案を作成した。同委員会のメンバーは、女子専門学校長片桐哲、大学法学部長高橋貞三、本部事務局長千田民衛の三名であった。はじめの草案は、財団法人同志社寄附行為の内容を私学法の規定に適合するよう修正したものであったが、この草案は校長会に諮られ、更に教職員の中から出た意見もと入れて修正を重ね、一九五〇(昭和二五)年四月四日開催の理事会に於て「学校法人同志社大学寄附行為」および「同施行細則」として理事会の決定をみた(以下昭二五・四寄附行為改正案という)。

この寄附行為改正案は、理事会の決定をみたにも拘らず学内に不満の声があり、さらに同年四月、国際基督教大学設立準備のため湯浅総長は外遊中で不在(石川芳次郎が代理者となっていたが)であったこと、また職員の会計上の不正事件、学園機構の改善要求など、学生を中心とした所謂同志社刷新運動もあって、春から夏にかけて学内が動揺し、寄附行為改正の認可申請を行うにはいたらなかった。このような情勢のもと、同年六月一二日開催の理事会は、湯浅総長の辞任を認めるとともに、昭二五・四寄附行為改正案を再検討することを決定した。八月に就任した大塚総長のもとで、改めて寄附行為改正委員が委嘱され、九月から一十月にかけて委員会が開かれ、検討が重ねら

れた。改めて発足した寄附行為改正委員会は、当初理事会、校長会、教職員組合から選出された委員（それぞれ三名程度の委員）で構成されていたが、回を重ねるに従い、校友会、同窓会の代表、理事会セクレタリー、本部事務局長らも加わることとなった。十一月十八日、第八回委員会で成案をみて、十一月二十九日の理事会では改正原案を決定、さらに十二月九日の理事会、評議員会の議を経て、主旨の変更を伴わない若干の字句修正は総長に一任することを含め、寄附行為変更の原案が可決承認された。

その後文部省との折衝を経て十二月二十六日認可申請を行い、翌一九五一（昭和二六）年二月一日、地管第八号をもって学校法人同志社への組織変更、寄附行為の変更が認可された。寄附行為改正案を検討するのに丸一カ年の時間と、理事、教職員、卒業生その他関係者多数の労力を費したわけである。

寄附行為の主な変更点

寄附行為の変更にみられる主な特徴としては、

(1) 私学法の定めに従い寄附行為を整備し、文体も文語体から口語体に改めた。

(2) 総長制は存続したが、一方理事長制を新設した。

(3) 従来総長についてのみのクリスチャン条項を、理事の大半に拡張した。

(4) 理事会、評議員会の構成を改めた。

(5) 評議員会の役割を重くした。

(6) 収益事業を新設した。

を挙げることができよう。以下新寄附行為の条項に従って変更内容を説明する。

総則

従来の寄附行為総則には、目的、名称、事務局の所在地、法人の事業内容のほか資産、会計まで含まれていたが、新寄附行為には私学にとって重要な役割をもつ資産、会計は別に「章」を設けることとし

て、総則中からは削除した。一方「総長」に関する規定は、従来役員の「章」に一節三カ条を設けて規定していたが、新寄附行為には総則中に一条を設けて規定することとした。これらのことから、旧寄附行為総則一・二カ条は新寄附行為では五カ条に圧縮された。

名称

新寄附行為は「財団法人同志社」を「学校法人同志社」と改称したが、これに先立ち昭二五・四寄附行為改正案では、名称を「学校法人同志社大学」とすることを決定していた。しかし既に寄附行為作成の経過中にも述べた通り、改めて検討の結果、次のような理由により「学校法人同志社」とすることとなった。すなわち、大学名をそのまま法人名とする場合、同志社には女子大学をはじめ諸学校が設置されていて、それらの学校があたかも大学の附属校的なものとみられるおそれがある。特に女子部諸学校は同志社設立直後の長い伝統をもち、卒業生の組織も別に設けられている。法人名を同志社大学とするなら、女子部諸学校のため別に法人を設けることも考えられるとの意見もあり、大学はじめ諸学校は法人が並列的に設置するものであるとの考え方に立ち、法人名としては従来通り同志社とすることに落着いた。このことは、やがて諸学校が独立採算制をとることとなる前兆とも思われる。

目的・教育方針

すでに述べたが、戦時中の寄附行為は同志社の目的・教育方針を次のようにうたっていた。

第一条 教育ニ関スル勅語ヲ奉戴シ、聖旨ヲ遵守シテ教育ノ実績ヲ挙クルコトヲ以テ本法人ノ目的トス

第四条 本法人ノ維持スル学校ハ、皇国民ノ鍊成ヲ目的トシ、基督教ノ精神ヲ採ツテ徳育ニ資ス

戦後、一九四七年七月には、これらの条項は次のように改められた。

第一条 智徳並行ノ主義ニ基キ教育ノ業ヲ挙クルヲ以テ本法人ノ目的トス

第四条 本法人ノ維持スル学校ハ基督教ヲ以テ徳育ノ基本トス

新寄附行為では、これらを統合するとともに、新しい時代を迎えた同志社の決意をこめて、

第二条 本法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教を徳育の基本とする学校を經營し、もつて教育の実を挙げることを目的とする。

と改めた。

設置学校

私学法は法人が設置する学校の名称を寄附行為に明示することを求めている。旧寄附行為（一九四八年九月九日認可）には法人の行う事業として第五条に、

一、同志社大学及諸学校ノ維持經營。

一、以上ノ事業ニ關聯スル諸施設。

を掲げていたが、新寄附行為には、

第三条 本法人は、前条の目的を達成するため、次の学校を設置する。

同志社大学（大学院付置）

同志社女子大学

同志社大学短期大学部

同志社高等学校

同志社女子高等学校

同志社商業高等学校

同志社中学校

同志社女子中学校

同志社幼稚園

と私立学校法の定めに従い、設置学校名すべてを掲げることとなった。なお、当時学制の改正に伴い、近い将来に廃校を予定していた同志社外事専門学校はじめ経済専門学校、工業専門学校、女子専門学校については当分の間法人が設置する学校として新寄附行為附則に掲げた。その後香里高等学校、同中学校を合併したとき、短期大学部を廃止して大学第二部を設けたとき、また商業高等学校を廃止したときなどに本条を改正したほか、その後私立学校法の一部改正に伴い、大学院、学部または学科の名称、種類なども明示することとなり、そのつど寄附行為変更の手続をとることとなった。

総長

同志社は従来総長制（初期には社長と称していたが）をとってきた。総長は同志社を代表し、法人の業務を統理するとともに、総長の権限で理事三名を委嘱しうるほか、専務理事を選任したり、理事会、評議員会の招集や、理事会の議長をつとめるなど、その職務、権限は実に大きかった。ところが私学法には総長に関する規

定は何ら見当らず、一方同志社がかつて総長の職務権限としていたものの多くは、私学法では必置の機関である理事長の職務と定められた。理事長の職務については後述するが、一方学校長の職務については「学校教育法」に規定がある。すなわち、法文上では総長の存在理由はなくなった。また総長一人に権限を集中することに疑問をもつ考え方もあって、昭二五・四寄附行為改正案では総長制を無くすることとした。この改正案は「新寄附行為改正の経過」に述べた通り再検討され、多くの学校を設置する法人として、これら諸学校の教学を統轄するために総長を置くべきであるとの結論を得、ふたたび総長制を残すこととなった。

従来同志社を代表し、同志社全般のことを統理していた総長の職務は、新寄附行為では同志社教学の統轄に限られることとなる。しかし同志社が教学機関であることを思えば、教学の統轄者である総長は同志社の総責任者とも考えられ、私学法によって新しく同志社にも置かれることとなった理事長と、新寄附行為による総長の職務権限の間に明確な一線を画することはむづかしくなった。しかし一応教学の責任者は総長、経営の責任者は理事長とする把え方が多いようである。

総長の選任については、従来は理事会で選任し、文部大臣の認可をうけることになっていた(旧寄附行為 第五条)が、新寄附行為では「評議員会の意見を徴して、理事会がこれを選定する」(新寄附行為 第四条)と変更され、文部大臣の認可は不必要となった。総長の任期は四年、クリスチャンであることとする規定は新寄附行為においても同様である。

総長の選任方法は、従来理事会で選挙してきたこと、財団時代最終の総長選任に当って、教職員、校友会、同窓会からそれぞれ総長候補者の推薦を求め、その推薦をもとに理事会で総長を選定したことはすでに述べたが、学校法人になつてはじめての総長選任において、一つの出来ごとがあった。すなわち、新しい法人の評議員会の構成

は、三七名中一五名が教職員代表、一名が校友会代表、四名が同窓会代表、さらに七名が社友、教役者、父兄その他学識経験者となっていることから、この評議員会の意見を聞けば学内外の意向は十分汲みとれるとの考えに立ち、理事会は一九五一（昭和二六）年八月新寄附行為により評議員会の意見を徴して総長を選定したのである。ところが、教職員組合連合は、前年には教職員の直接投票によって総長候補者を選挙し、その結果どおり総長が選定された事実があるにもかかわらず、今回公選によらず理事会が総長を選定したことは、同志社の民主的伝統、なかなく総長選定手続の民主化に逆行するもので容認できないとして強く反発、一時理事会と教職組との間が険悪になった。しかし総長から、次回からは総長選定方法については教職員の総意反映を可能にするよう改善するとの意志表明があり、この問題はようやく落着いた。

この総長の約束に基づき、一九五五（昭和三〇）年、総長選定を前に総長選定手続について研究討議され、次のような総長選定手続がとられた。但し、この選定方法は理事会評議員会の自主性を害うおそれがあるとの反対意見もあり、規定化されるまでには至らなかった。その選定手続というのは、理事長はあらかじめ、教職員から五名、校友会から三名、同窓会から二名、延人数一〇名の総長候補者の推薦を求める。この推薦された延一〇名の候補者の中から、教職員の直接選挙により総長候補者としての最適任者を選ぶ。この投票で、総投票数の過半数を得る者がないときは、さらに上位二名について決選投票し、過半数の得票者を選ぶ。理事長はこの総長候補者をもって評議員会の意見を聞き、理事会の議を経て総長に選任する。なお過半数の得票まで求めることとなったのは、大塚総長が自らの体験に鑑み、教職員の過半数の支持がなければ総長職は勤め得ないと強く主張したことによるものである。その後も総長選定手続について議論は重ねられたが、一九七五年の総長選定に際しても同様の手続がとられている。因みに総長（院長・塾長等）制をとっている私立大学の例を若干紹介しておきたい。

○早稲田大学 総長は理事長、大学長を兼ね法人の業務を統理し、法人を代表している。総長選挙は候補者の選挙（教職員・評議員による直接選挙）、学生による信任投票、決定選挙（教職員の互選によるもの、および学外評議員、商議員全員による選挙）の三段階により選定。

○慶応義塾 塾長が理事長・大学長を兼ねるが、塾長が学長を辞退したときは大学長を選任できる。職務内容は早稲田大学とほぼ同じ。選任方法は塾長候補者銓衡委員会を選定された候補者につき、評議員会で選任する。

○青山学院 院長は青山学院全般を総理し、学院を代表する。形の上では院長・理事長両建てであるが、一九七八年九月現在、院長・理事長は同一人物である。選任方法は、評議員全員による院長選考委員会候補者三名を選び理事会で選任（得票三分の二以上により決定）。

○立教学院 立教で総長とは大学長のことで別に院長制をとっている。院長は教育・研究の統轄者で、立教大学総長を兼ねることができるとしている。法人を代表し、法人業務を総括する理事長とは別建てである。院長は理事会で選任される。

○関西学院 院長と理事長は兼務、院長は一切の校務を総理し、学院を代表する。院長は理事の互選による。○立命館 総長は教学統括者で大学長を兼務する。理事の互選による理事長が法人事務を総括し、理事長だけが法人を代表する。総長の選任方法は、総長候補者推薦委員会（理事、教職員、学生各代表で構成）が候補者五名を選出。理事、監事、評議員および、教職員、学生、生徒代表による間接選挙で総長を選ぶ、となっている。

教学統轄は総長、経営統轄は理事長という両建てには一長一短があつて、一概に一本化が望ましいとも断定できず、新寄附行為の制定以来、法人の事務組織については種々意見のあるところである。日々の学園の諸問題は、教学あるいは経営に截然とは分け難い問題も多く、現状では実務処理上支障をきたすところがあるのも事実である。

役員

従来は総長、理事、監事、評議員を法人の役員としていたが、新寄附行為では理事(総長をふくむ)と監事とを役員とした。

(イ) 理事

財団法人時代最後の理事定数は一四名で、その内訳は次の通りであった。

総長 一名

総長委嘱 三名

理事会委嘱 三名

評議員会選挙 七名

右のうち教職員である理事は、一九五〇年五月一三日の臨時理事会で大塚大学長が総長代行を委嘱されるとともに総長委嘱の理事となり、同年六月一二日の理事会で田畑忍大学法学部長、山田貞夫高等学校長が理事会委嘱理事に選任され、合計三名であった。新寄附行為による理事選任に先立つこと僅か一年ばかり前のことで、それまでは

理事が兼務した本部事務局の部長を除き教職員は理事とはなれなかった。学校法人となつてからの寄附行為による理事定数は一三名で、その内訳は次の通りである。

第七条 理事のうち、一名は総長とし、二名は、大学長、女子大学長、学部長、校長及び園長の互選で定める。

理事のうち七名は、評議員の互選で定める。

理事のうち三名は、学識経験者のうちから、評議員会の意見を



学校法人同志社理事 (1955年)

聞いて、前二項の規定によって選任された理事の過半数の議決をもって選任する。

なお理事は、右第七条三項の学識経験者たる理事を除きキリスト教徒でなければならぬと規定した(第六条)。このことは財団法人時代には、総長についてのみキリスト教徒であることとしていたのに較べ、キリスト教を徳育の基本とする同志社立学の精神を、法人運営の面でも活かしたいとの考えによるものであろう。

新寄附行為によるいわゆるクリスチャンに関する条項は、一九七〇(昭和四五)年一二月に一部変更され、大学長を職務上理事とすることとして、理事定員を一四名としたが、大学長にはキリスト教徒以外のものも選ばれることがあるため、大学長たる理事については必ずしもキリスト教徒であることを要しないとした。この変更に当り、第七条を理事選任の区分に従い、一、総長。二、大学長。三、女子大学長、学部長……のように号数をもって示すことに改めた。

次に理事の代表権についてふれておきたい。財団法人時代には総長の職務の中に法人を代表する旨の定めがあったが、新寄附行為には代表権について何ら規定がない。私学法第三七条には、寄附行為をもって代表権を制限しない限り、理事はすべて学校法人の業務について法人を代表するとの定めがあり、この代表権の制限は登記事項となっている。同志社では理事の登記の際、理事長以外は各私印を、理事長は理事長印をもって登記している。しかし理事の代表権を制限していないことから、対外的には理事長以外の理事が法人を代表することもありうることになる。

理事の任期は従来四年であったが、新寄附行為では三年とした。但し総長たる理事は任期四年である。補欠理事の任期は、前任者の残任期間であることは従来と同様である。

理事の欠員補充については、従来は二名あるいは三名以上欠員を生じたとき補充することとしていたが、学校法人となつてからは一名でも欠員を生じたときは、一月以内に補充すべきこととした。これは理事の責任の重さにかんがみ、改められたことである。

(ロ)理事長 財団法人時代、同志社には理事長の制度がなく、総長が法人の代表者で法人業務を統理し、私学法に示された理事長の職務を勤めていたが、学校法人となつてからは私学法の定めに従い理事長が設けられた。理事長は私学法に規定する職務を行い、学校法人内部の事務を総括する責任者である(私学法 第三七条二項)。理事長は理事の互選、又は総長をもって当て、キリスト教信徒であることが定められている(寄附行為 第九条)。

学校法人への移行当初、大塚総長が理事長・大学長の三役を兼務していたが、一九五二(昭和二七)年三月末、就業規則に定める定年六五歳に達したため、まず大学長を辞任した。また一九五四(昭和二九)年八月、理事長の改選期に当り、当時同志社の創立八〇周年記念事業募金をひかえていたこと、その上はげしいインフレ時代で学校がきびしい財政状態にあつたことから、大塚は、この経営上の重大な時には経営能力のある理事が理事長として経営責任を持つことが必要であるとして理事長兼務を固辞し、理事会は秦孝治郎理事を理事長に選任した。ここにおいて総長、理事長、大学長はそれぞれ別人が勤めることになった。

新寄附行為では理事長の補佐機関として学務理事、財務理事を置くこととした。

前者は学務について、後者は財務・施設について理事長を補佐するものである(寄附行為 第一〇条)。同志社諸学校の教学統轄者として総長を置き、一方学務理事を設けて理事長を補佐することとしたが、これは総長制を廃止しようとした昭二五・四寄附行為改正案の名残りではなかつたか。



秦 孝治郎

（イ）監事

同志社では従来から監事を置いていたが、私学法によって監事は学校法人に必置の機関となった。私学法では監事は理事または教職員を兼ねてはならないと定めている（第三九条）。監事の任期は二年、定数は三名であり、欠員を生じたときは一月以内に補充することと理事と同様である。なお監事の職務内容については寄附行為第一八条に細かく規定されているが、私学の公共性を保持するためその責任は重く、その権限も大きいことを付言しておきたい。

（注）

同志社では監事による監査のほか、一九五〇（昭和二五）年以降、公認会計士による財務監査を実施してきた。一九七〇（昭和四五）年に私学に対する経常費補助が行われるようになって以降は、この補助をうける私立学校は公認会計士による監査が義務づけられることとなった。

（ニ）理事会

法人の業務はすべて理事会によって決定する（寄附行為 第二二条）こととし、決議は全理事（出席理事だけではない）の過半数をもって決する（同 第一四条）こと、特に重要な事項については理事の三分の二以上の議決を要する（同 第一五、四二条）こととした。理事会は毎月一回、その他必要に応じ臨時に理事長が招集し、理事の過半数の出席で成立、理事長が議長となる（同 第一三条）ことが定められている。従来、理事会には監事のみ出席を認めていたが、一九四六（昭和二一）年三月三〇日寄附行為改正以後は、学校長も出席して意見を述べることもできるようになり、さらに新寄附行為では学部長・園長も理事会に出席して意見が述べられることとなった。

従来は、理事は予め通知された会議の目的事項について、議決権の行使を他の理事に委任することにより、委任者も議決に参加することができたが、新寄附行為にはこの委任の規定はなく、学校法人への組織変更以後は委任による出席を認めていない。従って理事会は、全理事の過半数が出席してはじめて成立することとなった。なお学校法人に組織変更してしばらくは、理事会に各種委員会を設けていたが、一九五七（昭和三二）年五月二九日、各種委

員会が常置機関としての実情にそぐわないことから、このことを定めた寄附行為施行細則を削除した。削除した条項は次の通りである。

第二六条 本法人の業務を分任審議するため、理事会に左の委員会を置く。

- 1、学制委員会
- 2、人事委員会
- 3、財務委員会
- 4、施設及び建築委員会
- 5、収益事業委員会
- 6、渉外委員会

評議員会

(イ) 評議員 三七名の評議員をもって評議員会を組織することとした。その構成は次の通りである（寄附行為 第二一条）。

教職員の互選によるもの

一五名

同志社校友会が校友中から選定するもの

一名

同志社同窓会が同窓中から選定するもの

四名

社友、教役者、父兄その他学識経験者から理事会が選定するもの

七名

この評議員会構成で注目すべきことは、教職員互選の評議員が占める割合が増大したことである。従来評議員の大半は校友、同窓によって占められていたが、一九四六年三月の寄附行為改正では、評議員に相当する協議員（評議員会のかわりに協議員会が設けられたが、その役割はほぼ評議員会と同様）に学校長を若干名選任することとなり、さらに一九四八年九月の寄附行為改正では、四七名の評議員中一五名が教職員互選となった。ついで新寄附行為によって、三七名中最低一五名は専任の教職員から選出されるようになった。因みに一九七八年九月現在、校友会の選定

する評議員中に二名、学識経験者中に二名の専任教職員のあることから計一九名が専任教職員であり、評議員の過半数を占めることとなったが、これは同志社創立以来はじめてのことである。評議員中に教職員の占める割合が大きくなってきたことは、評議員会が理事の選出母体となり、理事会の諮問に答え、重要事項については議決機関となるなど法人運営に重要な役割を果たすことを思えば、私学運営にはできるだけ教職員の意見を尊重すべきだとする考え方に移行してきたことを物語るものといえよう。

評議員の選出方法は、教職員互選評議員は二〇歳以上、在職一年以上の教職員が選挙人となり、二五歳以上在職二年以上の教職員が被選挙人となって、完全連記（二五名以内連記）の無記名投票による選挙によって上位一五名を選ぶこととしている。この選挙方法は実績として教職員組合が推薦する一五名が当選する結果を招き、完全連記制を批判する意見もでている。校友会、同窓会の選定する評議員選挙については、ほぼ教職員の場合と同様完全連記制（校友会の場合は二一名、同窓会の場合は四名）の直接選挙によっていたが、卒業生数の急増に伴い直接選挙は極めて困難になってきたため、一九六六（昭和四一）年一月、選挙細則を定めた寄附行為施行細則を改め、校友会、同窓会とも間接選挙によることとなった。なお評議員の任期は三年、欠員を生じたときは三月以内にその補充をすることとした（寄附行為 第二二、二三条）。

(ロ) 評議員会 従来は一部の理事を選挙するほかは理事会の諮問機関にすぎなかったが、新寄附行為では理事七名の選出母体となるほか、重要事項については議決機関の役割を果たすこととなった。評議員会の決議、諮問事項は次の通りである。

決議事項

一、寄附行為の変更

二、合併

三、解散

四、その他本法人の運営に関する重要事項で、理事会が必要と認めたもの（寄附行為 第二六条）
右以外に寄附行為施行細則の変更、廃止（寄附行為細則、附則）

諮問事項

一、残余財産の処分に關する事項

二、予算、借入金（年度をこえるもの）及び重要な資産の処分に關する事項

三、運用財産中不動産及び積立金の管理に關する事項

四、収益を目的とする事業に關する重要事項

五、その他本法人の運営に關する重要事項で、理事会が必要と認めたもの（寄附行為 第二七条）

このほか評議員会は決算の報告をうけ、また総長、学識経験者たる理事、社友の選定についてもそのつど諮問され、意見を求められる。

評議員会は理事長が毎年三回以上招集し、評議員過半数の出席で成立し（議長は評議員の互選で選任）、出席評議員の過半数で一切の議決がなされる。なお評議員会においても委任に關する規定はなくなったので、学校法人になつてから委任状による出席および議決参加は認められなくなった。

資産及び會計

私学がその設立の目的を十全に果たすための活動をするには財政基盤の確立は不可欠である。また私学が教育機関として公の性格をもち、公の助成、税法上の特典をうけ、さらに多くの学生生

徒及びその父兄の付託をうけて教育の事業に当っている以上、その資産、会計については公明、厳正であることが要求されるのは当然である。そのため私学法に於ても資産、会計に関する諸規定は法人の憲法ともいふべき寄附行為に明確に規定することを求めている。同志社も学校法人への移行に伴い寄附行為中に一章八カ条(第二九ノ三六条)を設け、従来以上に詳しく規定することとした。その主なものは、資産は基本財産、運用財産、収益事業用財産とに区分すること、原則として基本財産並びに運用財産中の不動産及び積立金は処分できないこと、運用財産である積立金は理事長の責任で確実に保管すべきこと、予算・決算ともに学校の経営に関する学校会計と、収益事業に関する事業会計とに分けるべきこと、決算は会計年度終了後二月以内に作成し、監事の意見を求めるとともに、監事の意見を付して評議員会に報告すべきことなどである。

収益事業

私学法は、私立学校が教育に支障のない限りその収益を私立学校の経営に充てるため、収益を目的とする事業を行うことを認めた。同志社は学校法人への移行に伴い「出版業」を収益事業として始めることとした。さらに一九五一(昭和二六)年一〇月には「保険代理業」も追加し、さらに一九七七(昭和五二)年四月収益事業の種類を詳定して次の通りとした。

(一) 出版業。(二) 書籍販売業。(三) 生命保険の募集に関する業務ならびに生命保険契約締結の媒介。(四) 損害保険代理業。(五) 自動車損害賠償法に基づく保険代理業。(寄附行為 第三七条)

収益事業は、資産も会計も学校のそれとは区別されていること既述の通りである。

収益事業に関しては財務理事が法人を代表し、業務を掌理することとしている。(寄附行為 第三八条)

なお一九七七(昭和五二)年度決算では、約二〇〇万円の黒字を生じたが、過年度の累積赤字のため、なお一一七〇万円の赤字で、学校経営に充てる収益はない。

その他

新寄附行為には以上のほか私学法の定めにより解散（第四一条）、寄附行為の変更（第四二条）、を設けたほか、同志社特有の「社友」に関する規定（第四三条）を掲げていることは従前通りである。ただ解散時の残余財産の処分については従来主務大臣の認可を経て処分するとしていたが、これを本法人の目的を継承する、あるいは本法人に関係ある学校法人その他教育の事業を行う者に贈与すると、その贈与先を限定したこと、および今までなかった公告に関する規定（寄附行為 第四四条）を新設したことが従来とは異なっている。

職制・事務機構の変遷

一九四七年五月の改正

終戦前の職制は一九四四（昭和一九）年四月に改正実施されたものであるが、その骨子は次の通りであった。

- (1) 総長は同志社を代表し、全般を統理する。
- (2) 総長を補佐するため専務理事を置く。
- (3) 総長の諮問機関として教育については校長会（校長、学部長、予科長、専務理事で構成）、経営については財務審議会（専務理事、常務理事会の選定による理事及び監事、校友会長、同窓会長並に財務主任者で構成）を設置する。
- (4) 事務職員は主事、技師、書記、技手、警手とする。
- (5) 本部（本社）には総務部長、教務部長（共に専務理事）と庶務、財務、営繕の三課を置く。

以上は本部についてであるが、さらに、

- (6) 諸学校には学校長の許に教員、教授、助教授、専任講師、教師、助教、助手、教諭等）のほか学生主事（大学）、生徒主

事予科、専門学校、生徒監(中学校、女学校)、主事、書記を置き、図書館には館長、司書、書記を置く。

と定められていた。この職制は、戦後、湯浅八郎総長を迎えた直後の一九四七(昭和二二)年五月に改正されたが、改正の主要な点は次の通りである。

- (1)同志社の教職員はすべて社員と称することとし、社員を教員と職員に分ける。
- (2)同志社の職員を部長、主任、総長秘書、技師、書記、技手、書記補、技手補、警手、使丁とする(*印新設)。
- (3)本部に次の四部と諸係を設ける。

総務部―教務係 庶務係

宗教部

外事部―涉外係 外務係

財務部―経理係 営繕係 厚生係

部には部長、係には主任を置く。

- (4)既にあった校長会、財務審議会はそれぞれ拡充する。

この改正は、復員学徒もふえ、入学志願者も漸増して学園に活気がよみがえってきたときに当たり、教職員の心気刷新をはかったこと、漸く事務量もふえてきたことからその対応のため職務、身分の分化をはかったこと、新時代に向け宗教教育を振興するため宗教部を設けたこと、進駐軍はじめ一般外国人との接渉事務が増加してきたため外事部を新設したことなどがその特色としてあげられる。

一九四九年八月の改正

新学制への移行、学生生徒数の急増に伴い事務量も急速に増加、事務の内容も多岐に及んできたことから、教職員の増員と職制再編が必要となり、大幅な職制の改正が行

われた。その概要は次の通りである。

(1) 職員の資格階級について。

従来の職階制を廃止し、職務の種別に応じた職名を存置する(守衛、使丁、給仕、寮母、清掃夫、賄夫、工人、自動車運転手、電話交換手、看護婦、保健婦、事務助手)。

(2) 次の事務室を置く。

※ 理事会セクレタリー事務室 (有終館)

※ トレジュアリー事務室 (同 右)

総長事務室 (同 右)

※ 教育局長事務室 (同 右)

事務局長事務室 (同 右)

※ 宗教部長事務室 (神学館)

学生部長事務室 (致遠館)

レヂストラー事務室 (同 右)

以上のほか分室として、

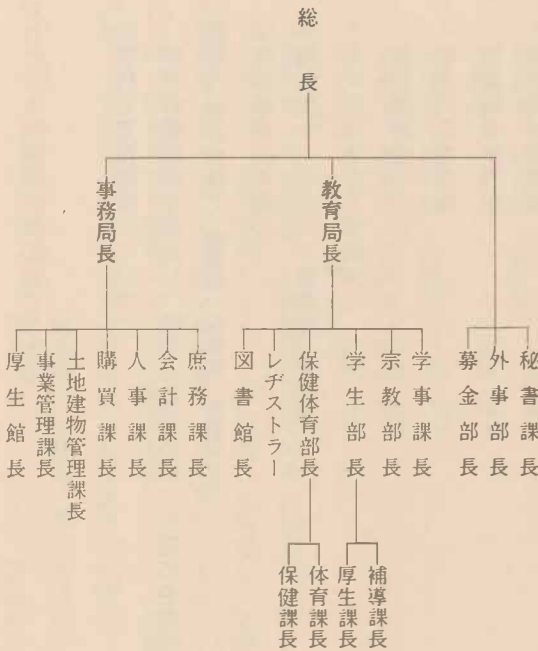
女子部分室 (栄光館)

岩倉分室 (樹徳館)

図書館

厚生館

事務室は以上の通り改められたが、※印事務室はその長が他の職務を兼ねていたため実際には設置されていない
 (理事会セクレタリーは総長事務室外事部長が兼務、トレジュラーは事務局長が兼務など)。なお当分の間経済専門学校、中学校、外事専門学校、工業専門学校事務処理のため彰栄館、立志館、徳照館、法学部学生読書館(工専の事務)に職員を派遣。
 (3)事務管理系統は左の通りである(一九四九年八月)。



各学校の教務主任はレヂストラーの、学生主任は学生部長の、宗教主任は宗教部長の、保健体育主任は保健体育部長の、研究室主任は図書館長の(各学校長を経て)管理に属する。

(4) 理事会の業務担当者として、

トレジュアラ―

理事会セクレタリー

を置く。

(5) 業務分任担当（責任）者左記の通り。

一、学部長、研究所長

二、教育局長、宗教部長、学生部長、保健体育部長、レヂストラ―、図書館長

三、事務局長

(6) 業務担当補助者左記の通り。

一、技師、司書

二、主事、主任、秘書、課長、係長

財団法人から学校法人への組織変更の際してもこの職制には大きな変更はなく、この職制は一九五四（昭和二九）年まで存続した。ただ一部ではあるが実質上修正されていたものもある（例えば募金部長の退職後、外事部長が募金の担当者となり募金部長はなくなった）。

一九五二（昭和二七）年三月、総長、理事長、大学長を兼務していた大塚節治は、六五歳の定年に達したことから大学長を辞任、四月には田畑教授が大学長に就任、総長と大学長とは別人となった。時あたかも終戦直後の物心両面にわたるどん底時代から漸く復興の時代に入り、新学制への移行とも相俟って、同志社は学生生徒数、教職員数



大塚節治総長から住谷悦治総長へ
(1963年11月)

ることとなり、一九五四（昭和二九）年には職制を改め独算制の体制に入ることとなった。

元來職制とは、労働の種類による水平的な分業・職種の区分と、指揮命令系統の分化・縦の責任区分との二種類の職務分担を示す制度のことであつたが、戦後は一般的に後者の上下区分を職制と呼び、時には上職者を「職制」と呼ぶようにさへなつた。同志社の職制が身分制、階級制を維持するためのものではなかつたことから、従來職制と称していたものを一九五四年の改正に際し、事務機構規程と改称することになった。

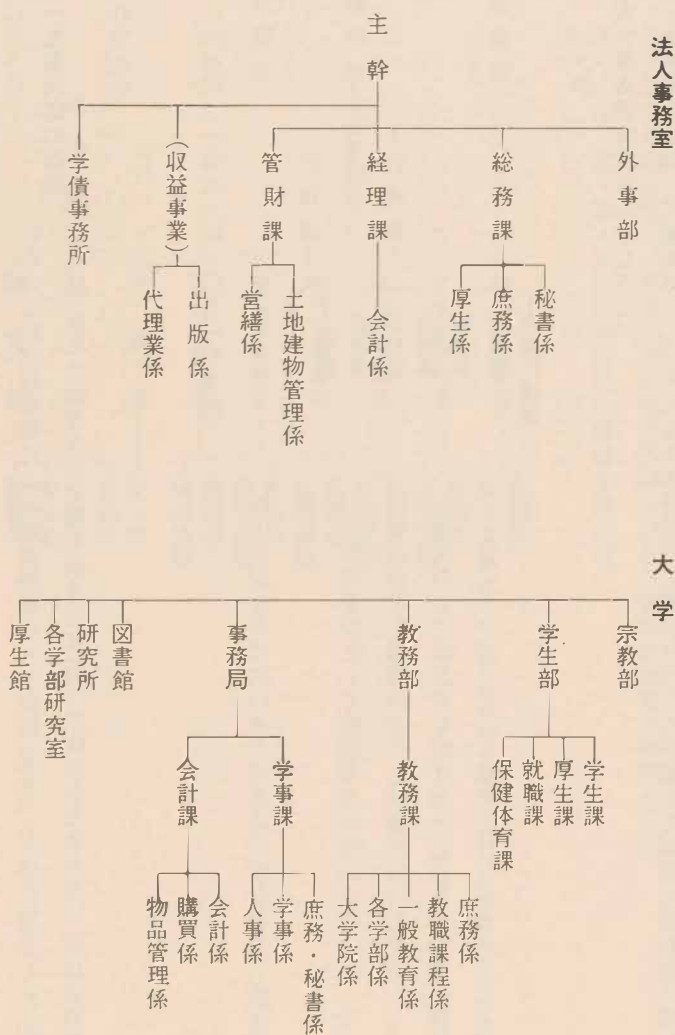
一九五四年四月の 社内各学校が自給自足、収支均衡の体制を確立する必要に迫られ、その結果各学校が負担した事務機構改正 できた法人関連費はできる限り圧縮することとなり、法人事務機構を整理して各校で処理可能の事務はすべて各校へ移譲、最小限度の法人事務のみを法人事務室で扱うこととした。

所謂独立採算制への移行に伴う事務機構の改正であつて、改正された事務機構を图示すれば、次の通りである。

の急増、施設拡充の途上にあつた。また年々のインフレもはげしく、同志社諸学校は毎年のように学費を増額していた。しかし相次ぐ学費増額には強い抵抗があり、総長（理事長兼務）をはじめ各学校長は必要源資の確保に苦労が絶えなかつた。このような事態の中で各学校は次第に自給自足を余儀なくされ、各校から経費節減のため本部関係費圧縮の要望が高まつてきた。なかつく田畑大学長は各学校ごとの独立会計制を強く主張、従來の總合会計制から各学校のいわゆる独立採算制への途を辿

改正の主要な点は、

- ①教育関係諸部門はすべて大学はじめ各学校へ移譲した。
- ②全学的機関である厚生館も大学へ移管した。



- ③ 従来の職制を、法人事務室事務機構規程、大学事務機構規程などと改称した。
 - ④ 法人事務室に主幹を新設した。
- ことなどである。

一九五六年の改正

いわゆる独立採算制による事務機構は一九五四（昭和二九）年に発足したが、一九五六（昭和三一）年秋には二年余の実績を踏まえて若干の修正がなされた。改正された事務機構は左の通りである。

(イ) 本部（一九五六年一〇月一日実施）

総長室

監理部

財務課

庶務課

庶務・文書係
人事係

経理係

管財係

営繕係

募金係

出版係

保険代理係

事業部

(ロ) 大学

大学事務機構改正の主な点は、

- ① 事務局制を廃して総務部とし、それまで事務局内に置かれていた学事担当部署を教務部へ移した。

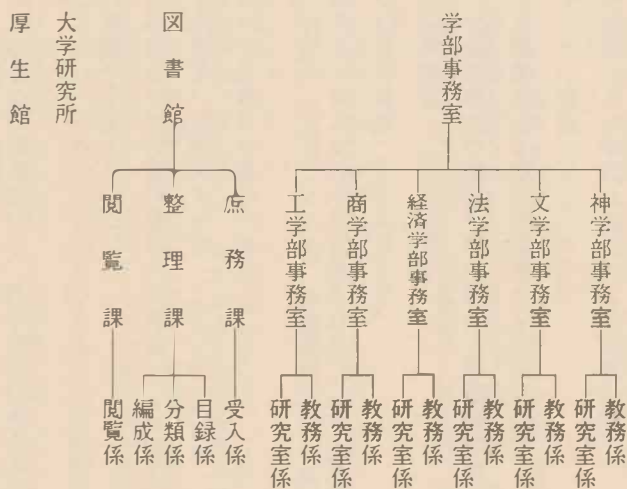
改正の主な点は次の通りである。すなわち、法人事務室を本部と改称し、

- ① 主幹制を廃止して監理部長を置いた。

- ② 収益事業を機構の上でも明確に区分した。

- ③ 機構の上で総長室を設けた（二年前の機構改正時には総長が理事長を兼ねており、特に総長室を機構上設ける必要がなかったものと思われる）。

②学部事務室を設け、各学部研究室は学部長のもと学部事務室の所管とした。
③その他、部・課・係を統廃合した機構を備えた。



(一九五六(昭和三一)年九月二五日実施。)

一九五六（昭和三一）年の事務機構改正で本部、大学の事務機構はほぼ固まったが、その後、機構整備のため、あるいは臨時に必要な部局新設など、若干の部分修正を経て今日（一九七八年九月）に及んでいる。その主なものは、

(イ) 本部

監査室の新設（一九五七年九月）。

記念事業事務局、社史史料編集所の新設（一九六四年二月）。

監理部を庶務部、財務部に分轄（一九六五年二月）。

創立百周年記念事業事務局の新設（一九七三年二月）。

(ロ) 大学

大学研究所が大学人文科学研究所となる（一九五七年四月）。

アメリカ研究所新設（一九五八年三月）。

理工学研究所新設（一九五九年四月）。

学生部に会館事務室を新設、学生部から就職部が独立（一九六四年九月）。

総務部に広報委員会事務室を新設（一九六九年六月）。

計算機センター新設（一九七五年四月）。

教務部庶務課から入学課が独立（一九七五年六月）。

教務部学事課に国際係を新設（一九七五年六月）。

整備計画課を新設（一九七六年五月）。

などがその主なものである。

女子大学の 法人事務室および大学の事務機構の整備改革に呼応して、女子大学その他諸学校の事務機構も整備事務機構 改善されるに至った。

一九四九（昭和二四）年八月に改正・実施された同志社職制では、たんに女子部分室となっていたが、その後、女子大学は、庶務課、教務課、学生課、保健課の四課と、研究室、図書室に業務を分轄する案が法人事務局などで検討されていた。

ところが、一九五四（昭和二九）年一月に一応の成案をえた女子大学事務職制案では、教務課、学生課、庶務課の三課と、研究室を置くこととし、研究所、図書館、厚生館は同志社大学の当該所・館が定める規定に従って、これを共同利用することに改めた（同前職制案 第七条）。つまり、一九四九年の職制案に比べて、事務組織をかなり大幅に縮小した。

この一九五四年の案を基礎として、一九五六（昭和三一）年一〇月に、女子大学事務機構は三課二室（教務課、学生課、庶務課、研究室、図書室）に改め、事務機構規程も整備した。この機構および規程は、以後約一〇年間、ほとんど改変されなかった。

一九六七（昭和四二）年四月に、学生および教職員数の増加、財政規模の膨脹などにもなつて、機構は次ページのように改正され、部課・係制をしくなど、業務分担が細分化され、機構も複雑になった（『同志社社報』第一九五号）。一九五五（昭和三〇）年一二月にデントン記念館が完成してからは、その建物の内部に図書館が設けられたので係員を配置しており、一九六五年四月から女子大学研究所が充足していたので、そうした現状に機構規程を合せた面もあったわけである。ともあれ、この年度に改正された事務機構が、女子大学の機構のベースになった。

翌一九六八年四月、教務部、学生部に並んで総務部が設けられ、庶務課と経理課を置いた。また、教務部には学

教務部 教務課
 学生部 学生課
 学寮事務室

庶務課 庶務係
 会計係
 調度係

研究室
 | 英文学科研究室
 | 音楽学科研究室
 | 家政学科研究室
 | 一般教育研究室

宗教室

図書館

女子大学研究所

(一九六七(昭和四二)年実施)

厚生館

厚生館は、一九四一(昭和一六)年一〇月二四日に開館式を挙げた。それは、文学部文化学科厚生学専攻の実習および研究と、同志社諸学校の学生生徒、教職員およびその家族、近隣の市民の医療や保健相談の施設として設けられたものである。

建物は、左京区田中関田町にあった大沢善助の別邸を、彼の子息である理事大沢徳太郎から寄附されたもので、いまもクラーク記念館の北東側に建っている。当初、一階は診療や実習、二階は研究室として使われていた。

この厚生館の維持・管理は、同志社大学社会事業学教育後援会(一九三二年創設を一九三九(昭和一四)年一月に

務課を新設して二課とし、学生部には厚生課を新設して二課一事務室となった(『同志社社報』第二〇六号)。一九七七(昭和五二)年九月、待望の図書館が竣工し、同年四月から図書館は、事務機構上ほかの三部と同等の位置付けになって図書課を置くことになった。この新設を除けば、一九六八年以降、各部に係の統廃合は若干あったが、事務機構の大きな改変はなく、現在に至っている。

なお本章では言及できなかったが、大学、女子大学以外の諸学校でも、一九五五(昭和三〇)年ころから事務所に事務主任または事務長を置くようになり、業務分担なども明確に定めるなど、事務の改善を進めつつ現在に至っている。目下のところ、職制上の係制はしていないが、いずれはその必要性が生じるのではないかと思われる。

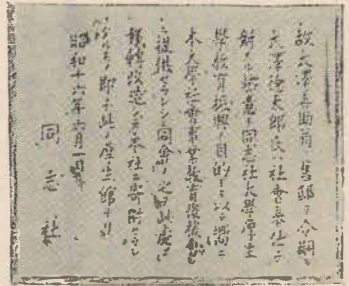
改組した厚生学教育後援会によっておこなわれていた。同後援会の理事長は大沢徳太郎であり、開館当初は牧野虎次総長が館長を兼ね、医師二名、保健婦、看護婦、研究室事務助手各一名というスタッフで、他に佐伯理一郎（後援会評議員）経営の看護婦学校から、実習生として二名が派遣されていた。

一九四九（昭和二四）年五月、新学制による諸学校の発足と、学生生徒および教職員数の増加にともない、その医療と健康管理業務の量が急増しただけでなく、より充実した業務の実施を要請する声が学内に高まってきた。そこで、社会福祉教育と医療・保健業務を分離することになり、厚生館は厚生学教育後援会の手から離れ、同志社の医療・保健センターとなって、財団法人同志社が管理・運営することになった。

一九四九年に改正された同志社職制（同年八月実施）では、厚生館は法人事務室のなかの事務局長のもとに位置づけられている。しかし、この職制では、他の事務部門と異なり、業務内容についてはなんら規定していない。おそらく法人同志社の管理に移ったものの、厚生館の歴史と、担当業務の特異性のゆえに、職制上の位置づけはむしろ、便宜的措置として事務局長のもとに置いたものと考えられる。また、その業務内容については、従来のそれを継続することと、あらためて規定は設けなかったのであろう。館長は湯浅八郎総長が兼務している。

こうして、法人事務室の一組織となって、従来どおり全同志社の教職員、学生生徒を対象に医療と保健管理業務を担当し、大学はじめ諸学校の分担金によって維持運営されていたが、いわゆる独立採算体制への方向が固定化することつれて、分担金の軽減を要請する各学校の声が高まってきた。そうした背景もあって、本部事務機構を縮小するとともに、厚生館は大学へ移管される方向をたどることになった。

一九五四（昭和二九）年二月に制定された同志社大学事務機構規程の組織図には、厚生館も図書館も研究所も掲げられていないが、同規程第一五条に、「本大学の各学部研究室、図書館、研究所及び厚生館の事務組織については



旧厚生館タブレット

各室館所における規定の定むるところによる」とあるところをみると、このころ大学へ移管されたものと思われる。ただし、『同志社教職員名簿』一九五〇年度版では、厚生館は各学校に並列して記載されており、主任として安藤唯一の名をあげている以外に、役職名はない。翌一九五一年度版も同様であるが、主任を医務主任と改めており、一九五三年度版からは、保健課長・医務主任となっているが、安藤がひきつづきその任をつとめている。

厚生館が『同志社教職員名簿』で大学の中に入るのは、一九五五（昭和三十）年度版からで、再び館長を置き、大下角一大学長の兼任になっている。以後一九六五（昭和四十）年度まで、館長は歴代大学長の兼務であった。一九六六年度に医師安藤唯一が館長となり、翌一九六七（昭和四二）年度まで、館長は歴代大学長の兼務であった。保健課長・医務主任は、一九五七年度から廃止され、翌一九五八年度からは事務主任を置くようになった。厚生館が事務機構規程の上で大学の一組織となるのは、実質的には一九五四年からであるといつてよいわけだが、名実ともに大学の一組織となるのは、一九五六年九月の大学事務機構規程の改正以降、つまり大下大学長が館長を兼務した翌年からである。しかし、厚生館の事務分掌については、同規程第十九条に「各学部、研究室、図書館、研究所及び厚生館については別に事務分掌規定を定める」となっているが、その後の『同志社例規集』にも厚生館の事務分掌規定は見当らない。成文化したものがあつたかどうかとも詳らかでない。ともあれ、こうして大学の所属にはなつたが、厚生館は従来どおり全同志社の学生生徒、教職員、ひいては近隣市民の医療と健康管理に当らねばならないことに変わりはなかつた。加えて、商業高等学校、短期大学、大学第二部など夜間授業を実施する学校の設置にともない、「学校保健法」などにもとづき昼夜にわたって教職員および学生

生徒の期待にこたえうる体裁をととのえねばならなかったが、大学所属の関係もあって、他の各学校との意思疎通や、全同志社を対象とする医療と健康管理体制を確立しがたいといった矛盾に直面せざるをえなくなった。しかしその問題は、大学をはじめ各学校の人的・財政的制約もあって、解決の途を見出すことは至難であった。また、各校に派遣している保健婦や看護婦の人事管理上の問題も、懸案のひとつであった。

学生生徒および教職員数の増加と、右のような問題の顕在化によって、その解決に苦慮していたころ、同志社はたまたま創立九〇周年を迎え、記念事業の一環として大学会館を建設することになり、施設の狹隘をかこっていた厚生館は、さしあたり施設面の解決をはかるために、一九六六（昭和四一）年早々に大学会館へ移った。そして新しい医療機器もとのえ、専任のレントゲン技師なども雇用して、医療・保健体制の充実をはかった。しかし、それでもなおかつ、二万七〇〇〇人の学生生徒と一三〇〇名ばかりの教職員の日常の医療活動で手いっぱいであり、学生生徒および教職員の定期健康診断を実施する期間には、外部の応援をもとめても、なお日常の診療は休診にせざるをえない状態が現在も続いている。

学校の保健管理センターとしての厚生館は、その業務をより十全に推進するため法的な義務づけもあって、各学校に同志社大学保健委員会（一九六七年三月に充足した同志社大学厚生館委員会を一九七四年四月に改称）、各学校に衛生委員会（一九七五年六月充足）を設置した。

右のような委員会の設置について、厚生館は次のように述べている。

従来、各校の保健管理は計画から実施に至るまで、ほとんど校医、保健婦、看護婦、および保健主任に任せ切りといった状態で、実務担当者は学校としての方針が示されないうまま、学校保健法、結核予防法、労働安全衛生法などによって学校が負わされている課題や、教職員、学生、生徒からのさまざまな要求にこたえてきた。しか

し、このような現場中心の対応は年を重ねるごとに矛盾を生み、その矛盾は次第に拡大してきた。このため、前年度末に校医より学校長に対して「各校に保健委員会、衛生委員会を設置する」、「ここ一、二年のうちに一校一校医制を実現する」などいくつかの保健管理充実のための条件を満たすよう要求が出された。これを受けて、本年四月から六月までの間に各校に保健委員会、衛生委員会が設置された(中学校は保健委員会のみ)、これらの委員会において学校全体の立場から、方針や計画を審議し、それに基づいて、実務担当者が業務を行うという保健管理体制の骨格がつくられた。

そして、これを機会として、従来厚生館が担当していた、春期健康診断に必要な医療の確保、京都結核予防会への胸部X線検診および胃検診の依頼、心臓・腎臓検査なども各校ごとに行うことにした。(『厚生館年報』昭和五一年度)

つまり、厚生館主導型から、各校の委員会主導型への移行を願ったものである。こうした委員会の設置とその活動によって、厚生館の責任や業務の負担が軽減されるとは思われないが、各校における保健と衛生に対する認識がたかまり、主体性が強化されることが望まれる。

なお厚生館では、大学会館の地階に診療施設や受付などが配置されている関係で、患者の便宜や急救車の出入の点でも問題があり、施設の抜本的な改善を、関係者は長年にわたってつよく願望している。

厚生館については、『同志社九十年小史』および『厚生館年報』(一九七一年創刊)に、歴史や業務上のデータが詳しく記述されていることを付記しておく。なお、大沢徳太郎の寄附による旧厚生館の建物は、戦後若干増改築したが、現在は大学院の社会福祉学専攻および新聞学専攻の教室、読書室として使用されている。

第二章 大学

新制大学の発足

第二次世界大戦は日本国内の各方面に、物心両面にわたり深刻な破壊をもたらした。新しい日本の建設はすべてこの破壊の中から始まろうとしていた。京都はさいわいにして物理的な破壊を免れた。従って、同志社は、従来保持してきた土地とそこにある建物をそのまま用いて、同志社再建の事業にとりかかることになったのである。

敗戦を迎えた一九四五年、同志社には次の諸学校があった。今出川の地に同志社大学とその予科、同志社外事専門学校、同志社工業専門学校、同志社中学校、同志社女子専門学校、同志社高等女学校、そして岩倉の地に同志社経済専門学校。大学と予科、各専門学校に学んでいた数多くの男子学生が学徒出陣し、海外に、あるいは国内の勤務地へと赴いた。戦争の犠牲は学生のみならず、教職員の中にも出た。神学部助教村上俊は敗戦のときソ連の捕虜となり、カラフトでの抑留生活が続き、材木伐採作業中に、倒れてきた大木の下敷となって事故死した。カラフト時代の村上は「饑餓と極寒の夜、薄暗い灯火の下で『実践理性』を読み、仲間の兵隊にカント哲学を説いてい

た」(『同志社タイムス』第八二号)といわれる。文学部の助手太田藤一郎は一兵卒として召集をうけ、前後七年間にわたり大陸に南方に生死の間をさまよい、餓えと無防備のうちに敗戦を迎え、骨と皮だけの体で帰国したのであった。

戦争に行かない学生は各地の工場に勤労働員に出かけていった。近いところでは、現在新町校地となっている場所にあった日本電池に出かけた組もあった。彼らもまた徐々に学園に帰ってきた。九月から少しずつ授業がはじまった。一種の虚脱感がただよっていたが、同時にまた、もう戦争はないのだ、もう死地に赴くことはないのだという、喜びもあった。敗戦にうちひしがれた日本をどのように復興するのか。同志社においては、敗戦の前後を通して不変であった行事もあったのである。大塚節治が証言しているように、「神学館における七時三十分からの朝拝は欠かさず継続された」(『回顧七十七年』)であった。

一九四五年当時のいわゆる旧制の同志社大学は、法文学部という一学部のみ的小型の大学であり、その中に神学科、厚生学科、法経学科という三つの学科があった。これはむろん戦時下の学部統合の結果だった。国家主義と軍国思想から生まれ、直接間接に圧迫を受けてきた同志社として、やむにやまれぬ仕方での縮の限りをつくした姿であったといえる。戦時中、心ある人々は、同志社自体が廃校の運命にあることをひしひしと感じていたと伝えられている。旧制の同志社大学にはその下に予科があった。これは旧制度の高等学校に当るもので、同志社大学予科に入り、所定の科目を履修して卒業しさえすれば、無試験で同志社大学の各学部に進学できる、という制度であった。経済専門学校や女子専門学校の卒業生にもその特典があった。しかし戦争が急迫してくるにつれて、戦時要員確保のため、国家は矢継早に学年短縮を実施し、三月の代りに前年の九月に卒業していったクラスが戦後の一九四七年まで続いた。一九四八年になってようやく、三月卒業の制度にもどったのであった。

敗戦の翌年である一九四六年には、いよいよ同志社再建にむかっての歩みが始まる。それは外圧によって圧縮さ

れていた有機体が、自分の力で徐々にもとの姿をとりもどすいとなみに似ている。四月にはもと通りの二学部、すなわち文学部と法経学部^{（注）}に復元した。文学部は神学科、英文学科、文化学科、社会科学の四学科編成となったが、この中の神学科は翌一九四七年に神学部として独立する。法経学部は法律学科、政治学科、経済学科の三学科から成っていた。それぞれの学部・学科を充実させるためには、当然のことながら教授陣の補充が必要であった。朝鮮、台湾などの旧植民地や満州国から引揚げてきた学者たちのうち、何人かはこの時期に同志社大学の教授陣に加わった。なかでも顕著な例は詩人であり、英文学者として令名の高かった矢野^{（注）}禾積^{（注）}（峰人）で、彼は一九四七年から三年間文学部教授として在籍したにすぎないが、その間に英文学科の学生に与えた鼓舞と激励はかりしれないものがある。矢野はのち東京都立大学に移り、その学長となり、さらに東洋大学に転じて、その学長をつとめた。矢野と同じく台北帝国大学から同志社に転じたものは西洋文化史の菅原^{（注）}憲^{（注）}であった。また満洲の建国大学からは経済学の黒松^{（注）}巖^{（注）}が転じてきた。

戦争中荒れるにまかされたままだった学園は、おおむねまだそのままであった。現在の神学館の位置にあった徳照館という木造二階建の教室棟の内部は、雨の日には薄暗くて教科書の文字が見えにくい有様だった。現在の明徳館の立っているあたりにはバラックの一階建ての教室があったが、雨の日には天井から雨水が机の上にしたたり落ちてきた。もはや祝日にご真影を礼拝することはなくなっていたが、それでもまだ奉安殿が学園の中に残っていた。有終館と旧弘風館と旧至誠館が一例に並び、それぞれ予科の三年生、二年生、一年生の教室になっていた。致遠館では法経学部の授業が、徳照館では文学部や外事専門学校の授業が行われていた。神学部は現在クラーク記念館と呼ばれる旧神学館が根城であり、その二階にあったチャペルからはよく讃美歌のコーラスがきこえてきた。

旧制予科の状況

同志社大学は一九四八年四月に、新制大学移行の先頭をきった私立大学一二校のひとつであった。それに先立つ一九四七年に、いったい旧学制下の状況はどのようなものであったろうか。

ここでは大学予科をえらんで光をあててみよう。

その年、予科は新入生を約二五〇名入学させ、五組編成で出発する。A組、B組、C組は第二外国語をフランス語とするもの、D組とE組は同じくドイツ語を第二外国語とするものの組であった。敗戦まではドイツ語の方が学生の人気を集めたが、戦後はこの人氣が逆転したようである。当時の予科はクラス制で、選択科目というものはなく、教師が入れかわり立ちかわり教室に来て担当科目を教えるのであった。授業は月曜から土曜までびっしりつまっていた。五〇分をもって一講時とし、英語は四人の教授（児玉実用、浅野泰造、貞方敏郎、戸川治之）が週八時間、第二外国語は週四時間（フランス語を山田壽、ドイツ語を辻本金治）あり、学生は予習と復習に追いまくられるという有様であった。この外に国語（里井陸郎、小森啓助）が週三時間。里井教授の和歌の朗詠は教室中を静まりかえらせた。漢文（藤林広超）が週二時間。藤林教授は自ら漢詩の美に酔うことによって、学生を漢詩の世界に引きずりこんだ。心理学（宇阪良二）が三時間。キリスト教概論（茂義太郎）が一時間。そして予科長の山田貞夫が週一時間ずつ各教室を巡回して、一年がかりで新島襄の伝記を講じた。秋になるとアーモスト大学からの派遣教授であるケーリ（O. Cary）が、漫画を描いた黒板をかついで教室をまわり、大きな尻を教卓の上にとっかかすえて「米文学思想史」の授業を英語で続けた。

学生たちに最も恐れられた制度に「三一」というのがあった。つまり欠席日数が授業日数の三分の一を超える、自動的に受験資格を失うのであった。各科目とも教師は綿密に君づけで出席をとったし、席はアルファベット順に指定されていたから、「代返」は不可能だった。そういうわけで、試験日に先立って受験資格喪失者が続出す

るのであった。

それから三〇年近くをへた今日、あの旧制同志社大学予科のカリキュラムをどのように評価すべきであろうか。恐らく現在の学生には堪えがたいほどの、おしきせ式の教育に映るかもしれない。しかし現在のように、英語を週四時間、それも週二回、九〇分ずつ、二人の教師から教わるのにくらべて、週八回、四人の教師から二時間ずつ教わる、という制度に比較すれば、その差の大きさに驚かざるをえないのである。少くとも英語教育に関する限り、新制大学になることによって、同志社ではその密度が若干薄くなってきたのではないかと危惧するむきもある。

一九四五年秋に、文部省は緊急の措置として旧陸海軍諸学校（陸軍士官学校、経理学校、海軍兵学校、経理学校等）の生徒を全国の高等学校、大学に、簡単な試験をしてから入学させることにした。この結果、また一九四六年春、四七年春等の入学試験をへて、同志社にも多数の旧陸海軍生徒や、旧軍人が入学してきた。衣類の極度に不足した時代であったから、この人々は古い軍服を着て教室に出た。一九五〇年代に入ってようやく軍服姿が学園から姿を消したのである。

牧野総長から

第一代同志社総長牧野虎次は戦前戦中戦後の最も困難な時期の総長であった。新島襄の永眠し

湯浅総長へ

た一九九〇年に同志社の学生であった牧野はまた、新島、小崎弘道、横井時雄、原田助、海老名弾正と続いた「牧師総長」の最後を飾った人でもある。彼は総長退任後もなお元気で、キリスト教のために、また世界の平和を求めて他宗教との対話を実現するためのさまざまな企画に参加した。彼の祈りは力のこもった、感動的なものであった。牧野の後任は、牧野自身がそのあとをついだところの湯浅八郎であり、湯浅は同志社史上はじめて二度目の総長として登場する。

戦前における湯浅は刻々に進行する日本の軍国主義、国家主義によって最も迫害をうけた総長であった。二年一



牧野虎次

○カ月にわたる第一〇代総長の期間は苦難にみちたものであり、彼のキリスト教と自由主義を敵視するものは同志社の内外にあった。彼の辞任には恰も石をもって追われたという感がつきまとうのである。彼は日米開戦後も敢えてアメリカにとどまり、敵国人としての制限をうけながらも、できる範囲内で在米日本人の救援活動に当った。同志社大学が敗戦後の出直しにさいし、深い反省をこめて湯浅前総長を再び総長に迎える決意をしたことは当然のことであつた。学生大会もまた湯浅八郎博士を総長に、という決議をした。当時はなお米軍の占領下であり、アメリカに対して顔のきく総長をもつことは有利であるとする考え方が働いたこともまた否定できないであらう。

新総長に課せられた問題は少なくとも三つあつた。その一は同志社を新制大学として出発させること。その二は同志社の精神的復興をはかること。そしてその三は同志社の経営的基盤をかためることである。湯浅はこの三つの問題と精力的に取り組んだ。

新制大学を 一九四七年三月三十一日に教育基本法と学校教育法が公布された。翌四月一日から全国でいわゆる
めざして 六・三制が実施されることになったのである。これは前年に来日した米国教育使節団の報告書に基

づき、日本政府がきめた戦後の教育再編の基本方針の実施を意味するものであつた。従来の小学校六年、中学校五年、高等学校三年、大学三年の制度はそれぞれ六・三・三・四にあためられることになった。形式的には上記の通りであるが、内容的には官僚の統制を排除し、できるだけ民主主義的な教育制度の樹立が勧告されたのである。この結果、各地に教育委員会が生まれる。もはや校長がワンマン式に学校内で力をふるうことはむずかしくなる。殊に大学では公選がすすめられ、総長や大学長、学部長などを選挙で選ぶという慣習が定着していった。

公職追放もまた当時の問題の一つだった。占領軍は戦争中に教授らの発表したものを点検していき、たとえばその中に「鬼畜米英」といった表現をしたものや、顕著に国家主義的な立場を取ったものがあれば、教授として不適格の判断を下した。民間情報教育部 (Civil Information and Education Section, ふしこいえと略称された) はすでに同志社から三人の教授、難波紋吉、小松堅太郎、田村徳治を追放していた。同志社ではそれに先立って自主的に適格審査委員会をつくり、教員としての適格・不適格を審査したが、ここで不適格と判定されたものは皆無であった (大塚節治『回顧七十七年』)。

一九四七年には大学の各学部と予科、外専、経専、工専それぞれが新制大学をめざして準備にとりかかった。新学制移行委員会が組織され、大塚節治、上野直蔵、田畑忍、島本英夫、山田貞夫らが学内の委員にあげられた。他方国内的には占領軍最高司令部の基本方針に基づき、大学基準に関する考え方がさまざまな試行錯誤のうちに結実し、大学設置基準がつくられた。同志社を代表して大学基準協会の初期の委員をつとめたのは大塚教授であった。この設置基準は国公私立の大学を通じて、学部として最低必要とする専任教員数、建物、教室、校地面積、図書数等を定めたものであって、これらの最低条件を満たさなければ新制大学の学部として適格とは判定されないのだった。

この年の秋、新制大学づくりの気運はようやく最高潮に達し、大学内の意思は神学部、文学部、法学部、経済学部、商学部、理工学部の六学部を有し、その一、二年次を教養学部とする総合大学を作ることになった。統一され、一二月一日の理事会はこれを可決した。すなわち法経学部を二分して法学部(法律学科と政治学科)と経済学部とすること、経済専門学校を昇格させて商学部とすること、また工業専門学校を理工学部とすること、これが原案だった外事専門学校は教養学部に吸収されるかたちになる)。ところで翌一九四八年三月一四日、大学設置審議会の現地審査委員一行

が来学し、視察を行なった。その結果、神、文、法、経済の四学部は適格と判定されたが、商学部と理工学部については不首尾に終わった。

しかし商学部と工学部は他の四学部に一年おかれて、一九四九年開設の認可があり、理工学部から工学部への名称の修正を経たものの、一応原案通りの六学部制が成立した。商学部が出版にさいし一年間足ふみした理由については、経專のあった岩倉の地に独立の気風がさかんであり、商学部として編成されるよりもいつそ同志社商科大学を作るべきだという意見もあったこと、或は逆に、このさい経済学部の中の一学科として編入される方がよいという意見もあり、意思統一にいくらか時間がかったのである。このような意思不統一が審査委員に洩れたことも、認可には不利に働いた。岩倉の地に対する執拗な愛着を断念し、今出川における総合大学に参加させるよう努力をあらわしたのは湯浅総長だった。

工学部の前身はどうであったか。同志社工業専門学校が発足したのは第二次大戦中、しかも敗戦の色合いがすでに濃厚となった一九四四年五月のことであった。かつてハリス理化学校をもち、日本における理科教育の第一線になった同志社に理工系の学部がないことは何としても残念なことであった。さらに戦争が激化するにつれて文科系の学生は動員されて学園は過疎的現象を生じていた。その上、同志社に対しては思想的な面からの圧力も強く、同志社が暗闇の中に活路を見出すためにも工專の設置は必要であった。敗戦後、同志社工専は発展の機会にめぐまれた。京都大学工学部から何人かの人材の割愛を受け、ようやく電気学科、機械学科、工業化学科の三学科から成る工学部が発足したのである。京都大学の鳥養利三郎（とりがひ）総長は大学設置審議会の委員として工学部の設備を一度ならず視察にきたが、そのつど同志社が有利になるよう判定を下したのであった。

学部編成はこうして六学部におちついたが、新制大学の発足にはもう一つの面があった。それは一年次、二年次

生の全部を收容する教養学部である。教養学部は一九四八年に発足して三年後には制度として姿を消す短命なものだった。しかし新制度の同志社大学の発足を考えるさいに、教養学部のはたした役割を無視することはできないのである。この教養学部設置について湯浅総長は三人から成る準備委員を任命した。すなわち岡本春三^{はるみ}、児玉実用、オーテス・ケリーである。児玉は英文学者、詩人であって、長らく予科を教え、教務主任をつとめていた。ケリーはこのとき二六歳の青年で、アーモスト大学から同志社に派遣されてきたばかりだった。この委員会はたえず集って協議をこらした。ケリーがアーモスト大学の卒業生であることから、彼の母校、そして新島襄の母校であるアーモスト大学のリベラル・アーツ教育の理念が、新制の同志社大学の教育理念を形づくる上に大いに参考にされたことは疑いない。

一九四七年の暮近く、一つの問題が生じた。それは新制大学の教養学部を岩倉におくという方針が総長から出たからだ。このため予科の一、二年生を中心に動揺が起こり、予科の学生大会がチャペルで開かれ、岩倉行き反対の決議がなされた。また学生代表の十数名が同志社本部のあったアーモスト館に湯浅総長を訪ね、今日という「団交」を行なった。総長は誰一人のおともも連れずに単独で学生と会見したが、結果は物別れだった。予科の教授会の中でも岩倉行き反対の強い意見が出てきた。総長はついに折れて、新制大学は分割されることなく今出川に設置がきまり、代って新制の同志社高等学校の岩倉行きがきまったのである。

同志社の 精神的復興

湯浅総長は稀に見る雄弁家であった。その独特のスタイルと風格は、多分長い滞米生活のうちに身につけたものであったろう。湯浅はよく「同志社の精神的遺産」を強調した。それは①新島襄先生、②キリスト教主義、③国際主義、④民主主義、なのであって、この四つの精神的遺産こそは同志社教育のための重要な資源である、というのであった。総長はまた時として、同志社は三流大学である、と断言してはばからな



R. I. シーベリー

かった。しかしこの四資源があるおかげで、同志社はその輝かしい歴史と伝統をうけついで、世界に貢献できる教育機関たらしめることができる、と主張した。

同志社の精神的復興をはかるために湯浅総長はいくつかのことを実践した。その一つはアメリカン・ボードの教育部長シーベリー (Miss Ruth Isabel Seabury) を同志社の顧問として招き、同志社の精神的復興の指導を求めたことである。シーベリーは同志社の宗教教育について建言するところがあり、学生に課外の宗教活動を奨励し、そのすすめによって発足したのが月に一度のコーヒー・アワーであった。また湯浅から新制大学の初代の教務部長(当時はレジストラと呼ばれた)に任命されたケーリ教授の提案で時間割にチャペル・アワーとアセンブリー・アワーとが繰り入れられた。それは水曜日の一〇時二〇分から一二時一〇分までの一時間五〇分をあて、この時間には授業科目は一切組まれなかった。これが現在に至るまで水曜の二講時目をチャペル・アセンブリー・アワーとすることになった起源である。(当時の一講時は現在の九〇分よりも長くて一一〇分であり、毎朝の授業は八時二〇分からはじまった。)

経営面での努力

同志社の経営的な基盤を固めるために、湯浅は元財務部長島本徳三郎や大塚教授の推薦をえ、校友であり、大同生命の監査役であった千田民衛^{ちんだ}を事務局長に迎え、財政と制度の改革を担当させた。千田は職制変更による事務機構の確立、予算の立て方の改善、同志社就業規則の制定、大学大教室の建築等、意欲的に仕事をすすめた。そのために一部の人々から「経営主義」の非難をあげたり、後述の「同志社刷新運動」で攻撃目標にさらされたりした。一九五〇年のなかばに湯浅総長は東京三鷹に設立される国際基督教大学の初代総長に就任のために、あと一年の任期を残して同志社を去ることになったとき、千田もまた辞表を出して、

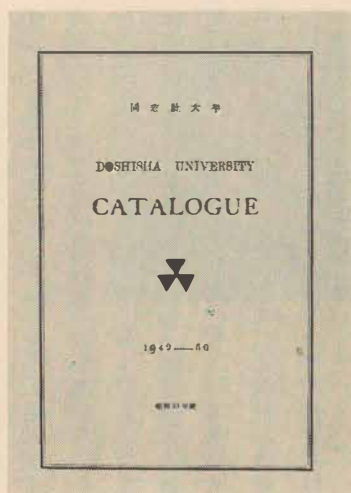
三年間近くの同志社への奉仕に終止符を打った。千田は敗戦後の猛烈なインフレの時期に、同志社の財政基盤を確立するための礎石を置いた人として記憶されるべきであろう。小型の大学から大型の大学に成ることは、もはや必然であると考えられたのである。

湯浅の下で作られた新しい機構の大筋は、総長事務室、教育局、事務局の三本立てであった。まだ本部と大学に分化していなかったことがわかる。一九四九年の『同志社大学カタログ』によると総長事務室には外事部長（奥村龍三）をおき、教育局長（片桐哲）の下に宗教部長（大下角一）、レジストラ（オーテス・ケリー）、学生部長（和田洋一）、保健体育部長（局長兼務）、図書館長（総長兼務）をおいた。そして事務局長兼トレジュアラ（千田民衛）があり、上記の人びとが「幹部職員」としてあがっている。

一九五〇年の幹部職員の表には多少の変化が見られる。総長事務室には外事部長のほか秘書課長（田中良一）、募金部長（藤井亨）が入っている。また教育局長には片桐女専校長に代って大学長の大塚節治となり、宗教部長とレジストラは前年通り。学生部長兼保健体育部長（松好貞夫）、補導課長（秋山哲治）、厚生課長（大江直吉）、体育課長（塚本篤之助、しむのすけ）、保健課長（安藤唯一）があがっている。また千田事務局長の下には九つの課・館・分室が配置されていた。それぞれの責任者は次の通りである。庶務課長（高橋米三）、人事課長（局長担当）、事業管理課長（同上兼務）、土地建物管理課長（購買課長兼務）、購買課長（宮沢鎮之）、会計課長（購買課長兼務）、厚生館長（総長兼務）、岩倉分室長（高校校長兼務）、女子分室長（山田健三）。事務局関係に兼務が多いのは、職制がまだ十分に定まっていなかったことと、一九五〇年当時の同志社がまだ比較的小さな学園であったことを示すものである。

新制大学への移行

一九四八年四月、新制の同志社大学が誕生した。旧制の同志社大学は一九五〇年三月末まで存続し、それまでの二年間には新旧の制度が併存した。新制大学は四年制であり、旧制から



『同志社大学カタログ』(1949年度)

の移行措置は次のように行われた。一九四八年四月を期して、旧制予科の一年生は新制大学一年次生に、予科二年生は新制の二年次生に、予科三年生は新制の三年次生に、そして旧制の一年次生は旧制のまま二年次生になった。このようにして一九五〇年三月には旧制の三年次生と新制の四年次生が同時に卒業した。新制大学は旧制大学よりも一年間在籍年数は長い、大学卒業の年齢は新制になることによって一年早くなったことになる。

教養学部

新制の同志社大学は神学部、文学部（英文学科、文化学科、社会学科）、法学部（法律学科、政治学科）、経済

学部、商学部、工学部（電気学科、機械学科、工業化学科）の六学部と、一年次生と二年次生の全員を包含する教養学部から成っていた。同志社では教養部と言わず、教養学部と呼んだ。そして児玉実用が初代の教養学部長に任命された。人数の点からすると教養学部がいちばんの大部隊であったことはもちろんである。その教授陣は旧予科、旧外専、旧経専、旧工専等の教員があてられた。入学試験は大学として一斉に行い、そのさい合格者が将来どの学部に進学するかは不問に付したのであった。これは教養学部の理念からして当然のことであったといえる。つまり、新入学生は先ず同志社の学生になるのであり、教養学部の二年間を通して大いに知的・学問的な視野を拡げ、その間に自分自身の適性を発見し、三年次に進むときに、最適の学部・学科を選ぶようにさせる、ということなのであった。

旧制大学と新制大学とは理念の上で相違があったことはあきらかである。旧制大学は学術の蘊奥を攻究することを目標にしていたが、新制大学の目的は学校教育法で「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、

深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させること」(第五二条)と規定されている。ここには現代社会における市民的教養という面も読みとることができるのであって、学術の深奥をきわめることは大学院にまかされることになるのであった。それ故当然のことながら、新制大学では「教養教育」が重視された。同志社大学の場合、その理念はカタログの中に次のように表現されていた。

大学教養教育の目的は、社会改善の為に各人が責任を分担すべき世界に於て人間の精神を建設的生活に向つて解放せんとするにある。すなわち、これは無智、偏見、迷信の桎梏から人間の精神を解放し、「有効適切な思索、思想の表現、伝達、比較判断、価値の識別」等の能力を養成せんとするものである。従つて、この教育は専攻教育ではなく、一般教育であつて、しかも同時に一般教育としての目的を一層有意義に達成せしめんが為に、特殊科目と併せて課するものである。学生は諸事実相互の關係を洞察し、進んでこれらの關係から新たな思想概念を形成し得る能力を養う為に、専攻科目に於て得られた諸事実をいかにして咀嚼消化すべきかを学び取らねばならぬ。このように教養教育は、知性の發達に刺戟と指針とを与えるばかりでなく、更に人間をして道德的責任を自覺せしめる為に、価値の評価と識別に對する能力を助成しなければならぬ。

かかる目的の為に、下記的一般教育を行う。(A)人文科学 (B)社会科学 (C)自然科学

日本及び同志社の特殊事情から考へて宗教及び英語に重点を置く。以上の各部門を修得するに當つては、次の諸項に熟達しなければならぬ。

1、自己研究

2、信賴するに足る諸種の典拠からいかにして資料を客觀的に發見蒐集し且つこれを体系化すべきかという活

用的な知識

3、正確適切な日本語を読み書き且つ話す能力

(Doshisha University Catalogue 1949~50)

この教養教育の理念は今日読み返してみても妥当さを失っていない。文章が翻訳くさいのは、原文が英語であるためで、その英文もカタログに出ている（ここに「自己研究」と訳されているのは英文で Self-education であり、「自己教育」が正しいと考えられる）。この理念は初代教務部長のケリーがアメリカの諸大学のカatalog類を参考にして立案したものである。

「日本及び同志社の特殊事情から考えて宗教及英語に重点を置く」、という表明もまた注目値する。このようなわけで、教養学部には四つの必修科目がおかれた。すなわち宗教学は第一次に、国語は一年次の半年間に、英語と体育は二年間にわたって必修するのである。これらの必修科目を二年間に完修し得ない時は専門学部の三年次に進級できないこととされた。

宗教学

一年次生の必修科目となった宗教学を、なぜ一層明確に「キリスト教(学)」という風に言わなかったのであろうか。それは学生に対しキリスト教を押しつける印象を与えたくないという配慮が働いたことと、今一つには、キリスト教神学のみならず、哲学、哲学史、社会倫理学等の専門家をこの必修科目のために動員する必要からして、「宗教学」という広い枠組にしておく方が得策だった、という理由にもよるのであった。

一九四九年度の宗教学は篠田^{しのだ}一人、民秋^{たみあき}重太郎、森安^{むなかた}忠之、棟方^{むなかた}文雄の四人が同一内容の約束で担当している。カタログの説明は次の如くである。「宗教は人間生命の躍動であり、人類文化史上の事実である。これを信ずると

否とに拘らず、十分なる理解を失ってはならぬ。本学年は四人の担当者が、それぞれ下記内容により七講義を進める予定である。一、序論 二、宗教学（宗教現象学、宗教哲学） 三、キリスト教史（原始キリスト教、中世キリスト教、宗教改革とプロテスタンティズム） 四、倫理学（キリスト教倫理学、キリスト教と社会問題） 五、結論。一九五〇年のカタログでも、担当者と講義内容は同一であるが、その記述に実存主義的な色合いが出てくる。「宗教信ずべきか否かは今これを問わない。しかし思惟の自己破綻は当然われわれをして宗教に赴かしめる。したがって宗教を理解せずしては、到底人間の実存を把握し得ないであろう」。

このようにして出発した同志社大学の宗教学は、学生数が増大し、担当者が変わるにつれていくらか変化をとげていった。キリスト教を中心とする宗教学であることに変わりはなかったが、そのアプローチの仕方はやがて担当者の裁量にまかされることになった。一九六九年の学園紛争を契機としてカリキュラムの再検討がなされたさいに、宗教学が形式化し、形骸化していることを批判する声が出た。その結果、経済学部、商学部、工学部機械工学科は宗教学を必修からはずして選択科目とした。しかし、これらの学部、学科においても、宗教学を進んで履修するよう奨励されていることをもつけ加えておかなくてはならない。殊に一九七二年に総合科目が開設されるようになってからは、講義内容に創意と工夫のあとがいちじるしくなり、学生の人気を集めている。一九七五年には「日本の近代化と同志社」「現代社会と宗教」「生と死」が、それぞれ四名ないし五名の共同担当者による科目として設置されている。総合科目に関するアンケートによれば、同志社に來た以上、キリスト教や新島襄についてもっと学びたい、と望む声がきわめて強いということである。また現在の宗教学についてはカタログに「本学におけるキリスト教主義教育の基礎たらんことを念願するものである」と宣言されているのである。

英語

宗教学と並んで英語が教養学部における重点科目であったことは誰しもうなづけるところである。「同志社の英語」は昔から喧伝されてきたし、「君は同志社出身だから英語ができるだろう」とは、多くの同志社卒業生が職場で受けた挨拶であった。

教養学部の英語には面白い工夫があった。大学は学年はじめにあたり、一、二次生全員を対象として英語の実力試験を課した。その合格者は一年次、二年次を問わず一挙にグレイドⅣに編入し、文学部の専門科目である英語関係の演習や英書講読をとることになる。不合格者はグレイドⅠ、グレイドⅡ、グレイドⅢの順に半年間ずつ履修し、二年次の後期には全員がグレイドⅣになることをめざすのである。グレイドⅡでも、よい成績をあげた学生は教師の推薦により、グレイドⅢをとばしてⅣに入ることができた。これは自主的な英語学習を刺激する方法であったといえよう。学生の英語の学力に個人差があることが事実であるとすれば、実力別にクラスを編成することも当然と考えられたのである。この制度はドイツ語とフランス語にも適用されたが、大多数の学生が大学に入ってはいじめて独仏語を学ぶという現状からして、英語の場合ほどには効果をあげえなかったようである。ともあれ、グレイド制は教養学部の廃止とともに消えてしまい、英語教育は次の段階に入るのであった。

国語

英語に劣らず興味深いのは、教養学部が日本語教育に重点を置こうとしたことであつた。それはすでに見たように、「正確適切な日本語を読み書き且つ話す能力」という表明にあらわれている。こうして国語が半年間の必修科目となった。一九四九年のカタログは国語教育の理念をきわめて有効かつ雄弁にかかげている（担当者は藤林広超、里井陸郎、秋山國三、小森啓助、南波浩、安永武人、波多野鹿之助の七名）。

国語を正確に読み書き話す能力を養うことはあらゆる教養生活の根柢である。これは言う迄もない所である

が、人間教育を主調とする新制大学に於ては特にこのことは切実に取りあげなければならない。又一つには純粹明瞭でいきいきとした国語を育てることはことに現今の様な混沌の過渡期に於る生活人の責任であり義務であるといふことが出来る。この際とかく等閑視され勝ちであった国語に対する愛と認識を深めることによってよりよき日本語の発達に資し度いといふのが本講座の一つの念願である。観察と把握、思索と表現、切り離すことの出来ない緊密なつながりを持ったこれらの能力を総合的に培う作業の上に色々な新しい試みが企てられるであらうが、特に實際上の運営に当っては表現力の涵養（作文）に重点を置き度いと思う。

教養学部为国語教育はこのような理想をにかけて出発した。しかし学生数の増大は担当者たちの時間とエネルギーをますます消費させることになり、せっかくの作文を通しての国語教育は必修からはずさざるをえなくなった。一九七五年現在では、一般教育科目の中に国語がおかれてはいるけれども、これは「現代日本語のもつさまざまな問題をとらえて、日本語の構造と特徴を明らかにし、認識・伝達・思考・創造の観点から、あるべき日本語の姿を考える」ものであって、もはや正確適切な日本語を書けるように訓練する科目ではないのである。「今頃の学生はからっきし表現力がなっていない。日本語が書けない」とは教授たちの常に口にする嘆きである。同志社大学における日本語教育を再編することが大学全体の問題であることは誰の目にも明らかであらう。

体育

新制大学の特色の一つは、体育を二年間にわたり必修科目としたことである。旧制大学には正課の体育がなかった。「軍事教練」がある程度体育の代りをしていたといえるかもしれない。大学は急に体育担当者が必要とそうになり、校友で往年のオリンピック大会出場選手であった塚本篤之助を教授に迎えた。一九四九年のカタログに塚本は書いている。「従来単なる技術の末に走り勝ちであった日本体育を是正し、文化の先駆

者である体育を理論的に且つ科学的に学究せしむると共に、スポーツの実践を通じて健全なる身体を造り、フェアプレーの精神を体得せしめて校祖新島先生の『良心を手腕に運用する人物』に完全に一致する人物を世に送るを目的として教育する。まことにほえましい、高遠な理想である。しかし初期の体育は制度的にも不備で、試行錯誤を繰返していた。晴ればスポーツをやり、雨が降れば講義が行われた。塚本は古代ギリシアにおけるオリンピック競技の発祥について続きものの講義をした。硬式野球の同立戦や、ボート・レースの対外試合を見にいったも実技の点数がもらえた。やがて体育に獺口彰と女子体育指導のために山下好子^{おとくちあきら}が加わり、体育理論の講義も実技も徐々に充実されるようになった。

教養学部¹の教授陣は一九四九年に総勢三九名(教授一七、助教授一九、専任講師三)であるが、そのうち英独仏中露語の担当者が二三名である。人文科学系列の担当者が一三名、社会科学系列ゼロ、自然科学系列三名というはなはだしいアンバランスが見られる。これは既述のように寄せ集められた陣容であつたという理由にもよる。結局一般教育の社会科学系列科目は法、経済、商学部のスタッフが担当する慣習がこの頃からでき、それが現在まで続いている。自然科学系列の陣容はその後徐々に、めざましく改善されるようになった。

教養学部の廃止

教養学部は一九五一年三月末に廃止され、僅か三年の短い生命を終つた。それには外部的な理由と内部的な理由の両方があつた。先ず外部的な理由は大塚が『回顧七十七年』に述べているように、大学基準協会から受けた批判である。新制大学としては同志社よりもおくれて出発した東京大学と国際基督教大学に教養学部ができ、両者は教養学部としての基準を作つてそれに準拠し、しかも四年間の課程を持つようになった。あとから出来たものが勝手に基準を作り、先に出発したものを規制するのは不合理であるが、残念ながら同志社には四年制の教養学部を作る財政的な余裕がなかつた。そこで当分は教養部と呼んで一時期をすごした

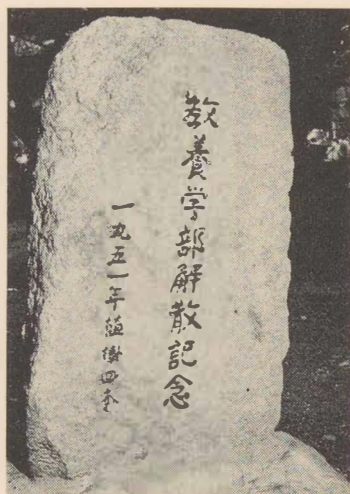
が、教養学部が大学設置審議会の審査をうけた正規の学部でないという解釈に立つ以上、その教員も学生も無籍者であるという奇妙な事態が生じた。

教養学部はまた内部的にもいくつかの問題をはらんでいた。第一は、三年次に進級するさいに、学生の希望に従って学部を選ばせると、特定の学部生が集中するという現象が起こった。経済学部進学希望者が特に多かった。やむをえず成績順に希望をかなえることにしたが、このために、希望の学部に入れない学生が続出した。こうして一九五一年からは、入学試験の願書に志望学部学科を明記させ、新生は最初から希望の学部に入学するようになったのである。

第二の理由は一般教育科目の性質にかかわるものであった。つまり、一般教育科目を一、二年次で履修しなければならぬ理由がはっきりしない。それは四年間にわたって履修する方が望ましい。逆に専門教育科目を一、二年次から始めて悪い理由はない。一般教育科目と専門教育科目を下位、上位に位置づける発想こそがおかしい、とい

った批判が出てきた。新制大学が全人的な教育をめざすのであれば、このことは一層尊重されなくてはならないと考えられた。

このような理由からして、同志社大学は一九五一年三月で教養学部を廃止し、従来の教養学部の教員は一斉に六つの学部に分割配属されることになった。教員ひとりひとりの専門と、受入れ学部の性格が勘案されたことはもちろんであるが、宗教学、外国語、体育等の担当者の場合は必ずしも特別な理由なしに各学部への所属がきめられた。ただし、宗教学担当者をすべて神学部に移



教養学部解散記念植樹の碑

すと神学部が大きくなりすぎる。外国語の教員全員を文学部に移すと、文学部は巨大な学部となる。また現行の六学部制では体育の教師の行き先がなくなる、といった複雑かつ困難な事情があったのである。要するに同志社は「横割り」を廃し、一九五一年四月から「縦割り」に移行したが、一般教育、外国語、保健体育の教科課程、人事、施設の計画、整備等について審議するために一般教育委員会が組織されることになった。委員長は大学長によって任命され、教務部長が幹事をつとめる。この委員会は六人の学部長、各学部の教務主任、各系列の代表によって構成され、学内において重要な役割をはたしてきた。初代の一般教育委員長は田畑忍学長の兼任であったが、その後柳川鉄之助、吉川秀造きつかわひでぞう委員長をへて、この委員会は徐々にその機能を充実させていった。

大学の拡充と学生の諸活動

創立七五周年の頃

一九五〇年は同志社創立七五周年に当り、新制大学の三年目、旧制大学終焉の年、新制の大学院発足の年、さらに大学短期大学部開設の年であった。六月末に湯浅総長が退陣し、七月一五日に神学館講堂での選挙の結果、大塚節治が当選、同志社は一月二日に総長就任式を挙行了。大塚はこれから一九六三年一月までの一三年間にわたって同志社総長の重責を担うことになる。一月二九日の創立七五周年記念日の一週間前に、新島襄の記念切手（八円）が発行される。この頃の各学部の状況を概観してみたい。

神学部は一九四七年、「大学令」による日本最初の独立の神学部となった。同志社神学部の立場を包括的に規定することはむずかしいが、取えてそれを試みるならば、ニュー・イングランドのピューリタニズムとして導入され、自由主義神学によって培養され、「弁証法神学の真理契機を学びながらも、それに埋没しないで、なお歴史的批判

的立場を重んじ、啓示の超越性と文化的思想的主体性との相関性を明らかにしようとする神学」(緒方純雄「学生生活の案内——一九六七」ということになるのであろう。長い歴史と伝統に立つ神学部がわが国のキリスト教界、学界、教育界、社会事業の方面においてはたした貢献は莫大なものがあつた。この神学部の長老教授は大塚であり、彼はキリスト教倫理学の分野で日本の学界を指導する学者であり、また文学部長、大学長、総長として同志社の指導者であつた。

一九四七年に神学部が独立したとき、その学部への発展を推進してきた有賀鉄太郎教授は初代の神学部長になつた。有賀が一年後に京都大学文学部からの招聘をうけたとき、神学部はこぞつて有賀の京大行きに反対した。このとき、湯浅総長はひとりこれを支持した。その理由は、京都大学からの招聘はめつたにないことであり、これは同志社教育の精神を京大にふきこむためのチャンスである。もし有賀が引受けなければ宗教学(キリスト教学)の椅子をカトリックの人が占めることになる、というのであつた。京大にうつつた後有賀は文学部長をつとめ、退職後神戸女学院の院長をつとめた。



記念切手

有賀が京大に転じたのち後任に迎えられたのが南大阪教会牧師の^{おおしも かくいち}大下角一であつた。大下は関西における旧組合教会の指導者であり、同志社の神学部と教会を結ぶための適任者だつた。神学者として新約学の^{とものもり}富森京次、教会史の^{ただかず}魚木忠一、旧約学の^{とある}山崎亨がいたが、富森と魚木は一九五四年に相ついで永眠し、神学部は少壮学者たちの時代に入った。

文学部には四人の指導的な教授がいた。宗教哲学の浜田与助、美学の^{そのらいせう}園頼三、社会福祉学の竹中勝男、英文学の上野直蔵である。浜



田中悦治

田中悦治は一九二七年に神学科の姉妹科としての哲学科が誕生したとき以来の哲学科の中心であり、園とともに文化学科設立を指導した。竹中は神学科社会事業学専攻の時代からの指導者で、戦後には学生から「排斥されながらも社会学科建設の中心人物となっていた」(『同志社九十年小史』)。竹中は一九五三年社会党から参議院議員に立候補して当選をはたし、同志社を去った。戦時中には文化学科の一専攻にまで縮小を余儀なくされた英文学科を戦後に再興したのは、ひとえに上野の力によるものであった。チョーサー学者の上野は狭い専門にとじこまることなく、アメリカ文学にも領域を拡大し、後進を指導した。彼は同志社におけるアメリカ研究所の生みの親であり、育ての親でもあった。

法学部は憲法学者田畑忍を中心として漸次陣容がととのえられていった。田畑は学内随一の論客であり、また戦後の大学行政を指導した。客員教授として法哲学の恒藤恭や民法の末川博を迎えるなどしてカリキュラムに生彩をそえた。行政法の高橋貞三が忍耐強く法学部をもりたて、これに哲学者の今井仙一、中国法制史の内田智雄が参加した。田畑をよく助けたのは政治学の岡本清一であった。

経済学部の初代学部長は日本経済史の松好貞夫であった。古参教授には統計学の宗藤圭三や、交通経済学の松山斌、復職した日本経済史の住谷悦治がいた。住谷は大塚のあと、一九六三年から一九七五年まで一二年間にわたって同志社総長をつとめる。絵をよくし、文学にも造詣深く、教養豊かな学者であった。労働法の松井七郎は当時、湯浅総長と有賞教授をのぞけば学内きっての国際人であった。

商学部には元大学長で銀行信託論を担当する黒川芳蔵がいた。この黒川と、経営学の岡村正人をのぞくと、教授陣の残りは他の大学の出身者ばかりであり、こうして全国の大学の出身者を集めてよい学部を建設することが商学

部のよい伝統となる礎が当時すでに築かれたのである。もと経専校長で商法担当の島本英夫、貿易業務論の原猛雄（たけお）らが当時の指導者だった。

工学部の初代学部長には同志社工専の校長であり、工学部発足に最も貢献した小山熊治郎が就任した。そのあとに迎えたのが、工学部昇格のときに顧問として協力した京都大学の堀場信吉（ほりばしんきち）であった。教授陣にはトルコ語やロシア語をはじめ、数カ国語かを話す応用力学の覚前睦夫（かくぜんむつお）や、音響工学の斎藤玄三雄（さいとうげんさん）も、満鉄で技師をつとめたことのあつた鉄道工学の星名泰（はしなしん）がいた。星名は上野のあと、一九六六年から一九六八年まで二年あまり大学長をつとめた。斎藤は学長代行、法人理事、そして秦孝治郎の急逝のち一九七四年から一九七八年まで学校法人同志社の理事長として貢献した。

博士号

同志社大学は旧制の学位規定によって、早くも一九二八年一月二日に文学博士、法学博士、経済学博士の学位を授与する資格を文部大臣から認可されていたが、どういうわけか、戦前にはその特権を行使しなかった。戦後になって同志社大学に対する学問的評価も高まり、また教授陣の評価をさらに高めるために、学位の審査権を活用すべきであるとの申し合わせがなされた。このようにして博士号取得の一番手となったのは経済学部の松好貞夫であつて、『新田の研究』に対し一九四九年四月一三日付で経済学博士号が授与された。松好に続き同年十一月二日のアセンブリー・アワーにおいて、法学部の田畑忍、経済学部の中西仁三の両教授に対し博士号の授与式が行われた。田畑は『憲法学の基本問題』によって法学博士号、中西は『金本位制度批判論』によって経済学博士号を得た。当時はアセンブリー・アワーを利用して、学生を含む聴衆の前ではなやかに授与式が行われる慣例であり、審査員の教授が論文内容を簡単に紹介し、新博士が挨拶の言葉をのべるようになっていた。続いて文学博士号を二人の神学部教授が獲得した。すなわち大塚節治が『キリスト教倫理学序説』により、また魚木忠一が

『キリスト教精神史』によってである。一九五〇年九月の『同志社タイムス』で大塚新総長は「教授中にも二十余名の博士をもつに至った」ことを報告している。

同志社大学では一九四九年七月、旧制大学令による神学部として神学博士の学位論文の審査権を得ていた。こうして一九五一年一〇月、神学部の富森京次が日本最初の神学博士号を獲得した。

上述のものはすべて旧制度による学位であるが、一九六〇年三月末に旧制大学令による大学が廃止されるに及んで、それ以後は新制の学位だけが出されることになった。

短期大学部

一九五〇年四月から修業年限二年（夜間）の同志社大学短期大学部が設置された。商経学科（人学定員一五〇名）、英語学科（一〇〇名）、工業学科（電気学専攻、五〇名）の三学科の編成で、事務室を徳照館一階に置いた。専任の短期大学部長と教員を配置し、京都市の内外から学生を集め、短大は独得の気風をもつ学校になった。学生の大部分は昼に職業をもつ人々であり、何人かの医師と看護婦、中学の教員、警察官、自衛隊員などがおり、日曜日に短大の運動会を催すなどの活気があった。学費の滞納が殆どなかったことが学生たちの自覚を証明している。当時、男女共学の夜間短期大学は再教育のための教育機関として十分にその存在理由を主張しえたのである。この頃の卒業生の中には現在の有力な京都府会議員や金融機関の幹部がいる。この短期大学部を四年制の第二部に昇格させる案を強力に推進したのは田畑忍学長であった。第二部は一九五四年四月に開設されたが、短期大学部の最後の卒業生を送り出したのは一九五七年三月であった。

夏期大学

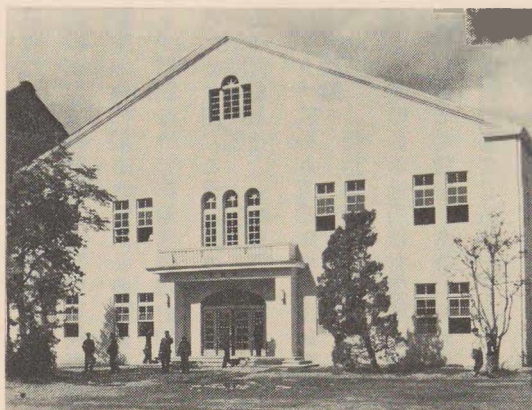
同志社の第一回目の夏期大学は一九四九年の夏、上野直蔵を夏期大学長として開設された。その目的は大学の学科目の一般公開であり、夏休みの期間を利用して十分な講義をすることをめざした。講義内容は一九五〇年の例をあげると英語、フランス語、ドイツ語、英米文学演習、英語会話といった語学系の内容を

はじめとして、各種の専門科目（欧米経済史、外国為替、会計学、教育心理学、現代哲学、宗教学概論、国語論等）があり、のちには教職課程科目、図書館学課程科目などを設置した。七月中旬から九月初旬までの六週間をあて、土曜と日曜は除き、毎日午前八時三〇分から正午までと、午後六時三〇分から八時一〇分まで、二回にわけて授業が行われた。合計六〇時間の講義時間で正規コースと同様に単位を与えた。教職課程は認定講習会として認可をうけ、社会人に門戸を開いて教員養成に貢献してきた。

しかし年々の大学拡充と学生数の増大により、夏期大学への教授陣の確保がだんだんむずかしくなったので、一九五七年には午前の部を廃止した。しかも学内正規コースの再履修者が夏期大学で単位をとる傾向が強くなり、その教室内の雰囲気からして一般市民は魅力を失っていった。一九六二年には受講者の資格を一般市民と本学第二部学生のみに限定した。一般社会人の聴講に便利のように配慮し、教養講座と実用講座の二部にわけたり、その内容も一週間ないし二週間で部分的に完結するなどの工夫をした。一九六三年には名称を「同志社大学夏期講座」にあらためたが、これはもはや夏期大学を名乗りえない状況であったことの表明であったといわざるをえない。一九七七年夏を最後として夏期講座はついに学園から姿を消したのであった。

有隣館

一九五〇年四月に同志社大学は一挙に約三〇〇〇名の新入生を迎えた。大量化時代の幕あけであった。折から創立七五周年の記念募金が行われ、三六〇〇万円が集められた。これによって一九四九年、現在の光塩館のある場所に有隣館という教室棟が竣工した。これはもと飛行機の格納庫であったといわれるが、一、二階あわせて七教室があり、同時に二〇〇〇名を収容できた。殊に有隣館二三番教室は当時大学の最大の教室であり、講演会場でもあった。この大教室はのちに、旧図書館の閲覧室としても長年にわたって役目を果たした。白色の有隣館は戦後の同志社大学の建築第一号であり、新制大学の発足当時もとてもよく使われた建物であった。



有隣館 (1949—1975)

商学部研究室 翌一九五〇年九月にはクラーク記念館の東に、アーモ
と同工館 スト館と道をへだてて、瀟洒な赤レンガ二階建の商学

部研究室が完成する。総工費三二〇万円で、その大部分は同志社経専の
父兄会と樹徳会（高等商業学校、経専、商学部の卒業生で組織する会）からの寄附
金によるものであった。個人研究室一七室以外に調査室、事務室、会議
室、書庫を備え、学内の研究室としては当時最高のものであった。しか
し商学部研究室はたちまち狭隘となり、のち明徳館五階に増設ののち、
新しい至誠館の四、五階に集められて今日に至っている。その結果旧商
学部研究室は現在文学部文化学科国文学専攻の研究室になっている。

同年一〇月には中学運動場の北側に同工館が竣工する。同工館は同志
社工学部から命名されたいしい。この工学部専用棟は二階建てで、何と
なく田舎の小学校の校舎を思わせるものであった。これは一九六四年に
博遠館が同じ場所に建てられるまで、工学部の最初の一五年間の教育と研究に活用されたのである。

クリスチャン 同志社のクリスチャンの学生たちがめざましい活動をし、学園の中に影響力を持っていたのは大
学生の活躍 体一九四八年から一九六五年頃にかけてのことであった。敗戦後の物質的窮乏の時期は、精神的

な探究の時代であった。同志社教会にも市内の各教会にも沢山の学生が日曜日の礼拝に出席し、続々と洗礼を受け
た。各教会でこの頃二〇人、三〇人が一挙に受洗することは珍しいことではなかった。一九四八年五月には新島の
母校であるアンドーヴァー・ニュートン神学校のダブニー (Frank Dabney) 校長が来学して栄光館で講演した。

賀川豊彦もこのころ一度ならず栄光館で伝道講演を試み、壇上にひざまづいて祈りをささげた。賀川は視力が衰えていたので黒板を使わず、白紙に墨汁で書いて説明した。一九四九年一月には、スイスの世界的な神学者ブルナー (Emil Brunner) が来学し同志社教会で「我は福音を恥とせず」と題して礼拝説教し、翌日は「技術と文明」と題して有隣館二三番教室で講演。水曜日には大学のチャペル・アセンブリー・アワーで「科学と宗教」について講演した。ブルナーは力強い英語で訴えるように語りかけ、有賀教授が通訳した。神学者と宣教師の両面を兼ね備えていたブルナーの講演は同志社の聴衆に非常な感銘を与えた。これはテレビが出現する直前の、講演が思想伝達的手段として十分に機能しえた最後の時期であったといえよう。このような雰囲気の中に育ったクリスチャンの学生たちは明るく、親切で、活動的であり、同志社の学生生活の中心であり、誇りであった。

福井地震

一九四八年六月二十八日の夕方、福井を中心として大地震が起こり、三〇〇〇人余りの死者が出た。当時日本基督教団社会部長であった、校友の田崎健作牧師から救援の学生を送ってほしいという要請が天下神学部長に届いた。そこで神学部嘱託助手であった飯清^{いひきよし}を隊長とする学生の救援隊を派遣することになった。飯は厚生学専攻を卒業したあと神学部に入りなおした人で、経験の豊かな、パイプ・オルガンもひける魅力的なリーダーであった。一九四八年は四学部で出発したばかりの新制大学、消滅直前の旧制大学以外に、外専、経専、工専、女専があり、各学校にYMCA、YWCA、学生宗教部などのキリスト教組織があった。しかし福井の震災のときには期せずしてみんなで手伝いに行こうという声があがり、救援隊が組織されて、まる二カ月間にわたる救援活動が行われたのであった。

その頃の社会通念からすると、男女学生が合宿するなどということは異例のことであった。女専の片桐哲校長は心配して、監督者もつけずに男女学生が行くことに反対した。そこで天下神学部長が保証するというかたちで、学



福井大地震の現地で救援活動中の学生たち

生の身分ではあったが「準職員」ともいえる飯を総責任者にしたのであった。

救援隊を派遣するに当り、先ず神学部 of 学生と全同志社宗教部（同志社各校の学生キリスト教■体の総称）は、聖歌隊の協力を得て二日間、市内各地に出かけて募金し、慰問品を集めてまわった。七月二日、現地でのような活動をする事が望まれているかを知るために三人の神学生、高橋勝、浅香敏雄、酒井哲雄が福井に派遣された。結論は日本基督教団社会部の委託事業として託児所とミルク・ステーションを開くことになった。福井の県立第一高等学校が宿舍となり、ここを中心に託児所がもうけられることになった。七月五日には英文学科の宣教師グラント（Robert H. Grant）教授と三人の神学生武間享次、速水敏彦、藤井文樹が福井につき、準備にとりかかった。断水のため、給水タンク一台をどうしても必要としたが、これは占領軍軍政部がまわしてくれた。グラント教授の努力があったと考えられる。送迎用にトラックも借りた。テナの準備もとのい、女子宿舍も完成したところで、七日に救援隊の第一陣が到着し、八日から活動を開始したのであった。

被災者たちが復興に全力をあげている間、子供たちをあずかるのであるから、そのために必要な道具が京都で集められていった。市内教会の協力のもとに紙芝居、人形芝居、絵本が借りられた。鉛筆、クレヨンなどの文具や紙

風船のようなおもちゃ、キャンプ生活に必要なランプ、蚊取線香なども買いととのえられた。特に食糧の乏しい時代であったので、参加者は各自で米を持参する必要があった。神学部宣教師ヤング (John G. Young) 教授をはじめとする同志社の宣教師たちは貴重な罐詰等を多量に寄贈した。また厚生館が医薬品の面で協力した。

福井における救援活動は託児所とミルク・ステーションのほか、現地教会への奉仕、巡回路傍伝道も行なった。また飯が学友会副委員長であり、武間享次、河崎洋子が中央委員であったことから、学友会本部の依頼をうけて被災した同志社関係者の慰問も行なった。八月二日から福井一高の授業が再開されるため、拠点を日本基督教団城之橋教会に移した。この救援隊のキャンプ生活は飯を責任者とする全くの学生自治による活動だった。参加者はのべ一五〇〇名にのぼり、この人々がその後の学園における一体化した宗教活動を推進する原動力となっていた。

福井救援が終って、秋分の日に天竜寺で修養会が開かれた。出席していた大下神学部長、有賀教授、神学生酒井哲雄、竹中正夫らが中心になって、今までの学生宗教部もYMCAも解散して、同志社学生クリスチャン・フェデレーション (DSCF) をつくろうということになった。DSCFは秋から活動を開始し、のちには機関誌を出すようになった。これがのちの基督教団体連盟へと発展したのである。

救援活動の参加者たちは、さらに基督者学生の活動の前進を願って一九四九年三月、琵琶湖畔の復活学園キャンパスサイトにおいて第一回のリーダーズ・トレーニング・キャンプを開いた。DSCFの学生を中心に、新しいリーダーたちも加わった。以後毎年三月にはこのキャンプが行われ、日常活動に合わせて、夏のキャンプ・リーダーが養成されたのであった。

夏には三期または人数により四期に分れて、各五〇名ほどのキャンパーが四日間ないし一週間寝食を共にし、学内外の講師を囲んで学び合い、語り合って、学生生活に忘れ得ない体験をもったのであった。食糧難のため地元農

家と契約し、三月にすでに夏の野菜などの調達をしなければならなかった。また交通は帝産バスと契約し、五〇人乗りの木炭車に燃料を積み込み、二時間あまりかかってキャンプ場へ赴いた。キャンプのためにキャンプ・ソング集を飯が編集したのもこの頃である。こうした体験をもとにして教会に導かれた人も多かったし、同志社カプブルも続々誕生した。福井救援隊の活躍は同志社の学生基督者の運動の開花であった。

シーベリーのサジェスチョンによってコーヒー・アワーをもうけたのもこの学生たちであった。コーヒー・アワーは同志社大学、女子大学の学生宗教部の共催で、月に一度、講師を囲んでコーヒーをのみながら語る集りである。場所としてはアーモスト館の広間が専ら用いられた。参加者は一〇円カンパするだけでよかった。大学の内外からいろんな講師が招かれ、特に「科学と宗教」といったようなテーマがよく選ばれた。讃美歌作者であり、パスカルの『パンセ』の翻訳者である由木康が講師だったこともある。講師に対する質問が歓迎された。そのうちに、チャペル・アセンブリー・アワーの講師がコーヒー・アワーの講師になるという傾向が生まれ、従ってコーヒー・アワーも水曜日の午後が選ばれることが多かった。

当時の京都のクリスマス・シーズンの名物となったキャンドルライト・サービスを企画したのもこの人たちであった。第一回は一九四九年一月二月であり、その功績はやはり飯清に帰せられる。大学や女子大の聖歌隊、中学・高校のホザナ・コーラス、女子中高の聖歌隊が白いガウンをつけ、ローソクを手にして勢揃いし、次々に降誕節の讃美歌を歌い、説教者がクリスマススのメッセージを伝え、聴衆は感銘に満たされて家路につく。この夜は栄光館は立錫の余地もなく、入場券の入手は至難のことになった。キリスト教主義のおかげで、同志社ほど全体として音楽に強い、音楽に満ちた学校はないといえるだろう。

同志社刷新運動

一九五〇年四月に同志社刷新運動が起こった。それは神学生を中心とする運動だった。事の起りは人事課長代理として勤務していた安藤某が公金二〇万円あまりを使いこみしていた事実の発覚だった。四月二四日の午前六時、六三名の有志が若王子の新島の墓前で催した早天祈禱会において天下神学部長は奨励を試み、熱情をこめて同志社革新の必要を説き、本部関係者の反キリスト者的、反良心的態度を指摘したのであった。これに呼応して、神学生の村山盛敦^{もりあつ}をはじめとする宗教団の有志は刷新運動を起こし、こうした公金不正消費事件のごとき不祥事がおこるのは、同志社が新島の精神を忘れて経営主義に走り、精神の墮落を招いたためであると断定した。キャンパス内に学生各団体による立看板のたぐいが立ちならんだ。こういうもりあがりの場合には、一挙にいろんな問題が付随して表面化する。村山が直接に攻撃したのは千田民衛事務局長だった(事実、安藤は千田による人事だった)が、この重要な時期に、国際基督教大学設立のために渡米している湯浅総長に対してまた非難の声があがった。その留守中、京福電鉄の社長で校友である石川芳次郎理事が総長事務取扱をつとめていたが、五月に参議院の全国区候補として立候補することになり、これまた総長事務取扱の地位を選挙に利用するものとして非難された。

一九五〇年の新入生は一挙に三〇〇名となり、しかも登録は教務部の窓口だけであつたから、その混雑は殺人^{すいけつ}的であつた。田畑法学部長は、レジストラ^{レジス}ーが全教務を統轄していることがよくないと批判した。温厚な女子中高校長末光信三^{すえみつ}でさえ、「現在の中央集権機構が同志社らしくない」(大塚『回顧七十七年』)と述べた。千田による機構の整備は、このように、多くの同志社人により中央集権化ととられ、同志社はすべからず経営主義から教育主義へとふみ出せ、というスローガンが叫ばれた。五月一七日には栄光館で学生大会が開かれ、千田事務局長の出席を求め、村山がその席上で千田を糾弾する場面も出現した。

石川は総長事務取扱をなげ出し、代って大塚大学長がそれに任命された。また渡米中の湯浅総長から同志社に辞表が届き、六月末をもって辞任がきまった。千田も同時に同志社を去ることになった。しかしこれですべてが解決したわけではなく、湯浅が任期をあと一年残して辞任したことについて、学生を善導しえなかった大学に責任があるということ、父兄の一部が大学を非難するに至った。矢面に立った大塚学長の苦悩はきびしかった。しかし刷新運動そのものは六月に入ってからようやく鎮静化に向かい、七月一〇日に村山は刷新運動委員会の解散を宣言した。

後日談になるが、はたしてこの運動の結果同志社を去った千田には不正があったのだろうか。厳密な会計監査の結果、安藤に対する監督不行届を別にとすると、千田個人には何の不正も見出されなかったことが理事会に報告された。その時一人の理事が、刷新運動の学生たちにぜひこのことを伝えるべきだと主張したが、大塚学長はどういうわけかその発言を無視してしまったといわれる。

政治活動 いわゆる六〇年安保闘争によってその名を世界中に知られることになった全国学生自治会連合（全

禁止の公示 学連が結成されたのは一九四八年九月一八日のことであった。しかし当時はまだ米軍による占領下であり、学生運動がこれからどのようなかたちを辿って発展していくかを占う材料はほとんどなかった。同志社理事会が一九四九年六月に、今から考えるとまさしくドン・キホーテ的な決定とも思われることをやったのも、あながち理解のできないことではないのである。それは「学内における政治的運動禁止の方針を公示すること」だった。その草案は七月二日に開かれた大学評議会で、大塚節治、高橋貞三、松好貞夫の三評議員で起草することになった。その結果、八月一五日に湯浅総長名で公示されたのは次のような文であった。

同志社はその歴史的伝統に鑑み日本民主化のため学生の政治教育に深い関心を持つものであるが教育機関とし

ては教育基本法第八条に準拠し学内に於ける政治的活動に関し左の規定を設け即日実施するから全学の協力を要請する

学内に於ては政治的活動又は運動をしないこと

政治的活動又は運動とは政党又は之に準ずるものに入党又はその支持を勧誘し或は党勢の拡張宣伝示威又はこれに反対するため個人又は団体によって公然となされる言行の一切をいう
従って

学内に於ては政党又はこれに準ずるものの名を使用する集会デモ放送掲示新聞印刷物配布等をしないこと

学内に於ては政党又は政党員の名に於て意見の公表をしないこと

なほ

学の内外を問わず政党又はこれに準ずるもの、支部又は細胞等に同志社の文字を使用することを許容しない
学外に於ける政治活動又は運動は自由であるが教職員並に学生の本分を逸脱するものであってはならない

これに対しいち早く抗議し、撤回を要求したのは日本共産党同志社細胞だった。「細胞」という言葉はただちに共産党を連想させた。次いで学友会はこの公示が憲法違反でないかどうか、最高裁判所に問合わせることにし、その結果が出るまで承服できない旨を総長あてに通告してきた。しかしそれから五日目の九月五日に、学友会は突如として、この学内政治活動に関する方針を支持する決議をしたのであった。この決議は学生運動がその後辿った線からふりかえってみると、驚くべき決議であったといわざるをえない。学友会は日共同志社細胞との間に一線を画していた。約一〇カ月たって、一九五〇年五月三十一日の学生大会において、政治運動禁止公示の撤廃が緊急提案の

一つとして議題にのぼった。しかし時間ぎれのためこれは他の一一項目とともに同志社刷新緊急対策委員会に採決を一任した。翌日開かれた同委員会において賛否両論がわき、長時間論議の末、一一対二で撤廃案を可決したのであった。

六月一二日に理事会が開かれ、学生大会および刷新委員会の決定事項について検討がなされた。問題の政治活動禁止公示についての結論は次の通りであった。これの撤廃は「学園を政争の舞台にすること」であり、「研究と勉学の妨害であるから絶対に撤廃できない」。大塚大学長兼総長事務取扱は、同志社刷新運動に関する父兄会の声明書に対する六月一六日付の回答の中で「なお学内政治活動の禁止はあくまで確保して学園内を政治闘争の場とならしめぬ覚悟でありますから御了承を願います」（『同志社学生新聞』第四七号）と述べている。では同志社大学は理事会のこの断乎とした決定を守りえたであろうか。答は否であった。新学長の登場がこのことを決定的にする。

学生新聞のヒ ユーマニズム 当時の『同志社学生新聞』は学生運動の動きを比較的的確に伝えている。また学生大会にしても公開の原則が守られ、反対者を締め出すというようなことは一切なかった。学生大会は過度の政治主義を避け、そこでは学問、教育の場としての同志社大学をいかにしてよくしていくかという立場に立った発想が顕著であった。「有能教授」の他大学への流出を嘆く声も読み取ることができる。しかし、学生新聞のヒューマニズムを最も感じさせるのは「病床の師を救え」と題する次のような論説である。

貞方（敏郎）教授（教養）は今病床にある。担当の英語学概論授業のブランクを気にしながら。

同志社卒業後十五年、変らぬ熱情をささげて来た同教授が、湿性肋膜炎で床にいたのはさる三月六日だった。三月は学校の忙しい時期であった。再度の入試、新学年の準備に頑健でなかった教授は、遂に自己の健康の限界

を越してしまったのであった。

しかしこうした問題は独り貞方教授だけのものではない。「過重の講義を受持たされて、その上薄給なんだから病床一步前の教授も多いよ」(T教授談)という言葉が、その間の事情を物語っている。同志社服務規定第十五条の最大限十二時間を、三時間オーバーした一週十五時間が貞方教授の場合なのであった。

病床の教授は、元気な顔で来年九月からは、講義に出られると思うと語りながら、医師から安静を言渡されても、十年間推敲を重ねた「英語学概論」出版の参考にと、「独乙語概論」を手にしていると伝えられる。肋膜炎は大体なおり、残された肺浸潤のため、現在は一時的小康を得ているから安静が必要だ(島田主治医談)、という病状にもかかわらず、学問への情熱を燃しつづけながら病いと闘う教授に対して、学生は学内革新に参加すると同様に、積極的な援助を示すべきだ。(中略)利害には目もくれずししとして研究を続ける、良心的学者は学生の手で守るべきではあるまいか。

(『同志社学生新聞』第四九号 一九五〇年一〇月一日)

大塚総長と 一九五〇年七月一五日、神学館講堂で財団法人同志社時代の最後を飾る、しかも全教職員の投票に

田畑学長 よる総長候補者選挙が行われ、大塚節治が当選した。大塚新総長は自分の同級生で京阪電鉄の重役

だった小林康三を千田の後任として事務局長に招聘した。大塚は一九四九年一月二八日以来大学長であったので、総長兼大学長として一九五二年三月末までつとめることになる。この時期の大塚以後は、総長と大学長を同時に兼ねた人は一人も出ていない。大学を定年退職した大塚は一九五二年四月からは総長の仕事に専念して一九六三年一月に至るのである。初代の新島を除けば大塚総長の一三年三カ月は同志社ではもっとも長く、その記録は簡



大塚節治

単には更新されまい。

一九五二年三月一〇日、同志社の理事会は田畑忍を大学長に任命することを決定する。田畑は以前にも短期間大学長を経験しているが、このたびの任命は学長としての田畑が真に面目を発揮する機会を与えた。この時の大学長任命は公選によらない学長任命の最終のケースとなったのである。田畑は個性の強い性格で、思うことをずばずばと言つてのけ、至るところで話題をまきおこした。今回の大学長としての期間は一九五四年六月末までの二年三カ月にすぎなかったが、それはドラマ的な事件に満ちていた。田畑は学部長たちと正面衝突することを恐れなかったばかりか、同志社内の中、高、高校長らと渡り合うこともしばしばあった。大塚総長はその調整に苦慮せざるをえなかった。

一九五三年五月にローズヴェルト元大統領夫人 (Mrs. Eleanor Roosevelt) が同志社を訪問し、アセンブリー・アワーで講演した。米国の著名人ということで、会場の栄光館は文字通り立錫の余地もなかった。ケリー教授が講演の通訳をした。ローズヴェルト夫人の歓迎会がアーモスト館で開かれたとき、小さな出来事が起こった。ホストの大塚総長の名刺にプレジデントとあり、田畑学長の名刺にも同じくプレジデントとあって、ローズヴェルト夫人がめんくらった。日本語では総長と大学長は明白に区別されているが、英語の呼び方をどうしたものか。同志社ではそのための委員会ができて、答申がなされ、総長をチャンセラー (Chancellor)、大学長の方はプレジデント (President) で統一することになった。

田畑学長は同志社内各学校の独立採算制を強く主張した。彼はまた「無処罰主義」を唱道して論議を呼んだ。人はそれを新島の教育方針に関する田畑の誤解から起こったものであると考えた。しかし彼は恐れることなく、横



田畑 忍

一九五二年六月の全学連追放事件は、不法な学生運動に対して大学が毅然とした態度で対処し、しかも成功をおさめた例として特筆に値いする。五月の学生大会は二〇〇名の出席者のもとに全学連加盟を決定していた。これを受けて全学連は六月二六、二七、二八日の三日間にわたり、第五回全国大会を同志社大学で開くことにきめた。田畑学長はこの大会を許さなかった。他に会場を用意し、そこで開くよう説得にあたった。しかし全学連には警察の手配中の人物もいたので、その説得をうけいれようとしなかった。こうして同志社はいかにしてこの無暴きまわる外部の圧力に対して自主性を貫くか、という問題に直面したのだった。

浜高等工業学校の校長として令名の高かった、先輩の鈴木達治の教育方針の中に無処罰主義を見出して、自分の主張をやめなかった。大塚は書いている。「ともかく無処罰主義は父兄や、校友を驚かし総長たる私を困らせたものである」(『回顧七十七年』)。当時破壊活動防止法案(敷防法)が国会に上程され、これが全国の学生運動の中心的課題であった。一九五二年六月に京都の各大学生は繰返し破防法反対のデモやストライキを敢行した。このとき田畑学長は非合法デモ反対のハンストを行なって「ハンスト学長」の異名を与えられた。

田畑学長の登場とともに、学内政治活動禁止の公示は一挙にその効力を失うに至った。田畑は政治学者の岡本清一を学生部長に任命し、「憲法が保障する全ての自由を諸君に与える」(大塚『回顧七十七年』)ことを宣言した。田畑は政治活動禁止公示は前総長が出したものだから、自分の与り知らぬことである、という立場を取った。何しろ憲法学者の主張であり、これには大塚総長としても引きさがらざるをえなくなったのである。このときの父兄や校友の憂慮は甚だしいものであったと大塚は先の著書に記している。

全学連追放

六月二六日に全学連の学生一〇〇名ばかりが学校に乗り込んで、中学チャペルを占領したため、中学は朝の礼拝行事ができなくなった。大学は緊急部長会を開いて対策をねった。警察力に頼って全学連を排除すべきかどうかが論議されたが、岡本学生部長はその策が賢明でないことを主張し、ついに二七、二八の両日の臨時休業措置をきめた。二七日には朝から正門を始め、学内の出入口を大学の手で封鎖した。しかし横手の通用門から、同志社大学の学生にまじって全学連代表者たちも入ってきた。

大塚総長、田畑学長らは有終館二階の理事会室の拡声機を通して休講措置の理由を説明し、学生たちに速やかに引揚げるよう要望した。また全学連の代表者には「われわれは諸君の良識を信じていたが、二十六日の諸君の態度は暴力で道義と礼儀を踏みにじったもので断じて許せない。きょうの大会は他で開いてほしい」と訴えた。さらに午前一〇時、田畑学長はなお立去らない約二〇〇〇人の学生に対し「暴力から同志社を守ろう」と呼びかけた。全学連はなぜ休講したのかと叫びながら「平和の歌」を歌おうとしたが、特に体育会系を中心とする同志社学生の同志社校歌の合唱にかき消されてしまった。こうして同大生と全学連の間に興奮した議論が高まり、あわや乱闘に入るかと見えたとき、田畑はマイクを通して「暴力はやめて下さい。民生会館へ行く全学連の学生のために途を開てあげなさい」と叫んだ。一時すぎ、学生部長の指導で約一五〇名の全学連学生は学生会館の前に移り、同志社の学生はまもなく解散した。このようにして全学連は同志社のキャンパス内で大会を開くことなく、学外に移っていった。これには学生部長が警察に交渉して、彼らが民生会館で集会を開いても手をつけない、という諒解をえて、これを全学連に保証したからであつた（大塚『回顧七十七年』）。

学生会館食堂問題

学生会館は戦前からの木造モルタル塗り二階建の建物で、現在の至誠館の位置にあり、一階が食堂になっていた。この食堂は校友の磯田義治（のちの校友会専務理事）が戦時中から学校の

認可を得て経営していた。戦後学生の自治意識が高まり、学生会館の食堂も自分たちで経営したい、少なくとも経営に参加したいという要求が出た。大学は一九五二年五月に学生会館契約解除履行を磯田あてに申し入れたが、彼はなかなか立ち退きに応じなかった。ついに同志社出身の三人の弁護士を中に入れて、一月末にあげわたすという調停案が磯田側から示されてきた。大塚総長はこの調停案を妥当と認めたのであったが、学生側は不服を示し、一〇月二九日朝、約二〇名の学生が総長と会見し、磯田に一カ月もの余裕を与えることについて抗議した。合意に至らないうちに所用で総長は退席し、あとはものわかれとなった。

同日午後三時ごろ学生は実力行使に入り、数十名の学生が食堂から食器類を本部理事会室に運びこみ始めた。田畑学長はこれをさえぎり、自らその皿を手にして運び返そうとして、有終館の石段のところで学生ともみ合った。田畑は側にいた学生部長にむかって「岡本君、あなたも運びなさい！」と命じた。この勢いにたじろいで、学生も一応食器の運び出しを中止した。

大塚はただちに別の場所に磯田を呼び、至急立ち退くよう勧告した。磯田は勧告をいれて一〇月末日にあげわたすことを確約した。学生側もこれを諒としてカレッジ・ソングを歌い、同志社チャーを三唱ののち、理事会室に運んだ食器を学生会館まで無事に運びかえして一段落がついた。この出来事について大塚は書いている、「総長在職十三年の間に、このように総長の言葉が文句なしに受けられ、問題が一挙に解決されたことはほかにない」（『回顧七十七年』）。ちなみに大学生生活協同組合（生協）が結成されたのは翌一九五三年の一月であり、学生の経営参加への意欲は生協運動の中に実現を見ることになった。

国際交流の復活

アーモスト大学 敗戦後の同志社にいちはやく暖かい友情の手をさしのべてきたのは、新島の母校アーモスト大学とアーモスト館 学であった。日米両国間の不幸な戦争を経験したあとで、このような悲劇を二度と繰返さない

ために、まず市民から市民へ、私立大学から私立大学へと友好の手をさしのべることを決意したアーモストのキング (Stanley King) 総長は、戦前に同志社に派遣していた学生代表の制度をさらに拡大し、一層太い絆とするために、アーモスト大学の理事会、教授会、学生、校友会を代表する人物を同志社に送ることを企画した。こうして日本生まれで、アーモスト大学一九四三年の卒業生であるオーテス・ケーリが選ばれた。ケーリは医学博士であるアリス夫人をつれて一九四七年九月、同志社に着任した。

ケーリはアーモスト館の館長として館に住み、一九四八年夏からは、九名の同志社大学学生を入寮させ、翌年一月に本部事務室が有終館に移ると寮生を二〇名程度にふやし、爾来三〇年間にわたり寮生の指導と育成にあたり、幾多の有為の人材を世に送ったのであった。彼が新制大学の初代教務部長として活躍したことにはすでに触れた。文学部で「現代欧米文明の諸相」を担当、さらに文化史学専攻の教授として「米国文化史」を教えて今日に至っている。日本語による数冊の著書もあり、日本人にアメリカを、アメリカ人に日本を理解させる絶妙な才能を備えている。

一九五二年五月二日、三日の両日にわたり、アーモスト館は開館二〇周年の記念行事を催した。二日にはまず主賓として迎えた東京大学の総長矢内原忠雄やないはらただおの「自由と独立」と題する講演を栄光館で聞いた。聴衆二〇〇名余。

矢内原は醇々と教えさとするような話しぶり、信仰の人、真理探究者にふさわしい内容であった。彼がアーモスト大学の卒業生内村鑑三の高弟であることはよく知られている。彼の来学は皇居前広場におけるメーデーの火災びん事件の翌日のことであり、後事を代理に托して同志社訪問の約束をはたしたのであった。同日の午後、寮生大下尚一（いち）の司会で矢内原を囲むコーヒー・アワーがアーモスト館広間で催された。矢内原は学生たちの質問に答えて、自叙伝的な話を披露し、内村との出会いについても触れた。しかし質問の学生が要領を得ないでだらだらと自説を展開したときには、「君の意見を私や皆にむかつて講演するような話し方はいけない。座談会には座談会の礼儀がある」と、きびしくたしなめた。

翌三日の午後には大塚総長、京都市長高山義三（たかやまぎさう）、アーモスト大学校友のマックリーン（Donald H. McLean, Jr. ジョン・D・ロックフェラー三世の顧問で、の新島の母校フィリップス・アカデミーの理事長）、ホール教授（John W. Hall のちイェール大学日本史教授、同志社大学名誉文化博士）、東北大学長高橋里美（さとみ）をはじめ多数の来賓を迎えて、広間で記念式典をあげた。アーモスト大学の一八八九年卒業生で日米協会会長だった樺山愛輔（かほやまあいすけ）の回顧談もあった。朝日新聞は一ページ分をさいてアーモストと同志社の長い友好関係の物語をのせた。

一九五三年一月にアーモスト大学の総長コール（Charles W. Cole）が知的交流計画の第一陣として来日し、二カ月にわたり日本各地を視察し、何度かの学術講演を試みた。二月七日にアーモスト館で開かれた関西経済史学会でコールはフランスの重商主義者コルベールについて講演した。列席した大塚総長はその感想を「講演後の質疑応答快刀乱麻を断つ興趣あり、コール博士の頭脳の明敏さと学殖の深きを感じしめた」と記している（『回顧七十七年』）。

コールは現職のアーモスト大学総長として同志社を公式に訪問したはじめての人だった。彼は一九四七年以来



チャールズ W. コール

の、ケリーをアームスト大学代表として同志社に派遣する計画の暖かい支持者であり責任者であっただけでなく、同志社とアームストの親善のために多くの貢献をした恩人である。同志社訪問にさいしコールは、アームストが保存している英文の新島書簡のファクシミリを製本して贈った。経済史家としての彼は西陣の家内工業システムに目をみはり、ここにはヨーロッパの産業革命に関連して多くの事柄を経済史的に解明できる鍵があることを指摘した。この示唆はのちに同志社大学人文科学研究所でテーマの一つとしてとりあげられて、成果をあげたのであった。

帰米後コールはさっそく日本人のために二つの奨学金を設立した。新島スカラシップと内村スカラシップである。後者は東京を中心として内村の無教会系の学生たちから選ばれ、前者は同志社の学生、教職員、卒業生の中から選ばれ、それぞれアームスト大学に二年間留学する。最初の新島スカララーの名譽を担ったのは経済学部助手の榎原^{さかきばら}胖夫^{すけお}（のち教授、経済学部長で、彼は一九五四年秋からアームストに学び、M・A・を取得した。兄玉実英^{とぎたまさひで}（のち同志社女子大教授）、藤倉^{とうくら}皓一郎^{こういちろう}（のち法学部教授、法学部長）、渋谷^{しほや}昭彦^{あきひこ}（のち経済学部助教授）、横本^{よこもと}勝^{かつ}（のち同志社高校教諭）らが同じ奨学金で留学した。近年アームスト大学が男女共学を実施するようになってからは、二人の女子学生が新島スカララーに選ばれている。

一九五八年三月、同志社はコール総長の同志社に対する多大の功績を認めて、同志社大学初の名譽文化博士号を贈った。コールは一九六〇年まで一四年間総長をつとめた。ケネディー政権のもとでは学者大使の一人として南米のチリーに派遣された。

次に「アームスト同志社フェローシップ」に触れておきたい。これは一九五八年から始まった制度で、或る意味

アーモスト同志社フェロー

Douglas M. Williams	1958-59
D. Bruce Hanson	1959-60
Giles B. Gunn	1960-61
Donald B. Adams	1962-63
John H. Miller	1963-64
John M. Newmann	1964-65
Richard T. Freeman	1965-66
J. Christopher Parel	1966-67
Perry L. Pickert	1967-68
Stephen H. Sumida	1968-69
David A. Heinlein	1969-70
Edward J. Lincoln	1971-72
Gregory J. Orr	1972-73
Mark and Ann B. Beckwith	1973-75
Charles W. Monheim	1975-76
William I. Schwartz	1976-77
Jeffrey E. Fine	1977-78
Bruce Brodigan	1978-79

社に迎えた。フェローはアーモスト館に住居を与えられて、寮生たちと寝食を共にし、寮のプログラムに参加する。大学で英会話を二講時ないし三講時教え、商業高校があった頃にはそこでも一晚英会話を担当した。一年間の同志社での経験は時としてその人の人生を決定することになる。何人かはすでに日本研究者として活躍している。

カールトン大学

アーモスト大学について同志社と密接な関係を保ってきたのは、米国中西部の名門校であるカールトン大学(Carlton College)である。カールトンと同志社の結びつきには偶然の要素が強かったように思われる。カールトンの学生たち是一九〇〇年頃から若い卒業生を中国での教育活動支援のために派

で戦前の学生代表制度の延長とみなすこともできる。フェローは毎年一名、館長のアシスタントとして送られてくる。このフェローの選考については、はじめのうちはアーモスト大学卒業後どこかの神学校で勉強中の男子をいわばインターン式に日本に一年間派遣するという点に重点が置かれていた。そこには日本人の物の考え方、異教の文化と社会を十分に見聞した上で立派な牧師になってほしいという念願がこめられていた。ところで神学の関係者は初代のウィリアムズとその後継者二人だけだった。現在のプロディガンまで一八代のフェローを同志

カールトン大学代表

Milton L. Bierman	1953-55
Paul V. Griesy	1955-56
Nancy E. Wintsh	1957-59
Dorothy A. Wilson	1959-61
Priscilla P. Richel	1961-64
Nancy L. Staab	1964-66
Marilyn Garbisch	1966-67
Nancy Hazard	1967-68
Ann Cross	1968-69
Jody A. Hymes	1969-71

遣しはじめたのであった。この計画の財政面を支持したのは学生であり、事務的な面でアメリカン・ボードが世話をしてきた。一九四九年、中国共産党が中国本土の統一を達成したため、このプログラムを中国で継続することは不可能になった。たまたま一九五三年に同志社高校で教えていた若い宣教師が任期途中で日本を去ることになったので、高校はその後任を急に探さなくてはならなくなった。これをケリー教授が、アメリカン・ボードの東洋部長だった叔母のミス・ケリー (Alice E. Cary) に連絡し、カールトンの東洋派遣予定者だったビアマンを同志社高校にまわすことで解決したのであった。彼は二年間にわたって高校で英会話を教えた。ビアマンとその次のグリーシー (Paul V. Griesy) はともに岩倉の寮に住み、若い高校生たちと生活を共にした。グリーシーは帰国後コロ

ビア大学で研究を続け、アメリカにある資料を駆使し、特にアメリカン・ボードと同志社の関係に光をあてつつ、初期の同志社の形成を主題とする博士論文を書いた。

三代目のミス・ウィンチ以降は代表が女性ばかりになった。男子寮たる岩倉の寮に住むことができなくなり、同志社は新島会館の一部を割愛してカールトン寮とし、カールトン代表を大学の女子学生若干名とともに住まわすことにした。一九六五年五月、カールトン寮は女子特殊寮として寺町通の小家屋に移った。ところでこの代表派遣にはアメリカン・ボードが介在していたため、カールトン代表というよりは宣教師として扱われるという点に問題が残った。今一つの問題は、せっかく同志社に派遣されてくる以上は、アーモストのフェローと同様、教室においても年齢的に一層近い大学生と接触したいという無理からぬ希望であった。

ミス・リッチェルがこの要望を大塚総長と上野大学長に伝えた。そこで大学はカールトン代表にも大学における英会話担当を依頼した。神学部のリイド (Gwilym G. Lloyd)、文学部の大下尚一、岩山次郎の諸教授が夫人ともどもにカールトン委員会を構成し、指導に当たったのであったが、一九六九年の大学紛争で寮は内部崩壊をおこし、またカールトン大学もミス・ハイムズを最後として代表派遣を打切ることになった。

ハーヴァード大学

国際交流の観点からすると、同志社大学とハーヴァード大学の関係を逸することはできない。新島襄の最初の大学創設のためのアピール(二八八四年五月の「明治専門学校設立旨趣」)の中でハーヴァードのイメージは特に輝かしいものであり、彼はハーヴァードの驚くべき教員数(二一〇名)、蔵書数(一三万四〇〇〇冊)、基金(一四八五万ドル)をあげている。専門学校令による大学の英文科を背負って立つべく嘱望された浦口文治は、教授に任職された一九一三年から二年あまりハーヴァード大学に留学し、帰朝の上で英文科の主任になった。彼の精緻な学問が学風として確立される前に「原田騒動」にまきこまれ、一九一八年に同志社を去ったことは惜しんで余りあることであった。第一次世界大戦以前に浦口以外にもハーヴァードに学んだ同志社卒業生はいたが、その数はイェール大学に学んだ人々(たとえば森田久萬人、市原盛宏、湯浅吉郎、原田助は新島の永眠した一八九〇年にともにイェールに留学中だった)の数にはとうてい及ばないであろう。イェール出身のラーネッド教授の学殖のことを思い合すなら、初期の同志社は断然イェール系であったといわざるをえない。

ところで第二次世界大戦後にハーヴァード大学は同志社に特別な友情の手をさしのべるようになった。一九五三年三月、ハーヴァード燕京研究所 (Harvard-Yenching Institute) の所長であり、ハーヴァードにおける東洋学の教授であったエリセーエフ (Serge Eliseeff) 博士が同志社に大塚総長を訪問した。彼はロシアの富豪の息子として生まれ、東京帝国大学に留学、芭蕉を研究して優等で卒業し、革命後はバリーに亡命した学者で、のちハーヴァー

ド大学に招かれて東洋学の基礎を築いた人であった。総長は松井七郎、文化史の石田一良の両教授をまじえて欲談ののち、求めに応じてエリセーエフを図書館に案内させた。この結果、六月になって七〇〇〇ドルの寄附金がハーヴァード燕京研究所から同志社に送られてきた。三〇〇〇ドルは教師費、四〇〇〇ドルは書籍費にという指定であった。この援助金は京都の仏教系大学、天理大学、関西大学等が目をつけて、エリセーエフを欲待して獲得しようとしたらしいが、同志社は図書館を見せただけで貰うことになったという。この理由の一つは同志社がキリスト教主義の大学であったことによるものと考えられる。元来ハーヴァード燕京財団はアルミニウムの開発に成功したホール (Charles Hall) が寄贈した基金であり、北京の燕京大学というキリスト教主義大学の教育・研究を助けることと、ハーヴァード大学の東洋学を助けることを目的としていた。

ハーヴァード燕京研究所の助成金は一九五三年から五七年までの四年間にわたり、毎年七〇〇〇ドルずつ、総計二万八〇〇〇ドルが送られてきた。同志社ではこれによって「ハーヴァード燕京東方文化講座」を設置し、法学部の中国法制史家である内田智雄教授が中心となって東洋学の著名な学者による公開講座を開催し、その成果を一四冊の東方文化講座シリーズとして刊行した。またこの助成金で購入した図書は四〇〇〇冊以上におよぶ。現在この貴重な図書は同志社大学人文科学研究所に保管されている。

同志社大学人文科学研究所もまたハーヴァード燕京研究所から恩恵を蒙った。『熊本バンドの研究』をはじめとして数々の成果をあげてきたキリスト教社会問題研究会(通称C・S)は一九五九年七月から一九七三年六月までの一四年間にわたり、総額一二万六三五〇ドルの研究助成金を受けたのであった。

これに加えてハーヴァード燕京研究所は一九五四年から現在まで、同志社の九名の教員に対し、訪問研究員計画によるハーヴァード大学への一年ないし二年間にわたる研究留学を可能にしてくれた。これは燕京大学への援助の

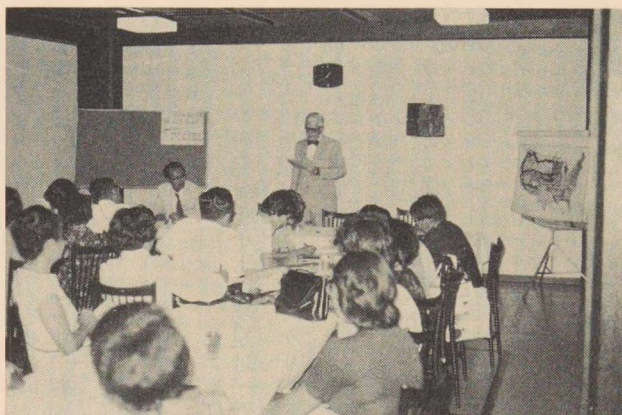
道を断たれたのち、同研究所が日本、韓国、台湾、香港等のいくつかの有力大学に対し招待状を送り、その学長の推薦する四〇歳以下の教員を渡航費と奨学金を与えて留学させ、ハーヴァード大学の設備を利用させ、どの科目でも聴講させる制度である。この計画に基づきハーヴァード大学に赴いたのは金山正信（かねのまさのぶ）（法）、木村俊夫（文）、大下尚一（文）、田口芳弘（よひろ）（経）、高橋悠（あゆ）（法）、浅香正（ただし）（文）、北垣宗治（ひがねはる）（文）、岡田妙（たけ）（経）、釜田泰介（たいすけ）（法）の諸教授であつた。

京都アメリカ研究 毎年夏になると二週間にわたるアメリカ研究夏期セミナーが私学会館で開かれ、日本全国の

夏期セミナー みならず、韓国、台湾、オーストラリア、その他からの研究者がこれに参加する。アメリカ以外の地域でのアメリカ研究セミナーといえば、オーストラリアのザルツブルク・セミナーと並び称せられるものがわが京都セミナーであり、その名声は世界中にきこえている。そしてこのセミナーの三〇年近い歴史の重荷の大部分を同志社が担ってきた。

アメリカ研究セミナーの発足は一九五一年にさかのぼり、一九七八年で二七回目を数える。一九五一年の第一回セミナーは東京におけるセミナーの続篇として八月一日から二六日まで京都大学・同志社大学の協力により京大で開かれた。これはロックフェラー財団の援助により、東京大学とスタンフォード大学が協力した。東大から何人かの委員が講師に随行し、また東京からの参加者も少なくなかった。関西地区からも教授クラスの人々が中心となり、五部門（政治学、経済学、哲学、歴史、文学）で一〇六名が受講した。

第二回のセミナーは一九五二年八月に、一七日間のセッションを五部門にわたって開いた。前年の講師だったイリノイ大学のデンジャーフィールド（Royden Dangerfield）教授の尽力により、セミナーは京大と同大、イリノイ大三者の共催となり、ロックフェラー財団の援助を再び受けた。この年からは大学院学生の参加も認められるようになった。



京都アメリカ研究夏期セミナー

その後、京都におけるアメリカ研究セミナーを長期的ヴィジョンのもとに確立しようとする計画がねられ、準備のために一年間休んで、一九五四年から実施することになった。これは京都アメリカ研究セミナーとして年間を通じて常置された組織で、図書室を備えた事務局を京大の楽友会館におき、専任の事務員をおいた。一九五四年の第三回から一九五七年の第六回にかけて、京大と同大の教師陣から何人かが講師をつとめた。同志社からはグラント(文学、教育学)、ハブル(Lindley W. Hubbell、文学)、高橋貞三(行政法)、島本英夫(法学)、今西正雄(経済学)、松井七郎(経済学)の諸教授であって、日本人の講師陣は当然のことながら日本語で講義した。現在アメリカの国会図書館長をつとめているブアスティン(Daniel J. Boorstin)博士がセミナーで政治学を担当したのは一九五七年のことであった。

はじめの頃会場は京大と同大の教室が交互に使用され、会場校の学長がセミナーの委員長をつとめた。両大学から委員が出ていたが、同志社がセミナーの委員長をつとめた。指導的な役割をはたしてきた。やがてセミナーにはひとつのパターンが定着するようになる。それは七月中旬から月末にかけて、二週間一〇セッション、五部門のセミナーを開き、受講者を一〇〇名とする、ということである。同志社が会場校のとき寧静館(一九五八年)や弘風館(一九六〇年)が使われたが、一九六三年に冷房のきく新神学館が完成して以来、もっぱらここが会場として喜ばれ、一九六八年に及ん

だ。また宿泊施設としてしばしば岩倉の大成寮が用いられたが、一九六九年の大学紛争以来、会場は私学会館にうつされ、大成寮の使用は不可能となった。

日本にくるフルブライト交換教授の中から適当な学者を選ぶこともできるようになり、おかげで質的にもセミナーは充実していった。毎年必ず開かれる文学の部門を例にあげると、E. H. Cady, J. E. Miller, Jr., C. R. Anderson, N. H. Pearson, Daniel Aaron, Ihab Hassan, Leslie Fiedler, R. W. B. Lewis といった豪華な顔ぶれを招くことができたのである。

一九六二年以来会場の関係もあって、開催事務を担当してきた同志社大学は、アメリカ研究所の実行委員長がセミナーの実行委員長となり、研究所の図書、施設を夏期セミナーに供し、研究所と教務部の提携によってセミナーの実施に当たった。長期的な事業に必要な事務局の確立と、教員、事務職員の協力があつたことも幸いであつた。

国内外の各種財団からの援助がふえるにつれて、アジア諸国からの参加者に滞在費や旅費を補助することもできるようになった。オブザーバーを含めて一二〇名をこえる受講者がオーストラリア、香港、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、フィリピン、台湾、タイ、ヴェトナムから参加した。また米国以外からも講師を招くことができるようになり、イギリス、フランス、ノルウェーから講師を招聘した。このように京都セミナーはアメリカ研究の国際交流にも貢献するようになった。

セミナーでは午前中に講義が行われる。それに討論が加わることもある。文学以外の部門では通訳がつけられる。講義の部分は一九六二年以来すべてテープにおさめられており、受講者は他部門の講義をテープで聞くことができるようになっていた。また随時フォーラムが開かれ、講師と受講者と委員数名の討論も人気を呼んできた。一九五二年ごろでは受講生の中に留学経験者は皆無であつたが、現在ではその数が留学未経験者の数を上まわること

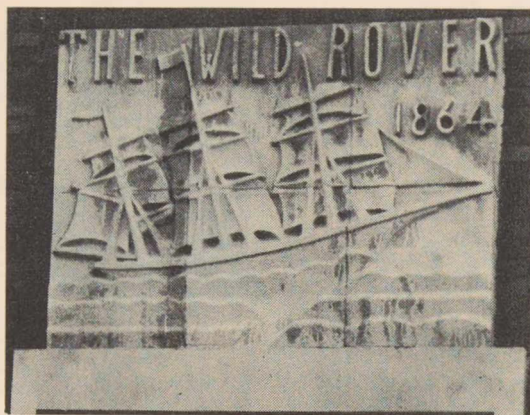
も珍しくなく、それだけ内容の水準も高まっている。

京都大学と同志社大学がこれほど協力しあって、この京都アメリカ研究夏期セミナーを存続・発展させてきたことは、両大学の関係の中でも異例のことであろうし、日本の国立・私立大学の歴史の中でも稀な事例であろう。多くの同志社人がこのセミナーの発展に献身してきたことはいうまでもない。特に上野直蔵、オーテス・ケリー、伊藤規矩治、木村俊夫、田口芳弘、大下尚一、松山信直の貢献は莫大なものであったことを付記しておく。

巨大化と質的充実

明德館

田畑学長のときに完成した明德館は今出川キャンパスの偉観である。一九五二年二月に第一期工事（西半分）が完了。従来二階建程度の校舎しかなかった同志社における最初の鉄筋コンクリート大建築で、塔屋入口の上には新島が国禁を犯して渡米したときの帆船ワイルド・ローヴァー号のレリーフがかかげられた。また中央寄りの壁面には *veritas liberabit vos*（真理はあなたがたに自由を得させるであろう）というラテン語のモットーがはめこまれた。このような外壁のモットーは同志社にあっては最初にして最後のことかもしれない。明德館と命名したのは大塚総長で、「大学の道は明德を明らかにするにあり」から出ている。明德館には一階に二つの教室、二階に一つの大教室があり、うち二つは同志社初の階段教室であって、法学部、経済学部、商学部等の大講義がよくここで行われた。東半分の第二期工事が終わったのは一九五四年三月であった。一階に小教室と事務所、二、三、四階に法・経の研究室が作られた。のちに五階が増設され、商学部の研究室がおかれた。地下には散髪屋、靴屋、および生協の売店や食堂ができた。その一階に学生部が移ってきたのは一九五六年秋ごろのことであった。何事も



明徳館壁面レリーフ（ワイルド・ローヴァー号）

はじめてづくめの明徳館ではエレベーターも然りであり、しかも階によって出口の向きが異なるという風変わりなものであった。明徳館が大学の象徴的な建物であることは、その前の広場が「M前広場」と呼ばれ、学生が催すキャンパス内での重要な屋外集会はほとんどここで行われることによって明らかである。

唐崎ハウス

一九五二年一二月に同志社理事会は天津市唐崎にあるヴァン・ヴァスト邸を買収することにきめた。この資金はハワイを中心とする米国のキリスト者から贈られたものである。翌年五月から「同志社唐崎ハウス」として使用可能となり、同志社の学生、生徒にキリスト教的訓練を施すために用いられた。これらの使用に支障をきたさぬ限り、教会等のキリスト教団体にも開放したが、キリスト教的要素をもたない会合には使用を認めていない。木造二階建て一〇畳六室があり、宿泊も可能であって、湖との間に広い原っぱがあり、キリスト教の会合にさかんに利用されてきた。

大下角一学長

田畑学長は一九五四年三月に個人的な理由から理事会に辞表を出した。このため学友会中央委員の幹部四名が若王子の新島の墓前でハンストにはいり、辞任の撤回を迫った。理事会も辞任を再考するよう促し、投票まで行って留任を要請したが、田畑の辞意は堅く、理事会はついにこれを承認し、次期大学長を選挙することになった。教職員・学生参加による初の大学長選挙が行われたのは六月であって、第三次選挙の結果、神学部の大下角一が当選した。

大下はハワイ生まれの二世で、シカゴ大学で学位を取った。彼は日本



角一 大下

に帰化し、戦後の神学部に活を入れた。その説教とアピールの力強さは格別のものがあつた。下駄ばきで旧此春寮の風呂に入りに行く大下を多くの神学生たちはオヤジと呼んで敬愛した。彼は一九五四年から二期六年間にわたって大学長をつとめたが、これは戦後の学長としては最も長い期間にわたる学長だった。

大下は前任者ほど性急ではなかったが、やはり学生数をふやして財政基盤を打立てる方針をとり、入学試験の地方試験を実施したり、特別奨学金の制度を作ったりと、名古屋で試験することの意味がなくなる、といった類である。特別奨学金は入試得点が上位の場合、各学部ごとに若干名ずつ、四年間にわたって学費相当額を支給する制度であつて、この恩恵に浴した者の数は少なくない。しかし他大学を併願する者の数がふえるにつれて、特別奨学金辞退者が続出する現象が生じ、やがて廃止されることになった。一九五六年四月、大学の学生数はついに一万名を突破した。

留学ブーム

戦前には「洋行」というのんびりした言葉が用いられたが、戦後は「留学」が通り言葉となつた。

しかも、伝統的な国際主義のせい、同志社大学は常に教員の留学に対して寛大であつた。すなわち制度としての留学は一年間を限度として許可されるのであるが、二年目の延長は容易に許されてきたし、その二年間には期末・臨時手当等を含めて給料の一切が支払われるのである。戦後の留学が俄然活発化してくるのは一九五四年のことであつて、八月二二日に横浜を出帆した氷川丸^{ひかわ}には、訪問教授として母校ヴァージニア大学に出張する商学部原猛雄教授、同じく訪問教授として母校太平洋神学校に赴く神学部山崎亨教授、第一回新島スカラールとしてアーモスト大学に赴く経済学部の榊原胖夫助手がのつていたほか、女子大学の中瀬古和教授^{なかせこ}（音楽、イェール

大学へ)、加藤雅子講師(音楽、レバノンバレー大学へ)、香里高校の西邨辰三郎教諭(宗教教育、デイトンの同胞教会神学校へ)、高山修教諭(英文学、イエール大学へ)、校友の田中伊佐久、上野光隆の両牧師も船客だった。別の船で法学部の金山正信教授もハーヴァード大学に赴いた。一九五四年当時はいくら円を積んでも簡単にはドルに換えることのできない時代であり、米国からの招聘か奨学金の援助をもらうことなしには海外渡航はきわめて困難だった。留学といえは新聞に名前や写真がのるほどのことであり、ジェット飛行機の時代はまだこれから先のことであった。

翌一九五五年になってようやく同志社大学の在外研究員制度が復活する。最初の在外研究員は田畑忍、宗藤圭三の両教授で、ヨーロッパおよびアメリカを視察した。これ以来在外研究費は毎年予算化され、研究費の額、人数も徐々に増加した。一九六二年以降は四五歳以下の若手の講師、助教授に対する二〇〇万円の在外研究費が設けられるようになった。

学生健康保険組合

一九七六年現在で学生健康保険組合をもつのは私立大学一四校であるが、その中でまっ先にこの制度を作ったのは同志社大学であり、それは学生の自発的な相互扶助の運動として始まったものであった。これは朝鮮戦争の激動期を背景として、京都大学の「天皇事件」(一九五一年)、「火災びん事件」(一九五二年)、「荒神橋事件」(一九五三年)、「砂川基地闘争」(一九五五年)等が起ったことに淵源があるといえる。これらの事件に関連して逮捕された学生を救済するための救援会が生まれたのであったが、それが次第に輪を拡げて、困っている学生はお互いに助け合っているという、幅の広い生活擁護の互助組織に発展していった。この互助会は古本の交換会を催したり、結核の学生の見舞をしたりしていたが、そのような運動の中から結核の療養者グループと協力して、学生自らの手で学生健康保険を設立しようということになったのである。その中心人物の一人は結核療養の経験のある法学部学生井上勲(のちの学生部厚生課長)であった。

同志社大学では学生大会を開いて学生健保の設立と全員加入をきめた。こうして学校の諒解をえて一九五五年一月一日に学生健康保険組合が発足した。その制度の基本は、学生が病気にかったときに医療費の五〇パーセントの給付をすること、また集団検診を行なって疾病予防につとめることである。この制度のおかげで秋の健康診断は学生健保の負担と学生保険部会員の奉仕によって行われてきた。学生健保は理事会をもち、二〇名の理事は学生側と学校側から一〇名ずつ出ており、学生部長が理事長、厚生課長と学生保険部会の委員長が副理事長をつとめる。学生健保は一定の組合費を徴集するが、同時に大学からも補助金を得ている。大学の事務機構からは独立した事務局をもち、三名程度の事務員を組合として雇っている。しかし学生の便宜を考えて、事務室は学生部厚生課の中におかれている。この組合は献血業務の方面でも重要な働きをしてきた。一九六九年の大学紛争当時に保険部会もかなり動揺したが、それでも組合は瓦解することなく、学生と学校の協力した組織を今日まで保ち続けた。将来社会保険の給付率が向上するにつれて、学生健保は発展的に解消する日がくるかもしれない。しかしそれまでにはまだまだ保健管理、健康増進をめざして活躍する余地が残されている。

事務機構の再編成

学生数が一万人を突破し、教職員の数もふえた状況で同志社は一層の機動性を発揮するために、一九五六年九月、事務機構の再編成を試みた。その眼目の一つは学校法人事務局（本部）と大学とを事務的に分離し、それぞれの部署に部長、課長、係長等において、責任態勢を明確にすることであった。大学には宗教部、学生部、教務部、総務部の四部門が整備充実されることになった。

宗教部は一九五七年五月に、クラーク館の東、商学部研究室棟の南側に接続して、左右対称型の大学宗教センターが完成し、そこに場所を構えることとなった。一階に事務室、談話室、二階に部長室、宗教主事室がおかれ、宗教部の活動がいちだんと活気をおびるに至った。宗教主事三名はチャペル・アワーの企画、各種の研究會、合宿、

宗教部報等の編集にたずさわり、基督教学生団体連盟の指導・助言にあたってきた。

学生部には学生課、厚生課、就職課の三課をおいた。学生課はオリエンテーション・ウィークやアセンブリー・アワー、学生の補導、学友会や各サークルとの連絡、課外体育委員会の事務、カウンセリング・センターの事務に従事してきた。大学と学生が対立したりする場合、学生課は大学の窓口として重要な機能を発揮する。カウンセリング・センターは一九五九年一〇月にその産声をあげ、最初の一三年間に約六〇〇〇人の学生に接し、相談に当たってきた。カウンセラーには学内の心理学者、社会学者、医師を配し、進路選択、学業、課外活動、異性問題、対人関係等、あらゆる相談に助言を与えつつ、有意義な学生生活が送れるよう配慮してきた。厚生課は奨学金、学寮、下宿、アルバイトの事務やあつせんを担当する。就職課は一九六四年に就職部として独立する。また一九六五年に大学会館が完成してからは、会館事務室が学生部の傘下に入ってくる。

教務部には学事課、教務課、体育課の三課がある。学事課は主として対文部省関係の事務、学則関係、在外研究、国内研究関係、留学生関係、個人研究費等を扱う。一九七五年には学事課の中に国際係がおかれるようになった。教務課は一般教育や教職課程の事務、オーディオ・ルーム関係の事務と技術、教室の配当や時間割を扱う。毎年の入学試験は教務課の最も重要な仕事の一つであったが、一九七五年以来、新たに教務部の中に入學課が出来、入試業務は入學課に移った。体育課は正課体育の運営、スポーツ道具の管理その他にあたる。

総務部には庶務課、人事課、経理課、出納課、調度課の五課がおかれた。このほかに各学部事務室があり、事務長は課長と同資格とされた。

一九五七年、大学研究所が人文科学研究所と改称される。翌一九五八年一〇月にはアメリカ研究所が、その翌年四月には理工学研究所が設置され、同志社大学の三研究所が勢揃いする。

寧静館と弘風館

建物の方も着実にふえていき、学園の顔を昔日の感なからしめるほどに変えていった。一九五六年には鉄筋建築第二号の寧静館^{ねいせい}が竣工する。命名者は徳富蘇峰であった。東半分についていえば一階に廊下をへだてていくつかの小教室、二、三階に大教室。西半分には小教室が設けられ、四階に文学部文学化学科の研究室がおかれた。地下には工学部と文学部心理学専攻の実験室がある。一九六六年ごろに文学部事務室が一階西南隅に移ってきた。

新・弘風館は一九五七年四月に第一期工事を、また一九五九年四月に第二期工事を完了した。場所は有終館の北側で、以前に旧弘風館と旧至誠館がたっていた部分である。一階南に教務部、北東に法学部、北西に経済学部事務室がそれぞれ位置した。二、三階に中教室、小教室があり、四階には文学部社会科学科の研究室、五階に第二外国語研究室がある。また地下の西隅には大学最初のオーディオ・ヴィジュアル・ルームがつくられた。

新町校地の購入

一九五九年四月に同志社大学は新しい学生定員を次のようにきめた。神学部四〇、文学部五二五、法学部三〇〇、経済学部六〇〇、商学部四五〇、工学部二四〇、計二一五五。しかしこれ以後は文部省の中心校地の考え方が前面に押出されるようになって、学則定員は固定化し、「予算定員」を実質化して実人員がふえ続ける。次の大きな定員改正は一九七五年まで行われなかった。今出川校地の狹隘はもはや誰の目にも明らかであった。

同志社大学の中心校地面積が一挙にふえたのは一九五九年に、日本電池新町工場の跡地を購入したときであった。三月三日、同志社は先ず二〇〇〇万円を支払って仮契約を結んだ。四月からはこの土地を同志社大学新町校地としてさっそく活用することになった。歴史的に見るとこの土地はきわめて由緒が深い。現在尋真館のたっている「上京区新町通り今出川上る近衛殿表町一五九番地」と、その周辺の四三七〇坪のほぼ方形の土地は、地名が示す



「近衛家旧邸址」の碑

通り、昔は五摂家の筆頭である近衛家の邸宅のあとである。室町時代の末から江戸時代にかけて花の御所跡といわれ、歌にも詠まれた周知の遺跡に隣接する。この新校地には近衛文麿が一九一八年一〇月に建てた「近衛家旧邸址」という石碑が現存している。明治になってから島津源蔵がここに日本電池工場を設け、GS乾電池の生産によって日本電業界の進歩に画期的な貢献をすることになった。戦後工場は洛南に移転した。新町校地入口の西側に「日本電池発祥地」という石碑が立っている。ここにあった鉄筋コンクリート構造の三階建はただちに教室棟として転用されることになり、臨光館と命名された。一九五九年四月から臨光館の約三〇教室で外国語等の授業が開始された。同時に、日本電池から購入した「上京区新町通り今出川下る徳大寺殿町三四五番地」の九六七坪の鍵型の土地には、同年九月に新町体育施設（剣道場・柔道場等）が完成した。一九六五年四月には五〇メートルの水泳プールも出来上り、大学の体育設備は格段の飛躍をとげることになった。

五〇年代後半

大下学長の六年間（一九五四―六〇）は、

国内では神武景気、岩戸景気などの言葉が生まれる経済の発展時代であり、学内も比較的安定していた。大下はその晩年において病氣勝ちであり、学長職に専念できなかったが、教務部長の上野直蔵が大下の了承の下に重要事務をとりしきり、先に見た如く、事務機構の再編や新町校地の購入を実現し得たのであった。一九五五年四月には第一部の文学部文化学科の中に国文学専攻が設置された。それまでは国文学専攻は第二

部にのみおかれていた。逆に一九六〇年には第二部の工学部機械学科が学生の募集停止にふみ切る。もはや夜間部では機械学科で最少限度必要とするカリキュラムをこなすことすら不可能だという結論に到達したからであった。

他方ハワイ寮の管理が一九五六年五月に本部から大学学生部に移管される。その運営は学生部長を中心とするハワイ寮運営委員会にまかされることになった。戦後のハワイ寮の黄金時代を築いたのはアメリカン・ボードの宣教師のヤング教授であった。ヤングは一九四七年から一九五四年まで神学部で実践神学と宗教教育学を担当した。一九五七年再び来学して三年間にわたり基督教教育学と聖書文学を講じた。一九六〇年に三たび来学し、四年間にわたり文学部英文文学科で聖書文学と英作文を担当した。彼は特に「ハワイ寮のヤング先生」として親しまれ、多数の有為の人材を世に送った。彼の時代のハワイ寮では週一回外部から講師を招いてヴェスパー・サーヴィスが開催され、礼拝後にはよく真剣な討論がなされた。ヤング時代のハワイ寮では日常会話に英語が用いられ、寮生の中には英会話の達人が多かった。ヤングのいない時期には神学部のロイドや深田未来生がハワイ寮を助けた。

同志社大学が名誉文化博士号 (L. D.) と名誉神学博士号 (D. D.) の規定を定め、同志社に功労があった人、また世界や日本社会に貢献した人に名誉学位を贈呈することにしたのは一九五七年七月のことであった。この名誉文化博士号の第一号はすでに述べたように、アーモスト大学のコール総長だった。名誉学位は同志社総長の推薦により、大学評議会の決定をへて同志社大学が授与するものであって、これまでに同志社中学出身のノーベル物理賞受賞の江崎玲於奈、アーモスト大学のプリンプトン (Calvin H. Plimpton)、ウォード (John W. Ward) の両総長、松下幸之助、湯浅八郎元総長、秦孝治郎元理事長らが受けている。名誉神学博士号は宣教師で同志社理事をつとめたケーリー (Frank Cary) やハース・グウィン (Alice E. Gwinn)、大塚節治元総長らに授与された。

学生の課外活動に目に移すと、一九五四年一〇月にグリー・クラブが全日本合唱コンクール優勝の快報をもたら

した。国内が安保騒動でわきかえっていた一九六〇年五月一〇日、山岳部の同志社ヒマラヤ遠征隊は、ヒマラヤの一処女峰アピの登頂に成功した。

一九六〇年代と大学の発展

六〇年安保 学生運動の観点から見て、戦後の最高のもりあがりは一九六〇年の日米安全保障条約改訂問題であ

った。岸信介内閣は国会において政府の命運をかけてその通過をはかった。全学連は最大規模のデモを組織し、全国各地で連日の示威運動を展開した。同志社大学においてもこの年は四月に開講後も各教室で学生活動家のアピールが続く、集会に次ぐ集会のために授業が流れることも多かった。大下学長は弘風館の中教室に全学教授会を招集し、全学教授会としての安保改訂に対する声明文を発表するかどうかをはかった。圧倒的多数がそれに賛成した。六月四日の安保阻止統一行動の日には神学部もこれに参加し、同志社の神学部は全国で唯一の全学連加盟キリスト教系学部であるといわれた。六月一日に全学連が国会議事堂に突入し、一人の女子学生が議事堂内で圧死したしらせが伝わった頃には、あたかも革命前夜の如き雰囲気同志社学園内にもただよった。六月一九日、安保は自然成立を見た。ただしフィリッピンからの帰途、訪日を予定していた米国のアイゼンハワー大統領は、安保騒動の陰悪な状況の下で、ついに日本政府の要請を容れて訪日を取りやめた。盛り上った学生運動は、安保騒動の終わったあと全学連が深刻に分裂し、その後ついに再統一できないままセクト間の分裂、抗争を繰返してきた。同志社の学生運動の主流はその後社会主義学生同盟（社学同・関西ブンド）となった。



上野直蔵

上野直蔵学長

上野直蔵が大学長に当選したのは一九六〇年六月、彼の外遊中のことで、その電報を彼はアメリカで受取り、予定を切上げて帰国した。英文学者でチョーサー研究家である彼ははじめての英国訪問を、昔のカンタベリーもうでの巡礼にちなんで、ロンドンからカンタベリーまでの道を徒歩で旅することによって飾った。二期にわたる文学部長、教務部長、一般教育委員長、教職課程委員長、アメリカ研究所委員長等の豊富な経歴をふまえて、一九六〇年七月か

ら一九六五年の末に至るまで手固い大学行政を展開した。新町校地に尋真館をたて、烏丸通に日本一といわれた大学会館を完成させ、しかもその効果的な利用をはかるための道を開いた（東京のいくつかの有力大学では、学生会館を作っても、学生との間の話し合いが決裂して、開館出来なくなるといふ現象が生じたのであった）。今出川、新町の両キャンパスの狭隘を解消し、教育の実をあげるために広大な田辺校地の購入を理事会に献策した。上野はまた国公私立の有力大学を網羅する大学基準協会の理事を長らくつとめ、文学部関係、教育学部関係、外国語教育、一般教育、単位制度等各委員長をつとめ、最近まで大学基準協会の会長の要職にあった。日本私立大学連盟の常務理事として、さらに大学設置審議会や私大審議会の会長として、大学設置の実務については権威の一人とみなされている。一九七五年一〇月、彼は住谷総長のあとをうけて同志社総長に選ばれ、その総長就任式は同志社の百周年記念式典と兼ねて行われた。

アーモスト館

海の彼方のアーモスト大学ではコール総長のあとをうけてプリンプトン (Calvin H. Plimpton)

ゲスト・ハウス

博士が総長となった。プリンプトンが総長の仕事を始めたのは偶然にも上野学長の任期の始まった七月一日であった。プリンプトンの専門は医学であり、医師が大学総長になることは或る程度時代を反映する



ゲスト・ハウス献堂式（大塚・上野・ケーリ・ライシャワー）

出来事であると考えられた。プリンプトンはピアノを弾き、チャーサーを中世英語の原文で読むという教養人で、上野学長には個人的な友情を感じていた。プリンプトンは一年間の総長在職中に三度同志社を訪問し、両大学の共同プログラムの推進に貢献した。

一九六二年にはアーモスト大学からの八万五〇〇〇ドルの寄附金によって建築中であつたアーモスト館ゲスト・ハウスが完成する。同志社は秦孝治郎理事長を中心にアーモスト館の隣接地の購入をはかつたのであつたが、これは成功しなかつた。次善の策として神学寮たる此春寮^{しゅんりやう}を塔之段敷ノ下町に新築して神学生を移し、旧寮の建物は北

小松の地に移築した。こうして此春寮^{しゅんりやう}あととデニスコートあとを用いて、北側にゲスト・ハウスをつくり、南側を芝生の庭園とした。設計は吉村順三に依頼し、ニュー・イングランド・ジョージアン様式の本館に配するに、和風の二階建築をもつてした。一階に食堂と事務室、二階にゲスト・スウィート二組と和室があり、同志社の重要な客や、海外から京都を訪れる学者、研究者、観光客に宿泊施設として利用されてきた。隣接して東の部分がアーモスト大学代表邸となっている。

一九六二年一月にこのゲスト・ハウスの献堂式が行われたときの主賓は駐日アメリカ大使のライシャワー（Edwin O. Reischauer）博士だつた。アーモスト館はせっかくの学者大使の来学であるというので、栄光館を会場として大使による記念

講演会を開く準備をすすめていた。ところが全学統一派(民青系)の学生グループが、ライシャワの来学反対の運動を展開し始めたので、学友会もこれに対抗して動きはじめた。ついに暴力沙汰の起ることを恐れて栄光館での講演会は中止となり、献堂式のあとで会場を本館の広間にうつし、非公開のかたちで「文化交流とその問題点」と題して大使の講演が行われた。統一派の学生約三〇名が館の前に並んで、シュプレヒコールを行い、その代表が大使に抗議文を手わたした。「ケネディー・ライシャワー路線」という言葉が学生のビラにたえず書かれた時代であった。

同志社は従来アーモスト大学から恩恵をこうむるばかりで、何一つお返ししていないではないかという反省が起こり、一九六三年のはじめにアーモスト館の寮生を中心に募金運動が始まった。岡本清一教授からの激励も大いに刺激になった。校友、教職員、アーモスト館関係者が募金に応じ、二八万円が集まった。これで石清水八幡宮型六角石灯籠を購入し、兄玉実用アーモスト館運営委員長の「友愛の光のやどり海越えて」という碑文のプレートを用意して、アーモスト大学に贈ったのであった。この灯籠はアーモスト大学のキャンパスに置かれ、両大学の友好関係の記念碑として親しまれてきたのであったが、ある夜、何者かによって破壊された。アーモスト大学はこれに遺憾の意を表した。残った碑文のプレートは現在ジョンソン・チャペル内の、新島の肖像画の下に掲げられている。

プリンプトンのあとをついだアーモストの総長はウォード(John W. Ward 在職一九七二—七九)博士で、両総長ともアーモストと同志社の交流計画に熱意を注ぎ、両者とも同志社の名誉文化博士号を贈られている。両総長のもので実際の仕事を推進し、同志社の教授陣の間に友人の多いギフォード(Prosser Gifford)副学長の貢献をも忘れることができない。ギフォードは一九七五年十一月の百周年記念式典に、アーモスト大学を代表して来学し、メッセージを伝えたのであった。

大学発展の 一九六一年八月に同志社は北小松の土地を精神教育施設として購入することに決定する。これはのための施策 ち一〇万平方メートル余りの敷地となり、ここに旧此春寮、旧松蔭寮（旧下村孝太郎邸）、旧法学部読

書館が移築され、合宿所、研修会場として大勢の教職員、学生に利用されることになる。地形の関係から琵琶湖はほとんど望めないが、背後に山をひかえ、空気の澄んだ別天地である。ゼミナールの合間にソフトボールを楽しむ学生の姿がよく見られる。国鉄湖西線が開通して以来、この小松学舎への交通も一段と便利になった。

同志社大学は一九五〇年以来、入学試験を一月と三月の二回にわけて実施してきた。これはできるだけ多くの受験生に同志社受験の機会を与えることが目的であったが、同時に国立一期校を落ちる人たちをもかき集めていくといった、多少いじましい面がなくなかった。ちなみに一九五九年の例をあげると、第一次の志願者は第一部で一万三〇四名、第二次は七一二名、合計一万七四一六名。第二部ではそれぞれ三〇九名と三四〇名で合計六四九名だった。一九六二年に同志社は二回の試験を一回に統合して実施した。これは同志社に対する世間の評価も高まり、あえて国立一期校の落穂拾いに甘んずる必要もなくなったとの判断からであった。この年、第一部の受験生数は三万一九四四名を記録している。しかし第二部は五八二名で、漸減の傾向を示した。一九六二年以降、同志社大学の入学試験は一回にしばられ、同年には二月一七、一八、一九日の三日間（地方試験は一八日のみ）に実施された。その後受験生は四万名から五万名にふえ、試験実施日数もそれにつれて四日間、五日間をあてるようになった。

キリスト教主義学校の同志社で、日曜日に入學試験を行うとは何事かという反対意見が、教職員や校友の中から出たことがあった。しかし、地方試験を実施するためには、日曜日しか受験場が借りられないという事情があり、地方試験を実施していく限り、日曜日利用の問題は解決しないであろう。

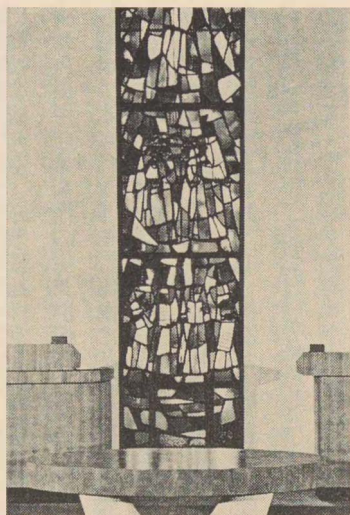
一九六一年一〇月には国内研究員の制度ができ、翌年から実施にうつった。これは三年以上勤務した専任教員で、

一定の期間、国内において研究または調査に専念することを希望するものに許可される。年間一二名の枠がもうけられている外、大学の授業計画に支障をきたさないこと、また同じ学科目担当者が同時に国内研究員にならないようにする等の点に留意された上で、大学評議会で決定する。期間は半年であるが、評議会が認めれば一年となる。これは研究を完成しようとする者、長期にわたり集中的に仕事をしようとする者にはまことに有難い制度である。その期間に給料諸手当の全額と、研究費一二十万円(研究期間一年の場合は二四万円)が支給される。

個人研究費の制度が発足したのは一九六二年であった。初期の金額は教員、研究員一人につき三万六〇〇〇円で、書物の購入にのみあてられた。発足当時三万六〇〇〇円分の書物は相当な分量にのぼり、すべての教員がこの制度の恩恵を受けた。インフレが進むにつれて、個人研究費も徐々に上昇し、一九六四年に四万円、一九七〇年に六万円、一九七五年の一〇万円をへて、一九七八年現在で一三万円となっている。またその使途も雑誌、製本代、学会費、学会出張旅費等にあてることができるようになった。

すでに大下学長の時代に学長から依頼された「大学基本問題対策委員会」(小松幸雄委員長)は一九回にわたる討議の末、一九六〇年六月に答申したのであったが、その中の一項目に「適正数の学生確保」があった。これは全学の立場から考えて、同志社大学が今少し規模を大きくすることを前提として、学部や学科の増設の方向を示唆したものであった。この答申が刺激剤となって種々の試案、私案が議論され、一時は「十一学部五万人構想」といった幻のような大構想までが、まことしやかにとりざたされたりした。

この問題は具体的には文学部の三分割案となつてあらわれた。教授会の構成員が一〇〇名に近づいた文学部は一九六四年一二月に投票の上で、適当な時期に現在の三学科を三つの学部(英文学部、文学部、社会学部)にするとという部長提案を可決したのであった。この文学部三分割案は大学長を議長とする学部編成研究委員会にかけられて、議論を



神学館チャペルのステンド・グラス

つくした上で、大学評議会に提出されたのであったが、結果は密議未了に終わった。当時すでに田辺校地買収の方針は具体化しつつあったし、もし三分割案が通過していれば、新しい学部は田辺校地に設置される見込みであった。

校舎ならびに 教育設備の増設 新町校地が名実ともに同志社大学の教育と研究のための須要の場所となるのは、一九六二年の四階、塔屋三階建の大建築であって、その威容は今出川キャンパスの明徳館に匹敵する。三億二六〇〇万円の工費は創立九〇周年記念事業の中の最大のものであった。工事は二期に分けて行われたが、上野学長は第二期工事の早期完結を稟理事長につよく訴えた。その結果、工事の完成が早くなり、四月六日の献堂式に二カ月先立って、同志社大学の入学試験がまず尋真館で行われたのであった。尋真館には研究室が四六室、書庫、事務室、そして学内最大の会議室が設けられている。研究室は文学部英文学科と英語の教員が中心である。一階に視聴覚教室が設けられ、その設備は漸次拡大されて外国語教室として活用されてきた。

臨光館の地下に食堂ができ、その経営は同志社生協に委ねられた。臨光館と尋真館は地下通路によってもつながっており、地下に売店がおかれている。臨光館二階に教務部の分室と教授控室がある。新町校地が整備された結果、今出川、新町両校地を結ぶ通路は休み時間ごとに行きかう学生で雑踏するようになった。

一九六三年七月には徳照館のあとに新しい神学館が竣工する。鉄筋コンクリート造り、地下一階地上四階の建物で、四階

に教授の研究室、三階に礼拝堂と小教室、二階に図書室と中教室、一階に事務室、会議室がある。礼拝堂の正面中央には田中忠雄製作の使徒群像をかたどったステンド・グラスがあり、石の聖餐テーブルの上には天井からイバラの冠がつるされた。この建物には同志社としてはじめての全館冷房の装置がつけられた。全館冷房の学校建築は日本ではこの神学館をもって第一号とする。総工費一億三三〇〇万円のうち、半額に近い一二万八三〇〇ドルはセラティック・ファンド、すなわちのちの神学教育ファンドからの寄附金によった。これはアジアの五つの神学校に贈られた寄附金であって、日本では同志社だけに与えられたものである。残額は The United Church Board for World Ministries と同志社が負担した。なお新神学館の完成にともない、旧神学館はクラーク記念館と名称が改められた。

一九六四年九月には中学の運動場の北側に同工館に代って博遠館が落成する。地下一階地上五階の鉄筋コンクリート建築で、電気工学、電子工学、機械工学系の各研究室、実験室、製図室等がおかれている。総工費一億三五〇〇万円。この建築でもって工学部の設備は飛躍的に増大した。なおこれに先立って工学部は一九六一年に第二部の募集を停止し、一九六三年からは電子工学科、機械工学第二学科、化学工学科の三学科を増設して六学科編成をとることにした。

同志社の創立九〇周年を記念して一九六五年に烏丸通上立売下るの、北寮とプールのあとに大学会館が竣工する。はじめに学友会の中央委員会室や各サークルのボックスを含む「別館」が完成し、次に大学会館の本館ができた。この建物は学生の文化、学術研究、芸術活動の展開の場として、また学生、教職員の福利厚生の場として、さらには大学という共同体の中で、学生、教職員、また卒業生や一般市民との交流の場として、外国の大学のこの種の施設まで参照の上でたてられたのであった。三階に一〇二一席をもつホールがあり、大中小の会議室、和室、ラ

ウンジ、女子ラウンジ、読書室が配されており、全館冷暖房が完備している。他に食堂、喫茶店、生協の売店と書籍部、理容室、美容室もあり、地下一階には厚生館の診療所がある。大学会館は年中ひっきりなしに利用されている。完成当時、全国の大学でこれほど完備した大学会館はなく、日本一であると評された。開館後一〇年以上をへた今日、共同体としての大学の必要欠くべからざる一部分となっている。その開館にあたり、管理運営権をめぐって学友会と大学の間に緊張が高まったが、同志社大学は見事にその問題を克服して今日に至っている。

一九六二年から二年間に塔之段敷下町に新しい此春寮、岩倉の地に大成寮、寺町通に女子学生のためのデラックスな松蔭寮が完成して、寮の設備も充実を見た。そして下鴨に第二部学生のための寮が購入され、上野学長によってぎようせき暁夕寮と命名された。

二つの暴力事件

六〇年安保のときには学内暴力事件というおそえものがついていた。ただしそれは安保改訂をめぐって起こったものではなく、自治会選挙をめぐつてのトラブルからであった。毎年五月から六月にかけて自治会選挙が行われるのが恒例であるが、それは年によっては険悪な雰囲気につつまれることがよくあった。一九六〇年には体育会系の学生が学生活動家に対して暴力をふるうというかたがが見られたが、それはやがて活動家同士の間で、殊に社会学同系学生と統一派活動者会議の学生との間でのヘゲモニー争いに伴う暴力事件へと移行していったのであった。

一九六〇年の場合は五月二一日、経済学部自治委員選挙の立候補をめぐつて学生間に暴力事件が発生した。暴力をふるったのが体育会の学生であったので、暴力行為の判定は体育会の資格審査委員会にかけられた。六月一四日に明徳館前広場で学生大会が開かれたが、再び体育会系の学生が暴力をふるったために大会は混乱におちいった。翌日緊急学友会中央委員会が開かれ、体育会の常任委員会を即時解散することと、新しく学友会委員長に高山副委

員長が就任することがきまった。六月一七日には大下学長名で、あらゆる暴力を排除すべき旨の声明が出た。同日、学生五団体代表による事態收拾協議の結果、六月一四日の学生大会の無効が発表された。この事件は学生の課外活動のあり方と、その組織運営についての問題を提起し、殊に学友会組織における自治会と学友団（学生課外活動諸団体の組織）の關係はいかにあるべきかが問われたのであった。体育会はこの出来事を契機として深く反省し、それ以降は学友団の中にありながらも学内政治に対して中立の立場をとるようになる。すなわち、もはや高度に政治的な学友会中央に対立する存在ではなく、むしろ、つかずはなれずの立場をとりつつ、課外活動としてのスポーツを追求するようになったのである。

体育会が学友会をリードする状況がやんだあとは、当然の成行きとして、活動家の間でヘゲモニーを争う状況はげしくなってきた。同志社大学の場合、それは社会学同統一派の間の、きわめてとげとげしい対立となつて表面化し、殊に自治会選挙のときには両派の対立は一触即発の有様であつた。一九六三年二月九日の未明に、社会学系のリードする中央委員会の学生たちは、折からの学費値上げに抗議して、神学館の前でハンスト中であつたが、これに統一派の活動家が襲いかかり、相当数の怪我人を出すという事件が起こつた。真相の究明には何カ月という時間がかけられたが、ついに真相はわからないままに終わった。岡本清一学生部長は翌年四月になつてから、学友会と統一派に向かつて、「完全非暴力の学生社会を創造する」ことを願つて、全学の前に真相を明らかにし、その反省に基づいて決意を表明するよう手紙で迫つた。学友会から提出された文書は、テロルを学内から追放することを理想主義的にうたいながらも、統一派系の分派活動を非難するだけで終わつていた。統一派の方は社会学同が前年の五月からいかに暴力的に統一派系のサークルをしめだし、ボックスを破壊してきたかを数えあげ、一二月九日未明の事件は決して偶発の事件でなかつたことを弁明し、社会学同の横暴に対し学生部がサークル活動の権利を守るよ

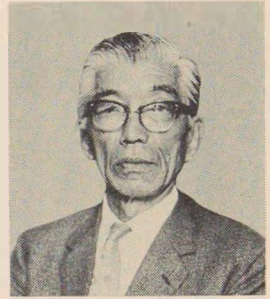
う要求している。両者の回答文は或る程度迫力のあるものであったとはいえ、暴力に対する謙虚な反省の表明はなく、真相を一般の大学構成員にわからせうるほどのものでなかった。『同志社学生新聞』はこれらの掲載を、読者を一層迷わせるものとの理由から拒否した。また暴力事件として警察が調査に乗出したが、加害者はもちろん、被害者の方もその調査に協力せず、ついに法廷では被害者の方が証言を拒否したかどで罰を宣告されるということ、まことに奇妙な結末をつげた。

この後同志社の学友会はますます社学同が指導権を強化していく。そして一九六九年の最激動期をへて、全共闘運動から全学闘運動へと展開する。この間民青系は常にそれと対立する批判グループとして活動してきた。二月九日の事件は統一派が学内で公然と暴力をふるった最後の機会になった。統一派という呼び名をやめた民青系はそれ以後「平和路線」に転じたといわれる。一方の全学闘は「組織された暴力」を公然と賛美するところまで進み、明徳館の前で赤ヘルメットにマスクの姿で「武闘訓練」する姿が一九七〇年代の中期に見られるようになったのである。

学費値上げの問題

私立大学にとって学費値上げは避けて通ることのできない問題となってきた。よい大学にするためには教職員の待遇をよくしなくてはならない。そのためには財源の大部分を学生納付金に依存してきた戦後の私立大学はどうしても学費値上げという手段を選ばざるをえなくなる。国庫助成の開始はまだ一九七〇年まで待たねばならなかった。学費値上げには必ず学生からの反対がおこった。高い学費そのものが学生生活への圧迫であるが、その上、高い学費では同志社は金持の子供ばかりの学校になってしまふ、と彼らは主張した。

田畑学長の最後の時期に学費値上げの問題が起こったが、学生たちは「田畑学政に協力する意味で」施設費若干の値上げを認めたことがあった。大下学長のときには学費値上げはさほど問題化しなかった。しかし六〇年代に入



星名 稔

って上野学長の時期には学友会は執拗に反対運動を続けた。大学評議会と学生との間で深夜にいたるまでの押問答が続いたこともある。殊に一九六四年の値上げのときには、最終決定をする理事会が唐崎ハウスで開かれた。これに反対する学生約六〇名が唐崎に押しかけ、上野学長を「二十四畳敷きの一室にカンヅメにしたうえ、深夜にわたり長時間『値上げ反対、値上げ撤回』をさげび、ときには興奮のあまり同学長をこづくなど乱暴を働いた」(『朝日新聞』二月二六日号)。

このときは一九六四、六五年度にわたる二段階値上げを同時にきめたのであった。この結果、前年度の学費にくらべて五割、そしてその翌年には八割ないし一〇割の値上げとなった。理事の中では田畑元学長は値上げにひとり反対の意向を表明した。田畑は弘風館に「授業料の値下げなくして同志社の発展なし」という垂れ幕をつるした。この時以後、学費値上げは学長としては身の危険を覚悟の上でなければできないような状況に入るのである。

星名泰学長

上野学長が一九六五年の末に定年で学長の座を去る前に、次期学長の選挙が行われた。学内には二人の有力候補があり、はじめて目立った学長選挙運動が展開された。工学部の星名泰(はしな たい)が文学部の和田洋一をおさえて当選した。星名は一九六六年元日からの任期であったが、途中で不幸にも病氣にかかり、一九六八年三月末で辞任のやむなきに至った。

星名学長の時期に同志社は将来の校地をめざして田辺の土地を近鉄から購入した。購入は二度にわけて行われ、約三〇万坪が同志社の所有となった。しかし大学としてその利用計画をたてうる前に星名は学長をやめていた。彼の二年間は全寮協議会の全盛時代であり、学生部はその対応に追われ続けた。星名は新学期に教室が不足することのないよう気を配り、そのためには学長室の面積を狭めることまで敢えてした。

一九六七年の入学試験には、橋本真教務部長の提案のもとに、採点の一部と合否判定資料作製を電算機会社に依頼する制度がはじまった。このため採点業務が徐々に軽減され、それまでの殺人的な採点所風景は見られなくなっていく。

建物関係では一九六六年三月に扶桑館第二期工事が完了する。これは理化学館の北側の地に窮屈そうにたてられた工学部の建物で、地下一階地上五階からなり、化学系の実験室や工学部教授の研究室等がおかれている。この建物の西側は第三期工事を待望するかのよう荒壁のままに残されている。一九六七年五月には旧学生会館、旧至誠館のあとに新しい五階だての至誠館が竣工し、一九四九年以来毎年のようにたてられてきた大学キャンパスの建築のシリーズがひとまず完了する。四、五階に商学部を中心とする研究室があり、一階に商学部の事務室がおかれた。地階、一、二、三階には大中小さまざまな教室が配置されている。

星名は京都大学の学生時代ラグビーの選手として勇名をとどろかせた。同志社の教授に就任してからも彼は同志社のラグビー部の育成に力を注いだ。その期待にそむかず、ラグビー部は名監督岡仁詩（おかとし）の指導のもとにめきめき実力をあげ、一九六一、六二年には、二年連続全国大学学生ラグビー王座を獲得、さらに社会人チームをも破って全国征覇をなしとげるに至った。ラグビー部は一九六八年にニュージーランドへ遠征する。二年後には坂田好弘（一九六五年卒業生）が同国にラグビー留学し、カンタベリー大学の一員としてプレイしただけでなく、その年のニュージーランドで最もすぐれた五人のプレイヤーズの一人に選ばれた。このような因縁から創立百周年の一九七五年三月にカンタベリー大学のラグビー部を迎え、全同志社チームとの間の国際親善試合が行われたのであった。

大学紛争の時期

一九六八年から七〇年にかけて同志社は不幸な大学紛争を経験した。これは同志社だけの問題でなく、全国の各大学を襲った嵐のような現象であり、その余波は高等学校や予備校にも及ん

だ。ベトナム戦争が泥沼化の様相を呈した時代であり、学生の反逆は米国、フランス等でも日常化していた。この経験を通して大学共同体の構成員は教育の根源にかかわる問題を主体的に問いつめられていったのであった。この時期の全国の大学を支配したものはまさしく渾沌であったといってもよい。

同志社大学においても一九六九年には今出川、新町の両キャンパスの殆どすべての建物が学生の手で、または教職員の手で封鎖され、長期休講の状態が何カ月間も続いた。その上、この時期には学生の選挙妨害によって大学長選挙を実施することができず、学部長が次々に大学長代行や事務取扱をつとめた。そのリストは別表の通りである。ようやく一九七〇年四月に郵便投票による大学長選挙が実施され、山本浩三法学部教授が学長に選ばれた。この紛争時代の副産物は一九六八年五月から『同志社大学広報』が発行されたことである。学園で今何が起きているかを教職員に熟知させるために『同志社大学広報』のはたした役割は大きかった。このために大学内に広報委員会が組織され、学長がその委員長をつとめることになった。一九七〇年一月以降、広報委員会は学生向けに年四回の『同志社大学通信』をも発行しはじめる。大学紛争については第六章で詳述する。

大学長代行	経済学部教授	今西正雄	一九六八年	四月	一日	一九六八年	六月	五日
〃	工学部教授	斎藤玄三雄	一九六八年	六月	六日	一九六九年	三月	三十一日
〃	文学部教授	遠藤汪吉	一九六九年	四月	一日	一九六九年	一〇月	七日
大学長代行代理	神学部教授	遠藤彰	一九六九年	九月	一八日	一九六九年	十一月	一日
大学長事務取扱	法学部教授	山本浩三	一九六九年	一月	二日	一九七〇年	三月	三十一日
〃	商学部教授	吉武堯右	一九七〇年	四月	一日	一九七〇年	四月	三〇日

一九七〇年代の大学

山本浩三学長

山本は大学長事務取扱のとき、紛争ですっかり麻痺した同志社大学を、蛮勇をふるってたちあげさせた功労者だった。憲法学者である山本はこのとき四四歳、もはや警察力を借りることなくして学園の秩序を回復することは不可能であることをさとり、自分の責任においてその衝に当り、ロックアウト態勢を敷いた。山本のこの措置に抗議して二人の教授が大学を去っていった。学長就任後も山本は学園紛争の後遺症に直面し、学生の反乱に悩まされた。一九七一年一月一日に山本は石井裕二学生部長と杉田莊作総務部長をつれて明徳館前に居並ぶ赤ヘル学生たちの前に立ち、学費改訂の説明会を開こうとしたが、学生たちは学長の説明を無視して機動隊導入を糾弾し、ついに学長と学生部長が負傷して入院するという騒ぎがおこった。一二月三日に理事会が学費改訂案を決定したのち、全学闘がゲリラ的に教室に入って授業の妨害を始めたため、大学はついに冬休みを八日間繰上げて、一二月一五日から一月六日までの休講を決定した。一月一三日には学友会が学生大会を開き、全学無期限バリケード・ストライキに突入した。学年末試験はすべてレポート試験に切替えられたのであった。

秦孝治理事長

一九七二年一月一四日の午後、八二歳の秦孝治理事長は突如約二〇名の赤ヘルメットの学生たちによって有終館二階の理事長室から拉致され、明徳館前の「大衆団交の場」に立たされた。彼らは山本学長を探しに行ったのだが、不在だったために理事長を連れ出したのである。寒い日に老理事長に對する無益な糾弾が何時間も続いた。夕方になって医師のストップがかかり、秦はやっと解放された。それから一日後に、秦は路上を通行中に倒れ、そのまま不帰の客となった。

秦は学校法人同志社の理事長として一九五四年八月に就任し、永眠の日まで一八年間あまり理事長の重責をはたした。秦の働きなしに戦後の大学の歴史は考えられない。大塚、住谷の両総長を助けて同志社の財務を総攬し、教職員組合とは団体交渉で何度となくわたりあった。組合の指導者の何人かは、秦が理事長をやめるときには自分たちの手で盛大な送別会をやるのだといっていた。秦には明治のクリスチャン実業家の風格があり、ロータリー・クラブのガバナールをつとめるなどして、すぐれた国際的感覚の持主でもあった。秦が祈りをささげるときの声には独得のひびきと味わいがこもっていたし、また枯れた声で高らかに笑う人であった。彼の永眠後、遺族が発表した故人の遺詠に次の一首があった。「赤ヘルの学生おのがコートぬぎ我に着せたり激論の中」。

松山義則学長

山本学長のあとを受けて、一九七三年五月から大学行政を五年一ヵ月間担当したのは文学部の松山義則であった。心理学者である松山はまじめで温厚な性格であり、大学紛争の期間を通して傷ついた同志社のイメージを回復するために大いに力をつくした。彼はキリスト教主義教育の発展のために尽力し、各学部の宗教委員を宗教主任の呼び名にもどし、宗教学必修の復元を奨励した。一九七六年夏には学長としてアーモスト、ハーヴァードの両大学を訪問したのみならず、新島にゆかりの深いヴァーモント州ラットランドのグレイス教会に、同志社を代表して記念タブレットを贈呈した。彼はそれまで眠っていた田辺校地の利用計画を発表し、その準備にとりかかったのであった。松山の時期にも有終館は何度か全学園によって封鎖され、その期間が七日にも及ぶことがあった。しかし彼は忍耐しつつ事に当り、ようやく同志社に安定と新たな方向付けとをもたらしたのであった。

最近の国際交流

大学紛争がもたらしたもの一つは、せっかく何代か続いたカールトン大学からの代表派遣の停止であった。しかし、さいわいにしてカールトンと同志社の関係はこれで終わりはしなかつ

た。カールトン大学では一九六〇年代のなかばごろから「アジアに対する関心の増大とともにアジア研究プログラムを大学のカリキュラムに設置し、夏の間、十名内外の学生を同志社に送り、夏季講座を開いてきた」(『同志社―百年の歩み』からである。一九六六年七月には教授に引率されて一五名の学生がやってきた。うち一名が女子学生。これらの学生のうち何人かは半年間京都に残って日本研究に従事するようになった。このプログラムが発展し、アイモスト大学がそれに加わり、さらにコルビー、コネティカット、マウント・ホリヨーク、オベリン、スミス、ウェスリアン、ウィリアムズの諸大学が参加して、リベラル・アーツの大学九校の協力により一九七二年以降 Associated Kyoto Program (略称AKP) となった。事務局はカールトン大学におかれ、毎年約二〇名の学生が同志社に派遣されてくる。指導教授一名がつきそい、京都での二四週二学期から成るプログラムの指導に当たっている。AKPの学生はすべて本学文学部の聴講生の資格である。本学教員の有志がこのプログラムのために引続き協力して今日に至っている。一九七五年からAKPを中心とする留学生のためにクラーク記念館一階南西隅の一室が提供されている。

同志社大学は一九六八年に客員教授 (Visiting Professor) の制度を設けた。これは本学において引続き三カ月以上、専攻分野について教授・研究するものとして外国から招聘する外国の学者の場合であって、その待遇は専任に準じてそのつど学長が定めることになっている。この制度によって一九七一年九月から一年間同志社に來たハーヴァード・ロー・スクールのコーエン (Jerome A. Cohen) 教授は中国法の研究家であり、米国の対中国政策について積極的な発言を続けてきた人だが、彼との関係から法学部の藤倉皓一郎教授が一九七六年から一年間ハーヴァード・ロー・スクールの訪問教授として招かれ、コーエンを含む他の三人の教授とともに「日本の環境法」を講義した。藤倉は同志社大学の教員としてハーヴァードの教壇に立った最初の人である。なお藤倉以外に外国の大学に招

かれて訪問教授をつとめた学者には神学部の竹中正夫（ユニオン神学校）、文学部の秋山健（カールトン大学）、法学部の麻田貞雄（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）、経済学部の榊原胖夫（カールトン大学、アールラム大学）らがある。

一九七一年に外国人研究員（Visiting Scholar）に関する内規ができた。これは本学の研究施設、設備を用いて研究することを希望する外国の研究者のための制度である。当該学部教授会、または研究所委員会の議をへた上で許可され、指導教授が定められる。

同志社大学のゲスト・ハウスとしては、短期間の訪問者のためにはアーモスト館のゲスト・ハウスがよく利用される。しかし長期にわたる訪問教授や外国人研究員の便宜をはかるために、岩倉大鷲町に大鷲ハウスとゲイン・ハウスの二戸が完成し、一九七二年頃から利用されている。ゲイン・ハウスは宣教師で元同志社理事、中学教員であった故ゲイン（Alice E. Gwinn）の寄贈によるもので、もと烏丸通今出川下る西入るにあった建物を移築したものである。

七〇年代に入ってから、米国をはじめ諸外国の大学から国際交流の呼びかけがたかまってきた。同志社は京都が日本の千年の都であったことから、恰好の目標となるらしい。これらの申し出にすべて応ずることは不可能である。そこで同志社として適切と思われる国際交流のあり方を検討するために一九七六年国際交流委員会が設置された。この委員会は教務部長を委員長とし、各学部から一名、その他若干名から成るもので、客員教授、研究員等の受け入れ、留学生問題、教職員の在外研究等の原則ならびに制度を企画・審議する。

一九七六年現在で同志社大学が予算化している在外研究員の枠は次の通りである。A項―七名（年齢五歳以下、在職五年以上の専任教員、研究費二〇〇万円）。B項―一名（年齢五歳以下、在職五年以上の専任教員、研究費一五〇万円）。C項―一名（在職五年以上の専任教員、研究費一五〇万円）。D項―二名（在職一〇年以上の専任教員で部長経験者、もしくはそれに準



R. H. グラント

ずるもの、研究費一五〇万円)。E 項——一名(年齢四〇歳以上、在職一〇年以上の専任職員で部長、課長、事務長、主任もしくはそれに準ずるもの、研究費一五〇万円)。F 項——一名(年齢四五歳以下の専任教員または年齢五五歳以下、在職三年以上の専任職員、研究費二〇〇万円)。上記の在外研究費の総額は二三五〇万円となり、専任教員一二名が本学の在外研究費によって毎年海外に出掛けることになる。このうちF 項は創立百周年を記念して作られたものであり、行先きはアーモスト大学、またアーモストを含む周辺五大学に限定されている。他の場合は在外研究員が自由に行先きを選ぶことができる。在外研究員の選考は部長会で行われる。

国際交流の物語のしめくくりとして、戦後同志社に来て教育の一翼を担った宣教師たちについて触れておきたい。

戦後いちはやく、一九四七年に同志社に派遣されてきたアメリカン・ボードの宣教師はグラント夫妻であった。グラントは英文学科において明快な英語でアメリカ文学史を講じた。福井地震の被災者に救援の手をさしのべた。彼は学生の育成につとめ、同僚から敬愛された教師であったが、一九七四年九月、後期の開講を目前に控えて突如としてみまかった。グラント夫人(Jean H. Grant)は社会学科において社会事業を講じるにこやかな人格者だった。一九六一年夫に先立ったが、同志社チャペルにおける追悼会で上野学長は故人を偲び「雨にぬれた秋海棠の花のような方でした」と述べた。

神学部ではウッド(Robert W. Wood)教授が一九四九年一〇月以来基督教倫理学を講じてきた。のちには英文学科にも出講して「神学・哲学・文学」という実験的な科目をも担当した。自分の講義のほとんど全部をプリントして学生に渡すほどの熱心さであった。ウッド夫人(Mary Wood)は社会学科においてグループ・ワー

クを担当してきた。夫妻は一九六八年に帰国、現在はカールトン大学に奉職している。

ロイド (Gwilym G. Lloyd) 教授は他の宣教師たちと異り、アメリカの合同長老派教会派遣の宣教師で、一九五二年以来神学部で新約神学やギリシア語原典を担当してきた。英国のウェールズに生まれ、エディンバラ大学で学位をえたロイドは、温厚な人格とウェールズ流の音楽的な英語で学生や同僚から敬愛された。一九七四年一月、脳血栓で倒れ、退職のやむなきに至った。現在ニューヨーク州ストーニー・ポイントで夫人の看護のもとに余生を送っている。

工学部で一九五七年から一九六二年まで物理化学、化学工学を担当したダウブ (Edward E. Daub) 助教授は若い活発な宣教師だった。ダウブ夫人の父のサリヴァン (Philip Beach Sullivan) は一九五七年一月日本訪問の途中航空機事故で遭難した。ダウブ夫妻は同氏を記念して六〇〇〇ドルをサリヴァン記念基金として同志社に寄附し、この基金から生まれる果実を、部落解放に尽力する同志社卒業の教役者を支援するために用いることにした。毎年二、三名に贈呈されて今日に至っている。

以上のほかにも短期間、神学部や文学部で奉仕した宣教師があつたが、紙数の関係で省略する。アメリカン・ボードは一九六一年にエヴァンジェリカル・アンド・リフォームド・チャーチ (Evangelical and Reformed Church) と合併して The United Church Board for World Ministries (UCBW) となった。アメリカン・ボードと同志社の間に新島の没後に起こったような軋轢ないし不協和音は、戦後のアメリカン・ボードやUCBWと同志社の間には一切見られなかった。一九七三年以来同志社は毎年いくらかの金額を内外協力会を通して貢献してきた。この金額は一九七五年で宣教師一人につき年額一二〇万円、一九七八年で年額一六〇万円にのぼる。宣教師といえはすっかり宣教団体に依存した時代はすぎ去り、宣教もまた共同事業と考えるべき時代に入っているのである。

新図書館と光塩館

学生数が二万名に達した同志社では、従来の図書館ではもはや大学図書館としての役割をはたしえないことがあきらかであった。そこで啓真館（旧華族会館）と聚芳館のあとに、地上三階地下二階の、九一五平方メートルの延面積を有し、全館冷暖房をそなえ、大学図書館としては全国有数の設備を誇る図書館が一九七三年一月に竣工したのであった。今出川キャンパスの他の建物と調和したレンガタイルの建築様式は内容的にもきわめてすぐれた機能を有し、一九七五年には第一回建築業会賞を受けた。

新図書館は一階に開架閲覧室をおき、また雑誌・参考図書室も充実させた。その他新聞コーナー、展示コーナー、ラウンジなどもあって、一層親しみやすい場所となっている。蔵書数は約二七万冊だが、大学としてはそれ以外に約四〇万冊を各研究室や研究所が所蔵している。二階にはオーディオ室やマイクロリーダー室、三階には大学院生のための読書室や貴重書室がある。貴重書のコレクションには植木枝盛文庫約六八〇冊、荒木英学文庫約二五〇冊、ケリー文庫約一〇〇冊が含まれている。向学心、研究心に富む学生にとってこれほど有難い場所はない。

一九七四年一月に新町校地西北隅に、地上五階地下一階、鉄筋コンクリート造り、冷暖房、防音装置完備の音楽・演劇総合練習場「新町別館」が完成し、学生の創造的課外活動のための場所が提供された。

有隣館のあとにできた光塩館は同志社大学としてはじめの研究室専用棟であって、一九七六年一〇月に完成した。ここには法学部と経済学部の研究室が集中している。その数は一〇一室あり、鉄筋コンクリート造り、地下一階地上五階、冷暖房設備が完備している。書庫、共同研究室、ラウンジ、会議室が有機的に配置されている。

計算機センター

現在コンピュータは文明社会のあらゆる面において利用されている。コンピュータなしにはもはや仕事のできない分野も沢山ある。同志社大学でも工学部を中心にコンピュータが導入されてきたが、一九七五年の夏に HITAC-8350 を購入したのを機会に講武館に計算機センターを設置した。本

学の教職員、大学院生、指導教授から利用の必要性を認められた学生がこれを利用できるようになった。利用者のために利用説明会が開かれた。本センターの機器は中央演算処理装置(二六二KB)、磁気ディスク装置二九MB四パック、磁気テープ装置四デッキ、カード読み取り機二台、光学マーク読み取り機、ラインプリンター、カード穿孔機各一台とオフラインのカード穿孔機九台から成っている。計算機センターには所長がおかれ、基本方針を審議するための計算機センター委員会、ならびにその運営について審議するための計算機センター運営委員会がある。

大学充実のため 同志社創立以来のキリスト教主義をいかにして大学教育の中で内実化させるか。これは同志社大の諸方策 学に課せられた第一義的に重要な問題であった。奇蹟といわれた日本の経済的復興と繁栄は精神的な没落をもたらし、世俗主義は今や全国を覆う風潮である。大学は教会ではなく、その任務は従って伝道ではない。それではキリスト教主義大学は何をもってキリスト教主義を実現することができるか。それは究極的には人格的接触、人間的な触れ合いを通して、ということになるのである。それ故一人ひとりの教職員の人格、学識が問われることになる。教室も研究室も図書館も事務室も、すべてこの意味で人間教育の場でありうる。

大学のカリキュラムの上では宗教学に託された期待は大きい。最近の総合科目の中において、同志社の歴史と伝統を多元的に、しかも深く掘りさげてみる試みがなされてきたことは、喜ぶべき前進である。またキリスト教の現代的意義や現代人の疎外の問題、宗教と芸術の問題等に光があてられ、この科目が一層の充実を見るに至った。

一九七五年に同志社大学キリスト教主義教育委員会は学内キリスト教主義教育態勢の整備・充実についての学長諮問に答えて、先ず従来の宗教委員にかえて、宗教主任をおくよう提案し、これの実現を見た。この結果、学部ごとのチャペル・アワーが奨励され、文学部が聖歌隊を組織するなどしてその実践にのり出した。さらに宗教部は大学同和教育委員会の業務をひきうけ、宗教部長がその委員長をつとめることになった。同和教育委員会は「本学に

おける同和問題およびその他の人権に関する諸問題を検討し、大学のこれらについての方針、方策の決定と問題の解決とに資すること」を目的として一九七五年に設置された学長の諮問機関であって、宗教部がそのイニシアティブをとるところに同志社大学の特色があらわれている。

同志社大学の一般教育科目の運営は教養学部廃止以来「不完全縦割制」のかたちを取ってきた。これは教養部方式（完全横割制）、完全縦割制のそれぞれに伴う欠陥を是正するための智慧に基づくものであって、他の私立大学にくらべて一〇年も二〇年も進んでいると評価する人もある。しかし同志社の制度に全く欠点がないわけではない。それは一般教育科目の運営に関する責任体制がともすればあいまいになり勝ちになることである。そこで一般教育委員会の下部組織として一般教育長期ビジョン検討小委員会が一九七四年に設置されて、検討を重ねてきた。これは長期ビジョンを模索する委員会であり、大勢は総合科学部方式をめざす方向が打出されるに至った。田辺校地の利用と相俟って、さらに想像力に富んだ具体案が出されるものと期待されるのである。

各学部の教学、研究態勢の発展に当然触れるべきであるが、これは至難のわざであるし、主観主義におちいりやすい。大学紛争の頃に次々に提示された各学部学科のカリキュラムの改革案がその後どのように実践され、内実化されてきたか、最も興味深いところである。一般論からいえば、より多く科目の選択ができるようになったこと、そして一般演習等の小クラスを単位として、教師と学生との間により多く接触の機会が作られたことなどが指摘できる。しかし同時にまた教師側の担当時間の増加を歎く声も聞かれた。また一九七三年の世界的な石油危機以来、学生の授業への出席率がますます上昇したと伝えられている。教師の側の研究活動も着実に進み、各学部や研究所の発行する研究雑誌は盛況を呈し、教授たちの著作活動も伸びている。一九七五年五月現在で教員三八〇名のうち博士の学位の所有者は八〇名（二一パーセント）である。その内訳は神学博士一、文学博士一三、法学博士四、経済学

博士九、工学博士三〇、教育学博士一、理学博士一一、農学博士二、医学博士四、Ph. D. 三、D. Th. 三である（神学部は山崎亨は文学博士・神学博士の両学位をもつ。名誉学位は除外した）。

近年学費が高くなるにつれて、学生のための奨学金を充実する必要が高まった。同志社大学では一九六四年に制定の同志社大学奨学金規定により、多数の学生に授業料相当額の半額を給付してきた。ただし受給者の四分の一をこえない範囲で、経済的に著しく修学困難と認められた者には授業料相当額を給付する。一九七五年には四二八名が授業料相当額の半額を、また一二九名がその全額を与えられた。このほかに学資貸与金（授業料の半額以内）と短期貸付金（二万円以内）の制度や、優秀な成績をおさめている学生に与えられる篤志奨学金、J・D・デイヴィス奨学金、原田助奨学金、星名泰奨学金、黒川芳蔵奨学金、水崎基一奨学金等がある。

同志社大学は一九七四年一月に大学としての募金と学債の発行に着手した。これは施設整備および研究教育資金にあてるもので、さしあたり一九七四年度新入学生の父兄を中心として篤志家の高志を募ることになった。寄附金は一口三万円、学債一口一〇万円、ただし無利子とした。当時の経常費は年間三六億円の規模であり、そのうち収支不足の四億円を市中銀行にたより、収入の九パーセントを学費と入試手数料に依存していたのだった。その上他私学にくらべて同志社の寄附金集めの努力は著しく見劣りがしていた。結果は見事に目標額を突破し、寄附金の応募総数一二〇六口、三六一二万円、学債は一〇七六口、一億七六〇万円が集まったのであった。寄附金は一二〇〇万円ずつ三等分し、それぞれ図書費、機器備品費、奨学基金への繰入れに用いられた。一九七五年以降も毎年新入生父兄あての募金と学債の発行が継続されている。

最後に国庫助成の問題に触れたい。私立大学に対する国庫助成は日本学術会議の勧告によって一九五七年、研究設備を対象として実施されたのがその始まりである。しかし私学助成を憲法八九条違反とする見解が政府に根強く

あったため、経常費補助はなかなか実現しなかった。私立大学が全大学生の八割近くを引受けており、私学の公教育の性格が再認識されるように私学側もねばり強く運動を展開した。このための関西連絡協議会の働きは特にめざましいものがあった。一九七〇年に日本私学振興財団法が成立し、政府は人件費の二分の一補助を目標として一九七〇年度に一三二億円の助成を開始した。この助成額ははじめのうち毎年約五〇パーセントの伸びを示し、一九七四年には六四〇億円に達した。同志社大学に対する助成金も一九七〇年の一億一〇〇万円から、一九七四年には六億四二〇〇万円にふえた。しかしこの金額は一九七四年度の経常勘定予算総額の一四・八パーセントにすぎないのである。一九七七年度の助成金は一四億六六五七万円であって、これは経常勘定収入の一七・九パーセント、経常勘定支出の一九・七パーセントであって、経常費の五〇パーセントの補助にはまだ相当のギャップがある。しかしながら同志社大学が主として中心校地面積の不足のために、計算上かなりの不利益を蒙っていることもまた事実なのである。この意味からしても、田辺校地を大学設置基準に定める中心校地化することは至上命令だといえるのである。

第三章 中学・高等学校

一 同志社中学・高等学校

一九四五（昭和二〇）年八月一日、ようやくにして戦争が終った。満州事変（一九三二年）の勃発までをふり返れば、それは同志社中学校にとって、まったく暗く長い隧道の中の歩みであった。

中学から中学校へ

終戦二年前の一九四三（昭和一八）年四月より、同志社中学は中学校に変わっていた。大正時代の自由な空気を吸って成長発展していた中学は、徴兵猶予、上級学校進学等の恩典を与えられていたにもかかわらず、「中学校令」による中学校ではなかったのである。理由は明治前半期に苦しんだのと同様に、キリスト教主義に基づいて、礼拝を守り、聖書を「修身科」で教授していたからである。しかし府の学務課を通じての政府や軍の圧迫はついに、少なくとも表面上は、キリスト教主義を抜き去り、「中学」を「中学校」に変えたのであった。その頃、すでに礼拝はグラウンドにおける朝拝に変わっており、皇居遙拝について、祈禱を付加するという変則的なプログラムに移行していた。それに一九四四（昭和一九）年より四五年にかけて、三年生以上の

生徒は勤労働員で、指導の教師とともに学校を離れていて、校内での授業も十分に行われてはいなかった。この移行は暗い時代のやむをえない成行きのように思われたのであった。しかしこの間も、彰栄館の二階で、教師達による祈禱会が行われていて、キリスト教の灯は消えることなくもっていた。したがって玉音放送による終戦の詔勅は、同志社学園の教職員や学生生徒に對して、しばし虚脱の状態を与えはしたが、やがてそれは、学園復興への希望を告げる鐘の響きのように思えてきたのである。

敗戦当時の中学校

一九四五年九月より、学園には、そのように希望に溢れた学生・生徒たちが教職員とともに復歸した。同志社中学校教職員の中にも、数人の戦死者はあったが、動員先や海軍飛行予科練習生から戻った上級生をも喜び迎えて、二期期の授業が開始された。永く抑圧されていたものからの反動としてか、同志社に對する社会の期待も大きくふくらんだ。食糧事情の極端な悪化にもかかわらず、学園の雰囲気は極めて明るかったのである。

同年三月、野村仁作校長は定年で引退し、前窪勝之助教頭がその後を継ぎ、校長となっていた。しかし戦後、彼は家族の不幸と、急激に変化する社会状況の中の学校運営の困難さが原因となつて発病した。そして長期休養のやむなきに至り、一九四七（昭和二二）年の春に校長の任を辞した。そのため校長の事務を代行していた加藤延雄教頭が、後任の校長になった。

新学制の実施

一九四七年四月より、アメリカの教育制度の波を受け、日本においても、六・三・三制の学制が敷かれることになった。しかもそれは画期的な男女共学の制度によるものであった。総長牧野虎次は共学制を支持し、公立と歩調を揃え、中学校と女学校を合併して、共学の新制中学校および高等学校をつくるように指導した。女子部においても、はじめはこの方針に沿うような姿勢であったが、後になって女子教育の重要

性に思い至り、現実面に於ける合併の困難さをも予測して、一九四七年一月になって、反対意見を表明した。

新学制にもとづく学校の組織変更や新設について、一九四六（昭和二一）年一月以来検討していた臨時学制調査委員会および校長会では、翌一九四七年になって、「現在日本の社会事情、家庭事情、本学園の設備等を考慮して当分のうちは男女共学制の一学系と女子のみの学系と両学系を設置する」（一九四七年一月）という結論を得、すでに新制中学校（共学）と女子中学校は同年四月に発足していたので、「男子高等学校及女子高等学校を昭和二十三年四月に設置する」（同右）という結論に達した。

この「新学制案」を受けて検討した臨時理事会（一九四七年二月一七日）は、ほぼ全面的に右の案を承認し、新制高校については、「現旧制中学校及女学校四、五年生を夫々一、二年とし、本年の中学校卒業生で三年を組織する」ことも、原案のまま承認した。

すでにふれたように中学校の方では、一九四七（昭和二二）年四月より単独で、男女共学の新制中学校として発足したのである。これは女生徒の家庭科教室も不備のまま、若干の危惧をともなった出発であったのだが、結果としては大きな成功を見た。京都や他府県より、優秀な男女児童八五〇人の志願者を集め、その中から、三クラス一五〇人が入学試験に合格した。一年生が少数しかとれなかった理由は、大学生達が続々復学してくる中で、新制高校の併設をも次年度に予定していたため、今出川校舎が狭隘にすぎたからである。この年の入学人数は六倍近い競争率となり、これは今日までの長い歴史を通して最も高いものであった。

ちなみに、『昭和二十四年度同志社中学校（男女共学制）入学案内』には、次のように中学校の教育方針がうたわれている。

同志社は七十余年前、新島襄先生によつて創立されたのであります。（中略）先生は国というものは人民の教育

によつて左右されることを痛感せられ、その教育も単なる知識技術を教授するのみでなく「良心を手腕に運用する人物」を養成しようと考えられたのであります。そのためには基督教主義の教育を以てするのでなければ不可能である、との確信を持たれ、同志社の基督教主義教育が建設せられ、毎朝礼拝をなし、聖書を正課としたのです。今や我国は世界への窓が開かれ国際的人材を必要とする時、本校に於ては英語科を重視して、これを必修科と定め、外人教師もその指導にあたり、大いにその特色を発揮して居ります。

此の時にあたり、先生の同志社立学の精神を省みてみますと、先生が如何に先見の明をお持ちであつたかが偲ばれるのです。男女共学にしろ、中学校に於ては一昨年度から率先実施して居ますが、大学では既に早くより行われていたもので、それも既に先生の御構想の中にあつたのです。且つ先生の教育理想であつた、中学校より大学に至る一貫した系統を、此の機会に実現させるために、同志社上級学校では中学校卒業生を無試験にて入学せしめることになっています、自由民主の教育はここに完成を見ようとしているのです。現在こそ、同志社が本来の使命を果すべき時代です。即ち同志社は若い人々を世界文化に貢献させるべく、その全身に良心のみち溢れた、しかも学問と良識とを兼ね具えた人材を、生み出すことを方針として居るのであります。

一、募集人員 第一学年 約二百名

男子何名、女子何名と定めず、男女合せて二百名とします。(下略)

同志社高等学校 新制高校は新制中学より一年おくれて、一九四八(昭和二三)年四月に中学と同じ校域で出発し
の発足 た。先の臨時学制調査委員会および校長会で設立の検討が行われ、中学校の評議員会などでも

しばしば議題にされていた「学校日誌」一九。以上の会議以外に高等学校委員会が設けられ、主として大学予科長室で会議が行われ、中学校からは校長加藤延雄と教頭久保政義が出席していた。そして、一九四八年一月一五日の

入学応募状況・在学生数 (1948年4月28日現在)

学校別	人数	入学 定員	応募 者数	入学許 可者数	在学年次内訳			総数
					1年	2年	3年	
高等学校	入学	300			241	210	140	591
	編入		324	118	49	23	46	118
	計	300	324	118	290	233	186	709
中学校	入学	200	男603 女74	182 51	233	167	251	651
	編入		15	5		3	2	5
	計	200	692	238	233	170	253	656

校長会の席上、四月より新設する高等学校の校長には大学予科長山田貞夫、教頭には中堀愛作(中学校教諭)を任命することを理事会で決定した旨、総長湯浅八郎より報告があった。また女子高等学校校長には女子中学校校長末光信三を任命する旨あわせて報告された。

一九四八年四月八日付で、同志社は高等学校設置認可および旧制中学校の廃校について京都府庁へ申請し、同年七月一〇日に女子高等学校、商業高等学校とともに設立の認可を得た。しかし、それ以前の四月一日から教育活動や学校運営は開始しており(中学と高校の事務室、校長室などは分離)、四月一七日に高等学校の開校式を行なった。

山田貞夫校長は新制高校を旧制中学の延長と見ず、むしろその水準を旧制高校の高さにまで近づけることを意図した。従って教員の過半数は中学校からの移行者であつたが、新任の教師としては大学、専門学校の教職経験者を何人も迎えたのである。開校の翌一九四九(昭和二十四)年度の教員数は、高校専任二四名、嘱託七名。中学専任二二名、嘱託二名であつた。

生徒は中学三年卒業生を新一年生とし、旧制中学の四年、五年修了者をそれぞれ新制高校の二年、三年に移行させた。しかし旧制中学五年から多数の者が大学予科に進学したので三年生に大きな空白ができ、それを埋めるために新制高校三年生数十名を外部から募集した。しかしそれでも高校三年は三クラスしか編成できなかったのである。この三年生は彰栄館の二階、二年生は明徳館の位置にあつたバラック教室で、一年生は現在の大学図書館の場所を占めていた聚芳館^{しゅうほうかん}で授業を受けた。高

等学校を開校した年の中学および高校の生徒数は別表のとおりである。

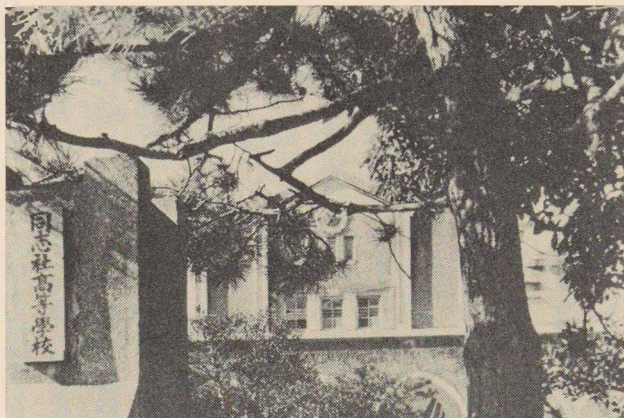
しかしこの狭い校域に、校長も別々である中学と高校が併立共存することは無理であり、両者の成長発展はこのままの状態では望めないものと思えた。そのとき折よく一つの転機がめぐってきた。同志社大学が総合大学として一層の拡張充実を計るため、当時岩倉にあった経済専門学校(旧高等商業学校)を大学商学部に移格させて今出川校地に移すことを企図した。新教育制度への移行と学校・学部の新設について検討してきた校長会は、一九四七(昭和二十二年)一月に、同問題との関連で校地利用については、岩倉校地へは前期大学(Junior College)が全面的に移ることを決定し、同年一月一七日の臨時理事会も、校長会の決定にそって、「岩倉地域——原則として法経、商、文、神、理工五学部のジュニア・カレッジ。総合運動場」としてこれを利用するという結論に達した。しかし、大学予科生徒の反対運動もあり、予科教員の積極的な支持も得られず、その実施は持ち越しになっていた。そして、一九四九(昭和二十四)年二月一九日の常任理事会で、「現在同志社の有するあらゆる教育資源を全幅的に活用せねばならぬ」という総長湯浅八郎の考え方にもとづき、岩倉校地については次のとおり決定した。

(イ) 四月新学制実施の暁に於て、商学部及経済専門学校は今出川校地に置く。従って現在の岩倉校地校舎を使用してゐる学生は全部今出川校地に移る。

(ロ) 高等学校を岩倉校地に置く。

(ハ) 中学校を岩倉校地に増設する。

右の決定にもとづいて、経済専門学校は大学商学部となつて今出川校地へ移り、新設して二年目を迎える高等学校が、岩倉の新天地に飛躍を求めて転進することになった。移転条件として大成寮の高校への委譲など、いくつかの約束事項があったが、結果としてはそれらが満たされなかったにせよ、あの広大な地域を高校が占めたというこ



移転当時の高校校舎（旧高等商業学校校舎）

とは、現在の点在して並び建つ校舎や二つの広いグラウンドが示すように、それを償って格段の余剰があったと言える。なお、右の常任理事会の決定事項のうち、い中学校の増設は実現しなかった。

創業期の教育

一九四九（昭和二四）年四月、新制高等学校は岩倉白鷺ヶ原の経済専門学校の校舎へ移転した。三年生は新制高校二期生であったが、四クラス、その下の二年生、一年生は約一〇〇名の外部からの編入生を含めて、六クラス編成になっていた。

この年より、チャペル竣工前年の一九五四（昭和二九）年までを、新制高校の創業時代と呼んでよいであろう。一九五一（昭和二六）年六月に、山田貞夫校長は香里中学・高等学校長として岩倉を去り、そのあとは中学校長加藤延雄が高校長兼務という形で、後任の席を占めていた。

この創業期の特徴は質素な本校舎、講堂と周囲の美しい自然の中で、教師と生徒が一体となった教育がほどこされていたことである。経専校舎は講堂を含む中央部のみが鉄筋で、両翼の教室は木造モルタル壁で、年毎に補修を必要とする状態にあった。しかしそれを圍繞する比叡や北山の連山、小動物が棲息する草深い田園から、生徒達はつねに自然を呼吸し、野性的な気質を自ら育んでいたのである。

教員団の諸機構はいまだ民主化されておらず、旧態のままで、会議の数も少なかったが、それによって生ずる余剰の時間を、教員は生徒と胸襟を開いて語り合い、ともにスポーツを楽しむことに当てていた。高校一期生が創り

だした「どんち」はその後一〇年余もつづき、贅沢さを加えるにしたがって、その意味と価値を失ったのであるが、初期の頃のそれは岩倉高校教育の一つの象徴を示すものであった。「どんち」というのは、運動会で担任の教師を乗せてかつぐ山車だしのことであって、教師も男女生徒も一週間、校庭に材料を持ちより、その製作に精魂をこめたものである。

整備されない校舎と、未組織で個性的に動いた教員団と、食糧事情の悪さが却って人間と人間との触れ合いを増して、そこに「手造りの教育」の良さを生んだのであった。このような教育を受けた生徒達は、人間的にも、学力的にも良く成長し、同志社大学へも多数の優秀な卒業生を送ったが、国立大学へも一九五四（昭和二九年）の春には、東大五名、京大一九名の合格者を出した。こうしたことの背景に、岩倉移転後、三年目にして香里中高開設の準備に奔走した山田校長と、距離的に離れた中高を兼務して多忙であった加藤校長を、精力的に補佐した高橋勘ら教諭陣の努力があったことを忘れてはなるまい。

なお、高等学校が男女共学になるのは、一九四七年三月に中学校へ入学した生徒が卒業し進学する一九五〇（昭和二五年）四月からである（「同志社高等学校案内」昭和二五年度）。それまで女子の編入学は受付けていなかった。男女共学の第一回目の卒業生が出たのは、一九五三（昭和二八）年三月であった。

ちなみに、一般高校よりも高い水準の高校教育を目指した山田校長の意思は、聖書（三単位）、国語（一五単位）、体育（九単位）、外国語（一五単位）、英語会話（三単位）、数学（一〇単位）、理科（一〇単位）、社会（一〇単位）、芸術（二単位）といった必修科目以外に、自由選択制として、ドイツ語、フランス語、哲学、数学特論、理科特論、国語特論、英語特論、芸術特論などの講座を設けていた点にもうかがえる（一九五〇年度）。教員スタッフも優秀な人材を揃えたのであった。

施設拡充と機構改革の時期 高校創業期の良さは「塾教育」の延長がそこに生かされた点にあった。しかし日本の社会状況が戦後の荒廃からようやく立ち直って、興隆の氣運に向かったとき、古い形態の教育は「形」の上

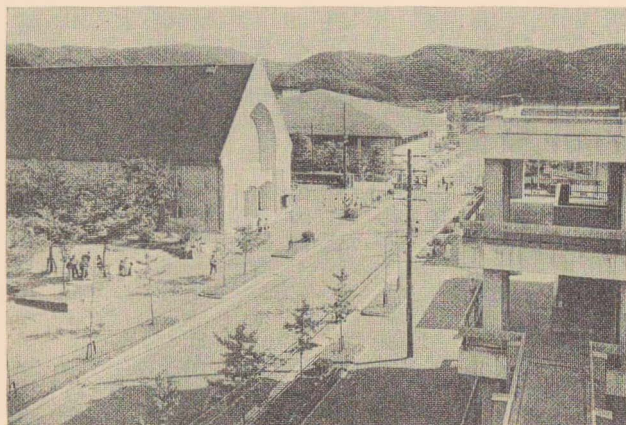
からも、「内容」の点からともはや許されなくなった。

木造の本校舎も老朽していたが、何よりもまず、同志社教育の根幹であるキリスト教主義教育の基盤としての礼拝堂の建築が急務であった。そこで父母の会の力強い支持を得て、その寄附金を主たる財源とし、一九五五(昭和三〇)年五月、ゴシック風鉄筋コンクリート建築の白亜の礼拝堂が本校舎の北側に落成した。それ以前は交通機関の不便や講堂の不備もあって、朝の礼拝が一時間目のあとに行われたり、週三回に縮小されたこともあった。しかし新しいチャペル完成以後は、同志社普通学校時代からの永い伝統を守り、毎朝始業前八時二五分から行われるようになった。

つづいて理科教育の重要性が考慮され、一九五六(昭和三一)年、チャペルの西南に鉄筋の理科教室が建築され、物理・化学の授業に当てられた。なお、現在の理科教室は、生物・地学教室をも含めたものとして、一九六三年に増築されたものである。

中学、高校の形態が単純から複雑化へと進むにつれ、校長の両校兼務は無理になり、加藤校長は一九五六(昭和三一)年四月より中学校長専任に復帰し、後任として同志社教会の牧師茂義太郎が牧師職兼任のまま校長の任に就いた。現職の牧師が校長であることは、これによってキリスト教主義が固く貫かれた点に於て、一〇〇年の歴史をふり返ってみても瞠目すべきことであった。

しかしやはり多忙な校長職が、他の重要な任務と兼職であるということは、その負担を余りにも大きくした。そこでそれを支えるために、また社会の流れにも沿って生まれたのが諸機構の改革である。一九五九(昭和三四)年に



高等学校のキャンパス（1970年頃）

行われたこの高校の機構改革は、それが逐次、中学校、女子中高、香里中高へと波及していったことを考えても、これは一つの画期的な事件であった。機構改革の意図するところのものは、(一)に「教育上の諸成果を更に発展せしめ、生徒の学習、生活両面の指導を充実すること」であり、(二)に「機能の明確化、適正化をはかること」であり、(三)に「人事の交流を試みること」であった。またその意図にしたがって、それまで任命制であった校長と教頭は、

教員の選挙によって選任されることになる。教員会議が教員の意志決定機関となり、その後に生まれた教職員会議は、学校運営に関する最高決議機関となった。従来は校長の諮問機関である「評議員会」のみが存在していたが、これを解消して人事委員会と財務委員会が生まれた。両委員会は依然として諮問機関ではあるが、実際は校長と委員会両者の協同計画で諸事が運ばれた。その外、校務については、総務部など新しい部も生まれ、各種委員会も整備されていた。教員達の上に、授業以外のもう一つの多忙な責務が増し加わったのはやむをえないことであろう。諸機構の改革が一応の落着をみると、視点は校舎の充実に向けられねばならなかった。一九六三（昭和三八）年をピークとする生徒増加の波が真近に迫っていたが、その後にはまた生徒が漸減してゆく谷間が控えていたのである。この変転に対応するためには、旧態依然たる老朽校舎に代わって、斬新で広大な新校舎の建築が必要であった。

かくして一九五八年一月二九日に、鉄筋コンクリート三階建の桑志

館と鶏鳴館の二棟が竣工した。これによって高校校域の重心が南校地から北校地に移った。また柏心館の建設準備が一九六一（昭和三六）年からはじめられ、一九六三年三月一五日に管理棟として完成された。柏心館建設とともに、前にそこに位置していた醇化館は白鷺会館の東南に移転した。ここには、加藤延年教諭が普通学校時代より約半世紀にわたって苦心蒐集した多数の動物標本が納まっているが、その湿害からの保存や活用方法が課題として残っている。

生徒側に見られる断層

と生徒会運動の時期

まだ体育館の建築を残してはいたが、一九六三（昭和三八）年に、一応の校舎施設の拡充を見た。あたかもそのころから、生徒の生息に、一つの断層とでもいうべきものが起きていたことに気づいたのであった。

一九六四年に修学旅行と運動会の「どんち」が廃止された。修学旅行は高校の岩倉移転後二年目から始まった。物の不自由な中を押して決行された四国旅行は、戦争の後遺症が残っていた生徒達に、それを突き破るような解放感をもたらした。それ以後、主として九州方面に、二年生若しくは三年生の団体旅行がつづけられていたのであるが、「修学」の意味の薄い、親睦だけの旅になっていた。随行する教員の監督指導の苦勞も少なくなく、小益多害という理由で廃止されたかに見えた。しかしすでに生徒の中に、大きな集団で旅行することにうとましさを感じる気運が生じていたのである。交通機関も便利になり、生徒は心の通じ合う小グループの旅行の方に関心を寄せるようになってきていた。これは良かれ悪しかれ伸びてきた個人主義の表われでもあるだろう。

岩倉「どんち」の廃止の背後にも同じような理由があった。表面の原因には一、二の不幸な事件もあり、また「どんち」製作の場所の不自由さもあったのだが、製作には多くの費用はかけるにしても、生徒が教員と一体になって燃やす青春の情熱は、開校当初よりはるかに薄れてきていたのである。

もう一つの目立つ「動き」が生徒会にあった。そしてそれは全国的に吹き荒れ、高校をも巻き込んだ大学紛争と時を同じくしている。大学紛争は一九六八、六九年に頂点に達したが、高校の生徒会はその余波を受けてか、礼拝への自由参加要求や、礼拝は学校行事か宗教行事かなど、礼拝問題を取りあげた。一九六二（昭和三七）年八月に定年退職した茂校長の後任、高橋勘校長はそれに対して、礼拝は「立学の精神に基づいて厳守すべき」であると述べるとともに、全校礼拝に、学年別のクラス礼拝も交えた新しいプログラムを生徒側に示した。しかしそれによる生徒会との話し合いは噛み合わないまま二、三年にしてこの問題は自然消滅の形となってしまった。生徒側としては、学校が創立以来の基本線を崩すはずがないことをはじめから覚っていたのである。

一九七〇（昭和四五）年の「七〇年安保闘争」が全国に拡大化されると、その影響がまた別の形をとって高校を刺激した。日本経済は高度成長期に入っており、学費も年々増し加わっていたが、それに対する生徒会の「学費値上反対運動」がそれである。これは一九七一年からはじまり、数年つづいたのであるが、同年一月一六日には生徒会が無期限ストを決議し（同二五日、中止を決議）、また、夜間に学費問題で教員会議が行われている最中に、柏心館の外で、生徒達がロウソクを点して示威運動を行なった。一九七一年四月に就任した浦野信夫校長が、チャペルで生徒達に対して「学費値上」について説明しているときに、大学の学生等が入堂を主張して押しかけたこともあった。このような生徒の一連の行動の背後に、同志社大学学生の動きがあったことは確かであろう。しかしふり返って考えれば、それらすべては高校生達が青春の情熱を焼きつくそうとする一つの場として選んだものでもあったろう。また大学紛争の多くの場合がそうであるように、高校に於ても、大部分の生徒は比較的冷静にその高揚と鎮静を眺めていたのであった。

着実な進展の段階

前述のような一部生徒の動きはあったにせよ、同志社高校は外觀、内容とも、着実な進展を見せていた。一九六六年に、多年の要望と懸案であった体育館が堂々たる姿で旧校舍跡に竣工した。また一九七五（昭和五〇）年に柏心館の上に視聴覚教室などが増築されたが、これらによって、高校としての施設は完備した。かくて同志社高校はその広いキャンパスと余裕をもって並び建つ校舍建築とをもって、全国でも屈指の高校だと言いうる施設・設備をととのえたといえよう。

一九七一年四月、高橋校長が定年退職の後、後任校長に浦野信夫教頭が就任した。専任教員は四九名、職員、講師を含めて九七名の多数に達している（一九七六年現在）。生徒数は一〇九〇名、男女生徒の比率は大体に於て二対一である。学級編成ははじめ、三学級ついで四学級であったが、現在では八学級にふえ、一学級の定員は若干減り、四〇数名になっている。卒業生は大部分が同志社大学へ推薦入学によって進学するが、志望方向の異なる理由もあって、国公立大や他の私大へ進む者も若干ある。一九七六年度に国公立大へ進んだ者は、現役より一七名、浪人から一五名であった。

同志社大学の各学部へ進む者、国公立大学を希望する者のそれぞれの場合を考慮して、高校は三年生に対して独特のカリキュラムを組んでいる。つまり必須科目の外に、自由に選択できる特論科目が設けられているのがそれで、これは、英、数、理、国、社に加えて、キリスト教特論、音楽・美術特論、ドイツ語、フランス語など多様な科目に分かれている。高校の創業期にくらべると、現在の生徒達は充実した授業を課せられており、予習、復習の外に、レポートや宿題などで追われているのが実態である。

しかし一方、クラブ活動も豊富な施設を利用して盛んであり、学芸部は一二部にすぎないが、運動部は二三部もあって、ラグビー部、野球部をはじめとして毎年のように好成績をあげている。

野球部ユニフォームの胸のマークD・Cは同志社普通学校時代のそれと同じで、Doshisha Common Schoolを意味する。同志社高校はその誇るべき歴史と伝統の重さを荷って邁進すべきであろう。

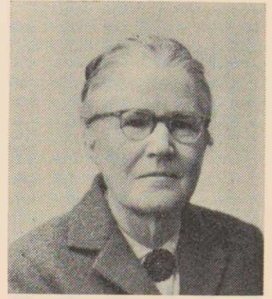
新制同志社中学校 一九四七（昭和二三）年四月、新制同志社中学校は共学制度によって出発した。これは二つの発足

意味に於て、大きな変革であった。一つはもちろん男女共学であるが、もう一点は旧制中学過去の古い教育の体質を打ち破るためのものであったろう。同志社では、そのような意味はなくても、それはやはり危惧と不安をとまなう踏み切りであった。

中学校でははじめ、女子部と合体で、共学制に入ることを用意していたが、前述のように共学出発二カ月前にその企図が崩れた。しかしすでに共学制による出発が世間に公表されていたので、もはや踏み止めることは許されず、加藤校長、久保教頭をはじめ、全教職員の一致協力によって、中学校は新しいルールの上を滑りだしたのである。入学志願者は時勢の流れの恩恵を受けたこともあって、案じられていた危惧を払拭するように殺到した。女子教育に必要な家庭科教室や更衣室などが施設改造という応急措置で補充された。

男女共学に踏み切った年は、女子の編入学は募集せず、出願受付は一年生に限定した。中学校としては普通学校以来はじめての試みであったが、案ずるより産むは易く、女子生徒たちは立派に学校の期待にこたえてくれた。大学の『同志社学生新聞』第一三三号（昭和二年一〇月一日）には「新制中学その後」と題して、次のような記事を掲げている。

新制中学発足よりここに半年。教室もない机も不足、教官も頭数をそろえただけの間に合せという公立中学に比べ、クロバーの学風をしたって集った同志社中学一年生は、従来の私立の観念を越えた優秀生徒ばかりで、恵



A. E. ゲイン

まれた諸設備と良き教官の指導を受けて、すくすくと遅く生長している。

さて男女共学のその後の成果如何。現在生徒数は男子一四五名女子三一名で女子は三クラスに均等に分けられている。成績については第一学期の結果を見ると面白い現象がうかがわれる。即ち総平均点女子七八・六点で男子の七八・〇点に優るが、しかし最優秀も最低位も男子で女子は中位に塊っている。総体に女子は授業態度も頗る几帳面で点取虫の型に属する。これは両性の本質的な差異に基因す

るものと思われるが、各学科別の成績を見ると、習字・図画・手工等の技術面では、男子に優るは当然乍ら暗記物の歴史・地理及び英会話等何れも男子に劣り、理数科では男子をリードしているのは意外である。授業内容も以前より程度高く時の流行とはいいい乍ら英語等は特に優秀である。先生の談によれば入学当初女子は男子の影響で言葉が粗雑になったが、男女間は頗る明朗で、学校当局が心配して採った処置も、却って嫌うくらいで男子上級生までが紳士的な態度をとる様になった事は男女共学がもたらした意外な副産物であった。女子の入学は本人及び家庭の希望によるが、先生の反対を押し切って受験したというものも多数あり、女子は一般に進歩的であるといえる。一般に生徒の向学心は旺盛で、新制中学の前途に明るい光明を与えている。

数名の有能な女子教師も迎えられたが、中でもA・E・ゲイン(Alice Elizabeth Gwinn)宣教師が一九四七(昭和二十二年)に同志社に復帰し、中学校の専任になったことは、精神面に於ても、英語教育に於ても、中学生に対してどれほど大きな影響を与えたか計り知れないものがある。

もう一点は「中学三年制」であるが、これはまったく新しい変化であった。旧制中学とちがって、ロウティーン

れて、学友会活動に於ては下積みの域を出ることはなかった。教育面でも、旧制中学の三年生は中堅というよりも、五学年の中の一つの段階にすぎなかった。それが新制になると、三年生は最上級生であり、生徒会の責任者の地位を占め、各クラブ活動の中にあつて、下級生の指導的立場に立たねばならなくなった。年齢は一五歳のままなのであるから、各活動の急速な成長と展開はいささか背伸びの無理な姿勢を強い、教師の援助を必要としたことは当然であつた。

同志社高校の場合、その発展のため新天地を求めて岩倉へ移転したのであるから、そこに開拓創業の一時期があつた。また新制高校の三年は旧制高校、或いは大学予科の一年生の年齢であつたから、生徒会活動が主体的に盛り上がった時期もあつた。従つてそれを年代的に区分することが可能であつたが、新制中学の場合は、高校のように年代を染分ける「動き」が見られなかった。それ故、校長は加藤延雄（一九四七—五九年、ひさながのせいしゅ）、久永省一（一九五九—六七年、ひさながのせいしゅ）、信楽健三（一九六七—七五年）、久保誠三（一九七五年—）と移つていったが、これによつて区画するよりも、施設面、教員の組織面、生徒会活動の面などに於て分ける方が適當だと思われる。

施設面の拡充 普通学校時代より中学の教室として使用されてきた校舎は、時代によりいろいろ変動はあつたとその経緯が、一貫して中心となつてきたものは彰栄館、チャペル、立志館、理化学館である。

理化学館は明治末期にハリス理化学校廃校とともに、普通学校のちの中学（一九一六年四月改称）の理化並びに普通教室として使用されてきたが、戦争末期に生まれた工業専門学校に譲られ、今はそのまま大学工学部の実験室・研究室および事務室になつてゐる。

聚芳館は一九二二（大正一一）年九月、鈴木吉満中学長時代に建築されたが、これは終戦まで中学校の教室として用いられ、以後高校、経専、商業高校が使用し、そのあと取り壊されて、現在は大学図書館がその場所に建設さ

れている。

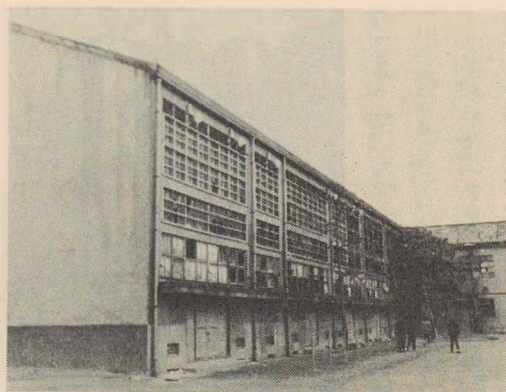
醇厚館は野村仁作中学長時代の一九三九（昭和二四）年六月に、チャペル北側に新築された。この建物はこれまで普通教室、理化教室、工作教室など多方面に利用されてきており、現在は大学工学部と中央で折半した形になっている。

チャペルは一八八六（明治一九）年六月の竣工時そのままの姿で、今も国の重要文化財として存在しているが、毎朝の礼拝がここで行われ、また、明治以来の卒業生達の心の故郷ともなっている。

彰栄館は一八八四（明治一七）年九月一日の献堂で、同志社はおろか現存するものでは京都でもっとも古いレンガ建築物であるが、一九五一（昭和二六）年、中学校は教室不足を解消するため、それに接続して、鉄筋三階建地下一階の新彰栄館を建築した。これは教室のほか、校長室、事務室などを含み、同校の管理棟となっている。

旧立志館は一九一〇（明治四三）年八月、八教室の木造平屋建として竣工した。建設当時は清新なスタイルであったこの建物も、半世紀に近い風雪に晒されて老朽化していたが、一九五六（昭和三一）年にこれを取り壊し、同志社創立八〇周年記念行事の一環として、新立志館東部分が落成した。つづいて一九六〇年、中央部分が増築され、さらに一九六九年になって西側部分が烏丸通に面して建築され、これによって新立志館は完全な形を整えた。

体育館の問題はかなり古くから取り上げられていた。明治末期にすでに「雨天体操場」の必要が理事会の議事項目に載せられているのであるが、財政上それがかなわず、グラウンド北方の武道場である講武館を代用し、大正時代と昭和前期はそれで過ごした。そして戦後、一九四八（昭和二三）年になってはじめて、旧立志館の北側に、当時京都としては最大の体育館が建設され、翌四九年一月一七日の落成式には文部大臣下条康麿も臨席した。この体育館は、中学・高校共用ということで、父兄会役員とも一体となって、一九四七（昭和二三）年一二月から募金運動を開



旧体育館 (1948—1976)

始して出来上がったもので、落成式も両校共催で挙行されたのである。数年後に距離の関係で中学校がこれを譲り受け、中学の新島会は磯田義治から買受けた岩倉校地の新島記念館の敷地を高校に譲る、といったこともあった。しかしその体育館も三〇年の歳月を経て、損傷を来していたが、久保誠三校長らの尽力で、百周年記念事業として、一九七七（昭和五二）年に新体育館が堂々たる姿で完成した。それと同時に図書館を含む日新館もそれに接して竣工した。

運動場も数々の変遷の経路を辿っている。明治末期に三度目の拡張が行われた運動場は一応の広さをたもち、中学・大学の共用グラウンドとして、大正、昭和前期を通じて使用されてきた。しかし戦後間もなくグラウンド南側に中学校体育館が建ち、同館の北の線に沿って東側に大学の寧静館（一九五六年）が、北方には工学部博遠館（一九六四年）が竣工し、そしてすでに東側に移動していた講武館が増改築されていた。このようにしてグラウンドは三方を建築物に囲まれ、大幅に縮小化されてしまった。狭隘になったこのグラウンドから、大学のクラブ活動は岩倉に移動していったものの、なおグラウンドは寧静館方面から博遠館を往復する学生達の通路になっていた。運動場は中学生の体育の教室であるため、何としてもその完全な確保が必要とされた。そこで信楽健三校長時代に、校長の大きな努力と、スポーツに理解のある星名泰大学長の襟度によって、鉄製ネットがグラウンドの周囲に張りめぐらされ、この問題は解決を見たのであった。



中学校キャンパスと生徒たち

のであった。大学などの運動会が行われる日は、騒音のため中学の授業は全日休講にせざるを得ない状態だった（『中学校日誌』）。

由良のキャンプサイト。はじめ中学の由良キャンプサイトは、一九三七（昭和一二）年に、校友大塚（寺田）正男、小尾栄松おびんもちゅうから土地と資金の寄附をえて開設され、戦争の中期まで中学生達の夏の精神修養の道場になっていた。由良でのキャンプは戦争激化のため途絶えていたが、一九四八（昭和二三）年の夏になって、理事島本徳三郎と校友篤志家の所有地寄附によって、現在の由良川河口の景勝の地に移転した。さらに加藤延雄校長、久保政義教頭の努力によって地所の拡張や植樹が行われ、次いでその後の改修増築もあって、現在のような数棟の宿舍からなる立派なキャンプサイトが完成した。毎年の夏期休暇に、若い中学生達がこの地で美しい自然を通して心の修養と肉体の鍛練を行なっている。

高等学校を新設した年（一九四八年）は、すでにふれた通り今出川校域に両校が同居し、校長室および事務室は、高校は彰栄館、中学校は立志館であり、高校の教室には立志館の一部、醇厚館の一部、彰栄館、聚芳館、理化学館南側のバラック校舎などを当てることになっていた（『同志社高等学校設置認可申請』）。実際には、高校は主として彰栄館と聚芳館、中学校は立志館と醇厚館を使用していた。また、前述のようにグラウンドについては、戦前から大学なども共用であったため、面積が狭いと監督庁からしばしば注意を受けてきた

生徒及び生徒

会の動き

新制中学発足当時に殺到した志願者の数は、その後数年間好調を維持していたが、共学五、六期生六、七〇年にベビー・ブームのピークを迎えた頃には、志願者数が千数百名に達したこともあった。その後、一九六五年前後の学童減少期に入り、志願者数が定員の二倍程度にとどまる年もあったが、中学校ではそのあと日本が高度経済成長期に入るとを予測し、一九六七（昭和四二）年度より募集人員を二〇名増して三二〇名とし、一年八学級、一学級四〇名の定員とした。これは米英ソなどの先進国の中学校では一クラスの定員三五名が常例となっていることを考え、教育効果を意図したためであった。それより一〇年間、志願者は徐々に増加し、倍率は二・八倍程度に落着いている。これは同志社中学校に対する世間の評価が安定してきたことを示すものであろう。

このように選抜されて入学する生徒は比較的高い水準の知能と学力を備えているので、教科内容の程度も若干引き上げた高さに置かれている。生徒会やクラブ活動も、生徒自身の持つ能力と、高校への無試験推薦制度から生まれる余裕により、活発な動きを見せてきた。ただ一九四七（昭和二二）年度より発足した六・三・三制は日本に於ては始めて一〇代を一五歳をもって区分したため、最上級生になった一四、五歳の少年少女達には戸惑いがあった。それ故、新学制発足後数年は彼等にとって暗中模索の時期がつづいた。例えば中学生徒会が組織され、出発したのはやっと一九五三（昭和二八）年度からであった。それまでの六年間は、クラス委員長（級長）から成る生徒評議会というものがあったが、いまだ未熟で、自主的に物を考え、事を運ぶ段階には達していなかった。一九四九（昭和二四）年九月一日に『同志社中学校学校新聞』（中学校学友会）が発行され、以後『同志社中学生新聞』（中学校新聞部）となるが、同紙には早くから生徒個々人の意見や、クラブなどの活動状況も掲載されている。同『中学生新聞』第五号（一九五〇年七月八日）は、生徒委員会について次のように報告している。

昨年の二学期、組織の再編成を行なった生徒会では、新しい意気のもとにその活動を続けて来たが、新学年を迎えて、六月一二日総会を開き、本年度の組織と方針を明らかにして新発足した。本年度は昨年度に習い、各クラスより大々三名宛の生徒委員を選出し、また学友会各部の理事をこれに加えて生徒委員会を作り、校内全般に渉る風紀、美化、学芸、運動の四部門にわたってそれが向上醇化を計り且つ実行する。現在生徒委員二七名、学友会理事一二名、総員三九名、内訳は風紀一四名、美化七名、学芸七名、運動八名がそれぞれの任務に当たる。一九五三（昭和二八）年度の三年生が、二年生の学年末に腹案を立て、春休みに他校の生徒会の調査に出かけ、持ち帰ったものを基として「生徒会憲章」をつくり、五月の生徒大会に発表して、生徒会が誕生した。もちろん中学生だけで自主的な立案や「動き」のすべてが可能なわけがなく、背後には前年度就任した本宮啓教諭の配慮と指導があった。

現在の「生徒会憲章」の大部分が当時のものであるから、これは誠に意義深い、画期的な出発であったと言える。この若い生徒達の自主的な動きは、その後のクラブ活動や学園祭、その中の運動会、演劇会、音楽会などにも生きつづけてきた。その裏側に教師による誘掖があったにしても、このような生徒の自主性は戦前の教育の場では見られなかったものである。

生徒会発足三年目に、女生徒が生徒会長に選挙された。この年度には、生徒会もようやく円熟してきて、彼らは「我等何をなすべきか」というテーマで、生徒全般に問いかけ、その結果として、校内刷進運動や社会救済のための募金運動などを行なった。幼い子女達が自主活動など」と軽視さるべきではなく、彼らがこのように自ら育くんだものが将来になって大きく羽ばたくにちがいないし、事実年を追ってそれは実証されているからである。中学教師の日々の生甲斐は、中学生時代が人間の骨格形成の時であり、その教育にたずさわっていることにある。

このように生徒側からの盛り上がる力は、一九六五(昭和四〇)年に発刊された二〇〇ページを超える『きざやゆげ(年刊)』となって現れた。これには生徒の作文や自由研究、クラブ発表などが編集されていたが、更に翌一九六六年には、生徒会よりやはり二〇〇ページ余の『生徒会誌』(年刊)が創刊され、生徒会と各クラブの諸活動が記録にとどめられることになった。この両誌は現在までたゆみない歩みをつづけている。

以上のように経過をたどってみると、中学生に対する民主主義教育の実践が戦後になってはじめて花開いたように見えるが、民主主義が「自由と平等の尊重」を意味し、それが単なる権利や自由の主張ではなく、その前提である理性や良心を主体とする個人の自覚であるならば、民主主義教育と言えるものが、同志社に於てはすでに普通学校時代から行われていたのである。そしてそれは戦争中も決して消え去ることなくつづけられていた。ただそれが具体的な「形」をとって現われたのは、確かに戦後のことであると言えよう。

教職員の歩み

一九四八(昭和二三)年の中学・高校分離の際、教員はその所属について希望を問われた。一部、志望通りにゆかない者もいたが、大体は希望が叶い、袂を分った。分れた両校には、生徒数が増すにつれて、新しい教員・職員が加わっていった。当初、中学校の教員数は二十数名であったが、一九六四(昭和三九)年には三四名、一九七五(昭和五〇)年には五〇名を超えている。これは一九六七(昭和四二)年度より学級数が六組から八組に増したこと、教員の持時間を減じたことが原因となっている。この持時間減の背後には学園の民主化の流れの中で、諸機構の改革が行われ、教員の諸会議に費される時間が急増したことが理由として挙げられる。

同志社高校では一九五九(昭和三四)年の春に機構改革が行われたのであるが、中学校ではそれより六年おくれて実施された。それまでは校長の諮問機関として戦前より存続していた評議員会があるのみで、学校運営の諸問題は

すべてそこに諮問され、評議されていたのである。しかし、一九六五（昭和四〇）年になってこの評議員会が解体し、新しく人事委員会と財務委員会が誕生して、学校運営が民主的に運ばれることになった。さらにその他の諮議員会が設けられ、「生徒指導の充実」、「機能の適正化」及び「人事の交流」が意図通りに実現されていった。しかもまた一方、職務内容の多様化により、教職員が諸会議に参加する時間の量が増し、いっそう多忙になったことも事実である。中学校では毎週一回、各学年の担任会と、教科ごとの連絡会を催している。これは他校に見られないきめの細かい「生活指導」と「教育活動」の実践の一つだと言ってよい。

その後、教職員会議、同研究会が生まれたが、これによって職員の地位が教員と並列し、純粋な教育問題以外の課題は、すべてこの場で議することになった。

このような諸業務の分散と、さらにその集約の場の必要と反復は、学校運営費の額を増し、一九七三（昭和四八）年度に二四万円であった学費が、一九七六（昭和五一）年度には四八万円と倍額になっている。それでも入学志願者の倍率が三倍弱に落着いているのは、常に内容充実に励む教職員の努力の賜物であろう。

なお、若干つけ加えておきたい問題の一つは、同志社の教育精神に基礎を置いた一貫教育の問題で、これは両校が分離して四半世紀を経過した現在、大きな課題であるといえよう。加藤校長の兼任時代と茂高校長時代には、国語科を主として高校の何人もの先生が中学校で教鞭をとったし、また中学校の社会や国語の先生も高校の授業を担当した。数学の先生の交流も行われた。この期間は、中高の間は、かなり風通しがよかった。中学校の一年生のころをよく知っている先生が高校の授業を担当していると、生徒の方も、親が近くにいる、その親に見守られているような感じがして、その行動や態度にも自主規制を行っていたのである。また高校の先生が中学校で教えた生徒を高校で迎えることになれば、そこにも新しい意味合いを生じてくる。このような交流が、今日でも、もっと積極

的に行われてゆけば、一貫教育の成果もいっそうあがるのではないかと思われる。

キリスト教

チャペルは献堂以来幾星霜を経て、古色蒼然たる形を残しているが、煉瓦のくすんだ茜色はその莊

主義教育

重味を倍加した。この礼拝堂で同志社英学校、普通学校、中学、中学校と一世紀近い歲月の間、毎

朝礼拝がつづけられてきたのである。戦争末期にグラウンドで朝拝を行なった一時期もあったが、それを除けばまったく絶えることなく、新島襄の画像は讃美歌を歌う生徒達の姿を見守ってきた。

一八九八（明治三二）年に同志社当局は尋常中学校に徴兵猶予の特典を得ようとして、「同志社綱領」の二条の末項と六条を削除した。しかしこの時も、第三条の「本社ハ基督教ヲ以テ德育ノ基本トス」という基本項目は残され、揺らぐことはなかった。

日中戦争のはじまった一九三七（昭和一二）年、同志社当局は軍部と右翼団体の鋭鋒をかわすために「同志社綱領」とは別に、「同志社教育綱領」を制定した。これには「教育勅語ヲ奉戴シ」の箇条を掲げ、圧力を防ぐ盾としたのであったが、しかし「同志社ハ基督ノ真精神ヲ信奉ス」の条項は厳として譲らなかった。

このようにして風雪の中を守り抜かれてきた同志社の教育精神は、力をつくし、思いをつくして、抱きつづけねばならないであろう。そしてそれは同志社中学校の使命であるにちがいない。百年の歴史を顧みて、痛切に感じるのはそのことである。

外郭団体

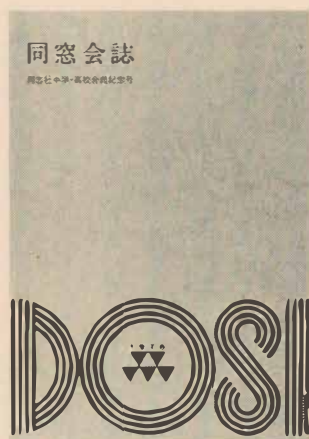
新制中学校および高等学校が順調な発展を遂げることができた背後には、学校の校長・教頭はじめ教職員とはほとんど一体となった両校の父母の会の歩み、というよりはむしろ積極的な協力、援助があった。とくに中学校の場合、まだほとんど実験段階ではやばやと男女共学に踏み切っただけに、父母の会との密接な連絡と情報交換が必要であったのである。

施設面においても、新制度の中学校が発足した一九四七（昭和二三）年には、教育施設とくに雨天体操場の新設を必要としたが、同年九月一三日の父兄会常務委員会においてその建設が承認され（『学校日誌』一九）、同年一二月に父兄会長永田光正、中学校長加藤延雄連名の「同志社中学校・高等学校体育館兼講堂建築資金募集趣意書」を公表し、目標額一七〇万円の募金運動に着手したのであった。当時は長期にわたった戦争および戦後の痛手から社会も学校もまだ回復しておらず、物資も食糧も不足していた。中学生たちは、教職員とともに岩倉校地の農園へ芋つくりに通ったりしており、電灯はしばしば停電した。

そうした状況であつたにもかかわらず、永田会長は募金の打合わせなどでほとんど毎日来校し、加藤校長・久保教頭を中心として、教職員は募金に奔走した。もしそのとき、永田会長はじめ、父兄会常務委員会および父兄会会員の全面的な協力がなかったならば、体育館の建築は決して予定どおりには進捗しなかっただろう。父兄会の献身的な協力があつたからこそ、当時としては京都一を誇る体育館を造り得たのである。同じことは高等学校のチャペル建築についてもいえる。そしてそれ以後の中学・高校の主要な建築物は、殆んどすべて父母の会の全面的な援助によって竣工をみたものである。

父母の会はまた、中学校の場合、会報『桑の木』（一九五九年七月二〇日創刊）の発行を続けるほか、教育問題に関する講演会や懇親会を開催するなど、学校および教育活動と関連した多彩な行事を行なっている。

同様のことが高校の父母の会についてもいえるが、やや特異な存在として「■鷺会」の組織がある。同会は高校父母の会元会員および現会員有志によって、一九五六（昭和三二）年二月二五日に結成され、父母の会とタイアップして「学校設備の充実の為又御子弟の為力を捧げ且つ会員相互の親睦友情を培か」（『白鷺会』に就て）うことを目的として、新会員を募り、今日もなお活動を続けている。



『同窓会誌』合同記念号

そうした父母の会や白鷺会以外に、両校にはそれぞれ同窓会がある。ともに新制中学・高等学校の卒業生がでてからの新しい組織（高等学校は一九四九年三月に第一回卒業生が出たが、「同窓会会則」が制定されたのは一九五二年一〇月）ではあるが、中学校同窓会の場合は、一八九〇（明治二三）年六月に普通学校を卒業した人たち以降の卒業生によって組織されていた「彰栄会」の後身的性格をもっていた。彰栄会は、同志社普通学校を卒業して京都市および東京市の旧制高校や大学に進学していた人たちが集って、明治末期（一九一〇—一九二一年）につくった親睦会を起源とする組織である。それに対して、高等学校の場合には学校も新しく、新規に組織されたものである。

両校の同窓会は別個につくられ運営されているわけであるが、実際には中学校の卒業生のうち毎年約九五パーセント以上が高校へ進学するのであるから、大多数の会員は両校の同窓会員であり、かつ同志社校友会会員でもある。中学校および高校にとってはともかく、卒業生にとっては両校が別々の同窓会を持つ意味はあまりないだけでなく、会費も二重三重に納入せねばならないことになる。そうした問題もあって、一九七六年度には両校の同窓会は同一の日に、同一場所で総会をもち、合同懇親会を行なった。そして、「創立百周年記念号」までは別々に発行していた会誌も合同にして、『同窓会誌——同志社中学・高校合同記念号——』（一九七六年一〇月）を、両校同窓会合同実行委員会が編集発行した。同『会誌』の「編集後記」には、「本来一つであるべきはずの学校が、学制改革により、中学と高校に二分され、同窓会もこれに伴いそれぞれ別個の活動を続けてまいりましたが、今年は、将来の一体化を目ざし、同じ日に同じ場所でそれぞれ総会と合同懇親会が開催されることになりました」と書かれている。そして、一九七九（昭和五四）

年春、同窓会理事会で、中学・高校同窓会の会長を一人にし、両会は一体となることが決議された。なお、『会誌』は、一九七六年以降合同で年一回の発行を続けている。

「本来、一つであるべきはず」の同志社中学校と高等学校は統合すべきであるという示唆や説得は、過去において度々くり返されてきた。学園当局が、田辺に広大な校地を獲得するまでは、この問題は見えつ隠れつ、中高の上に投射されていたのである。学校法人当局の希望は、両者が本来の姿に戻って一体となること以上に、中学校が岩倉に移転することにより、拡張・発展を進める大学に校地を提供してほしいということにあった。

しかし移転問題やこの統合問題については、両校の教員会議において反復討議されたものの、統合に障害となる余りにも多くの要素が浮かび上ってきて、これは不可能となり、今日に至っている。それでも上述のように、同窓会の方が中高一体となった。これは両校の引き寄せという卒業生達の心情の現われなのである。普通学校、旧制中学で学んだ者はひとしくそれを念願していたであろう。両校の完全な統合は今日にあっては無理であるとしても、少なくとも今以上の両者の結びつきが必要なことは明白である。中高一貫教育の果実は、何としても熟させねばならない。それには以前のように、中高の教師の交流が行われねばならないし、教科の連絡会もふやすべきであろう。中高同窓会の結合は強くそれを示唆しているように思う。

二 女子中学・高等学校

歴史的概観

一九七七（昭和五二）年四月二一日、女子部として創立百周年を迎えたが、その歩みを大別すれば次の通りである。

① ミツシヨン・スクールからクリスチャン・スクールへの推移（一八七七年の創立から一九一〇年ごろ）

日本にキリスト教主義大学を設立しようとした新島の意図と、キリスト教伝道の目的からトレーニング・スクールを設置しようとしたアメリカン・ボードの意図とが、十分に調整されないままに、同志社英学校が、また二年おくれて同志社女学校が開校されたことからトラブルを生じ、女学校の場合には一八八五（明治一八）年および一八九六（明治二九）年に廃校の危機に直面した。

② やや安定した発展期（一九一〇年代から一九三〇年ごろ）

この時期は、学校をゆるがすような大問題もなく、生徒数の漸増、建物の充実にみられるように、比較的安定した時期であった。ジェームズ夫人とその令息からの一〇万ドルを始め太平洋婦人伝道協会、同窓会の寄附により一九〇九（明治四二）年の平安寮建設に始まり、一九三二（昭和七）年の栄光館建設まで、僅か二四年間に女子部の建物は一応の整備充実をみた。しかし「畳敷きのジェームズ館に、足袋はだして上りながら、この建物はいつになったら満員になるのかと思った」（片桐芳子）という状態が続き、一九二二（大正一〇）年に、それまでの一七〇名前後からようやく五四二名に達するという小さな規模の学校であった。

③ 戦時下の女子部（一九三〇年代から一九四五年まで）

アメリカン・ボードとの関係の調整が明治期の大問題とすれば、昭和期のそれは、軍部、政治権力への抵抗であることは第四部第九章でみた通りである。

④第二次世界大戦後の発展（一九四五年以降）

敗戦による学制改革とりわけ教育基本法および学校教育法の制定と男女共学の出現、生活の落ちつきと共に増大する女子教育への関心、入試競争の激化と同志社学園内における無試験推薦入学制度の存在の認識、占領軍のもたらした民主主義思想の滲透とキリスト教への関心の増大などは本校の在り方に大きな影響を与え、志願者の増加、建物の新築、財政規模の拡大と公費助成、大学進学率の大幅増加等を生じ、同時に明治、大正期に比し、「世俗化」「大衆化」したことが目立ってくる。

敗戦に伴う

諸制度の改革

①宗教教育。一九四五（昭和二〇）年四月一日、政府当局の強圧により、同志社高等女学部は同志社高等女学校と改称されたが、僅か四カ月余りで敗戦となり、京都府内政部長通達の「其ノ徳育ガ特定ノ宗教等ニ偏スルコトナカラシメ以テ真ニ皇国女子鍊成ノ態勢ヲ整フル」時間がなかったことは、不幸中の幸いであつたといえよう。一九四五年一〇月一五日文部省訓令八号は「私立学校ニ於テハ、自今明治三十二年文部省訓令第十二号ニ拘ラズ法令ニ定メラレタル課程ノ外ニ於テ」宗教教育を公認した。本校に於ては「新学年度（一九四五年度をさす）当初ヨリ礼拝ハ有志生徒ヲ糾合シテ同志社同窓会ノ建物ヲ借用シテ之レヲ行ヒ、又聖書ハ同様ニ有志生徒ニ対シテ毎週研修ノ時間ニ於テ講義ヲ継続（中略）十月八日ヨリ普通授業ヲ開始スルコト、ナリタル以後ニ於テハ、礼拝ノ場所ヲ本校講堂ニ移シ積極的ニ有志ノ生徒ヲ参加セシメタル所、約九〇％ハコレニ出席スル状況ニシテ、日々コノ礼拝ニ引続き朝礼ヲ行ヒ来リシガ」（酒井牧男）、一月一日より礼拝、朝礼の二本建を礼拝に一本化し、武道の時間は聖書の時間となった。課程内の宗教教育については、一九五八（昭和二三）年の第三次改訂学習

指導要領が、中学に「道德」の時間を特設したが、私学では「宗教」を以て之に代えることができた。高校においては「その他特に必要なる科目」として「宗教」を教育課程に入れることが認められた。一八九三（明治二六）年までは「本校課程表」の備考に各年級を通じて聖書を授ける旨を遠慮がちに記しており、それ以後は、修身科の内容として聖書が位置づけられていたにすぎなかったのが、ここに初めて法令によって、教育課程の中に設けることが認められた。一八八五（明治一八）年の修身科加入上申問題以来、まことに長い道のりであった。

クリスマス・ページェントは一九四二（昭和一七）年以降戦争のため中絶し、聖誕讃美礼拝のみとなっていたが、一九四六（昭和二一）年以降は恒例の行事として復活し、さらに一九五二（昭和二七）年以降は午前中は生徒を対象に、夜は一般市民を対象として守られることとなった。

②学制改革。一九四七（昭和二二）年教育基本法が公布され、六・三・三制が実施されたので、旧制同志社高等学校と新制女子中学校とが併立することになり、翌年、女子高等学校と女子中学校とを併立させ、高等女学校を廃止した。校長は一九四五（昭和二〇）年一月高等女学校長に就任していた末光信三である。教育基本法に「男女の共学は、認められなければならない」（第五条）とあるのに従い、公立学校はもとより、私学の中にも共学に転じた学校があったが、本校では女子単学の方針はゆるがなかった。片桐哲（元女子大学長・高女部長）は、「共学にしたらという声がポツポツ起こってきた時、まっ先に賛成すると考えられた湯浅八郎総長は、女子教育の保存を願い、女子を重んずるということは、もうすこし長くその土台を築かねばならぬとの考えであった。つまり同志社は明治以降の男尊女卑の時代に、女子を重んじて、その高等教育を始めたのであるから、この事を米国教育顧問団にも知ってもらい、女子部を維持することによって、女子教育に力を注いできた今までの歴史を重んじてゆきたいというのが、女子単学を願う者の気持であった」と述べている。同志社女学校父母の会初代会長野沢治郎によれば、

(表1) 生徒数の急増

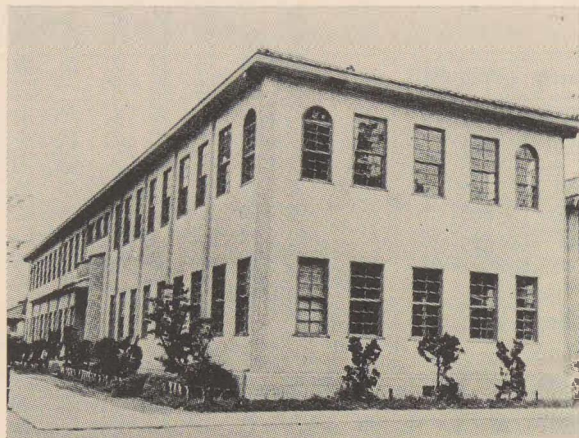
年度 人数	1946 (昭和21)	1947 (昭和22)	1948 (昭和23)	1949 (昭和24)	1950 (昭和25)
生徒数	1148	1208	1245	1374	1506
専任教員	29	32	35	39	47
講師	6	9	3	10	12

“A Statistics of the Doshisha” による

湯浅総長は単学を支持しており、学園内各学校の共学化を推進しようとしたのは、湯浅が教育顧問として招いたR・I・シーベリー(R. I. Seabury)であったという。かくて女子単学を保持したのは、共学・単学の長短得失を比較検討した結果ではなく、長年の同志社女子教育の伝統を重んじ、また未知の共学への警戒も手つだって、ほとんど異論もなく決定したものと考えられる。本校『学園要覧』は、教育方針の一つとして女子のみの学級編成を掲げ、さらに一九五六(昭和三一)年までは、英語・音楽・家庭科に特に留意する旨を付記しており、新学制とくに共学にとまどいを感じていた親たちの「女らしさ」という願いに対応しようとしたのであった。

カリキュラムに於ては、高等学校の場合、単位制が導入され生徒の自主的な科目選択を重んじたため、必修は国語(九単位)、聖書(三単位)、社会(一〇単位)、数学(五単位)、理科(五単位)、保健体育(九単位)の合計四一単位のみで、卒業に必要な八五単位を満たすよう、残り四四単位は生徒が自分の個性や進路に応じて自由に選択したため、その選択類型が一四〇通り以上になり、時間割作成に多大の労力を要した。またブランク(受講する科目のない時間帯)を生じたり、受講人数が七〇名を越す科目もあるという問題があったが、一九五六(昭和三一)年のカリキュラム改正まで、生徒は自分の作成した時間割に従って生き生きと学習していた。生徒会憲法が制定され生徒会が発足したのは、一九四九(昭和二四)年であった。

③父母の会と連合父兄会。敗戦時には同志社高女父兄会があり、一九四六(昭和二一)年一〇月には激しいインフレに悩み、「酬ゆる所うすい」教職員のため、父兄会費を月額三円から一挙に一五円に引き上げて援助するなどの動きがあった。その後、同志社女



新生館 (1949—1972年)

学校父母の会と改称し、会長野沢治郎は校長末光信三に協力して、校舎増築資金の募金を積極的に開始した。これは生徒数が表1のように増加し、既存の建物では収容し切れなくなったからである。

その結果、敗戦直後の物資不足の中で、新生館(二九四九年)、希望館(二九五〇年)、女子部体育館(一九五一年)等の木造モルタル塗りの校舎が次々に竣工し、急増生徒を収容することができた。一九五〇(昭和二五)年前後には、学園の再建充実に使命を感じた連合父兄会が、学園の行政や財務運営に関し(たとえば学費引き上げなど、積極的に発言した時期もあったが、その後は各学校ごとに物心両面の援助を続けるようになった。

安定成長

戦時中に女子部のキリスト教主義を守るため身を挺して活動した末光信三は、一九五一(昭和二六)年度末をもって定年退職したが、その在任期間は、校舎が続々と建設され、諸制度も一新した期間であった。続いて永島嘉三郎が校長に就任した一九五二(昭和二七)年以降は、ほぼ安定した成長発展をみた時期である。

生徒数は増加の一途をたどり、ついに一学級の生徒数が五六名ないし六〇名にも達したので、教育条件改善のため一九六六(昭和四一)年より、それまで各学年五クラスであった高校を各学年とも六クラスに改編し、一クラス五〇名以内にとどめ、中学は五クラス編成のまま定員減を計った。入学志願者数も女子中学では安定した増加傾向を示し、女子高校では年度により変動があり、これは他府県からの志願者

(表 2) 生徒数の推移

年 度	合 計	女子中学	女子高校
1951	1539人	752人	787人
1955	1634	803	831
1956	1696	854	842
1957	1721	856	865
1958	1707	830	877
(参考) 1978	1550	700	850

(表 3) 入学試験状況

年度	女 子 高 校			女 子 中 学		
	募集数	志願者	合格者	募集数	志願者	合格数
1955	若干	73人	58人	250人	361人	289人
1960	若干	125	18	250	621	271
1965	40	115	32	250	315	252
1970	60	243	60	225	495	233
1971	60	201	60	225	550	233
1972	60	250	60	225	573	227
1973	60	316	68	225	662	237
1974	70	351	71	225	696	232
1975	70	296	78	225	768	233
1976	70	315	83	225	692	236
1977	70	247	89	225	725	241
1978	70	178	81	225	702	231

が半数以上を占めていることと関連がある。最近京都市内の公立中学校からの志願者が漸増し、合格者も数名しかなかった状態から、現在では約四割を占めるようになった。中学・高校とも合格がむづかしくなるにつれて、同窓生の子女の入学も実現しない場合が増え、母校の校風の最もよき理解者である卒業生の家庭からの受け入れ方法は検討を要する一方、キリスト教主義学校からの志願者についても考慮を払い、わが国のキリスト教主義教育の進展の一助とすべきことを考える時にきているかも知れない。

卒業後の進路も学歴社会を反映してか、いちじるしい変化を示している。同志社大学および同志社女子大学の充実発展につれて学外諸大学への進学者が減少し、卒業生の九割までが両大学のいずれかに進んでいる。そこには

(表4) 卒業生の進路

年度	同大	同女大	他大学	短大	小計	就職	家庭	計
1950	17	48	6		71	56	77	204
1951	28	65	10		103	52	85	240
1953	45	60	13	6	124	30	117	271
1954	44	38	21	16	119	26	138	283
1955	58	23	16	14	111	32	133	276
1960	89	47	13	30	179	36	75	290
1965	165	58	2	23	248	10	23	281
1970	177	60	5	24	266	3	14	283
1975	193	38	9	17	257	1	5	263
1976	212	35	8	14	269	1	4	274
1977	217	25	9	9	260	0	9	269

(表5) 1977(昭和52)年度学内進学明細

A 同志社大学 217人

文学部	172	(英文学科 45 文化学科 97)	社会学科 30)
法学部	15		
経済学部	14	商学部	10
工学部	6		

B 同志社女子大学 25人

学芸学部	15	{英文学科 10 音楽学科 5}
家政学部	10	{家政学科 3 食物学科 7}

学内無試験推薦入学という特典が大きく影響しており、女子高校から学内両大学へとというパターンがすっかり定着した。また一九五三(昭和二八)年ごろまでは、同志社女子大学への進学者数が、同志社大学への進学者数を上まわっていたが、最近では逆転し大差がついている。恐らく時代の推移と共に、同志社女子大学には設置されていない人文科学、社会科学に関心を持つ生徒や、中高六年間の女子単学の経験に、共学の体験を加えたいとのぞむ生徒が増加した事などによるものであろう。就職者は減少し、表4の「家庭」には「浪人」も含んでいる。

校舎は、木造校舎の急造により戦後の入学希望者の要望に対応した時代から、本格的な鉄筋コンクリート造りの校舎新築の時代に移った。その財源は、父母の会が入学祝金として新入生保護者から募金し、学校に寄附する約一〇〇万円、設備充実費として学校に納入する約三〇〇万円が中心であり、また父母の会は、同窓会、幼稚園、学校と毎年共催のバザーに努力奉仕をして、三〇万円前後の収益を挙げ、直接間接に本校の設備内容の充実に大きく貢



黎明館

献している事実を感謝をもって記しておきたい。建築物の主なものは表6の通りで、これで本校の建築は一応の完了をみた。

(表6) 1955年以降の主な建物

建 物 名	竣 工 年	主 な 設 備 内 容
黎明館(東部)	一九五五(昭和三〇)	高校一年教室、家庭科室、音楽室
黎明館(西部)	一九五九(昭和三四)	高校二年教室、音楽室、図書館
平安寮(二世)	一九六四(昭和三九)	校外寄宿舎
希望館(二世)	一九六五(昭和四〇)	高校三年教室、理科、社会、英語、美術、視聴覚教室
新生館(二世)	一九七二(昭和四七)	体育館

煉瓦壁の木造建築としては静和館が残っているが、女子部にとって由緒ある建物であり、女子部創立百周年記念事業の一つとして、一九七六年、内部改装と煉瓦壁の補強工事を実施した。この建物は一九二七(昭和二年)に出火し外郭を残して焼失したため、急いで再建された建物であり、それまで屋根に数カ所あった明り取りの窓が、設計変更でなくなっている。今回の改装工事のための内壁取りこわし工事中に、焼けこげた柱や煉瓦を一部使用していたことが発見され、出火から再建完了までわずか三カ月という慌しさがうかがわれた。今後の課題として静和館の改築耐震化、専任教員増加に対応する会議室の拡張、図書館書庫の拡張、数学科特別教室の新設等が考えられる。

前述のように安定成長をみた本校であるが、インフレによる物価上昇と教育条件改善のために学費の上昇が激し

(表7) 学費改訂の推移 (単位 万円)

女 子 高 校							女 子 中 学						
年度	入学金	校費	小計	その他	合計	指数	入学金	校費	小計	その他	合計	指数	
1969	4	12.4	16.4	1.29	17.69	100	3.0	11.0	14.0	1.25	15.25	100	
1970	5	13.9	18.9	1.29	20.19	114	4.0	12.5	16.5	1.25	17.75	116	
1971	5	16.4	21.4	1.29	22.69	128	4.5	14.5	19.0	1.29	20.29	133	
1972	5	17.4	22.4	1.29	23.69	134	4.5	15.5	20.0	1.29	21.29	140	
1973	5	20.0	25.0	1.29	26.29	149	4.5	18.1	22.6	1.29	23.89	157	
1974	5	22.8	27.8	1.39	29.19	165	4.5	20.9	25.4	1.29	26.69	175	
1975	7	29.8	36.8	1.39	38.19	216	6.0	28.4	34.4	1.29	35.69	234	
1976	7	34.0	41.0	1.39	42.39	240	7.0	33.0	40.0	1.29	41.29	271	
1977	10	34.0	44.0	1.39	45.39	257	10.0	34.0	44.0	1.29	45.29	297	
1978	10	34.0	44.0	1.89	45.89	259	10.0	34.0	44.0	1.87	45.87	301	

(注) 1. 新入生の学費を示す

2. 「校費」は授業料、維持費、施設充実費の合計額

3. 「その他」は父母の会入会金、父母の会費、教育援護費、生徒会入会金、生徒会費の合計額

4. 助成の増額にともない1978年度は「その他」のみの改訂にとどまった

く、保護者の過重負担は全国私学共通の問題であった。本校の学費改訂の状況は表7の通りで、一〇年間に、校費合計において中学で三・〇一倍、高校で二・五九倍の上昇を示している。公立学校とならんで公教育を行なっている私学に対する公費による助成促進の運動が全国的規模で推進され、栄光館で府下私立中高保護者連合会の決起大会が開催され、京都府庁までデモ行進をしたこともある。

一九七五(昭和五〇)年に成立した私学振興助成法は、私学に対する公費助成に最終的な法的根拠を与え、京都府は政府からの地方交付税交付金に単費支出を加えて、各学校に助成金を交付している。

一九七七(昭和五二)年度の本chool予算五億六九六三万円に対し、助成金は一億三四七万円で、予算額の一八・一パーセントに相当する。父母負担が限度まできた現在、必要経費の五〇パーセントまで助成金の増額を期待するが、私学の自主性はいくまでも尊重されねばならない。

戦後の諸変化

「戦後民主主義」の進展するにつれて、日本の社会には、大衆社会化、世俗化現象が見受けられ

(表 8) 助成金の推移 (単位 万円)

	1975	1976	1977
府運営費補助(中)	1,114.0	1,398.0	3,291.0
〃 (高)	3,524.0	4,560.4	5,510.8
府教育振興費補助	107.5	63.5	43.9
府高校生奨学補助	945.7	1,437.6	1,447.2
市特別助成	55.7	54.6	64.6
国庫(理科)補助	65.0	—	—
合計	5,811.9	7,514.1	10,357.5
他府県在住生奨学補助	38.5	86.3	98.6

るが、本校もその影響を受け、戦後三〇年は、戦前にくらべていちじるしい変化を示している。その主なものを挙げれば左の通りである。

① 学校運営組織の改革。戦前には部長、校長の責任と判断において重要事項が処理されるのは、当時としては当然の事と考えられたが、戦後は大幅に改められ、校長、教頭、各部正副主任、事務正副主任等すべてのポストは選挙によって決定され、在任期間にも制限が設けられた。学校の意志決定は、制度上は校長が行うが、実際には教諭会において、議題によっては教職員会議において決定しており、両会議とも全構成員によって選出された運営委員が議事を進めている。教科主任も輪番制になっている。しかし、どんな制度にも長短あい伴うことに留意して運営されるべきであろう。

② 寮生の減少。同志社女学校において寮の果たしてきた役割は大きい。表9に示すように明治中期では、寮生が生徒総数の八割近くを占め、生徒の生活訓練、宗教教育、人格形成は、寮においてなされた面が多い。大正末期においても、寮生や信者数の比率は低下してはいるものの、なお専門学部を中心に同じ役割を果たしてきた。しかし一九七八(昭和五三)年には、生徒数一五五〇名に対し、定員八四名の平安寮(校外寮、鉄筋コンクリート造)があるが、五〇名前後しか収容していない。この「寄宿舎ばなれ」の傾向は他の学校にも同様に見られ、高校キング寮は廃止、女子大学の寮生も減少している。交通機関の発達による通学可能範囲拡大、集団生活における人格形成よりもアパートにおける自由な個人生活を好む傾向等がもたらした現象で、明治期の寮の果たした宗教教育は、その大部分を学

(表9) 寄宿生・信者比率

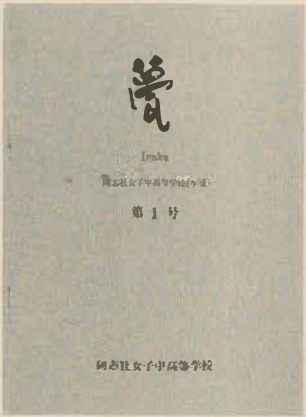
	1893	1894	1922 (大正11)	
	(明26)	(明27)	普通学部	専門学部
寄宿生	52	59	96	128
通学生	16	17	496	123
計	68	76	592	251
信者	—	54	156	99
未信者	—	22	436	152

【『同志社女学校期報』1,3,4,7号より作成】

居住地やアメリカン・ボードの伝道の中心地（たとえば安中や今治）の出身者、また官吏、教役者、教職者の子女や外国人留学生等が多かったが、戦後は社会情勢の変化につれて「同志社の両大学進学に有利」「将来に備え英語力をつけたい」「他府県の公立高校入試の事前力だめし」といった目的の者も多くなっている。どんな動機からであれ、入学者をキリスト教に触れさせることに努力を集中せねばならない。また表10にみられるように出身地域は京都府下八割、他府県二割に定着したようである。

④生徒の学校生活。戦前のセーラー服は、敗戦直後の物資不足による生地入手難と、生徒の個性尊重の考えとがあいまって復活せず、自由服装が定着した。学校は地質、色彩等には制限を設け、また一九七四（昭和四九）年度からは、一月から三月末

しい生活訓練を」「英語の力をつけさす」「娘も母校に」等の動機があったと考えられ、生徒は全国各地の同窓生の③入学志願者の動向。明治期に子女を本校に送った家庭には、「新島襄の学校へ」「キリスト教にふれさす」「きび



『葵』（年報）第1号（1970年8月）

校の教育計画においてなされねばならず、本校では始業前の礼拝、特別礼拝（イースター、母の日、ペンテコステ、花の日、宗教改革記念、収穫感謝、校祖生誕記念など）、「聖書」の授業、修養会、クリスマス・ページェント、春秋二回の宗教強調週間等を計画に含めて実施している。生徒の年間受洗者数は明らかでないが、一〇名までと推定される。中高時代に受洗しなくても宗教教育を受け、大学時代に、より自覚的に受洗することの意

味に注目したい。

(表10) 出身地域別生徒比率

地域 年度	京都市	京都府	他府県
1894 (明27)	23		76.9
1908 (明41)	42.9	14.7	42.3
1921 (大10)	72.9	7.9	19.0
1977 (昭52)	64.2	13.2	22.4

(『女学校期報』により作成)

る。夏期学舎、スキー学舎、クラブ合宿などもスクール・ライフでは忘れられないだろう。試験二週間前ごろから、図書館のコピー・サービスを利用してノートを整備し、試験に備えるが、同時に好きなTV番組も見ると、本の借り出し数も減らない。現代のティーンエイジャーは、気持ちを切り替え、時間をうまく活用して生活を楽しんでいる。性質は明るく素直で、思いやりもあり、教職員の指示には従順である。しかし反面において、自己の課題にとりくみ、もう一歩掘り下げて考えるという点に欠けるきらいがある。礼拝も学習も読書も、さらに積極性の加わることを期待したい。

この一〇〇年間、本校の歩んできた道は決して平坦ではなかった。「主権」をめぐるアメリカン・ボードとの対立、政府・軍部の干渉、経営窮迫、生徒数不足など多くの困難に遭遇しては、見えざるみ手の導きと当事者の必死の努力により、ようやく切り抜けてきた一〇〇年である。「入学志願者が激減したし昭和五・六年頃だったと思

までの期間、ジーンズ着用を認めた。これは早朝に自宅を出る遠距離通学生生の防寒を考慮したためで、生徒会から学校あての請願書が提出されている。社会の流行は生徒にも影響を及ぼし、スカートの長さが伸び縮みしたり、ウェッジのように靴のヒールが高くなったりするが、全体として服装は堅実である。午前八時二〇分(冬は八時三〇分)より二〇分間の礼拝を守り、放課後は文化系体育系合わせて四〇以上のクラブに属して活動するものも多く、「ファイト」「ファイト」のかけ声が校庭を駆けめぐり、ギターやマンドリンの音が校舎にひびく。体育祭、文化祭、クリスマス・ページェントなどはすべて生徒の企画委員が自主的に運営す



クリスマス・ページェント

うが、上野（イト）先生をはじめ私も市内の小学校に縁をたずねて募集をたのみに」（川村アキ）いかざるを得ないこともあった。女子教育の普及した今日、本校の使命も創業時とは自ら異なってくるのは当然であるが、悪条件の中で苦闘した過去に比し、一応経営も安定し、外部からの干渉も皆無の今日こそ、キリスト教主義教育のより一層の進展を期すべき時であり、そのために関係者は強い信念を持って種々の困難を克服せねばならないと考える。

一九七八年一月、女子中学・高等学校では『同志社女子部の百年』（同志社女子部創立百周年記念誌編集委員会）を刊行した。女子中学・高等学校の歴史についてはこの記念誌に詳述されていることを付記する。

三、香里中学・高等学校

香里学園との合併

一九五一（昭和二六）年七月五日に、学校法人同志社（理事長大塚節治）と学校法人香里学園（理事長中田守雄）の間で、「合併契約書」の調印が行われた。同「契約書」の主たる内容は、香里学園が経営する香里高等学校および中学校の名称を「同志社香里高等学校、同中学校」（契約書第五項）と改称し、合併後の両校の教育方針は「キリスト教を徳育の基本とする立学の精神を遵守する」（同第一項）こと、財産目録に記載されている香里学園の「財産を有姿のまゝ無償を以て」（同第三項）同志社へ譲渡する、香里学園の在学生および教職員は同志社の「立学の精神に協力せざる者を除き全員を包括承継する」（同第四項）こと、などであり、実質的には香里学園の吸収合体であった。

同志社の教育方針に賛同できない者、および事情あつて退職する者に対する退職金（香里学園の算定基準による）一九〇万円と、合併処理費（法人役員などに対する慰労金その他）二〇〇万円、合計三九〇万円を同志社は右の契約によつて支払い、校地および建築物その他の施設を譲渡され、同志社香里中学・高等学校の発足をみることにした。合併について文部省に申請した書類の中の「合併理由書」には、次のように書かれている。

新島襄先生は、新英州に於ける十年の留学成り、明治七年帰朝せらるゝや、先づ日本第二の大都会大阪に於て予ての素志なる、基督教を徳育の基本とする私立学校設立のことに専念せられたが、当時の府政事情により大阪を以て校地とする能はず、遂に明治八年十一月京都に於て同志社英学校を創立せられた。

爾來同志社は広く天下の青年を対象とした關係上、歴代総長は別に京阪兩地を併せたる大人口をも対象とする教

育実施の機会を求めて来た。

他方大阪府寝屋川市に在る香里学園は、役員教職員父兄にいたる迄同志社に深き関心を有ち、「同志社設立の始末」に現はれたる同志社立学の主旨に共鳴を禁じ得ず、その教育方針に賛同し合併の希望ある内意を同志社に於て偶ま伝聞した。

茲に於て学校法人同志社の代表者は学校法人香里学園の代表者と会して懇談を重ね、遂に両法人の理事会評議員会の議決を経て、昭和二十六年六月十九日相互に合併の意思の合致を見るに立到った。

全文以上の通りである。以下、合併までの経過を概観しておきたい。

偕行社中学校から 同志社と合併した香里学園の前身は、将校以上の軍人の子弟を教育することを目的として設
香里学園まで 立された偕行社中学校であり、篤志家の寄附などを得て一九四〇（昭和一五）年四月に開校し

た。当初は校舎もなかったたので同系統の小学校の一部を間借りして授業を始め、たまたま現在の香里中・高等学校のある位置（友呂岐の丘^{ともらぎのき}といった）の地主から土地の提供が得られ、その丘陵の雑木林のなかに校舎その他の教育施設の建設に着手した。

その頃、山下汽船株式会社の社長山下亀三郎から陸海軍に対して一〇〇〇万円の指定寄附があり、その資金をもとにして軍人の子弟教育のために山水育英会^{やまみづ}が組織されていた。東京にはすでに、その基金によって山水中学校が設立されていた。資金の乏しかった偕行社は、反対意見もあったがその育英会と合流し、一九四一年度からは校名も第二山水中学校と改め、校舎その他を建築整備し、一九四五（昭和二〇）年三月に第一回の卒業生を送り出したのである。

山水育英会の出資者山下亀三郎は、明治維新当時は京都にいた人で、京都府顧問山本覚馬の世話になり、その薫陶をうけている。「先生（山本）の家は会津の家老の子息その他数名の書生を世話せられて一時十名以上の大人数のこともあった。今日大船主として有名な山下亀三郎も十四、五歳の時先生の家に居った」（青山霞村『山本覚馬』）というから、実に奇しき因縁である。ちなみに、校名の「山水」とは、戦時中学生生徒が朝礼その他の行事でよく歌った「海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍……」という古歌からとった名であった。

設立の目的および性格上、一九四五年八月の太平洋戦争の敗戦は、同校にとって厳しくその存廃が問われる歴史的事件であった。存続を決意した関係者は、早速「全理事を形成していた軍関係者は全面的に後退」するとともに「土地の有力者其他を理事に迎え」（香里一〇年史資料『学校案内 一九六一―二』）、敗戦の翌年には山水育英会からも分離独立するという改革を断行した。当然ながら軍人であった校長も去り、軍に関係がなくて、ただ一人法規上の経営者として残留した高木及言きよげんが、しばらく校長事務取扱をつとめたのち、校長に就任した。

一九四八（昭和二三）年四月一日、学制改革にもなつて中学校と高等学校を設け、同年一月一日に財団法人香里学園と改称することの認可を得た。学園関係者はGHQの視察団や関係官庁から、軍国主義教育の名残あるいは残像を指摘されることがないよう、細心の注意を払わねばならなかったのである（高木及言「合併前後の思い出」『二十年の歩み』）。認可がえられたのは、高木をはじめ同校関係者の努力のたまものであった。

苦心の末、新時代の学園として脱皮し、再出発を開始したものの、接続する大学がなかったために、全般的に私立学校は不振の時代でもあったから入学志願者が少なく、しかも優秀な中学校卒業生は他の高等学校へ進学するなど、新たな問題に直面せざるをえなかった。たまたまそのとき、新制大学になったばかりの早稲田大学に、関西にも付属高等学校を設けようとする動きがあり、合併の話合いが進められたが（一九四九年）、早稲田の理事会は関西に

まで手を拡げることに対して慎重な態度をとるようになり、交渉ははかばかしく進捗しなかった。そして一方、寝屋川市が同校を買収しようとする動きを示しはじめていた。

枚方市在住の校友柴田勝正（当時同志社高等学校父兄会長）が、総長事務取扱大塚節治に香里学園との合併の話を持ちこんだのはそうした時期、すなわち、一九五〇（昭和三五）年一〇月一三日であった。大塚は「全く突発的事件で、それだけでなく多くの問題を抱えている同志社としては、全く余計なことであると感じたのが偽らざる私の感情であった」（『回顧七十七年』）と書いている。しかし、柴田をはじめ香里学園関係者は熱心であった。とくに柴田の熱情が同志社理事会を動かしたといつてよいだろう（西邨辰三郎「同志社香里はこうして生まれた——柴田勝正氏との対話——」『二十年の歩み』）。なお、財団法人香里学園は、一九五一年三月に学校法人に組織変更の認可をえた。

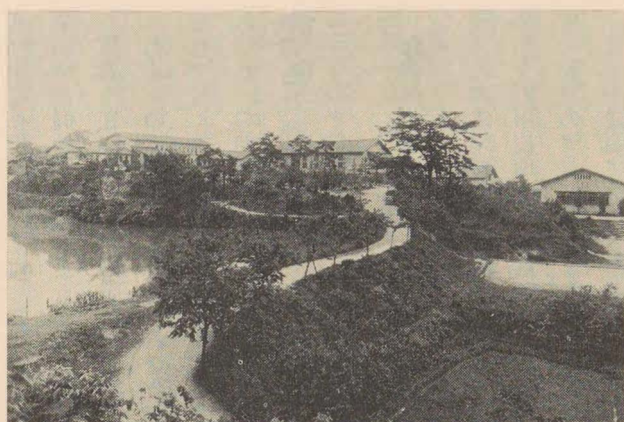
合併への階梯

さて、柴田勝正は合併の話を持ちこんで以後、精力的に斡旋の労をとって奔走したが、態度が決まらぬ大塚は、柴田に対して逃げ腰であった。同志社の内部で最初に合併に賛意を表したのは、同志社高等学校校長山田貞夫であった。柴田が同校の父兄会長だったことにもよるであろうが、一九四九（昭和二四）年に今出川校地から岩倉へ移るときの推進者であり、元大学予科長でもあった山田は、中等教育と学校経営について、独自のヴィジョンと使命感をもっていた。

合併が議題になった理事会（一九五一年三月三〇日）では、田畑忍（法学部長）を除き反対をとるものはいなかったようだから、大塚の態度はあいまいでも、多くの理事の意思はすでに固まっていたようである。岩倉校地へ移ったばかりの同志社高校もそうであつたろうが、新制大学になってまだ年月の浅い同志社大学としては、ようやく戦時下の荒廃から立ち直ったばかりであり、教室や研究室の整備・拡充、大学院の充実など懸案事項が山積していた。法学部長田畑のみならず、大学長として責任の衝にあった大塚は、その事実を重々承知していた。加えて、教職員

組合からは待遇改善のつよい要求が出されており、学友会は彼らに事前の説明もなく合併を決めることは許さないという意思を表明していた。合併問題がもち上ったとき、大塚が「全く余計なことである」と思ったのも無理からぬことであった。

合併によって諸学校、ことに大学の財政を圧迫するのではないかという危惧のほかに、軍人の子弟を教育してきた学校と合併して、キリスト教主義教育がはたして可能かという懸念も、一部の人たちは抱いていた。



合併当時の香里中学・高等学校

圧倒的多数をもって合併を承認した理事会は、新しい「寄附行為」の規定に従って、法人評議員会の議決をもとめた。同年四月一四日に開催された評議員会でも、主として財政問題とキリスト教主義教育の問題をめぐって議論は紛糾した。事の重要性にかんがみ、評議員会は独自に調査検討した上で結論を出すこととし、調査委員に松好貞夫ほか五名を選んだ。四月二八日に再開された評議員会では、まず調査委員による調査結果が委員長松好から報告された。その内容は、合併に反対すべき決定的な問題点は見出せない、多少困難はあるであろうが、維持経営と、同志社立学の精神にもとづく教育の実施は、十分可能であるというものであった。この調査報告がおそらく決め手となって、同日の評議員会は、理事会の原案つまり香里学園との合併およびその条件を多数決をもって可決承認した。

右の評議員会の記録によると、中学校校長加藤延雄、高等学校校長山田貞夫、女子中・高等学校校長末光信三、女子大学学長片桐哲らはいずれも賛成意見をのべており、校友・同窓会選出評議員も賛意を表明している。賛成意見のうち、たとえば末光は、「先日来此の問題について話し合っている。問題となるのは財政問題と宗教教育問題とであるが、財政問題は理事会に責任を負う運営委員会がやり、宗教教育の問題は熱意さえあれば出来る」といっており、加藤は「人事の交流についても賛成である」とのべている。いずれも各学校の教員会議での討議を経たうえで発言である。後年加藤は合併に賛成した理由として、「新島先生の意味（当初大阪に学校を設立しなかった）を知っている者なら、合併には反対できなかったはずです」（談話）と語った。

右の評議員会で合併賛成をとなえた校友会選出の評議員秦孝治郎（後の理事長）は後日、大阪に学校を設立したいという父民治宛の新島書簡を引用して、新島はこの香里の丘が見える淀川を幾度か航行し、またこの近辺を歩いて大阪から奈良、滋賀県坂本へ旅行したこともある、「今日、香里に先生宿願の同志社学園が存在することは、たとえ直接の因果関係は薄くとも、実に大きな貢献であり意義深いものがある」（『香里学園の歴史的意義』『香里の丘』第三号）と書いている。合併賛成の論拠がどこにあったか、右の二、三の例でその一端をうかがうことができるだろう。

評議員会で理事会原案が承認されてはじめて、総長大塚節治の意思は決まった（大塚『回顧七十七年』）。彼は大学部長会・評議会をはじめ諸学校の教員会議に出席して合併の経緯を説明するとともに、同意と協力を要請し、五月一日付の文書では合併の経過概要をのべ、次のような諸点を明らかにして教職員に理解と賛助を呼びかけた。

理事会の同学園運営並に経営構想

(イ) 運営要綱

(一) 同志社財政に悪い影響を及ぼさないこと。

(二) 同志社の教育精神の貫徹を期すること。

(三) 同志社理事会の委任する権限の範囲に於て運営遂行に全責任を負う香里学園運営委員会を設置すること。

(四) 理事会に対し運営委員会の責任を記録をもって明確にしておくこと。

(ロ) 経営構想

(一) 運営委員と教育委員とを設け独立採算制で経営に当る。

運営委員氏名

秦孝治郎 石川芳次郎 牧野虎次 村田竹治郎 大沢善夫 阪田素夫 山田貞夫の七理事

宗教々育の実施は特に重大要件であるから教育委員が特に設けられた。

教育委員氏名

女子大学長 片桐哲、宗教部長 大下角一、文学部教授 上野直蔵、図書館長 松好貞夫、中学校長 加藤延雄、理事 山田貞夫、理事会セクレタリー 奥村龍三、宣教師代表 ロバート・ハーヴ
エイ・グラント

(二) 生徒募集は主として大阪市の青少年を対象とする。

(三) 同志社の名をもってすれば生徒は増加の見込あり独立採算制の維持は可能である。

(四) 香里学園教職員の身分は保証するが同学園を同志社化するため必要な人事の交流を行う。(同志社の教



山田 貞夫

育方針に協力出来ない教員は退職することになっている)

(四) 先方の校長は勇退する。

(六) 合併処理費、退職人件費、応急修理費等に七百万円内外の臨時支出を要するが、同志社財政に影響を及ぼさぬよう措置する。

(七) 先方の代表者一名を同志社理事とする。

(八) 卒業生中の希望者は同志社校友会に入会せしめる。

運営委員には主として財界の理事を選び、教育委員には学内の教員および宣教師代表を当てている。教育委員の一人であった上野直蔵は合併当時を回顧して、「同志社の伝統に即した校風を、この学園に創り上げねばならない」わけで、肝要なことはどのような教員を同志社から送り込むかである。そこで選考委員会(教育委員会)が組織され、総長事務取扱大塚節治を交えて協議した結果、「もともと香里にいられた先生たちとよく相和して教育にあたって頂ける方々を選ぶ」という方針については意見が一致したと述べ、さらにその条件に加えて、「香里はキリスト教主

義の同志社の諸学校の一つに加わるのであるから、讃美歌を教えられる先生が是非とも必要である。誰か適当な方はいられないだろうか、とすでに香里の校長さんに内定していた山田貞夫先生が言い出され、そして間髪を入れず、西邨辰三郎先生がほしいと主張された」(上野直蔵「当初の香里学園の思い出」『二十年の歩み』)、と書いている。そういうエピソードもあった。加藤中学校校長はその人事については、「中学校に必要な人だから」と反対したが、他の委員の意向もあって、西邨は山田校長

に従って他の二、三の教諭とともに赴任することになった。新任教員には主として同志社の出身者が選ばれた。

一方運営委員のほうでは、合併早々からチャペル建築資金および校舎の改修費の募金運動に着手した。

同志社との合併を決意した香里学園の中田理事長、高木校長をはじめ学園首脳者の努力は、おそらくなみ大抵のものではなかっただろうと想像される。早稲田大学と異なり、キリスト教主義にもとづく教育を行うことを伝統とする同志社との合併である。二、三名の教諭は退職を決意するなど、人的犠牲を払っての合併であった。高木たちは、PTAや同窓会、そして生徒の同意も得なければならなかった。

合併が実現した同学園では、一九五一（昭和二六）年九月一二日に合併記念式を挙行、父兄約一六〇名、来賓約九〇名、卒業生約八〇名が出席した。招待された大塚節治総長（理事長）は、偕行社中学校設立以来同校が果たしてきた国家的、社会的役割についてふれたあと、「今や世界史上曾つて無き大転換に当り、殊に日本更生の根本課題が教育にあります際、香里学園関係者一同が、新時代に処して新たな使命を痛感せられ、その使命達成のための協力を、満天下のうちに於て同志社に御求め下さいましたことは、同志社関係者一同の深く光栄に存じ、感激に堪えぬところであります。一同を代表し深厚なる謝意を表します。願わくば此の機会に、両学園関係者一同が同心協力、邦家の良心たる可き人材の育成に挺身し、光栄ある責任を果さんことを祈つて已みません」と、挨拶のことばのなかで述べている。

この日を以って香里学園は、創立以来一〇年にして発展的に法人を解散し、同志社香里中学校、同高等学校と三度目の校名改称をおこなうことになった。同年三月までの卒業生数は、中学校一二二名、高校一八八名であった。翌九月一三日には、高木及言校長の辞任式が行われ、合併以後は同校の顧問として尽力することになった。

同志社香里中学・同志社高等学校校長山田貞夫が、進んで初代校長に転任し、その新任式が行われたのは一九
高等学校の発足 五一（昭和二六）年九月一四日、高木の辞任式の翌日であった。当日の式典のプログラムは次
のとおりである（『学校案内 一九六一―二』）。

奏 楽 森順子先生

讃美歌 同志社大学グリークラブ

聖書朗読と祈禱 茂義太郎同志社教会牧師

式 辞 大塚節治総長

挨拶 山田貞夫校長

新任先生紹介

歓迎の辞 生徒代表（酒戸）

讃美歌 同志社大学グリークラブ

祝 禱 茂義太郎牧師

後 奏 森順子先生

合併は、法的には文部省の認可がおりた八月二九日を以て実現したが、その具体化は右の山田校長新任式に始ま
るといってよいであろう。式のプログラムは同志社香里中学・高等学校が主体的に組んだものであった。生徒およ
び父兄にとっては、おそらく始めての経験であったに違いない。香里の丘から讃美歌がながれはじめたとき、同校
は同志社の一員としての第一歩を踏み出したのだ。同年九月一日に制定された「同志社香里高等学校学則」第一条
には、「（目的）本校は学校法人同志社寄附行為第二条（本法人は教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教を徳



合併当初の教員

育の基本とする学校を経営し、もって教育の実を挙げるを目的とするに從い、高等普通教育を施し国家社会に有用な人物を養成するを目的とする」(中学校もほぼ同じ)とうたわれている。新任式の翌週の月曜日(九月一七日)から、早速朝の礼拝が始められた。中学校は月・水・金、高等学校は火・木・土、いずれも午前九時二〇分から五〇分までの三〇分間であった。授業開始まえに礼拝の時間をおかなかったのは、生徒の通学所要時間の関係による。

キリスト教主義 教育の実践 合併問題が同志社内の諸機関で論議されたとき、危ぶまれた第一点は、同志社教育の基本であるキリスト教

主義教育の実施は可能か、という問題であったことは再三ふれたとおりである。合併賛成者にとっては、そういう教育を行えないとすれば、賛成の論拠が半ば以上崩れることになるのみでなく、合併の意味そのものを大きく失なうことになる。

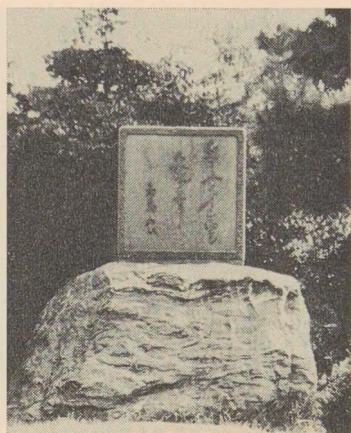
初代校長山田をはじめ、少なくとも同志社から転任した教員および新任職員がこぞってキリスト教主義教育の実践に努力を傾注したのであった。制度としては合併早々から宗教主任(堀内保丸)をおき、堀内、西邨辰三郎、下山敏夫らが委員をつとめた。また、補導主任には西邨が就任した。教科のほうでは、山田校長と右の堀内教諭が「宗教科」を担当し、中学校では『イエスとその弟子』(創元社)、高等学校では

『聖書概論』、『教会と文化』（いずれも新元社刊）などをテキストに使った。

正課の授業以外に、同志社中学校からアリス・E・ゲイン (Alice Elizabeth Gwinn) 教諭を招いて、英語のバイブル・クラスを隔週に開いたほか、特別礼拝日を設けて全同志社的観点から講師を選んで講演を依頼した。さらに、一九五二(昭和二七)年秋からは、アメリカン・ボードから派遣された宣教師フレーミング (Emery Jasper Fleming) が英会話の講師を兼ねて着任した。一九五四(昭和二九)年までの主な来訪者ならびに講演者は、徳富蘇峰、フランク・ケリー、アリス・E・ケリー、牧野虎次、“DOSHISHA COLLEGE SONG”の作詞者W・M・ヴォーリズ(二柳米来留)、アーモスト大学総長C・W・コール(通訳O・ケリー)、小崎道雄、賀川豊彦らである。大学長田畑忍、同志社教会牧師茂義太郎ら学内関係者多数が講師として訪れた。

同志社高校および中学校との交歓行事についてもあげておく必要があるだろう。同志社高校との交歓野球試合は、合併の年の一月二三日に香里グラウンドで開催して以後、毎年野球以外の種目についても両校のグラウンドで交互に行なっている。同様のことは中学校の間でも実施された。そして、あたかも兄弟校としての契りを結ぶかのように、一九五一年一月二四日すなわち合併した年のクリスマス・イヴに、同志社中学および高校から聖書と聖書台が贈られ、同じ日に大阪および京都同志社校友クラブから新島襄の肖像画が、合併に尽力した校友柴田勝正からは校旗が贈られ、それらの贈呈式が挙行された。式のあと、教職員の家族を招待してクリスマス・パーティを開いた。こうして香里中学・高等学校は、着々と同志社の一員としての形式と内容をととのえ、諸学校の教職員および生徒との交わりを深めて行った。

礼拝の時間は「おにごっこ」と称して、山林の中へエスケープする生徒を教師が追っかけることもあったと、懐かしそうに回想して語る卒業生もいるけれども、なにもそれは香里中高にのみ限られることではないだろう。合併



良心碑

社在職中一番印象に残っているのは礼拝でした。何回か礼拝の説教をさせてもらいました時は、いつも仏教的なお話になったことを思い出しています」(『香里の丘』第五六号) と言い、「狭い門から入れ、滅びにいたる門は大きく、その道は広い、そして、そこから入って行くものが多い」という聖書の一節が、実に印象的であったと書いている。

校長山田貞夫のパイオニア的な献身的努力と、そうした多数の教職員の協力によって、男子生徒のみを教育する香里中学・高等学校は短い年月の間に、同志社の一員としてのゆるぎない位置を確保するに至った。キリスト教主義教育は可能か、という危惧は、たんなる杞憂に終わったのである。それは、新島襄の金言「和氣満堂」の精神に則り、「合併の実を挙げるため前進すること」(『同志社九十年小史』)を誓いあった教職員の、悲願の結実であった。一九六〇(昭和三五)年六月には、校友半田隆一の寄贈によって、同志社では二基目の「良心の碑」が校庭に建った。

生徒数の増加 合併した年の九月二六日現在の生徒数は、中学校三五七名、高等学校三五九名、合計七一六名と一貫教育であった。独立採算制をとって、はたしてその維持経営は可能かと、前途を危ぶむ意見があった

した年の創立記念式には、今出川校地の栄光館まで、教職員と生徒のほとんど全員が出かけ、同志社EVEの音楽祭には、西邸に指導された合唱団が出演した。西邸は当時を回顧して、「讃美歌指導の私に好奇の眼を集中しながら、純真に反応してくれた時の感激や喜びが心に蘇って来ます」(『香里の丘』第五六号)と書いている。また、合併以前から香里学園で教鞭をとっていた深田俊章は、一九七三(昭和四八)年三月に定年退職して、いまは、浄土真宗の一寺の住職のかたわら摂津市の社会福祉事業の役員をつとめているが、教員時代を回顧して「同志

のも、無理からぬことであった。志願者数の伸びについても、大学と接続する学校になるという点を除いて、樂觀しうる条件は見出せなかったし、建築してわずか一〇年しか経過していないにもかかわらず、何分にも戦時中の建築物だったから、校舎はすでに老朽化が目立ちつつあった。香里学園時代には、教職員の給料も理事長中田守雄が一時立て替え払いするといったことさえあったのである。図書も総冊数一五六八冊（生徒一人当り三・二冊）という貧弱な状態だった。

深田俊章は先に引用した文章『香里の丘』第五六号）のなかで、「同志社香里中高が新しい出発をしたものの、校名の宣伝と昭和二十七年度の生徒募集が最大の緊急事」であったので、教職員から一〇名ばかり評議員を選び、その評議員会で種々検討を重ねた結果、「旧香里の数名の先輩の諸先生が殆んど府下の全域を細分して学校訪問を早速実施することとなりました」と書いている。土地の事情をよく知っていたということもあるが、生徒の増加と財政的安定を願う思いが、「旧香里」の教員にはとくにつよかったのではないかと思う。しかし、生徒募集のために小・中学校を訪ねて歩いたのは香里学園だけではなかったので、戦後の一時期は同志社の教員も大阪府下まで宣伝にまわった。加藤延雄はその目的での訪問先の学校で、香里校長高木及言と顔を合せたことがあり、合併以前から面識はあったと語った。ともかく、合併以後は新しい校名の宣伝にもつとめねばならず、授業時間をやりくりして精力的に歩いた。「一般のセールスマンのように玄関払いに出くわしたこと」さえあったと、深田は書いている。宣伝のための音楽会を大阪市内で開催するなど、さまざまな苦心を重ねたのである。そうした努力の甲斐があつて、その後応募者数および入学者の数は順調にのびた。合併の年から一〇年間の生徒数は次表のとおりである。

生徒数の増加とともに、同志社大学への推薦入学者の数も年々増えた。合併の翌年三月の卒業生から、わずかながら推薦入学が許可されたが、一九五四（昭和二九）年二月には、四四名が推薦で同志社大学へ進学し、一名は一般

生徒在籍数（『学校案内 1961-2』による）

学年 年度	中 学				高 校				総 数	備 考
	第1 学年	第2 学年	第3 学年	計	第1 学年	第2 学年	第3 学年	計		
1951	85	110	162	357	152	128	79	359	716	昭 26. 9. 26現在
1952	96	86	106	288	240	148	120	508	796	昭 27. 5. 31 ッ
1953	117	97	87	301	230	234	140	604	905	昭 28. 4. 30 ッ
1954	161	112	92	365	213	221	221	655	1,020	昭 29. 4. 10 ッ
1955	144	160	114	418	222	205	207	634	1,052	昭 30. 4. 7 ッ
1956	156	143	161	460	233	211	186	630	1,090	昭 31. 4. 10 ッ
1957	150	153	157	460	329	228	205	762	1,222	昭 32. 4. 5 ッ
1958	143	162	166	471	302	313	215	830	1,301	昭 33. 5. 10 ッ
1959	165	146	162	473	344	294	298	936	1,409	昭 34. 8. 1 ッ
1960	171	169	163	503	341	328	278	947	1,450	昭 35. 5. 1 ッ
1961	160	174	171	505	309	334	314	957	1,462	昭 36. 5. 1 ッ

受験で合格した（高校卒業者数一三四名）。翌一九五五年二月には推薦入学一〇九名（卒業者数二一四名）と一挙に倍増し、以後年々増加の傾向をたどっている。

先にのべた宗教教育と並行して、英語教育には特に力を注ぎ、外国人教師をはじめ同志社大学英文学科の卒業生を教師にむかえ、教員スタッフを充実することによって、「香里出身者は英語がよわい」という汚名を注ぐことに教育努力を傾注した。単に宗教科や英語のみでなく、「合併による同志社大学への推薦制度に応えるためにも、新学校の教育的任務のいよいよ重大なことを」（『同志社九十年小史』）山田校長は強調し、各教科の質的向上に努めた。時間はなかったが、教員たちの熱情は生徒に感化を及ぼさないはずはなく、知的レベルの点でも同志社の一員として遜色のない状態に達するよう、生徒たちも意欲を燃やすようになった。

一九五六（昭和三二）年三月末日をもって、初代校長山田貞夫は定年退職し、同年四月一日に下山敏夫が第二代校長に就任した。下山は同志社出身ではなかったが、合併と同時に公立高校から転任し、山田校長のもとで教頭をつとめ、宗教委員も兼ねていた。それだけに、山田の意向は十分承知しており、その継承と発展に尽力した。

後年彼は、「山田校長が最も苦心され、最大関心事とされたことが、何であつたかということを、よく承知いたしております。すなわち民主主義の基盤であるキリスト教精神、すなわち同志社創立者の新島先生の教育方針を、生徒諸君に徹底させるということでありました。もとよりこういうことは、一朝一夕に完成されることではありませんが、教職員、生徒諸君、さらに父兄の方々の協力と理解によって、次第に滲透しえたことが、今日の本校を礎きえた」（『思い出』二十年の歩み）のだと書いている。

下山が校長に就任すると同時に、生島吉造が教頭になった。山田に請われて神学部出身の大橋寛政が教諭となり、山田に代つて宗教科を担当し、新任早々から補導主任もつとめることになった。こうして同校の同志社一貫教育体制は着々と整うに至つたのである。

校舎・諸施設 図書が貧弱だったことは先に書いたが、剣道場の一隅を応急処置しただけの図書室の整備に努**の拡充整備** め、篤志家から寄贈図書なども得て、一九五二年五月に図書室を開設し、図書主任赤尾秀之助を中心に暗中模索の状態で学校図書館づくりが進められた（『二十年の歩み』）。

徳育とあわせて、知育と体育を当然ながら重視した。知育についてはすでに若干ふれたが、体育については毎年校内マラソンを行うなど、生徒の体位向上に留意し、施設の整備拡充にも力を注いできた。一九五四年六月には、同志社中学校および高等学校生徒、教職員を招いて、運動場開きの野球招待試合をおこない、それ以後テニス・コート、卓球場その他の体育施設を整備あるいは新設した。

戦時中の建築物であつた山水中学校時代の木造の校舎は、合併のときすでにかなり老朽化が目だちつあつたが、ようやく一九五八（昭和三三）年一月になって、高等学校の校舎、尚志館の献堂式を挙行し、一九六〇（昭和三五）年六月には、図書館などを含む中学校校舎、明誠館の献堂式を行うなど、香里の丘には鉄筋コンクリートの

建築物がそり立つようになった。さらに翌一九六一年には校門前の通学路の道路幅を拡張するなど、合併後一〇年たらずの年月のうちに、学園は外観・内容ともにその面目を一新した。生徒数の増加、学費改訂などのほか、PTA、同窓会その他篤志家の多大の後援があったことは断わるまでもないが、歴代の校長および学園の首脳者、教職員、とくに合併当初の関係者のなみなみならぬ教育と経営の努力が、単に同志社の一学園としてのみでなく、大阪府下有数の私立学校に成長発展せしめたのである。

中学・高等

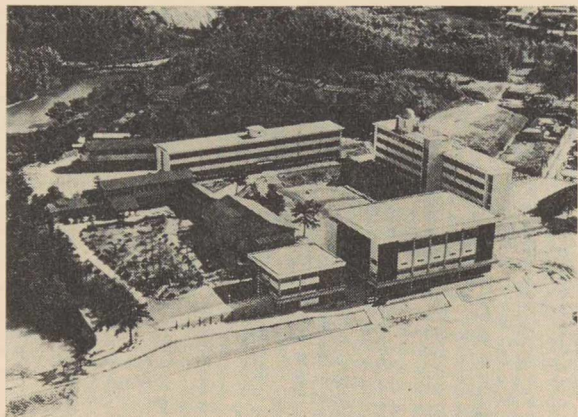
学校の現況

草創期にページを割きすぎたが、一九七五（昭和五〇）年つまり同志社創立百周年、香里中高二四周年現在の現況を一瞥しておきたい。

教員六七名（除嘱託講師）、専任職員二一名（合併時の専任教員二七名、職員一五名）であり、生徒数は高校九九一名、中学六九二名、合計一六八三名に増加した。教育内容、施設、設備面で、合併当初の名残をとどめるものは、木造の本館以外にはほとんど何もない。住宅建築ブームで、周辺環境そのものも大きく変貌した。

教職員および生徒数の増加は、それが香里中高の発展を数字の上で如実に物語ることは確かだが、しかし、増加膨脹にともなう新たな教育上、経営上の問題もかかえ込まねばならなくなった。社会的時代的状況の影響もむろんあるが、合併当初とは異質の問題解決を迫られつつある。もちろん関係者は今日まで安閑と過してきたわけではない。たとえば教員たちはかなり以前から、全教員あるいは中学高校別、または教科ごとに、教育懇談会や研究会を積み重ねてきた。そうした努力が問題の所在とその性格を鮮明にし、解決すべき課題として全教職員の認識にのぼり、問題解決と教育の質的向上への原動力になってきたといつてよい。

そうした問題の提起や課題解決の一端は、機関誌『教育研究誌』（一九七三年三月創刊）に掲載され、斯界に問うことになったが、たとえば同誌の第一号で明川忠夫教諭は、高校と中学校を併設している学校の問題点を具体的個別



現在の香里中学・高等学校

的に取り上げ、多人数が参加する諸行事の教育効果の問題、年齢差、高等学校のプログラムがとすれば優先されがちな現状などから、中学教育の在り方を問い、中学独自の教育的プログラムを持ちそれを実践するに至る過程について、具体的に報告している（明川忠夫「中学教育の充実をめざして」）。おそらくこのような問題は、合併後一〇年ばかり経過するまで、問題があることに気づく者はいっても、その解決に衆知を集め、全教職員が相互に理解してエネルギーを傾注するいとまはなかったであろう。また、おなじ号に阿南里士あなんさとしは、「服装の自由化に向けて」という報告文を掲載して、一九七二（昭和四七）年度から高等学校の制服を自由化することを教員会議で決定するに至った経緯を詳細に報告している。

生活指導部の教員は、生徒会執行部やPTAとの話合いに、一年以上の時間をかけたのである。ともあれ、合併と同時に制定された制服制帽は、高校生にかぎり一九七二（昭和四七）年度から「標準服」として残すけれども、着用は各自の自由となり、着用する生徒は急速に減少していった。また、生徒の増加は居住地の広範化をとまなうことになり、とくに低学年の通学所要時間がいっそう深刻な問題とならざるをえなくなった。だが、この問題に関しては、寮の新設、拡充を図る以外に、他の私立学校同様、にわかには有効な解決策を見出すことは困難である。

香里中高の現状のひとつとして、一九七二（昭和四七）年三月八日に、チャペル（香真館）の献堂式が、学校法人同志社、香里中高、同PTA特別事業委員会の手によって挙行されたことをぜひ記しておかなければな

るまい。「新しい革袋としてのチャペルには香里としての歴史と伝統があった。独自の過去があり、この今日があり、さらに大きい未来の可能性が約束されている」(『香里の丘』第五六号)と、元校長生島吉造は献堂に際して寄せた文章の中に書いている。チャペルは、老朽化した木造の講堂を撤去し、その後へ鉄筋コンクリート造りで再建されたものである。合併して二五年、「チャペルには香里としての歴史と伝統があった」という生島のことばには、切実な実感がこもっている。おそらくそれは、ひとり生島のみの実感ではなかったに違いない。

PTAと紫翠会

同志社香里中学・高等学校の充実発展に寄与するところが大きかった外郭団体の存在を忘れてはならないだろう。ひとつはPTAであり、いまひとつは同窓会「紫翠会」である。

合併以来、PTAは教育および財政問題について、つねに直接間接に教職員とともに課題を担い、全面的な物的精神的援助を惜しまなかった。その会報『香里の丘』は、一九六〇(昭和三五)年の年末に創刊され今日なお継続発行されているが、単にPTAの歩みばかりでなく、学校そのものの動向が記されていて、意思疎通のメディアであるとともに、いまや香里中高史の記録史料としての価値をもつに至っている。

同窓の組織である紫翠会が発足したのは、一九五五(昭和三〇)年四月三日であった。同会は高等商業学校および商学部の樹徳会や、中学校の彰栄会、高等学校の同窓会などと同様、同志社校友会会員でありながら、当該学校の卒業生のみでつくっている組織である。ただ、紫翠会の特異性は、山水中学校卒業生(一九四五年に第一回卒業)をも包含していることで、一九四五(昭和二〇)年三月二〇日に学徒動員先の枚方工場で山水中学校同窓会が発足した、それが同会の起源である。同志社との合併に際しては、合併の趣旨である同志社のキリスト教主義教育に不賛成であれば同志社校友会会員にはならなくてもよかったが、ほとんどの卒業生が、同志社校友会の会員になった。そして、山水中学校以来の同窓会を発展的に解消した。

一九五五年になって、合併以前と以後の卒業生が一体となった同窓会組織を結成しようという話がもち上り、同年二月から数回準備会を重ねて、『会則』原案をまとめ、四月三日に大塚節治総長、高木及言前校長、磯田義治同志社校友会専務理事などのほか、すでに退職していた教員をも招いて発会式を挙行了した。会則は「会員相互の交誼を厚くし同志社香里学園と会員との関係を密接にし学校の発展を助ける」(第二条)ことを目的とし、名誉会長は「現職校長」(第九条)、三カ年以上同校に勤務した教職員は「特別会員」(第六条)となるなど、ここに学校と密接不離の同窓会が誕生したのである(『紫翠会々員名簿 一九六一』)。

「紫翠」という名称は、「紫は同志社カラー、翠は緑色を表わす」(『紫翠会の歩み』『二十年の歩み』)と説明されている。緑色を表わす「翠」は、緑の樹木が多く、紺碧の水をたたえた湖水がある香里の丘を象徴的に語ることばとして選ばれたものである。

同志社香里中学・高等学校の歩みについては、同校発行の『学校案内 一九六一—二』、『二十年の歩み 一九五二—一九七二』、PTA会報『香里の丘』などに詳しく記述されていることを付記しておく。

四、商業高等学校

開校とその 同志社商業高等学校（以下、商高という）は、一九四八（昭和二三）年三月三十一日付で京都府に設置認
 社会的役割 可申請を行い、同年四月に開校されたが、一九七六（昭和五一）年三月三十一日をもって廃校となっ
 た。その歴史は、わずか二八年に過ぎなかったが、同志社の中では、ユニークな存在であった。商高は、勤労青少
 年のために、同志社教育の機会を与えることを目的とした夜間定時制、商業課程、男女共学の高等学校であった。
 （商高創設のいきさつについては、創設委員で、初代の教頭でもあった平山玄^{しずか}商学部名誉教授が、『同志社商高・商学部物語―同志社
 と私―』で述べている。）同校設置に関する申請書には、次のように学校の目的がうたわれている。

一国文化の興隆を■るためには教育は機会均等でなければならぬ。自らの生活を支へるために、自らの勤労に
 依ることを余儀なくされる多くの青少年に対し教育の機会を与えることは極めて緊要のこと、言はなければなら
 ない。

更に我国の民主的経済再建の為には実業教育が新しい教育理念に基いて振興されなければならない。

本校は以上の如き要請に応じて夜間課程として設立するものであり、働きつゝ学ばうとする勤労青少年に対し商
 業科を主とした高等教育の機会を与へんとするものである。

建学以来七十有余年の歴史を有つ本学園は、独自の教育的伝統がある。曰く基督教主義に基く人格教育であり、
 民主的国際的教育である。本校は斯る理念に基いて新社会に処する有為な実業人の養成を期するものであり、更
 に本校は英語教育にその特色を発揮せんとするものである。即ち従来の読書の英語教育より一步を進めて、耳と



夜景の芳館聚

口の練習に主きを置き、實際生活に役立つ語学力を目標とする。之を要するに品性ある良心的実業人、實際社会に処して実力ある人材、勤労と責任とを重んじ、真理と正義とを愛する平和的な国家及社会の形成者を育成せんとするものである。

これは単なる建前の表現ではなく、商業高校の具体的な目標となった。

商高の歴史をふり返ってみると、それはあらゆる面で戦後日本の社会状況を鋭敏に反映している。生徒達の約九割が昼間働いており、彼ら自身社会人として、その時代の経済状況に強く影響されたことにもよる。

第一回の入学式は、一九四八（昭和二三）年四月二十八日に同志社チャペルで挙行された。初代校長は商学部はるみの岡本春三教授で、新入生は、定員一五〇名に対し一八二名の応募者があり、四月一日に入学試験を行い、定員通り一五〇名の入学を許可したうち、一四六名が入学した。一九五一（昭和二六）年度の生徒数は五二八名、一九五五（昭和三〇）年度には、一年生一四四名、二年生一二七名、三年生一六〇名、四年生一三八名、合計五六九名となった。

これに対して教員は、専任二名、兼任および嘱託一三名（内一名は校長、二名は英会話担当の外人教師）で出発し、一九五五年度には専任七名、兼任および嘱託講師二〇名、職員三名となった。校舎としては、今出川校地

の聚芳館（現大学図書館建築の際取り壊された）が使用された。一九四八年は新制高等学校発足の年でもあり、戦後の混乱がつづく極端な物資不足の時代であった。教科書も思うにまかせず、また定時制としては致命的な停電にもしばしば悩まされた。『同志社九十年小史』にも「停電の少ないA級線にしてほしいというのが教員、生徒の切ない願であった」（松岡英士元商高教頭）と記されている。食糧事情も極めて悪く、生徒にはいわゆるラウ物資の脱脂粉乳が配給されたが、これを飲むと下痢をする者もあり、問題のある代物であった。入学する生徒も、学制改革の時でもあり、このような混乱した社会環境であったから非常にバラエティーに富んでいた。学歴も旧制中学の中退者もおれば国民学校の新卒者もいたし、年齢も平均年齢は二〇歳ぐらいで、中には三〇歳を超える者もいた。職種の方も製パン工、風呂屋のボーイマン、在日米軍基地のボーイその他多種多様であった。

設備は貧弱であったが、教員組織の面では、大学教員の応援も得て、レベルの高いユニークな教育がおこなわれた。現在大学の中堅として活躍している教授の中には、商高の教壇に立った経験の持主が相当数いる。

また、商高の歴代校長の中には、西田賀次、中村三郎、平林一、土山登ら専任教諭もいたけれども、大学より兼務で迎えたひとが多い。初代校長岡本のほか沖中忠一（商学部教授）、斎藤玄三雄（工学部教授）、和田洋一（文学部教授）、志賀英雄（文学部教授）、藤代泰三（神学部教授）などである。この辺から同志社内での商高のおかれていた立場が推測できる。

夜間授業と生徒たち いずれにしても生徒たちは苦しい環境の中で、空腹に耐えながら勉学に励んだのである。途中で脱落する者も多数いた。概して、商高に入学するのはやさしかったが、卒業するのは容易でなかった、と言いうる。家庭の事情、また、今では考えられないような悪い労働条件の職場での仕事と勉学の両立の難

さなどで、やむなく退学する者が多かった。いいかげんな気持で入学した者は当然のことながらすぐ落後した。昼

生徒の退学者

年度	学年 始め	学年末	年間 減少数	残留%
1956	585	443	142	75.7
1957	616	454	162	73.7
1958	664	516	148	77.7
1959	693	526	167	75.9

は職場で複雑な人間関係の渦中に立たされ、精神的にも肉体的にも疲労し、その中で四年間、夜、通学するには、強じんな精神力と肉体を必要としたのである。

入学した生徒のうち卒業できる者は平均して約二分の一といった数字が、この間の事情を如実に示している。商高がいろんな面で好調に運営されていた一九五六（昭和三一）年から一九五九（昭和三四）年頃でさえ、退学者の数は別表の通りであった（「同志社商業高等学校の概況」昭和三五年一月）。退学理由のうち、もっとも多いのは「勉強が続けられなくなった」で、たとえば一九五八（昭和二三）年度では、退学者一四八名中六七名がその理由で退学した。夜間の修学がいかに困難であるかを物語っている。

やがて年を追うに従って社会も安定し、停電に悩まされることもなくなり、学校の体制も整備されてきた。産業教育振興法をはじめ各種振興法の補助により、設備も徐々に充実してきた。クラブ活動も活発に行われるようになり、生徒達は放課後一時間足らずの間、熱心にスポーツ、或いは文化活動を行なった。例えば、運動部関係では、バスケットボール、陸上、柔道は、京都府下定時制高校総合体育大会でしばしば優勝し、その他バレーボール、水泳等も数回優勝の経験がある。文化部関係も、宗教、英語、文芸、新聞をはじめその他相当数のクラブ活動が活発に行われた。クラブ活動は定時制の高校生にとって、もっとも生きがいを感じる時であり、教育的意義も大きかった。

このように学校としての体裁は整っていったが、経営的にはきわめて苦しい状態がつづいた。とくに一九五四（昭和二九）年に同志社において独立採算制が採られて以来、商高の歴史を通じて収支が均衡した年はわずか三年であり、ほとんど毎年度赤字がつづいた。戦後日本

の経済は一貫してインフレ基調であり、人件費も急増した。しかし、商高のような勤労青少年を対象とする学校で、赤字が出ないように授業料を値上げすることは、その設立の趣旨と矛盾するとの考えから、極力その値上げがおさえられ、専任教職員の数を少なくしたり、諸経費をできるだけ切りつめたりなどの経営努力が試みられた。学内諸学校から援助を受けたこともあったが、それはまもなく諸学校の経営悪化により打ち切られた。同志社の本部分担金は免除されたが、それだけでは、多額になった累積赤字に対してはほとんど意味をなさなかった。また繰り越された累積赤字には、金利相当額が加算されたので、ますます財政難を強める結果となった。この間、一九五八(昭和三十三年)には高等専門学校への移行が、一九六六(昭和四一年)年には短期大学の設置が検討されたが、実を結ぶに至らなかった。生徒数は年度によりかなりの変動をみたが、平均して五〇〇名前後で推移した。もっとも生徒数の多かった年は一九五九(昭和三四)年の六九三名(『あしあと』一九七六年)であった(同年度のスタッフは兼任校長一名、教諭二一名、講師二名)。毎年卒業生の約三〇パーセントが同志社大学の第一部および第二部に推薦によって進学した。たとえば一九五七年から六〇年までの大学進学者数は次ページの表の通りである(『同志社商業高等学校の概況』昭和三五年一月)。定時制というとか暗いイメージが浮かぶが、日々の生活の重圧にもかかわらず、商高には明るい表情、ふんいきがあった。その理由としては、キリスト教に基づく伝統的な明るい校風と、もう一つは自分達も努力すれば、大学に進学し、高等教育を受けられるという希望があったことがあげられる。

新町校舎時代 と学園紛争

商高は一九六二(昭和三七)年、新町校地に移転した。今出川校地では大学の第二部学生と混在していたので生徒指導上に問題があったが、新町校地では夜は商高のみであったので、生徒の管理面は著しく改善された。新町移転後数年間、商高は安定期を迎える。しかし、このころから日本経済の成長とともに、全日制高校全入への兆しが見えはじめ、一九六三(昭和三八)年を境として生徒の志願者が目立って減少してい

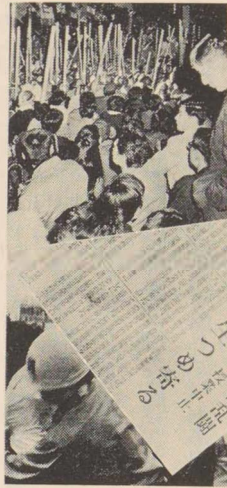
大学への進学者数

大学 年・月	同志社大学		同志社 女子大学	他大学	合計	卒業生数
	一部	二部				
1957 . 3	15	19		2	36	121
1958 . 3	11	9		2	22	73
1959 . 3	9	5		2	16	66
1960 . 3	12	12	1	1	26	102

き、このことがますます経営を苦しくすることとなった。たとえば、一九五八（昭和三三）年度の志願者は三〇四名であったが、一九六七（昭和四二）年には一二八名（いずれも第一次、第二次合計）しかない状態になった。

一九六八（昭和四三）年ころから全国各地で学園紛争が起こった。商高もその翌年紛争に巻き込まれ、高校段階では、極めてまれな封鎖という事態に直面した。次にその経過を少し詳しく記す。一九六九（昭和四四）年新学期に、新町校地とその周辺で、大学学生のいわゆるセクト間の乱闘事件がひん発し、危険を避けるため休校、授業打ち切りの止むなきに至った。また女子大学に避難して授業することもあった。生徒の間にも大きな不満が起き、授業бойコットの動きも出てきた。そのためこのままでは責任ある教育は不可能と判断せざるをえず、遂に七月二日急きょ夏休みをくり上げて休暇に入り、教職員は「安全な教育の場」（独立校舎の獲得）を目指して法人本部と交渉することとなった。これより先、生徒の間には商高共闘委員会（準備委員会）が結成され、六月九日に「商高の廃校はウソかマコトか」のパンフレットを配布しており、教諭有志との話し合いがもたれていた。彼らの要求は、①第二層間部型高校（昼間部の補完物）―七七〇年以後廃校、このような商高を解体し真の勤労生徒の高校の再編。②過去の授業料値上げ、廃校問題をめぐってキリスト教主義と経営問題。③独立校舎を確保する。④根本的教育方針を提出せよ。以上の四点であった。

法人理事会は、学内施設や学外施設について種々検討し、けっきょく暫定的措置として橘女子学園借用の方針を出した。八月二日の生徒集会で暫定校舎について説明し、同日全教諭と商高共闘との話し合いがもたれた。この



学園紛争を報じた新聞記事

程度であったが、商高卒業生を含む大学二部学友会との連関があり、話し合いは難航した。時間だけがいたずらに経過し、自宅待機する生徒もいらだった。中には自主的に寺院の一室を借り、授業をする学年もあった。教員はもちろん焦燥の毎日であった。

九月末日ようやく商高共闘との一応の了解がつき、一〇月一日に封鎖が解除された。しかし大学紛争は依然として続いており、とうてい新町校地で授業できる状況ではなかった。そのため一〇月一五日から、藤川学園御池校舎と藤川デザイン学院高原町校舎を借り、二校舎分散の形で授業が再開された。特別の時間割編成で授業が行われ、教員は御池と高原町とを往復しなければならず、満足な授業は望めなかった。大学紛争が鎮静化の方向をとり、新町校地にもどることができたのは一九七〇（昭和四五）年一月であった。

かくて商高の歴史でもっとも大きな、そして不幸な事件はともかく終わった。しかしこの事件は学校に深い傷跡を残した。生徒相互の間及び生徒と教員との間に不信感を、そして学校全体に空しさを残し、その影響は長く続いた

のである。

廃校問題の経緯

紛争は終わったが、廃校問題が目前に迫ってきた。定時制高校への進学者は、ますます減少し、一九七〇（昭和四五）年四月には、かろうじて五〇名の新入生を迎えたに過ぎなかった。京都市内でも数校あった私学の定時制高校は次々に姿を消し、最後に残ったのは同志社商高と一燈園高校のみであった。公立の定時制高校も軒並に定員割れの状況であった。生徒数確保のため西陣織物組合と折衝するなど、種々の対策が講じられたが目だった効果はなかった。生徒数の減少とともに単年度の赤字は当然急増していった。ついに法人理事会の諮問機関であった商高特別委員会は一九七一年（昭和四六）年八月「報告書」を提出し、「何等かの結論を下すべき時に来ているのではないか」と述べ、理事会が関係機関の意見を十分にきいて結論を下すべきであると結んだ。これに対し、教職員は当然のことながら廃校反対の意志を表明した。いろいろ曲折をへた後、教職員三名の社内他校への転出による人件費削減を条件に、一九七二年（昭和四七）年度の生徒募集がかろうじて認められた。かくて平林校長および教員二名が商高を去っていった。そのあと後任校長の人選が難航した結果、住谷悦治総長が暫定的に校長代行に就任した。新学期に入るとすぐに生徒会から質問状が提出され、五月には教職員も「申し入れ書」を住谷総長、秦孝治理事長に提出し、存続の希望を訴えた。また同月商高廃校実力阻止共闘会議の名でピラがくばられ、一人の生徒は臨光館でハンガー・ストライキに入った。このほか卒業生、父兄会、講師からも、それぞれの立場から、反対運動が続けられた。七月一九日、総長、理事長と商高教職員との懇談会がもたれ、席上秦理事長は、「七月の理事会で、生徒募集停止を決定したい」と発言した。かねがね理事長は、商高は「細く長く」という考えで存続を計ったが、ここに至り「万策つきた」と述べた。かくて七月二二日の理事会で、「商高は廃校する方向で具体案を策定し、関係方面との調整をはかる」と決定した。同時に住谷総長が正式に校長代行に就任した。九月七



「一粒の麦」の碑

日には、全生徒に「商業高等学校の現況とその対策について」が配布され、説明がおこなわれた。そこでは定時制高校への志願者が減少し、定時制高校に対する社会の需要が大きく低下したこと、および赤字が増大し、理事会の経営能力を超えた財政負担となるとの判断が述べられていた。

しかし、その後も法人評議員会の決定まで反対運動は続いた。一月二五日、秦理事長の急逝というあわただしい状況の下、一月二七日法人評議員会で生徒募集停止が決定し、最終的に廃校が確定した。

生徒募集停止決定後の学校ははじめなものであった。年々生徒数が減り、学校全体の活気がなくなり、とりわけクラブ活動への影響が大きかった。定時制高校の生徒にとってクラブ活動の教育的意義はきわめて大きいものがあったが、チーム編成ができなくなるなど活動は大部分不可能となり、生徒の表情も暗く沈痛なものとなった。この沈滞した空気を盛り上げるために、学校としてはさまざまな手を打ったが、どうすることもできなかった。さらに教職員の身分保証という大きな問題が残されていた。この問題の解決には、独立採算制という壁があったが、最終的には学内諸学校の好意により、幸いにも残る全教職員の学内での配置転換が可能となった。

卒業生は記念碑建立を計画し、募金を始めた。予想外の募金の申し出があり、現在「一粒の麦」の記念碑が、旧聚芳館跡（現大学図書館前）に建っている。

最後の卒業式

最後の卒業式は、一九七六（昭和五一）年三月七日、京都国際会議場で行われた。卒業生はわずかに二五名であった。この卒業式には第一回からの卒業生や、旧教職員も多数参加した。久し振りに

なつかしい顔がそこに見られた。卒業式は無事終了し、卒業生をはじめ各人それぞれの思いを秘めて散っていった。

戦後の混乱期に設立された商高はともかくもその使命を果たし終えたのか、それとも小規模ながらも存続さすべきであったのか、ただ同志社の財政負担能力の限界という理由のみで存続不可能となったのか、これらの点を明確にすべきであろう。後者であったなら同志社は一つの使命をやむをえず放棄したことになる。何を同志社は失な



『あしあと』（表紙・住谷悦治絵）

ったのか、法人理事会をはじめ、残る学内諸学校もこの商高の廃校という歴史的問いを問いつづけていかねばならない。同志社商業高校は姿を消した。

卒業生総数は、二一〇二名であった。赤字の累積額は、三億一九〇万円であった。なお、商業高等学校の記録をながく残すために、一九七六年三月に『あしあと』を発行した。

第四章 女子大学

存在形態の特異 性と生誕の苦難

現在、わが国には、三一三校の私立大学があり、そのうち、女子大学は七一校ある。この数ある大学の中で、同志社女子大学はきわめてユニークな存在形態を有している。すなわち、戦後、新制大学への移行のもとに、多数の女子学生を擁するようになった共学大学（同志社大学）と、女子学生のみを収容する女子大学が、一つの法人（同志社）の中に共存しているという事実である。このような存在形態をもつ大学は、わが国はもとより、諸外国においても数少ない。

そして、この特異な存在形態のゆえに、同志社女子大学の誕生の歩みは、決して平坦なものではなかった。というのも、すでに述べたように、同志社学園には、同志社大学という確固たる大学組織があり、大学教育を求める女子にも門戸が開放されているのに、なぜ女子のみに限定した大学を開設する必要があるのかという理念的、現実的な問題提起がなされていたからである。このような主張は、一九四六（昭和二一）年一月三日に公布された日本国憲法（新憲法）の理念にもとづき翌年三月三十一日に公布施行された教育基本法の「教育において男女共学は認められなければならない」という規定を背景にする教育の基本理念にもとづくものであった。しかし、幸いにして、戦後



E. L. ヒバード

澎湃として起こった民主主義思想の定着を図るためには、男女の大学教育における機会均等と共に女子の教育機会を拡大、強化する必要があるとの認識が強まり、あらゆる機会を通して、その機関の拡大、拡充を促す必要があるといった学外世論が高まったこと、および、当時、法人同志社の総長の重責を担っていた湯浅八郎などを中心に、アメリカにおいても東部の五大女子大学ウェルズリー、マウント・ホリヨーク、スミス、ヴァッサー、プリンマーが女子の教育、研究活動の発揚につとめ、独自の立場から社会に大きな貢献を果しているという事実を指摘し、同志社においても総合大学としての同志社大学とは異なった女子のための大学の必要性と存在意義が主張され、学内世論の統一を図ったことなどに支えられ、同志社女子大学は戦後の困難な経済状況の下にありながらも、誕生への始動を開始したのである。

このようにして、同志社女子大学は一九四九（昭和二四）年二月、文部省より四年制の新制大学として設置することが認可され、同年四月より学芸学部英文学専攻、食物学専攻、音楽専攻の一学部三専攻を有するカレッジとして発足するに至った。

これよりさき、一九四八（昭和二三）年春に総長湯浅八郎は、同志社女子専門学校校長片桐哲と相談して、マウント・ホリヨーク大学の出身で、当時、同志社女子専門学校の教授として英語・英文学を講じるとともに、宣教師として宗教教育にも関与していたヒバード（E. L. Hibbard）を女子大学設立準備委員長として開設の準備に当らせた。ヒバードは、一九三〇（昭和五年）、アメリカン・ボードから派遣され同志社に着任し、戦時中はアメリカに帰っていたのであるが、戦後間もない一九四六（昭和二一）年、「愛する京都、愛する同志社に戻りたい」という情熱に駆られ、「廃虚になった日本で、板の上にゴロ

寝する覚悟」をもって「医療品から食料品まで持って」同志社に帰ってきていたのであった。女子大学開設準備委員長に任命されたヒバードは「外国人が日本の学校行政に当る時代はもう過ぎ去った」と考えており、最初は堅く辞退をしたのであるが、「当時の社会情勢では、外国人でなければ出来ないとわれ、否応なしに承諾させられ」てその任につき、一年間という期限付で、同志社女子大学の初代の学長に就任した。

設立準備委員長となったヒバードは片桐哲校長などとも協議し、大学の性格をリベラル・アーツ (Liberal Arts) とし、次のような目的理念を設定した。

本大学は、教育基本法および学校教育法に基き学芸の大学として学術を教授研究すると共に、明確に思考し有効に思想を発表し、諸種の価値を判断識別する能力を育て、あわせて、キリスト教の理想にしたがい円満なる人格を涵養すると共に、国際民主主義社会において建設的に、かつ責任をもって生活し得る女性を育成することを目的とする。

このような理念の実現を図るために、ヒバードは、まず、同志社大学のロバート・グラント教授、アリス・S・ケリー博士、同志社女専のクラブ教授、ならびに加藤さだ教授などをメンバーとするカリキュラム委員会を作り、開設すべき教科についての仔細な検討をすすめた。また、大学におけるリベラル・アーツの意義を考え、その理論的な研究のためにグラント教授から数回にわたる講義解説も受けた。そして、学部名もリベラル・アーツの日本語訳を当て学芸学部とした。学芸学部という名称は、後に教員養成系の大学などにおいて次つぎに用いられるようになり、一般化した。これを最初に正式に採用したのは、同志社女子大学であったと言われ、また、英語の校名も *Doshisha Women's College of Liberal Arts* となった。

リベラル・アーツとは、古くギリシア・ローマの学問に源を発するものであり、自由な学芸、すなわち、自由人の



同志社女子大学の徽章

教養のための学芸を意味するものである。より具体的には、専門的あるいは職業的な学問を目指すのではなく、むしろ、それらの根本にあつて高い人間性を培い、豊かな精神を養う、いわゆる人間教育を目的としたものである。これは、のちにヨーロッパ文化の発展を導く重要な基盤を構成し、さらに、アメリカに拡まってその文化的伝統の確立に大きく寄与した。

新島襄の学んだアーモスト大学や、前記の五大女子大学は、アメリカにおける最も典型的なリベラル・アーツ・カレッジであり、その伝統は早くから同志社における女子高等教育に取り入れられていた。すなわち、同志社女子専門学校には、英文科、家政科など専門の学科が設置され専門の教育研究がなされていたが、同時に、倫理・修身・歴史・哲学・自然科学など一般教養の科目も数多く設置され、リベラル・アーツ・カレッジとしての特性と体裁を備えていた。それゆえ、これが同志社女子大学がリベラル・アーツ・カレッジとして新たな発展を遂げるための大きな基底をなしていたといえる。

しかし、ヒバードたちが目指す理想の形の大学として同志社女子大学が発足するためには、いくつかの難問をかかえており、結局、当初の計画の一部を変更せざるをえない事態に迫りやられた。すなわち、当初、リベラル・アーツの理念に照らし、同志社女子大学に英文学・食物学・音楽・社会学の四つの専攻を置くことが望ましいと考え文部省に申請したのであるが、社会学専攻については、「社会学専門の博士号をもつ教授が居ないという理由」によって認可されず、三専攻をもって発足せざるをえなくなった。

三専攻についても、大学設置審議会の現地視察に備えて、「全教職員が窓拭き、図書運び、埃払いに取りかかり」、また、家政学科（食物学専攻）関係の実験台の不足に裁縫のテーブルを当てたりした。そのため、視察当日、視察委員から物理学の実験台をガタガタさせながら「こんな実験台では

どうして正確な実験ができるか」と注意され、また栄養学の割烹室では、古いガスパン焼器を見て「半世紀も前のこんなものでどうするつもりか」と笑われたりする始末であった。そして結局、三つの専攻とも「三年以内に内容を充実させること」という条件付で認可されたのである。

このように設備については戦後の混乱期にあったとはいえ、文部省の基準以下という状況の下に発足せざるをえなかったのである。これは一面からみれば、同志社におけるリベラル・アーツ・カレッジとしての特性が文部省によってある程度認められた結果といえる。しかし、他面、財政基盤のせい弱性は否定できない事実であり、このハンディキャップの克服は当面の大きな課題であった。しかも、法人同志社の理事などの中には、すでにのべたように共学大学の他に女子大学を作るとは、同志社にとっていわば一種のせい沢であり、また、冒険でもあるとみるものも存在していたため「女子大学を設立するならば独立採算」をと宣告され、経営面については、あくまでも自主独立の道を歩まざるをえない立場におかれていた。そのため経営基盤の安定のために、学生数の確保を図ることに専念し、なお、その上での不足をカバーするためには篤志家の寄附を仰ぐことに活路を見出す以外になかったのである。このため、開学初年度（一九四八年）の前期試験終了後、高等学校に対する学生募集と、校友・同窓などに対する募金のための「宣伝計画」が次のようなスケジュールで実施された。

一九四九年度前期試験終了後の宣伝計画

期間 一〇月七日より一六日まで

一、府下（京都より宮津）

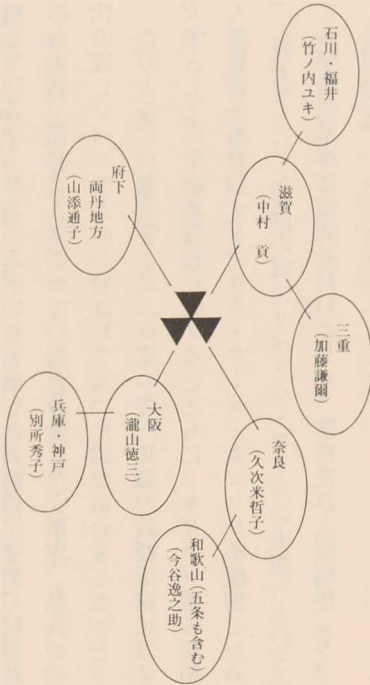
八校、二泊

二、奈良和歌山（奈良から和歌山）

一〇校、四泊

- | | |
|----------------|--------|
| 三、滋賀湖東(大津から長浜) | 八校、三泊 |
| 四、三重(鈴鹿より宇治山田) | 九校、三泊 |
| 五、北陸(武生より金沢) | 一〇校、四泊 |
| 六、阪神(茨木より神戸) | 二〇校以上 |
| 七、大阪(大阪とその近郊) | 三〇校以上 |

この宣伝計画には、次のような配置図に従って主として教授たちが当った。



この他、「十月、十一月に山陰に行く予定」が

たてられ「十月中旬九州に一行六名にて赴く。熊本までは確定」と、当時の女子部の分室長であった山田健三はその「庶務日誌」に誌している。

学風と学生気質

一九四九(昭和二四)年四月に
呱呱の声をあげた同志社女子

大学であるが、その後三〇年の歳月をへて、いまや「而立」の年代を迎えるに及んでいる。

ところで、三〇年の歴史をふり返ってみるに、

そこに、初期、揺籃の一〇年、中期、発展の一〇年、現在に至る充実の一〇年と名付けうる時期のあったことがわかる。以下、この三期に分けて、学風あるいは学生気質に触れてみよう。

揺籃期

初期の同志社女子大学は、女子専門学校の輝かしい伝統と社会的評価に守られ、それをさらに発展させる使命をもって発足したものであった。初期の卒業生の一人は在学当時をふり返り、次のような手記を残している。「私共の入学いたしました当時は、まだ、同志社女専の実体も残って居り、従って、その社会的評価のもとに、私共は入学させていただきました。事実、私共の学年では、京大と同志社女子大に京都府立第一高女時代の同じレベルのものが分かれて入った感がありました」と。

このように京都大学と並ぶ高度の専門知識の教授伝達に対する期待を受けていた、発足時の同志社女子大学は、大学としての学術を教授研究するとともに、キリスト教の理想にもとづき「高い人間性を培い、豊かな精神を養う人間教育」を目指すリベラル・アーツ・カレッジを標榜したのである。そのため、初期、揺籃期における学風は「一般大学よりも程度の高いリベラル・アーツの実現」という言葉によって代表されるものであり、新制大学として大学設置基準に定める科目の外に、聖書及び人間関係（ヒューマン・リレーションズ）の二科目を独自に必須科目として置いた。

ちなみに、第一年度（昭和二四年度）前期の開講科目とスタッフは次のようであった。

聖 書 山崎亨、片桐哲

人間関係 福原春代、加藤謙爾、久保貞子

日本作文 加藤順三、里井陸郎

英 語 高田峯尾、瀧山徳三、中村貢、藤井義久

英語会話 ヒバード、百々静子、吉川順、バーンサイド

翻 訳	瀧山季乃
体 育	大塚愛子、石渡芳江
物 理 学	大塚肇
化 学	唐沢郁夫
心 理 学	加藤謙爾
フランス語	宮本正清
音楽鑑賞	ヘッセル
美術鑑賞	河井寛次郎
和 声	中瀬古和
ピアノ	中瀬古和
初歩音楽理論	クラブ
声 楽	加藤てい
図 画	橋本ミツ

発足当初の中心スタッフは、学長兼部長のE・L・ヒバードをはじめ、英文学専攻主任には加藤さだ教授、音楽専攻主任にはF・B・クラブ教授、食物学専攻主任には久次米哲子助教授、学生主任には福原春代助教授となっており、すべて女性の教授または助教授であったことが目につく。

初期の女子大学におけるリベラル・アーツの学風を規定づけたもう一つのものとしては、主専攻（メイジャー）、

年 度	4 年卒業				2 年修了			
	英	家	音	計	英	家	音	計
1952	/	/	/	/	57	27	2	86
1953	63	14	5	82	112	52	1	165
1954	121	21	7	149	82	43	5	130
1955	184	24	9	217	46	53	4	103
1956	156	86	7	249	58	79	7	144
1957	167	83	10	260	52	95	5	152
1958	148	72	7	227	57	108	3	168
1959	156	99	18	273	47	103	2	152
1960	150	137	11	298	39	71	2	112
1961	164	157	17	338	54	84	4	142
1962	185	131	15	331	42	60	0	102
1963	221	172	12	405	36	62	0	98

副専攻（マイナー）の制度がある。これは、英文学、音楽、食物学（家政学）など専門分野を専攻する学生が、それぞれの専門領域を主専攻とすると共に、希望によって他の専攻を副専攻として幅広く履修することができるものであり、学生が「明確に思考し有効に思想を発表し、諸種の価値を判断識別する能力を育成」するためにふさわしい制度であったといえる。

しかし、このような「程度の高いリベラル・アーツ」を幅広く学生に教授し習得させることを目指す同志社女子大学の理想的な方針は、それがすぐれていればいるだけに、現実の社会的・経済的な諸条件の制約や拘束にもとづき、定着することが困難であり、現実と理想のギャップを余儀なくされた。その一つとして、財政上・経営上の困難さが指摘できる。すでに述べたように、文部省は同志社女子大学の設置を認可するに当って、今後三年間に設備の充実を果たすことという条件をつけていたのであるが、一九四九（昭和二四）年当時、京都市における平均的な家計費（生活費）が月平均一万二三五九円という状況の下で、同志社女子大の学費をみると、入学金三〇〇〇円、学費一万円となっており、受験料の一〇〇〇円は別として、一年間の学費が平均世帯のほぼ一カ月の生活費相当額にすぎなかった。ちなみに、現在（一九七七年）の学費をみると、平均五三万七五〇円であり、京都市における一カ月の平均生活費一九万八〇三一円の二・六八倍に達する。このような状況のもとでは、教授たちも教育研究活動に専念することができず、すでに述べたように、入学志願者の開拓

と寄附金の募集に宣伝旅行を割り当てられていたのである。

また、この財政的な困難性をカバーする意味もあって、その高い理想とは別に、四年制大学でありながら、二年間の修学によって修了証書を授与する短期大学に類似した独自の「二年修了制度」を、全くの便法として採用した。この制度は、戦後の学制改革による六・三・三制の上に二年の修学期間が加わるものであり、従来の小学校六年、中学校（高等女学校）五年、専門学校三年、計四年の、女子にとって最長の修学年限と一致するために、子女を送り出す側にとってもなじみ易い面もあり、初期の段階では希望者が多く、一九五二（昭和二七）年に八六名の第一回修了者を出して以来、毎年一〇〇名以上を数えていた。四年卒業者と二年修了者の数を比べてみると、前ページの表のようである。

ヒバードは、女子大学創設の大任を果し、予ての約束通り学長の職を一年限りで退いた。そして、後任（第二代学長）には、一九三三（昭和八）年以来、女専校長として、また当時、法人同志社の教育局長として、女子大学の誕生に大きな力を発揮しており、ヒバードが初代学長を引き受けるに際し「片桐先生と協同で学長をさせていただけるなら」と湯浅総長に進言していた片桐哲が就任した。熱心なクリスチャンであった片桐は、リベラル・アーツの教育理念をキリスト教にもとづく人格的な交りに求め、教師と学生、学生と学生とが心を開いて共に語り、共に学び合う集団教育によってその成果をあげうると考えていた。そのため、彼は少人数教育と寮における全人的な教育に力を注いだ。

女子大学の少人数教育の方針は、その後の歴代学長にも引継がれ、良き伝統の一つとなり、片桐の後をうけ、第三代の学長となった瀧山徳三の時代まで引き継がれた。しかし、これはその後、発展期における経営面の合理化に對してはマイナスになる要素もあった。瀧山の述懐によれば、一九六一（昭和三六）年越智文雄が第五代の学長に就任

したとき、「大塚総長が越智学長と私とを招いて、女子大学はあんまりクラスを小さくし過ぎるのではないか」と主として経営面からの配慮にもとづいて、その改変を促されたが、「私どもは、女子大学は経費はいりましようが、なるべくクラスを小さくして人間的な関係を深めたいと答えた」とのことである。

片桐が力を注いだ寮生活、寮教育についてみると、女専時代からあった常盤寮、プリンプトン寮、大沢寮、洗心寮、一九四八（昭和二三）年から開設した銅駝寮、桜橘寮、片桐在任中の一九五一（昭和二六）年と一九五二（昭和二七）年に開設した香柏寮、栄冠寮に、清水有楽、佐原恵美、宮下千代、中嶋静恵など熱心なクリスチャンで、すぐれた指導力を持つ寮務主事を置き、学長、学生課長、学生主任、寮務主事たちによる寮務会を定期的に開催し、キリスト教による徳育と、生活を通しての集団教育の実践を行なった。関係教職員は常に寮生とともに、ここにこそ新島精神があり、こここそが、それを伝え実現するところであるという抱負と自覚をもち続けるように配慮した。また寮生は教会に出席することが寮則によって定められており、この頃寮生の中で受洗する学生は毎年数十人を数えた。片桐のこのような寮生活重視の方針は瀧山にも引継がれ、一九五三（昭和二八）年四月には霜雪寮が開設され、同年九月には聖州寮が新築され、寮は量・質ともに、充実の一途をたどった。

片桐は一九五三（昭和二八）年三月定年を迎え退職したのであるが、彼の退職の年と期を一にして第一回の同志社女子大学の卒業式が挙行され、英文学専攻六三名、音楽専攻五名、食物学専攻一四名が、それぞれ文学士、芸術学士、家政学士の称号を得て社会に巣立った。

同志社女子大学における学風のもう一つの特性はキリスト教教育に根差すものであった。すなわち、週日の毎朝一〇時から一五分間、デントンを記念して寄贈されたパイプ・オルガンの荘厳な響きをもつ奏楽によって始まる礼拝が、毎週次のようなスケジュールで行われていた。



瀧山徳三

月曜日 学長講話

火曜日 宗教主任講話

水曜日 同志社教会牧師講話

木曜日 音楽礼拝

金曜日 本学諸教授の講話

土曜日 学生礼拝

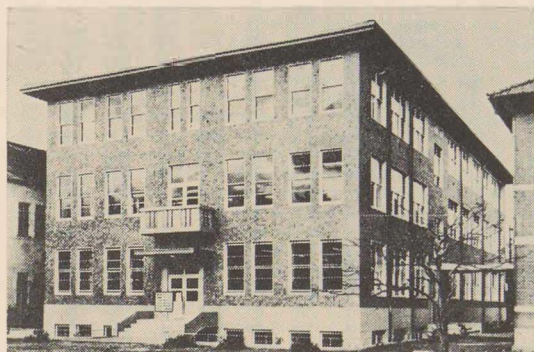
この礼拝は、開始時間と講話（説教）者の形態には多少の変更はあるが、いままなお継続されている。

その他、宗教教育の一翼を担うものとして春秋二回の修養会、夏季のキャンプならびにクリスマス礼拝が多数の学生の参加を得て行われていた。これらも現在に続く同志社女子大学の年中行事となっている。さらに、初期においては、毎日曜日栄光館で行われる同志社教会の礼拝には、教職員、学生は原則として出席することとしていた。

片桐も自から率先して同志社教会に出席するとともに、総長大塚節治とともに教会の責任役員としての責務を果し、同志社教会を支える礎石となっていた。

片桐が退職したあとを受けて、一九五三（昭和二八）年四月より、英文学の瀧山徳三教授が第三代学長に就任した。

瀧山は一九二五（大正一四）年、同志社女学校専門学部時代より在職し、女子大学設立に当たってもヒバード、片桐を助けてその成立のための陰の力となっていた。学長に就任した後も、先任のヒバードや片桐の意向を尊重し、大学運営に当って常にそ



デントン記念館

の意見を徴するとともに、新島の「生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事」という遺言を良く守り、キリスト教ならびに少数人格教育を継承発展させた。瀧山は研究においても教育においても、また日常生活においても誠実を第一とし、正しいと思ったことに對しては強い信念をもって臨んだ。このことを裏づけるエピソードの一つとして、毎週月曜日の礼拝において学長講話のテキストとして拝読する聖書の個所が、七年半の在職期間中いつもコリント人への第一の手紙第一三章であつたことを指摘することができる。

誠実一途に大学を運営し研究教育を進めて行く中で、瀧山は大学としてなくてはならない研究室・図書室・実験室、および学生にとっての厚生施設の不足を痛感するようになり、在任中に大英断を下してそれら建物の建設に着手した。その一つはジェームズ財団の協力を得てデントンを記念することを兼ねた大ホール、研究室、図書室、演習室、実験室、学生食堂、購売部を備えた鉄筋コンクリート三階建てのデントン記念館である。これを一九五五(昭和三十)年に完成させるとともに、学寮も片桐の計画に従って一九五三(昭和二十八)年九月に聖州寮を竣工させたのち、新たに一九五八年から六〇年にかけて、第一期、第二期、第三期と順を追って工事をすすめ、二八〇人を収容できる新心寮を建設した。瀧山は決して無理をせず何事につけ一步一步前進させる方針をとり、その在任中に徐々に学生と教員を増やした。そのため、第一回の卒業生を出した一九五三年度には学生総数一〇四八人であつたものが瀧山退任の一九六〇年度には一七二六人になっている。しかし、この間専任教員の数も三五人から五三人にふやしており、教員一人当りの学生数を三一・〇

人から三二・六人の微増に止めている。

このように瀧山はその誠実な人柄を反映し、創業期の女子大学を質的に高める働きを一步一步着実になしとげたのである。このことは教員の研究活動や学生のクラブ活動面にも如実に現われている。すなわち、この間に教員の研究成果を発表する『同志社女子大学学術研究年報』が次第に充実してきた。また、英文学・音楽・家政学関係の公開学術講演会に加え、一般教育関係の文化講演会も開催されるようになり、大学の内外に各教員の研究成果を問う体制が整ってきた。のち一九六四年には、同志社女子大学研究所が開設され、学内における個人研究、共同研究に対する研究費の支給が行われるようになるとともに、海外留学、内地留学の制度も拡充された。

学生会のクラブ活動も次第に活発となり、同志社の創立記念日を祝う学園祭「同志社イヴ」も、女子大学独自のものとして行われるようになった。また、英文学専攻の学生によるシェイクスピア劇がイヴ行事の一環として行われるようになったのも、一九五三（昭和二八）年からである。このときから三年間、学生だけではなく英文学科の教職員総出の『ハムレット』が前座としてつけ加えられ、人気を博した。

発展期

瀧山は同志社女子大学を着実に発展に導き、その質的な高まりのあることを確認したのち、女子大学創立一〇周年目の一九五九（昭和三四）年三月には、学生定員の増加を文部省に申請し、認可を受けている。これ以後、女子大学は第二期の発展期に入ったといえる。

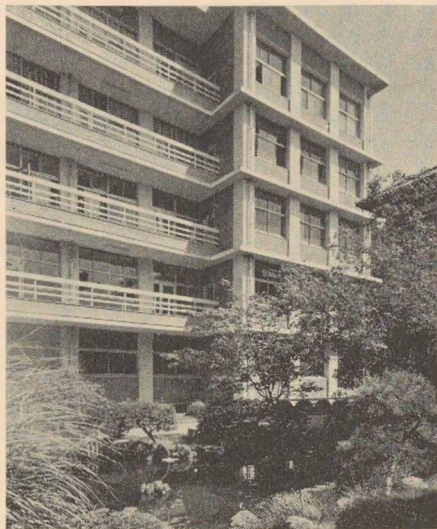
発展路線に糸口をつけて、瀧山は健康上の理由で任期半ばで学長の職を辞した。そして後任の第四代学長には加藤謙爾教授が選ばれ、一九六〇（昭和三五）年九月に就任した。

加藤は戦後、女子専門学校時代から哲学、心理学、倫理学、人間関係などを講じるほか、主として教務の責任者として歴代の学長を補佐し、教学関係の充実と発展に尽してきた。設立以来一〇年の歳月を経、発展期を迎えた同

志社女子大学の学長としての手腕を発揮することを多くの人たちから期待されていたのであるが、就任後数カ月を経ずして病に倒れ、翌一九六一（昭和三六）年二月、天国に召され異籍の人となった。加藤の没後暫く瀧山が学長事務取扱いとして再度経営の任に当り、一九六一（昭和三六）年七月、文学博士でミルトン研究者として著名な越智文雄教授が第五代学長に選ばれてその任につくまで、学年末および学年始めの多難の時期を乗り越えた。

越智が学長に選ばれるとともに、女子大学は日本経済の高度成長に劣らぬ成長発展期を迎えるのである。まず、学生数についてみると、瀧山が退任した一九六〇年度に総数一七二六人であったものが、越智が定年のために退任した一九七四年度には三〇二一人と七五パーセントもの増加になっている。もちろん、これとともに教員数も増え、一九六一年の五三人から七四年には七六人と増加している。このような増加は日本経済が急速な成長を遂げる中で大学の進学率の高まりとか、戦後のいわゆるベビー・ブーム期に出生したものが大学進学期を迎えて大学生が急増したという社会的な要因もあったが、同時に、越智の積極的な大学運営理念にもとづくところも大であったといえる。

しかし、このような拡充・発展を続ける中で、同志社女子大学として、一方では長く保持し続けてきた伝統的な行事、あるいは、特色ある教科を廃止せざるを得なかったし、他方、学生たちにも、それまでとは異なった動きがみられるようになった。すなわち、同志社女子部において、一九〇三（明治三六）年、デントンを通じて米国からの寄贈品によって催された第一回のバザー以来、長い伝統と歴史を持つ女子部バザーに女子大学は学内の支持を得られず、一九六九（昭和四四）年の秋から不参加の方針を打ち出した。この事について越智は、後に「バザーにしても、十年間ぐらい、私が努力して何とか参加し続けた」が、学内世論に「だんだん敗北しました」と述べている。



楽 真 館

また、リベラル・アーツ・カレッジとしての特異な学風を保持する大きな特色として創立以来続けられてきた「人間関係」の科目も、一九七二(昭和四七)年度から廃止の方針が打ち出された。

この「人間関係」廃止のいきさつについても、越智は次のように述懐している。「学園紛争期などを通じて『人間関係』というのは非常に見直され」「よその大学では今から始めようかという時に」「どうして今までのように続けられないのかということ、私は教授会でも盛んに言ったけれども、その当事者のほうの人達が、何かもう自信をなくしてしまったようなことで、私は最後には歯がゆく思いました」と。

また、一九六九(昭和四四)年は、大学の歴史に大書されるであろう世界的な大学紛争の年にあたり、その影響を多分に受けた学生の自治組織である学生会は「大学の運営に関する臨時措置法案」(いわゆる「大管法」)反対のための運動を精力的に展開し、六月二九日学生大会を開催するとともに、開学以来はじめての一日授業休止を決議し、一〇〇〇名以上の学生による今出川より円山公園までのデモ行進をおこなった。

越智は学生数、教職員数の増加を図るだけではなく、学内世論にもとづいて、建物、設備関係をも次つぎに拡充した。まず第一に、一九六二(昭和三七)年には純正館(体育館)を完成させ、次いで翌年一月火災のため灰燼に帰した家政館のあとに、早速地下一階地上五階という堂々たる楽真館を工事費ならびに設備費三億円という巨額の資金を投じて着工し、一九

六四(昭和三九)年度中には完成させた。また、一九六七(昭和四二)年には、前総長大塚節治、元学長片桐哲、瀧山徳三、あるいは、音楽学科中瀬古和、クラブなどの協力により、アメリカン・ボードから一五〇〇万円の寄附を受け、その建設が待望されていた音楽館(頌啓館)を完成させた。そして、一九六九(昭和四四)年には、学寮鶴山寮を建設する一方、大沢寮、常盤寮、第一・第二プリンプトン寮、えんじゅ寮の廃止、心和館の建設、新心寮の増築など、次つぎと大胆な設備投資を展開した。また、一九七七年九月に完成した地階を主体とする設計と優雅な姿で学内外の注目をあびるようになる図書館の建設の基本プランも、越智の在任中になされた。

越智はまた、一九六五(昭和四〇)年には同志社女子大学研究所を設立するとともに、学制の大幅な改正をも断行した。すなわち、同年一月には学生定員の増加を図るとともに、従来の学芸学部三専攻を、それぞれ英文学科、家政学科、音楽学科の三学科に改組し、さらに、一九六七(昭和四二)年一月には学芸学部家政学科を発展的に解消させ、新たに家政学部家政学科、食物学科の設置の認可をえている。そして、同年三月には同志社女子大学院文学研究科英文学専攻(修士課程)、翌六八年三月には同じく大学院家政学研究科食物学専攻、さらに、一九六九(昭和四四)年一月には家政学部食物学科に食物学専攻と管理栄養士専攻の認可を得ている。続いて、越智在任中に提出した大学院文学研究科英文学専攻(博士課程)の設置申請は一九七五(昭和五〇)年四月に受理され、関西の諸女子大学英文学科に先がけて開設される運びとなった。ちなみに、大学院文学研究科英文学専攻、家政学研究科食物学専攻(共に修士課程)の開設年度における学科目担当者などは次ページの表のとおりである。

これより先、越智は成長期に入った同志社女子大学における新たなコミュニケーションの必要性を感じ、一九六二(昭和三七)年六月、『しばぐさ』と題する学報第一号を発行し、教職員ならびに学生の父兄に対し、その所信の一端を披瀝するとともに、学内外の世論に表現の場を与えた。『しばぐさ』は、以後、毎年一回発行されているが、こ

第四章 女子大学

英文学専攻学科目(1967)

学 科 目	単位	週時間	履 修 方 法	担 当 者
中世英文学特論 中世英文学演習	4 1	3	必 修	上 野 直 蔵 教授
近世英文学特論Ⅰ 近世英文学演習Ⅰ	4 1	3	必 修	越 智 文 雄 教授
近世英文学特論Ⅱ 近世英文学演習Ⅱ	4 1	3	必 修	岡 本 昌 夫 教授
英文学とキリスト教	3	2	必 修	E. L. ヒバード 教授
英文学特講Ⅰ	4	2	選 択 必 修	高 田 峯 尾 教授
英文学特講Ⅱ	4	2	選 択 必 修	瀧 山 季 乃 教授
英文学特講Ⅲ	4	2	選 択 必 修	望 月 満 子 教授
英語学特講	4	2	選 択 必 修	貞 方 敏 郎 講師
古典文学研究	4	2	選 択 必 修	松 平 千 秋 講師
欧州文学研究	4	2	選 択 必 修	加 藤 美 雄 講師
英語修辞学	2	2	選 択 必 修	吉 川 順 教授
古典語(ラテン)	2	2	選 択 必 修	岩 倉 具 実 講師

食物学専攻学科目(1968)

学 科 目		単 位 数			選択・ 必修の別	担 当 者	
		講義	演習	実験実習			
米 養 学	栄養化学特論Ⅰ	2	1	1	選択必修	久次米 哲 子	教授
	小児栄養学特論	2	1	1	〃	永 井 秀 夫	教授
	栄養生理学特論Ⅰ	2	1		〃	中 村 明 子	教授
	栄養生理学特論Ⅱ			1	〃	柴 田 幸 雄	教授
	生物化学特論	2			〃	小野寺 幸之進	講師
食 品 学	食品化学特論Ⅰ	2	1		〃	唐 沢 郁 夫	教授
	食品微生物学特論	2	1	1	〃	玉 置 日出夫	教授
	食品加工学特論	2		1	〃	木 咲 弘	教授
	食品衛生学特論	2			〃	鈴 木 成 美	講師
	食品材料学特論	2	1		〃	小 山 松治郎	教授
調 理 学	食品物性学特論	2	1	1	〃	林 淳 一	教授
	界面化学特論	2	1	1	〃	大 塚 肇	教授
	調理科学特論Ⅰ	2	1		〃	別 所 秀 子	教授
	調理材料学特論	2	1	1	〃	安 藤 孝 雄	講師
そ 他	食生活史	2			〃	下 田 吉 人	講師
食物学特別研究		10			必修	専任教授	

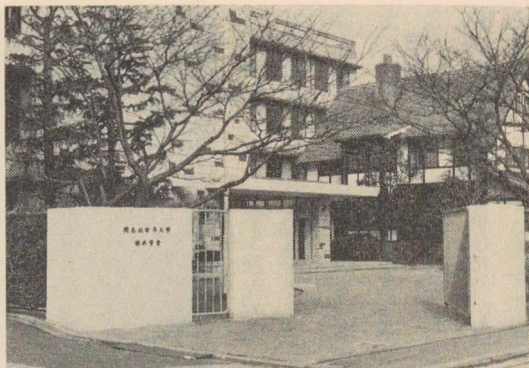
れには、毎号、巻頭には学長の所信が表明されるならわしとなっている。その他、教授陣の「論評」や「研究ノート」、肩のこらない「ずいそう」、学生生活を中心とする「実態調査報告」あるいは、「学内消息」など盛り沢山の記事があり、口絵のグラビア写真とともに、あたかも同志社女子大学の編年史的な役割をも果たしている。またこれには、女子大の歴史を知る上で貴重な資料となる証言が座談会の形で繰り展げられている。すなわち、第三号には「同志社女子大学創設のころ」（片桐哲、瀧山徳三・E・L・ヒバード、別所秀子）が、第八号には「同志社女子大学の教育と研究」（岡野久二、鷺淵卯子、杉瀬祐、林淳一、酒井康）、第十四号の同志社創立百周年記念号には「同志社よもやま話——草創期の先生がたを囲んで——」（片桐哲、加藤ティ、別所秀子、福原春代、越智文雄、有賀のゆり）などがある。

このような積極的な施策を次つぎに打ち出すための財源については、すでに述べたように、学生数の増加を図るとともに学費改訂を行なってこれに当てた。すなわち、越智は特に設備投資のための資金源とするために、学費の中にある設備拡充費の増額を行うとともに、従来は新入学生のみから徴収していたものを四年間にわたって納付させるように改めた。このような越智の大勇断があったために、同志社女子大学は設置三〇年を目前にして、名実ともに充実した女子大学としての体面を保つことができるようになってきたのである。

越智は、一九七五（昭和五〇）年三月、定年をもって学長の職を退いたのであるが、退任を前に、在任中、父兄会から寄せられた毎年の寄附金をよりどころに「同志社女子大学教育基金制度」を一億円の基金をもって発足させ、充実期を迎えた同志社女子大学の研究・教育面に一大新風を起こすことを期した。

充実期

越智のあとを受けて、一九七五（昭和五〇）年四月より第六代学長に就任した酒井康、そのあとを受けて一九七八（昭和五三）年四月より第七代学長となった岡野久二は、四半世紀に亘る揺籃期、発展期を終えた同志社女子大学を質的に充実した大学へと移行させることを試み、学生数の削減につとめ、いわゆる「減量経



女子大学梨木学舎

営」を実施中である。同時に梨木学舎の買収をはじめ諸設備の充実ならびに教員スタッフの増加を計ることにとめている。

女子大学としては、ヒバード、片桐、瀧山、加藤など歴代学長が理想として追い求めながら財政的な要因などにより十分に果し得なかったリベラル・アーツの理念の実現を期するとともに、越智によって進められた経営基盤の安定強化につとめることにより、名実ともに女子の最高学府としての責任ある地位を守り、より高め、第二世紀への発展が期待されている。

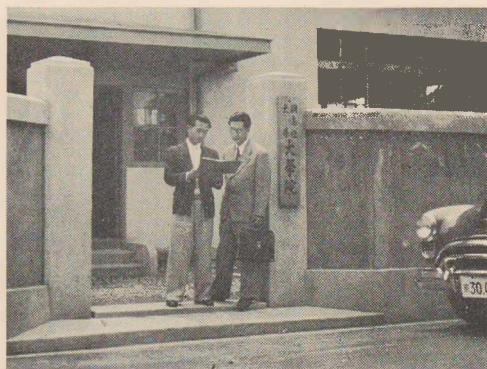
第五章 大学院

新制の大学院

新制の同志社大学大学院は、大学院設置基準に基づき一九五〇（昭和三五）年度から開設された。このことは一九四八年度に開設された新制の同志社大学とともに、戦後の新しい大学設置基準の構想に準拠するものである。一九五〇年には、神学・文学・法学・経済学・商学の各研究科が発足し、工学研究科は一九五五年度に始まり、同志社女子大学大学院は、一九六七年度に文学研究科が、翌年家政学研究科が新設された。当初は何れも修士課程だけであったが、一九五三年度からは、神学・文学・法学・経済学の各研究科、一九五七年度からは工学研究科にそれぞれ博士課程が増設された。同志社女子大学では、一九七五年度に文学研究科の博士課程が増設された。修士・博士課程の各専攻については後に述べる。

旧制の大学院

いわゆる旧制大学院は、同志社大学にあつては、大学令による大学として一九二〇（大正九）年度の発足当初から設置され、一九六〇（昭和三五）年三月末まで存続され、新制大学院とは約一〇年間、併置の形がとられた。旧制大学院の学生は、博士の学位を得ることを目的としながらも、課程その他に厳密な規定がなく、『同志社大学学則』第二章、大学院、第六条に「大学院学生ハ当該学部ニ於テ攻究ニ従事スヘシ」とある



北寮跡に設けられた初期の新制大学院

だけで、指導教授や担当教授に攻究の状況報告、すなわち研究テーマに関する研究発表や研究報告を行うだけで、指導教授に学生の側からアドバイスを求めるのが主体であったようである。一九三〇（昭和五）年度の「各学部長学事報告」には、文学部長の報告として、大学院学生、上野直蔵——チヨーサー及チヨーサーニ関スル中世英文学ノ研究——舟橋教授指導、他四名があり、それぞれ年一回、徳照館で研究発表を行なっている。しかも「大学院学生ハ東寮第七寮下階東北隅ノ室ヲ臨時使用セルモ将来ハ文学部教室ト同一建築物中ニ一室ヲ備フルノ必要ヲ認ム」という不備な教学条件であった。また入学者数も、文学部・法学部の両大学院ともに、毎年平均二、三名程度であった。

同志社大学 一九五〇年度の『同志社大学大学院学則』第一、総則、

院の立学の精神 第一条には、「本大学院は、学問の自由と基督教的精神と

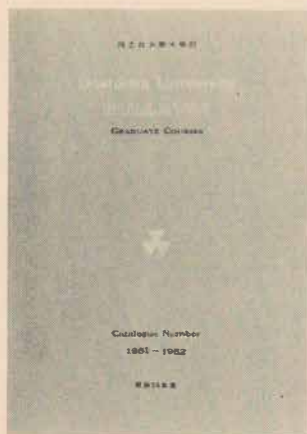
を尊重して、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて、文化の進展に寄与することを目的とする」とある。学問の自由、キリスト教主義精神・人類文化への寄与、この三つは、同志社の自由主義・キリスト教主義・国際主義の三つのイズムに直結するものであり、新制大学大学院の精神的支柱である。この総則は、その後の大学院制度の幾変遷にもかかわらず、同志社ではそのまま現在にいたっている。総則の第二条以下は大学院設置基準の条項を掲げる点においては全国共通で、いわゆる新制大学院の発足を以て、旧来不分明であった大学院の学問内容や組織がはじめて明記されるとともに統一された。旧制大学院が各大学において独特であったものが、新制大学院においては全国共通の学制のもとに画一化されるとともに、大学院間での交

流、あるいは国際交流さえ、その目標となっている。大学院の定員も新制大学では明文化され、同志社大学大学院では、修士課程において、入学定員総計二八七名、総定員五七四名、博士課程において、入学定員総計四七名、総定員一四一名とした。

大学院設置基準による修士課程の学問教育の目的は、「精深な学識を修め、専攻分野における理論と応用の研究能力を養うこと」が目的とされ、博士課程においては、「独創的研究によって、従来の学術水準に新しい知見」を加える等、その要求は極めて高水準のものであった。このような高い水準は、大学院の使命を端的に表現するものであり、この理想は今後もなお生きつづけて行くべきものであることはいうまでもない。

一九七五年の改正 一九七五年には大学院に再び改正が加えられることになった。これは一九七四年六月二〇日
条項による大学院 付の文部省令第二八号による大学院設置基準に基づくもので、この基準にはいくつかの特色

があった。その第一は標準修業年限を五年とする博士課程の考え方が濃厚になってきたことである。すなわち五年間連続の博士課程を設置しうることにしたのであって、この場合は修士号を出さない。これは米国の Ph.D. の課程に酷似したものといえよう。しかし博士課程を前期二年、後期三年の課程に区分してもよいことになっているため、同志社大学では区分する方式を採ることにした。第二の特色は、博士課程の後期課程では単位制度をおく必要がなくなったことである。すなわち前期課程がすでに三〇単位以上の履修を必要としているため、設置基準の要求する単位数は満たしたことになる。後期課程では「その目的、性格からみて、教育研究指導の在り方を単位制度で強く制約することが必ずしも適当でないことを考慮し」（一九七四年七月一七日付文部事務次官通達「大学院設置基準の制定及び学位規則の一部を改正する省令の制定について」、指導教授による十分な研究指導を受けさせ、学位論文の完成を期させるような配慮が払われているのである。第三の特色は学術博士という新学位が制定されたことである。こ



『大学院要項』(1951年度)

これは「最近の学術研究の発展に対処し、かつ、学位の種類の簡素化を推進するという観点から、既存の博士の種類と同水準の総括的な博士の種類として設け」(同通達)られるもので、同志社大学もこの学位を授与することになった。同様の趣旨で学術修士という学位も新設された。

修士・博士課程 一九五〇(昭和二五)年度に発足した新制の同志社大学院は、この時点で神学研究科・文学研究各専攻 科・法学研究科・経済学研究科・商学研究科の五研究科から成り、修士課程だけで、博士課程

の設置は、一九五三(昭和二八)年度からである。以下各研究科・専攻の入学定員と設置年度を列举する。

同志社大学院〔博士課程前期または修士課程〕

神学研究科(25名) 聖書神学専攻 歴史神学専攻 組織神学専攻(以上一九五〇年)

文学研究科 哲学専攻(10名) 英文学専攻(20名) 社会福祉学専攻(10名)(以上一九五〇年) 文化史学専攻(15名)

(一九五一年) 心理学専攻(5名)(一九六一年) 国文学専攻(10名)(一九六二年) 新聞学専攻(5名)(一九六四年)

法学研究科 政治学専攻(40名)(一九五〇年) 私法学専攻(20名)(一九五一年)

九五一年) 公法学専攻(15名)(一九六三年)

経済学研究科 理論経済学専攻(25名) 応用経済学専攻(25名)(以上一九五〇年)

上(一九五〇年)

商学研究科 商学専攻(40名)(一九五〇年)

工学研究科 電気工学専攻(8名) 機械工学専攻(8名) 工業化学

専攻(6名)(以上一九五五年)

〔博士課程後期〕

神学研究科 歴史神学専攻（5名）（一九五三年）

文学研究科 哲学および哲学史専攻（5名）（一九五三年） 英文学専攻（2名） 文化史学専攻（4名）（以上一九五五年）

心理学専攻（2名）（一九六四年）

法学研究科 政治学専攻（5名）（一九五三年） 私法学専攻（5名）（一九六三年）

経済学研究科 金融経済学専攻—経済政策専攻（5名）（一九五三年設置、一九五七年改称）

商学研究科 金融・貿易専攻—商学専攻（5名）（一九五七年設置、一九六五年改称）

工学研究科 電気工学専攻（3名） 機械工学専攻（3名）（以上一九五七年） 工業化学専攻（3名）（一九五九年）

同志社女子大学大学院〔前期または修士課程〕

文学研究科 英文学専攻（8名）（一九六七）

家政学研究科 食物学専攻（8名）（一九六八年）

〔博士・後期課程〕

文学研究科 英文学専攻（4名）（一九七五年）

博士及び修士の学位

以上のように、新しい同志社大学大学院、及び同志社女子大学大学院は、ともに博士課程を原則とし、その組織は二年の前期課程と、三年の後期課程から成り立っている。前期課程修了者は必要な単位を修得し、提出した修士論文が審査に合格すれば修士の学位を取得することができる。修士の学位を得た者は入学試験またはこれに代わる審査の上、後期課程に進むことが出来る。

これより先、同志社大学に学位授与が許可されたのは、一九二八（昭和三）年一月二日のことで、この時の同志社大学学位規定は、一九二〇（大正九）年の勅令第二百号学位令に準拠するものである。同志社大学学位規程によると、第一条に、本学において授与する学位の種類として、文学博士・法学博士・経済学博士の三種をあげている。第二条においては、本学大学院に於て二カ年以上研究したもの、或いはそれ以外のものでも学位請求論文を学長に提出できることとしていた。さらに第五条においては、学位請求論文に関する相当学部教授会が主査委員を選定し、教授会において採否を決する（第六条）こととしていた。このように旧制の学位規程においては、大学院在学が博士学位の授与の大きな条件とはならず、学位請求論文の提出は、規定の上では、極めて自由であつたように見える。しかし一九二八（昭和三）年から一九四八（昭和二三）年までの二〇年間に、『同志社大学々事年報』は毎年、学位請求論文の提出は一件もなし、とくりかえすばかりである。ところが翌一九四九（昭和二四）年から一九六〇（昭和三五）年にかけて、同志社大学でも計四三名の旧制博士学位取得者が出てゐる。一九四九年は新制大学院の設置及びそれに伴う学位規定改正の年であり、一九六〇年は旧制大学院及び旧制学位規程の廃止の年である。旧制博士学位取得者がこの時期に集中していることは、国公立大学を問わず、全国的な傾向であつた。

旧制の博士学位

同志社大学における旧制博士学位取得者の年次別件数を列挙すれば次の通りである。

一九四九年（5名）	文学博士2	法学博士1	経済学博士2
一九五〇年（9名）	文学博士4	法学博士3	経済学博士2
一九五一年（4名）	神学博士1	文学博士2	経済学博士1
一九五二年（7名）	文学博士2	法学博士1	経済学博士4

一九五三年（1名）文学博士1
 一九五四年（2名）法学博士2
 一九五六年（3名）神学博士1 文学博士2
 一九五七年（3名）神学博士1 文学博士1 法学博士1
 一九五九年（1名）法学博士1
 一九六〇年（8名）文学博士4 経済学博士4
 計四三名（神学博士3 文学博士18 法学博士9 経済学博士13）

右の統計にも見られるように、一九二八（昭和三年）の同志社大学旧制学位規程では、文学・法学・経済学博士の三種であったが、一九四七年神学部の独立により神学博士の学位も授与しうることになった。ちなみに同志社大学は、神学博士号を授与しうる国内唯一の機関であった。旧制博士学位の授与は学部教授会が決定権を持っていた。いわゆる旧制学位規程を含む一九二八年一月二一日認可の学位規程、一九四九年二月二七日の改正学位規程及び一九五二年六月二五日改正の学位規程は、一九六〇年三月三一日を以て失効し、一九五三年七月二日の学位規程がいわゆる新制の学位規程である。この新制学位規程は一九四九年二月二七日の改正学位規程が基礎となり、「学校教育法」第六八条および一九五三年文部省令第九号学位規則に準拠して制定されたもので、一九四九年から始まる新制大学院の第一回入学生が博士学位を取得し得る年次に間に合うように一九五三年に、この規程が成立したわけである。



啓真館（元の大学院専用校舎）

新制の修士・博士の学位

一九七五年の大学院設置基準は修士課程の目的を「広い視野に立つて精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要の高度の能力を養うこと」と規定している。また修士課程の終了要件は「大学院に二年以上在学し、三十単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、当該大学院の行う修士論文の審査及び試験に合格すること」である。一九五二年以来、修士学位は各研究科ともほぼコンスタントに授与してきたが、一九七五年新設の学術修士はまだ出していない。本学の文学修士号取得者の中には全盲のハンディキャップを克服して目標を達成した人が二人いる。すなわち永井昌彦（一九五七年、心理学専攻）と田中光夫（一九七八年、英文学専攻）である。

博士課程の目的は「専攻分野について研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うこと」（一九七五年の大学設置基準）である。これは一九五〇年に新制の学位課程ができたとき、博士学位の授与の基準を「独創的研究によって新領域を開拓し、学術水準を高め、文化の進展に寄与する」とうたわれていたことからすれば、何となく水準の低下を感じさせなくもない。しかし、博士課程という枠組からすれば、一九七五年の設置基準の表現の方がむしろ正確な表現というべきであろう。一九五〇年の規程はあまりにも旧制の博士号の水準を意識しすぎているくらいであるからである。

【博士あるいは修士の学位論文は大学院研究科委員会を通じて大学長に

提出し、大学長は当該研究科委員会に審査および試験、または学力の確認を委嘱する（学位規程第八条）。旧制学位の審査が当該教授会に附議されたのとは大きく異なり、新制学位審査は完全に大学院の当該研究科委員会の職務となった。従って新制の学位には当該大学名を冠することとなり、当該大学院における授業や修得単位と密接な関係を持つことが原則となっている（ただし一九七五年以降、後期課程は単位修得を必要としなくなった）。ここに至って新制の大学院は、名実ともに最高の学問研究および教育の機関となり、その頂点に学位が位置している。なお一九五三年文部省令第九号による学位規則によって授与された博士学位の場合は、第五条第一項の規定により「甲第 号」、同条第二項の規定によるものは「乙第 号」として、文部省へ報告することが義務づけられている。甲はいわゆる課程博士、乙は論文博士を意味し、広く碩学の研究者に門戸を開く配慮は残されている。同志社大学大学院において、いわゆる新制の博士学位を授与された件数は次の通りである。

甲 （二六名） 一九六三年—一九七八年

文学博士（1名） 工学博士（15名）

乙 （三三名） 一九六三年—一九七八年

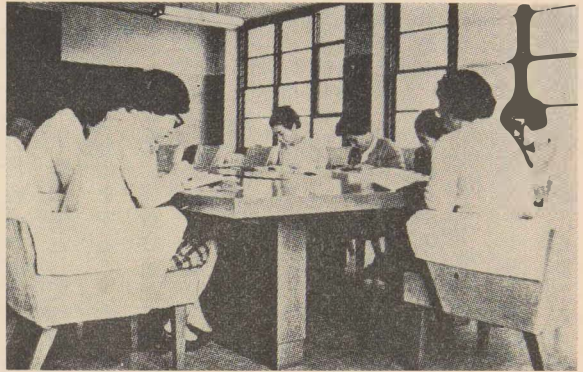
神学博士（3名） 文学博士（9名） 法学博士（3名） 経済学博士（2名） 工学博士（16名）

計 四九名

以上のようにいわゆる新制の博士学位においては、課程博士が原則でありながら、依然としていわゆる旧制の博士学位のように、論文博士の件数が極めて多い状態であった。ことに文科学系大学院研究科においては、課程博士の

実数が僅かに一名という有様で、同志社大学院にあっては、新制学位制度はほとんど有名無実である。しかしこの傾向は同志社大学に限るものではなく、国公立大学や他の私立大学においても共通の傾向であった。論文博士に重点が置かれていることは、新制の大学院においても、なお業績が重く見られていることを物語っている。このことは、博士学位が社会における職業とその地位を約束するものではないということであるとともに、日本の社会がそのような仕組みになっていないことがその背景にある。業績中心の博士学位の在り方は、大学院の卒業生が行く社会の仕組みが改まらない限り、簡単には改革され得ないのが実情である。実際に、業績中心の博士学位の在り方は、学問水準としては極めて高いものであり、余程の大きな社会的要請がない限り、大学院博士課程の修了者と見合うものとすることを困難にしている。

一九五三年文部省令第九号学位規則に準拠して制定され、一九七五（昭和五〇）年四月一日から適用されることになったさらに新しい学位規程は、いわゆる新制学位の矛盾を是正しようと企てたものであった。一九七五年度からの同志社大学学位規程は、同時に発足した新しい同志社大学院博士課程と相表裏するものである。一九七五年の学位規程改正条項においては、「博士の学位は、専攻分野について研究者として自立して、研究活動を行うに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を有する者に授与するものとする」（学位規程第二条とあり、研究者としての基礎学力が博士学位の内容となっている。このような基礎学力が社会的要請として職業社会の仕組みの中に組み込み済みであることが、この場合なによりも重要な条件である。このような条件が満たされている場合、「博士の学位は、大学院の博士課程を修了した者に授与するものとする」（学位規程第四条）という規程は正当である。新しい大学院は博士課程が原則であることと関連して、修士学位については、いわゆる新制大学院の修士学位の規定に何ら改正を加えることなくそのままである。そして課程博士学位論文も修士学位論文も、研究科委員会



女子大学大学院の授業

の議を経て、大学院委員会に附議され、大学長が学位を授与する点においては、いわゆる新制の学位授与の場合とほとんど変わっていない。同志社大学の学位、ことに博士学位の在り方はこれからの問題であるが、現在その合理化に向かって各研究科において、精力的に研究と努力がつけられている。

次に、同志社大学大学院博士課程の博士の学位の種類は神学博士・文学博士・法学博士・経済学博士・商学博士・工学博士・学術博士の七種類である。同志社大学大学院博士課程前期、或いは修士課程の修士の学位の種類は、神学修士・文学修士・法学修士・経済学修士・商学修士・工学修士・学術修士の七種類である。ちなみに学術博士・学術修士は、いわゆる学際的研究において、いくつかの専門領域にまたがる研究をおこなっている者に授与される学位である。近代学術の進歩発展により、このような学際研究は旧来の研究分野を超える新しい学問体系として、近時その価値が認められ始めた。

同志社女子大学大学院 同志社女子大学大学院は一九六七（昭和四二）年に設置され、文学研究科に英文学専攻の修士課程が置かれた。ついで一九六八（昭和四三）年に家政学研究科食物学専攻の修士課程が増設された。同志

社女子大学大学院博士課程は一九七五（昭和五〇）年に設置され、英文学専攻の博士課程が置かれて現在に至っている。同志社女子大学大学院学則、第一章総則、第一条に、「同志社女子大学大学院は、立学の精神に基づき学部教育の基礎の上に、学術の理論および応用を教授研究し、精深な学識と研究能力を養い、文化の進展に寄与する女

性の育成を目的とする」とある。ここにいう立学の本質とは創立者新島襄のキリスト教主義・自由主義・国際主義の教育を目標とするもので、男女平等の自由主義に立脚する深くかつ広い学識と応用能力を持つ女性の育成を目的としている。修士課程の入学定員は、文学研究科英文学専攻は八名、家政学研究科食物学専攻は八名である。博士課程後期英文学専攻の入学定員は四名である。運営組織としては、学長の管理の下に大学院委員会と各研究科委員会があり、文学研究科の文学修士・家政学研究科の家政学修士、及び博士課程文学研究科の文学博士の学位審査は、これらの機関の責任のもとに実施されることになっている。同志社女子大学大学院は、いわゆる新制の大学院として発足し、一九七五年以降は、一九七五年の改正条項適用による新しい制度の大学院として運営されている。博士課程の設置目的は大学院設置基準第四条第一項に準拠し、修士課程の設置目的は同じく第三条第一項に準拠し、同志社大学大学院と異なるところはない。また博士学位の基準は一九七四年文部省令第二九号による学位規則第三条に準拠し、修士学位の基準は同じく第四条に準拠し、これも同志社大学大学院と異なるところはない。

第六章 紛争下の同志社大学

大学紛争の背景と一般的状況

一九六九（昭和四四）年は、同志社大学にとっては紛争の年であったと言ってもおそらく過言ではないだろう。『同志社大学広報——一九六九年度記録——』（同志社大学広報委員会 一九七〇年五月）によると、同年九月下旬から一二月初旬まで、教室での正課の授業はほとんど行われていない。学生たちが学舎や校門を、机・椅子・立看板などで封鎖してしまったために、授業は実施不可能だったのである。

それだけでなく、大学長星名^{はしな}秦の病気による辞任（一九六八年三月三二日付）以後、大学長候補者選挙が実施できず、学長代行もしくは学長代行代理が、大学の管理運営に関する責任を負うといった事態が続いた。その学長代行もしくは代行代理をはじめ、理事会、大学評議会、各学部教授会あるいは学科・専攻会議は、一九六九年五月から六月末にかけて、それぞれ学生組織の代表と会談し、また、学生集団とのいわゆる大衆団交を繰り返し続けた。その渦中で過労のために倒れる学長代行、学部長もでるなど、状況は日増しに深刻の度を加えた。

その前年、一九六八年六月二四日付で発行された『同志社大学広報』（臨時号）に、後述する学園闘争（学園闘争連絡会）を名乗る学生集団による大学長候補者選挙妨害および有終館の封鎖など、一連の学生運動の動向についての解説文が掲載されている。その解説文の結びに近い部分に、

以上で最近の学内で惹起し、また起こるであろう諸問題に関して解説を試みたわけですが、かかる問題は単に同志社大学のみに起因するものでなく、日本国内の他大学との関連において、あるいは日本の政治情勢さらには国際情勢を背景としていることはいうまでもありません。

と書かれている。

同志社大学内にも問題がまったくないわけではもちろんなかったが、一般的状況は、まさにその通りであった。そして、活動家学生たちのアジ・ピラや学生大会の議案書は、ほぼ例外なく国際情勢から書き起こされていた。

エスカレートし泥沼化するヴェトナム戦争、沖縄軍事基地問題、日米安保条約改定問題、中近東問題、チェコにおけるソ連の軍事力行使などのほか、中国では紅衛兵による全国的な文化大革命運動が激烈に展開されていた。さらに、フランス、西ドイツ、アメリカ、ラテン・アメリカ、北欧諸国、韓国などの諸大学では過激な学生運動が頻発し、国によってはそのために軍隊が出動した。これらはいずれも極めて刺激的なニュースであり、少なくとも大学および教育問題は、世界的に大きな転換期にさしかかっているという強い印象を与えるものであった。マス・コミ関係の論調も、その点に関しては大同小異であった。

一方国内においては、日韓条約批准（一九六五年）、アメリカ原子力潜水艦寄港（一九六六年）、佐藤栄作首相の東南アジア、アメリカなど訪問（一九六七年）、砂川基地拡張（同年）、アメリカ原子力航空母艦寄港（一九六八年）、成田空港問題（同年前後から激化）、その他政治問題などに関連した運動がほとんど日常化し、一九六六年以降年々エスカレー

トして行った。スチューデント・パワーとか、ヤング・パワーということばがマス・コミに登場しはじめるのも、ほぼそのころからである。

一九六〇年の日米安保条約改定反対運動の二、三年前あたりから、全学連の組織が分裂しはじめ、安保反対運動が終焉をむかえるとともに、学生運動の組織はあたかも細胞分裂のような状況を呈するに至った。そうした分裂によって生じたセクト間の対抗意識、運動の主導権争い、デモンストレーションなどが、学生運動をいつそう過激にした。そして、街頭運動の形態やセクト間の対立抗争は、ほぼ同時に大学のキャンパスへ波及したのである。学生運動家は、街頭で警察機動隊と衝突する事態を想定した服装や行動形態で、学内の学費改訂、学寮、学生会館問題などに取り組み、自治会選挙や学内運動の主導権をめぐって争い、いわゆる「ウチゲバ」(内部ゲバルト)と称する学生間の不幸な暴力事件をひきおこすことさえあるようになる。

こうした学生運動は、慶応義塾大学の学費改訂(一九六五年、早稲田大学の学費改訂および学生会館問題(一九六六年)、中央大学学生会館問題(同年)、明治大学学費改訂問題(一九六七年)など、大手私立大学の学費および学生会館問題などを端緒として、急激にエスカレートしていったとみてよいであろうし、そしてその時期は、街頭での政治的な問題への反対運動が大々的に展開された時期でもあった。地方の大学の学生運動家は、多くの場合東京へ結集し、各セクトごとに拠点校をつくろうとするに至って、事態はいっそう悪化し深刻化した。

そうした状況下におけるいわゆる大学紛争のピークは、一九六七年あたりから六八年あたりまでの東京大学および日本大学の紛争であつたろう。ここでは、自治会、学友会など既成の組織や学生のセクトを越えて、共闘しうる者たちが共闘しようという、いわば組織のない運動体とでもいふべき活動形体を形成し、運動を展開したことに大きな特徴があるだろう。いわゆる全共闘運動を盛り上げることによって、大学の既成の秩序や権威を支えている人

および組織と対決したのである。この運動は、一部の教職員からも支持され、同調者をえた。そして、現在の大学の在り方と、その大学で研究し学ぶことの意味を、仮借なく問うたのであった。国立の東大と私立の日大の紛争は、いわばシンボリックな意味をもつもので、相前後して日本各地の国公立大学に燎原の火のように燃えひろがった大学紛争は、さまざまな点で大なり小なり類似性をもっていた。そしてたんに、大学人に対してのみでなく、政治家や多くの社会人にも、わが国の大学すなわち高等教育機関の存在の意味と、その現状および未来像について、深い関心を抱かしめたのである。テレビや新聞・雑誌は、大学問題に多くの時間やスペースを割き、大学と大学生を論じた図書が相ついで出版され、いわば大学論ブームともいうべき状況を現出した。こうした紛争と、それにもなう諸現象は、敗戦後の一時期以上のもので、わが国においては空前のことであり、高等教育機関にとってはまさに画期的な事件であった。大学紛争は高等学校へも波及した。いったい何がそれをもたらしたのか、大なり小なり各大学に共通すると思われる二、三の要因あるいは背景をみておきたい。

大学紛争の背景

ひとつは、大学(短期大学も含めて)と大学人口の急激な増加、いわゆる大学大衆化と高学歴社会の問題であろう。若干数字をあげておきたい。一九五〇(昭和二五)年度までに学生数一万人以上の大学は九校にすぎなかった。ところが、一九七二(昭和四七)年度には国立大学に六校、私立大学に三〇校(内二万人以上の大学二校)を数えるにいたっている。そして一九六五(昭和四〇)年前後から、いわゆる戦後ベビー・ブームの子供たちが大学進学年齢に達したのである。入学志願者は、一九六二年には四九万人、翌一九六三年には六五万人、一九六四年以降七〇万人を超えた。その需要に応じて、大学ことに私立大学(短期大学を含む)が続々と新設され、学部・学科が増設されることになる。その数は一九六四年度に五六校、一九六五年度に一〇〇校、一九六六年度に一五二校、一九六七年度に一二三校といった具合で、大学紛争のピークを迎えた一九六八(昭和四三)年から下

降しはじめ、その年度は七三校に落ち込んでいる。この時期に、学生数がいかに急速にふくれあがったかが想像できる。同一年齢の三割以上、四割近くが大学生になったのである。なお、入学志願者は一九六七年になって六七万人に減少し、以後七〇万人を超えることはなくなっている（数字は、読売新聞大阪本社社会部編『大衆大学―二〇〇万人の大学生―』による）。

要するに、進学熱はあおられ、また、大学あるいは短期大学の門戸は広く開放はされたが、それだけに、大学卒業生は社会のエリートでもなんでもなくなったのである。さいわい高度経済成長時代だったからなんらかの就職口は得られたが、学閥は依然として残存しており、大多数の大学卒業生たちは、彼らの将来にあまり期待をもつことはできなかった。中学・高校卒業生にまじって実力本位の社会を生きていかざるを得なかったし、大学卒業生の質的低下が問題にされる実情にあった。

次に指摘しておかねばなるまいと思われる問題は、高校生とその家庭、激化する進学競争、大学の入学試験制度の問題である。入学試験の関門を前にして、家庭ぐるみでその難関突破のための学習と教育に熱中するのみで、なんのための大学進学か、大学に何を期待し将来いかに生きるかといった問題は、その段階ではほとんど問われなかった。要するに、志望する大学に入学すること自体が目的となり、将来のことは入学してから考えればよいという程度にしか問題にならなかったのである。それでも、第一志望の大学に入学し得た者はまだよかった。やや極論になるが、多くの大学生は、やむを得ずその大学に籍を置くことになった。つまり、最初から挫折感をもっていたのである。人生の目的のスパンが短かくなっただけでなく、それさえも持ちえない大量の学生が存在することになった。何のための大学であり学問であるかは、多くの学生たちにとって加速度的にあいまいになると同時に、不安と不満を増幅させる結果をまねいた。そして、彼らに対して、大学も家庭も、プライドや目的や理想を抱かしめる

ことは至難であつた。本人にそれを求める積極的な意志がなく、大学もまた、それに対応した有効な教育方法を見出すには至っていなかった。政府は「期待される人間像」などを提示したが、それがリアリティをもつような社会的・精神的基盤は脆弱であつた。たかだか、高度経済成長を支える人間像としてしか関心をよばなかつた。

いまひとつの問題は、右の問題とも関連するけれども、国内外の社会も学生も年々変化しつつあつたにもかかわらず、こと大学の在り方に関しては、政府も各大学も、それに対応しうる在り方を検討し、改革を実践することについては、かならずしも積極的でなかつたことである。なるほど中央教育審議会などでは、高等教育の在り方について種々議論され、文部省への答申もなされはした。しかし、その答申に対する大学教員および学生たちからの批判はあつても、具体的現実的な代案は出されなかつたし、ましてや大学が自主的に制度や体質を大幅に改善するといったことは、ほとんどみられなかつた。大学としての最低の基準を示した「大学設置基準」に抵触しなければよい、制度や機構などを改変することによつて学内の騒動をまねくようなことは避けたいというのが、多くの大学の管理行政の任にある人たちの本音であつた。ただ、私立大学の財政はおおむね貧困だったから、学費改訂にとまなうトラブルだけは避けがたく、その問題が最大の関心事であつたといつてよいだろう。そうして新制大学になつて以来は二〇年間、さしたる改革もおこなわず、大学内でリーダシップをとつてきたのは旧制大学出身者であり、旧制大学の残像が色濃くただよつていた。皮肉にも、大学が「象牙の塔」と呼ばれた時代は、すでに終つていたのである。

平和で自由な戦後社会に生まれ育つて大学進学年齢に達した若者の多くは、他から管理され強制されることを好まなかつた。そして一人前の人間、一個の人格として扱われることを望み、自己の意見や欲求を表明し、それを実現しようとすることに、比較的卒直であり性急であつた。これは主として、戦後の学校と家庭の教育が、ひいては

社会がもたらしたもののだが、彼らのこうした性向も、問題のひとつとしてあげておかねばならないだろう。しかし、そういう若者たちに対して、現実の情報化社会はある意味では酷であった。彼らはある特定の専門分野の知識体系を習得しようとする場合にも、なんらかの技術者として自立を望む場合にも、自他ともに専門家として認めるレベルに達することは至難であることを認識せざるを得なかった。つまり、つよい自己主張の反面、いつまでも未完成状態から脱しきれず、社会のなかで望ましい位置を占める時期は、容易に到来するとは思われなかった。そして、そういう彼らを待ちうけているのは、高度にメカニイズされたいわゆる管理社会であり、それに組み込まれざるを得ぬであろうことに、彼らの多くは、程度の差はあれ不安と反感とそしてジレンマを覚えていた。

要するに彼らは、慢性的な欲求不満の状態におかれており、みずからの未来の人生と社会に対する期待や幻想もまた、あまり持ちえなかったと言つてよいだろう。

一九六八年までの状況

此春寮および学寮問題 同志社大学の紛争がピークを迎える一九六九年までには、学外における学生運動の状況や、他大学が、連続して起こっていた。そのひとつが、学寮問題、なかんずく此春寮の一般寮化の問題であった。

此春寮、壮図寮、ベタニヤ寮の三寮は、同志社大学の神学教育施設の一環をなすものであった。その中の此春寮は、一九六二（昭和三七）年四月に相国寺東側の現在の場所に建てられたもので、収容定員五六名である。それまでの此春寮は、現在のアーモスト館本館の東側にあった（一九四〇年一月竣工）が、ゲスト・ハウスが建つので、北小松



学舎へ移築された。現在の対湖寮がそれである(ちなみに、同学舎のもう一棟の宿舍である対山寮は、旧松蔭寮を移築したもので、元は下村孝太郎邸であった)。

此春寮が新寮になって間もないころから、問題が起こりはじめた。問題というのは、神学部学生数が少なかったため、同学部の学生のみを收容するだけでは、かなり空室を生じること。第二は、他の学寮にくらべて寮費の納入状態がよくなかったこと。第三は、神学部学生の退寮者が増加したことなどである。工事に難があったためか、竣工早々から雨漏りするなどのため、寮生の間に不満があったこともあげておく必要があるだろう。

以下主として『学生部年報』(一九六五年度版)の記録によって、此春寮問題の経過をたどることにしたい。寮生は、一九六四年六月の寮会で、(一)神学部以外の学生の入寮も認める、(二)キリスト者か否かを選考基準としない、ほか一項目を決定し、いわゆる入寮者の自主募集を開始した。神学寮の伝統を大胆に変革しようとしたのである。

此 春 寮

これに対して神学部教授会は、(一)入寮許可は神学部長がおこなう、(二)クリスチャンを入寮有資格者とする、(三)他の選考基準は一般寮と同じにする、など五項目の方針を決め、此春寮生に通知した。神学部以外の学生でも、クリスチャンであれば入寮を認めるという線まで譲歩したのである。いわゆる一般寮の入寮者選考基準は、自宅からの距離、家庭の経済事情などを重視するものであった。

右のような意見あるいは方針の対立と、そのための話し合いの最中であつた一

九六四年七月に、寮生たちは彼らの方針で六名を入寮させ、さらに一〇月には他学部学生をも含む一〇名を、神学部長に無断で入寮させた。その間に、五名の神学部学生が退寮した。また、ストームにより怪我人が一名出たり、騒音で近辺の市民から苦情を学校へ持ち込まれるといったことがあった。

神学部長は、学部長が許可していない一〇月に入寮した一〇名の学生とその保証人に対して、入寮を差控えるよう通知し、神学部教授会代表三名が、寮生との話し合いを続けた。だが寮生は、教授会の態度は寮生の自治に対する干渉だと主張して、話し合いによる合意をえることができず、教授会については、寮生の自治の限界なども考慮して、此春寮の閉寮について検討をはじめた。一方寮生たちは、翌一九六五年一月の寮会で、此春寮の一般寮化を決定し、その旨を神学部教授会に通告してきた。一般寮になれば、入寮者を大学生全体に拡げることが可能になり、管理責任は神学部教授会から大学つまり学生部長へ移ることになる。

一九六五年一月二三日に開かれた神学部教授会については、一月二五日をもって閉寮することを決定し、閉寮当日、神学部学生全員に、次のような文書を配布した。

此春寮は一九三九年神学部における神学教育の一環として設置され、その後種々の過程を経ましたが、その間神学部の学生寮であることは自明の事柄でした。このような神学寮の基本理念を変革しようとする寮会の方針は、寮生にゆだねられた寮自治の権限をこえ、大学における教授会の教育の権利と責任を侵害するものであって、神学部教授会はこれを承認することは出来ません。

同志社の男子寮には、開校以来寮監のような監督者は置かず、寮生の生活はおおむね寮生の自治に委ねていた。神学寮の宗教行事なども同様であり、主として、学生生徒の自主的なプログラムや規制によって行うという伝統があった。だが、教授会の方針は寮生の自治に対する干渉だとして両者が対立するといったことは、かつてないこと

であった。寮生の自治が尊重されてきたのも、学校の教育方針によることであった。

同志社に限らず、寮生ひいては学生の自治は、大学、ことにその実質的な部分を形成する教授会の責任と権限、もしくは自治に内包されるものと信じられてきた。教育する者の自治や責任、権限が重視され、教育される者のそれが問題になることは、従来あまりなかったのである。たとえば、一九六五年一月に公表され話題になった東京大学の「大学の自治と学生の自治」いわゆる「東大パンフ」にも、次のように書かれている。

ただ、このような研究・教育に関連して、大学内において学生のもつ自由や自主性は、大学自体が学内にたいして主張する自治とは次元の異なるものである。学生は批判的精神を要求されるとしても、なお修学中のものである。したがって、その研究活動については、旺盛な自発性が求められるとはいっても、なお教員の指導と助言にしたがわなければならない。(中略)もちろん学生が授業なり施設なりについて、大学にたいし希望を表明することは自由であるし、大学はそれらに耳を傾け、できるかぎりそういう要望にこたえるよう努力すべきであるが、研究・教育についての、最終的な意思決定は、大学が教員の組織を通じてその責任においておこなうものであり、それが大学自治の本質なのである。

東大がこうした見解を表明しなければならなくなったのは、自治の名においてなされる学生団体ないしは組織の意思決定や行動が、しばしば教授会の自治あるいは責任や権限を超えたり、そごをきたすといった現実直面せざるを得なくなったからである。そしてこの自治の問題は、各大学の紛争の過程でしばしば論議の焦点になり、法学の専門家も、研究テーマとしてとりあげるようになる。いずれにせよ、起居寢食を共にして学ぶ学友を選ぶに当って、なぜ教授会もしくは大学の干渉を受けねばならぬかという寮生の抗議は、大学の自治と学生の自治の問題に発展する重要な課題を孕んでいた。寮生の自治権が問題の焦点になったのである。

此春寮の一般寮化

先の『学生部年報』の記録にかえろう。閉寮決定の直後から、神学部教授会は寮生の抗議を受けて、徹夜の交渉を続けざるを得ぬ事態になった。さらに、学友会と全寮協議会（全寮協）および此春寮OB会の三者は、寮生のバック・アップ体制をとるにいたった。一九六五年二月四日、右の三者は此春寮開放闘争委員会を結成したのである。教授会は、そうした体制を敷くに至った寮生と話合った結果、一般寮化の方向を承認し、寮生もまた寮運営の欠陥を認め、次の三原則を両者が確認しあうことによって、閉寮の決定を撤回することになった。

- 1、神学寮としての伝統を生かす。
- 2、キリスト教精神を基調とすること。
- 3、できるだけ神学生を含めること。

そして、神学部教授会は三月三日、此春寮生との話し合いの上で、「教授会は、学内の限られた寮施設の現状にかんがみ、此春寮を独自の形の一般寮として解放することに同意し、（中略）此春寮は、神学生と一般学生とが各自の学問と生き方を通して相互鍛練を行う共同生活の場として、責任のある自己形成に努めることを誓います」という共同声明を発表した。

だが、問題はそれで終わったのではなかった。此春寮の管理運営は、教員と寮生双方の代表による運営委員会が行うべきだという教授会の方針を、寮生は拒否し、四月二二日に三度目の入寮生自主募集を開始したのである。神学部教授会はこれを黙認するわけにいかず、学部長名で募集中止を勧告するとともに、全学生に対して此春寮問題に対する学部の見解を公示した。寮生は、教授会には誠意がなく、自治を弾圧するものだととして、五月一五日から三名の寮生が神学館前でハンストにはいった。そして、同月一八、一九両日にわたるエキサイトした話し合いの結

果、教授会は、昨年一〇月に入寮せしめた一〇名は不法入寮生だから、ルールに従って選挙を受けねばならないことを相互に確認の上、(一)此春寮は一般寮として大学に返す、(二)運営委員会は設けぬよう努力するという二点を承認した。一九六五年六月三日の大学の部長会は、神学部への申し出を受け入れ、大学の全学生に開かれた寮として、学生部が他の一般寮と同じ基準で管理の衝に当たることになった。

概略以上のような経過をたどった此春寮問題は、翌一九六六年には、アーモスト館、ハワイ寮など二、三の寮を除き、大成、此春、暁夕(以上男子寮)、一粒、鴨東、松蔭(以上女子寮)の六寮で組織した全寮協の問題に発展した。全寮協は、入退寮の権限は寮自治に属するとか、学寮は教育施設であるからその光熱水費は大学が負担すべきだといった要求を大学に突きつけ、入寮生募集や選考、寮費納入、入寮者名簿の提出拒否などをめぐるトラブルが断続的にくり返された。ただ、寮問題に対する学生全体の関心は比較的うすく、また、寮生の数も少ないせいもあって、寮問題が全大学規模の紛争に発展することは、それ以後もなかった。ただ、その後の学生運動あるいは紛争の重要な契機のひとつになったことは確かであり、先にふれたように、学生の自治権という紛争中の論争点のひとつを先取りし、実質的な先例をつくったと言わねばならない側面をもっていた。

大学会館問題

同志社大学会館(学生会館)は、創立九〇周年記念事業の一環として、現在の地に建設されたものである。この土地は、一八八七(明治二〇)年前後から同志社が買収し、普通学校の寮などがあつた。大学会館建設計画当時は、旧北寮の建築物と、一九四二(昭和一七)年六月に竣工したプールがあつた。会館建設にともない、プールは新町通今出川下るの現在地へ新設し、一九六五年四月に竣工した。

会館は、二つのビルディングを結合した形になっている。西側のビルは、学生の課外活動諸団体と、旧学生会館(現在の至誠館の位置にあつた木造二階建。一九二七年竣工、火災で焼失し一九三二年に再建)内にあつた学友会本部などを移し

た部室棟で、一九六三年四月に竣工し、「別館」と称した。いまひとつの、烏丸通に面した「本館」ビルは、厚生館診療所（大沢徳太郎の寄附で一九四一年一〇月に完成した今出川校地の旧厚生館の諸施設を移し、設備の充実をはかった、生活協同組合に貸与している食堂、売店などの諸施設、ラウンジ・読書室・大ホール・会議室など共用部分から成っている。

別館の設計から竣工の時点までは、宿泊や、施設使用の最終時間を何時にするかといった問題を除いて、大学と学生の間にさほど大きな意見の食い違いはなかった。もともと、今出川校地内に分散していた部室の統合と、部室の不足を補うことが目的だったから、その管理運営は従来の慣行をほぼそのまま踏襲すればよかったのである。したがって、管理運営の執行はほぼ全面的に学生の別館委員会に委ね、学生部が大学の窓口になるということである。一九六三年五月一日に、大学長上野直藏、第一部学友会中央委員長、第二部学友会中央執行委員長の三者が、「別館に関する覚え書」に調印し、さっそく使用することになった。

しかし、翌一九六四年七月に着工した本館には、先にみたようにさまざまな施設が含まれており、利用者も学生だけでなく、教職員や卒業生、地域の市民も対象として考えるという前提で、その管理運営のあり方が検討されたので、別館のような具合にはいかなかった。

記念会館委員会と

記念会館協議会

大学は、各学部の学生主任と学生部課長からなる記念会館建設委員会を設けて、別館建築と大学との意見調整が主たる任務であった。

ちなみに大学会館は、名称未確定のまま計画が進められたが、創立記念事業にふさわしいとの理由で「新島記念会館」と仮称していた。しかし「新島会館」とまぎらわしいという意見が理事会内部にもあり、「創立九〇周年を記



大 学 会 館

念する同志社大学記念会館」と称することになった。右の記念会館建設委員会の名は、その名称にもとづくものである。ところが一九六五年になって、学生代表は「名は体を現わすから学生会館とすべきだ」と主張するようになり、「本館は学生だけの施設ではない」と強調する大学側委員と最後まで対立した。大学側委員のなかにも、「記念会館」と略称した場合なんの記念かわからないという意見があり、いつからか大学側委員のあいだでは「大学会館」と呼ぶようになった。だが学生代表は譲歩せず、「同志社大学会館」と刻んだ石盤を業者が取付けたことに對して（一九六五年七月）、既成事実をつくるものだと反発し、話し合いを円滑に進めるため大学はそれを取り除くといった一幕もあった。ただ、後述する学友会との会見の席上、「名称は同志社大学会館とする」旨、上野直蔵大学長は冒頭で言明したが反論はなかった。また、本館の開館直後、学生・教職員に配布する文書に、「同志社大学会館・創立九〇周年を記念して建てた学生会館」という長い名称を使用した、それにも異議をとねえる者はなかった。

ところで、本館建築のプランに着手した一九六三年秋、大学は記念会館建設委員会を大幅に改組して、学部教授会代表各一名（原則として本館完成まで交替しない）、本部財務部長、大学総務部長、経理課長、調度課長、学生部部長、会館事務主任の一四名をもって構成する同志社大学記念会館委員会を設け、学長は同委員会に、学生その他利用者代表との話し合いのとりまとめに関して、相当大幅な権限を委ねた。

同年の秋、会館利用者代表である学部第一部・第二部学生代表、大学

院生代表、大学教職員組合代表、生活協同組合代表と、右の大学記念会館委員会（会館設置者である学校側代表の資格）をもって、同志社大学記念会館協議会を設けた。同協議会で、建設プラン、管理運営要綱案などを協議し、合意に達した事項を記念会館委員会が学長に答申し、関係機関によって実施するという手続きをとった。記念会館委員会および同協議会の議長は、学生部長斎藤玄三雄であった。委員会も協議会も、本館オープンの前、一九六五年一月中旬まで存続した。委員会は三三回、協議会は二二回の会合を重ねた。

会館問題が紛糾するのは、一九六五年四月以降、つまり、本館の完成が目前に迫ってからである。それまでは技術的な問題などが多く、記念会館委員会は各利用者代表の意見をきき、調整すべき問題は調整して学長に答申し、着々と実現されていった。ところが、いよいよ管理運営の具体的な事項について協議する段階になってから、協議会の議事が進捗しなくなったのである（『学生部年報』一九六五年度版による。特に断わらないかぎり以下同様）。学生代表は、協議会を学館問題に関する最高決議機関とするよう要求した。それが認められないかぎり、協議会でえた結論を大学がどのようにでも改変しうるから、話合っても無駄であるというのである。大学内の重要事項に関する決定権は、大学評議会にあった。それを無視するような機関の設置や決定は認められるはずがない。大学院生代表と教職員組合代表は、利用者が思想信条には関係なく平等に使用しうる権利の保障をもとめたが、その点に関しては記念会館委員会メンバーも異議はなかった。

学友会の戦術転換

一九六五年五月に自治会選挙を終え、六月二三日に会館問題で学生大会をおこなった学生代表は、彼らの「学生会館規約（学友会第三次草案）」を協議会へ提示した。それは、以前から別館委員会などが立案していたものに若干手を加えたものであり、会館事務室の人事および会館に関する予算は学館委員会の権限に属すると明記してあった。人事権や財政の決定権までも学館委員会にもたせるような案を、大学の

代表である会館委員会は承認しうるはずがなかった。学部学生による「学館の管理運営権を利用者の手に」という学生大会で採択したスローガンや学内でのアピールは、会館の管理運営を、大学の干渉を排した治外法権的なものたらしめようとするもので、寮の自治と同じ発想であった。これには大学院生も教職員組合も同調しえず、学部学生代表はますます孤立し、そして独走することになった。「学生の自治を大学自治の中はどう位置づけるか、それを明確にし確認しあえば、会館の理念や管理運営のあり方は自ら明らかにするはずだ」と、学生代表は協議会で繰り返し、管理運営の具体的な問題を協議することを拒絶するに至った。

会館協議会では意志を貫徹できないと判断した学生代表は、一〇月二日に再び学生大会を開いて、学長団交を要求し、もし要求に応じないなら全学ストを執行し有終館を封鎖するという方針を決議した。これに対して、学長上野直蔵は、会館問題については会館委員会に一任してあるから、協議会で十分話合って欲しい旨を文書でこたえ（二〇月二七日付）、同日、総長住谷悦治も「告示」をもって、自重と話を訴えた。しかし、学生たちは翌二八日に全学ストを行い、有終館および各学舎を机、椅子などで封鎖した。ストは二八日だけで解いたが、協議会に出席した学生代表は、「議長（斎藤学生部長）は、議事進行について犯罪的行為を犯している」と糾弾し、多数の意思だといって学生を議長にたてようとするなどトラブルが続いた後、一月上旬ついに協議会をボイコットした。

四項目の「確認書」に調印 利用者代表の中心メンバーである学部学生代表が出席しない協議会での話合いの有効性の問題も

なっており、学生のどのクラブも、従来のように市内の貸ホールなどは予約していなかった、記念会館委員会は「会館の管理運営に関する基本方針」をまとめ、一月一五日に学長に答申した。これを受けて上野学長は、同月一八、一九両日にわたって、部長会メンバー列席のもと、学生代表と寧静館会議室で会見し、次のいわゆる「四項目の確認書」

に学長、第一部および第二部学友会中央委員長の三者が調印した。

一、人事管理権・予算管理権・財産管理権は学長に所属することを前提として、委員会が会館の管理運営をおこなう。

二、会館使用料は、学内諸団体の無料の催物に限り原則として徴収しない。

三、会館委員長は、会館委員会で選り学長が任命する。但し、委員長は教員委員のうちから選りぶものとする。

四、委員会の構成

(省略)

こうして、一月二四日に本館は暫定開館し、学生団体のみが開館式のセレモニーを行なった。開館はしたが、さしあたってEVE行事週間でどう使うかを定める必要があり、学長と、第一部・第二部学友会中央委員長の三者が直接話合つて、「一月一九日の確認書の基本原則にもとづき、EVE週間の具体的使用については、暫定的に会館委員会の答申案によるものとする」他二項目について合意に達し、翌二五日からのEVE行事は、ほぼ支障なく実施された。

会館の管理運営に関しては、右の「確認書」と「EVE行事週間の使用に関する諒解事項」以外に、フォーマルな協定も詳細な規約もない。調印当初、教職員にはその点に不安があった。さらに、会館協議会のメンバーであった大学院生代表、教職員組合代表、生活協同組合代表は、調印に加わらなかったし会見の通知もなかったこと、会館協議会は解散したのか否か不明であったこと、会館委員会の答申内容と「確認書」の内容にかなりくい合いがあったことなどのため、若干問題を残したのは事実であったが、半年余にわたる大学会館をめぐる紛糾は、ここに

いちおう終息したのである。翌年、「確認書」調印当日の約束に従って、「会館運営の具体的な事項に関する規程」を作成するための草案作成委員会の発足をみたが、三回ばかりの話し合いで自然消滅のかたちになった『学生部年報』一九六六年度版。その後も、学生が自主管理を主張して若干トラブルもあったが、会館の自主管理は、彼らの管理能力を超え、また実質的にはあまりメリットがなく、散発的な運動や抗議行動に終わった。

紛争の年——一九六九年

学闘連の登場と

一九六八年三月末日をもって、学長星名泰（一九六六年一月就任）が病気のため辞任した。大
学長候補者選挙問題 学はその後任を、早急に選出しなければならなかった。

従来、学長候補者選挙規定として明文化されたものではなく、選挙のつど大学評議会などで検討し、大体前回の要領に従うというやり方で実施してきた。選挙の方法については、教員の投票数を一とし、職員と学生（二〇歳以上、在学一年以上）はそれぞれその二分の一の比率で投票数をカウントし、第一次投票で選ばれた上位三名について、教員のみが投票をおこない、過半数の得票をえる人がなかった場合には上位二名について決選投票をおこなう、被選挙人は本学の専任教授とするという慣行があり、選挙のつど、職員からは、教員と同等の選挙権を与えるべきだ、あるいは、二次選挙、決選投票にも参加を認めるべきだ、などの改善要求が出た。大学院生も民主的な選挙方法の実施について要望書を提出したことがあったが、学部学生が組織として選挙権を問題にしたことは、一九五〇年前後以来なかった。投票率も極めて低かった。

一九六八年の選挙も、教職員からなる昭和四三年度学長選挙規程作成委員会（同年四月二〇日発足）で数回検討され

はしたが、一九六八年五月二三日に、とりあえず前回の要領によって実施し、新学長のもとで規程を検討するといふことで合意をえ、大学評議会もそれを了承して準備に着手した。星名学長は辞任以前から病気で休養しており、文学部長児玉実用がその代理を三月末までつとめていた。長期間にわたる学長不在の状態を解決することが、最も喫緊の課題であった。公式非公的に教職員からのつよい要請があり、学内外の状況が、責任者を求める雰囲気をつくっていた。第一次選挙の投票日は、六月二四日と定められた。

ところが、その年の四月早々、今西正雄学長代行(四月一日就任)に対して学闘連(学園闘争連絡会議)から要求書が提出された。内容は、(1)学館の自主管理、(2)寮および生協の光熱水費大学負担、(3)サークル部室の増設、(4)学費値上げ反対などについて、学長代行との団体交渉を要求する、というものであった(『同志社大学広報』臨時号 六月二四日発行。以下もこれによる)。今西学長代行は文書をもってこれに回答し、五月一五日には、総務部長駒井四郎が学長代行に代わって学闘連と大衆会見して大学の意向を説明したが、学生は納得せずもの別れに終わった。学闘連とは、大学の諸矛盾の打破を目的に、同年三月末ころ結成された組織で、文化団体連盟、学術団、全寮協など、寮や会館問題の中心になった学生グループによって組織されていた。学友会中央委員会でも学部自治会でもないこの学生運動の組織は、東京大学や日本大学その他の諸大学における学生運動の主たる担い手になった全共闘的な性格をもったもので、学闘連の出現によって、同志社大学の紛争は新段階を迎えたといつてよい。

学闘連の始動に呼応するかのうちに、五月二三日には、学友会中央委員長、学術団団長、文化団体連盟委員長、部外団体連合委員長の連名で、「評議員諸氏に告ぐ」という、いわば大学に対する闘争宣言とでもいうべき文書を提出してきた。それには、「胎動する全国学園闘争はこれまでの『大学』のイメージをぶちこわし新しい大学のイメージの論理構築と、そこに於ける大学インテリゲンチヤーの任務、歴史社会の発展として問われてきている。今立た

されている『大学の危機』とは単なる経営的な危機を意味するのではなく、学問の危機として表われてきているということを我々は知っている。最早我々は当局者の頑固極まる学生無視を許すことは出来ない」と書かれており、個別問題として、(1)学生会館、寮の管理運営権を利用者の手に。(2)学費値上げ反対、大同志社構想粉碎、官僚的学長選挙阻止。(3)六月一五日までに学館、寮、生協の要求を認めよ。以上の三項目をあげ、評議会の回答あるいは態度如何では「実力行使で我々は闘う」といい、これが「最後の通達」であるとも書いていた。

これを受けた大学は、六月六日に今西に代わって学長代行に就任したばかりの斎藤玄三雄の名で「学内問題に対する意見」として、会館・寮・学費問題など六項目について文書で答えた(六月一五日付)。しかし、すでに闘争態勢を組んでいた学闘連を中心とする学生活動家グループは、その回答に不満の意志を表明し、六月一九日から有終館を封鎖した。

学長候補者 こうした状況下で学長候補者選挙を実施することになったので、投票日の六月二四日には全教職員

選挙の妨害 を動員して、早朝から投票所の警備に当たった。だが、午前八時半過ぎに西門から入ってきた数

十名のヘルメット姿の学生たちは、無言のまま学生の投票所に机・椅子などでピケを張り、投票の実施を不可能にした。学生の力に対しては力で応じるというわけにはいかず、教職員の動員態勢も意味をなさなかったのである。同日夕刻、有終館の封鎖は学生の手によって自主解除された。

その後、七月八日に選挙を再度実施しようとしたが、ふたたび妨害されて中止した。大学評議会その他で、選挙の早期実施について協議され、学生部を通じて学友会の説得がつづけられたがその効果はなく、逆に一〇月七日に学生大会を開き、同月八日(反戦・反安保)と二一日(国際反戦デー)の全学ストライキを決議し、実行した。そして、学友会中央委員長と学闘連議長の連名で、再度要求書を提出した(二〇月一日付)。内容は、(1)学長選挙問題、(2)学内

諸施設(学生関係)の増設問題、(3)田辺町移転問題、(4)大学管理運営への学生参加問題であり、以上について学長代行の見解を問いかけたものであった。斎藤学長代行はこれに対して、(一)学長選挙が実施できないことについて遺憾の意を表明するとともに、(二)会館問題については一九六五年十一月の「確認書」の精神にもとづいて、早急に管理運営規程の作成を希望する、(三)寮問題については話合いの継続中である(寮費不払い、入寮生自主募集などが行われていた)などを文書で回答した(二〇月一六日付)。しかし、状況は悪化の一途をたどった。同志社のみでなく全国の各大学が、それぞれ紛争の渦中にあり、問題にちがいはあれ、悩みは同じであった。学生大会や決起集会のメイン・テーマは反戦・反安保で、それによって包括される政治問題が、各大学のそれぞれのセクトもしくは共闘しうるセクト間での統一行動目標としてとりあげられた。そして一方、学内の諸問題を抱き合わせのサブ・テーマとして各大学内でとりあげ、内と外へむかう運動を、同時に併行しておし進めたところに、一九六七―六八年の学生運動の顕著な特徴があった。学生運動のリーダーたちは、運動の射程を一九七〇年の日米安保条約改定の阻止におき、それまで運動を継続し、セクトの勢力を盛り上げていくとしていた。したがって、学内問題といえども妥協や終結の意思はなかったし、また、終結してはならなかったのである。

同志社大学の学内問題のうち、もっとも執拗で根強かったのは学寮問題であった。学生部、学生主任懇談会などは解決の方途を見出すために苦慮しつづけたが、話合いによる打開の途はひらけなかった。むしろ、寮生の運動はいつそう過激になり、一二月二六日には大学予算委員会の場合へ乱入し、翌一九六九年一月八日には、寮費納入の督促に抗議して、経理課や出納課のある致遠館を封鎖した。そして、一月一日午後一時から大学評議会メンバーと全寮協学生が深夜まで激論をたたかわすことになり、結果は、

1、寄宿舎について的一般内規を白紙撤回する。

2、但し入舎金、舎費は私学の財政上の事情から収められたい。

という二項目の確約を、評議会が行うことで落着した。「寄宿舎についての一般内規」とは、学費未納者で延分納手続きをしなかった者は学年度末で除籍するという「一般内規」の条項を、入舎費や舎費にも適用する旨「一般内規」に付記したことを指す。それが付け加えられたのは一九六五年一月で、その年度末には除籍されるものもあった。寮生は、話合いの過程で一方的に「内規」を改正したのは寮生に対する弾圧だと強調し、その問題が一月一日の話合いの争点になった。評議会はその条項の削除と、光熱水費の大学負担について確約したのである。おそらく紛争の火の手を消そうとする配慮からであった。だが、寮の管理運営が、大学と寮生の相互理解のもとに円滑に行われる途は、それ以後も依然として開けなかったのである。大学あるいは教授会の自治を、学生活動家は学生自治を庄殺する権力として位置づけるようになり、自らを「全学闘」と名乗るに至っていた。

対話から

一九六九年四月早々、第一部および第二部学友会委員長から、遠藤汪吉学長代行(同年四月一日就任)バリケードへ宛に、大衆会見を要求する「公開質問状」が出され、学長代行は文書をもってそれにこたえた。

すると第一部学友会は四月二五日に学生大会を開き、沖繩デーに関連して翌二六日から一週間のバリケードストを決議し、二五日夕刻から封鎖をはじめた。おそらく予定のスケジュールであったろう。ところが、学生大会の会場(大学会館ホール、約一〇〇〇名収容)へ入れなかった学生たちと、大会の議事運営に不満となえる学生たち約八〇〇名が、大会決議無効、学生大会再開を叫んで、明徳館前から西門へ至る路上へ坐り込むというハプニングが起こった(『同志社大学広報』第九号)。その学生大衆のなかへ連れ込まれた第一部学友会中央委員長は、彼らと数時間押問答したが要求をいれず、異議をとなえる学生大衆は、学生の結集によって自主的に学生大会を開催しようと叫んで当日は解散した。しかし学舎の封鎖は、委員長と彼らの話合い中すでに始まっていた。

それまでも、学友会の主流派と反主流派の対立はしばしばあったが、一〇〇〇名近い学生大衆が集団として学生大会の運営やその決議に異議をとなえたのは初めてのことで、四月二八日には自主的に学生大会を開こうとする約二二〇〇名の学生が集結した。それまでは、会館ホールが満員になることさえもまれであった。それだけ、大学問題についての関心が、学生間に高まっていたとみることができだろう。学生大会の決定や議事の運営に異議をとなえる学生たちは、全学スト決行中の構内や御所、中学校グラウンドなどで連日集会をもち、デモンストレーションを行なったが、学生大会の成立要件「学友会会則」第二八条の定めにより、会員の四分の一の出席が必要」を充たすだけの人員には達しなかった。大会は開きえず、集会に参加する学生数も日を追って減少した。だがこの事件が、学友会主流派の危機感をあおったことは確かであった。彼らは、それまで学生運動に無関心だと思っていた学生大衆によって、危うく乗り越えられそうな局面を体験したのだ。五月一日に封鎖を解除してからも有終館だけは解かず、五月六日にふたたび遠藤学長代行に対して、学友会中央委員長が大衆会見を要求する「公開質問状」を掲げたのは、右の問題とおそらく無関係ではなかったろう。第二部学友会中央執行委員長も、大学評議会宛に「大衆会見要求書」を提出（五月九日付）した。神学部学生は終始独自の行動をとりつけ、神学館封鎖と無期限バリスト宣言を行なった。

大衆会見と

混乱状態の深化

『同志社大学広報』（第一〇号）によれば五月六日付の第一部学友会中央委員長の「公開質問状」の内容は、「このような大学の帝国主義的再編が日々深化していく中で、同志社大学にあっては学長代行の席が転々とし、あらゆる学内矛盾あるいはそれ自体を規定する社会的矛盾に対し、一切の行政方針が明示されず、極めて不安定な状態が続いています」と前置きして、(1)田辺町移転問題、(2)大学立法・大学秩序法問題、(3)七〇年安保問題について、遠藤学長代行の見解を大衆の前で明確にして欲しいというものであった。(2)の問題

は、文部省が当時準備しつつあった「大学運営に関する臨時措置法案」を指すもので、主としてこの法案に対する取り組みと学内の諸問題とを抱きあわせにしたかたちで、同志社大学の紛争は展開され、そのピークをむかえることになった。おそらくそれは、同志社大学のみではなかったらう。

第二部学友会の「大衆会見要求書」は第一部に比べて具体的であり、第二部および学内諸問題を総ざらえ的に列挙したもので(第一部学友会は前年度来、要求書提出のつど散発的に問題を提起してきた)、(1)田辺町移転、(2)学館の管理運営、(3)維持費・証明書手数料、(4)高額学費、(5)第二部の教学態勢、(6)第二部専任教職員、(7)各事務室・図書館の執務時間延長、(8)編入学制度、以上八項目について要求あるいは問題を提起したものである。

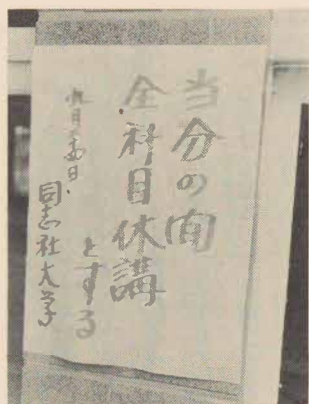
こうした「公開質問状」や「要求書」が出た直後、五月八日の部長会の席へ、第一部学友会系の学生約二〇名が乱入し、遠藤学長代行との「大衆団交」の約束をとりつけ、翌九日に明徳館前でその会見が行われた。当日ほぼ同じ時刻に、学生大会決定反対の学生約五〇〇名が啓真館の北側空地で集会をもち、キャンパスは緊張感に包まれた。

この五月九日の大衆会見をきっかけに、学長代行遠藤汪吉は、評議会メンバーと同席あるいは単独で、第一部および第二部の学生大衆と会見をつづけることになる。今回の会見を約束しなければ、学生たちは会見を打ち切らないという戦法をとった。学長代行の会見からやや遅れて、各学部教授会も、それぞれの学部自治会や学部・学科共闘会議(ゼミ闘委などというグループも現われた)学生たちと話合うことになり、毎日どこかで大衆会見が夜遅くまで行われているといった状況を現出した。したがって、授業はかなり混乱し、疲労で倒れる学部長も出る状態であった。とにも角にも話合いによって学内の秩序を回復したいという願望が大学側にはあった。しかし、学生集団はさまざまな不満や要求をぶっつけ、教授会の権限を超える問題もあったり、教員の間に意見のくい違いがあるなどで、学生たちの抗議行動は激しさを加え、大学および教授会の混乱状態は、会見のたびにつのる一方であった。

この年、すなわち一九六九年五月の自治会選挙は行われず、したがって新しい自治会、学友会はつくられなかった事実を看過するわけにいかない。公認された学生の代表機関はなくなったのである。ただ、文化団体連盟・学術団・体育会など学生のサークルは、自治会改選とは無関係に運営されるので、それらの組織を統括する学友団のみが、唯一の合法的な学生組織として存在した。しかし、その組織は、いわゆる学生運動の核になるような性格のものではなく、大学も各学部教授会も、共闘会議もしくは任意に形成された団体、つまり不特定多数の学生集団を相手に話し合いをつづけざるを得なかった。学舎のバリケード封鎖も、責任ある学生組織の方針によるものではなかったのである。そしてこの問題もまた、同志社のみに限られるものではなかった。

ともかく、「大学管理に関する臨時措置法案」に関しては、教員・学生ともに反対の意思一致ができて（事実、総長、理事長、学長代行および各学部教授会その他任意の団体も、それぞれ反対の意思表明だけでなく、国会請願運動なども行なったのである）、そのような法律から守らねばならぬ大学の自治、教授会の自治、研究・教育の自由の具体的な内実は何であるか、それらの現実をどうとらえるか、教育する者とされる者の関係は、管理者と被管理者の関係とどうちがうのか、といった問題提起と、個々の教員に対する激しい追究をうけ、評議会や教授会内部の足並みは乱れざるを得なかった。そうした問題、つまり研究・教育の根本にかかわる問題や、教授会のあり方などについての研究討論の積み重ねを教授会は欠いていたから、いわば虚を衝かれた格好で、遠藤学長代行も、教授会メンバーも、学生たちがあらかじめ用意した「確認書」や「自己批判書」に署名するという事態を招いた（『大学広報』、此春寮史編纂委員会編『プロテスト群像——此春寮三〇年史——』、同志社大学教育学会『バイデリア』第六号など参照）。

以上のような事態と並行して、六月三日に弘風館など四棟が封鎖されたのを皮切りに、六月二五日までには今出川校地の建物は中学校を除き、ほとんどすべて共闘会議系の学生たちによって封鎖され、大学の学生運動に呼応す



休講掲示

るように、新町校舎の臨光館の一部を、商業高等学校の共闘会議の生徒が封鎖し、商業高校は学外に教場をもとめねばならなかった。したがって、新町校舎以外での授業の実施は極めて困難になり、また現実問題として、授業や研究に専念しうるような状況ではなくなっていた。こうして、解決の目途もまったくたないまま、長く暑い夏期休暇をむかえ、教員も学生も大学から遠ざかった。事務は市内の貸ビルなどで行わざるを得なくなっていた。

全学休講措置 後期の授業開始直前の九月一日、大学の今出川校地の各建物は、午前と夜間の二回、京都府警と学内の状況 機動隊による第一回目の搜索をうけ、以後一二月三日までに七回の搜索が行われた。機動隊が立ち去ると同時に、どこからともなく現われた活動家学生たちは、ただちに建物を再封鎖し、九月一日には大学正門を、同月二日には新町校地の正門をも封鎖したので、授業の実施は不可能となり、大学評議会は二四日より「自分の間全科目休講とする」、学生には大学から連絡があるまで自宅で待機するよう指示する旨を決定した。

活動家学生たち（同志社大学学生たちだけか否かは不明）は、九月二一日および二二日の両日、烏丸今出川近辺の道路上にバリケードを築いて交通を妨害したり、路上および交番所に火炎瓶を投げ込むなど過激な運動に転じた（それ以前に東京神田界隈や京都市百万遍近くでは、同様のことがもつと大規模に行われ、やや極端に言えば市街戦の様相を呈した。大学を革命あるいは街頭闘争の基地としてとらえようとする傾向が現出したのである。そうしたことも手伝って、学生大衆も教員も大学から遠ざかり、中学校生徒たちは教員に見守られて西門の通用門を出入りした。一〇月二日に警察の三回目の立入搜索（右の火炎瓶やバリケード事件による）があつて以後、キャンパスの門は一層強固にバリケード封鎖され、街頭闘争に参加する意思のない学生たちは、構

内へ立入ろうとはせず、また、立入りは困難になった。バリケード内の学生たちは、大学問題については、「大学解体」と「大学自主管理」を唱えるようになっていった。

学長代行の選出

そうした状況に対して、学長代行（遠藤汪吉は九月一八日から病気で休養、十一月一日まで神学部長遠藤彰が学長代行代理）をはじめ部長会メンバーは、決して拱手傍観していたわけではなかった。部長会はほとんど連日ひらかれて、現状打開の方途が検討された。教授会も市内の貸会議室などで開かれた。そして九月二五日に臨時大学評議会が招集され、学長不在もしくは学長に事故があった際は六学部長のうち最年長の学部長が学長代理になるという従来の慣行を改め、六学部長で代行候補者を互選し、大学評議会で決定することを申し合わせた。六月ごろからの懸案の一つだったのである。病氣療養中であった遠藤汪吉学長代行が一〇月七日に代行を辞任したので、その後任選出を急がねばならなかった。ところが、六学部長が互選した候補者の所属学部教授会は、代行就任を承認しないといったことなどがあって（七月三日の大学評議会での申し合わせで、学長代行は学部長を兼ねないことになっていた。だから、学長代行を出した学部は後任の学部長を選ぶ必要があり、就任を承諾する前に学部教授会の諒解を得なければならなかったのである）、学長代行の決定に時間をついやさねばならなかった。六月段階での学生との話合いで過労のため学部長が倒れ、学部長代理をたてている学部さえあったのである。

ようやく法学部長山本浩三の学長事務取扱就任が決ったのは、十一月一二日であった（『同志社大学広報』臨時号(5) 一一月二三日発行）。だが、選出方法が変わったとはいえず、学長事務取扱の職務権限にはおのずから限界があっただけでなく、学長事務取扱の意思で打開しうるほど事態は簡単であらうはずはなかった。したがって、各学部の問題については、当該学部の事情に応じて学部単位で対処するというそれまでの方針が踏襲された。休講措置をいつ、ど

のようになかたちで解くかも、各学部状況判断によって行うことになっていた。

自主講座とバリケード外での学習活動

休講解除の見通しがたない状態が長期間におよぶにつれて、卒業年次の学生をどうする

ド外での学習活動

かといった問題が当然ながら部長会や教員、学生間でも話題になり、それに就職問題もか

らんで、キャンパスはほとんど無人に等しかったが、その外では、不安とあせりの声がさやかれるようになった。一年次生をふくむ下級年次生の父兄や学生自身からも、授業再開の見通しや学校の方針をただす問い合わせが、学外に臨時に設けられていた各学部事務室その他へあいついだ。だが、バリケードは不気味に校門を閉ざし、対話をかたくなに拒絶しているように見えた。事実、後期に入って直後にとられた休講措置以後、話し合いはほとんど途絶していた。大学院生の授業については、大学が手配した大学近辺の寺院や、指導教授の自宅などで継続されていたが、学部学生については、そういう手立ては講じられていなかった。また、学生数や授業科目数の関係で、講ずるすべもなかった。彼らは徐々に授業の再開を待ち望むようになった。前期には教授会メンバーに対して批判を投げつけた授業でありカリキュラムではあっても、彼らはやはり学生であった。社会のなかで教室や大学図書館こそ、彼らが坐るべき位置であり、身を置く場所であった。

そうした不安や欲求にこたえるかのように、バリケード内では活動家学生による自主講座が開かれるようになり、高橋和巳など学外の講師が招かれた。そうした自主講座は、東京大学その他で、その前年あたりから実施されており、そのような自主的な講座を正規のカリキュラムの一環として組み入れ、修得単位としてカウントすべきだと全共闘が要求する大学もあり、一定の枠を設けてそれを承認する旨を答えた大学もあった。同志社大学での自主講座は、紛争以前から学術団などが主催して、大学会館会議室でおこなったこともあったが、概して不人気だった。チャペル・アワー、アセンブリー・アワーのような課外講演会的な行事も、決して盛況とはいえなかった。バ

大学会館（本館）会議室利用件数

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
1968	333	564	568	300	61	304	601	506	381	112	199	183	4,112
1969	296	515	737	454	136	450	751	713	616	462	409	355	5,894
1970	258	537	618	408	88	335	636	513	430	150	196	240	4,409

（『同志社大学会館年報』1975年度による）

リケード内での自主講座に、どれほどの学生が参加したかは詳らかでない。

それとは別に、鶴見俊輔、矢内原伊作（いずれも一九七〇年三月に退職）、山田慶児、太田雅夫ほか約二〇名の教職員有志が、一〇月一三日に「同志社自由大学開講の呼びかけ」文を発表し、授業時間割を組んで、学生および教職員に参加を訴えた。右の「呼びかけ」には、「わたしたちはこの『同志社自由大学』を開講する。問う者と問われる者との対立と緊張をはらんだ共通の場を、さしあたっては学問領域において恢復せんがためである。（中略）国家の暴力装置をかりた『問題の解決』は、学問とその主体にむけられた根源的な問いかけの圧殺であるだけでなく、学問主体のそうした自由ないとなみの場の封殺でもあるだろう。わたしたちは、安易な『問題の解決』を求めて、国家権力に身を委ねてしまう愚学をおかしてはならない。わたしたちの当面の目的の一つはそこにある」（『同志社大学広報』第一四号）と書いている。あちこちの大学で、警察機動隊による封鎖解除と大学のロックアウトが見かけられるようになっていたから、彼らはそのような手段を同志社ではとらぬよう意思表示するとともに、学生の不安や知的欲求にこたえようとしたのである。「自由大学」の講師陣には京都大学の教員なども若干名ふくまれており、かなり多数の学生を動員した。教室は、開講当初は出入りが比較的自由であった新町校舎がつかわれたが、後に今出川校地の至誠館へ移した。しかしそこでは、大学を街頭闘争の拠点としてとらえ、大学解体を叫んでいた活動家学生との間でトラブルを生じ、一月初旬からは討論会などに切り替えることになり、参加する学生は減少した。

以上のような自主講座や、自由大学とは別に、学生が基礎演習やゼミナール単位で、自主

的に授業に準じた会合や討論会をもつ傾向が目立った。指導教授も参加するケースが多かった。会場は教員の自宅の場合もあったが、大学の施設では大学会館会議室が使われた。この会館だけは封鎖されなかったのである。彼らがそうした会合で会館を利用することがいかに多かったかは、前ページの利用件数表が雄弁に物語っている。会館は課外活動の場であるという原則に従って、会館事務室では授業の延長とみられる会合には貸さないという方針をとったが、申し込み者は会合名称を適当に変えて使った。あまりにも申し込みが多いので、一會合の使用時間を三時間以内に制限しなければならなかった。ちなみに、年間利用件数が四〇〇件を越えることは、本館をオープンして以後一〇年間にこの表の年度以外ほとんどなかったのである。また、例年なら一月から三月の利用件数が極度に減少するにもかかわらず、一九六九年度はあまり減っていない。

会館本館の利用は会議室のみではなかった。二階の一般ラウンジは連日超満員で、テーブルを囲んで熱っぽい討論会が行われたり、ひっそりとした話合いなどが閉館(午後九時)までつづけられていた。秋が深まるにしたがって、授業再開の通知を待ちきれなくなった学生たちは、徐々に学校へ帰ってくるようになった。そして、大学会館や近辺の喫茶店、下宿、教授の自宅などへ集まって、事態のなりゆきを案じていた。研究室が使用できない教員も、手狭な市内の貸ビルにいる事務職員も、封鎖解除、授業再開をつよく願望していた。

バリケード自主解除 事態が泥沼状態化し、休講措置解除の目途がたたない状況のなかで、大学教職員組合執行部の努力と授業再開 部は、大学当局宛に要望書を再三提出し、また、山本学長事務取扱、駒井総務部長などに

会見をもとめ、事態収拾について大学の方針をただした。理事会でも開催のつど、収拾について協議し、校友会もまた東京在住校友集会、全国支部長会などを開いて、総長・理事長ほか大学六学部長宛に「申入書」を出したりした(『同志社大学広報』第一七号)。これも大学の枠組を越えたものであるが、日本共産党同志社大学支部は、十一月一

七日付で「全学闘一派の封鎖に反対し、自由大学の幻想を粉碎し授業全面再開を勝ちとろう」（同前）といった文書を送り、教職員の自宅へ郵送した。休講措置の早期解除を希望する点では一致しても、その方法について意思一致を見出すことは、どの学部教授会とも至難な状況にあった。

一方、全学闘の運動つまりバリケード封鎖や全学ストに反対する全学連支持派（反学友会系——反全学闘系）の学生集団は、たとえば一月七日に新町校舎正門と尋真館のバリケードを解除しようとして、全学闘系学生たちと投石合戦になり、そのとばっちりで近所の民家の窓ガラスや、駐車してあった小型乗用車に被害をおよぼすといった事件が発生した（『同志社大学広報』第一六号）。それ以外にもこぜりあいは絶えなかった。さらに、烏丸今出川付近の道路上で、学生のデモによって怪我をしたり、自動車に損傷をうけて大学へ抗議や苦情を持ち込む市民もいた。今出川と新町の両校地を結ぶ道路脇の町内では、自警団を組織して大学紛争のとばっちりを警戒するという体制さえとらねばならない状態であった。

封鎖自主解除 一月八日になって、法学部長山本浩三は「去る六月三日の教授会との大衆会見の直後、諸君がへの呼びかけ 校舎の封鎖に入ってからすでに五カ月になる。その間諸君らの封鎖の意義は、大学立法に反対する意思表示としての封鎖から、実力による政治闘争の拠点としての大学の利用化へ移行した感がある。（中略）もちろん諸君らの封鎖には、大学又は法学部に対する不満の意味もあることと思う。卒直にいて、現在大学にも法学部にも改革を要すべき点が多々あると思う。私もその点について、学部長として深く反省している。改革案については、法学部でもすでに真剣に検討している」といった内容の「法学部の封鎖学生に訴える」（『同志社大学広報』臨時号 一月一日発行）という文書を送り、法学部の全学生に郵送した。これは久しく見られなかった教授会の意思表明であり、封鎖の自主解除についての訴えであった。現実的直接的な効果は期待しがたかったが、神学部以外の他の

学部でも、それ以後、当該学部の学生に教授会の意思を文書で伝達するという方法がとられるようになる。そしてまた、法学部以外の学部でも、大学および学部・学科の改革案が、それぞれ検討されていた。

一月二二日には、経済学部長西村豁通ひろみちが「学部長声明」を発表して『同志社大学広報』臨時号 一月二四日発行）、それまでの大学の「無策の策」とでもいうべき姿勢を反省するとともに、「だが一方、いまや封鎖という日常性断絶の手段が特定の意思の日常的強制の道具として形骸化し、しかも学生大衆の意向とは無縁に精神的惰性と道義的荒廃におち入りつつあることを黙視するわけにはいかない」と言い、ことばをついで、「いまこそ学園にたちもとり教師と学生との相互討論による学部と大学再建のための真摯な話し合いをはじめよう」ではないかと呼びかけた。この文書を、経済学部の全学生に郵送するとともに、大学へ帰ってくる学生達のために、経済学会による特別講座を一月二五日から新町校舎で開催する準備をすすめた。これは、自主講座や自由大学とちがって、学部の責任において設けた講座であり、授業に準じたカリキュラム編成であった。

臨時休講措置がとられてから二カ月を経過した。その間、教職員が個人の資格（学生主任も含まれてはいた）でバリケードの中へはいり、活動家学生と話合った例は何回あったが、学長代行、部長会、評議会、教授会その他公的な機関ないしは役職者が活動家学生集団なり、いわゆる一般学生の集団と話し合いをもったことはなかった。各学部共闘会議連名の「大衆会見要求」書が出たこともあったが、学長代行は会見を拒否した。さまざまな面で会見する状況ではなかった。

法・経済両学部について、一月二六日には文学部長遠藤汪吉、同月二七日には工学部特別委員会が、それぞれ当該学部学生に対して、学部を述べた文書を郵送した。なんらかの方法で封鎖を解き、授業を再開しなければならなかった。



封鎖解除（明徳館前）

機動隊の駐留と

ロックアウト

京都府警機動隊が構内に立入り、七回目の捜索を行なったのは二月三日の未明であった。構内は無人であり、従って抵抗はまったくなかった。捜索は今出川校地の各建物から始められ、新町校舎へもおよんだ。捜索が終了したのは正午をかなりまわった時刻であったから、それまでと違ってかなり念入りであり、相当量の火炎瓶、鉄パイプなどが押収された（『同志社大学広報』臨時号 一二月三日発行による。以下同様）。

同日午前一〇時に緊急部長会が招集され、山本学長事務取扱から「今日の府警強制捜索を契機に、封鎖解除を行なってはどうか」という提案がなされた。一時間後の一一時には大学評議会も招集され、山本学長事務取扱から「当分の間、学生および一般部外者の学内立入を禁じて封鎖を解除し学内を整備して授業を開始する」ことが提案された。種々意見がたたかわされたが結論をみるに至らず、各学部教授会にはかった上で、午後六時に評議会を再開して結論を出す、ということになり、各学部とも急きよ教授会を開くことになった。

京都府警機動隊は、捜索終了後も自主的判断で構内に駐留していた。

午後六時に再開された大学評議会では、学長事務取扱提案に賛成の結論をえたのは法学部だけという状態であった。他の学部は意思一致をえることができなかっただけでなく、いずれかといえはロックアウトや機動隊の駐留には批判的な声が強く、かなりエキサイトした議論がたたかわされたことが報告さ

れたのである。しかし、評議員全員が納得するような現実的で有効な提案も行われず、結局当日の評議会では、「生命の安全、建物の荒廃防止および危険物除去のため一週間ロックアウトをする中で封鎖を解除し、その間の機動隊駐留を要請する」という山本学長事務取扱の提案を承認するかたちになった。授業再開については各学部単位で決定し（二月中には再開する方針を、それ以前に部長会で確認していた、当該学部の学生に通知することになった）。

授業再開へ

右の大学評議会の方針によって、封鎖解除・授業再開への動きは始まったが、各学部の内情は複雑であった。

たとえば、工学部特別委員会は、「われわれは、封鎖自体には問題提起の手段としても意志表示の手段としても賛成出来ないが、封鎖という手段を非難することによって社会や大学へ提起された問題全体を無視してしまつてはならないと考える」（「工学部特別委員会報告」一二月二日付）と述べた文書の発送準備中であつた。そこで急きよ、「機動隊の駐留によるロックアウト」が決定された現在、問題解決に努力を傾注してきた「特別委員会は存続の基盤の大部分を失うに至つたのでここに解散する」という、いわば解散声明とでもいふべき文書を右の「報告」に添えて、一二月四日に学部学生に郵送した。特別委員会が充足したのは十一月十八日であり、右の「報告」には、同月二五日付で学生にもとめたアンケートの内容をはじめ、過去の討議を整理して、学生と教授会双方の意見を列記し、学部改革の討議資料となる事柄を盛り込んでいる。話合いによる解決の方途をつかもうとしていたのである。

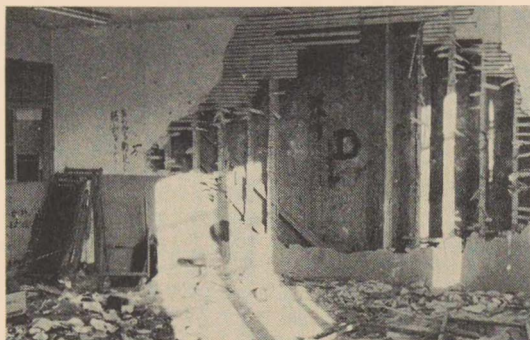
また、経済学部長西村豁通は、一二月六日付の「声明」文のなかで、「真正面からの大学のあり方を問うことのないままのこうした使乘的な紛争処理策は、従来もっぱら前向きに自主的解決策にとりくんできたわれわれとしてはきわめて遺憾であります」と述べている。商学部長内川菊義は、学生あての長文の所信表明の文書を、一二月七日付で郵送した。内川はそのなかで、紛争の経過を述べてから、バリケードの内部にたてこもっている学生たちは、

なぜ、「他のすべての人びとの意志を問ひ、それにしたがおうとしないのか」と言い、「あまりに強制的であり、一方的」な封鎖に対する強い反対の意思を表明してから、「それでは、この学生諸君の間おうとしている事柄を、われわれはなにによって問うたらよいのであろうか。わたくしは、それは改革案によって問うべきであると考えてる」と書いている。また、内川商学部長は同日付の父兄あての文書で、長くトラブルが続いていることを詫び、「きわめて近いうちに学生諸君に正常化の日取りを示すことになるものと存ぜられます」と、暗に授業再開の日が近いことを示唆している。

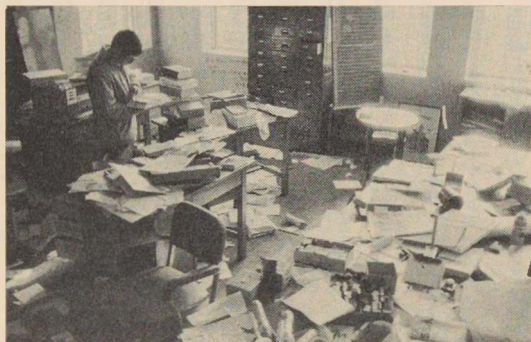
授業再開の日程を、全学に先がけて決定したのは、法学部であった。法学部長山本浩三は、一月一〇日から授業を行う旨を学生に通知し、その中で「大学改革について、長期にわたって検討して参り、近く諸君の前に成案を提示し、諸君の批判を受けたいと思っておりますが、とりあえず教場を早急に整備し、講義を再開したいと思ひます」（二月五日付）と書いている。文学部も一月一〇日から授業を再開する方針を決めたが、英文学科と文学科は、まず学生をまじえてそれぞれ集会をもち、かねて用意していた「改革案」について討議する予定であった。文学部長遠藤汪吉は、授業再開の通知のなかで、「同志社大学のキャンパスの荒廃が心の荒廃を助長することはなんとしても避けねばなりません。信頼関係の欠如した教育はあり得ないからであります」（二月五日付）と述べている。この通知を発送する三日前の一月二日に、遠藤は、「ロックアウト粉砕」を叫ぶ文共闘を名乗る学生団体と会見している。だが、たまたま同時刻に反全学闘系の学生の集会が学外で行われていたので、文共闘の学生たちは他の共闘系の学生たちと合流してその集会の妨害に行ったので、会見はさほど長時間にわたることはなかった。機動隊の駐留にもなつて、キャンパスの外では、ロックアウトと正常化に反対を唱える全学闘系の学生たちが、連日デモをくりかえし、隙を見ては構内に侵入して機動隊と小ぜりあいを続けていた。それらの集団の中には、セ

クト名を誇示する小集団もあり、すべてが同志社大学学生であったとはいいがたい。同志社ベ平連など、教職員の中にもロックアウトに抗議する団体があった。

封鎖が解除されたキャンパスは、見るも無惨に荒れ果てていた。研究室も事務室も学生が踏み込んだ形跡がない部屋はなく、壁面や机上是落書きだらけであった。教室の机・椅子は、バリケードなどに使って、かなり多量壊されていた。キャンパスへ帰ってきた教職員で、愕然とした思いを抱かなかった者は少ないだろう。だが、繰り返しというが、封鎖中にバリケード内にいた者は、同志社大学の学生だけであったかどうかはわからない。過激な学生



封鎖中に破壊された教室



封鎖解除直後の事務室

活動家やOBたちは、一大学のみにとどま
っていることは少なかったようであり、管
理がゆき届かなかったから、予備校生など
も入り込んでいた形跡があるのである。何
回目かの搜索のとき、学内で二名の逮捕者
があったが、そのうちの一人は東京の某私
立大学の学生（学費未納で除籍になっているこ
とがあとで判明した）であり、他の一名は無
職の少年であった。

ともあれ、さまざまな問題や意見のく
ちがいなどをかかえたまま、神学部を除い
て授業が再開されることになった。

一月九日のテレフォン・サービス(同月五日に設置、内容はほとんど毎日変更)には、「文学部および法学部は一月一〇日授業を再開します。経済学部は、一〇日をもって休講措置をとき授業を開始いたします。商学部は、一二日より休講措置をとき一二、一三日の両日にわたりクラスごとに改革案の討議を行ないます。工学部は、一日に授業について掲示します」(『同志社大学広報』第一九号)と録音されている。前後を多少省略したが、この受話器から聞こえてくるテープのことばかりも、学部によるちがいの一端がうかがえる。なおテレフォン・サービスは、第二部の授業はすべて新町校舎(今出川校舎は午後六時に閉鎖するため)でおこない、文学部の英文学科と文化学科は、クラスあるいは専攻単位で「改革案」について討論することを告げている。

一月一〇日には、約五〇〇〇名の学生が登校したが(正門・西門とも教職員が徹夜で警戒に当たり、入構者には身分証明書の提示をもとめた、神学館内の神学部学生(人数不明)と、「アウシュビッツ粉砕」「大学解体」を叫ぶ若干の学生活動家を除いて、大多数の学生たちは極めて平静であった。そして、黙々と授業に出て、そそくさと帰って行った。「改革案」についての討論会に参加する学生はほとんどいなかったのも、予定を変更して授業に切り替える教室もあった。五月、六月段階とはまるで別の大学になってしまったかのように、議論や抗議をする学生集団は見かけられず、教職員もまた、公的な会合などで大学改革問題を話合うことがなくなっていた。夏期休暇をふくめてほぼ半年ぶりの再会にしては、大学には活気が感じられなかったのである。熱気は冷めていた、というだけでは、おそらく十分な説明にはならないだろう。

紛争中に自殺した学生の遺稿集、たとえば高野悦子(立命館大学)の『二十歳の原点』がベストセラーになったのは、紛争が全国的に下火になりはじめた頃であり、いまなお読まれているようだ。それ以外の紛争中の自殺学生の手記もかなり読まれたようだが、それがなにを意味し、なにを物語るかは、今後検討に値する問題のひとつである。

う。たしかな事実は、その後まもなく、いわゆる「シラケ」の時代がはじまったことである。

些細なことのようにだが、紛争に關してもう一つつけ加えておきたい。それは、あの長期間におよんだ紛争の過程において、新島襄の良心碑だけは無傷であり、ステッカー一枚はった形跡がなかったという事実である。それが單なる偶然ではなかったであろうということは、あの廢墟同然の、いや廢墟以上にとげとげしく荒寥としていた封鎖解除直後のキャンパスにたたずんだ者にしか、理解しがたいかも知れない。同志社大学の学生運動家と紛争には、やはり、それなりの独自性が、多少なりともあったに相違ないのである。それが何であつたかも、もっと深く丹念に検討されてよい問題の一つであらう。

第七章 研究施設と研究活動

図書・文献・資料について

新島襄の蔵書

新島旧邸（上京区寺町通丸太町上ル）に襲蔵される新島襄旧蔵の図書は『新島旧邸文庫所蔵目録』（昭和三年）によると、その手沢本は和漢洋合せて七八七冊である。いま、その在世期に果してどれほどの蔵書があったか知る由もない。七八七冊のなかには山本覚馬（相応齋）旧蔵書、祖父曲江、父是水、夫人宗竹八重などの襲蔵したものが含まれているが、なんといっても主なもの新島の涉猟した神学関係を中心とした洋書籍であることはいうまでもない。いまこれらの図書を見ると次のような票紙（印刷）が貼られているものが散見される。

一 貸書期限ハ九十日間トス

一 読者ハ右ノ期限内ニ必ズ御返却ヲ要ス

一 復貸ヲ謝絶ス

京都寺町通丸太町上ル松蔭町

十三番戸

新島 襄

これは言うまでもなく新島がその所蔵する図書を生徒に公開して閲覧の便宜を計るものであり、同志社の初期の学習・研究がかれの所蔵する書物を通じて師弟一如の形をとって展開するものであったことを知らせてくれる。殊にまだ学校の備付の図書が十分整わない段階にあって、新島が購入し、持ち帰った書籍は英学校、そして英学校余科の課程を修める人々にとっては必須の参考文献であったと思われ、新島がこれらの書籍を教科用図書に準ずる文献として貸出規定を設け、講学の便宜に資した姿勢は、正に「真理」の前に「平民」の良心を養おうとする、かれの基本的な理念の流露であつたと言つてよいであらう。

学園の光・学園の生命

学園における教育と研究の併進に当って、そこにすぐれた人物、人材を要することは言うまでもない。それとともに、豊富ですぐれた図書、文献、資料の整備・充実が不可欠であることも言うまでもない。さて、同志社の研究施設とその研究活動の跡を辿ってみると、まず最初に注目されるのは、さきに述べた新島襄の講学に対する姿勢にある。しかもかれは同志社という私学の実態が「素より資金の高より云ひ、制度の完備したる所より云へば、私立は官立に比較し得可き者に非ざる可し」(同志社太学設立の旨意)と知悉し、しかも敢えて明治の社会の中に私立の大学を設立しようとした。しかしてそこにたてられる大学は官学ア

カデミズムの弊を襲って徒らに学問研究の崇高さを「象牙の塔」のなかで誇るものでなかったことは言うまでもない。かかる立学の精神的依拠に立脚するに際して、新島の後継者がその開かれた自由な講学の姿勢を継承しながら、図書、文献、資料の整備・充実にその力を併せたことは特筆されねばならない。それは連年にわたる『同志社報告』の末尾に記載されている内外有志ならびに校友・同窓の寄贈図書、文献、資料で知ることができる。かつまた、これを掲載するに当って、巨細となく克明にこれを掲げている学校要路の態度には、政府の奨励、助成やその補助によってその大をなすのと異なつて、有名無名、内外有志という、いわば「人民」の手によって形造られ、そこに大小さまざまな礎石を定置し、集積していこうという「私学」の意志を窺いうるように思われる。

かくて、翼をひろげた同志社の諸学校がその惨たんたる景況を迎え、ハリス理科学校を閉じ、政法学校を廃校にし、同志社病院・京都看病婦学校を閉鎖するのは一九〇〇年から一九〇六年にわたる時期である。こうした時代に研究施設の整備・充実策が厳しい位置に追い込まれることはいうまでもない。例えば一九〇四年度の下村孝太郎の報告には図書、文献、資料に関して「経費節減のため書籍の購入意の如くならず、寄贈書籍下記の通り」（『同志社明治三十七年度報告』）と見え、経営の困難が直接研究施設の充実を困難にしていることをそのまま示しているが、こうした困難な状況にあつて、翌一九〇五年度の普通学校校長丹羽清次郎の報告には図書について、次のようにある。

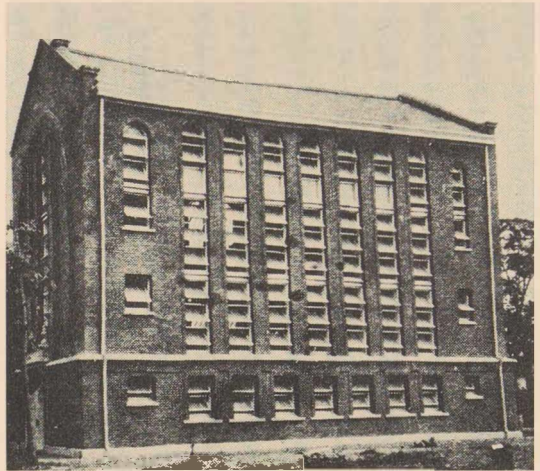
経費些少なるが為め内外諸雑誌を購入する外殆ど書籍を購入するの余裕なきは頗る遺憾とする所なり、然れども有志者よりの寄付に由り冊数漸次増加し来れり（中略）、夫れ図書は学校の光にして其完備するは依て以て学校の生命を發達せしむる所以なり、吾人は此大切な機関の将来倍々發達せんことを希望に堪へず。（『同志社明治三十八年度報告』）

事実この年度の報告によると、前年度の増加冊数は洋書一四四四冊、和漢書は四二四四冊であつたのが、当年度は

洋書二八四四冊、和漢書六六四五冊の増加を見、現今の図書総数は洋書七〇四四冊、和漢書一万七七五七冊、合計二万五一〇一冊であると報告し（前掲書）、苦難のなかで、同志社に図書を寄せる厚意を感謝し、学校の光、学校の生命は研究施設の充実・完備にあることを叫んでいる。内外有志の寄附にその多くを依存しながら、その大目標である教育の効果をあげ、研究・講学の充実のためにその潤沢な経費に依拠するのではなく、むしろ「書籍を購入するの余裕なきは頗る遺憾」という中で、その「光」を増し、その「生命」の永遠を希求する声は、いわば空谷の聲音にも似て、すこぶる貴重な提言としなくてはなるまい。同志社における研究施設とその研究活動をふり返ってみるとき、この声のしたたかな響きが呼び水となって、ここに図書を寄せ、内外の有志ならびに校友・同窓の力をそこに添える結果を招いたことを忘れてはなるまい。

図書館の歩み

さて、さかのぼって研究施設の辿った歩みを見ると、一八八五（明治一八）年一月一日、同志社一〇周年の祝会の日に当って礼拝堂（現チャペル）と書籍館（現有終館）の定礎式が行われ、書籍館は翌年一月上棟式、そして翌一八八七年一月一日、同志社病院、京都看病婦学校と同日に開業式が行われた。これが同志社における図書館のはじめである。翌一八八八年三月発行の『Doshisha 文学会雑誌』（第二号）によると、その架蔵図書は「英書二千八十七部、和書一千三百二拾五冊」と報じている。この書籍館は一九一二（明治四五）年二月、専門学校令による同志社大学の発足にともなって、その年四月から政治経済部および英文科が教室として使用するようになり、従来襲蔵してきた図書のうち、一般図書を理化学館の教室に、神学関係図書を神学館の教室に、政治経済関係の図書を三階に分置し、書籍館として中央図書館の役割を担って来た使命は終熄する。しかして一九一五（大正四）年九月、同志社図書館書庫（現啓明館北側建物）の竣工にともなって、三階の政治経済関係の図書もすべてそこに移される。



本館（現啓明館）建築前の図書館書庫

一九一八年六月、校友山本唯三郎の寄附による図書館の起工式が行われ、九月定礎式を挙行し、一九二〇年三月煉瓦造五階建の本館（現啓明館南側建物）が竣成し、五月開館式が行われる。この同志社図書館は、はじめて研究室、小集会室を備え、大学令による大学の研究施設の体制を整えるにいった。そして一九三一（昭和六）年六月同志社大学図書館と改称するが、女子部もこれを共用し、戦前・戦後を通じて同志社の中央図書館・研究施設としての役割を担った。一九七三年一月三日大学新図書館が開館し、架蔵の図書、文献、資料はすべて新図書館に移され、また女子大学も一九七七年九月女子大学図書館の献堂式を挙げ、それぞれ中央図書館の体制を整えるにいった。

架蔵図書

『同志社明治廿四年度報告』の「同志社各学校明治廿四年度経費決算表」によると、予備校、普通学校、神学

校、理化学校、政法学校、女学校、体操所、事務所とならんで図書館があり、総支出三万五七九七円四八銭二厘のうち、図書館経費は三三六円二一銭九厘であり、したがって〇・九パーセントを占めていることが知られる。また同『報告』所収の「同志社所有及管理物件表」によると、図書総点数は一万二五五二点、うち主なものは書籍館（図書館）が五一六八点、小室沢辺記念文庫が五九四四点であり、これが架蔵図書数に関する最初の公式記録である。小室沢辺記念文庫については、さらに後述するが、小室信介、沢辺正修の蔵書が同志社に寄せられるのは一八八七

（波里須理科学学校の図書数は何故か欠落している。『同志社明治廿六年度報告』）

公会堂	1
神学校	1
政法学校	419
図書館	7,474
小室沢辺記念文庫	6,135
植木文庫	806
新島文庫	238
事務所	14
女学校	446
女学校新島文庫	886
京都看病婦学校	70
病院	53
合計	16,543冊

（『同志社明治三十五年度報告』）

普通学校	112
公会堂	1
神学校	10
波里須理科学学校	542
政法学校	787
図書館	9,959
小室沢辺文庫	6,126
植木文庫	813
新島文庫	3,979
事務所	24
森田文庫	751
女学校	1,514
女学校新島文庫	2,144
京都看病婦学校	115
病院	64
合計	26,941冊

盛文庫、新島文庫が特設され、また一九〇二年度には森田久萬人文庫が新たに設けられる。いまこの一〇年間の始期と終期の架蔵図書数を見ると次の通りである。

（『同志社明治廿五年度報告』）

公会堂	1
波里須理科学学校	475
神学校	1
政法学校	308
図書館	6,490
小室沢辺記念文庫	6,135
事務所及付属地	14
女学校	430
女学校新島文庫	422
京都看病婦学校	60
病院	53
合計	14,389冊

（明治二〇）年一二月であり、記念文庫の開庫式を行うのは一八九一年一〇月のことであるから、同志社の架蔵図書は寄贈図書によってその大をなしてきたことが知られる。

いまその架蔵図書の管理形式の推移にもなった蔵書数の変遷をたどると、一八九二（明治二五）年度までは「同志社所有及管理物件表」という形でその架蔵図書数を知ることが出来る。

一八九三年度からは「同志社総財産一覧」という形式に改められ、それは一九〇二年度まで踏襲されるが、一八九三年度は植木校

この一〇年間に於ける約一万冊の増加は、各年度報告に付載されている詳細な寄贈図書欄でその趨勢をうかがうことができるが、校友・同窓ならびに内外有志の寄附に俟ったことが知られる。

一九〇三年から一九〇七年にかけての経過は『同志社報告』にそれに当る報告を欠き、原田助社長の就任に伴って一九〇八(明治四二)年度の「同志社社長兼校長報告」のなかに、はじめて「図書館」の項目が特設される。爾後一九二八(昭和三)年度まで、普通文庫(図書館)をはじめとする各文庫ごとの架蔵図書数を各年度毎に知ることができる。一九二九年以降は各文庫別の蔵書統計は知ることができず、ただ和漢書、洋書別の架蔵図書総数を知るのみである。

いま同志社の運営の上で中興の始期をなす一九〇八年度、そして一九一二年度から湯浅吉郎を委員長とし帳簿・書類の整理をはじめ、翌年には小西増太郎を主任にして図書分類を編纂し、これによってカード化作業を進め、新

一九〇八年度

普通文庫	14,374
神学校文庫	37
新島記念文庫	3,728
森田記念文庫	767
政法学校文庫	784
小室沢辺記念文庫	6,137
植木記念文庫	800
フリント記念文庫	260
合 計	26,887冊

一九一四年度

普通文庫	19,047
新島文庫	3,800
大学政経部	1,172
小室沢辺文庫	6,137
校友文庫	262
神学文庫	905
森田文庫	767
植木文庫	800
フリント文庫	260
合 計	33,150冊

一九一九年度

普通文庫	28,593
新島文庫	3,826
小室沢辺文庫	6,165
校友文庫	333
森田文庫	769
植木文庫	1,045
フリント文庫	260
愛山文庫	3,568
三宅文庫	1,370
合 計	45,929冊

『同志社明治四十一年度報告』

『同志社大正三年度報告』

『同志社大正八年度報告』

たに閲覧規定を定めて、従来とっていた開架式を閉架式に改める一九一四年度、ならびに大学令による大学を申請する一九一九年度の架蔵図書数は前ページの表の通りである。なお、従来の文庫の名称の多少の変遷を見ながらも踏襲されてきた報告様式が、全くあらたまる一九二九年度の架蔵図書数をあげると、それは次の通りである。

一九二九年度

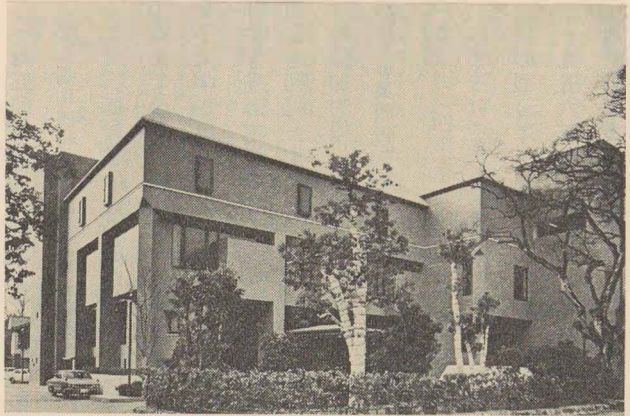
一九三〇年三月一日現在に於て、和漢書四万八三八〇冊、洋書一万二六四六冊、合計六万一〇二六冊の図書を所蔵（『昭和四年度財団事業報告』）。

なお、爾後戦争期の架蔵図書の推移を見る記録は見当たらないが、一九五六（昭和三一）年度から一九六二（昭和三七）年度までの各年度の総合蔵書数が知られ（『同志社事業報告』昭和三十一年度から三十七年度）、一九六三年度からは大学、女子大学をはじめ各学校別の架蔵図書数が、そして一九七三年度からは大学図書館、研究室、研究機関ならびに女子大学をはじめ各学校別のそれを知ることができる。各学部研究室、研究機関の蔵書に関する言及は一九二〇年度報告を初見とするが、一九六三年度の『事業報告』から以下連年の報告を見ると、「約三〇万冊」と、いわばおざりの付加的報告があるにとどまり、しかもそれが少しの増加も見せず引き継がれていることが知られる（『昭和三十八年度事業報告』から『昭和四十二年度事業報告』）。それは学部研究室の図書管理が、いかに不徹底であったかを証明している。

いまそれぞれのふし目に当る一九五六年、一九六三年、一九七三年、一九七五年の各年度の架蔵図書数をあげると次の通りである。

一九五六年度

本館の蔵書数一九万九四九七冊、図書館所蔵以外各学部研究室に合計約二〇万冊の蔵書がある。



同志社大学図書館

特殊文庫

同志社の架蔵図書が多く有志の寄贈によってその大をなしたことは、さきにしばしばふれた通りであるが、とくにそのなかで、ある特定の個人の旧蔵書が寄せられた場合、あるいは特定の個人を記念して収書が寄附金によって行われた場合、および指定の寄附金を基にして図書蒐集が行われた場合は、随時に、しかも任意に個人が図書を寄贈する例と異なり、同志社では早くから文庫名を付してこれを記念することが行われて

機関 \ 年度	1963	1973	1975
大学図書館	227, 710	237, 321	255, 066
大学研究室・研究機関	300, 000	383, 441	433, 424
女子大学	34, 655	90, 000	100, 079
高等学校	12, 184	28, 076	30, 202
香里中高	12, 461	23, 987	26, 472
女子中高	24, 655	36, 549	39, 071
商業高校	2, 348	8, 045	8, 229
中学校	8, 663	17, 381	14, 300
合 計	622, 676冊	824, 800冊	906, 843冊

(『事業報告』1963, 73, 75年度による)

一九六三年度・一九七三年度・一九七五年度



小室信介

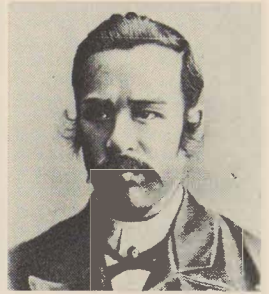


沢辺正修

きた。いまこれら特殊文庫のすべてについて言及することは出来ないが、その主要なものについて年代順に略述しておこう。

小室沢辺記念文庫

この文庫は中島信行、木村栄吉、松本誠直らが募金して内外新古の書籍を集め、小室沢辺記念文庫と名付けて一括寄贈したものであり、一八九一年一〇月三日開庫式を行なった。そのなかには立原翠軒の自筆稿本、写本、旧蔵書、ならびに埴保己一の和学講談所旧蔵書が含まれている(『同志社大学図書館報』びりおてか「一号 一九六七年」)。この文庫が寄贈されたのを社長小崎弘道は、「一には本社図書館の欠乏を補ふのみならず、又政法学校の為め将来必ず大なる利益となる疑ふ可らず、殊に現今徒に墓碑の虚飾を事とするの弊風漸く盛ならんとするの時に際し此挙あり、実に天下に紀念をなすの一好例」と述べて、新島襄と交際の密であった天橋義塾の小室信介、沢辺正修の旧知友人の寄附に感謝している(『同志社明治廿四年度報告』)。なお当初年度の図書冊数は、さきにふれたように五九四四点とあるが、翌一八九二年度のそれは六一三五点、一八九五年度以降は六一二六冊、一九〇八年度以降は六一三七冊、一九一六(大正五)年度以降は六一六五冊と報告されている(各年度『同志社報告』)。書冊数の移動はなにごと原因であったか不明であり、一九二九(昭和四)年以降は架蔵書冊の数は明示されなくなった(『昭和四年度財団事業報告』)。おそらく混合排架され、特殊文庫としての別置形式がとられなくなったわけである。



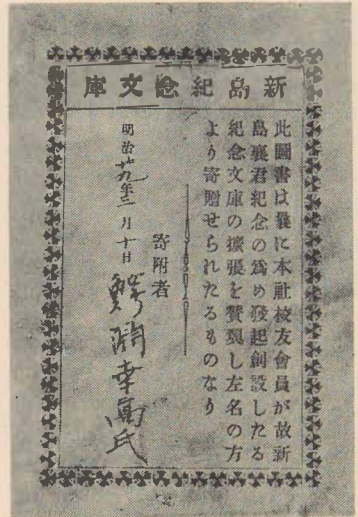
植木枝盛

残念ながら今日までこの文庫目録は上梓されず、小崎弘道のいった記念の「一好例」は徒花の言葉に終ってしまっている。

植木文庫

一八九四（明治二七）年四月の社長兼校長代理市原盛宏の報告によると、「昨年中故植木枝盛氏の友人諸氏より同氏記念のため其文庫を寄托せられたるを以て先年寄送六冊なり」（『同志社明治廿六年度報告』）とあり、植木文庫は一八九三年五月一七日に開設せられた（『同志社明治廿六年度記事』）。植木枝盛は一八九二年一月に死去し、その後、旧知有志によってその遺児養育義捐金の募集が行われ、その見通しも立って、旧蔵書が高知から先の小室沢辺文庫の例にならって同志社に寄託された。一八九四年度の報告によると八一三冊とあり、一九〇八年度以降から八〇〇冊、一九一六（大正五）年度以降は一〇四五冊とその図書数が報告されているが（各年度『同志社報告』）、その冊数の移動の正確な理由は明らかでない。一九二九（昭和四）年以降は架蔵書冊の数が逐一明示されなくなったことは小室沢辺文庫と同様である（『昭和四年度財団事業報告』）。しかもその間、この文庫ははやく政法学校図書室に移管されたことや、あるいはその後一般図書に混合排架され、植木枝盛の手沢、書き入れ本も一般図書並みに取扱われる状況にあったが、一九七五年一〇月、これを特殊文庫として別置き、『植木文庫目録』（一九七五年一〇月）がようやく出版され、研究の便宜をうるようになった。

これは特殊文庫ではないが、『同志社明治廿五年度報告』所収の寄附目録によると、「神学校宗教博物館室へ寄附」として、岡山の加藤秀徹寄附の黒住宗忠真筆「天照皇大神宮」(一軸)、大阪のジョン・ギューリック寄附の「石造臥牛」(一箇)、東京の久保田米僊寄附「故新島先生長逝状景図」(四葉)の三点が見られる。宗教博物館の原構想はこの神学校宗教博物館室にあり、一八九三(明治二六)六月、湯浅吉郎、松山高吉、M・L・ゴードンが創立委員となつて「同志社宗教博物館設立之趣旨」が印刷頒布された。その趣旨には「活社会の道德を維持しその元気を鼓舞したる活宗教の真相はたゞ實際の実物につきて始めて見ることを得べきのみ(中略)我国には仏教神道天主教その他にも種々の宗教ありぬべし、それらの宗教に係る物どもは漏さで集めまほしく思ふなり、この企図の成ん日には外邦の学者も日本の宗教を研究せんとおもはゞ我が宗教博物館に來りてその材料を得るにいたらん」とあり、きわめて遠大な宗教研究の計画の下に企図されたものであった。翌年度からの寄附目録によると、「宗教博物館へ寄附」が近江水口の小谷政祐寄附仏像二体、外写本一冊をはじめとして三三口の物品が掲げられている。それは仏・神の画像、彫像、経巻、由緒記、守札などであり(『同志社明治廿六年度報告』、以降一九〇八年度までその寄附を巨細にわたって知ることができる(各年度『同志社報告』)。ただ『同志社明治廿七年度報告』の明細録によると、「宗教博物館へ寄附」とあり、以後その呼称が踏襲されているから、宗教博物館の構想は現実には宗教博物館室という形で展開したことが知られる。当初から収集された物品は『同志社明治廿六年度報告』の「同志社総財産一覧」に見られる神学校標本一七一点に相当すると思われる、『同志社明治三十年度報告』には三六四点、『同志社明治三十四年度報告』には三六七点とあって、爾後一九〇八(明治四一)年度まで寄贈による収集が行われたことが報告されているが、総点数は何点におよんだか明らかでない。この収集がさらに系統的に、しかも永年にわたって行われたならば、異数の宗教博物館として開花したと思われ、中途にして挫折したことは残念なことである。しかも現在はこれらの物品は



新島記念文庫のラベル

大方散逸してその行方がわからず、わずかに石造臥牛一体をクラーク記念館の前にとどめるにすぎない。

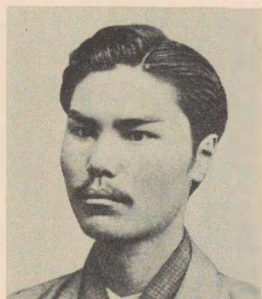
新島記念文庫

現在図書館の一般排架図書に混排されていて、その表紙に「新島文庫」此図書は竊に同志社校友会の企図に因りて世上有志者の義捐金を以て購入したるもの又は現品にて寄贈せるものを蒐集し之を新島文庫と称し永く同氏を記念するの意に出るものとす 明治二十八年」という蔵書印紙(「新島記念文庫」の別の票紙「上欄写真」もあり)が貼付されているのがこの文庫本である。その初年度は『同志社明治廿六年度報告』によると二三八冊(同志社総財産一覽)、翌年度のそれには二六七冊、さらにその翌年度(一八九五)には三八六一冊と急増し(各年度『同志社報告』)、一九〇二年度には三九七九冊、報告形式の改められる一九〇八年度には三七二八冊であるが(『同志社明治四十一年度報告』、爾後その文庫別の架蔵図書数が見られる一九二八(昭和三)年度までに三八二六冊あったことが知られる(『同志社昭和三年度報告』)。新島義を記念した特殊文庫がその所蔵目録もなく、分置もされなかったのは、その寄贈をうけ、あるいは収集した図書の性格にその一つの理由があると思われるが、奇異としなくてはなるまい。なお、図書冊数の減少の理由は不詳である。本文庫本は和書を主とし、近世後期の刊本、写本が多いとされているが(「新島記念文庫」『同志社大学図書館報』よりおてか「六号一九七〇年」、まず寄贈者のこの文庫への「翼賛」を記念し、その目録化を図らねばならない。なお女学校にも一八九二年度から「女学校新島文庫」が設けられ、一八九六年度以降二〇〇〇有余冊の図書が収集架

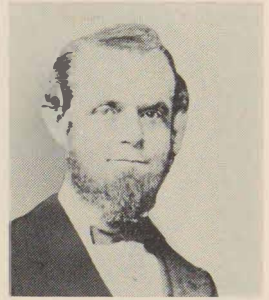
蔵された。

森田記念文庫

この文庫も現在混排されている。この文庫本には "Morita Memorial Library Presented by the Doshisha Alumni to Doshisha"、"森田記念文庫ハ同志社校友ノ義捐金ヲ以テ故同志社教授森田久萬人博士ノ所有ニ係ルモノヲ購入シタルモノニテ永ク同博士ヲ記念スルノ意ニ出ルモノトス 明治三十四年" の蔵書票が貼付されている。森田久萬人は熊本バンドの一人で、一八七九(明治一二)年六月英学校余科を卒業後同志社の教員となった。一八八九年から一八九二年までイェール大学に学ぶ、"Tolze's Conception of the Soul Compared with that of Buddhism" で博士号を取得し、イェールでポーター N. Porter や ラッド G. Ladd に伍して東洋哲学を講じた。帰国後同志社神学校教授、教頭となり、新島なき後の同志社の教学の一翼を担ったが、一八九九年二月永眠した。死後旧蔵遺愛の図書が校友の寄附金によって購入され、同窓の友人横井時雄が代表となり同志社に寄贈された。この図書には森田の書込み、注記、サインなどが見られ(「森田文庫」『同志社大学図書館報』ぶりおてか『八号 一九七一年』、同志社における哲学研究の濫觴をうかがう好個の文庫といえよう。なおその図書冊数は当初七五一冊とあり(『同志社明治三十五年度報告』)、一九〇八年度からは七六七冊、一九一六(大正五)年から一九二八年度まで七六九冊と報ぜられている。一九二九年度以降はその図書数が逐一明示されなくなったのは先の特殊文庫と同様であり、まだその目録化も行われていない。



森田久萬人



E. フリント (1870年)

フリント記念文庫

同志社の年次報告で図書館の部にフリント記念文庫の名が見えるのは一九〇七（明治四〇）年度がはじめてであり、爾後一九〇八年度から一九二八年度まで連年二六〇冊の架蔵図書数を報じている（『同志社明治四十年年度报告』以下累年報告）。しかしその当該年度报告にはフリント記念文庫に関する説明は付されていない。

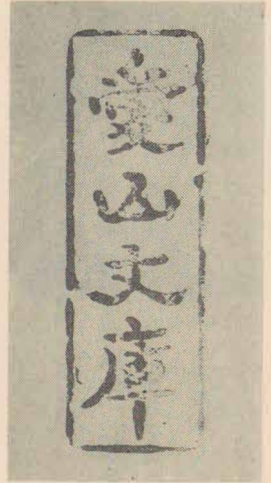
さて、この文庫の図書の英文蔵書票（印刷）はそれぞれその図書の表紙裏に貼付され、それによって在米時代の新島襄とE・フリント（Ephraim Flint）がいかに親密な間柄であったか、そしてフリント未亡人（フリントは一八八三年七月死亡）から記念基金（Flint Memorial Fund）が寄せられ、それによって図書が購入された経緯が知られるが、従来この文庫の由来は残念ながら全く看過されていたきらいがある。

ではこの記念基金はいつ同志社に寄せられたかというに、小崎弘道の「同志社報告」によると、新島襄の死後、校友会の新島記念神学館の建設が計画され、寄附金五〇〇〇円を募集したところ、たまたま一八九一年七、八月ころ、ニューヨーク州ブルックリンのクラーク（Helen Stone Clarke）夫人から一万ドルの寄附に接し、それまで寄せられた寄附金の使途を別途に考えることになり、「フリント夫人の五百弗は更に同夫人が承諾を経て記念の為め神学の書籍を購ひ入れ新に出来る筈なる神学館の一室に備ふる事に定めたり」（『同志社明治廿四年度报告』）と見える。したがって、この記念基金は五〇〇ドルであり、元来フリント未亡人から新島襄記念神学館建築のために新島の死後早く寄せられたものであったことが知られる。一八九二年度の「同志社各学校現在特別資金勘定」によると、「久良留久神学館」とは別に「新島記念神学館」の項目があり、その資金総高一〇九四円四八銭六厘のうち「米国フリント氏寄附六三五円」（『同志社明治廿五年度报告』）と見え、翌年度の同『報告』には「新島記念文庫（旧東寮内）」と

特別資金勘定の名称が変わり、資金総額一一六円六四銭六厘のうち、「二十三年度米国フリント氏寄附金貨五〇〇弗 六三五円」とあり、支出面で「独国書籍買入 六〇円五銭、米国書籍買入 三六七円二三銭、英国書籍買入 二三五円九六銭」（『同志社明治廿六年度報告』）などに見えるから、フリント未亡人の寄附申込は一八九一年三月末までになされ、一八九三年度から書籍購入費として使われたことを知ることができる。しかし現在一般図書と混合排架されているこの文庫本には、その出版年が一八九三年以降のものがあつて随時にフリント記念基金は図書購入費として使われたことが推定される。一八九四年度の「特別資金勘定」では、この種の資金はさらに「新島文庫」と名称が変わり、フリント寄附の意義は消滅しており、もし残金があつても新設の「新島文庫」資金に繰入れられたことが知られる。なお現在カードで確認できるフリント文庫本は一〇五冊であるが、すべて神学書であり、中には新島の師パーク（Edwards Park）の著作、あるいはブッシュネル（Horace Bushnell）の著作などが見られ、新神学の嵐をまともにうけた組合教会の神学校が、かかる神学書をこの時期に選択購入した姿勢は、改めて検討されねばならぬ問題と思われる。

校友文庫

『同志社明治四十一年度報告』によると、図書館の部で「校友会の発起により校友文庫を創立し、本校出身者の著訳編纂等に係る書籍雜誌等を蒐集し、図書館内に陳列する事となりしが、校友同窓諸氏より続々寄贈中なれば、不遠して図書館内に光彩を加へ、後進者を奨励するの功多大なるものあらん」と見える。その翌年、一九〇九（明治四二）年度には一三四冊とあり、爾後漸増し、一九二八年度の架蔵図書冊数は六七六冊である（『同志社明治四十二年度報告』以下各年度報告）。現在混合排架されており、内表紙におかれた「校友文庫」の印願でそれを知るとどまる。



「愛山文庫」の印

愛山文庫

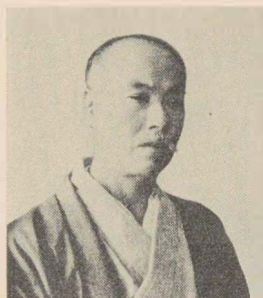
この文庫本は表紙または内表紙に「本書ハ故山路愛山氏ノ遺書ニシテ大原孫三郎氏ノ厚意ヲ以テ寄贈セラレタルモノナリ 大正六年 同志社図書館」の朱印が押捺されており、一般図書と混合排架され、冊子目録化も行われていない。一九一八年三月の原田助の「同志社々長報告」によると、「本年度寄贈書籍中最も重

るものは大原孫三郎氏の寄贈にかゝる山路愛山文庫和漢書三千二百六十七冊、洋書三百一冊、合計三千五百六十八冊にして同文庫には日本歴史の好資料として有益なるもの多し」（『同志社大正六年度報告』）とあり、爾後一九二八年度まで三五六八冊の図書が愛山文庫として連年報告されている（各年度『同志社報告』）。ちなみに愛山の死は一九一七（大正六）年三月一日であるが、その年七月一日付の「社務校務関係文書綴」によると、山路愛山の蔵書三六三二部を徳富猪一郎の紹介によって大原孫三郎が買取り、これを図書館におくことが報告されている。

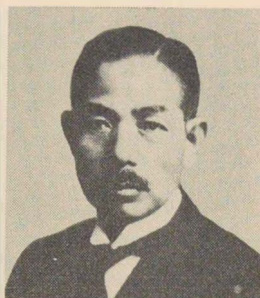
この愛山旧蔵遺愛の図書のうちには、その思考過程を窺うことのできる書込みもあり、近代思想史の研究上異数の文庫であるから、植本文庫と同様、まずその整理、冊子目録化が望まれる。

三宅文庫

『同志社大正八年度報告』によると「理事三宅利平氏は本図書館に受托中なる滝本誠一氏所有経済図書千三百七十冊の購入資金を寄附せられたるを特記すべし。凡そ学問研究の府にありて図書館の充実は其最も必要なるものにして新大学設立認可の一要件が其点にあるを見てもその忽諸にすべからざることを知るべし。然るに本館の蔵書は



滝本誠一



三宅利平

未だ五万に達せず、早稲田、慶応の二大学に劣る数等なり」と見え、政治経済部経済科主任教授、図書館長であった滝本誠一の受託中の経済学に関する原書一三七〇冊が、当時常務理事として、総長事務取扱中村栄助の大学令による大学の設立申請をたすけた三宅利平（一八九三年普通学校卒業）の資金醸出によって、同志社に収められたことはまことに大きな貢献であったと言わなくてはならない。なおこの文庫は、新発足した法学部の政経研究室に当初から保管され、その後もほとんど引続いて経済学部研究室に収められ、図書館に移管され混排されているのはわずかその一部である『同志社大学図書館報』一〇一号（一九七二年）。

さて滝本誠一は、一九一八（大正七）年の同志社紛擾の渦中の一人であり、原田助が総長を辞任する日（一九一九年一月一七日）に法学部長兼図書館長の辞表を提出し、八月同志社をやめて東上した。こえて一九二〇年はじめにかけて、当時東京にいる滝本誠一と同志社理事会との交渉が進められ、三宅利平の醸金によって受託されていた図書を一括して、これを収めることになったわけであるが（『社務校務書類綴 大正九年』）、それは大正六、七年の同志社紛擾の顛末のなかで残された貴重な遺産の一つと言ってよいであろう。なお同文庫の図書数は一九一九年度以降一九二八年度まで連年一三七〇冊と報告されている（各年度『同志社報告』）。

小林文庫

『同志社報告』の図書の部に「小林文庫 六九冊」と見えるのは『同志社大正十四年度報告』がはじめてであり、爾後それぞれ各文庫架蔵図書数の明示される一九



小林正直

二八年まで、一五〇冊、二七三冊、三九〇冊と増加した(『同志社昭和三年度報告』までの各年度報告)。さてこの文庫の発端は『同志社大正十二年度報告』によると、理事小林正直(一八九三年普通学校卒業)の図書資本金一万円の寄附にあり、「小林図書資本」として資本勘定が新設され、それから生ずる毎年の利息約六〇〇円で年々約一〇〇冊内外の経済学関係図書が購入収集された。なお同文庫は一九三五(昭和一〇)年には一〇一一冊に及び、一九三八年にはその基金と図書の一部は岩倉校地の高等商業学校に新設された小林商業研究館に移され、さらに一九四九年四月商学部が発足とともに商学部研究室に引き継がれて今日に至っている(『同志社大学図書館報』ぶりおてか『一三三 一九七三年』)。

なお大学図書館には、吉田文庫(吉田作弥旧蔵書五八六冊)、岡田文庫(岡田政太郎寄贈図書洋書七九八冊)、横田文庫(横田安止寄贈図書一五四冊)、原田文庫(原田助旧蔵書七二〇冊、洋書仮目録)、加藤文庫(加藤小太郎旧蔵書)、村上文庫(村上小源太旧蔵書)、安東偉人文庫(安東長義の寄附金により購入)、竹林文庫(竹林熊彦旧蔵書)、デントン文庫、中瀬古文庫(中瀬古六郎旧蔵図書)、生江文庫(生江孝之旧蔵書)、北垣文庫(北垣確寄贈)、高柳文庫(高柳松一郎旧蔵書)などがあり、また、人文科学研究所には絲屋文庫(絲屋寿雄旧蔵書)、小沢文庫(小沢三郎旧蔵書)、水谷文庫(水谷長三郎旧蔵書)、近藤文庫(近藤栄蔵旧蔵書)などがある。なお、蘇峰文庫、ケーリ文庫、荒木文庫はそれぞれ『同志社徳富文庫所蔵目録』(一九六〇年)『ケーリ文庫目録』(一九七八年)、『荒木英学文庫目録』(一九七八年)が上梓されている。目録化の進められた文庫は稀覯書、珍籍が多く含まれていることは言うまでもないが、如上の文庫も引き続いて目録化の進められることが期待される。

学部・学科における研究活動

一八七九（明治一二）年六月英学校余科第一回の卒業式において、英語で卒業演説を行なった山崎為徳の「日本学術の教育」(“Scientific Education in Japan” by Mr. S. T. Yamaki, Kyoto Training School) は一八七九年一〇月刊行の『ミッシヨナリー・ヘラルド』（第七五卷一〇号）に掲載された。それは山崎の、懷疑論に立ち向かうキリスト教信仰の確固とした姿勢を示しているとともに、すぐれた語学力の上達を示していたからで、それはアメリカン・ボード派遣宣教師の海外伝道の活動、成果を顕示するものであったとともに、草創期同志社における学問研究の姿勢と、その水準が那邊にあつたかを窺い知る上できわめて重要な最初の道標である。

観点を変えて明治時代におけるイエール大学 (Yale University) への日本人進学者とその人々の学位修得状況を見ると、まずその人数において同志社の出身者（含関係者）が慶応義塾（一六名）、早稲田（一四名）、東京大学（六名）をはるかに凌いで三三名におよび、そのうち Ph.D.（哲学博士）七名、M.D.（医学博士）一名、B.L.（法学修士）一名、B.D.（神学修士）二名、M.A.（学術修士）一〇名、M.S.（理学修士）一名、合計二二名がそれぞれ学位を取得している（「イエールの日本人」『同志社アメリカ研究』第二三号）。もちろん、これはアメリカにおける特定の大学についての統計であるが、かれらが同志社諸学校における学習を基礎にして研究を進め、やがて帰国してその多くが同志社の教壇においてその学問研究を披瀝するコースをとったことはいうまでもない。

さて、一九一九（大正八）一月に創刊された『政治学経済学論叢』（翌年三月より『同志社論叢』と改題）、またそれに先立つ一八八七（明治二〇）年三月、ならびに一九〇三（明治三六）年三月の二次にわたる刊行の『同志社文学』、および

一九二三(大正一二)年十一月刊行の『基督教研究』については、すでに他の章で言及したので、ここでは第二次世界大戦の末期までに各学部(学校)あるいは学科などにおいて発行された研究誌のうち主要なものを年代順にあげよう。

『同志社高商論叢』

一九二七(昭和二年)十一月、同志社専門学校高等商業部商業研究会が発刊した『商業研究会雑誌』が母体となり、その五号(一九三二年一月一日刊行)から『同志社高商論叢』と改題された。第一号(輯)に掲げられている「本誌の趣旨」によると、「商業研究会の機関雑誌」で「学生に対する補講の意味」で刊行するものであるとしている。ちなみに第一号には海老名弾正が創刊の辞に代えて、「商業と道徳」という小論を寄せている。

商業研究会は同志社高等商業部の教員によって一九二七年四月に組織され、毎週研究会が開かれ、したがって本誌は次第に「学生本位の雑誌」から教員の研究誌に変貌する。なお『同志社高商論叢』に改題されるのは一九三一年四月に高等商業学校が発足するからであり、雑誌の発行も商業研究会から同志社高等商業学校商学会に改められる。その後さらに一九四八年二月、同志社経専学会による『同志社経専論叢』と改題される。この後身に当るものが一九四九年から発刊される『同志社商学』である。

『同志社文学』

同志社大学英文学科文学会(代表者和田琳態)から一九二七年二月一七日に発行される。和田の「発刊の辞」には「出なければならぬものは幾回蹉跎しても出るのです。(中略)わが英文学科の近年の発展は法学部に『法学論叢』(実は『同志社論叢』)が、神学科に『基督教研究』が確実な歩を進めて居る今日、何時までも沈黙を守ることを許さな

いのです。(中略)今回第三回目の同志社文学が其創刊号を出すことになりました」と見え、一八八七(明治二〇)年三月から八七号までにわたって八年間の生命をもった『同志社文学』(第一次)、一九〇三(明治三六)年三月からその暮にかけて四号にわたって刊行された『同志社文学』(第二次)の後を襲うものであったことが知られる。本誌は一八号(一九三五年)まで続き、第二次世界大戦後は一九五六年に *Doshisha Literature* と改題された。なおこの『同志社文学』が刊行されている間に、英文学科の学生によって“PHOENIX”という文芸雑誌が同志社文学会から一九三二(昭和七)年一二月に刊行される。創刊号の奥付によると、編輯兼発行人は同志社大学英文学科文学会代表者片桐哲とあるが、収録しているのは英文学科学生の投稿作品であり、四号(一九三四年六月)で終わっている。

『同志社文芸』・『同志社派』

『同志社文芸』の第三号(一九三四年九月一四日発行)の編輯後記によると、「直接学校と何等の関係はないが一切の通信は同志社大学内『同志社文芸』宛にされたい」とあり、学部、学科の教員による組織ではなかった。しかし第一号の編輯後記を担当している叶宮貞昌は、この雑誌について『三田文学』は今なほ新人を文壇におくりつゝある。『早稲田文学』は地と人と財の優越的な条件を以て、再版の準備を進めてゐる。我々の『同志社文芸』が如何なる気持で創められたか、それは余りに明白な事実であらう」と述べており、焦臭い戦争のせまってくるなかで、同志社大学の学生に台頭する文化運動を象徴している。その他、現在では確認しがたい雑誌も少なくない。

『同志社派』は予科の学生の刊行する『文芸街』(七号まで発行)と、四号まで刊行した『同志社文芸』とが合併して、一九三五(昭和一〇)年五月一日に発刊される。この雑誌には当時予科教授である新村猛、和田洋一が同人の合評会、読書会、座談会に出席し、投稿執筆している(郡定也「京都学生文化運動の問題」『戦時下抵抗の研究』Ⅱ所収)。

なお学生が中心となって刊行されたものには、はやく一九二四（大正一三）年一月八日、同志社大学街社発行の『街』（「一つ位の月刊雑誌が出てよい時だ」編集後記）があり、一九三五年七月一日発行の同志社汎論同人会発行『同志社汎論』、同じく一月一日発行、同志社大学想園同人による『想園』などがある。

『L・L・L』と『主流』

同志社大学英文学会は一九三五年五月、従来の同志社文学会を改組し、「英文科将来の発展を予約するリテラリー・リバイバル」を起し、教授、卒業生、学生の「三位一体」を標榜して組織され、会長に舟橋雄、委員長に上野直蔵となり、研究会報『L・L・L』、研究雑誌『主流』を一九三六年から発刊した。『L・L・L』の名は文学部の襟章Lを三度繰り返したもので、上野直蔵の命名により、英文学会の動静が巨細となく載せられている。『主流』の創刊はその年九月二五日で、創刊号はイギリス行動文学の特集号であり、編輯兼発行人は貞方敏郎である。編輯後記を書いている中村義彦は「同志社英文学会によせられた最初の期待になった『主流』創刊号を秋の第一信としてお送りします」と述べて、英文学科による特立した待望の機関誌であったことを示している。なお、一九七九年八月現在で『L・L・L』は七五号、『主流』は四〇号まで発行されている。

また、女学校の専門学部英文科には、はやく一九二三（大正一二）年に『ともしび』（編輯兼発行人片桐君子、星野繁子）が刊行された。

『哲学年報』

哲学科の設置が認可されるのは一九二七（昭和二）年二月九日のことであり、文学部は神学科、英文学科、哲学科

の三科となる。しかし、一九四一年四月に神学科、文化学科の二科に改革されるから、第二次世界大戦前に哲学科が存置されていたのは一四年間である。

この『年報』は同志社大学文学部哲学会編で一九三八年一月五日弘文堂書房から出版した大冊の論文集である。編輯人は村岡景夫で、湯浅八郎が総長を辞任して間もなく上梓された。

『厚生学年報』

この年報は一九四二（昭和一七）年七月一五日、厚生学研究室から発刊された。厚生学専攻が文学部に設けられるのは一九四一年四月からであって、厚生学専攻は、一九四四年十月に文科系学（部）科の統廃合が行われて法文学部になった際にも、時代の脚光を背負った領域として厚生学科として残る。さて同『年報』の発刊のことばは総長牧野虎次が執筆し、「厚生」の時局に対応する新しい解釈を披瀝し、厚生学研究室創設一年後の教員の諸論文を集めており、竹中勝男が編輯兼発行者である。

用紙獲得の困難

ちなみに大塚節治の『回顧七十七年』によると、それは『基督教研究』の場合であるが、戦時下における雑誌発刊のための配給用紙の割当獲得の苦心談が見られる。それは一九四四年一月二七日のことであるが、配給用紙獲得のため大阪の日配支社に出向いたところ、途中、大阪駅で空襲警報が発令され、やむなく帰途についたが、電車は吹田で停り、一時下車して壕に退避する始末であったこと、翌日再び大阪に赴いてようやく雑誌のための用紙割当てを獲得したことを述べている。

大塚は「用紙の問題は直接に学問研究ではない」とことわっているが、研究を継続し、しかもこれを研究誌に発表する、しかしてその発表の手段である雑誌の発行を維持することは、当時の状況としてはきわめて困難な問題で

あったとしなくてはならない。いま当時の『基督教研究』の発行状況を見ると、新一巻（通算二巻）一号（一九四四年四月）、同二号（一九四四年九月）、同三号（一九四五年三月）、同四号（一九四五年九月）、二二巻一号（海老名日本神学講座記念、一九四六年三月）、同二号（小崎基督教神学講座記念、一九四六年二月）と刊行が続けられており、そこにはきわめて強靱な学問研究に立ち向う意志があったことを知ることができる。

同志社において古い歴史をもつ『同志社論叢』の場合にも、この期間の刊行状況を見ると、八二号（一九四四年一月）、八三号（一九四四年四月）、八四号（一九四四年一月）、八五号（一九四五年五月）と刊行が続けられており、敗戦後一年間の空白を置いて、一九四七年五月に八六号を発刊する。また当時敵性文学と言われた英文学科の機関誌の一つである『主流』に例をとって見ると、一九三六年に創刊されてから一九四四年六月に一〇号を刊行する。したがってすでに学科としての英文学科がなくなった後でも、なお担当者による研究発表は続けられたわけである。『主流』終戦後第一号をお贈りする、通巻ナンバーで算えると、この号は『主流』創刊以来第十一号目にあたり、この前の号すなわち第十号は太平洋戦争最も苛烈だったところ、ちょうど昭和十九年六月に発行されている」と、一九四九年九月復刊一号を出すにあたって、編集者は回顧しているが（『主流』復刊第一号あとがき、それは再生しえた喜びをきわめて抑えて述べているといっぴよい。それは学問研究における茨の道をふりかえったときの、自らを確めた道程の喜びと傷みであるといっぴよいであろう。

展開する学術誌

さて戦後同志社はいちはやく新制大学への移行を進め、従前の研究誌の流れを継承しつつ、一九五〇年までにつぎつぎに新しい研究誌が登場する。一九四八年二月二五日創刊される『人文学』（同志社大学人文学会）、一九四九年四月一〇日に創刊される『同志社大学経済学論叢』（同志社大学経済学会）、同年六月二五日創刊される『同志社法学』（同志社法学会）、同年九月二五日創刊される『同志社商学』（同志社大学商学会）



学内の学術誌

がそれである。ついで一九五〇年九月三〇日には『同志社工学会誌』（同志社工学会）、同年十一月二十九日には『同志社女子大学学術研究年報』（同志社女子大学）、同年十二月二〇日には『文化学年報』（同志社大学文化学会）がそれぞれ創刊され、また一九五〇年三月認可された同志社大学短期大学は、一九五二年一月『同志社大学短期大学部学術研究年報』を発刊する。

なお少しおくれるが、『同志社心理』（一九五二年七月、心理学研究会）、『同志社美学』（一九五四年七月、同志社美学会）、『同志社哲学』（一九五五年、哲学専攻会）があいついで刊行される。

いま、いわゆる新制大学の発足以来一〇年たった、一九五八（昭和三三）年の各学校、学部（科）の研究誌の発行状況を見ると、神学部、基督教研究会の発行する『基督教研究』は三〇巻三号、四号、文学部人文学会の発行する『人文学』は英文学科、文化学科、社会学科、そして第二外国語研究の四つの特集を順次に繰返しながら三九号に達し、法学部の同志社法学会の発行する『同志社法学』は一〇巻五二号、経済学部の『同志社経済学論叢』は九巻一号、二号を、商学部の『同志社商學』は一〇巻の六号まで発行し、工学部の『同志社工学会誌』は九巻四号に及んでいる。その他女子大学の『同志社女子大学学術研究年報』は九号に達し、『主流』は二〇号を数え、一九五六年五月、一八号まで続いた『同志社文学』を改題し、その号数を襲った『Doshisha Literature』は二一号まで発刊する。その他『L・

L・L、『同志社心理』、『同志社美学』、『同志社哲学』などが継続刊行されたことはいうまでもない。

なお一九五五年文学部文化学科に新設された国文学専攻では一九六七年三月一日『同志社国文学』を創刊する。女子大学では、一九六八年二月に『同志社家政』、同年二月には *ASPHEDEL* が創刊される。

一九六九年の大学紛争のあおりをうけて研究誌の発行は不規則になり、休刊するものも出た。教員数の増加や専門への集中深化の必要から、一九七一年には同志社人文学会の『人文学』は四つの独立した研究誌へと発展分離する。すなわち従来の『人文学』は文化学科の諸専攻教員にうけつがれ、ほかに英文学科・英語科の教員を中心とする『同志社大学英語英文学研究』と、社会学科教員を中心とする『評論社会学』が出版した。上記三誌は同志社大学文学会発行にかかる。第二外国語の教員は新たに同志社大学外国文学会を組織して『同志社外国語文学研究』を発行しはじめた。

さて、これら数多い研究誌の一つ一つについて詳しく言及し、そこに展開されているそれぞれの論稿について、これを位置付けする作業に及ぶことはできないが、これらの研究誌の辿った途を同志社の百年のなかで俯瞰してみると、学問、研究には寿命がないことを改めて痛感する。しかも研究者の寿命には自ら限りがあり、交替が行われるのは冷徹な事実である。しかして、そこに行われる研究には年輪の積み重ねが大切であることを痛切に思う。多少古くさい例ではあるが、ラーネッドが五〇年余におよぶ同志社の教職生活に終止符を打って帰国するとき、ラーネッドに私淑した受業生の一人である中瀬古六郎が同志社におけるラーネッドの姿を仰いで、次のように述べていることは学問研究におけるすぐれた示唆を我々に与えてくれる。すなわち、中瀬古はラーネッドを「沖合の波間に隠顕する巨巖」にたとえる。「疾風叫び怒濤の狂へる時は見えないが、波静まり風和げる後から見れば、依然として元の所にその崇高なる存在を示現する」(『校友同窓会報』臨時増刊号 一九二八年九月)と。

研究所の歩み

「去一月本校四年生以上及教師の有志諸士が創設されたる学理講究会は、去月五日ヲ以テ其開業式を行なへり。(中略) 本会設立の趣旨は會員互に諸般の学科を講究し、双方の智識を交換し以テ円満なる教育の利益を収むるに在り。毎月一回、文理神の各学校より三名の講士を求むるは、学問の一局部に偏せず、會員講究の精神をして一焼点に注がしめんが為なり」とは、『同志社文学雑誌』第一号(明治二〇年三月一二日発行)の「記事」欄に見られる「同志社学理講究会」と題する記事の一節である。

当時の同志社には、まだ英学校、神学専門科(英語神学・邦語神学科)の二つのコースしかなかった。したがって「文理神の各学校より三名の講士」を求めて、共通の講究の場を設定することは事実上ありえなかった。ただ現実に開催された会の記録によると、第一回(三月五日)の題ならびに報告者は、「理財学ノ進化」(高橋善作)、「屈伸論」(松尾音次郎)、「哲学の目的及範圍」(森田久萬人)、第二回(四月一六日)は「磁石の話」(安田保太郎)、「理学の影響」(浮田和民)、「摩擦電気略記」(三谷種吉)であったことが知られる(『同志社文学雑誌』第一号 明治二〇年四月三〇日)。したがって教師の森田ならびに浮田はそれぞれ専攻する領域の、また、生徒は関心課題を発表していることが判明し、きわめて素朴であるが、生徒も加わって関心領域に関する共同の講究の場が設けられる試みであったことが窺われるわけで、このことは軽々しく看過できない問題を含んでいる。しかもこの森田の発表は『同志社文学雑誌』の編集者(柏木義圓)が当時のキリスト教界の代表的雑誌の一つである『六合雑誌』に掲載されることを報じ、事実その第七五号(明治二〇年三月三十一日)にそれを見ることができるところからすると、森田の発表は通俗的で水準の低いもの

であつたとは思われない。だから同志社にはやく当時の日本のキリスト教界において注目すべき学理講究の共同の場があつたことが知られる。

いまこの同志社学理講究会がその後いつまで存続し、教育の場における研究の交流の場として、どのように維持されたか、明確に史実の徴すべきものがない。恐らくこうした共同の場はごく内輪の形で、あるいは演説会という形や講演会という形式で持続されたのであらう。ただし、それが研究会という自由な討議の場にまで昇華されてゆくのは一九一九（大正八）年創刊の『政治学経済学論叢』、一九一〇年創刊の『同志社論叢』の刊行される時期まで待たねばならなかつたと思われる。内地研究制度（一九一九年新設）、ついで在外研究員の規程（一九二一年新設）ができあがり、それが実施されたこともこれを傍証している。

研究所の設置

さて、大学における研究の共同の場は、皮肉にも時局の進展のなかで形成されていった。すなわち、一九四〇（昭和一五）年四月東亜文化研究所が設立され（『同志社新報』四六号）、株式会社大丸（代表者下村正太郎）から四〇〇〇〇円の指定寄附があり（『同志社新報』四九号）、七月八日規程が制定された。それは「東亜ニ関スル學術的研究」を目的とし、所長は総長が委嘱し、研究員は大学学部、専門学校、高等商業学校の教員から所属部・校長が推薦し、総長が委嘱した。そのおり、委嘱された研究員ならびにその研究題目は次の通りである。

文学部教授園頼三、魚木忠一、村岡景夫、助教授上野直藏——支那百科全書 *Encyclopaedia Sinica* の共同翻訳

法学部教授難波紋吉——支那ニ於ケル社会統制

法学部教授松井七郎——支那紡績業ノ研究

専門学校高等英語部教授吉川哲太郎——支那社会ノ変遷ト教育ノ理論及實際

専門学校法律経済部教授佐藤義雄——滿州国商法及経済法ノ研究

高等商業学校教授水野純——支那ノ幣制、金融機関及為替問題ノ綜合的研究

高等商業学校教授原猛雄——(一)支那重要物産並ニ資源(差当り綿花・生糸、鉍産資源)ニ関スル現地調査研究、

(二)対支貿易業務ノ手続及対支貿易品(輸出)ノ市場的研究

〔昭和十五年理事会記録〕

それは当時の時局とその要請を濃厚に反映しているが、なお共通テーマに関するきわめて基礎的な協力作業であったことが注目される。なおこの東亜研究所の研究ならびにその運営がどのように行われたか、その詳細は知るこ
とができない。

さて、一九四三(昭和一八)一月二日の臨時常務理事会記録によると、学科改組委員(仮称)に国民厚生問題研究所、大東亜基督教研究所(いずれも仮称)の設置、実施方を委嘱しており、研究所機構ならびに研究所名を総長に一任していることが知られるから(「昭和十八年理事会記録」、戦局の熾烈化に伴い、研究所機構ならびにその運営がなお流動的であったことが知られる。

しかし大学はやがて決定的な事態に遭遇する。それは一九四三年一月一日、文部省専門教育局長による「教育ニ関スル戦時非常措置方策」(一〇月二二日閣議決定)に基づく通達である。これについて常務理事会は一月二九日、大学を存置したまま研究所を設置すること、大学予科の生徒募集を一九四四年度以降見合わせることを、専門学校は予科生徒を収容した上、今回の非常措置による専門学校定員を従来の二分の一に改組することを決定する(「昭和十八年理事会記録」。そして一九四四年一〇月一日、従来の法学部、文学部を廃し、法文学部とし、法経学科、神学科ならびに厚生学科をおくこととし、同日付で同志社大学研究所を設置する。

この同志社大学研究所の目的は「同志社立学ノ使命ニ鑒ミ大東亜戦争ノ目的貫徹ニ資スベク精神科学ノ全般ニ亘

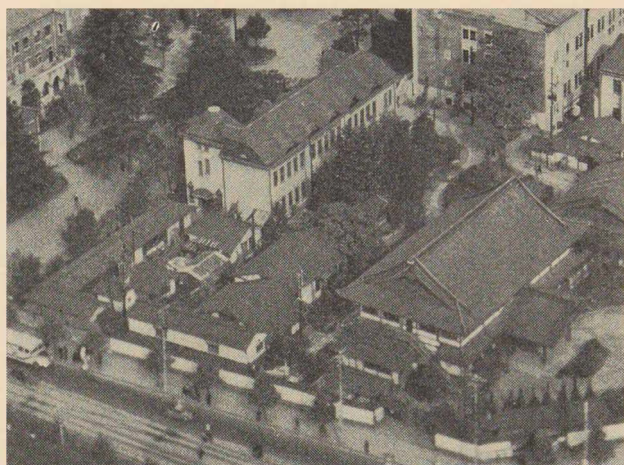
リ研究ニ従事シ国家ノ要請ニ応セントスルニ在リ（從テ各研究員ノ研究ハ各自専門ノ立場ヨリスルモ此目的ニ依リ帰一スルモノナリ）」とあり、その目的にそつた研究調査ならびに講座（講習会）の開設、講演会の開催を企画した。所長には田村徳治、研究員には園頼三、浜田与助、黒田謙一、富森京次、魚木忠一、中島哲人が任命された。

研究会は第一部哲学宗教芸術言語等、第二部行政法律経済厚生等の二部門に分れ、部門研究会ならびに総合研究会を月二回宛開催しようとするものであった。それぞれの研究題目をみると、「社会、国家、共栄圏」（田村）、「日本美学ノ基礎ヅケ」（園）、「八紘為宇ノ肇国精神ニ照ラシ觀タル原始基督教」（富森）、「大東亜文化ノ哲学的基礎ヅケ」（浜田）、「印度教ト基督教トノ接触」（魚木）、「江戸末期カラ明治時代ニ至ル東亜拓植ニ関スル文献ノ調査・蒐集・整理」（黒田）、「戦時国民生活ニ於ケル貯蓄ノ意義」（中島）などであるが、研究員のそれぞれの研究題目は予め文部省から研究補助費をうけることが内定していたものであつて、したがつて、ここに設置された同志社大学研究所の性格、目的は大学に付置されたものではなく、むしろ大学と併行して財団法人同志社に事務室ならびに研究室を置く特殊な機関であつた（「昭和十八年理事会記録」）。一九四五年四月には第一回同志社大学研究所戦時文化日曜講座を致遠館で開催している。頒布された講座開設の趣旨には「生産増強にあたる国民諸君と共に学的基础のもとに日本国体に基づく強固なる信念を堅持し以て士氣昂扬困難突破必勝を目的とし」とあり、戦時下の非常措置に基づき、文部省の懲慥による時局下の研究所の使命を端的に示している。

いまかかると同志社大学研究所が、さきにあげたそれぞれの研究題目に応じた部門研究を實際にどのように展開したか、記録の徴すべきものが残っていない。また月二回の総合研究会における総合研究の討議の過程を辿る記録も知ることができない。しかし、この大学研究所がきわめて現実的な時局の要請に應ずる研究題目による部門研究会を設けながら、一方において総合研究会を設置したことは怪々しく看過すべきことではない。それは個別課題や部

門研究課題を超えて学際的な共同研究の場を志向していたわけであり、戦後いくたの経過をへながら、大学の研究所が希求する原像とも言うべきものであった。

さて、敗戦の翌年、一九四六年二月、理事会は同志社大学研究所を改組して、同志社平和文化研究所職制を定め、「世界ニ恒久ノ平和ヲ齎ラスベキ新文化ノ方向ヲ確立シ人類ノ福祉ニ貢献スルコト」を目的とし、「文化日本ノ建設ニ寄与シ且又文化ノ国際的交流ニ資スベキ」(昭和二十一年理事会記録)事業を行うこととしたが、翌三月二十九日、研究所名を同志社文化研究所と変更して、四月一日から発足することになった。この段階では、その構成において、所長、所員、准所員、助手及び副手を置き、研究普及のため研究生を募集し、また委託研究生を設けることが定められており、むしろ研究活動の拡大、充実が志向された(同上)。しかし文化研究所は一年間の活動のみで廃止されることになった。すなわち、一九四七年四月二十六日の常任理事会記録によって「同志社文化研究所は戦時中文部省の補助に依り設立した特別の組織であるから、補助金の交付が中止せられた現状のもとに従来の儘存続することは不可能」との判断を下したことが知られる。したがって、戦時非常措置方策にもとづく研究所はここに終焉を迎えた。しかしながら、それは研究所の完全な廃滅を意味するものではなかった。翌五月二二日の理事会において、文化研究所の解消にともなう同志社学術研究所の設置が新たに決定され、各学校・各学科における研究奨励と社員ならびに学生の研究に対し補助金を出してこれを援助することが定められ、財団付置の研究所以は新たに研究補助金交付機関の役割を担って存続することになった(昭和二十二年理事会記録)。そしてこの同志社学術研究所は一年後の一九四八年四月新学制にともなう大学の発足にさいして、学校教育法第六一条により、戦時下の創設のさいの旧名を襲って、同志社大学研究所と改め、ここに大学付置の研究所として新たに門出することになった。



発足当時の人文科学研究所（右手は啓真館）

人文科学研究所

さて同志社大学研究所は当初学長（大塚節治）が所長を兼任し、事務所も本部（有終館）内に置か

れていたが、一九五二年四月以降は学部教授が所長に就任し、一九五四年三月以降は啓真館（大学院）の北側の家屋（いずれも大学図書館の地）に独立した事務所をもつようになる。学内教職員の研究に助成金を交付する旧来の機能は、付置研究所となつてからも引き続き存続しながら、研究所に共同の場をおく総合研究を重視し、これを促進する方向が試みられ、新に資料室を設置し、研究調査部の創設、専任研究員制度の創始など、研究機関としての主体的な性格を明確化するための検討、努力が徐々に積み重ねられた。人文科学研究所はこうした推移のなかで、大学研究所を改め、一九五七年四月一日に発足する。

新たに発足した人文科学研究所は同志社大学研究所が設けていた三部制——人文科学系、社会科学系、自然科学系（一九四九年七月改正規程以降）を改めて、「ひろく人文科学に関する専門の学術の理論及び応用を研究」（一九五七年四月一日制定規程第二条）することとし、また研究員は同志社大学と同志社女子大学の専任教員のなかからこれにあてていたのを改めて、同志社大学の神・文・法・経・商の各学部専任教員のなかから研究員を委嘱することにした。したがって人文科学研究所は、工学部ならびに女子大学が大学研究所からそれぞれ分離することによって成立、発足したわけである。

その機構ならびに組織は、五年後の一九六二年八月二五日の規程改正によって、ようやく一応の制度的な整備を見るにいたった。すなわち、はじめて人文および社会科学にわたる専門の学術の理論および応用に関する総合的研究を目的にかかげ、専任研究員制度を採用し、兼担研究員（各学部専任教員）、嘱託研究員（同志社教職員）の区別の明文化、ならびに研究部門の設定が見られた。とくに長い期間にわたり懸案事項であった専任の研究員制度は翌一九六三年度に最初の専任研究員が着任し、その後吉武堯右所長よしむけ たけみさのとき、その採用には全国公募制がとられ、以後専任研究員の採用が随時行われ現在にいたっている。なお専任研究員の教員身分については、一九七八年の規程の改正によって明確化が行われた。また、一九六九年四月の規程改正により研究資料主任がおかれ、研究所委員会の構成は従来の各学部長ならびに各学部より推薦された教員各二名から、各学部より推薦された教員各二名と改められ、「大学評議会」的な構成であった研究所委員会は機動性をもち、かつ「学部的セクション」をこえた研究」状況に即応し、研究所の主体性ならびに責任体制を運営面に及ぼそうとする意図が実現した（『人文科学研究所三〇年史』）。

なお一九七三年一月には、学部専任教員が、一定期間設定された研究所の研究に従事する専任研究員制度、ならびに大学院生に奨学金を与え研究会の研究を補助するための研究補助者制度が設けられた。

一方、研究所における共同研究の歩みは人文科学研究所の発足当初、研究所の「プロパー研究」として「近代京都における社会発展の諸条件の研究」が設けられ、それは意識・思想（宗教・芸術・文明開化）班（代表者文学部教授石田一良）、教育・行政（自治）・政治班（代表者法学部教授高橋貞三）、産業構造班（代表者経済学部教授黒松巖）の三班に分れて共同研究が進められた。一九五九年五月には第一研究として、さきの「近代京都における社会発展の諸条件」第二研究「キリスト教社会問題研究」（代表者経済学部教授住谷悦治）、第三研究「近畿地方村落構造の総合的研究」（代表者商学部教授吉川秀造）の三つが設定され、一九六五年五月まで継続して研究を行なった。この間の研究成果とし

ては、第一研究には『伝統産業の近代化——京都友禅の構造』（一九五九年）、『西陣織業の研究』（一九六五年）、『京都市民の政治意識と投票行動』（一九六四年）、『日本映画年表』（一九六五年）、第二研究には『日本におけるキリスト教と社会問題』（一九六三年）、第三研究には『近畿郷土村落の研究』（一九六四年）がある。

一九六五年七月からの研究活動体制は、次の三つが設定された。第一研究「キリスト教社会問題研究」（代表者文学部教授篠田一人）、第二研究「日本封建制の研究」（代表者商学部教授吉川秀造）、第三研究A「日本資本主義研究」（代表者商学部教授吉武堯右）、同B「世界資本主義研究」（代表者経済学部教授入江節次郎）がそれぞれあり、この研究は一九七一年三月まで継続して行われた。この間の研究成果としては、第一研究には『熊本バンド研究』（一九六五年）、『戦時下抵抗の研究』Ⅰ・Ⅱ（一九六八、一九六九年、一九七八年重版）、『近藤栄蔵自伝』（一九七〇年）、第二研究には『林業村落の史的研究』（一九六七年）、『京都社会史研究』（一九七一年）、『祇園会山鉾鷹山関係資料』上・下（一九七〇、一九七一年）がある。

一九七一年四月、研究活動体制の再編成が行われ、第一研究「キリスト教社会問題研究」（代表者神学部教授竹中正夫）、第二研究「日本の『家』」（代表者文学部教授竹田聴洲）、第三研究「両大戦間時代における知識人と政治」（代表者法学部教授高橋悠、第四研究「都市問題の研究」（代表者経済学部教授西村裕通）、第五研究「芸術における伝統と変革」（代表者文学部教授金田民夫）、第六研究「日本における外来文化の受容とその論理」（代表者文学部教授土橋寛）が設定され、一九七四年三月まで行われた。この間の研究成果としては、第一研究には『特高資料による戦時下のキリスト教運動』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（一九七二、一九七三年）、『日本の近代化とキリスト教』（一九七三年）、第三研究には『両大戦間イギリス史年表』（一九七三年）がある。

一九七四年四月から五つの研究班が設定された。第一研究「キリスト教社会問題研究」（代表者 前掲）、第二研究

「European Communities の発展とそれに伴う法制度の変遷」(代表者法学部教授岡本善八)、第三研究「京都商業慣行の研究」(代表者商学部教授安岡重明)、第四研究「地域社会と福祉」(代表者文学部教授中条毅)、第五研究「明治時代の芸術思想」(代表者文学部教授金田民夫)であり、一九七七年三月まで三カ年に涉つて継続して行われた。

目下一九七七年四月より開始された四つの研究会、第一研究「キリスト教社会問題研究」(代表者 前掲)、第二研究「家族制度の比較研究」(代表者文学部教授松本通晴)、第三研究「日本経済における地場産業問題の研究」(代表者商学部教授 前川恭一)、第四研究「近代化過程における民族文化の諸問題」(代表者文学部教授葉師川虹一)が進行中である。なおこの間の研究成果の刊行には、第一研究の『民友社の研究』(一九七七年)がある。

研究の成果は上述の単行本として刊行された場合のほか、はやく『紀要』(八号まで、一九六四年)があり、それを継承展開した『社会科学』(一九六五年創刊)は現在(一九七八年)二四号まで発刊し、『人文科学』(一九六六年創刊)は九号まで刊行し、また『キリスト教社会問題研究』(一九五八年創刊)は二七号まで発行して、随時その研究成果を発表している。

なお一九五三年六月からハーヴァード・エンチン・インスティテュートから受けた補助金によって開設された「ハーバード・燕京同志社東方文化講座」関係の文献資料は、現在すべて人文科学研究所がこれを保存・管理している。また一九五九年から一四年間にわたって、キリスト教社会問題研究はハーヴァード・エンチン・インスティテュートから補助金をうけ、近代日本におけるプロテスタント・キリスト教に関する文献資料の収集ならびに研究を進めてきた(『人文科学研究所三〇年史』)。

アメリカ研究所

同志社大学アメリカ研究所(Center for American Studies)はアメリカに発達した学術、文化、芸術等ひろく文化一般の研究及びアメリカ文化の普及を目的として、一九五八年三月二八日に

設立された。この研究所の前身はロックフェラー(Rockefeller)財団の援助をうけて、一九五一年八月から京都で開催された京都アメリカ研究夏期セミナーにある。アメリカのイリノイ(Illinois)大学、その後はミシガン(Michigan)大学との間に協力関係を結んだこのセミナーが一九五九年一月をもって終了するにあたり、セミナーの共催校であった京都大学と同志社大学はそれぞれアメリカ研究センター(京大)、アメリカ研究所(同志社)を一九五八年に設置して、京都におけるセミナーの成果をそれぞれ別個に発展させることになった。同志社はロックフェラー財団の援助をうけて、人文・社会科学両分野に属する若手の教員をアメリカに留学させるとともに、アメリカ研究に必要な基本図書収集を図り、また大学独自に講座の設置、研究会の開催、研究の助成などを計画し、その運営には各学部長、図書館長、人文科学研究所長、ならびにアメリカ・セミナーの運営に当初から関係した上野直蔵(文学部教授)、松井七郎(経済学部教授)、原猛雄(商学部教授)、吉川哲太郎(文学部教授)らが委員となり、初代委員長には上野直蔵が任命された(『昭和三十四年度同志社事業報告』)。発足五年にして最初の専任研究員が着任し、その後専任研究員の補充が行われて今日にいたっている。なお一九七三年には、前記のような全学的な委員会制度による運営の方向を存置しながら、委員長制を改めて所長を置き、研究所機構を整備するため規約の改正が行われた。また人文科学研究所の規程に準拠して専任研究員制度、研究補助者制度が設けられた。

アメリカ研究所における共同研究は、当初から人文・社会両分野の諸専門領域の学際的協力が試みられ、発足年度から六年間は基本的図書・資料の収集のほか、アメリカ諸大学における研究プログラムや、ヨーロッパにおけるアメリカ研究の状況調査、ならびに新しい研究成果の吸収のため、アメリカの学者による講演やセミナーを開いて、共同研究の圓場の確立を図ることが行われた。はじめに選ばれた共通テーマは「両大戦間のアメリカ」であり、まず「二〇年代のアメリカ」に焦点を定めて研究が進められ、現在は次の五つの部門研究が設定されている。第一部

門「日米交渉史におけるアメリカ思想の研究」、第二部門「アメリカ文化とピューリタニズムの研究」、第三部門「戦後のアメリカ経済」、第四部門「アメリカ政治と最高裁判所の研究」、第五部門「現代アメリカにおけるコミュニケーションの追求」。

この間の研究成果としては、アメリカ研究所訳、R・スピラー編『現代のアメリカ文化像』（一九六五年）、同 J・ハイアム編『アメリカ史像の再構成』（一九七〇年）および C・V・ウッドワード編、大下尚一・麻田貞雄他訳『アメリカ史の新観点』（一九七六年）があり、部門研究にかかわるものには、第一部門の『あるリベラリストの回想——湯浅八郎の日本とアメリカ』（一九七七年）、第三部門の古米淑郎編『第二次大戦後のアメリカ経済』（一九七四年）がある。なおこれら単行本のほか一九六三年創刊の『同志社アメリカ研究』、および『同志社アメリカ研究別冊』の二種の機関誌があり、論文または研究の中間報告が行われている（大下尚一「同志社大学アメリカ研究所——アメリカ研究関係の研究施設・沿革と現状」『東京大学アメリカ研究資料センター年報』一号 一九七八年）。

理工学研究

同志社大学研究所委員会記録によると、一九五五年二月九日の大学研究所委員会において、一九四九年七月以降人文科学系、社会科学系とならんで自然科学系学科専攻の所員を以て構成されていた第三部の研究（『同志社大学研究所規程』、昭和二十四年七月二三日改正、第四条）は、工学部教員から別に理工学研究所を設立する方針が述べられ、大学研究所から脱退する旨の申し出がなされている。理工学研究所の濫觴はここにある。しかして一九五七年三月末に正式に大学研究所から離脱する。

しかし、理工学研究所の設置にはその後幾多の曲折があった。当初は財団法人同志社大学理工学研究所の設置が企図され、一九五八年一〇月の理事会で財団設置の件が承認せられたが、翌一九五九年三月の理事会において、理事長から財団設定の手続きはなお時間を要するために、一応大学内の一機関として大学理工学研究所を設置、発足

することになった旨の報告があり（「昭和三十四年理事会記録」、結局、理工学研究所は同年四月一日、「理工学の基礎及びその応用に関する研究を行い、理工学及び産業の発展に寄与すること」（「同志社大学理工学研究所規則」、昭和三十四年四月、第二条）を目的として発足した。その研究所機構は、所長ならびに研究員の規定に特徴的に見られる。すなわち「所長の嘱任」は「理工学研究所及び工学部本属の教授の中から所長選挙人会の選挙した候補者につき大学長がこれを嘱任する」（同規則、第九条）とあり、研究員は「本研究所に研究員若干名を置く、但し研究員は工学部を本属とする教員をして兼任させることができる」（同、第十八条）とあって、まさに工学部と理工学研究所とは表裏一体、和衷協同の関係にあった。一九六八年四月規則の改正が行われ、ついで一九七八年一二月に規程を改正し、機構が整備された。この改正によって、専任研究員の規定がはじめて明文化され、専従研究員、研究補助者などに関する規定も定められるにいった。

理工学研究所における研究活動は、大学の研究助成金のほか私学振興財団、その他委託研究費によって、総合、共同、個人研究が行われている。研究成果は一九五〇年に創刊された『同志社工学会誌』（第一〇巻、一九五九年）を引き継いで、一九六〇年から『理工学研究報告』（季刊）が刊行され、現在二〇巻一号が出されている。

同志社社史史料編集所

財団法人、ついで学校法人襲蔵の新島襄ならびに社史関係史料は、一括して一九六三年四月一日発足の同志社社史史料編集所において保存、管理されている。『昭和三十八年度同志社事業報告』によると、編集所の業務は社史史料の編集、新島先生遺品庫、徳富文庫の管理、重要文化財ならびに重要美術品の管理を掌管するとあり、機構の上では本部に属している。

社史史料は草創期同志社の運営に関する新島襄の自筆記録をはじめ、法人ならびに法人管轄の諸学校、諸機関の記録ならびに文書である。新島先生遺品庫は、その正面壁にはめ込まれているレリーフに「昭和十五年新島先生昇天

五十周年ニ当リ記念事業会組成サレ校友池田庄太郎君ノ篤志及ヒ校友会ノ贊翊ニ依リ造築ス」とあるように、新島襄永眠五〇周年記念事業として遺品を収納するために建てられ、一九四二年一月二八日、同志社創立六七周年記念式を卜して開館式を行なった。収納する新島襄の遺品については『同志社新島遺品庫収蔵目録』(上)(一九七七年)が上梓されている。徳富文庫とは、一九四七年山本二郎の収集にかかる徳富蘇峰ならびに民友社関係出版物を、蘇峰が買収して同志社に寄附したものと、蘇峰の没後、その遺志によって熱海晚晴草堂に架蔵されていた愛蔵、遺愛の圖書、文献資料の寄贈をうけたものである。文庫所蔵目録は、さきに述べたように『同志社徳富文庫所蔵目録』(一九六〇年)がある。重要文化財ならびに重要美術品には、一九六三年七月重要文化財の指定をうけたチャペル(礼拝堂)があり、ついで一九七九年五月二一日付で彰栄館と同館の時計機械、ハリス理化学館、有終館、クラーク記念館および同館設計図と仕様書が重要文化財の指定をうけることになった。重要美術品としては靈元天皇宸翰御詩懷紙一幅が一九四二年五月認定をうけている。なお編集所には校友の家蔵文書が寄贈されており、目下収蔵する主なものには下村孝太郎文書、牧野虎次文書、中瀬古六郎文書、湯浅八郎文書などがある。

同志社女子大学研究所

同志社女子大学の教員は、一九四九年七月改正の同志社大学研究所規程によると、同志社大学の教員とともに大学研究所の研究員の構成メンバーであったが、一九五六年三月大学研究所から脱退する申し出がなされ、一九五七年人文科学研究所の発足にともない、別個の研究所を設立することが企図され、一九六五年(昭和四〇)四月に同志社女子大学研究所が発足した。

一九六四年七月制定の同志社女子大学研究所規定によると、女子大学専任教員を所員とし(第二条)、所長は女子大学長がこれに当り(第六条)、その運営は所長、教務部長、各学部長、各学科主任、一般教育主任、図書館主任ならびに各学科、一般教育より選出された委員によって行われ(第八条)、したがって女子大学の教育と一体化した研

究所運営方法がとられており、その研究成果もすでに一九五〇年一月に創刊された『同志社女子大学学術研究年報』によって発表する形がとられている。なお同研究所では、一九六五年一月に『同志社女子大学研究所だより』（年刊）を創刊し、研究所をはじめ女子大学の研究に関する情報を、巨細となく掲載して、全学への周知につとめている。

第八章 同志社の現況と課題

キリスト教主義教育の問題

同志社の建学の父祖たちはキリスト教を主体的に選び、同志社教育の基盤に据えた。新島の抱いた壮大なヴィジョンによれば、新しい日本は、キリスト教によって培われた、品性あり、良心に生きる市民によって運営されるべきであった。「同志社大学設立の旨意」で新島は次のように宣言した。「吾人は基督教を拡張せんがために大学校を設立するに非ず、唯た基督教主義は、実に我か青年の精神と品行とを陶冶する活力あることを信し、此の主義を以て教育に適用し、更に此の主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ」。

キリスト教主義 教育の遺産

慶応と同志社を比較する場合、東の慶応が世から取る教育をするのに対し、西の同志社は世に与える教育をする、などといわれたことがある。たしかに慶応は財界の有力な指導者を輩出し

た。しかし同志社が誇る卒業生はわが国の監獄改良をはじめとする社会事業の先駆者だった留岡幸助、救世軍を通して社会事業に献身した山室軍平、水上隣保館を設立してあまたの孤児を養育した中村遙、知恵おくれの子たちの



中村 遼



福井達雨

施設としての止揚^{しやう}学園を作つて、日夜奮闘している福井達雨^{たう}らである。彼らはすべてキリストの精神をうけつぎ、生涯をなげうって、恵まれない人たちのしもべとなつて働いた、また働きつつある人たちである。このような人生を選んだ卒業生の数は枚挙にいとまがない。

同志社のキリスト教は、元来ニュー・イングランドのピューリタニズムに基づく正統派の神学を基盤とするものであった。それが徐々に新神学の影響を受け、さらに社会的キリスト教の強力な刺激をうけて、組合教会の中核を構成するあまたの牧師や社会事業家を世に送つたのである。軍国主義や全体主義的な国家思想が国内を風靡するようになると、キリスト教は敵視され、迫害を受けるようになる。太平洋戦争当時の同志社の指導者たちには、「天皇とキリストとはどちらがえらいか、言ってみる」という質問が官憲からあびせかけられた。神棚事件はキリスト教に対する内部からの告発であつた。軍部や軍国主義者からすれば、同志社をつぶすくらいわけのないことであつたにちがいない。「敵性宗教」たるキリスト教の故に、また同志社が敵国アメリカの友人たちの援助によって出来たという背景の故に、さらに何人かの気骨のある同志社人が堅持し続けた自由主義と国際主義の故に、同志社の運命は風前のともしびの如くに思われたのである。

第二次世界大戦後、同志社は教育機関としてさいわいにも復興をなしとげ、戦後三〇年にして創立百年を迎えた。現在の同志社のキリスト教をどのように評価したらよいであろうか。確かに現在も、キリスト教は依然として同志社の最も重要な活きた精神的遺産であり、その特色をさらに一層発揮することこそが、私学として発展してい

く道であると考えられる。しかし、だからといって現状が満足すべき状態だという結論になるわけではない。ことに二度にわたる世界大戦の結果ひきおこされた宗教的・精神的側面における人間性そのものの荒廃は、キリスト教主義の同志社においても決して例外ではなかった。その徴候はいくつもあげられる。背景にあるのは、むろん、世俗主義からの攻撃、すなわちこの世は神に依存しなくても結構うまくやっていけるという思想である。それは戦後の奇跡的な経済の繁栄と直接的な関係がある。もはや真剣に道を求める人の数は暁天の星の如くであるという現実、同時に同志社の悩みでもある。

しかしキリスト教主義をもって開校し、開学以来終始一貫して来た同志社には、その意味では大きくかつ重い歴史と伝統がある。この伝統とは、キリスト教主義教育理念もさることながら、キリスト教の信仰とその体験である。現在もおこなわれている学校礼拝やチャペル・アワーなどは、伝統的な教育理念の一環として、すべての同志社人がなお一層の充実と発展のために努力すべきものである。

同志社は教育機関であって宗教の伝道機関ではない。学生生徒をクリスチャンにすることが同志社の目的ではないのである。にもかかわらず、キリスト教をぬきにして同志社教育を考えることもまた不可能である。同志社は創立以来リベラルな伝統をもち、偏狭を排して寛容を尚んできた。新島はこの学校を大海にたとえ、大魚をも小魚をもひとしくのびのびと泳がせることを夢見た。その海水はキリスト教の塩のきいたものであったと考えざるをえない。

宗教教育の

カリキュラム キリスト教主義の教育には二つの欠くべからざる側面がある。その一つは宗教教育のカリキュラムであり、今一つは教師と学生生徒の間の人格的な接触である。この二つのどちらを欠いてもキ

リスト教主義教育は成り立たない。

人間とはなにか

同志社大学宗教部案内 1978



『宗教部案内』(1978)

宗教教育のカリキュラムについて言えば、各中学、高校それぞれにおいて有能なキリスト教学や聖書の担当者を配置して、創意と工夫をこらした教育が行われている。その方法や実施には、未来に向かっての展望や反省はもちろんあって然るべきであるが、その基本にあるものは、同志社教育の伝統的な、精神的あるいは信仰的財産であることには疑いをさしはさむ余地はない。

キリストが種子をまく人の話を語ったように、若い生徒たちの魂の中にまかれた種子は、時がくれば必ずや芽を出すものであることを信じて進みたい。大学、女子大学のチャペル・アワーについても、出席者は少なくても、なお真剣に耳を傾ける人々のあることを銘記したい。女子大学では「聖書」がカリキュラムの中におかれており、年次計画的に旧・新約聖書が教授されているのに対し、大学では宗教学と、総合科目の中に宗教学関連科目が設置され、担当者の持ち味を生かした方法で宗教の問題にアプローチしている。しかし、大学における宗教学は一クラス平均三〇〇名の大クラスであることが悩みの一つである。総合科目の中には新島襄と彼の建学の精神を扱うものもあって、学生間により刺激を与えている。さらに進んでキリスト教に接したい学生のために、大学の宗教部は学内外の講師を動員して一六クラスの研究会を催している。その中には「イエス伝研究」「旧約聖書と人間」「演劇と宗教」「差別と人間」等の研究会があり、学外の一般市民にも公開されている。

人格的出会いと接触

それでは、同志社において人格的な出会いと接触を通しての触発はどうなっているのか。或る意味においては、これの方が正課教育としての宗教教育よりも何倍も重要なのである。初期の同志

社の学生たちは新島の人格に触れることによって、大きな人間的な感化を受けた事実を想起したい。新島の与えた人格的な感化の力、影響力が消失してしまったとき、同志社は同志社たることをやめるのだといえよう。新島だけではない。デイヴィス、ラーネッド、デントン、波多野培根、堀貞一、中島重、南石福二郎みないしといった教師たちが、いかに多くの同志社の学生生徒に、終生忘れない感銘を与えてきたことか。彼らは教室において偉大であり、教室の外においてなお一層偉大であった。彼らはすべてキリスト者であった。しかし現在の同志社は、キリスト者であらうとかならうと、同志社の教育理念を教室内においても外においても実践しうる教師を必要としている。

それでは二万七〇〇〇人を超える学生生徒を擁する同志社としては、多種多様な学問体系と教育の場において、新島以来のキリスト教主義をどのようにして貫徹したらよいのであろうか。それは学問や教育の場における真理に対する畏敬の念をとおして、とこたえることができよう。真理に対する畏敬の念は、学問の場においても、教育の場においても、また信仰の場においても共通である。信仰から学問や教育に進みうるし、学問や教育からも信仰に進みうる。われわれは新島をこのような立場から、生き生きと想起し、尊敬し得るのである。

人格的出会いを考える場合、学生生徒同士の出会い、あるいは先輩と後輩の出会い、という面を忘れてはならない。教育共同体としての学園の最終的なよりどころはそれである。中学・高校の各種のクラブ活動、なかんずく宗教活動、聖歌隊などに出会いと接触の場を望みたい。近年、大学におけるキリスト者学生の宗教活動に低迷を感じてゐる。一九四八（昭和二三）年の福井地震がまきおこしたあの信仰の復活は、もはや望めないであろうか。元来、若王子山頭の早天祈禱会は学生たちの自発的な、自立的な行事であったと同志社史は教える。さらにまた、そのような行事は寄宿舎を中心に起こることが常であった。寄宿舎の若者のエネルギーは現在どの方向にむけて発散されているのか。大学の寮がほぼすべてキリスト教から離反し、ただ「此春」「壮図」「一粒」といったキリスト教的、新

島的な名前だけは残っているけれども、キリスト教教育の後退は否定できない。

キリスト教主義

創立百年を迎えて同志社のキリスト教主義教育は未曾有の試練に直面している。一つは学生生

教育至難の時代

徒の量の問題である。はたしてこれだけ多数の学生生徒に適切なキリスト教教育を体験させう

るのであろうか。二つは二〇世紀の四分の三を過ぎたところで、現代という価値観の多様化した、複雑な時代をどのように捉えたらよいかの問題である。新島があればほど感化を受け、また学園のモデルと考えた筈のアーモスト大学で、もはや卒業式に讃美歌も歌われず、聖書も読まれず、祈禱もなく、国歌斉唱でもって式が始まるという現実を思うとき、同志社諸学校の入学式、卒業式その他の式典が、厳密にキリスト教の儀式にのっとり、荘厳であり、入学生、卒業生のみならず、多数の父兄にも深い感銘を与え続けていることは偉観ですらある。しかし、この混乱期にあればこそキリスト教教育の意義がその深みにおいて問い直されなくてはならない。もはや一九世紀的な敬虔主義的ピューリタンのキリスト教では有効とはいえない。世界中が組織化され、組織や機構や機械が人間の主人となつて、人間が組織の歯車となり、非人間化が進行していく状況下にあつて、真の人間性を恢復させる源泉としてのキリスト教が改めて求められなくてはならない。二一世紀は人口の増加がさらに進み、生産と富の偏在がさらに顕在化するといわれる。そういう時に真に暖い人類愛の精神にもとづいて、世界中の困っている人々に援助の手をさしのべることでできる人間になりうるために、キリストの精神を自己の精神にすることがどうしても必要となる。キリスト教を死滅させてはならない。いなキリスト教は必ず生きのびる。キリストは世界の希望であり続ける。このように考えると、究極的には、同志社の全学生、全生徒が、キリスト教的な世界観、歴史観、人間観を身につけることによってこそ、真の人間形成をはたしうることになるであらう。同志社はその教育目的を常に定義し、再定義する努力が必要である。

キリスト教的

人間観

キリスト教の人間観とは何か。次のような規定を考えてみよう。①人間は被造物であるが、同時にと最も創造的な生き方であること。②人間は罪人であるが、恵みにより救いの可能性を与えられた存在であること。③人間は「神の似姿」であるが故に、人間には尊厳が備わっており、しかも人間は時間空間によって限定をうけているにも拘らず、なおそれを超越しうる存在である。そうした人間観とキリスト教的世界観、歴史観は、知的な若者の想像力を刺激するに十分な魅力をもつものであろう。

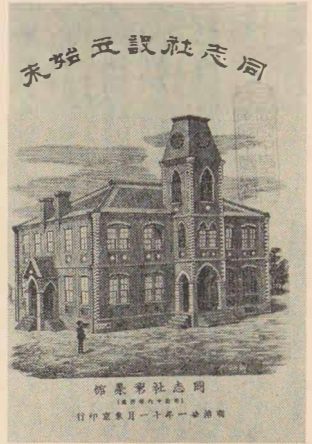
三つの提案

具体的な提案をこころみたい。

第一、同志社というキリスト教主義学園の土壌においては、信仰から学問教育へ、また学問教育から信仰へというように、敬虔な生徒への道はいつでも開かれている。同志社がキリスト教主義学園であるかぎり、どちらの道を選んだものも、キリスト教主義教育に全面的に参加しうる可能性をもっている。その可能性を生かさねばなるまい。キリスト教教育委員会あるいはキリスト教主義教育委員会は折にふれて、関心のある教員の懇談会や研修会を開くべきであるし、また、こと宗教教育に関する限り、予算にこだわらずにはならない。

第二、大学の神学部と各学校の宗教部のイニシアティブに期待したい。しかし同志社のキリスト教教育は専門家にのみまかせておいてよいものではない。全教員、全職員がこれに参加する意識と意欲をもつのであれば、とうていこの崇高な義務をはたすことはできない。

第三、学園内に学生生徒の魂の憩いの場を作るべきである。同志社礼拝堂には、学生生徒は自由に入れない。パイプ・オルガンが据え付けられてからは、神学館のチャペルのドアは閉ざされることになった。管理上問題があつてのこととはいえ、遺憾なことである。新島先生遺品庫も拡大整備して、絶えず新島の遺品および同志社史の歴史



『同志社設立始末』

的遺物を陳列し、実物を通して学生生徒に具体的に新島を実感させ、同志社教育の原点を呼び起こさせるよう配慮すべきである。

教育の質的向上

同志社の教育の質的向上を論ずる場合、同志社の教学上の歴史は、大きく次の三つの時期に区分することができる。

第一期は、新島在世時代を含めて大略明治時代の終りまでに相当し、創業期の啓蒙的な熱意に裏づけられた学問水準向上への努力が特徴的である。

第二期は、第七代原田助総長時代及び第八代海老名弾正総長時代に始まる同志社アカデミズム成立の時代と、それにひきつづく敗戦までの同志社アカデミズムの変遷の時代である。

第三期は、第二次世界大戦後の新学制下の時代で、新制の同志社大学、同志社女子大学、及び同志社諸学校に特徴的な、学問の専門分化の深化の傾向と、教育の問題をあげることができる。

以上の三つの時期を、それぞれの時代のわが国の教育体制とのかかわりで考えてみたい。

同志社教育 第一期は、新島襄の同志社設立の理想と熱情の赴くところ、日本の近代市民教育の方向づけを時代

第一期 にさきがけて実行に移した時代であった。新島の同時代である一九世紀の世界は、アングロ・サク

ソンの世紀であり、プロテスタンティズムの世界であった。このような一九世紀の世界を、新島はどのように理解し受けとめていたか。新島は『同志社設立始末』において、「宜しく欧米文化の大本たる教育に力を用ひざる可

らず」と結論している。このことは新島の世界観が教育と、そしてそれがもたらすモラルが近代世界の基本構造であるとして見ていることを物語る。モラルとは、そもそも人間の歴史的世界の営みにおいて、人間の主体にかかわる方向づけ、すなわちオリエンテーションを意味する。周知のようにプロテスタンティズムのオリエンテーションは、地上に神の国を実現するために、人間が神のみ心のままに勤労を以て協業することであり、その内容は新島がいうように人智と人文科学、ことに文化であらう。いうまでもなく人智の中には自然科学が大きな比重を占め、文化の中には哲学・芸術・文学等近代精神文明が包含される。そしてこれらの人智と文化はともに理想実現のために協業する設計図を持たなければならない。新島が「同志社大学設立の旨意」において、「教育は（中略）上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道徳に存することを信じ、基督教主義を以て徳育の基本と為せり」といっているように、キリスト教主義の徳育とは、神と人による人間のための新しい国家への道を指し示すものでなければならない。

近代の歴史的世界の営みは、政争や軍事や営利ではなく、「キリスト教主義の徳育」に培われた「品行ある人民」の力によるものでなければならない。その故にこれらの人民は「一国の良心」と名付け得るのである、と新島はいう。その中に、新島の新しい国家の設計図を読みとることができるであらう。

事情はちがうが、カント哲学であらうとマルキシズムであらうと、その合理主義は構造においてはかわるものではない。このように、モラルというものは独り歩きできるものではない。キリスト教のような、グローヴァルな世界観あるいは世界宗教の終末論的予言的設計図の設定が、モラルの存在を可能にする。新島が儒教・仏教・神道その他の多くの世界観や世界宗教の中から、キリスト教ことにピューリタニズムを選んだことは、日本の将来のためにまことに正当であった。同時にその後の世界や日本の歴史的世界の中において、同志社の教育もまた正当であつ

たことを誇示してもさしつかえあるまいと思う。

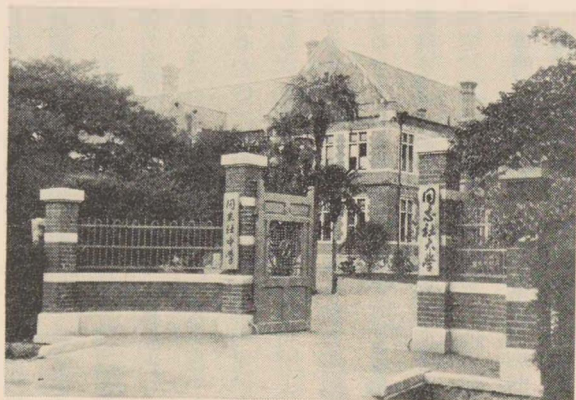
以上のように、新島の設定したキリスト教主義のモラルは同志社の骨組となつて今日に及び、また将来に向かつても十分に有効であろう。しかし新島の生きた当時の日本の現実には、彼の理想とは大きく懸絶したものであった。そのころの私学は、制度的にも財政的にもまことに不遇の極にあった。新島在世中の同志社も、当時は上級学校への進学や海外留学への一つのステップとされていた。しかし、教育者としての新島の意欲は、この逆境の中にあつて、実力を以て官学にうち勝つことであつた。新島は述べている、「素より資金の高より言ひ、制度の完備したる所より言へば、私立は官立に比較し得可き者に非ざる可し、然れども其生徒の独自一己の気象を発揮し、自治自立の人民を養生するに至つては、是れ私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず」(「大学設立の旨意」)。新島の遺志を継いだ同志社は、英学校・政法学校・ハリス理化学校の充実に力を注いだ。その学問水準の高さ、ことに英語の語学力の高さは帝国大学にひけをとるものではなかった。

新島の没後、とくに明治三〇年代は同志社の受難期であり衰退期でもあった。国をあげての大陸政策の進行が、同志社だけでなく、日本の近代社会と文明に及ぼした悪影響は計り知れないものがあつた。

同志社教育

第二期

第二期は、原田・海老名総長の時代で、その評価はいまなおまちまちであるが、同志社教育の中心である同志社に、興の時代であつたとみることには異論はなからう。この時期に同志社は、専門学校令による大学、大学令による大学として、新島の遺志にすることができた。ここにおいて、新島の求めてやまなかつた大学教育の場が一応同志社にも現実のものとなり、徴兵猶予や文官任用令等における差別待遇も除去されるに至つた。この時代は、時期的に大正と昭和の初年に当たる。同志社内においても学界注目業績が法学部を中心に公表され、学外からは学界トップ・クラスの学者が数多くまた頻繁に大学・中学・女学校の課外講義に來校し、教育に協力して



大正初期の同志社正門（正面はハリス理化学館）

くれた。かくて同志社は学問的に広い視野を持つに至った。また、集中講義には山路愛山や有島武郎ら、いわゆる同志社ひいきの著名な文化人が、同志社の教壇に立ったのもこのころである。

以上のような同志社教育の中興の現実をふまえて、海老名時代には東京大学出身の優秀な学者が同志社の教員に採用され、同志社出身者とともに、同志社アカデミズムの樹立に成功した。

同志社教育 第三期は、戦後の同志社であるが、新学制下の大学・女子

第三期 大学・高校・中学校は、新島のモラルと同志社アカデミズ

ムの伝統の上に進化発展することとなる。しかし戦後の、新制と名のつく大学・女子大学・高校・中学校の場合、教育内容が極めて多元的であり専門化したことが特徴的である。一方では大学を始め中学に至るまで、戦後アメリカの指導のもとに、いわゆるソーシャル・スタディーズの名の下に、問題解決学習を指向しながら、各学部学科専攻の専門化は急速に深化した。大学の一般教育も高度の専門を包括した関連学習であり、問題解決学習の方針を打ち出しながらも、なお専門化の深化を防ぐことはできなかった。専門化深化の方向が問題になるのは、いうまでもなく、人間の主体にかかわる未来の理想社会を指向する設計図の喪失が隘路となっているということである。

新島のモラルは確固としてキリスト教主義教育に立っており、同志社教育の価値もそこに求められてきた筈である。にもかかわらず、いま改めて

このことが問題になるのは一体どういうことであるのか。このことは世界の現代哲学者が問題にし、また現代の宗教家や宗教学者が問題にしているそのことにつきる。歴史学の用語では、近世、近代、現代はいずれも、古代、中世、近代という時代三分法の第三番目に当たり、それらの「構造」は同じであると見られている。しかし、今や世界の現代哲学者の一致した意見として、現代は別の世界であるという規定が、半ば公然と行われているのが現状である。これも結論的にいうならば、ことに自然科学の分野において、その専門化の深化が極端なまでに進行し、もはやこの大宇宙のどこにも神の座が存在する可能性は失われたという、無神論的世界像の帰結がそれである。すなわち、キリスト教の宗教的絶対者という座標軸の存在の故に、ベクトルが健在であった時代は去った。現代世界が、もし神の座標軸に代る別の座標軸を持っていないとするならば、ベクトルを欠如した歴史的世界ということになり、これはまさに人間存在の危機である。このような、モラルと価値観の混乱の時代においてこそ、同志社は、新島をはじめ幾多の先輩たちがうち据えてきた「キリスト教を徳育の基本とする教育」を厳密に検討することによって、二一世紀を生きるモラルと価値観を追求すべきである。

専門分化の 教育の質的向上の問題は、以上のように現在の世界史的問題ともなりつつあることを考慮において、**時代教育** て、その対策を考えなければならない。

まず第一に、新島のモラルやキリスト教主義は、十分現代化することができ得るであろうし、同志社教育は是非その努力をするべきである、というのが一つの提案である。

もう一つの問題は、アカデミズムとその現代版としての専門の深化の問題である。アカデミズムから専門の深化への道程は決して間違いではなく、かえって見事な進歩であることはいうまでもない。その場合、戦後、ソーシャル・スタディーズや大学の一般教育が現代教育の日程に上ってきたように、人類文明全体の見通しとオリエンテー

ションが欠落することに大きな心配があった。同志社大学の一般教育では、いち早く総合科目が設けられて大きな成果をあげているし、人文科学研究所、アメリカ研究所、理工学研究所、女子大学研究所等が多くのプロジェクトを追求しつつある。

課題解決の方途

そこで現状と課題として提案したいことは、同志社全体の教職員・学生・生徒が公開講演会のような、共通の学問の場を持つてはどうかということである。かつて原田・海老名総長時代に大きな体験と成果を持つ同志社の課外講演会が、今後、全同志社的に実施されることを期待したいものである。現実には、多彩な課外講演会が同志社の各部門で行われていながら、全同志社的な報道周知機関が完備していないとか、スケジュールが正課とうまくかみ合わなかったりするようである。もっと全学的な週間行事予定表を徹底させるなどの工夫は考えられないものであろうか。

もう一つは四研究所（人文科学研究所・アメリカ研究所・理工学研究所・女子大学研究所）のプロジェクトが、その成果を持ち寄って、それぞれの研究所の講座という形で学生に公開し、修得単位として充当しても決しておかしくないのではなからうか。

もう一つ、同志社であるが故に可能と思われる教育の機構の問題がある。新島のキリスト教主義教育とそのモラル、及び同志社アカデミズムを百年の永きにわたって追求してきた同志社は、教育の場をも可能な限り共有するという発想のもとに、大学・女子大学・高校・中学校で教員職員の交流を行い、財政面の独立採算制はやむを得ないにしても、教学面での学校、学部間の壁を、できるだけ打破する方向はとれないものであろうか。

教育の質的向上の問題は、以上のように、いくつかの技術面の処理ですむ問題もあるが、いわゆる現代教育の在り方の問題が、最も大きくてまた困難な問題でもあることを反省せざるを得ない。モラルや教育はつねに現代の課

同志社女子大学
研究所だより



『同志社女子大学研究所だより』

題と密接にかかわりあいながら、しかも永遠の将来に向かつての人類文明の方向づけという責任を負わされていることを忘れてはならない。そこに問題の困難さがあるといふべきであろう。

研究条件の整備充実

研究条件の整備充実の問題は、大学・女子大学の各学部がその自治のもとに考えるべき問題であり、またその故に極めて専門的な問題であらう。従つてこの問題は別にすると、なお最近の研究・教育の方向づけに関係するいくつかの問題は、全同志社的に考慮しなければ解決できない性格のものである。このような問題の論点を列挙するならば、次の三つになるのではなからうか。第一は、学際研究の要請に関連する中央集中管理方式である。第二は、新しい研究教育に適應した図書館の整備充実である。第三は、百年を越える同志社の歩みの中で現在に遺された文書・記録・遺品・文化財及び諸研究資料の総合的管理の問題である。

学際研究の問題

第一の学際研究の要請にこたえる管理方式の整備充実は、今後の研究・教育の場にあつては、最も新しくかつ重大な課題の一つであることはいうまでもない。研究・教育の場における専門化の深化はアカデミズムの帰結として多くの批判的となつてゐることは反省しなければならぬとしても、研究・教育の専門化はそれ自身紛れもない進歩発展の行きつく所として積極的に評価すべき性質のものである。にもかかわらず専門化の帰結としてのアカデミズムが、激しい批判の対象となつてゐるのが近時の一般傾向である。



『創造科学教育10年の歩み』

ことには、それはそれなりに確かな理由があつてのことであらう。現代という時代は、それほどにまで研究・教育を含めて人間の営みの方向づけ、すなわちオリエンテーションが困難である特異な世紀であることに留意しなければならぬ。人間の実存の確かさが論じられている一方、人間が世界や宇宙の中に占める位相が、全くといつてよいほどつかまれていない。歴史的世界の中で、このような現代に対して今後どのように対処すべきであるかという問題は将来に残されることは止むを得ないとしても、同志社の研究・教育の構成が、つねに人間文化の将来に向かつての方向づけに十分関心を持ち得る態勢であることが望ましい。

以上のような観点から見た場合、現在の同志社が持っている人文科学研究所、アメリカ研究所、理工学研究所、女子大学研究所はその中心機構とならなければならない。戦時中の東亜研究所や同志社大学研究所の役割は、その時期における同志社アカデミズムの補助的なものに過ぎなかつたり、また戦後間もない時期にあつては学内研究補助金の割り当て機関にしか過ぎなかつたこともあつた。

しかし同志社における研究所の学際的な役割は、もはや全同志社の研究・教育の方向づけに関わる機構の意味を持たざるを得なくなり、または是非そうあつて然るべきである。

最近に至つて、周知のように学術修士、学術博士の学位規定が同志社でも施行されている。このことは主として大学院においては、学際研究が大きな意味を持つものであるという学問的理解の上に立っている。アカデミックな学問はその研究領域が次第に細分化され、それがいわゆる専門化と呼ばれてきた。しかし学問をも含めて人間の営みの方向づけが大きな意味を持つに至つた現代においては、細分化され専

研究所報

同志社大学人文学部研究所

創刊号
イヌキ 志士 同志社
イヌキ 志士 同志社
イヌキ 志士 同志社
イヌキ 志士 同志社
イヌキ 志士 同志社

No. 1

1985

『研究所報』第1号

門化された学問と同様に、またある意味ではそれ以上に、いわゆる学際研究的な未来に向かつての意思統一の必要度が高まってきたわけである。同志社の既存の四研究所にもこのような意思統一への志向があつてよい筈である。その場合、研究条件の整備充実という観点に立つならば、中央集中管理方式に必要な施設と、全同志社的な機構が要請されるのではなからうか。全同志社の総意において、このような施設と機構が整備充実されることを希望したい。同時にこの機構は次代をになう研究者の養成にも関係するものであるから、大学院学生をも含めた全同志社の新しい研究体制の確立が望まれる。

図書館の整備充実

第二は、新しい研究態勢に応じた図書館の整備充実である。

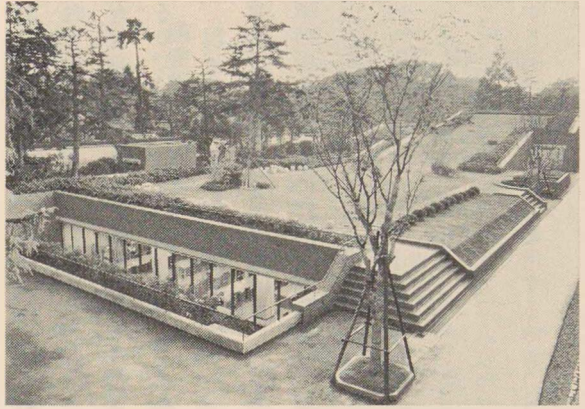
同志社の図書館は一八八七（明治二〇）年の一月一日、現在の有終館が書籍館という名称で発足した。当時それは、建築規模においては全国の学校図書館中最大のものであったが、一八九一（明治二四）年の図書冊数は五一六八冊で、以後、年間一〇〇〇冊をめぐに図書購入が行われた。にもかかわらず一九一九（大正八）年ころには、大学令による大学の設置基準で要求されていた図書冊数の五万冊には足らなかった。一九二〇（大正九）年には校友山本唯三郎の寄附により新図書館（現啓明館）が開館され、サロンのな研究討議の場ともなった。またこの年に同志社の「研究室規程」に類するものが定められた。

また同志社の図書館には有志の寄贈その他の手続きで入ったスペシャル・コレクションが数多くある。一八八七（明治二〇）年には「小室・沢辺記念文庫」が、一八九三（明治二六）年には「植木枝盛文庫」が、一九二〇（大正九）年には滝本誠一の書籍を三宅利平理事が買い上げて「三宅文庫」として図書館に入った。その他、徳富猪一郎の依頼

で大原孫三郎が買い上げた「山路愛山文庫」は、異色の文庫として図書館の蔵書に加えられた。そのほか、図書館の「上野文庫」「ケリー文庫」、人文科学研究所の「近藤栄蔵文庫」「水谷長三郎文庫」「小沢三郎文庫」等コレクションの数は多い。また、クラーク記念館の「徳富文庫」は、一九五七（昭和三二）年蘇峰の没後、晚晴草堂の徳富蘇峰の蔵書が一括して同志社に寄贈された貴重なものである。下村孝太郎の化学関係の図書は社史史料編集所に寄贈され、中瀬古六郎元教授、牧野虎次元総長、大塚節治元総長などの手沢本も図書館や社史史料編集所へ寄贈されている。同志社関係文書類では、波多野培根所蔵文書、中瀬古六郎所蔵文書が社史史料編集所に寄贈されている。これらのスペシャル・コレクションは、寄贈者の好意に感謝する意味においても、至急全部のカタログ刊行を行うべきであろう。またこれらの中には書き込みその他、学問的にも自筆本的価値においても特別に保存すべきものがあるので、これらは稀覯本扱いにする必要がある。

現在、図書館の蔵書総冊数は七〇万冊を大きく越えているが、そのうち三〇万冊は中央図書館に、四〇万冊は各学部研究室ならびに研究所等に分散架蔵されている。さらに現時の学際研究の側面から見ても、たとえば同志社大学の場合、図書の管理の在り方は、解決に急を要する課題のひとつであろう。さらに学際研究の場合、同志社大学図書館では学術雑誌及びそのバック・ナンバーをあまり扱っていないので、これは別個に学術雑誌センターあるいはカタログ化によるサービス機構等を是非考えなければならぬ時期に来ているものと思われる。

その他、同志社へは有志からの指定寄附が年ごとに増加し、感謝の限りであるが、これらは寄附者の意思もあって殆んど全部奨学金の基金にふり当てられている。これも極めて有効であるが、その外に一般の学生・生徒も利用する図書館図書費に使用するのも、外国の大学の例を見ても、さらに有効と思われる。



地階を主体とする同志社女子大学図書館

記録資料の 第三は、同志社が保有する文書・記録・遺品・文化財及整理と活用 び諸研究資料の整備とその利用の問題である。一八九三

(明治二六)年にクラーク神学館に設置された宗教博物館などは、神道・仏教・天主教・雑宗(儒教や道教等)に関する文献や物質資料を収蔵し、日本及び世界の諸宗教の比較研究や宗教教育に活用されようとしたが、この構想はついに大成しなかった。

大学・女子大学の各学部や同志社諸学校には先学の遺した諸研究資料や物的資料で庫中に眠っているものが数多くあるが、もし総合資料センターに類する施設ができれば、これらは何れも目の目を見ることがとなる。

社史史料編集所は、同志社の公文書を中心に同志社関係の諸記録を、新島以来の原史料を含んで、ほとんど完全な姿で保存管理している。これは今回の同志社百年史編集を機会に分類・整備し、同編集所は名実ともに同志社の史料館となった。この機会に全同志社の記録を後世に遺す機構を確立すべきであろう。諸学校は原本ないしは写本を必ず一本はここに収め、全同志社の記録を後世に遺す機構を確立すべきであろう。

同志社は古文書学や文献学の対象になるような古文書・古記録の原本はおろか影写本も持っていない現状である。しかも現在、これらのものを取扱う管理機構は図書館にもどこにもない。総合資料センターの一環としての文書館の付設もまた急を要する宿題の一つである。また、同志社の先輩は全国の、主として組合教会で、牧会活動を

していた人たちが数多くあり、教会文書はこれらの人たちの手で多く遺されている。これら教会文書の保存と採訪収集は、日本のキリスト教や教会史の研究には極めて重要なものであって、今のうちに収集しなければ、極めて近い将来に手遅れになるであろう。さらに同志社の諸先輩の地域社会での社会運動や農民運動、さらには社会福祉事業等の実践に関する文書資料の収集整理も行わなければならない。総合資料センターの一環としての文書館は、同志社にとっては自歴譜の執筆と保存にも相当するものといえよう。勿論、その場合、新島先生遺品庫は、この古文書館の大黒柱として今すぐにも稼働できる存在である。新島先生遺品庫は一九四一（昭和一六）年に創建されたものであるが、何分狭隘であり、それは全くの倉庫にしかすぎず、作業室もない。現在では、展示室としての機能は発揮すべくもない状態である。

考古学陳列室および収蔵庫は、新町校地と田辺校地との二カ所に設けられ、研究と教育の場として日夜活動中である。加藤延年コレクションが岩倉校地において収蔵されたままになっているが、これらも田辺校地における考古学陳列室兼収蔵庫の収蔵遺物に見られるような取扱いがなされて然るべきものと思われる。

同志社年表

(未定稿)

1979.3

同志社社史史料編纂所

『同志社年表』

現在、すでに田辺校地には、同志社国際高等学校の創設の事業が急速に進められつつあり、また大学の一部分の移転も計画されつつあるが、考古学陳列室や収蔵庫の施設とも相まって、この地に総合資料センターの設立を構想するわけにはいかないものであろうか。田辺校地が学際研究と総合資料センターの立脚点となることがあれば、これは同志社の新天地の開発とはいえないであろうか。



考古学陳列室（新町校地）

一貫教育

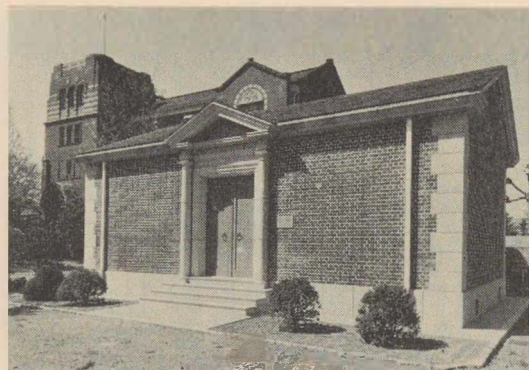
学校法人同志社は、「教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教を徳育の基本とする学校を経営し、もつて教育の実を上げることが目的」としており、「学校法人同志社寄附行為」第二条、同志社の各学校は幼稚園を含めて、この目的を達成するために設置されているのは言うまでもないことである。この限りにおいて各学校の間には統一性ないし一貫性があることは自明のことである。

振り返ってみるに、同志社英学校から始まって同志社女学校、京都看病婦学校、ハリス理化学校、同志社政法学校、さらに同志社神学校、同志社普通学校などの諸学校が分立展開されていったとき、どの学校がいちばん重い比重を占めるのか、基礎になるのかが問題になったことは事実である。

しかし、「基督教ヲ以テ徳育ノ基本トス」（『同志社綱領』第三条）ることを等しく同志社の「教育ノ業」とするというのが理念においては一致していたのであり、諸学校のいわば横系の緊張関係はほとんどみられなかったと言つてよい。

大学の発足が 明治末から大正期にかけて、原田助総長時代に専門学校令による同志社大学が発足（一九二二年）もたらしたもの
する段階で、大学と普通学校との間の横系の関係が緊張する。大学に重点をおいて展開する原

田の学校行政と、同志社教育の精神的基礎は、宗教性の稀薄化した大学ではなく普通学校にあるとする波多野培



新島先生遺品庫（竣工当時）

根の論理との衝突に、その一面がうかがえるのである（第三部第一章参照）。この問題は、両者のその後の去就に象徴されるように、解決をみないまま海老名正総長時代に継承された。大学令による同志社大学の発足（一九二〇年）は、学校制度のなかに占める大学と、その他の諸学校との比重の差を拡大していった。しかも海老名時代に、各校の経営を財政的に独立させる形態が採用されたことは、同志社の教育上の統一性と一貫性に財政を超えた困難な問題を課したのであった。

その後、第二次世界大戦を経過した現在も、同志社各学校の横系のなかで大学の比重が圧倒的に重い事実はあるをえない。戦後の大学の巨大化が一層拍車を加えることになったのであるが、同時に、学校制度上の位置が上位にあることが相乗的にそれを増嵩させているのである。

同志社教育の原理

こうした状況のなかで、今後の同志社がいかにあるべきかを考えるとき、第一に確かめられなければならないのは、断わるまでもなく比重の問題ではなく、同志社の教育原理である。それがキリスト教を徳育の基本とする宗教的人格形成の教育であることは、創立者新島襄と同志社の一世紀に及ぶ歴史が語ってきたところのものである。同志社の建物どれひとつをとって見ても、この理念に協賛する内外の人たちの浄財によって、ひとつひとつレンガを積むようにして造られてきたことである。日本の教育において、私学同志社が存在し寄与する理由は、教育の根本にキリスト教を置いて人間形成を行うことにあり、一貫教育の第一



大学の入試合格者発表風景（1975年ころ）

に目指すべきはまさにこの点である。その意味では、大学を含めて各学校が他に対して注文することではなく、各グレードにおいて同時、同様の課題としなければならないのは当然である。

教科課程上の連繋

第二に一貫教育という場合、教科課程上の連繋の問題が指摘できる。それが単なるカリキュラムの検討

ということであるならば、公立諸学校間のことと共通のことであるが、同志社においても住谷悦治総長の発意による研究会や、教職員組合の教研集会その他でもこのことがしばしば取上げられてきたのは、独自の体系を模索したからであった。しかしながら、中高が事実上六年制の学校として一貫したカリキュラムを立てうる条件を持っている女子中高と香里中高の他は、教科課程の実態についての相互理解さえも欠いており、各グレードおよび同グレードの学校間における一貫教育の具体性が現われていないのが実状である。各学校がそれぞれ自律性のもとに完成教育を目指し、その独自性を発揮することは当然であるが、同志社の教育原理をもっとも効果的に実践するためには十分検討されなければならない。そのひとつは、右の教育理念における一貫性をもつ同志社が一大総合学園として、単立の学校には期待することのできない多くの利点を発見できるはずであり、過去現在にわたる同志社教会、課外講演、体育行事、創立記念行事さらに社会的奉仕活動など、多くの共通の媒体が有効に機能してきたことも示唆を与える。

推薦入学制度

第三に一貫教育のひとつの手段として、同志社内の中学校から高校へ、とりわけ高校から大学への推薦入学制度にかかわる問題が、広く一貫教育の重要な一面として認識されていることである。そのはらむ諸問題は宿題とされながら、現在推薦入学は中学から高校へは卒業生の九九パーセント、高校から大学へは卒業生の九〇パーセント以上に達している。また、各高校の社内中学出身者は高校入学生の約八七パーセント、女子高校入学生の約八五パーセント、香里高校入学生の約七二パーセントであり、社内中学出身者が主流となっている。

他方、大学の社内高校出身者は入学生の約二二パーセント、女子大学では入学生の約五パーセントと少なく、大学レベルでは一般入学者が主流をつくっている。つまり、その比率は高校と大学では逆転しており、高校への一般中学からの新入生と、大学への社内高校からの進学生とはほぼ同じ比率になる。ただ両者が質的に異なるのは、前者が他府県を含む各校からバラバラに入学した者の総計であり、後者が等しく社内高校教育を体験してきた者たちであることである。したがって、その数は大学において影響力を発揮しようと思えばそれが可能な、あるバランスを取りうる割合なのである。もしその学生たちが同志社の一貫教育が目指すところの諸活動のコアになりうるとすれば、その意味は大きい。それが期待できなければ、この制度にはブレーキが掛けられることになるだろう。

母校同志社と旧師

第四に、それぞれの学校には生涯を同志社教育に捧げてきた教師が実に多い。また、寄宿舎が同志社教育で果たした役割とともに、いわばそうした塾風教育が、長い間同志社のひとつの伝統をつくってきたと考えてよいだろう。それは一面では、教師の転任が常態である公立学校と異なって、卒業生にとって母校は旧師とともにあることであり、同時に、卒業生自身を超えてその子供も、一族の誰彼もが同志社で同じ先生の教えを受ける可能性の多いことでもある。事実こうした例は想像以上に多い。そういう意味での一貫教育は、

同志社独自の価値体系を個人の生涯に及ぼすものとなり、かつ世代を重ねて厚みをもったものにしていくであろう。以上、同志社の一貫教育に関して、その理想や現況を四点に整理してみた。次に論じられなければならないのは、再び同志社の教育原理を確かめあうところにもどって、それを阻害しているものに恐れずに目を向けることである。

一貫教育を 第一の問題は、すでに「キリスト教主義教育の問題」の項で述べたことと大部分は重なるから重複は避ける。海老名総長時代に導入された各学校の財政の独立化は、第二次世界大戦後もっと徹底した独立採算制を取るようになった。これは、一面意識のうえでも各学校を分散独立させ、悪く言えばそれぞれの自家のためにガードを固めさせてしまうというようなことにならなかっただろうか。そして、いわば教員の「人事の独立採算化」ともいうべき状況をもたらし、現状では校長・教頭を高い視野に立って広く学界・教会・教育界から求めるといふようなことは不可能と言つてよい。たとえ各学校にはそれぞれすぐれた教師を擁していたとしても、閉鎖的自給化の弊なしとは言えない。一般教員についても、前述の「母校同志社と旧師」の問題のメリットと裏腹のことであるが、少なくとも同志社の規模において人事の交流がなされなければならない。現状では、かつての交流の遺産は必ずしも本質的なところで果たされてはいなくて、名目的な場での細い、薄い交流によつて保たれているに過ぎない。

第二の問題は、比較的容易と考えられる英語、キリスト教学(聖書、宗教学)、体育などから実施のプログラムを検討し始めるべきである。そのなかには担当教員を一定期間それぞれの学校の間で交換する計画があつてよい。教科課程の内容と実践についても相互の理解がえられるだろうし、そのことによつてそれぞれの段階に必要なディシプリンが認識されることになるだろう。このプログラムは必ずしも講義を持つという形だけでなく、学問的分野に限らず、スポーツとか芸術の分野あるいは趣味のレベルにおいても、そのプログラムにかかわる機会を設け、中

学・高校・大学の教員の接触をとおして共通項を拡大し、各学校を超えて同志社全体が活発なひとつの対流圏にならなければ、一貫教育の実は挙げられないだろう。相互に知らないで、どのようにして「一つの目的」を追求していることを確かめられるだろうか。

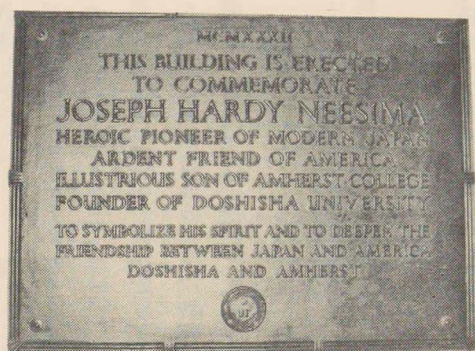
戦前戦中の同志社中学―同志社大学予科―同志社大学という進学コースにおいては、一般入学生として予科に新たに入学する者がやはり七〇八割を占めた。しかし、大学に関してはその予科と同志社高等商業学校、同志社専門学校および同志社女子専門学校からの進学者でほとんどが占められていた。また、女子部では、女専の生徒の半数前後が同志社高等女学部からの進学者であった。そして学力は府県立高等女学校からの入学者に優るとも劣るものではなかった。

社内校の推薦入学制度の問題は、キリスト教主義の人格形成と学力についての適切なディシプリンを経た者たちであるならば、大学における比率をさらに高めるのが望ましいことを物語っている。大学にとっても高校・中学にとっても、安易な進学者数確保の手段としての推薦制度に墮させてはならないことは言うまでもない。

同志社の教職員の学者、教育者としての意識の培養と相俟って、同志社において以上のような一貫教育を実体化させていくことが肝要である。

国際交流の問題

国際主義は同志社の重要な伝統の一部であった。一〇年にわたる新島の海外留学と、アメリカン・ボードとの関係がその端緒を開き、不幸な太平洋戦争の時期を除いて、同志社はアメリカとの接触を失ったことはなかった。い



アーモスト館内新島タブレット

なその戦争のさい中でさえ、同志社に対するデントンの情熱はあえて彼女をこの国にとどまり続けさせたのだった。逆に湯浅八郎はその期間、自己の意志により敢えてアメリカにとどまった。両者の情熱には共通した一面があったといわざるをえない。

新島の死後、同志社はアメリカン・ボードと対立する。それは徐々に富国強兵策の波が高くなってきた日本にあって、一箇の私立学校を維持していくために起こった必然的な葛藤であったともいえる。同時にそれは独立精神の発揚でもあった。西原清東、片岡健吉、下村孝太郎ら歴代社長の努力によって両者は和解に達し、原田社長は海老名総長と並んで同志社の最も国際的な総長の役割を演じる。その背後には原田が日本の組合教会の代表たりうる人物であったという事実も存在した。アーモスト大学における海老名のアピールはアーモスト大学から同志社への学生代表派遣の制度となつて結実し、アーモスト館贈呈へと発展する。

第二次世界大戦後の国際交流はめざましいものがあつた。アメリカン・ボード（のちのUCBW）。アーモスト大学。カルトン大学。アメリカ研究夏期セミナー。ハーヴァード・エンチン研究所。アソシエイティッド・京都プログラム（AKP）。大学と女子大学の在外研究員制度。大学の訪問教授ならびに訪問研究員制度。大鷲ハウスとゲイン・ハウス。アーモスト館とハワイ寮。それぞれの歴史が同志社の国際交流の歴史を構成してきた。新島時代のアメリカン・ボードとの関係は、それなしには同志社が成立しないくらいに密接であり、同志社は財政的に人的に、あまりにも多くをボードに負うていた。創立後百年を経た現在では、財政的な面での依存が徐々に後退してい



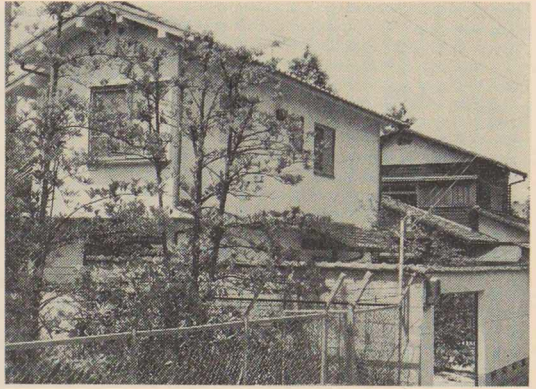
AKPの学生たち（留学生センターにて）

き、代って学術的、教育的な面での対等の交流が前面に出るようになってきた。喜ぶべき傾向である。しかし国際交流には今後いろいろな問題がつきまとっていく。それを次に述べてみよう。

国際交流の 第一に、国際交流は国際化した世界にあつてはよいことであるのみならず、元来学問は国際性をお方向付け びてこそ本物であり、さらに国際主義は高度に教育的な要素であると判断されう。それ故同志社

の国際交流はますます展開させていくべきである。しかしながら、現在の同志社が専任の教職員一二三名、学生生徒園児数二万七三八九名を数える巨大な共同体であることを思うとき、国際交流にも何らかの方向付けがなされる必要がある。大学の国際交流委員会はほぼそのような目的をもつものだが、それは大学内だけのことであり、同志社全体としての方向付けを考える必要がある。アーモスト大学との交流を例にあげるなら、近年ますます交流のための費用の等額負担の原則が打ち出されて効果をあげている。また同志社に派遣されている宣教師については、一人につき年額一七〇万円を同志社から関係団体への寄付のかたちで負担している。このようなことは明治期には考えも及ばなかったことである。

同志社としての方向付けを考える場合、従来からの海外諸団体との関係は当然保持されるべきである。問題は新しい国際交流に関して起こる。同志社が京都という千年の都に位置しているために、多数の外国人にとって京都は最も魅力のある町である。すでにアメリカの数多くの大学から学生



グイン・ハウス（岩倉大鷲町）

を夏期に、あるいは年間を通して派遣したいという申し出がなされてきた。これについては、現在スタッフと宿舍の関係からそれをすべて受け容れることは不可能なのでこれを断り、現状はアソシエティッド京都プログラム（AKP）への参加をすすめている程度である。しかし、これとてもそれに乗出す意欲的な教員若干名があり、宿舍の問題さえ解決されるならば、同志社としての独自の国際部的なプログラムを持つことは不可能ではないであろう。

留学生および

研究者の受け容れ

第二に、同志社は従来、欧米とくにアメリカにのみ

顔を向けてきたという事実是否定できない。そのことを恥じる理由は全くない。しかしながら、同志社大学の教育機関としての優秀さが国際的に評価を受け、海外からの留学希望者がある場合には、これに対して現在よりも門戸を広くすべきであろう。一万九一五八名の大

学生数に対し、二二名の留学生数というのはあまりにもその割合が小さすぎる。大学院の場合でも三八七名中九名という割合である。留学生には入学試験を課さない。その代りはじめの一年間の成果を見て正規学生に繰入れるかどうかをきめる、という制度さえ導入すれば、もっと容易な、のびのびとした留学生の将来が始まるであろう。

第三に、大鷲ハウス、グイン・ハウスの二棟では、海外からの学者を招聘する宿泊施設として十分だといえない。京都大学の近衛ホールの規模は望まないとしても、少なくとも、あと二、三軒、宿泊施設を準備したいものがある。

外国語教育の充実

第四に、同志社における外国語教育の総点検と、殊に英語教育の充実を切望する。同志社は従来、あまたの英語の達人を輩出してきた。しかし現在の英語教育は、実用面からするとまだ不十分である。

第五に、最も重要なことを述べたい。本来に意味のある国際交流をするためには、同志社が研究機関として、教育機関として一流であることが先決だということである。どれほど高額な奨学金を外国人の研究者や学生のために準備しても、同志社に世界的学者がいない、同志社の研究施設が貧弱であればとうてい魅力を感じないであろう。外国人のための奨学金は二の次であって、先ず同志社の教員たちが続々と現在の水準を抜いて、さらに一層の世界的研究業績をあげていくならば、それが日本語で発表されたものであっても、国際交流のための最も重要な契機となるであろう。

外郭団体

『同志社校友会名簿』（昭和五二年版）の第一ページには、英学校余科第一回卒業の永眠会員一五名を載せている。海老名弾正、不破唯次郎、市原盛宏、金森通倫、加藤勇次郎、小崎弘道、宮川経輝、森田久萬人、岡田松生、下村孝太郎、和田正脩、山崎為徳、横井時雄、吉田作弥、浮田和民である。その後新島襄在世中の各学校卒業生には、原田助、堀貞一、大西祝、湯浅吉郎、村井知至、安部磯雄、松浦政泰、村田勤、麻生正蔵、丹羽清次郎、柏木義圓、加藤延年、中瀬古六郎、山中百、波多野培根、久永機四郎、三輪源造らがある。これらの圧倒的な人材に、足利武千代、今泉真幸、深井英五、柏井園、伊庭菊次郎、牧野虎次、水崎基一、日野真澄、上谷統、野村義太郎らが数年

のうちに加わる。創立期の校友会は彼らのものであり、一八九三（明治二六）年には徳富猪一郎、元良勇次郎、中島力造らが入会している。

校友会と同志社

明治大正期の校友会のいわばエンジン部分は、これら同志社初期の人脈中に見出され、ある意味では同志社そのものであったと言っても過言ではない。事実、同志社史は彼らを無視して語ることはまったく不可能であることは、この『百年史』に見る通りである。彼らは新島襄への敬愛と母校の帰趨への祈願とに支えられつつ、その担い手としての責務を自らに課そうとしていた。だから、特徴的なことに、通常の同窓会が第一に揚げるであろうところの「会員相互の交誼」というような親睦のための規約条項は、同志社校友会規約には長い間見られなかったのである。むしろ、「同志社社長（後に総長）の選挙、学校組織の変更、其他重大の事件に関し社員会より諮詢を受けたるとき其意見を提出し又諮詢を待たずして意見を提出するものとす」ることに最大の意味を付していた。そして、意見は相談を「受けたるとき」よりも、しばしば「待たずして」出され、その影響力は教職員一般はもちろんのこと社員会（理事会）さえも凌駕していた。事実、新島没後の社長（総長）はことごとく校友会の推挙によらないものではなく、また、校友の卒業生総数は明治末にようやく三ケタを出るかという数にすぎなかったが、同志社の財政面でも卒業生を中心とする維持会が大学設立募金などにおいて果たした役割は絶大であった。要するに、校友は同志社の管理運営にきわめて強い力を持っていたわけである。記念諸事業は同志社当局より積極的でさえあった。

戦後の

校友・同窓会

こうした形態は徐々に変容しながらも、第二次世界大戦前までは、基本的にはその延長線上にあったと言ってよい。これを根底から覆したのは戦後である。

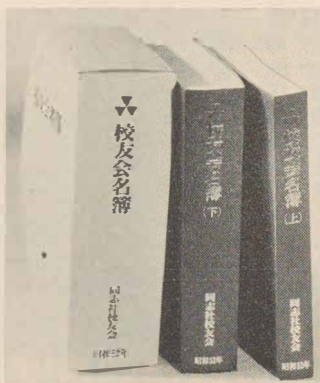
まず、極度のインフレーションは基本金を低落させ、校友会の財政面での経常的な貢献度は零に近くなってしま



1978

同志社同窓会名簿

『同窓会名簿』(1978年版)



『校友会名簿』(昭和52年版)

う。第二に、私立学校法に対応して、一九五一(昭和二六年)「学校法人同志社寄附行為」改訂があり、校友・同窓の同志社の管理運営に占める地位が後退したことである。これを『同志社九十年小史』では、校友・同窓の「従来の至純な考えを少なからず冷却せしめた」と指摘している。第三に、戦争末期の、断絶と言ってもよい程の一種の空白期の後、同志社の急激な学生生徒の増加は、適切で新たな対応策も整わないままに、明治以来累年の校友数一万そ

こそこを一挙に一五万五四七名(一九七九年三月末現在、うち永眠者六〇〇三名)の膨大な団体に変貌させたことである。女子部の同窓会も二万八二一五名(一九七九年三月末現在、うち永眠者約一四〇〇名)を擁するに至っている。これらはたしかに従来の同志社と校友・同窓の相互の緊密な関係を変えてしまったし、校友会・同窓会そのものの巨大化にともなう有効な組織性の喪失をもたらしたことは否めない。明らかに変質したのである。

いま、もっとも必要なことは、この変化の事実認識を徹底させることである。

そういう意味では、いまやパーソナルなつながり(それは大切であり、究極的にはそこに回帰すべきだが)に依存すべきではなく、パーソナルなものへの郷愁をいったん捨てて、むしろ機械的に作動しうる新しい非人格的なシステムを創出することである。そうしたシステムを欠いた校友会の中央組織は、まったく合法的で正当の組織であったとしても(いまやむをえずそうしているのではあるが)、校友中の極小部分でしかないのである。その組織がい

かにパーソナルな結合力をもち、かりにいかにアクティヴであったとしても、システムに乗りにくい機構しか持っていないければ、それは永遠に一小部分にとどまらざるをえず、むしろ、それがアクティヴであればあるだけ、校友会ではなく特定の集団になっていかざるをえないだろう。したがって、急がなくてはならないのは巨大化にふさわしい近代的なシステムの創出である。

血の通う

組織づくり

そのための基礎的作業として、たとえば次のような方法が考えられる。まず、アラムナイ・レコー・ド・オフィスの設置である。ここではアップ・トゥ・デイトの会員名簿の整備をすべきである。一人ひとりのステイタスはもちろん、改姓もつかめず、生死も不明な、ほとんど卒業時のまま放置せざるをえない名簿が何回刊行されても意味はない。正確に記録されないでどうして帰属意識がもてるだろうか。また、名簿では物故者を氏名のみにするのは致し方ないとしても、このオフィスには、少なくとも一人一枚のカードにその生前のキヤリアが記録されていてほしい。それは新島襄への霊的な報告の台帳となるだけではなく、卒業生一人ひとりにとって励ましになるだろうし、後輩たちへの良き贈物になるはずである。

第二に、それを実現させる方法のひとつとして、いま活きて機能している校友・同窓にかかわるすべての組織に精神的援助を与え、それらの育成に努めることである。大小各種の機関を活発にし、校友会・同窓会本部はそれらの担ぐ御輿の位置に自らを置くべきである。たとえば、彰栄会、中学同窓会、高校同窓会、ゆかり会、紫翠会、樹徳会、同経会、英文学会、同工会、家政学会等々。かりにそれらができるから校友会・同窓会が不活発になるというような感覚があるとすれば、自ら首をしめることになる。加うるに、ゼミ、クラブ、同好会、クラス会、寮など単位個々の小回りもきき結集力ももつ小組織を総合化し統合することができれば、おのずからアップ・トゥ・デイトなものに脱皮できることになるであろう。



同志社創立百周年記念リユニオン
挨拶する千宗室校友会会長

以上を吸収的な側面とすれば、本部の側からの遠心的な働きかけとして、粗い刷毛でなでたようなニュースではなく、母校の最高の密度と最新の豊富な情報を提供することが必要である。同時に校友・同窓の諸活動の消息を克明に情報化することである。『同志社タイムズ』は校友・同窓を繋ぐためのメディアとして一層の脱皮が肝要となるだろう。『同志社同窓会報』にはもっと多くの宿題があるはずである。現状では不十分であり、そのために読者を魅きつけることも、拡張することも困難である。

次に必要なことは、卒業生たちが母校に還りそこにリユニオンのための場を設けることである。たとえば、早稲田大学の大隈会館程度の規模と機能をもったものがほしい。新島会館、女子部の同窓会館などはそうした点からすればまことに貧弱だし、校友・同窓の一般のものにはなりにくい。また、どれだけの卒業生がその存在自体を知っているだろうか。そうした常設的施設と同時に、時間的に区切ったリユニオンの時を、たとえば年一回創立記念週間中に、月一回特定の日に、そしてまた週一回チャペル・アワーなどに合せて機会をつくってみてはどうか。かつて女子部では、四月二一日の創立記念式には、卒業後五〇年の者を全員招待してその席で表彰していた。とにかく、母校と校友・同窓の接触、校友・同窓相互のふれあいの機会と場を多くする配慮が必要である。

以上のような基礎作業のうえに構築される新しいシステムをもちえたときに、始めて校友会・同窓会は再生し、パーソナルなものも取り戻せるだろう。もしそうでないなら、そこで企画される事業、母校へのかかわり方への

熱意は、役員とその周辺でしか機能せず、したがって、あたかも片肺飛行のようにそのエンジン部分には無理を生じ、「冷却」したのをあたたく包むよりは自己崩壊しかねないだろう。巨大化それ自体は困ったことではない。否むしろ一大社会的勢力として然る可き数をもつことは現代社会において有効な条件なのだ。困難だが、巨大化した組織にその数にふさわしい実力を引き出さすために、これらはまず取り組まなくてはならない課題なのである。

財政基礎の問題

同志社の財政基礎の経緯は大きく分けると、新島在世中の「同志社」の時代、一九〇〇（明治三三）年に始まる財団法人「同志社」の時代、一九五一（昭和二六）年に始まる学校法人「同志社」の時代に大別することができる。さらに第三期の学校法人「同志社」は、一九五四（昭和二九）年以降、同志社諸学校の独立採算制の時代だといえよう。

創立当時の財政

「同志社」は一八七五（明治八）年一月二十九日に新島と山本覚馬によって創立され、デイヴィスがこれに協力している。しかし「同志社」のファンドは、アメリカン・ボードの寄附によるもので、その管理運営はラーネッドがこれに当たっていたものと見られる。このような「同志社」のファンドは、名義上は日本人名義になっており、ラーネッド自身もそれはよいことであるといっているが、新島在世当時にあっては、外国人の財産所有が法制的に許されていなかったことを思うなら、極めて当然であり、また一面においてはやむを得ないことであつたらう。

一八九九（明治三二）年に外国人の永代借地権が法的に設定されて以後は、同志社においても右のような状況に変



湯浅治郎

化を生じたことはいうまでもない。新島在世中の「同志社」の収入は、アメリカン・ボードからの寄附が主なものであって、新島の手元にはそれ以外の資金はほとんどなかったと推定され、同志社宣教師の給与も、すべてラーネッドによって管理運営されていた。しかし新島の給与等がどのようにして入ってきたのか、また各寄附がどういふふうにして入ってきたのか等の問題に関しては、これを明らかにする記録や文書、あるいは予算規模についての統計表に類するものも現在残されていない。このように「同志社」の運営管理が財政的にどうなっていたかについては明治二〇年代になってもあまりはつきりしていない。「同志社」の財産は、資産として明確な法的規約によって管理運営されるような時期ではなく、だからといって新島やラーネッド個人のものでもなかった筈である。明治の早い時期における「同志社」の性格の不明瞭さは、外国人が同志社へ建物等を寄附しようとした場合、最大の障害となっていたことは確かである。

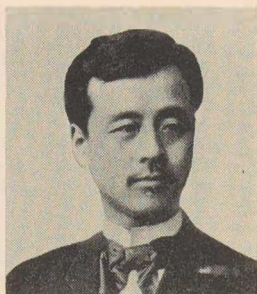
新島はこのような「同志社」の無性格性の改革には早くから苦心していたことはいうまでもないことで、一八八三(明治一六)年には、「社則四カ条」を設定し、一八八八(明治二一)年には小崎弘道・宮川経輝・湯浅治郎・大沢善助を新たに社員すなわち理事に加えて「同志社」は大きく前進し強化された。このように強化された同志社を背景に新島の「同志社大学設立の旨意」がこの年に公表されたのであった。小崎と宮川は新島門下の牧師であり、大沢善助は京都の実業家であったが、ことに湯浅治郎は新島と同郷の実業家であり、これより「同志社」の管理経営は事実上、湯浅治郎が専ら担当するところとなった。このような経緯の中で、同年九月に「同志社通則」が湯浅治郎、徳富猪一郎らの手によって起草され、その第一章「綱領」は永く同志社の管理経営の原則となった。

アメリカン・ボードと同志社との関係、あるいは対立には、一つには教学問題があり、もう一つには財産管理の問題があった。財産管理の問題についての結論は、湯浅治郎が総元締めとなって行なった資産管理委員会の形成であった。アメリカン・ボードと同志社の対立、ことに財産管理の問題についてその衝に当たったのは湯浅治郎であり、同志社の資産管理委員会は湯浅治郎を中心に数人の理事によって運営され、この時期に同志社は財政的にアメリカン・ボードから独立することができたと見るべきである。

同志社財団寄附 一九〇〇（明治三三）年五月三十一日、「同志社財団寄附行為証」が登記され、財団法人「同志社行為証登記以降 がここに誕生し、財政的に同志社は第二期の時代に入る。この年は新島が死んでから丁度一〇

年目に当り、その間、新島や湯浅治郎によって固められた同志社の財政的基礎が、ここにおいて一応の結末を得たわけである。財団法人「同志社」は、民法によってその公共性が確立され、「同志社」の無性格さはここに解消する。民法は一八九〇（明治二三）年に財産篇などが公布されたが、いまだ時代に適応しないということで施行が延期され、一八九八（明治三一）年に至って改正のうえようやくにして施行された。財団法人「同志社」は明治三十一年の民法に依拠したわけであるが、永年に渉る日本の民法典論争の経緯は、そのまま「同志社」から財団法人「同志社」への経緯でもある。財団の在り方についての苦悩は、なにも同志社に限ったことではなく、この期日本の近代化の歩みの中に体験された日本全体の苦悩でもあった。

第一期の「同志社」、第二期の財団法人「同志社」は、その性格は必ずしも同じではないが、一種の財団である点においては共通している。従って財団である限り、ファンドすなわち財団の基本金が用意されていなければならぬ。「同志社」のファンドはアメリカン・ボードの寄附金によるものであるが、財団法人「同志社」の基本金は新島が一生かかって手に入れた同志社所有の土地であった。『同志社五十年史』にその統計表があるように、今出川



小西増太郎

キャンパスを始め、前橋・新潟・鳥取・宮崎等々の各地に多くの同志社所有の不動産があった。これは主として新島の理財上の見識による方針であって、これが新島以後の同志社の発展に大きく寄与したことはいうまでもない。

湯浅治郎や後の小西増太郎は、第七代総長原田助、第八代総長海老名弾正の時代にも同志社の財団管理の衝に当り、明治末年から大正、昭和の初頭にかけて同志社の内部充実に貢献した。原田時代と海老名時代は、同志社の発展飛躍の時代である。それにはそのための資金を多く必要としたことはいうまでもない。そのために利用され充たされたのが、新島時代に蓄積された室町や鞍馬口等の土地であった。

原田・海老名 総長時代 原田時代には専門学校令による同志社大学が一九一二（明治四五）年に認可されて発足し、海老名時代には大学令による同志社大学が一九二〇（大正九）に認可されて発足する。原田時代から海老

名時代の初めにかけて新島時代以来の同志社所有の土地が整備縮小され、これが同志社の拡張と充実に充当された。原田時代の専門学校令による大学の設立には三〇万円の供託が必要であったが、その資金作りには校友発起による同志社維持会が当り、海老名時代の大学令による大学の設立には六〇万円の供託が必要であったが、これも再建された同志社維持会が当っている。その時にはともに資本金は土地ではなく、公債・社債等のいわゆる有価証券を買入れてこれに当てている。また同志社女学校高等女学部にしても専門学部にしても、同窓会の資本金づくりはまことに熱心であった。このようにして財団法人「同志社」の基本金は、原田・海老名時代には有価証券に切り換えられたが、その財政基礎になったものは新島時代の同志社所有の土地であった。またこれを親身に援助し主導したのが校友会や同窓会の資金づくりであったことは忘れてはならない。

財団法人としての「同志社」は、いずれの場合においても財政的基礎は基本金でなければならなかった。しかしこのような基本金の原則が動揺して学生生徒の授業料に頼らなければならないようになるのは、第一次世界大戦以後の一九一九（大正八）年ころから始まる大戦景気とインフレによるものであった。全国的なこの風潮には同志社も抗しきれず、大学の一年間の授業料は五〇円、中学が四〇余円のように、急激な授業料値上げが行われている。しかし当時にあつては、授業料に関するかぎり、国立諸学校といえども私立とあまり開きはなかった。かくて敗戦の時期まで、同志社は財団法人である限り基本金は名実ともに存在した。

ところが戦後になって事態は急激に変動し、猛烈なインフレと敗戦の後遺症は私立学校の基本金を無意味なものにしてしまった。

学校法人同志社 一九五一（昭和二六）年私立学校法に依拠し、「学校法人同志社寄附行為」による学校法人「同志社の時代」社」が誕生した。学校法人は一九四九（昭和二四）に制定され、施行された「私立学校法」に依拠

するもので、教職員にも学園の自治に責任を持たすため評議員や理事に就任することを規定している。学園自治の責任とは、第一に教学、第二に財政に関する教職員の責任を意味する。このような法規が「私立学校法」の骨格であることは、それ以前において、ことに戦前、戦中においては学園の自治の責任が教職員に課せられることの十分さを物語るものと受けとれる。その証拠に、同志社においても、一九二五（大正一四）年には校友・同窓・社友ら五〇人で評議員会を結成し、これが理事選出の母体となっていた。そのために教員は校友の一員として評議員にはなり得ても、理事にはなれなかったわけである。

同志社では教職員が理事になることができるようになったのは、「私立学校法」の公布の一年前の一九四八（昭和二三）年のことであつた。これは決して遅きに失するということにはならない。むしろ教職員が学園自治の責任あ

る地位に就くことがなかったわが国学校行政の後進性こそ問われなければならないと思う。周知のように学校法人「同志社」にあっても、一九五一年以来、総長・理事などの役職は届出制となり、国家の干渉を受けないことになっている。学園の自治の中で占める財政基礎の問題は、決して教学の問題より軽いということにはならない。

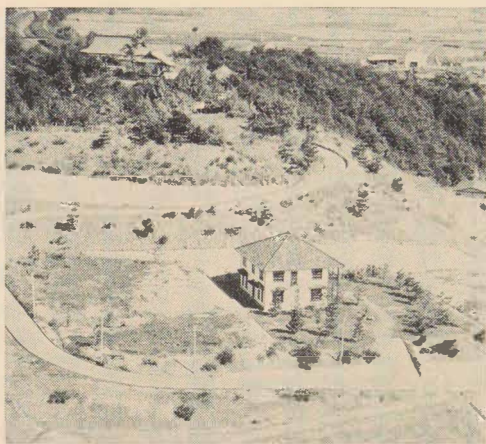
困難な諸条件と

打開の方途

かくて戦後の学校法人「同志社」にあっても猛烈を極めるインフレと社会混乱の中で、かつての「同志社」が当面した問題は、第一に学費に財政の基礎を置くこと、第二に一九四八（昭和二三）年ころ以降における教学施設の拡充にともなう施設拡充費の調達、第三に学債及び寄附金の募集や私学助成金の獲得等であった。

私学が基本金を持たない「学校法人」の制度下にあつては、学生生徒の納入する学費が主要な財政の基礎であらざる得ないことは冷厳な事実である。かくて周期的に、しかも短い間隔で学費値上げが繰り返され、ことに私学の場合、それはいつも累積赤字の解消には至ることのできない当該予算年度の赤字防止の、その場逃れの予算措置にしか過ぎなかった。このような経緯の中で、「私立学校法」は、学園の自治の責任を教職員に課しているが、基本金に替えるに学費をもって財政基礎に充当する現在の「学校法人」体制は、構造的に学園自治の範疇を教職員と学生徒に拡大しなければならないわけである。一九五四（昭和二九）年に至っていわゆる独立採算制ということ、大学・女子大学・高校・中学など諸学校は財政的に別個のものとなつてしまった。そこで、たとえば大学の場合、学費値上げは、ときには学部レベルの問題ともなりかねない情勢を招き、学生はまた、事前の諒解を要求するに至った。これは学校法人「同志社」の現状であるとともに課題の最大のものの一つであろう。

第二に一九四八（昭和二三）年ころ以降に始まる教学施設拡充及びそれにともなう施設拡充費の問題である。同志社の質的量的拡充は単に同志社のためというようなものではなく、同志社の学校法人としての公共性の貫徹という



田辺校地の一画（移築した元第二寮）

問題に関係する。この時点で建設勘定という発想が再度現実のものとなり、学校法人「同志社」諸学校がそれぞれの仕方での問題にとりくみ、また現在も田辺移転の問題が日程に上ると同時に論議の対象となりつつある。

第三の学債及び寄附金募集や私学助成の問題は、学校法人「同志社」の公共性の問題とかわりながら、他方では、学費の問題や教学の質的・量的、あるいは精神的・物的両側面の問題とも密接に関わり合った複雑な問題である。

同志社の学債や寄附金収入は予算規模の上からは三〜四パーセントに当り、私大連盟の発表した全国平均の七〜八パーセントに比較すると約半分に過ぎない。学債や寄附金は「学校法人」同志社が果たす公共性に対する協賛という立場からすれば、今後さらに努力すべき側面といわなければならない。

私学助成の現況は、大学や高校・中学によってまちまちであるが、大学は国庫からの助成であり、高校・中学にあつては府県を通して国の助成が行われている。このことは私学が日本の教学に果たす役割が極めて大きいことを意味するばかりでなく、私学の役割を貫徹するには国公立との財政的格差を縮小することが社会的要請であることを如実に物語るものである。私学と国公立大学および高校・中学の学費の格差は、近代社会にあつては市民の自由平等の原則に反することといわねばならないが、明治以来の積年の慣習と旧秩序がこれを阻害してきた。近年、私学の一致した見解と要求と、日本の市民社会からの要請と理解と、この両側面からの社会運動によって次第に向上

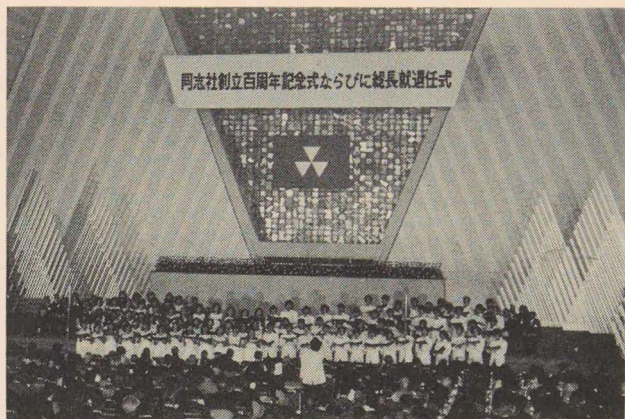
しつつあることは喜ぶべきことである。この際、国会で表明された私学財政の五〇パーセント助成達成の原則を、是非とも私学側の試算規模に準拠して完全実施されたいものである。同志社大学の場合をいうならば、本学の試算規模では一九七七年度現在、經常勘定支出の二〇パーセントにも達していない状態である。

以上、同志社百年の財政基礎の問題の経緯を反省して見ると、それぞれの時点において総長・理事・校友など多くの先輩が生命がけで問題の解決に努力し、その努力と解決策は同志社の良心に恥ずるものでないという感を深くした。同志社百年の現時点に立つて思う時、この問題もまた、同志社百年の歴史はわれわれにまことに大きく且つ重い課題を荷担せしめていることに思いを致さざるを得ない。

その第一は、学校法人には収益事業が許されているということである。同志社の収益事業はすでに組織として活動しているが、構造的に合理化するとともに、たとえば海外のユニバーシティ・プレスのような、学校法人「同志社」でなければ出来ない文化的収益事業で収益を上げることが不可能であろうか。

その第二は独立採算制の弊害である。現在の社会情勢下にあつて、財政的にはやむを得ないにしても、教学面まで「独算化」することは新島以来の同志社の良識と伝統にもかかわる問題で、これは早急に手を打たなければ、取りかえしのつかないことになるのではなからうか。現在同志社がかかえている課題は、財政面にかかわる比重が多くなる場合大であるとはいえ、永い目で見るならば、それは教学の問題であつたということが、いつの日にか明瞭になつたというのでは、もう遅いのではなからうか。法人理事会のリーダーシップの問題や、田辺校地の課題等の解決は、全同志社の立場で勇気をもって、先輩の良識や熱意や生命がけの実行力に見ならうべき時ではなからうか。

もう一つの問題は、一般社会からも、校友や同窓からも淨財を受けるに足る同志社の公共性を顯示すべきであるし、また私学助成によって私学の独自性が損われるようなことのないよう留意することもまた、見逃すことのできない



創立百周年記念式（京都国際会議場）

課題のように思われる。

明日の同志社 学校法人「同志社」の現況と課題として述べるべき問題を目指して 題は、ほかに多々あるであろう。現況も将来の展望

も、樂觀を許す事柄よりも悲觀的な材料のほうが多いというのが実情ではないかとさえ思われる。

現在の同志社にとって、緊要な課題として受け止めるべきではないかと考えられるいくつかの基本的な問題について略述したが、以上で重要問題のすべてを網羅し言及しえたとは、もちろん思っていない。また、若干提起を試みた課題解決の方途についても、種々論議があるであろう。

ただ、ここでぜひ強調し、かつ期待を表明しておきたいことは、全同志社人が、同志社百年の歴史を見据え、現況と照らし合せながらそれぞれ課題を探り当て、その解決の方途をまさぐっていただきたい、ということである。問題は一同同志社に限られる事柄のみではない。わが国の教育機関が共通にかかえている問題もあれば、私立学校に固有の問題も少なくないであろう。解決のために必要かつ有効であれば、他の私学およびキリスト教学校教育同盟その他あらゆる教育機関とも、より一層提携をつよくして当たらねばなるまい。

そうした課題解決の方途の模索ひいては実践的努力もふくめて、同志社人ひとりひとりが、より望ましいと考え

る明日のキリスト教主義学園同志社を創造するために、ヴィジョンを語り合い、英知を結集する以外に、有効な打開の途はあるまいと思う。

同志社が創立されて百年。起伏の多い、苦難にみちた百年であつた。その苦難を打開し乗り越えてきた幾多の先輩たちの英知と献身は、時代的社会的状況はちがうにしても、明日の同志社を創造するうえにおいて、示唆と教訓と、そして使命感をもたらすはずである。

編集後記

「理事会記録」によると、一九七一（昭和四十六）年一〇月三〇日、秦孝治郎理事長から創立百年の記念事業の一つとして、百年史編纂の計画が提起された。しかし、実際に一九七五年の百周年に向けての諸行事計画は、一九七三年一月に発足した記念事業事務局がこれを担当し、同局は百周年記念募金募集、記念講演会・演奏会、百年展の開催、『同志社一〇〇年（写真集）』、『同志社——その一〇〇年のあゆみ——（写真集）』、『同志社——百年の歩み——（『京都新聞』掲載記事合載）』の発行など、各種の記念行事を行なったが、百年史編纂の計画は秦理事長が一九七二年一月、急逝したこともあって、ついに実現化する運びに至らなかった。

百年史編纂の基本構想の提出を上野直蔵総長から求められたのは、百周年記念式典もすぎて、一九七七年一月のことであった。総長の申し出られた条件は編纂の期間を三カ年で、というものであった。もとより百年史の編纂に当たっては、それに十分な日子を俟つことが理想的であるが、たとえ、十年の日子を与えられても、これが完璧を期することは保し難い。拙速は執るべきではないが、すでに百周年を経過して、今後なお十年を要するとは思えないと考えた。

そこで早速、百年史の編纂構想の検討に取りかかり、まず同志社の百年の通史を学内外の力を集めて、分担執筆の体制を執ることを決定し、そのために史料の調査ならびに整理を年内に整えるべく、同志社社史史料編集所を百年史編纂事務局として、その製蔵する文献・史料を抜本塞源的に整理し、各執

筆者の史料収集に応えうるように作業を開始した。社史史料編集所のこの準備体制作りは、一九七七年五月、河野仁昭主任を迎え、従来の松井全、竹内力雄の職員のほか、新たに臨時囑託の大学院生三人（沖田行司、露口卓也、柴田遼）をえて、本格的に進められた。ここに同志社襲蔵の各史料は五十年史編纂の時以来の大整理が行われ、その結果、未定稿ではあるが「同志社社史史料編集所文書分類表」（一九七九年三月）、「同志社年表」（一九七八年三月）が発行され、百年史の執筆、編纂の重要な手引きにすることになった。また通史編と相即した資料編の編集を進めることができるようになった。

こうした史料の調査、整理作業と併行して、百年史通史編の編纂要綱の検討も行われた。すなわち、六月に上野直蔵総長を委員長とする企画委員会が正式に発足し、企画委員には今中寛司（文学部）、杉井六郎（人文科学研究所）、北垣宗治（文学部）、宮沢正典（女子大学文学部）、園部望（本部）、河野仁昭（社史）が委嘱され、通史編は百年の同志社の歩みを五つの時代に分け、日本の近・現代の史的動向と照応させながら、かつプロテスト・キリスト教ならびに学校教育史の中で、その間に同志社に生起し、あるいは同志社が直面した重要な課題あるいは出来事を取りあげ、それぞれの時代に、新島襄以来の同志社の教育理念が曲折を経ながらも、維持・展開し、あるいは、またいかに新しい息吹きをもって再生されて来たかという、その辿った歩みを直視して、百年史を叙述するという方針が定められ、主題の選択が行われた。

そこでそれぞれの時代の主題に詳しく、関心をもっておられる方々を選び、史料に基づいて客観的に叙述するよう執筆をお願いすることとし、一二月二六日、各主題の執筆者の参集を願い、一九七八年九月末日に原稿を提出して頂くことになった。

一九七八年秋から、提出原稿を通読し、編集作業がはじめられた。その間、企画委員会において、全体的な統一のため、主題の前後の入換え、分割、原稿の一部の改訂、削除、加筆作業、あるいは新しい主題を設定して起稿するなど、企画委員としては精神的に心苦しく、重い作業がほぼ一年間にわたって続けられた。なお、執筆に際しては予め史実・立論の出典、依拠史料の注記をお願いしたのであるが、企画委員会としては、さらに出来る限り原史料に溯り、それを確認し、また従来の同志社史において用いられていなかった重要史料をなるべく多く、原文に忠実な校訂を加えて収録し、かつ典拠を明記することにつとめた。したがって、平易に通読できるようにとする方針をとったが、中には勢いややかたい論証形式をとる主題もあらわれることになった。

また、本書は百年の通史を五つの時代に分け、その間に同志社に生起し、あるいは直面した事象あるいは課題を取りあげたが、主題の性質上、その起源の時代にまとめて、時代区分をこえて、その始終にまで言及する方法をとった場合がある。また、学校史における各主題の性格上、それぞれ独立して叙述する形をとったために、構成の上でやや重複する結果を招くことにもなった。逆に対象の性質上、単独の主題として独立させることを避け、それぞれ関連するところで言及する方法もとることになった。同志社の資産・財政の歩み、人物史、教会史、学生生徒の各種活動など、すぐその主題としての必要性が考えられるが、これらは概ね、さきに述べた方法で分散させて各個に言及し、またその推移・展開などの過程は資料編所収の年表に多く掲げるように留意した。末尾に掲げた「同志社の現況と課題」は、編纂作業の最後に企画委員が合同討議を数次にわたって行い、共同執筆をしたものである。

烏兎匆匆、この三年間の編纂作業において、その執筆者ですでに天上の人となられた方が生まれたこ

とは淋しい極みである。生島吉造氏は「新島襄の遺言」を担当され、この秋遂に帰らぬ人となった。『同志社歳時記』（正・続）とともに百年史編纂の角石の一つとなられた氏に謹んで敬弔の誠を捧げる次第である。

なお、本書の校正に当たっては、企画委員のほか、社史史料編集所職員松井全、竹内力雄ならびに嘱託の露口卓也、柴田潔、山田芳則がこれに当たった。印刷を引きうけられた日本写真印刷株式会社のご厚誼には頭が下る思いである。

百年史の編纂を終って、なお不十分な点や、思わぬ魯魚の誤りもあることと思われる。また、遂に明らかにすることの出来なかったいくつかの事項が彷彿として浮んでくる。百年史を土台として、今後なお精緻な検討や、あるいは稗史的な研究が引き続いておこなわれることを期待するものである。

おわりに当たり、本書各章の執筆者を参考のため掲げる。なお「京都看病婦学校と同志社病院」の執筆者である長門谷洋二氏は大阪回生病院医師であり、「神柵事件と『国体明徴』論文事件」の執筆者である高道基氏は神戸女学院教授である。ご繁務の中をご執筆、ご協力頂いたことを鳴謝する。

（杉井六郎誌す）

Ⅱ 執筆 者 一 覧 Ⅱ

第一部 創業と成育

序 章

第一章 ラットランドにおける新島襄

第二章 新島襄の教育理念

第三章 同志社英学校の開校

第四章 初期の同志社——神学教育と伝道活動

第五章 熊本バンドと各種演説会活動

第六章 新島の自叙

第七章 同志社女学校の開校

第八章 同志社大学設立運動

第九章 大学設立義捐金募集運動

第十章 仙台・東華学校

第十一章 京都看病婦学校と同志社病院

第十二章 『同志社文学』

第十三章 新島襄の遺言

第二部 キリスト教教育の受難

オーティス・ケリー

杉井六郎

井上勝也

北垣宗治

竹中正夫

杉井六郎

杉井六郎

仁井国雄

井上勝也

杉井六郎

久永省一

長門谷洋二

岡本昌夫

生島吉造

序 章

第一章 ハリス理化学校

第二章 同志社政法学校

第三章 キリスト教主義学校同志社の苦惱

第四章 外国人の財産権問題

第五章 キリスト教社会主義と社会事業

第六章 同志社普通学校

第七章 同志社幼稚園

第八章 専門学校令による同志社

第九章 『同志社新聞』『同志社時報』

第十章 外郭団体の創設と活動

第十一章 同志社の宣教師たち——明治期

第三部 大学への道

序 章

第一章 原田総長時代の同志社

第二章 同志社女学校専門学部 of 発足

第三章 大学令による学園 その一

第四章 大学令による学園 その二

杉井六郎

島尾永康

小野修

土肥昭夫

藤倉皓一郎

住谷磐

久永省一

武間富貴

森章博

河野仁昭

河野仁昭

宮沢正典

竹中 正夫

杉井六郎

杉井六郎

別所秀典

宮沢正典

原田彰

杉井六郎

第五章 大正デモクラシーと同志社

第六章 『同志社論叢』と『基督教研究』

第七章 京都学連事件と同志社

第八章 大正・昭和前期の宣教師たち

第九章 同志社専門学校の再生

通史編 二

第四部 戦時下の学府

序 章

第一章 昭和前期の国際交流

第二章 岩倉校地と同志社高等商業学校

第三章 社会的キリスト教運動

第四章 神棚事件と「国体明徴」論文事件

第五章 チャペル籠城事件

第六章 キリスト教主義の後退と湯浅総長の辞任

第七章 同志社専門学校の変遷と終息

第八章 太平洋戦争下の学園——男子諸学校

第九章 太平洋戦争下の学園——女子部

西田 毅

小野 高治

緒方 純雄

田中 直人

竹中 正夫

河野 仁昭

杉井 六郎

大下 尚一

平山 玄

武邦 保

高道 基

和田 洋一

和田 洋一

和野 仁昭

河野 仁昭

河野 仁昭

宮沢 正典

第五部 再生と発展

序 章

第一章 財団法人から学校法人へ

第二章 大学

第三章 中学・高等学校

一 中学・高等学校

二 女子中学・高等学校

三 香里中学・高等学校

四 商業高等学校

第四章 女子大学

第五章 大学院

第六章 紛争下の同志社大学

第七章 研究施設と研究活動

第八章 同志社の現況と課題

杉井六郎

園部望

北垣宗治

久永省一

仁井国雄

河野仁昭

土山登

坂本武人

今中寛司

河野仁昭

杉井六郎

企画委員

(於京都国際会議場), あいさつする
千 宗室校友会会長 II. 1581
湯浅治郎(1850. 10. 21—1932. 6. 7)
1880年頃撮影 II. 1583
小西増太郎(1862. 4. —1940. 12. 10)

1890年頃撮影 II. 1585
田辺校地の一画(移築した元第二寮)
II. 1588
創立百周年記念式(京都国際会議場)
1975年11月29日 II. 1590

『大学院要項』(1951年度) II. 1461
 啓真館(元の大学院専用校舎)
 元華族会館, 1952年買収 II. 1465
 女子大学大学院の授業 II. 1468
 此春寮, 1962年4月竣工 II. 1477
 大学会館, 本館
 1965年11月開館 II. 1483
 休講揭示, 1969年9月 II. 1495
 封鎖解除(明徳館前)1969年12月 II. 1502
 封鎖中に破壊された教室
 1969年12月5日撮影 II. 1505
 封鎖解除直後の事務室
 1969年12月5日撮影 II. 1505
 本館(現啓明館)建築前の図書館書庫
 1915年9月竣工 II. 1512
 同志社大学図書館 II. 1516
 1973年12月献堂
 沢辺正修(1856. 1. 10—1886. 6. 19)
 肖像画, 宮津市立図書館蔵 II. 1517
 小室信介(1852. 7. 21—1885. 8. 25)
 1881年頃撮影 II. 1517
 植木枝盛(1857. 1. 20—1892. 1. 23)
 1887年頃撮影 II. 1518
 新島記念文庫のラベル II. 1520
 森田久萬人(1858. 7. 8—1889. 2. 23)
 1881年8月1日撮影 II. 1521
 E. フリント(1828—1882. 11. 28)
 1870年撮影 II. 1522
 「愛山文庫」の印 II. 1524
 三宅利平(1871. 11. 21—1932. 3. 30)
 1920年頃撮影 II. 1525
 滝本誠一(1859. 9. 24—1932. 8. 20)
 1916年撮影 II. 1525
 小林正直(1873. 4. 6—1951. 7. 21)
 1932年5月20日撮影 II. 1526

学内の学術誌, 1975年 II. 1533
 発足当時の人文科学研究所(右手は
 啓真館), 1958年頃 II. 1540
 中村 遙(1903. 3. 24—1977. 1. 26)
 1935年頃撮影 II. 1550
 福井達雨(1932. 3. —)
 1966年秋撮影 II. 1550
 『宗教部案内』(1978) II. 1552
 「同志社設立始末」, 1883年発表 II. 1556
 1888年11月東京にて印刷
 大正初期の同志社正門(正面はハリス
 理化学館), 1916年 II. 1559
 『同志社女子大学研究所だより』
 1965年12月創刊 II. 1562
 『創造科学教育10年の歩み』
 1967年4月 II. 1563
 『研究所報』第1号, 1965年 II. 1564
 同志社女子大学図書館
 1977年9月献堂 II. 1566
 『同志社年表』, 1979年3月 II. 1567
 考古学陳列室(新町校地)
 1974年撮影 II. 1568
 新島先生遺品庫(竣工当時)
 1942年11月開館 II. 1569
 大学の入試合格者発表風景
 1975年頃 II. 1570
 アーモスト館内新島タブレット II. 1574
 AKPの学生たち(留学生センターにて)
 1975年撮影 II. 1575
 ゲイン・ハウス(岩倉大鷲町)
 1973年5月移築 II. 1576
 『校友会名簿』(昭和52年版) II. 1579
 『同窓会名簿』(1978年版) II. 1579
 同志社創立百周年記念リユニオン

- 上野直蔵 (1900. 12. 7—)
1965年頃撮影 II. 1344
ゲスト・ハウス献堂式, 1962年11月
大塚節治, 上野直蔵, O. ケリー,
E. O. ライシャワー
II. 1345
神学館チャペルのステンド・グラス
II. 1349
星名 稔 (1904. 5. 20—1977. 9. 26)
1966年頃撮影 II. 1354
R. H. グラント (1911. 4. 17—
1974. 9. 17)
1965年頃撮影 II. 1361
移転当時の高校校舎 (旧高等商業学校)
1949年頃撮影 II. 1374
高等学校のキャンパス (1970年頃)
II. 1377
A. E. ゲイン (1896. 8. 25—1969. 10. 27)
1968年頃撮影 II. 1382
中学校旧体育館 (1948—1976) II. 1385
中学校キャンパスと生徒たち
1970年撮影 II. 1386
『同窓会誌』合同記念号
1976年10月刊 II. 1393
新生館 (1949—1972) II. 1399
黎明館
1955年東部, 1959年西部竣工 II. 1402
『薨』 (年報) 第1号 (1970年8月)
II. 1405
クリスマス・ページェント II. 1407
合併当時の香里中学・高等学校
1952年頃撮影 II. 1412
山田貞夫 (1891. 3. 11—1965. 9. 25)
1953年頃撮影 II. 1415
合併当初の香里中高教員
前列左より西邨, 小沢, 磯部, 上島,
山田校長, 中新井, 下山, 青木, 浜本
中列左より林, フレミング, 森田, 深
田, 小川, 東郷, 堀口, 小川, 中村
後列左より荻田, 森口, 高松, 堀江,
小泉, 赤尾, 石野, 堀内
1953年撮影 II. 1418
良心碑, 香里中・高前庭 II. 1420
現在の香里中学・高等学校
1975年撮影 II. 1425
聚芳館の夜景, 1960年 II. 1429
学園紛争を報じた新聞記事
1969年 II. 1434
「一粒の麦」の碑
裏面「同志社商業高等学校の跡
我ら勤労学生は開校以来右手に本を左
手に職をもち, 頭上に星を仰ぎつつ当
校に学びしがついにその灯の消えるに
あたり卒業生二千余名の思校の念をこ
こに識す」
1948—1962 今出川聚芳館
1962—1976 新町臨光館
1976年3月
教職員一同
卒業生一同 II. 1436
『あしあと』 (表紙・住谷悦治絵)
1976年3月 II. 1437
E. L. ヒバード (1903. 9. 23—)
1969年1月撮影 II. 1439
同志社女子大学の徽章 II. 1441
滝山徳三 (1896. 12. 13—1973. 7. 13)
1955年頃撮影 II. 1449
デントン記念館, 1955年竣工 II. 1450
楽真館, 1964年竣工 II. 1453
女子大学梨木学舎, 1979年 II. 1457
北寮跡に設けられた初期の新制
大学院, 1953年頃 II. 1459

(1941年大沢徳太郎寄贈)	Ⅱ. 1175
牧野虎次(1871. 7. 4—1964. 2. 1)	
1940年頃撮影	Ⅱ. 1184
戦争拡大を伝える新聞切抜	Ⅱ. 1184
太平洋戦争下の学生生徒	
1942年頃撮影	Ⅱ. 1191
出陣記念植樹の碑, 1943年12月	Ⅱ. 1203
女専バッジ	Ⅱ. 1210
末光信三, 1885. 11. 2—1971. 9. 16	
1937年頃撮影	Ⅱ. 1212
片桐 哲(1888. 3. 3—)	

第五部 再生と発展

湯浅総長就任・牧野前総長謝恩記念大会, 1947年5月23日	Ⅱ. 1246
学校法人同志社理事・監事(1955年)	Ⅱ. 1261
前列左より秦孝治郎(理事長), 大塚節 治(総長), 石川芳次郎(監事), 武間 富貴, 村田竹治郎, 中列左より大江直 吉, 千田民衛(監事), 明田重義, 小林 康三, 中村貢, 後列左より高橋貞三, 大下角一, 田中良一(総務課長), 岡林事 (監事), 山田貞夫, Darley Downs 秦 孝治郎(1890. 2. 16—1972. 11. 25)	
1970年頃撮影	Ⅱ. 1263
大塚節治総長から住谷悦治総長へ (1963年11月)	
左より秦孝治郎, 住谷悦治, 大塚節治	Ⅱ. 1274
旧厚生館タブレット	Ⅱ. 1282
牧野虎次	
1955年頃撮影	Ⅱ. 1290
R. I. シーベリー(1955. 7. 30永眠)	
1947年撮影	Ⅱ. 1294
『同志社大学カタログ』(1949年度)	

1935年頃撮影	Ⅱ. 1213
慰問袋の発送(1937年), 10月	Ⅱ. 1216
行啓記念碑除幕式, 1938年12月8日)	Ⅱ. 1217
『高等女学部新聞』(1935年6月30日)	Ⅱ. 1219
岩倉農場(岩倉校地)の女専報国団	
1942年	Ⅱ. 1224
伊丹工場での高女部生徒の昼食	
1944年	Ⅱ. 1226
	Ⅱ. 1296
教養部解散記念植樹の碑, 1951年	Ⅱ. 1303
記念切手, 新島 裏肖像	
1950年11月22日発行	Ⅱ. 1305
住谷悦治	
1960年頃撮影	Ⅱ. 1306
有隣館(1949—1975)	Ⅱ. 1310
福井大地震の現地で救援活動中 の学生たち, 1948年7月	Ⅱ. 1312
大塚節治	
1960年頃撮影	Ⅱ. 1320
田畑 忍(1902. 1. 22—)	
1954年頃撮影	Ⅱ. 1321
チャールズ W. コール	
1953年撮影	Ⅱ. 1326
京都アメリカ研究夏期セミナー	
1975年頃, 於私学会館	Ⅱ. 1332
明徳館壁面レリーフ(ワイルド・ ローヴァー号)	Ⅱ. 1335
大下角一(1899. 9. 20—1962. 4. 21)	
1957年頃撮影	Ⅱ. 1336
「近衛家旧邸址」の碑	Ⅱ. 1341

堀 貞一, リチャーズ夫妻	Ⅱ. 1025	1935年頃撮影	Ⅱ. 1095
ハワイ寮, 1936年10月献堂	Ⅱ. 1028	醇化館(武道場)	Ⅱ. 1097
北側から見た徳熙館(昭和初期)	Ⅱ. 1034	『京都日日新聞』(昭和12年3月3日夕刊)	Ⅱ. 1114
1923年3月竣工		『京都日日新聞』(昭和12年3月17日)	Ⅱ. 1116
中川精吉(1878. 3. 28—1962. 3. 10)		中島今朝吾(1981. 6. —1945. 10. 28)	Ⅱ. 1119
1928年撮影	Ⅱ. 1036	1937年頃撮影	Ⅱ. 1124
西村金三郎(1876. 1. 24—1957. 4. 23)		『京都日出新聞』(昭和12年7月5日夕刊)	Ⅱ. 1124
1928年撮影	Ⅱ. 1041	柴山健三(1985. 3. 30—1940. 11. 28)	Ⅱ. 1128
南東からみた高等商業学校の校舎 (樹徳館), 1929年3月竣工		1933年撮影	Ⅱ. 1132
1942年頃	Ⅱ. 1056	大塚節治(1887. 3. 3—1977. 11. 18)	Ⅱ. 1132
キング寮, 1930年4月開寮	Ⅱ. 1057	1935年頃撮影	Ⅱ. 1139
鷲尾健治の胸像(1880. 1. 21—1937. 8. 9)		同志社が作成配布したポスター	Ⅱ. 1147
沢田宗三制作, 陶製, 1938年		1937年1月	Ⅱ. 1148
9月25日除幕式, 1942年頃撮影	Ⅱ. 1058	南京陥落を報じた新聞	Ⅱ. 1155
室戸台風の被害(岩倉校地)		1937年12月13日	Ⅱ. 1159
1934年9月21日直後	Ⅱ. 1060	湯浅八郎夫妻慰労お茶の会 (1938年1月22日)	Ⅱ. 1159
野手 耐(1876. 7. 18—1945. 8. 6)		「興亜」を「外事」に訂正した入学案内書	Ⅱ. 1160
1942年頃撮影	Ⅱ. 1063	1944年1月	Ⅱ. 1167
島本英夫(1893. 12. 1—1972. 12. 1)		小山熊治郎(1987. 5. 10—1959. 1. 29)	Ⅱ. 1171
1942年頃撮影	Ⅱ. 1064	1949年頃撮影	Ⅱ. 1171
高商記念碑(岩倉校地)		加藤与五郎(1872. 7. 2—1967. 8. 13)	Ⅱ. 1171
1977年9月23日除幕	Ⅱ. 1068	1964年11月28日撮影	Ⅱ. 1171
中島 重(1888. 5. 3—1946. 5. 29)		同志社工業専門学校開校記念	
1924年頃撮影	Ⅱ. 1070	前列左より奥村竜三, 小山熊治郎, 若 松兎三郎, 牧野総長, 加藤与五郎, 同 夫人, 後列左より田中良一, 右より2 人目森川正雄, 1944. 5. 6	Ⅱ. 1160
『社会的基督教』(創刊号)	Ⅱ. 1071	「青年学徒ニ賜リタル勅語」拝読式後の分 列行進, 1939年6月28日	Ⅱ. 1165
消費組合購買部		奉安殿(1938年10月28日竣工)	Ⅱ. 1167
1926年頃	Ⅱ. 1079	良心碑, 1940年11月29日除幕	Ⅱ. 1171
岩井文男(1902. 8. 9—)		厚生学専攻実習室, のちの厚生館	
1959年頃撮影	Ⅱ. 1084		
賀川豊彦(1888. 7. 10—1960. 4. 23)			
1934年頃撮影	Ⅱ. 1085		
海老名弾正追悼式(1937年6月)			
於同志社チャペル	Ⅱ. 1093		
湯浅八郎(1900. 4. 29—)			

高木庄太郎(1889. 5. 8. —1927. 12. 4)	
1924年撮影	I. 855
中村栄助(1849. 2. 3—1938. 9. 17)	
1919年撮影	I. 860
大学予科生の「寄附申込決議」	
(1920年 1月)	I. 873
鈴木吉満(1881. 7. 4—1945. 7. 4)	
1919年頃撮影	I. 881
海老名弾正 (1856. 8. 20—1937. 5. 22)	
1924年頃撮影	I. 886
吉野作造(1878. 1. 29—1933. 3. 18)	
1919年頃撮影	I. 906
有島武郎(1878. 3. 4—1923. 6. 9)	
1919年撮影	I. 911
竹崎八十雄(1875. 10. 5—1950. 5. 11)	
1925年撮影	I. 913
有終館扁額	I. 915
海老名弾正筆	
火災直後の有終館, 1930年撮影	I. 919
観閲式中止の掲示 (1928年 1月23日)	
	I. 920
恒藤 恭(1888. 12. 3—1967. 11. 2)	
1924年	I. 926
『同志社論叢』第 1 号	
1920年 3 月創刊	I. 927
『基督教研究』創刊号	I. 933
1923年11月刊	
蘆田慶治(1868. 10. 23—1936. 8. 17)	
1928年撮影	I. 937
楠田民蔵(1885. 11. 16—1934. 11. 5)	

第四部 戦時下の学府

栄光館(竣工当時)	
1932年 2 月	II. 1012
S. B. ニコルズ(1900. 2. 18—1925. 9. 28)	
1923年頃撮影	II. 1019

1919年撮影	I. 944
山本宣治(1889. 5. 28—1929. 3. 5)	
1926年頃撮影	I. 946
大正末の今出川キャンパス	I. 947
河野 密(1903. 12. 18—)	
1926年頃撮影	I. 948
波多野 鼎(1896. 3. 30—)	
1926年頃撮影	I. 948
学生起訴を報じた新聞(1926年 9 月 16日)	I. 955
社研規定撤回要求の決議文	
1926年11月 5 日	I. 958
バートレット夫妻 (1894年)	
S. C. バートレット(1865. 9. 21— 1937. 2. 1). バートレット夫人 (1874. 8. 26—1963. 6. 30)	
1894年撮影	I. 972
F. A. ロンバード(1872. 11. 21—1953. 5. 24)	
1914年撮影	I. 974
E. S. カーブ(1878. 8. 24—1960. 10. 30)	
1935年撮影	I. 978
古屋美貞 (1893. 12. 10—1966. 12. 4)	
	I. 993
難波紋吉(1897. 4. 15—1979. 8. 15)	
1926年撮影	I. 994
舟橋 雄(1873. 9. 14—1954. 2. 2)	
1931年撮影	I. 998
大工原銀太郎(1868. 1. 4—1934. 3. 9)	
1934年撮影	I. 1001

アーモスト館献堂式	
1935年10月	II. 1022
入浴したリチャーズ夫妻	
1936年10月11日, 左から湯浅総長,	

1897年頃撮影	I. 719
明治期の宣教師たち(II)	
1887年頃撮影	I. 731

第三部 大学への道

原田 助(1863. 11. 10—1940. 2. 21)	
1931年, 受洗50年記念	I. 748
1907年の同志社理事	
前列左から中村栄助, J. D. デイヴィス, 原田 助, 宮川経輝, 留岡幸助	
後列左から横井時雄, 柏木義圓, O. ケーリ, 湯浅治郎, 松山高吉, 村井貞之助, 丹羽清次郎	I. 751
水崎基一(1871. 9. 28—1937. 11. 29)	
1894年, 北海道にて教諭師の頃	I. 757
中瀬古六郎(1869. 12. 25—1945. 4. 14)	
明治末年頃撮影	I. 757
日野真澄(1874. 1. 12—1943. 5. 14)	
1912年 7月撮影	I. 759
大学開校式記念	
前列左より瀬戸視学官, 田所普通学務局長, 同志社理事大学創立委員長徳富猪一郎, 京都府知事大森鐘一, 文部大臣長谷場純孝, 同志社社長原田助, 東京帝国大学総長菊地大麓, 京都帝国大学総長久原久紘, 理事 D. C. グリーン, 理事小崎弘道, 理事宮川経輝	
中列左より佐久間秘書官, 生駒視学官, 浜岡五雄, 理事森田金蔵, 理事川本恂蔵, 理事村井貞之助, 理事中村栄助, 理事浮田和民, 理事湯浅治郎, F. A. ロンバート	
後列左より理事近藤賢二, 理事高木貞衛, 理事牧野虎次, 日野真澄, 監事尾崎保, 理事三宅駿一, 理事	

O. ケーリ(II) (1851. 4. 20—1932. 7. 23)	
1914年撮影	I. 736
古谷久綱, 理事西尾幸太郎	
1921年 5月20日	I. 766
原田 助の辞表, 1918年	I. 781
松浦政泰(1864. 4. 12—1916. 1. 13)	
	I. 792
ジェームズ館, 1914年 8月竣工	I. 798
松本亦太郎(1865. 9. 15—1943. 12. 24)	
1886年頃撮影	I. 799
M. E. ウェインライト(1862. 3. 2—1918. 7. 1)	
1890年撮影	I. 806
F. B. クラップ(1887. 5. 24—1977. 4. 3)	
1935年撮影	I. 807
貞明皇后行啓, 1924年12月 8日	I. 812
常盤寮(昭和初期)	I. 815
ミリアム・クワイヤ(1918年頃)	I. 818
宮川経輝(1857. 1. 18—1936. 3. 2)	
1881年頃撮影	I. 820
松田 道(1868. 9. 7—1956. 1. 15)	
1935年頃撮影	I. 821
旧図書館本館(現啓明館)	
1930年 3月竣工	I. 827
和田琳熊(1870. 12. 1—1944. 7. 27)	
昭和初期撮影	I. 832
D. W. ラーネッド	
1925年撮影	I. 835
弘風館(昭和初期)	
1911年12月竣工	
今中次麿(1889. 4. 9—)	I. 845
1924年撮影	I. 853

片岡健吉(1843. 12. 26—1903. 10. 31)
 1897年頃撮影 I. 566
 第1回大学設立委員会
 左より徳富猪一郎, 原田助, 石井
 勇, 三宅驥一, 河田嗣郎, 水崎基
 一, 浮田和民, 湯浅治郎, 古谷久綱
 1911年12月26日撮影 I. 575
 同志社大学開校式
 1912年5月20日 I. 578
 致遠館の扁額, 1916年3月竣工
 徳富蘇峰筆 I. 582
 『同志社評論』号外
 1904年9月 I. 593
 『同志社新聞』第3号
 1904年11月 I. 594
 『同志社時報』第16号(改題第1号)
 1906年1月 I. 607
 『同志社校友同窓会報』第1号
 1926年9月創刊 I. 619
 『同志社新報』第1号
 1936年4月創刊 I. 620
 『同志社タイムス』第1号
 1949年5月創刊 I. 621
 金森通倫(1857. 8. 15—1945. 3. 4)
 1887年頃撮影 I. 625
 『校友会報』第1号
 1897年2月創刊 I. 636
 『維持会台帳』, 1920年—1929年 I. 648
 『同志社校友会便覧』創刊明治40年
 1912年12月発行のもの I. 652
 『同志社五十年史』と『同志社五十
 年裏面史』 I. 659
 新島会館, 1932年11月29日竣工 I. 662
 『我等ノ同志社』(『同志社校友同窓
 会報』第100号)
 1935年10月発行 I. 665

『新島先生書簡集』 I. 665
 (正)1942年6月, (続)1960年2月刊
 校友会元会長 石川考次郎と村田
 竹治郎
 石川(1881. 11. 5—1969. 1. 27)
 村田(1886. 11. 18—1976. 11. 3)
 1964年4月撮影 I. 667
 『同志社女学校期報』第1号
 1894年1月創刊 I. 671
 同志社女子部バザー(昭和初期) I. 674
 同窓会館(1940—1979) I. 679
 『同志社同窓会報』創刊号
 1956年11月 I. 685
 M. L. ゴルドン(1843. 7. 18—1900.
 11. 4)
 1882年撮影 I. 688
 D. C. グリーン(1843. 2. 11—1913.
 9. 15)
 1887年 I. 688
 明治初期の宣教師
 1872年頃 I. 693
 J. D. デイヴィス著『新島襄先生伝』
 1890年 I. 702
 『新島襄先生之伝』(邦訳)
 1891年1月 I. 702
 D. W. ラーネッド夫妻
 ラーネッド(1848. 10. 12—1943.
 3. 19). ラーネッド夫人(1837. 3.
 20—1940. 5. 19) I. 708
 明治期の宣教師たち(I)
 前列左より2人目フォーク夫人, カー
 チス夫人, 中列左よりカーブ?, カー
 ブ夫人, ケーリ夫人, ケーリ, デイヴ
 ィス夫人, カーチス. 後列左よりラー
 ネッド, スタンフォード, 同夫人, デ
 イヴィス

第二部 キリスト教教育の受難

- J. N. ハリス(1815. 11. 8—1896. 10. 18)
 1887年頃撮影 I. 372
- 下村孝太郎(1861. 9. 26—1937. 10. 21)
 1905年頃撮影 I. 374
- 建設当時のハリス理化学館 I. 377
- ハリス理化学館の棟札 I. 378
- 理科大学学部第3回卒業生
 前列左より福井大三郎, 加藤与五郎
 後列左より服部他助, 須田勝三郎, 栗生光謙, 下村孝太郎, 小野颯郎, 児玉信嘉 I. 387
- 明治末年ころのキャンパス(手前は民家) I. 395
- 1894年政法学校卒業生
 6月29日, 前列左よりラーネッド, 西川嘉右衛門, 亀島豊治, 三上真吾, 河野清一, 守安富太郎, 小野英二郎. 後列左より松山高吉, 1人において市原盛宏, 2人において浮田和民 I. 402
- 小野英二郎(1864. 4. 6—1927. 11. 26)
 1894年撮影 I. 419
- 「小室・沢辺記念文庫書目・附閲覧規則」
 1891年9月刊 I. 420
- 市原盛宏(1858. 4. 5—1915. 10. 4)
 1887年頃撮影 I. 422
- 小崎弘道(1856. 4. 14—1938. 2. 26)
 1892年頃撮影 I. 433
- 浮田和民(1859. 12. 27—1946. 10. 28)
 1910年頃撮影 I. 434
- 横井時雄(1857. 10. 17—1927. 9. 13)
 1920年頃撮影 I. 445
- 西原清東(1861. 9. 8—1939. 4. 11)
 1890年頃撮影 I. 460
- マッキーヴァーと同志社社員
 前列左より3人目松山高吉, 留岡幸助
 1人において古谷久綱. 後列左より山中百, デイヴィス, マッキーヴァー
 1899年撮影 I. 472
- D. W. ラーネッド(1848. 10. 12—1948. 3. 19)
 1892年撮影 I. 478
- 松岡荒村(1879. 5. 8—1904. 7. 23)
 1902年撮影 I. 482
- 安部磯雄(1865. 2. 4—1949. 2. 10)
 1935年頃撮影 I. 489
- 留岡幸助(1864. 3. 4—1934. 2. 9)
 1902年撮影 I. 500
- 『人道』創刊号, 1905年5月 I. 504
- 山室軍平(1872. 7. 29—1940. 3. 13)
 1932年撮影 I. 506
- 同志社予備校生徒(1889年) I. 512
- 明治末期の今出川校地
 明治末期の今出川校地(右の道路は石橋通り) I. 528
- 運動会旗奪い(明治末年) I. 536
- 波多野培根(1868. 6. 20—1945. 11. 7)
 1907年頃撮影 I. 537
- 同志社中学立志館(1910年竣工) I. 542
- 聚芳館(1922年竣工) I. 545
- 庭で遊ぶ園児たち
 1907年頃撮影 I. 553
- 卒園式(後列中央, ラーネッド園長)
 1912年頃撮影 I. 554
- 同窓会館建設以前の幼稚園(1935年) I. 555
- 戦時下の園児
 1939年10月21日の運動会 I. 560
- 同志社幼稚園, 1965年頃 I. 562

- 原田助, 池袋清風, 片桐清治,
三宅荒毅
1895年大阪にて撮影 I. 161
「興風会日誌」 I. 163
「興風会日誌」第25回の条
1887年 I. 170
堀 貞一(1861. 1. 4—1943. 8. 26)
1940年頃撮影 I. 175
自責の杖 I. 182
自責打掌が行われた第二寮(現田辺
校地), 田辺校地移築後
1975年撮影 I. 188
「同志社女学校校則」草案
宮川経輝筆, 1880年頃 I. 195
女学校教職員・生徒 I. 200
(1881年頃)上から2段目左から宮川
経輝, パーミリー, 山本さく, スタ
ークウェザー, デイヴィス夫人, 加
藤勇次郎
女学校最初の校舎
1878年9月竣工直後 I. 202
大沢善助(1854. 2. 9—1934. 10. 10)
1921年撮影 I. 210
ダンス授業風景
明治末年頃 I. 214
スタークウェザー(左)とパーミリー
スタークウェザー(1849. 8. 3—?)
パーミリー(1852. 5. 13—1933. 1. 8)
1880年頃撮影 I. 219
M. F. デントン(1859. 7. 4—1947.
12. 24)
1889年頃撮影 I. 219
土倉庄三郎(1840. 4. 10—1917. 7. 19)
1877年頃撮影 I. 229
徳富猪一郎(1863. 1. 25—1957. 11. 2)
1897年頃撮影 I. 234
勝 海舟(1823. 1. 30—1899. 1. 20) I. 243
「明治専門学校義捐者姓名簿」
1884年のもの, 新島 襄自筆 I. 248
佐々城豊寿, 1887年頃 I. 261
「同志社大学義捐者姓名簿」
1889年のもの I. 262
東華学校全景(1887年頃) I. 282
東華学校址の碑, 1932年除幕 I. 287
J. C. ベリー(1847. 1. 16—1936. 2. 9)
1918年叙勲の折 I. 290
同志社病院 (The Infirmary)
1893年撮影 I. 295
『第一年年報』(英文), 1887年 I. 297
京都看病婦学校・同志社病院開業式
「招待券・入場券」, 1887年 I. 298
リンダ・リチャーズ(1841. 7. 27—
1930. 4. 16)
1900年撮影 I. 303
同志社病院のスケッチ
1894年頃 I. 308
『同志社文学雑誌』第1号
1887年 I. 320
同志社文学社(1895年5月) I. 323
『同志社文学』第54号
1892年 I. 336
磯貝由太郎(雲峰)(1865. 6. 30—
1897. 11. 11)
1889年撮影 I. 344
ハーディー夫妻
A. ハーディー (1816—1887)
ハーディー夫人(1817—1899)
1885年頃撮影 I. 349
新島夫妻
新島 襄, 1884年撮影, 41歳
新島八重, 1893年撮影 I. 355
大磯の百足屋旅館, 1893年撮影 I. 358

掲載写真一覧

〔右端の数字は、巻および掲載ページを示す〕

第一部 創業と育成

- 創立百周年を記念して同志社からグレイス教会へ贈ったタブレット
1971年6月27日除幕 I. 8
アメリカン・ボード年次大会想像図（伊谷賢蔵画）
1965年制作 I. 17
グレイス教会（1976年） I. 26
グレイス教会内部（新島在米当時）
1874年頃 I. 27
新島七五三太脱出の扮装
1874年撮影 I. 36
ワイルド・ローヴァー号
Wild Rover. 1853年進水 1100 t,
原画Chatham Historical Society 蔵,
1864年制作, 作者不詳 I. 38
M. E. ヒドゥン
1860年頃の撮影か I. 40
フィリップス・アカデミー（新島在米当時）
1865年頃 I. 44
アーモスト大学時代の新島
25歳, 1867年 I. 48
J. H. シーリー（1824—1895）
1877年頃撮影 I. 51
アンドーヴァー神学校（新島在米当時）
1870年頃 I. 54
アーモスト大学のジョンソン・チャペル（新島在米当時）
1870年頃 I. 57
新島 襄（1872, 於ベルリン）
30歳 I. 64
田中不二磨（1845. 6. 12—1909. 2. 1）
1872年ベルリンにて撮影 I. 66
木戸孝允（1833. 6. 26—1877. 5. 26）
1872年ベルリンにて撮影 I. 69
山本覚馬（1828. 1. 11—1892. 12. 18）
1882年頃撮影 I. 75
J. D. デイヴィス（1838. 1. 17—1910. 11. 4） I. 78
薩摩屋敷近辺図（慶応2年）, 1866 I. 81
本間重慶（1933. 8. 24永眠）
1927年撮影 I. 90
1880年の同志社（左より第二寮, 食堂, 第一寮） I. 92
熊本洋学校教師館, 1975年撮影 I. 100
宮川経輝の卒業証書（「餘課」と表記） I. 108
西京第二公会記録 I. 114
第二公会録事 I. 119
京都宣教師の群像 I. 123
前列右よりスタンフォード, 不明, ケーリ, ケーリ夫人?, 不明, フォーク夫人?・後列右よりスタンフォード夫人, カーチス夫人, カーチス, デイヴィス, デイヴィス夫人, ラーネッド夫人, ラーネッド, 不明
クラーク記念館（建築当時）
1894年頃撮影 I. 139
新島襄（後列左より3人目）と熊本バンド
1879年撮影 I. 142
山崎為徳（1857. 3. 3—1881. 11. 19）
肖像画, 原田直次郎筆 I. 156

宇治野英語学校 79
 梅本町公会(大阪教会) 64, 711
 ウスター工科大学 374
 右翼学生団体 968

V

ヴァージニア大学 1336
 ヴァッサー女子大学 1439

W

ワイルド・ローヴァー号 37-9, 370,
 1334-5
 「早稲田文学」 612, 1529
 早稲田大学 111, 482, 486, 489, 504, 565,
 568, 574-5, 832, 834, 844,
 923, 945-6, 952, 956, 959,
 966, 1260, 1410, 1416, 1472,
 1525, 1527, 1581
 ワシントン大学 732

Y

柳川同志会 262
 耶蘇聖經 102-3
 Y M C A 699, 703, 726, 732, 735, 769,
 818, 1021, 1081, 1086, 1311,

1313

「幼学綱要」 204-5

洋 学 舎 191

横浜バンド 277

横浜第一バプテスト教会 253

横浜(基督)公会 65, 277

横浜共立学園 192

「万 朝 報」 484, 486, 490

友 愛 会 943-4

ゆかり会 685, 1580

ユナイテッド・チャーチ・ボード

→UCBWM

ユニオン神学校 732, 774, 975, 977,
 1021, 1360

ユニテリアン 43, 97, 329, 432, 479

Y W C A 818, 1311

Z

全国学生自治会連合(全学連) 1316,
 1321-2, 1343, 1472

全国基督教学生討議大会 1083-4

全国基督教信徒大親睦会 516

全 共 闘 1353, 1472, 1488, 1497, 1504

善隣学院 748

造士義会 275, 282

1089, 1093
 社会的基督教 910, 1069, 1071-2, 1074,
 1081, 1085-7, 1089, 1091-3
 社会的基督教連盟 1088-9
 「七一雑報」 109, 114-5, 144, 154-5, 706,
 975
 「私学振興助成法」 1403
 私学振興財団 1546
 私学助成 1244, 1366, 1403, 1588, 1590
 四条教会 111, 124, 253, 712
 四条大芝居場(劇場) 156-8
 シカゴ大学 769, 774, 1336
 シカゴ神学校 79, 693, 699, 714, 720,
 735, 972
 島之内教会(大阪) 111, 266, 717
 下鴨神社 1139, 1184
 下京伝道 712
 新英学校 191-2
 「新人」 592, 887, 929, 1105
 新人会 912, 929, 942-3, 947-8
 新京極劇場 158-9
 信州伝道 359
 私立大学審議会 1242
 「私立学校法」(私学法) 1241-3, 1253,
 1256-8, 1263-4, 1268-9,
 1579, 1586-7
 「私立学校令」 458, 525, 565, 1228
 私立学校審議会 1242
 思斉塾 503-4
 止揚学園 1550
 相国寺 81, 220, 534, 730, 1045
 修業年限短縮の勅令 1223
 総同盟 946, 952, 960
 水上隣保館 1549
 スミス大学 1359
 スタンフォード大学 770, 773, 1221,
 1331

T

大逆事件 481-2, 491-4, 945
 太平洋婦人伝道会 892, 1017-8
 太平洋婦人伝道協会 220, 1395
 太平洋婦人宣教委員会(The Women's
 Board of Missions of the Pacific)
 720, 727

太平洋神学校 1336
 泰西学館 139, 359
 大正デモクラシー 541, 546, 654, 863
 大正天皇奉悼式 918
 高梁教会 506, 1069
 滝川事件 1095-6, 1101, 1103, 1110
 多聞教会 120
 丹波第一基督教会 253, 497, 500
 タトル商会 26-7
 「帝国文学」 612
 帝国大学 231, 276, 504, 574, 587, 824,
 827, 835, 996, 1154, 1558
 「帝国大学令」 62, 430, 565, 1033
 テモテ教会講義所 266
 「天道溯源」(Evidences of Christianity)
 76, 695, 711
 天橋義塾 193, 354, 1517
 天満教会 266
 東北学院 277, 286-7, 733, 1017
 東北帝国大学 810, 851, 959
 「特別認可学校規則」 565
 東京大学 393, 956, 959, 1033, 1302,
 1324, 1331, 1472, 1479,
 1488, 1497, 1527

東京学連 950
 東京学生消費組合 966
 東京女学校 192
 東京市養育院 498
 東京帝国大学基督教青年会 1083
 鳥取育児院 505
 東洋英和 440, 458, 526
 津田塾大学(女子英学塾) 789, 802, 811
 築地教会 505
 築地新栄教会 278

U

UCBWM(United Church Board for
 World Ministries) 27, 287, 1350,
 1362, 1574
 内村鑑三不敬事件 411, 431
 ウェインズバーグ大学 710
 ウェスリアン大学 1359
 ウィリアムズ大学 41, 96-7, 690, 728,
 1359
 ウィスコンシン大学 975

欧 学 舎 71-2, 191
 大原社会問題研究所 944
 大 磯 138, 266, 348, 356, 358-60,
 362, 1171
 岡山キリスト教会 496
 岡山孤児院 496, 498, 506
 岡山甲種医学校 496
 オックスフォード大学 773
 オークランド第一組合教会 772
 オレゴン大学 731
 オールド・サウス・チャーチ 40,
 773
 大阪紡績 255
 大阪 DEL グループ 681
 「大阪平民新聞」 491
 大阪会議 69, 71
 大阪公会 115
 大阪教会 266
 大阪西教会 493
 大阪舎密工業株式会社 391
 大阪ウキルミナ女学校 802

P

“A Pioneer Doctor in Old Japan”
 719
 ビルグリム・プレイス 709, 731, 733,
 738, 978
 ポモナ大学 731
 プリンストン大学 96
 プロカル運動ターゼ 953-4, 961

R

“Life and Letters of Joseph Hardy Ne-
 esima” 10, 12, 32, 34, 36-7, 40-3,
 47, 55-6, 73, 76, 204, 228,
 237
 洛陽教会 485-6, 946, 1081
 ラットランド 9-27, 110, 202, 240, 331,
 395, 399, 687, 1358
 「ラットランド・ウィークリー・ヘラル
 ド」 10, 17-20, 22, 26-7
 霊南坂教会 500
 霊の覚醒運動 174
 「聯邦志略」 21, 31-3, 35
 リーダーズ・トレーニング・キャンプ

1313

立 教 192, 261, 440, 458-9, 461,
 526, 933, 1260
 「六合雑誌」 218, 251, 410, 427, 480, 525,
 638, 706, 712, 1535
 「陸軍現役将校学校配属令」 1101
 立 命 館 881, 943, 947, 1108, 1260,
 1506
 「労働組合法」 947
 労働組合運動 488
 労働ミッション 1080-1
 「労働世界」 490
 労働者教育協会 953
 聲 人 会(ソヴィエト会) 947
 ロックフェラー財団 1331, 1544
 六・三・三制 1067-8, 1240, 1290, 1369,
 1387, 1397, 1447

S

左阿弥楼 626-7
 佐伯病院 317, 1228
 桜井女学校 192, 206, 308
 三田教会(公会) 115, 712
 三・一五共産党大検挙事件 961-2
 三条キリスト教青年会館 945, 949, 952,
 955, 1168
 サリヴァン記念基金 1362
 西南学院 537, 1188
 セイレム(マサチューセッツ州) 79,
 372, 697
 「青少年学徒ニ賜リタル勅語」 1164-5,
 1223
 セイヤー大学 91, 704
 「世界文化」 1141-2, 1146
 仙台組合教会 287
 「専門学校令」 390, 393, 511, 564-9, 574-
 5, 649, 650, 753, 789, 796,
 800, 807, 824-5, 829, 887,
 902, 937, 980, 982, 985, 987,
 996, 1033, 1062, 1155, 1187
 セランティック・ファンド 1350
 摂津第一公会(神戸教会) 64, 715
 社会民主党 489-91
 社会主義協会 481-4, 486-8
 「社会的基督教」 1070-1, 1074, 1084,

メソヂスト教会 25, 64, 691
 三池 鉦山 262, 268
 三池集治監 262, 268
 水俣青年協会 261
 民人同盟会 946
 民間情報教育部 1291
 民法草案 400
 民友社 235, 252, 258, 260-1, 263,
 267, 269, 479, 1547
 ミシガン大学 403, 717, 732, 734, 1544
 ミッションスクール 206, 212, 298, 433,
 438, 454, 461, 1395
 「三田文学」 612, 1529
 宮城英学校 281
 文部省 204, 446, 453, 456, 458-61,
 522, 525-6, 566-8, 577, 581,
 585, 589, 642, 644, 657, 736,
 803-5, 807, 809, 812, 829,
 832-5, 840, 844, 846, 851,
 860, 867, 874, 876, 878, 885,
 894, 958, 960, 963, 987-8,
 990-1, 993, 995, 999, 1000-
 1, 1065, 1096, 1119, 1131,
 1138, 1146, 1152, 1154-9,
 1161, 1164, 1166-7, 1178,
 1180-1, 1186-7, 1190-1,
 1193, 1197, 1202, 1209,
 1216, 1223-4, 1228-30,
 1232, 1239, 1254, 1289,
 1408, 1439, 1441-2, 1446,
 1466, 1493, 1538-9
 「文部省訓令第八号」 1396
 「文部省訓令第十二号」 222, 430, 441,
 457, 518, 521, 525-6, 1114,
 1396
 「文部省訓令第二十七号」 1180-1
 文部省供託金 859, 866, 873, 880
 「文部省令」 564-5, 577, 581, 841, 996,
 1469
 「文部省令第二号」 1186
 「文部省令第九号」 1466
 「文部省令第二十八号」 1460
 モップル(日本赤色救援会) 964
 百足屋 358
 室戸台風 1057-8

「無産青年」 964
 無産者大学講演会 953
 「無産者新聞」 964
 無処罰主義 1320-1

N

長崎(海軍)伝習所 369-70
 内外協力会 979, 1362
 中村監獄 268
 日露戦争 481-2, 486-9, 491-3, 496,
 508, 525, 566
 日曜学校 202, 299, 551, 553, 555, 563,
 726, 808, 816, 818
 日本大学 835, 844, 956, 959, 998,
 1472-3, 1488
 日本女子大学校 789, 797, 799, 811
 日本基督伝道会社 117-8, 691
 日本基督公会 64
 日本基督(キリスト)教団 287, 1200-1,
 1311-3
 日本基督教連盟 1085, 1088, 1214
 日本基督教青年会同盟 1084, 1086
 日本組合基督教会 524, 691, 892, 984-6
 日本共産党 962-3, 1317, 1499
 日本農民組合 950-1, 954
 日本労働ミッション 910, 1071-2, 1088
 日本SCM研究会 1087
 日本赤十字社 308, 726, 1030
 「日本私学振興財団法」 1367
 日本私立大学連盟 1344
 日本消費組合連盟 967
 ニ・二六事件 969, 1059, 1110, 1113
 日清戦争 218, 315, 319, 481, 525
 日中戦争(日支事変, 日華事変) 549,
 559, 679, 683, 1061, 1063,
 1137-8, 1164, 1172, 1202,
 1219, 1391
 濃尾大震災 377, 496, 506
 ノックス・カレッジ 735

O

オペリン大学 96, 403, 717, 733-4, 737,
 769, 771-2, 976, 1359
 オペリン神学校 973, 977
 大江義塾 260, 269

- 熊本英和女学校 262
 熊本女学校 206, 792
 熊本大江女学校 913
 熊本洋学校 100, 108, 126-7, 141, 196, 269, 373
 組合教会 250, 266, 271, 279-80, 287, 432, 436, 446-7, 472, 580, 738, 752, 754, 770, 783, 873, 976, 985, 992, 1069, 1305, 1523, 1550, 1574
 雲の柱会 910, 959, 1071, 1080
 雲内教会 1088
 兄弟団 53
 「教育基本法」 1067, 1240-1, 1256, 1290, 1317, 1396-7, 1417, 1438, 1440, 1568
 「教育ニ関スル勅語」(教育勅語) 218, 284, 313, 319, 332, 334, 400, 431, 440, 457, 461, 516, 568, 579, 588-9, 1002, 1062, 1114-7, 1165-6, 1186, 1190, 1213, 1217, 1255, 1391
 「教育ニ関スル戦時非常措置方策」 1153-4, 1156, 1159, 1191-2, 1197, 1225, 1228, 1537, 1539
 「教育令」 565
 京都文科大学 772
 「京都地方労働運動史」 953
 京都中外・日出版社 263
 京都府(庁) 152, 198, 200, 253, 440, 456, 541, 580, 980, 1166, 1215, 1229, 1230, 1372, 1396, 1403
 京都府警察(部) 250, 319, 1143, 1495, 1502
 京都府警察部特高課 729, 915, 955, 1129
 京都府立第一中学校 580
 京都府立第一高等女学校 87, 486, 580, 1444
 京都府立女子師範学校 580
 京都府立師範学校 580
 京都学連事件 899, 914-5, 919, 942, 947, 952-4, 959, 961-3, 968
 京都博物館 74
 「京都日出新聞」 828, 1038, 1041, 1048, 1101-2, 1119
 京都基督教青年会館 1088
 京都国際会議場 1436
 京都高等蚕糸学校 947
 京都無産者教育協会 961
 「京都日日新聞」 1099, 1100, 1114, 1116
 京都労働学校 952-4, 956, 960
 京都私学会館 295
 「京都新聞」 1038
 京都市立絵画専門学校 580
 京都市立商業学校 571-2
 京都市役所 566
 京都商工会議所 232, 245, 349
 京都守護職 75
 京都(帝国)大学 111, 392, 554, 571-2, 579-80, 802, 898, 902, 925, 942, 948, 956, 959, 964-5, 1026, 1056, 1095-6, 1149, 1157, 1305, 1331, 1334, 1337, 1444, 1544, 1576
 京都帝国大学社会科学研究会 948, 951, 953, 956
 京都薬学専門学校 947
 京都薬品試験所 389
 救世軍 506-9, 771, 773, 1549
 九州帝国大学 541, 851, 959
- M**
 前橋教会 269
 「毎日新聞」(大阪) 235, 251, 263, 310, 484, 486, 490, 580, 651, 730, 1101-2, 1108, 1124, 1220
 マクリーン幼稚園 726, 1081
 「豆ニュース」 684
 満州事変 547-8, 1088, 1094, 1121, 1368
 円山世阿弥 153
 マウント・ホリヨーク大学 721-2, 734, 1359, 1439
 マウント・ホリヨーク・システム(方法) 209, 721
 「めぐみ」 671
 明治大学 565, 835, 844, 959, 1472
 明治学院 440, 458, 461, 526, 956, 959
 明治女学校 206
 免囚保護 497, 500, 506

自由人連盟 945-6
 「自由党史」 171
 慈善鍋の運動 508
 上智大学 111, 1101
 上級学校入学試験資格の付与 459
 上毛孤児院 505
 城之橋教会 1313
 ジョンズ・ポプキンズ大学(大学院)
 237, 374-5, 391-2
 女子教育 191, 193, 195-6, 355, 714,
 1011-2, 1369, 1381
 十月会 942, 946-7
 巡廻路傍伝道 1313
K
 上賀茂神社 534-5
 上京区役所 205, 878
 カンバーランド長老教会 691, 710
 咸臨丸 370
 「関西中央新聞」 185
 関西大学 1146, 1330
 関西学連 951-2
 関西学生自由擁護同盟「声明書」 959
 関西学生消費組合 965
 関西学院 483, 838, 907, 933, 951, 956,
 959, 1060, 1087, 1201-2,
 1260
 監督教会 64, 691
 カールトン大学 1327-9, 1358-60, 1362,
 1574
 家庭学校 498-2, 504
 川口三一神学校 266
 川勝英学塾 31
 川勝君ノ塾 36
 川俣事件 484
 京福電鉄(鞍馬電車) 1045-7, 1055,
 1315
 京城学堂 277
 京城帝国大学 851
 慶応義塾 68, 157, 193, 504, 574, 832-
 4, 844, 901, 956, 959, 1260,
 1472, 1525, 1527, 1549
 警醒社 263, 737
 建国大学 1287
 「決戦非常措置要綱」 1205

「決戦教育措置要綱」 1191, 1224
 キングスレー館 716, 726
 勤労動員 1065, 1191, 1202,
 1205
 (基督教)婦人矯風会 195, 355, 484,
 726
 「基督教世界」 174-5, 179, 933
 キリスト教社会主義 477-83, 487, 489-
 90, 495
 「基督教新聞」 235, 251, 285, 436-8, 446,
 448, 450-1
 北の演劇場 154, 162
 “Kobe Chronicle” 298
 神戸英学校 130
 神戸女学院 80, 108, 144, 160, 192, 194,
 789, 802, 809, 811
 神戸女子神学校 734
 神戸高等商業学校 956, 1064
 神戸教会(公会) 111, 113, 115, 129,
 130, 715, 717, 747, 750
 神戸神学校 253
 神戸頌栄保母伝習所 552, 556
 神戸頌栄幼稚園 130
 神戸商業大学 851
 「神戸又新日報」 251, 254, 263, 265
 行地社 968
 「国家総動員法」 1061, 1227
 国学院大学 835, 844
 「国民徴用令」 1061, 1227
 「国民之友」 234-5, 251-2, 254, 258-61,
 263, 267-9, 400, 410
 国民精神文化研究所 1131, 1136
 国民新聞社 575
 国際基督教大学 1253, 1294, 1302, 1315
 国体明徴 969, 1094, 1103-5, 1108-9,
 1111, 1114, 1132, 1215-6
 小諸村基督教一致講義所 253
 コーネル大学 393, 769, 772
 「公立私立専門学校規程」 564, 996
 コールビー大学 1359
 「高等学校令」 430, 524, 826, 828, 837,
 847, 866
 「高等女学校令」 222, 458, 1186-7, 1213,
 1229
 熊本英学校 261

「学徒勤労令」 1065
 「学徒戦時動員体制確立要綱」 1225
 学徒出陣 1065, 1202, 1204, 1285
 岐阜女学校 291
 「岐阜県立医学校規則書」 290
 合同長老派教会 1362
 五・一五事件 969, 1094
 五条 警察署 267
 御 真 影 1111-2, 1114, 1126, 1137,
 1139, 1216-7
 御所八幡町 513
 軍艦教授所(操練所) 30-1, 369-71
 軍事教育反対(反軍教運動) 952, 954
 軍事教練 546, 899, 914-6, 919, 1098-
 9, 1111, 1301
 グレイス(組合)教会 8-9, 25, 27, 1358

H

ハーヴァード大学 96-7, 239, 690, 704,
 769, 774, 1329-31, 1337,
 1358
 ハーヴァード・ロー・スクール 1359
 排日法案 728, 970
 排日運動 770
 廃娼運動 490, 495
 HITAC-8350 1363
 函 館 36, 63
 博 愛 社 726
 汎愛医学校 291
 花 岡 山 143, 145, 150, 329
 原女学校 192
 原氏奨学資 532
 ハリス基金 474
 波止浜基督教青年会 262
 ハートフォード神学校 732, 758, 769,
 974
 ハワイ大学 1025
 ハワイ伝道会社 773
 「ヘボン書簡集」 293
 平安義会 815
 平安教会 125, 265, 1081
 「平安教会百年史」 120, 122
 平 民 社 486-7, 491
 「平民新聞」 482, 486-7, 489, 493-4
 平和協会 716

東山中学 881
 氷 川 塾 275
 氷 川 丸 1336
 彦根高等商業学校 1024
 「日出新聞」 251
 日出新聞社 254, 265
 ヒンズデイル 46
 “A History of Phillips Academy” 43
 “A History of Chistianity in Japan”
 448, 695, 738
 「報知新聞」 235, 251, 263, 490
 北海道バンド 497
 北海道毎日新聞社 265
 北海道空知集治監 497, 500-1, 503
 北海道帝国大学 810
 北陸英和校 261
 本郷教会 886, 921, 929, 1069, 1105
 法政大学 575, 835, 844, 998
 Hotel du mont Prosa 350
 兵庫教会 253

I

一致教会 254, 279, 281, 287
 イェール大学 24, 91, 96-8, 239, 284,
 392, 422, 427, 689-90, 703-
 5, 709, 714, 734, 752, 769,
 976, 1325, 1329, 1337, 1521,
 1527
 今治教会 260, 506
 イリノイ大学 774, 1331, 1544
 一灯園高校 1435
 岩倉遣外使節(全権) 28, 67, 95
 岩 倉 村 1046, 1055

J

児童保護事業 505
 ジェファソン医科大学 718
 ジェームズ財団 1450
 慈恵看護専門学校 308
 神 武 会(青年隊) 968-9
 実業学校教員無試験検定 1035
 「実業学校令」 994, 1062, 1186
 ジャーマン・リフォームド・ミッション
 277
 ジャパン・ミッション 195, 210, 217

此 春 寮 1201, 1345, 1351, 1476-7, 1480-1
 此 春 寮(旧) 1336, 1346
 彰 栄 館 81, 322, 376, 467, 534-5, 538, 541, 543, 545-6, 716, 1137, 1272, 1369, 1383, 1386, 1547
 彰 栄 館(新) 1384
 松 蔭 寮 1351, 1481
 松 蔭 寮(旧) 1346, 1477
 頌 啓 館 1454
 書 籍 館 288, 322, 413, 429, 623, 627, 632, 1511-2, 1564
 尚 志 館 1423
 聚 芳 館 545, 993, 1372, 1383, 1386, 1429-30, 1436
 霜 雪 寮 1448
 桑 志 館 1377
 壮 図 寮 1476
 対 湖 寮 1477
 大 成 寮 1031, 1058, 1333, 1351, 1373, 1481
 対 山 寮 1477
 田辺町移転 1490, 1492-3, 1588,
 田 辺 校 地 1344, 1348, 1354, 1358, 1365, 1367, 1567-8, 1588-9
 常 盤 寮 814-5, 819, 1013, 1448, 1454
 徳 照 館 848, 989, 993, 1034, 1036, 1042, 1055, 1272, 1287, 1308, 1349, 1459
 東 寮 467, 532-3, 945-6
 鶴 山 寮 1454
 柳 原 邸 199, 202, 207, 701
 由良キャンパスサイト 1386
 有 隣 館 1309-11, 1363
 有 終 館 322, 413, 546, 623, 716, 846, 1072, 1271, 1287, 1322-4, 1340, 1357-8, 1485, 1492, 1540, 1547, 1564
 友 山 寮 1185

E

エヴァンジェリカル・アンド・リフォー
 ムド・チャーチ 1362
 エディンバラ万国宣教会 768
 エディンバラ大学 758, 768, 771, 1362
 エディンバラ・メディカル・ミッショナ
 リー・ソサエティ 294, 310
 英和女学校 323

F

ファウラー家 1014-5
 フェリス女学校 192, 792
 フィリップス・アカデミー 18, 27-8, 39, 43-6, 53, 95, 370, 714, 1325
 婦人宣教委員会(The Women's Board of Missions) 720
 婦人宣教師(運動) 209, 720-22, 730
 福 井 地 震(救援隊) 1311-4
 福音同胞教会 976-7
 福 音 学 館 645
 福 音 教会 505
 「福音新報」 525
 「福井と同志社及新島襄先生を思ふ」 154
 「福岡日日新聞」 252, 255, 258, 265, 1118-9
 福 島 伝 道 139
 福 島 教会 287
 普及福音教会 432
 フレンド・ピース・フェロー 1025-30
 フルブライト交換教授 1333

G

外国人の永代借地権 1583
 「学校教育法」 1067-8, 1241, 1243, 1256, 1258, 1290, 1296, 1396, 1417, 1464, 1568
 学 農 社 108
 学 連 事 件 947, 952-4, 957, 960-3, 968
 学 際 研 究 1468, 1539, 1562-3, 1565, 1568
 「学制二編」 204
 「学生社会運動史」 950
 学生スキャップ事件 948-9
 学生 YMCA 735
 「学徒動員実施要綱」 1205

華族会館(霞会館) 667, 1125
 啓明館 873, 1511-2, 1564
 鷄鳴館 1378
 啓真館 1363, 1465, 1493, 1540
 希望館 1399, 1402
 キング寮 1055-7
 北小松学舎 1477
 講武館 1363, 1384-5
 光塩館 1363
 弘風館(新) 1340
 弘風館(旧) 845-6, 1287, 1340
 香柏寮 1448
 厚生館 1175, 1272, 1275, 1277,
 1279-84, 1313, 1482
 高等学校体育館 1378, 1380, 1392
 校友会館 660, 662, 677-9
 校友クラブハウス 663
 クラーク記念館(久良留久——) 81,
 139-40, 322, 467, 629-31,
 1076, 1280, 1287, 1310,
 1350, 1359, 1519, 1522,
 1547, 1565-6
 明誠館 1423
 明徳館 846, 1310, 1334-5, 1349,
 1353, 1357, 1372, 1491
 室町寮 814
 梨木学舎 1457
 梨木寮(ハワイ寮) 1030, 1158,
 1185
 梨ノ木屋敷 1025, 1028
 寧静館 1332, 1340, 1385, 1485
 新島会館 661-3, 665, 678-9, 991,
 1158, 1482, 1581
 新島館 815-6, 819
 新島記念館(アーモスト館) 1024,
 1185
 新島記念神学館(旧神学館) →クラ
 ク記念館
 新島旧邸(遺邸) 581, 623, 667, 1170,
 1508
 新島寮(元第二寮) 814-5
 新島先生遺品庫 348, 1171, 1546,
 1555, 1567, 1569
 日本電池発祥地 1341
 若王子 353, 581, 750, 763, 1169,

1315, 1335, 1553
 桜橘寮 1448
 大鷲ハウス 1360, 1574, 1576
 大沢寮 815, 1448, 1454
 嶋東寮 1481
 パイプ・オルガン 222, 728, 978,
 1010, 1017-8, 1223, 1311,
 1448, 1555
 プリンプトン寮 222, 727, 814-6,
 1012, 1185, 1448, 1454
 プール 1350, 1481
 楽真館 1453
 黎明館 681, 1402
 臨光館 1341, 1349, 1434-5, 1495
 立志館 541-2, 545, 727, 1272,
 1383, 1386
 立志館(新・旧) 1384
 三十番教室 89, 105
 薩摩藩邸(屋敷)跡 72, 75, 81, 1048
 西寮 467, 532-3
 聖州寮 1448, 1450
 静和館 220, 226, 727, 798, 818,
 820, 991, 1012, 1016,
 1221, 1402
 聖山寮 1021
 洗心寮 1448
 視聴覚教室 1349, 1380
 下村孝太郎邸(北小松学舎) 1346,
 1477
 神学館(新) 1332, 1350, 1555
 神学寮 1477-8, 1480
 新町別館 1363
 新町校地 1286, 1340-1, 1344, 1349,
 1363, 1432-4, 1567-8,
 新町校舎 1495, 1498, 1500, 1502,
 1506
 新町体育施設 1341
 新生館 1399, 1402
 新心寮 201, 1450, 1454
 心和館 1454
 至恩館 1185
 白鷺会館 1378
 至誠館 1310, 1322, 1355, 1481,
 1498
 至誠館(旧) 1287, 1340, 1355

山水育英会 1409-10
 横田文庫 1526
 吉田文庫 1526
 在外研究員 901, 1360-1, 1536, 1574
 財産権問題 462-476
 全同志社宗教部 1312
 全学闘 1491, 1500
 全寮協 1481, 1490
 建物・校地
 アーモスト館 1009-11, 1013, 1018-24,
 1344-6, 1476
 晩晴草堂 1547, 1565
 ベタニア寮 1476
 致遠館 582, 827, 945-6, 1271,
 1287, 1538
 中学校チャペル→同志社チャペル
 中学校体育館(新・旧) 1385
 第一寮 91, 532
 第二寮 92, 188, 532, 1588
 第三寮～第十二寮 532
 デントン・ハウス 201, 220, 658, 680,
 684, 727-8, 730-2, 1223,
 1227
 デントン記念館 1279
 銅駝寮 1448
 同工館 1310, 1350
 同志社墓地 709
 同志社チャペル 202, 322, 330, 353,
 467, 528, 531, 535-6, 538,
 540-1, 543, 546, 578, 588
 -9, 595-6, 623, 626, 725,
 750, 757, 771-5, 1015,
 1073, 1077, 1081, 1159,
 1287, 1361, 1383-4, 1391-
 2, 1426, 1429, 1511, 1547,
 1555
 同志社公会堂→同志社チャペル
 同志社大学会館 513, 532, 1283-4,
 1344, 1350, 1481-7
 同窓会館 559-60, 678-80, 1232
 栄冠寮 1448
 栄光館 727-8, 1011-8
 えんじゅ寮 1454
 ファウラー講堂 1014-7
 扶桑館 1355

学生会館(旧) 617, 662, 991, 1044,
 1355, 1481
 語学寮 1030-1, 1055, 1057-8
 ゲイン・ハウス 732, 1360, 1574, 1576
 暁夕寮 1351, 1481
 博遠館 1310, 1350, 1385
 柏心館 1378-80
 ハリス理化学館(波里須——) 81,
 184, 322, 376-8, 534-5,
 987, 1157, 1162, 1386,
 1559
 ハワイ寮 1024-30, 1342
 平安寮 220, 681, 727, 814, 816,
 819, 1013, 1395, 1402,
 1404
 一粒寮 1481
 率安殿 1137, 1167, 1217, 1287
 法学部学生読書館 1272
 北寮 467, 532-3, 546, 748,
 1350, 1481
 今出川校地 93, 200, 528, 1040, 1053,
 1072, 1340, 1349, 1373,
 1411, 1420, 1429, 1432,
 1482, 1495, 1498, 1502
 岩倉分室 1271
 岩倉校地 849, 990, 1030, 1033,
 1043-55, 1072, 1373,
 1526, 1567
 岩倉農園(場) 1162, 1224, 1230
 ジェームズ館 222, 226, 727, 804,
 1012-3, 1016, 1185, 1221,
 1395
 尋真館 1340, 1344, 1349, 1500
 女子大学図書館 1512
 醇化館 1057, 1060, 1378
 醇厚館 1384, 1386
 純正館 554, 1453
 樹徳館 990, 1037, 1042-3, 1271
 寒梅寮 1185
 唐崎ハウス 1335, 1353
 カールトン寮 1328
 家政科寄宿舎 727
 家政館 222, 727, 805, 815, 822,
 1013, 1453
 家政館新館 727

- ミリアム・クワイア(女学校)
807-8, 816, 818-20
- 三宅文庫 1514, 1524, 1565
- 水谷長三郎文庫 1526, 1565
- 森田記念文庫 1513-4, 1521
- 村上文庫 1526
- 無試験推薦入学制度 1387, 1396
- 内地研究制度 1536
- 内国社友 645
- 生江文庫 1526
- 楠公精神研究会 1195
- 新島文庫 220, 669-70, 672, 793, 1513
-4, 1520, 1523
- 新島会(中学) 1385
- 「新島研究」 53, 189-90, 350, 357, 401
- 新島記念文庫 1514, 1520, 1522
- 「新島旧邸文庫所蔵目録」 1508
- 新島先生五十年記念事業 664, 1168-72
- 新島スカラー 1326, 1336
- 岡田文庫 1526
- 小沢三郎文庫 1526, 1565
- 「パイデア」 1494
- 「PHOENIX」 1529
- 洛北青年同盟 968-9, 1061, 1103, 1108,
1110-1, 1134
- 「理工学研究報告」 1546
- 陸上運動会 534, 1221
- リユニオン 667, 678, 684, 1581
- リバイバル(運動) 134-7, 154, 160, 162,
278, 516, 715
- 良心碑 352, 664, 1171, 1420
- SCM(基督教学生運動—Student Chris-
tian Movement) 1086-90
- 「政治学経済学論叢」 923-5, 1527, 1536
- 政治活動禁止 1316-8, 1321
- 専従研究員制度 1541, 1544, 1546
- 宣教師(団・委員)→
アメリカン・ボード宣教師
- 宣教師館 314, 435, 438, 443, 449, 462,
466, 468, 470, 476, 731,
1028, 1186
- 「社会科学」 1543
- 社則四カ条 468, 1583
- 「しばくさ」 214, 815, 1454
- 「私塾開業願」 82, 84
- 「紫工会報」 1160
- 神学校文庫 1514
- 神学教育後援会 1201
- 新学制移行委員会 1291
- 紫苑会 680-1, 684
- 彰栄会 1393, 1426, 1580
- 「職員会誌」 822
- 宗教部 541, 1270, 1275, 1277, 1338,
1364-5
- 「宗教部案内」 1552
- 「宗教部報」 1339
- 宗教教育 222, 458, 526, 732, 871, 891,
973, 976-7, 1232, 1396,
1405, 1413, 1422, 1449,
1551-2
- 「主流」 1530, 1532-3
- 修身科加入上申書(問題) 204-5, 222,
1397
- 終身社員 641
- 出陣学徒壮行会 1203-4
- 「想園」 1530
- 蘇峰文庫 1526
- 「壮図」 1183
- 「創造科学教育10年の歩み」 1563
- スチューデント・プロフェッサー制度
1025-6
- 水上運動会 534
- 「大正六七年同志社紛擾顛末」 653,
782-3, 785
- 高柳文庫 1526
- 竹林文庫 1526
- 「哲学年報」 1530
- 特別奨学金制度 1336
- 特殊文庫 1516-8,
- 東京同志社近代人会(委員) 651-2, 785
- 東華学校(仙台) 233, 261, 273-87, 400
- 「ともしび」 1530
- トレジャアラ 1271-3, 1295
- 通俗講談会 385
- 植木枝盛文庫 1363, 1513-4, 1518, 1565
- 上野文庫 1565
- 「我等の同志社」 620, 665, 1105, 1107
- 山路愛山文庫 1524, 1565
- 第二山水中学校 1409
- 山水中学同窓会 1426

- フリント記念文庫 1514, 1521-3
 「外国宣教師論」 218, 427, 434, 638
 学理講究会 1535
 「学生部年報」 1477, 1480, 1484, 1487
 学生審議会 911, 1067
 学闘連(学園闘争連絡会議) 1488-9
 「学会友誌」 541
 ハーヴァード・燕京同 志社東方文化講座
 1330, 1543
 ハーヴァード・燕京研究所 1329-31,
 1543, 1574
 花岡山(第五)紀念会 144-5, 149
 原田文庫 1526
 「一粒の麦」碑 1436
 「法学論叢」 1528
 「奉教趣意書」 100, 143, 150
 「薨」 1405
 絲屋文庫 1526
 岩倉どんち 1375, 1378
 「人文学」 1533-4
 「人文科学」 333, 1543
 「人文科学研究所0年史」 1541, 1543
 裏会(ヨゼフ会) 911
 「上申書」事件 1116-20, 1130-6
 「樹徳」 1037, 1042, 1063
 樹徳会(徳照会) 1037-8, 1042,
 1063, 1310, 1426, 1580
 科外講演(講義) 770-80, 910-1
 偕行社(中学校) 1409, 1416
 夏期伝道 117-8, 216
 夏期(季)学校 331, 505, 784, 1087-8
 神棚事件 1060-1, 1094-1102
 カールトン委員会 1329
 かたみの松 210
 加藤文庫 1526
 加藤延年コレクション 1567
 火曜会 712
 カウンセリング・センター 1339
 「経済学論叢」 932
 「研究所報」(大学人文科学研究所) 1564
 ケーリ文庫 1363, 1526, 1565
 「ケーリ文庫 目録」 739, 1526
 「基督教研究」 77, 889, 932-3, 935-7,
 939-41, 978, 1528-9,
 1531-3
 「キリスト教社会問題研究」 1106, 1542-
 3
 キリスト教社会問題研究会 1330
 「きささげ」 1388
 岸和田地方の伝道 112
 北垣文庫 1526
 興亜研究会 1195
 小林文庫 1525
 小林商業研究館 1526
 小林図書資本 1526
 「興風会日誌」 163, 170, 172
 皇后行啓碑 1217
 コーヒー・アワー 1294, 1314, 1325
 考古学陳列室(収蔵庫) 1567-8
 国防研究会 968, 1121, 1123-4, 1127,
 1129
 国際交流 768, 1009-32, 1324-34,
 1358, 1360-1, 1575
 小室・沢辺記念文庫 404, 420, 429,
 1512-4, 1517-8, 1565
 近藤栄蔵文庫 1526, 1565
 香里学園(財団・学校法人) 1408-9,
 1411-4, 1416, 1420-1
 「香里の丘」 1413, 1420-1, 1426-7
 「厚生学年報」 1531
 「厚生館年報」 1284
 校友文庫 1514, 1523
 「校友会報」 597-8, 635-7
 校友戦没者慰霊祭 1139, 1202
 熊本バンド 100-1, 105, 108, 112, 141-
 73, 237, 374, 422, 433, 1521
 「桑の木」 1392
 キャンドルライト・サービス 1314
 教職適格審査委員会 931
 京都アメリカ研究夏期セミナー
 1331-4, 1544
 京都ホーム 202-3, 206
 京都看病婦学校 288-318
 「L.L.L.」 1530, 1534
 「街」 1530
 明治18年事件 196, 204, 206, 669
 明治会 682
 明治専門学校 232-5, 245-54, 260, 269,
 331, 351, 396, 399-400, 422,
 579, 1329

事項索引 D (同志社)

- 同志社労働ミッション 910, 1071, 1081, 1085
- 「同志社ローマンス」 144, 181, 185, 210-1, 216
- 「同志社論叢」 907, 923-32, 1103-12, 1527, 1529, 1536
- 「同志社論叢」事件 930
- 同志社政法学校 372, 394-429, 902, 1510, 1512-3, 1517
- 同志社聖十字団「声明書」 1092
- 同志社専門学校(明治期) 564-74
- 同志社専門学校(昭和期) 980-1002, 1151-63
- 同志社専門学校英語師範部 987-1002, 1151-3
- 同志社専門学校高等商業部 661, 980-7, 990-2, 1057, 1072
- 同志社設立21年記念会演説 442, 636-7
- 「同志社設立の始末」 15, 110, 398-9, 1409, 1557
- 「同志社設立始末」 1556
- 「同志社社長より米国伝道会社評議員会に贈りし書状」 438
- 「同志社社報」 615-6
- 同志社社員(会) 235, 280, 315, 433-61, 462-76, 643
- 同志社社史史料編集所 1278, 1546, 1565-6
- 「同志社新聞」(第1次) 590-8
- 「同志社新聞」(第2次) 599-606
- 「同志社新聞」(昭和期) 616-9
- 同志社新聞学会 616-7
- 同志社神学部特別伝道 776
- 同志社神学校 130, 440, 443, 446, 451, 460, 514, 551, 555, 567-77, 736, 747, 771, 848, 975
- 同志社神学校夏期学校 1199
- 同志社神学校基本金 576
- 同志社神学教育協力委員会 1201
- 「同志社新報」 620-1
- 「同志社心理」 1533-4
- 同志社資産管理委員 316, 673, 874, 879-80, 1584
- 「同志社視察之記」 104-5, 153, 201, 213
- 「同志社商学」 1528, 1533
- 同志社商業高等学校 1428-37, 1495, 1516
- 同志社商業高等学校の学園紛争 1432-6
- 同志社商業高等学校特別委員会 1435
- 同志社消費組合 966-7, 1078, 1081
- 「同志社職制」 585, 654, 842-3, 851, 1269-80
- 同志社少壮校友団 652-4, 785-6
- 同志社創立50周年記念事業 661
- 同志社創立60周年 664, 679, 930, 1022, 1043, 1105
- 同志社創立80周年記念行事 1384
- 同志社創立百周年 553, 678, 733, 1344, 1424, 1456
- 同志社創立百周年記念ダブレット 8
- 学校法人同志社収益事業部 1276
- 収益事業 1244, 1254, 1268, 1589
- 「同志社週報」 616
- 同志社(神学校)宗教博物室(館) 1518-9, 1566
- 同志社騒動 781, 930, 963, 1120, 1148
- 同志社速成神学科 127, 129
- 同志社創造科学教育研究所 392
- 「同志社タイムズ」(The Doshisha Times) 590, 621-2, 1286, 1308
- 「同志社哲学」 1533-4
- 同志社東亜文化研究所 1196, 1536
- 同志社東亜研究所 1195-6, 1563
- 同志社特別伝道 176
- 「同志社徳富文庫所蔵目録」 1526, 1547
- 「同志社通則」 301, 402, 430, 445-6, 468, 474, 634, 640-2, 1584
- 「同志社通則」改正問題 641-2
- 「同志社運動部規則」 604
- 同志社 YMCA 会館 1021
- 同志社予備学校 510-4, 518-21, 527, 536
- 同志社予備校 265, 396, 403, 512-3
- 同志社(今出川)幼稚園 551-60, 674, 1257, 1401, 1568
- 同志社幼稚園(出町講義所) 552-4, 726
- 同志社幼稚園母の会 562
- 同志社幼稚園維持委員 557
- 同志社有期社員 640-1, 644
- 「叙 麓」 595-6, 598
- 叡山会議 1136

- 同志社女子大学事務機構 1279-80
同志社女子大学研究所 1279-80, 1454,
1547, 1561, 1563
「同志社女子大学研究所だより」 1548,
1562
同志社女子大学教育基金制度 1456
同志社女子専門学校 820-3, 1209-32
同志社女子専門学校報国団 809
同志社女子専門学校錬成部 809
同志社十年期祝会 623, 1511
同志社高等女学部 222, 1209, 1228,
1396, 1573
同志社高等女学部報国団 1220
「同志社高等女学部新聞」 1217-8
同志社高等女学校 1228-32, 1396-7
同志社高等女学校父兄会 1398
同志社カラー 1427
“Doshisha College Song” 574, 581,
1419
「同志社家政」 1534
「同志社景況記」 103
同志社経専学会 1528
「同志社経専論叢」 1528
同志社経済専門学校 1065-8, 1156, 1244
同志社財団寄附行為(証) 475, 644-5,
677, 835, 843, 895, 1148,
1239-52, 1584
同志社寄附行為(学校法人) 1253-69,
1417
同志社基本金募集 612, 649-51, 758
「同志社記事」 126, 129, 134, 144, 149,
154, 157, 161, 198, 207, 220,
623, 626
同志社興亜専門学校 1153-4
同志社購売組合 966, 1081
同志社工学会 1533
「同志社工学会誌」 1533, 1546
同志社講義会 434
同志社工業専門学校 1156-63
同志社校歌 1322
同志社公会 349
同志社国際高等学校 1567
同志社香里中学・高等学校 1408-27
同志社香里中学・高等学校同窓会(紫翠
会) 1426-7
「同志社綱領」 445-61, 522-7, 641-4
「同志社高商論叢」 1528
同志社高等普通学校 570
同志社高等学校 1328, 1368-94, 1411,
1419
同志社高等学校同窓会 1393-4
同志社高等学校父兄会 1411
同志社高等学部 394, 428, 527, 530, 566-
7, 570
同志社高等工業学校 1158
同志社高等商業学校 980-92, 1033-68,
1156, 1181, 1244, 1573
同志社高等商業学校商学会 1528
「同志社校友同窓会報」 619, 658, 660,
665, 678
同志社校友同窓会報社 619
同志社校友会 623-68, 1170
同志社校友会選出理事 862
同志社倶楽部 652
同志社クルー 534
「同志社教育綱領」 1113-4, 1117, 1216-
7, 1391
同志社教会 175, 281, 283, 531, 604, 623,
816-20, 891, 913, 978, 1169,
1311, 1417, 1419, 1449, 1570
同志社教職員組合(連合) 1246, 1254,
1259, 1266, 1358, 1485
「同志社九十年小史」 394, 426, 678,
1104, 1284, 1306, 1420,
1422, 1430, 1579
同志社内同志会 598
「同志社新島遺品庫収蔵目録」 1547
同志社新島会館維持会 663
同志社農業専門学校 1192
同志社の基督教主義 785, 835, 856, 858,
1371, 1550, 1554-5
同志社の徽章 1096
同志社の宣教師 687-739, 970-9,
「同志社の思想家たち」 411, 886, 917,
929, 1102
「同志社大江義塾徳富蘇峰資料集」 151,
183, 241
同志社理事(会) 476, 645-6, 1239-69
同志社理工教育再興調査委員会 1157-8
“Doshisha Literature” 344, 1529, 1534

事項索引 D (同志社)

- 同志社英学校余科 106, 125, 240, 1509,
1521, 1527, 1577
- 同志社演説会 172-3
- 「同志社服務規定」 1319
- 同志社普通学校 112, 373, 413, 420-1,
423, 425, 464, 510-50, 569-
70, 1062, 1376, 1381, 1393,
1568
- Doshisha Common School(D.C) 1381
- 同志社外事専門学校 1153-6, 1161, 1163
- 「同志社外国文学研究」 1534
- 「同志社外国教師問題の顛末」 434, 636
-7
- 「同志社学校設立の由来稿」 13
- 同志社学院 272, 513-4
- 同志社学院女学校 790
- 同志社学術演説会(講演会) 153, 155-6,
158-9, 386
- 同志社学術研究所 1539
- 同志社学理講究会 172-3, 1535-6
- 同志社学制改革 428, 828-9,
- 同志社学生自由擁護同盟 958-9
- 同志社学生クリスチャン・フェデレーシ
ョン(DSCP) 1313
- 「同志社学生新聞」 616-9, 665, 888
- “Doshisha Girls School” 200
- 「同志社五十年裏面史」 659-60
- 「同志社五十年史」 659-60
- 「同志社派」 1529
- 「同志社汎論」 1530
- 同志社ハリス理化(理科)学校 237, 369-
93, 431, 440, 467, 474, 567,
983, 1292, 1510, 1513, 1547,
1568
- 同志社平和文化研究所職制 1539
- 同志社ヒマラヤ遠征隊 1343
- 「同志社法学」 932, 1533
- 同志社法学会 923, 1081, 1533
- 同志社邦語神学校 283
- 同志社邦語神学科 128, 130, 1535
- 同志社本部(事務局・事務所) 550, 645,
647, 661, 665, 1023, 1043,
1068, 1139, 1293
- 同志社本部事務機構 1269-78
- 「同志社一百年の歩み」 1359
- 同志社評議員(会)(法人) 1265-7
- 同志社評議員(会)(財団) 655, 557-8,
897-8, 1142, 1144, 1243-4
- 「同志社評論」 590-4, 598, 602
- 同志社イヴ(EVE) 820, 977, 1210, 1220,
1420, 1451
- 「同志社一覽」 869
- 同志社医学校 292-3
- 「同志社彙報」 619
- 同志社維持会 648, 651, 663-4, 762, 835,
847, 892, 1154, 1585
- 同志社維持会(第二次) 835
- 「同志社事業報告」 1515, 1544
- 「同志社時報」 590-622
- 「同志社人」 480, 726, 886, 1149, 1334,
1551, 1591
- 同志社尋常中学校 439-44, 450-61,
521-7
- 同志社自由大学 1498
- 同志社女学校 191-226, 789-823, 1209-
32
- 同志社女学校父母の会 1209, 1397-8
- 同志社女学校普通学部 581, 757, 795,
802, 881
- 同志社女学校学徒義勇隊結成式 1227
- 同志社女学校校友会 679, 808-9, 822,
1015
- 同志社女学校報国隊 1164, 1183
- 同志社女学校評議員 676, 797
- 同志社女学校基本金(募集) 224, 764,
797
- 「同志社女学校広告」 198, 789
- 同志社女学校高等女学部 577, 581, 802,
822-3, 1585
- 同志社女学校新島文庫 892, 1513, 1520
- 同志社女学校専門学部 789-820
- 同志社女子部防護団規定 1221
- 「同志社女子部の百年」 222, 1227, 1230,
1407
- 同志社女子中学・高等学校 1395-1407
- 同志社女子大学 576, 815, 1438-57
- 同志社女子大学部 798
- 同志社女子大学大学院 1462, 1468-9
- 「同志社女子大学学術研究年報」 1451,
1533, 1548

- 8, 1339, 1537-40, 1545, 1563
同志社大学基本金(募集運動) 575-6,
586, 649-50, 758, 763-4, 785
同志社大学基本財産供託方法届 875
「同志社大学記事」 231
同志社大学基督教学生団体連盟 1339
同志社大学キリスト教主義教育委員会
1364
「同志社大学広報」 1356, 1470-1, 1488,
1491-2, 1494, 1496, 1498-
502, 1506
同志社大学広報委員会 1470
同志社大学国際交流委員会 1575
同志社大学厚生学教育後援会 1281
同志社大学厚生館委員会 1283
同志社大学教育学会 1494
同志社大学教職員組合 1484, 1499
同大満蒙研究会 968
同志社大学名誉文化博士 1325-6, 1342,
同志社大学名誉神学博士 738, 973, 979
同志社大学入学試験 1347, 1349
同志社大学連合教授会 1082
同志社大学理工学部設置 1157,
同志社大学理工学研究所 1278, 1340,
1545-6, 1561, 1563
「同志社大学政科大学校規則」 428
同志社大学生活協同組合(生協) 1323,
1334, 1482, 1484, 1486
同大赤救班 965
同志社大学専門部 981-3
同志社大学設立義捐金募集運動 227-72
同志社大学設立委員会 575
同志社大学設立の仮発起人会 349, 396
「同志社大学設立の旨意」 235, 243, 246-
8, 261, 353, 396, 399-400,
407, 411, 437, 477, 762, 840,
1170, 1509, 1549, 1557-8,
1583
「同志社大学設立之主意」 244, 396
「同志社大学設立之主意之骨案」 229,
236, 244, 396, 407
同志社大学設立趣意及顛末 578-9
「同志社大学設立主意書」 235, 242, 756
同志社大学社会事業学教育後援会 1280
同志社大学社会問題研究会 947
同志社大学資金募集 763, 870
同志社大学商学会 1533
同志社大学奨学金規定 1366
同志社大学宗教センター 1338
同志社大学修練団 1177-80
同志社大学想園同人 1530
同志社大学短期大学部 1257, 1304,
1308, 1533
「同志社大学短期大学部学術研究年報」
1533
同志社大学図書館(含同志社図書館)
545, 739, 1140, 1363, 1372,
1383, 1430, 1497, 1512,
1515-6, 1540, 1565
「同志社大学図書館報びふりおてか」
1517, 1520-1, 1525-6
「同志社大学通信」 1356
同志社大学予科 582, 762, 825-51, 869,
891, 893-4, 914, 987, 1157,
1192, 1286, 1372-3, 1383,
1573
同志社大学予算委員会 1490
「同志社大学在外研究員規定」 847
同志社大学在外研究員制度 1337
同大全協学生支持団 965
「同志社大学校設立旨趣」 231, 244, 396,
398
同志社同窓会 629, 658, 662-3, 668-86,
1015, 1212, 1396, 1578-80
「同窓会学友会期報」 671, 1015
「女学校期報」(同志社) 210, 216-7, 224,
629, 658, 668-78, 681-2,
685, 792-6, 1215
同窓会ジュニア 686
「同窓会会報」 558-9, 671, 680-4
「同志社同窓会豆会報」 684
同志社英文学会 1530
同志社英文学研究会 681
同志社英学校 63-94, 98-9, 141, 193-4,
196, 198-9, 201-2, 209, 212-
3, 227, 229, 237, 373-4, 396
339, 479, 493, 510-1, 513-4,
517, 688, 694, 865, 1391,
1395, 1408, 1568
同志社英学校開校の祈禱会 90

事項索引 D (同志社)

- デントン文庫 1526
- 同 経 会 1580
- 同 工 会 1580
- 独立採算(制) 881, 1276, 1281, 1320,
1414, 1431, 1436, 1442,
1572, 1587, 1589
- 同 心 交 社 150-2, 183
- “Doshisha” 474-5
- 同志社アカデミズム 906-8, 1556, 1559,
1563
- 同志社「アルムニ」会 623-30, 669
- 「同志社アメリカ研究」 1527, 1545
- 同志社別科神学科 130, 133, 500, 505
- 「同志社美学」 1533-4
- 同志社美学会 1533
- 同志社防護団女子部分団規定 1221
- 「同志社文学」 319-44, 598, 1528-9, 1533
- 同志社文学会 172, 335, 344, 1529-30
- 同志社文学社 323, 601
- 「同志社文芸」 1529
- 同志社文化研究所 1539
- 同志社分校女紅場 198, 200
- 同志社病院 288-318
- 同志社チーア 535, 1041, 1323
- 同志社中学 510-50, 833, 855, 881-2,
917, 1064, 1182, 1186-90,
1385-6, 1573
- 同志社中学校 546-50, 1187-90, 1368-
71, 1381-94
- 同志社中学(校)同窓会 1392-4, 1580
- 同志社中学学友会 541, 1387
- 「同志社中学校学校新聞」 1387
- 同志社中学校評議員会 1371
- 同志社中学校・高等学校体育館兼講堂建
築資金募集趣意書 1392
- 同志社中学改善委員会 548
- 同志社中学・高校同窓会 1393-4
- 「同窓会誌一同志社中学・高校合同記念
号」 1393
- 同志社中学生徒会 1387
- 同志社中学肄 1203
- 同志社大学(専門学校令による) 564-
89, 649-51, 747-88, 980-3
- 同志社大学(大学令による) 824-922
- 同志社大学(新制) 1285-1367
- 同志社大学アメリカ研究所 1096, 1113,
1278, 1306, 1333, 1339,
1543-45, 1561
- 同志社大学部 536, 580, 767, 826, 881
- 同志社大学大学長候補者選挙 1248-52,
1354, 1356, 1470-1, 1487,
1489
- 同志社大学大学紛争 1355-6, 1379,
1432-4, 1470-1507
- 同志社大学大学院 836, 839, 842, 1458-
69
- 同志社大学第一部学友会 1482-91
- 同志社大学第二部 1257, 1282
- 同志社大学第二部学友会 1483-93
- 同志社大学同和教育委員会 1364
- 同志社大学英文学科文学会 1528-30
- 「同志社大学英語英文学研究」 1534
- 同志社大学英語倶楽部 582
- 同志社大学衛生委員会 1283
- 同志社大学外国文学会 1534
- 同志社大学街社 1530
- 同志社大学学位(規程) 842, 1463-8
- 「同志社大学学事年報」 1463
- 同志社大学学生普通選挙促進運動団
943
- 同志社大学学生健康保険組合 1337-8
- 同志社大学学生社会科学研究会 946-7,
949-52, 956
- 同志社大学学友団 1351-2, 1494
- 「同志社大学学友会便覧」 619
- 同大反帝同盟班 965
- 同志社大学法学部十三名教授団 1075,
1077, 1092, 1106
- 同志社大学法学会 932
- 同志社大学保健委員会 1283
- 同志社大学報国隊 1180-2, 1208
- 同志社大学一般教育委員会 1365
- 同志社大学一般寮 1477-8, 1480-1
- 同志社大学事務機構 1269-78, 1281
- 同志社大学人文学会 1534
- 同志社大学人文科学研究所 1326, 1330
- 同志社大学夏期講座 1309
- 同志社大学経済学会 932, 1532
- 「同志社大学経済学論叢」 1532
- 同志社大学研究所 1192, 1197-8, 1277-

バルナバ会 914
 ヴェッサー女子大学 →V項を見よ
 B・B・S運動(Big Brothers and Sisters Movement) 504

米国同胞教会伝道会社 892
 米国婦人伝道会社 202, 219
 米国派遣宣教師事務局 737
 米国海外伝道協会 280
 米国組合教会本部 829
 米国教育使節団 1240
 米国太平洋婦人伝道会 798, 1010, 1012, 1222

ベロイト大学 78, 698-9, 703
 ベルリン号 36-7
 ボーディング・スクール 194, 196
 ボウドウィン大学 718
 ボン大学 393, 424
 ボルガ団 942, 944-5
 戊申詔書奉戴式 1139
 文阿弥亭 155
 ブラッドフォード 690
 ブリンマー女子大学 822, 1439

C

治安維持法 915, 953-5, 959, 961-2, 964, 1067, 1142, 1146
 「治安警察法」 488
 知恩院 191, 234, 351
 「徴兵令」 445, 449, 459, 516-7
 徴兵猶予の特典 217, 274, 442, 445-6, 452, 458, 483, 522, 524-5, 527, 541, 564, 583, 642, 645, 753, 1101, 1156, 1167, 1191-2, 1202, 1368, 1391, 1558
 長老派(一致教会派) 63-5, 119, 277, 279, 293, 691
 朝鮮伝道 783
 長州屋敷 81
 「朝野新聞」 235, 251, 263
 「中外電報」 251, 254, 265
 「中外日報」 1115-6, 1119
 「中学校令」 430, 440-1, 458, 541, 550, 645, 1186-7, 1368
 中央大学 835, 844, 1472
 中等学校教員無試験検定 222, 585, 587,

780, 811-3, 996, 998, 1057
 「中等学校令」 1186-8, 1230

D

「大日本帝国憲法」 319, 334, 400
 大日本生産党 968, 1061, 1108
 第三高等学校 733, 942, 947-8, 950, 1064
 ダートマス大学 975-6
 同胞教会(神学校) 773, 1337
 洞酌医学校 290-2

同志社

愛山文庫 1514, 1523
 アメリカ研究夏期セミナー 1574
 アーモスト同志社フェロシップ 1326-8
 アーモストと同志社の交流計画 1346
 安東偉人文庫 1526
 荒木文庫 1526
 荒木英学文庫(目録) 1363, 1526
 「あしあと」 1437
 “ASPHODEL” 1534
 アセンブリー・アワー 1294, 1307, 1320, 1339, 1497
 「文芸街」 1529
 文芸会 808, 1221
 「文化学年報」 1533
 チャペル・アワー 1294, 1311, 1314, 1339, 1364, 1497, 1551-2, 1581
 チャペル籠城事件 1106, 1112, 1121-30, 1180
 朝鮮留学生学友会 959
 第一公会 113, 117
 第二公会(教会) 113, 116-8, 121-2, 124, 162, 183, 349, 623-4
 「第二公会録事」 114, 118, 158-9
 第三公会 113, 117-8, 120-1, 124
 男女共学 810, 840, 893-5, 1240, 1369-71, 1375, 1381-2, 1396-7, 1428, 1438
 伝道者養成学校 98, 433, 701
 伝道者養成所(Training School) 73, 77-8, 80, 92, 195-6, 227, 1395

事 項 索 引

A

アイロロ 350
 会 津 藩 75
 赤 旗 事 件 492, 494
 天 城 教 会 266
 アメリカン・ボード(A.B.C.F.M.) 13,
 15, 21-7, 79, 87, 98, 110,
 193, 195-7, 202, 207, 215,
 228, 233, 240-1, 243, 274,
 280, 287, 289, 292-4, 296,
 298, 314-5, 331, 346, 362,
 373, 390, 395, 412, 427, 433-
 9, 442-9, 451-5, 462-6, 468-
 76, 552, 557, 628, 634, 636-
 8, 644-5, 687-92, 714, 720-
 2, 726, 728, 735, 752, 769,
 892, 972, 1009, 1015, 1053,
 1294, 1328, 1362, 1395,
 1419, 1439, 1454, 1573-4
 「ミッシヨナリー・ヘラルド」 10, 22,
 26, 87, 110, 195, 203, 235,
 240, 693, 711, 1527
 アメリカン・ボードの第65回年次大会
 9-27, 29, 56, 97, 227, 687
 アメリカン・ボードと同志社の関係
 430, 433-4, 438-9, 443-5,
 483, 637, 651, 748, 1215,
 1396, 1406, 1584
 アメリカン・ボード宣教師 24, 28, 56,
 64, 68, 73, 78-9, 86, 88, 91,
 93, 102, 119, 201, 210, 311,
 432-5, 437-9, 442-3, 446-9,
 551-2, 556, 687-739, 970-
 79, 1020, 1227, 1313, 1342,
 1361-2, 1414, 1419, 1575
 アメリカン・ボード在日資産問題
 217-9, 432-3, 435-9, 442-4,
 448-9, 454, 462-76, 692,

1165, 1582, 1585
 アーモスト大学 17-8, 21, 24, 27-8, 31,
 39, 46-8, 52-3, 57, 73, 95-7,
 227, 237, 239, 331-2, 370-1,
 692, 714, 727, 734, 736-7,
 739, 752, 758, 768-9, 974,
 977, 1009-10, 1012-3, 1018-
 20, 1022-3, 1030-1, 1056,
 1288, 1293, 1324-7, 1337,
 1342, 1344-6, 1358-9, 1361,
 1419, 1441, 1554, 1574-5
 アーモスト大学代表 1019, 1021-3,
 1031-2, 1326
 アンダーマット 350
 アンダーヴァー・ニュートン神学校
 27, 1311
 アンダーヴァー神学校 17-8, 28, 31, 34,
 41, 43, 46, 53, 56, 64-5, 69,
 95, 97-8, 371, 395, 690, 700,
 710, 714, 736, 972-3
 安 中(群馬県) 66, 68, 273
 安中日曜学校 253
 青山学院 440, 458, 461, 526, 933, 998,
 1260
 青山女学院 192, 789
 アーラム大学 1360
 「朝日新聞」(大阪) 486, 581, 836, 1072-
 3, 1102, 1108, 1118, 1135
 足尾鉾毒事件 481-2, 484, 489
 跡見女学校 192
 麻 布 中 学 440, 526
 麻布英和学校 526
 B
 梅花女学校 144, 206, 208, 266, 809, 811,
 821
 ヴァージニア大学 →V項を見よ
 番 町 教 会 111
 バプテスト派 25, 64, 254, 691

3, 1270, 1281, 1289-90,
1293-4, 1304-6, 1315-6,
1342, 1372-3, 1397-8,
1531, 1545, 1547, 1574
湯浅 半月 →湯浅吉郎
湯浅 初子(はつ) 224, 668, 673
湯浅 平八 262
湯浅 治郎 235, 260, 265, 269, 280, 313-
4, 316, 403, 435, 437, 443-4,
447, 469, 524, 569, 572, 576,
649, 651, 653, 673, 765, 785,
1583-5
湯浅吉郎(半月) 118, 121, 128, 137,

147-8, 273, 323, 342-4,
483, 531, 568, 571, 594, 598,
609, 771, 793, 1329, 1514,
1519

湯浅 六郎 344
湯浅 すめ 262
由比 黄二 1108
由木 康 1314
湯谷磋一郎 342

Z

ゾーグ(Zaugg, E. H.) 1017-8
ゾール(Zoll, D. L.) 1032

- 山本 八重(子) →新島八重
 山室 軍平 321, 401, 495, 505-9, 707,
 773, 777, 816, 910, 1549
 山室(佐藤)機 恵子 507
 山中 百 329, 512, 805-6, 821, 1577
 山梨勝之進 286
 山岡 弘匡 291
 山岡邦三郎 112, 137, 147
 山岡 登茂 216
 山下 婉子 765, 798
 山下 亀三郎 1409-10
 山下 芳一 929
 山下 好子 1302
 山谷 省吾 1072
 山崎 恵純 420, 425
 山崎今朝弥 945
 山崎 直記 313
 山崎 為徳 106-8, 110, 112, 117, 121,
 126, 142, 144-5, 150, 152-7,
 179, 181, 186, 228, 240, 283,
 1527, 1577
 山崎 亨 978, 1305, 1336, 1366, 1444
 山添 通子 1443
 柳川鉄之助 1304
 柳 兼子 807
 柳 宗悦 724
 柳原 愛子 88
 柳原 前光 88, 196, 198
 柳島 彦作 545, 1206
 矢内原伊作 1498
 矢内原忠雄 1147, 1324-5
 ヤング(Young, J. G.) 1032, 1313, 1342
 矢野 禾積(峯人) 344, 1287
 安田 忠吉 130
 安田保太郎 321, 1535
 安本 勝二 245
 安永 武人 1300
 安岡 重明 1543
 横井みや子 →海老名みや子
 横井 小楠 186
 横井(伊勢)時雄 107-8, 110, 116, 126,
 142, 151, 156, 179, 197, 273,
 278, 291, 300, 349, 361-2,
 442-3, 445-7, 450, 453, 455-
 7, 459-60, 473-4, 522, 524,
 527, 537, 610, 624-5, 633,
 639-44, 646, 648-9, 706,
 747-9, 751, 762, 771, 885,
 1114, 1166, 1289, 1521, 1577
 横本 勝 1326
 横田 勝治 129
 横田 守 1434
 横田 操 1221
 横田 直清 129
 横田 安止 59, 137, 327, 352-3, 355-6,
 360-2, 400-1, 1526
 横山 婉子 552
 横山 円造 116, 120
 横山 由清 31
 米田庄太郎 428, 527, 531, 568, 571, 583
 米沢 尚三 1072
 米津泉之助 379
 依光 方成 135
 吉田源治郎 1072
 吉田 賢一 1110
 吉田 賢輔 33-4
 吉田 隆吉 1202
 吉田 作弥 107-8, 116, 120, 144, 156,
 424-5, 638-41, 1526, 1577
 吉田清太郎 1169
 吉枝 常德 591-2, 595-8, 600
 吉井 省三 247, 250
 吉川 巖 90
 吉川 順 1444, 1455
 吉川末次郎 960
 吉川季次郎 892, 1073
 吉川哲太郎 1183, 1196, 1536, 1544
 慶松勝左衛門 379, 389
 吉村 賢蔵 116
 吉野 作造 779, 887, 906, 910, 912-3,
 929, 942, 960, 1069-70, 1074
 吉雄琢之助 420
 吉岡 義陸 868-9
 吉武 堯右 1356, 1541-2
 吉沢 義則 583
 湯浅 八郎 558, 757, 1010, 1022-3, 1061,
 1095-6, 1100-2, 1108-17,
 1119, 1124-6, 1130-5,
 1138-42, 1144-50, 1180,
 1211, 1217, 1245-6, 1252-

1021, 1419

W

- 和田久太郎 944-5
 和田 正幾 281, 285
 和田 正脩 106, 144, 1577
 和田 琳熊 344, 527, 571, 578, 583, 610,
 660, 675, 784, 788, 802, 821,
 829, 832-3, 867-9, 873, 885-
 6, 1079, 1089, 1528
 和田 武 831, 906, 926, 929-30, 1075,
 1083, 1106
 和田 洋一 410, 886, 917, 929, 1101,
 1106, 1112, 1127, 1141,
 1295, 1354, 1430, 1529
 和達 孚嘉 282
 ワイコフ(Wyckoff, C. T.) 733, 735
 若松兎三郎(華瑤) 401, 620, 661, 664,
 666, 1072, 1119-20, 1166,
 1170, 1201, 1246
 若槻礼次郎 955
 涌井安太郎 1090
 鷲尾 健治 1058-9, 1061, 1063, 1097-
 1101
 綿引 綾子 617
 渡辺栄太郎 265
 渡辺 昇 70, 73
 渡辺(錠太郎)陸軍大将 1059
 渡里 森蔵 1206
 渡瀬 昌雄 269
 渡瀬 常吉 910
 ウォレン(Warren, C. M.) 528, 531,
 538

Y

- 矢上英太郎 1080
 八木 信三 946
 矢島 楫子 484
 薬師川虹一 1543
 山部 隼介 1107
 山田 武甫 269
 山田 慶児 1498
 山田健二郎 111
 山田健三郎 258
 山田 健三 1295, 1443

- 山田 良斉 120
 山田 貞夫 1126, 1128, 1157, 1179,
 1247, 1261, 1288, 1291,
 1372, 1374-5, 1411, 1413-5,
 1417-8, 1420, 1422-3
 山田 齋 1288
 山田 正三 929
 山寺 容磨 379
 山県 有朋 492, 581
 山県 久 674
 山県 萬吉 542
 山口 義三 487
 山口 金作 552, 1201
 山口 孤剣 483
 山口正太郎 831, 868, 870, 906, 926
 山路 順吉 1071
 山路 一三 135, 137, 626-7
 山路 弥吉(愛山) 482, 584, 775-7,
 1524, 1559
 山川 均 441, 457, 483, 948, 950, 953
 山川隆二郎 327
 山本 二郎 1547
 山本 覚馬 71-2, 74-8, 80-2, 80, 84,
 86-9, 93-4, 110, 113, 153-6,
 193, 195-6, 203, 205, 231-2,
 245, 248, 291, 300, 306, 345-
 7, 349, 355, 357, 510, 631-3,
 688, 694-5, 711, 780, 814,
 1410, 1508, 1582
 山本 龜市 831, 906, 926, 929, 1105
 山本 一清 892
 山本吉之助 538
 山本 是郎 1080, 1089
 山本 浩三 1356-8, 1496, 1499-500,
 1502, 1504
 山本 みね(子) 113, 116, 196-7
 山本美越乃 653-6, 702, 866, 886, 929,
 987, 1149
 山本音次郎 387
 山本 さく 113, 208, 214, 814
 山本 宣治 946, 949, 952, 956
 山本 正二 943
 山本唯三郎 586, 827, 873, 1208, 1512,
 1564
 山本 徳尚 320, 323, 498, 654

U

内田 康哉 118
 内田 政子 765, 798
 内田 親耕 257
 内田 堯 709
 内田 智雄 1306, 1330
 内田 陽吉 256
 内田 良道 540
 内ヶ崎作三郎 775, 911
 内川 菊義 1503
 内村 鑑三 49, 52, 278, 332, 484, 486,
 493, 778, 1325
 内山 愚堂 493
 内山田直作 257
 内山田ツヤ 257
 ウッド(Wood, R. W.) 1361
 ウッドベリー(Woodbury, B.) 697
 ウッドベリー(Woodbury, J.) 697
 ウェッブ(Webb, S. J.) 773
 上田 敏 572, 584, 775, 802
 上田 勝行 379
 上田周太郎 326, 328-9
 上原 方立 111, 116-7, 120, 137, 144,
 148, 150-1, 154, 160, 178,
 181
 植木 枝盛 420, 425, 1518
 植村 正久 277-8, 494
 上村 正夫 950-2
 上野栄三郎(英三郎) 90, 154, 423, 635,
 892
 上野不二雄 892
 上野 イト 1407
 上野岩太郎 260
 上野 稀雄 892
 上野 光隆 1337
 上野 直蔵 344, 621, 1030, 1032, 1291,
 1306-8, 1329, 1332, 1334,
 1341, 1344-5, 1349, 1351,
 1353-4, 1361, 1414-5, 1455,
 1459, 1482-3, 1485, 1530,
 1536, 1544
 上野 経男 892
 ウェインライト(Wainright, M. E.)
 721, 806

ウェストフォール(Westfall, L. D.)
 1032

上山 慶三 546
 宇川盛三郎 327-8, 423, 425
 烏賀陽然良 929
 ウィンチ(Wintsch, N. E.) 1328
 ウィリアムズ(Williams, C. M.) 497
 ウィリアムズ(Williams, D. M.) 1327
 ウィリアムソン(Williamson, A.) 31-2
 ウィルキー(Wilkie, F.) 36
 ウイルソン(Wilson, D. A.) 1328
 ウイルソン(Wilson, J.) 194, 203, 220,
 721

ウイルソン大統領(Wilson, W.) 1019
 浮田 和民 107-8, 142, 156, 218, 228,
 234, 320-2, 325, 329, 336,
 403, 419, 425, 427-8, 434,
 441-4, 478, 483, 579-80,
 583, 633-4, 637-9, 641, 649,
 706-7, 752, 765, 772, 774-5,
 777-9, 860, 885, 923, 929,
 1535, 1577

梅原 俊一 1206
 楳垣 実 344
 宇野 作弥 →吉田 作弥
 ウォード(Ward, J. W.) 1342, 1346
 魚木 忠一 901, 936, 1168, 1198-9,
 1201, 1305, 1308, 1536, 1538

ウォーナー(Warner, L.) 728
 浦口 文治 782, 784, 787, 1329
 浦野 信夫 1379-80

浦田喜代松 892
 ウルジー(Woolsey, T. D.) 704-6
 牛島林太郎 540

潮田千勢子(千世子) 356, 484-5
 碓井 正略 255

内海 忠勝 70
 内海 洋一 947-8, 950-1, 956, 960-1

V

ヴァーベック(Verbeck, C. F.) 497
 ヴァン・ダイク(Van Dyke, H.) 728
 ヴァン・ヴェスト(Van West) 1335
 ヴェッチ(Vetch, A.) 308
 ヴォーリズ(Vories, W. M.) 574,

- 戸田 乾吉 258
 戸田 一男 426
 戸田 敏子 562
 戸上 純庵 257
 十川 十二 1071
 戸川 治之 1288
 戸川 残花 344
 時岡 恵吉 138, 238, 356-8, 360
 徳田 球一 953
 徳 武義 1126, 1128
 徳富 久子 260
 徳富猪一郎(蘇峰) 113, 116, 142, 144,
 150-3, 171, 180, 182-3, 185-
 7, 196, 234-5, 237-8, 241-2,
 246, 260, 269, 273, 287, 320,
 348, 354, 360-2, 400-2, 410,
 486, 524, 572, 575-6, 578-9,
 582-3, 620, 635, 667, 763,
 765, 768, 772, 777, 785-6,
 1170-1, 1340, 1419, 1547,
 1565, 1578, 1584
 徳富 一家 260
 徳富健次郎(蘆花) 167-71, 173, 179,
 184, 260, 493, 511
 徳富 静子 260
 泊 武次 892
 トマス(Thomas, F.) 1223
 留岡 幸助 130, 253, 316, 450-1, 483,
 495, 497-505, 507, 569, 642,
 707, 749-50, 771, 776, 1549
 留岡 夏子 501
 富永 ハル 307
 富森 京次 1175, 1198-9, 1305, 1308,
 1538
 富森幽香子 675-6, 814
 富岡 謙三 795
 富岡 侃 387
 富田 碎花 910
 富田 しづ 558
 富田鉄之助 275-82, 362
 友井 禎 1089
 外村吉之介 724
 戸波 易次 269
 外山 修造 391
 トレッドウェル(Treadwell, J.) 690
 トレイシー(Tracy, J.) 689
 鳥養利三郎 1157, 1292
 トリート(Treat, S. B.) 692
 トロッター(Trotter, J. M.) 1022, 1032
 トルストイ(Tolstoi, L.) 768
 十時 一郎 257
 東州 散史 339
 豊崎善之助 479
 坪内 雄蔵 338
 土田 杏村 922, 952
 土橋 寛 1542
 土山 登 1430
 津田 久之 342
 津田二郎次(次郎, 次郎治) 137, 342,
 401-2, 626
 津田 元親 179
 津田 三郎 1079
 津田 仙 33-4, 278
 津田 鍛雄 165-71
 津田 梅子 355
 津下紋太郎 598, 635, 654, 861, 866, 885,
 892, 1039-40, 1044, 1046,
 1049
 辻 新次 573
 辻 籌夫 129, 137
 辻橋 源助 116
 辻井民之助 956
 辻本 金治 1288
 塚越 貞雄 1080
 塚本簾之助 1295, 1301-2
 月岡 国保 946
 津村 秀松 777
 津村伊十郎 256
 津村 耕造 256
 津村 慎槌 258
 津村 鶴松 257
 綱島 佳吉 111, 146, 148, 155, 157-9,
 186, 479, 641-2, 765, 772,
 775, 861-2, 881, 887
 恒藤 恭 831, 868, 870, 906-7, 912,
 926-7, 930, 1105, 1306
 都留 信郎 483
 鶴見 俊輔 76, 1498
 対島 忠行 945
 露無 文治 774

- 武田文太夫 285
 竹田 聰洲 1542
 武田 五一 1016, 1056
 武田 猪平 533, 892
 武田 好一 1088
 武田新太郎 1226
 竹田 省 572, 583, 906, 929
 竹川宇三郎 387
 竹鼻仙右衛門 245, 247, 249
 竹原 義久 148, 160
 武久 昌子 892
 竹久 夢二 489
 竹越与三郎 347
 竹村藤兵衛 289
 竹中 悦蔵 130
 竹中 勝男 495, 1071, 1089, 1306, 1531
 竹中 正夫 929, 1313, 1360, 1542
 竹ノ内ユキ 1443
 竹下 康之 157
 竹内 愛二 1088-9
 武内忠次郎 340
 竹内多計子 670
 竹内雄四郎 313
 竹崎八十雄 913, 1079
 滝 能武太 →岸本能武太
 滝川 幸辰 1103, 1135
 滝本 誠一 584, 653, 782, 787, 902, 923-6, 1524-5, 1565
 滝山 季乃 1445, 1455
 滝山 徳三 344, 1222, 1443-4, 1447, 1449-52, 1454, 1456-7
 玉井 ヨシ 257
 玉置日出夫 1455
 玉松 公叙 545
 民秋重太郎 1298
 田村初太郎 316, 569
 田村 亀吉 892
 田村 直臣 485, 752
 田村作次郎 527, 568
 田村 新吉 765
 田村(永田)忠止 553
 田村 武治 427
 田村 徳治 929, 1197-8, 1291, 1538
 淡 徳三郎 948, 953
 田辺 元 1090
 田辺 哲崖 951
 田中篤三郎 943
 田中 親光 1208
 田中不二麿 28, 55, 66-7, 77, 85-6, 89, 95
 田中源太郎 245, 247-8, 250, 423
 田中 平八 235, 248
 田中 秀武 587
 田中伊佐久 1337
 田中 敬治 285
 田中 光三 1071
 田中 光夫 1465
 田中喜間太 247, 250
 田中 道克 256
 田中 昇 1160
 田中 良一 1154, 1295
 田中 正造 484-5
 田中左右吉 1088-9
 田中助三郎 90
 田中 忠雄 1349
 田中 兎毛 112, 281, 285, 512
 田中 常七 247, 250
 丹波 敬三 379
 谷口八兵衛 377
 谷口 敏郎 344
 谷本 富 772
 谷 喬 341, 793
 田岡 嶺雲 486
 タルカット(Talcott, E.) 91, 313, 721, 793
 立石 岐 250, 892
 立石玄三郎 1160
 建野 郷三 310
 タトル(Tuttle, C. E.) 26
 田内 温 538
 田崎 健作 130, 1311
 田添 鉄二 487, 489
 テイラー船長(Taylor, H. S.) 37, 39
 テイラー校長(Taylor, S. H.) 39, 43-5
 テイラー(Taylor, W.) 66, 88, 90-1, 203, 290, 311, 693-4, 716-7
 寺田徳太郎 1079
 寺崎 良策(数次) 892
 寺島 宗則 195
 戸田 海市 583, 925

ストロング(Strong, E. E.) 752
 ストウ博士(Stowe, D. M., Dr.) 27
 スウィフト(Swift, J. T.) 735
 鈴木 八郎 545
 鈴木 英男 326
 鈴木 彦馬 386, 393
 鈴木伊三郎 265
 鈴木 浩二 130, 1199
 鈴木左馬二郎 170
 鈴木 成美 1455
 鈴木 達治 382, 386, 392, 1157, 1321
 鈴木 友吉 1137
 鈴木 虎雄 584, 802
 鈴木 義道 947
 鈴木 吉満 544-6, 588, 829, 881, 1383

T

田畑 忍 912, 931, 960, 1075, 1106,
 1109, 1111, 1117, 1131,
 1135-6, 1138, 1250, 1261,
 1274, 1291, 1304, 1306-8,
 1315, 1319-23, 1334-5,
 1337, 1353-4, 1411, 1419

立花 親信 257
 立原 翠軒 1517
 タフト大統領(Taft, W. H.) 771
 多貝藤右衛門 245
 田川大吉郎 910
 田口 重良 1201
 田口 竹子 765, 798, 892
 田口 芳弘 1331, 1334
 田原 和郎 967, 1071, 1078-9, 1081,
 1089
 大正 天皇 88
 田嶋 錦治 583
 高田久栄子 676
 高田 耕安 635
 高田 峯尾 1444, 1455
 高田 露 269
 高田 保馬 925
 高木 文平 86, 210, 245, 247, 249
 高木 兼寛 308, 777
 高木 及言 1410, 1416-7, 1421, 1427
 高木 正義 479
 高木 貞衛 572, 576, 765, 933

高木 遷 148
 高木庄太郎 613, 827, 829, 853, 855, 885,
 901, 906, 912, 923, 927, 929,
 1105
 高橋 源次 1222
 高橋 才登(ゴルドン) 978
 高橋 五郎 65
 高橋 吾良 164
 高橋 重吉 256
 高橋 勘 1375, 1379-80
 高橋 和巳 1497
 高橋 虔 153
 高橋(是清)蔵相 1059
 高橋 優 129
 高橋元一郎 1092
 高橋 乙治 1089
 高橋 信司 594, 598, 618, 912, 929-30,
 946, 1073, 1075, 1106
 高橋 勝 1312
 高橋(龍造)村長 1046-7
 高橋 貞三 929-30, 1071, 1073, 1075,
 1077, 1089-91, 1106, 1246,
 1253, 1306, 1316, 1332, 1541
 高橋 米三 1295
 高橋 悠 1331, 1542
 高橋 善作 324, 1535
 高松 仙 116, 197, 210
 高松 彝 288
 高松 保実 86
 高道 基 1120
 高野 悦子 1506
 高野 重三 450, 456, 569, 749-50, 777
 高岡トシ子 676
 財部 静治 572
 高島 米峰 489
 高島小金治 157
 高島柄之助 362
 高谷 道男 293
 高山 義三 942-3, 1325
 高山 久蔵 1110
 高山 修 1337
 高柳松一郎 425, 1526
 高安 三郎(月郊) 341, 344, 568, 571,
 609-10
 竹林 熊彦 612, 868-9, 1526

- 下田鏡之助 1127, 1119
 下田 吉人 1455
 下村智喜子 197
 下村孝太郎 107-8, 136, 148, 159, 197,
 212, 237-8, 316, 373-6, 378,
 390-3, 524, 527-8, 531, 537,
 567-9, 593, 597, 602, 605,
 626-7, 633, 638, 641, 643-
 7, 883, 1510, 1565, 1574,
 1577
 下村正太郎 729, 1028, 1196, 1536
 下村 末子 197
 下山順一郎 379
 下山 敏夫 1418, 1422-3
 下里貞次郎 600-1, 604, 619
 志村卯三郎 1220
 品川弥次郎 67
 新原 俊秀 148, 160
 新村 出 1145-6
 新村 猛 1127, 1140-45, 1529
 篠田 一人 1247, 1298, 1542
 篠田 稔 1030
 塩井健太郎 320, 341
 塩瀬 千治 538, 540, 545, 547, 588, 613,
 1079, 1080
 白石喜之助 493
 白柳 秀湖 483, 485-6, 489
 シーリー (Seelye, J. H.) 41, 49, 51, 73,
 77, 80, 370
 穴戸 義和 706
 嘯月, 嘯月 散史→橋本 嘯月
 樵耕 山人 340
 松籟 山人 343-4
 周 再賜 569, 932
 春陽 学人 339
 シュワルツ (Schwartz, W. I.) 1327
 宋 秉峻 771
 素軒 学人 340
 素軒 逸史 →村田 勤
 園 頼三 344, 868, 870, 901, 1175,
 1179, 1181, 1198, 1306,
 1536, 1538
 須田 明忠 90, 101, 113, 121, 129
 須田勝三郎 378-9, 386, 388, 393
 末広 重雄 584, 929
 末包 敏夫 1088-9
 末川 博 1306
 末光 信三 546-8, 1014-5, 1212-4,
 1229, 1232, 1247, 1315,
 1397, 1399, 1413
 陶山タセ子 197
 菅 円吉 1089-90
 菅原 慇 1287
 杉原 楠彦 892
 杉本寛次郎 387
 杉村 縦横 489
 杉村楚人冠 479, 487
 杉浦儀一郎 932
 杉浦貞二郎 933
 杉浦 利貞 289
 杉瀬 祐 1456
 杉田 康卿 33-4
 杉田 莊作 1357
 杉田 潮 111, 120, 139, 148, 207, 359,
 700
 杉田勇次郎 →元良勇次郎
 杉山元次郎 960, 1071, 1089
 杉山 重義 139, 359
 杉山新九郎 179
 杉山 恒子 765, 798
 鷺見 喬子 679
 スミダ (Sumida, S. H.) 1327
 スミス (Smith, I. V.) 305, 312, 721
 佐谷 悦治 412, 478, 706, 920, 925, 929,
 930, 946, 950, 952, 960,
 1075, 1105-6, 1134-5, 1306,
 1344, 1358, 1435, 1485,
 1541, 1570
 炭谷 小梅 266
 スモール (Small, C.) 718
 スタップ (Staab, N. L.) 1328
 スタークウェザー (Starkweather, A. J.)
 196-7, 199, 203, 206-9, 213,
 694, 721, 1012
 スタンフォード (Stanford, A. W.)
 313, 733-4, 1018
 スターンス総長 (Stearns, A.) 48, 50
 スティーヴンズ (Stevens, F. A.) 91
 ストレイト (Straight, H.) 723
 ストロブリッジ (Strobridge, M.) 722

- 坂崎 定雄 387
 向坂 逸郎 441
 崎山 比左衛 779
 桜井 忠一 1183, 1247
 桜井 幹 320
 桜井 忠温 778
 三条 実美 310
 佐野 栄一 943-4
 サリヴァン(Sullivan, P. B.) 1362
 猿丸吉左衛門 1149
 雀部 顕宜 821
 佐々城アイ 261
 佐々木久弥 1081
 佐々木道浩 1282
 佐々城ノブ 261
 佐々木惣一 572, 584, 906, 942, 955
 佐々木健盛 164
 佐々木多門 420
 佐々城豊寿 195, 261, 356
 佐立 健雄 1248
 佐藤 栄作 1471
 佐藤機恵子 →山室機恵子
 佐藤 茂見 1071
 佐藤晋一郎 341
 佐藤 健男 1089
 佐藤虎太郎 285
 佐藤 義雄 931, 1117, 1130, 1135, 1196, 1537
 里井 陸郎 1288, 1300, 1444
 沢 克己 179
 沢辺 正修 420, 425, 1512, 1517
 沢辺 四郎 386, 388
 沢田 政雄 947, 949, 956, 960-1
 沢山 保羅 116, 144, 175, 208, 715
 沢山 雄 128
 沢柳政太郎 898
 瀬川 次郎 929, 1076, 1112, 1117, 1130, 1135, 1138, 1149
 セイヴォリー船長(Savory, W. T.) 36
 関 貫三 →松山高吉
 尺 振八 68
 関原喜代松 533
 千 宗室 549
 瀬谷佐次郎 831, 853, 856-7, 868-9, 906, 927, 985, 1035
 シャイヴリー(Shively, B. F.) 583, 972, 976-7
 シャイヴリー(Shively, G.) 977
 シェッド(Shed, M.) 721
 斯波 貞吉 486-7
 柴原 宗助 250
 柴田 平治 947
 柴田 勝正 1411, 1419
 芝田 豊吉 387
 柴田 幸雄 1455
 柴山 健三 868-9, 1122, 1126, 1128-30, 1138, 1141, 1144, 1148
 渋沢 栄一 234-5, 248, 360, 362, 508, 581, 773, 776
 渋谷 昭彦 1326
 志知 文子 486
 志賀 重昂 427, 771
 志賀 英雄 1430
 信楽 健三 1383, 1385
 重久篤太郎 72, 86, 344
 重見 周吉 147-8, 518
 茂 義太郎 912, 1201, 1288, 1376, 1379, 1390, 1417, 1419
 薩陞 正邦 420, 423, 425
 シーベリー(Seabury, R. I.) 1294, 1314, 1398
 シドモア(Scidmore, E. R.) 728
 島原 逸三 853, 857
 嶋田啓一郎 1090
 島田 三郎 246, 310, 484, 610
 島田 斉一 258
 島田 ツタ 256
 島本 英夫 1064, 1068, 1247, 1291, 1307, 1332
 島本徳三郎 548, 663, 1058, 1294, 1386
 島崎 藤村 484
 島津 源蔵 1341
 島津 久光 75, 88
 清水 公敬 379
 清水 柳吾 256
 清水泰次郎 569
 清水滝次郎 371
 清水つるよ 810
 清水 有楽 1448
 清水 義樹 1087, 1089-90

ラーネッド(Learned, D. W.) 88, 90-1,
105, 113-4, 126, 142-3, 147,
155-6, 158, 203, 206, 214,
228, 329, 372, 376, 403, 412,
420, 425, 438, 448, 450,
477-8, 480, 495, 528, 531,
536, 551, 568, 571, 637, 694,
702-8, 710, 721, 829, 836,
924, 971, 1010, 1329, 1534,
1553, 1582-3

ラーネッド夫人(Learned, F.) 210,
552, 554-8, 561, 702, 704, 726

ラーネッド(Learned, G. W.) 220, 802
973

ラーネッド(Learned, R.) 703

ランケ(Ranke, L. V.) 409

ラッシュ(Rasche, J. M.) 1032

レーマン(Lehman, R.) 72

レヴィット(Leavitt, H. H.) 66, 69

リチャーズ(Richards, L.) 294, 296-7,
299-300, 302-8, 312, 718,
721

リチャーズ夫妻(Richards, T.) 773,
1024-5, 1028-9

リーチ(Leach, B.) 724

リード(Reed, M. E.) 308

リギンズ(Liggins, J.) 497

リンカーン大統領(Lincoln, A.) 699

リンカーン(Lincoln, E. J.) 1327

リッセル(Richel, P. P.) 1329

ロイド(Lloyd, G. G.) 1032, 1329, 1342,
1362

ロックフェラー三世(Rockefeller, J. D.)
1325

ロンバード(Lombard, F. A.) 528, 535,
538, 568, 571-2, 577-8, 583,
765, 892, 971, 974, 1011,
1018

ロープス(Ropes, W.) 692

ローランド(Rowland, G. M.) 1039

ロリマー(Lorimer, A. I.) 1032

蠟山 政道 908

ローズヴェルト元大統領夫人
(Roosevelt, Mrs. T.) 910

ローズヴェルト元大統領夫人

(Roosevelt, E.) 1320

ルイス(Lewis, R. W. B.) 1333

ルーミス(Lomis, H.) 63

S

貞方 敏郎 1288, 1318-9, 1455, 1530

佐伯 小糸 674

佐伯理一郎 301, 308, 313, 315-6, 386,
436, 552, 676, 729, 765, 798,
802, 1281

佐伯 好郎 773

佐原 恵美 1448

西原 清東 459-61, 526-7, 566, 645,
747-8, 1574

西郷 隆盛 69, 81, 88

斎藤軍太郎 427

斎藤 勇 333

斎藤玄三雄 1307, 1356, 1430, 1484-5,
1489-90

斎藤 晃一 1207

斎藤 実 283, 1059

斎藤 緑雨 487

斎藤 たつ 262

斎藤 安 197

サージャント(Sergeant, J.) 689

佐治 秀寿 583

佐治 実然 479, 486

酒井 牧男 1230, 1396

坂井静治郎 257

酒井 真輔 129

堺 タケ 257

堺 為子 486

酒井 哲雄 1312-3

堺 利彦(枯川) 486-7, 489, 494, 948

酒井 康 1456

榊原 巖 1089-90

榊原 胖夫 1326, 1337, 1360

阪巻 譲治 1027

阪巻 駿三 1027, 1030

坂本 義雄 323, 341, 343

坂本 義夫 426

坂田 郁子 670

阪田 素夫 1414

坂田貞之助 →村井貞之助

坂田 好弘 1355

宇阪 良二 1288
 大迫 真之 269
 大沢徳太郎 548, 765, 798, 892, 987,
 1039-40, 1043-4, 1046,
 1143, 1280-1, 1284, 1482
 大沢 善夫 1414
 大沢 善助 120, 210, 219, 313, 315, 389,
 524, 673, 815, 821, 1280,
 1583
 鷺淵 邵子 1226, 1456
 押川 方室 277
 押川 方義 277-81, 286-7
 大島 正健 341-2
 大島 虎毅 778
 大下 あや 886, 893
 大下 角一 1026, 1031, 1089, 1251,
 1282, 1295, 1305, 1311-3
 1315, 1335-6, 1341, 1343,
 1348, 1351, 1414
 大下 尚一 1325, 1329, 1331, 1334, 1545
 大城 有保 256
 大城 掌石 255
 桜 洲 → 及川 八楼
 大杉 栄 489
 太田 雅夫 1498
 太田 のぶ 810
 太田藤一郎 1286
 大谷音二郎 323
 大多和清子 776
 大坪 権六 423
 大坪 幸弘 1204
 大塚 愛子 1445
 大塚 肇 1445, 1455
 大塚 正子 561
 大塚 正男 253
 大塚 精一 892
 大塚 節治 189, 868-9, 932-3, 936, 939,
 1071-2, 1132-5, 1137, 1139,
 1144, 1147-8, 1199, 1249-
 50, 1259, 1261, 1263, 1273,
 1291, 1294-5, 1302, 1304-5,
 1308, 1315-6, 1318-23,
 1325, 1329, 1342, 1345,
 1358, 1408, 1411, 1413,
 1415-7, 1427, 1448-9, 1454,

1531, 1540, 1565
 大塚 素 483, 498, 533, 598, 777, 797,
 821
 大浦 梅夫 948, 953, 956, 960-1
 大脇 順路 662
 小柳津 恒 945-6
 大山 郁夫 963
 大山 巖 70, 508
 尾崎信太郎 505
 尾崎 保 576, 765
 尾崎 行雄 508, 910, 943-4
 小沢 三郎 1526
 瀬口 彰 1302

P

パーカー (Parker, P.) 12-4, 16, 20, 22,
 24
 パーク (Park, E. A.) 53, 190, 1523
 パーミリー (Parmelee, H. F.) 194,
 203, 208-9, 217, 220, 721,
 1012
 パレル (Parel, J. C.) 1327
 パットン博士 (Dr. Patton) 830
 ペドレー (Pedley, H.) 829, 866, 1040, 1043
 ページ (Page, J. B.) 12-4, 16, 22, 24
 ペリー (Perry, M. C.) 29
 ペティー (Pettee, J. H.)
 376, 576, 765, 798
 ピーボディー (Peabody) 774
 ピッカー (Pickert, P. L.) 1327
 ピーズ (Pease, A. S.) 1022
 ポーター (Porter, A.) 36
 ポーター (Porter, N.) 97, 1521
 プウチャーチン 29
 プリンプトン (Plimpton, C. H.) 1342,
 1344-6
 プリンプトン (Plimpton, G.) 727, 815,
 1010, 1012, 1022
 R
 ラッド (Ladd, G. T.) 752, 1521
 ライシャワー (Reischauer, E. O.)
 1345
 ライト大佐 (Wright) 506
 ライト (Wright, J. D.) 892

大賀 寿吉 778-9
 緒方 純雄 1305
 小河滋次郎 504, 507
 小川 則要 285
 小川 芋銭 489
 小川与四郎 350
 荻原 芳枝 663, 675-6, 678
 荻野勝太郎 1203
 大原孝四郎 266
 大原孫三郎 1524, 1565
 大橋 寛政 1423
 大井蝶五郎 1084, 1089
 及川 八楼 591-2, 595-8, 600-1, 604-5
 大石誠之助 482, 491, 493-4
 大石 七郎 326
 岡 沈龍 341
 岡 仁詩 1355
 岡部 長職 112
 岡田権二郎 166-8, 170, 173
 岡田政太郎 1526
 岡田 松生 108, 116, 151, 1577
 岡田 妙 1331
 岡田 哲夫 171
 岡田 有対 945
 岡橋 祐 344
 岡本 義一 978
 岡本 春三 1247, 1293, 1429-30
 岡本彦八郎 135
 岡本 磯雄 →安部 磯雄
 岡本 昌夫 1455
 岡本 実 604
 岡本 老野 307
 岡本 清一 1306, 1321, 1323, 1346, 1352
 岡本藤五郎 591
 岡本 米藏 777
 岡本 良和 164-5
 岡本 善八 1543
 岡村 正人 931, 1183, 1307
 岡村信太郎 1088
 岡野 久二 1456
 大川 一司 324
 大川 周明 968
 岡谷 元治 1248
 沖 守固 234
 沖中 忠一 1430

沖田 節治 →大塚 節治
 奥 亀太郎 111, 137
 大久保房二郎 166-9
 大久保真次郎 137, 150, 186, 362
 大久保利謙 50
 大久保利通 69, 81, 497, 718
 大久保利武 719
 奥田 義人 459, 898
 大隈 重信 233, 248, 250, 362, 444, 448-9, 508, 524, 565, 752, 772, 1025
 奥宮 健之 493
 奥村甚之助 956
 奥村 龍三 621-2, 729, 1024, 1125, 1157, 1201, 1295, 1414
 奥村新之丞 250
 奥村 鶴松 619
 奥野 昌綱 65, 277-8
 大倉喜八郎 235, 248
 奥谷 松治 966
 大道 良太 779
 大宮 季貞 705
 沢潟 久孝 1201
 大森 房吉 779
 大森 鐘一 579-80
 大森富次郎 129
 大村 達斎 290-1
 大西 祝 111, 118, 148, 150, 196, 324, 342, 442, 479, 524, 625, 639, 641, 772, 1577
 大西 静子 197
 大西 秋海 341
 小野英二郎 157, 327, 343, 402-3, 406-7, 419, 422-3, 427, 635, 641-2, 707, 748, 885
 小野房太(郎) 164-71, 173, 320
 小野 瓢郎 379, 388
 小野 忍 128
 小野 静子 343
 小野 俊二 290-2
 小野友二郎 423, 425
 小野寺久子 1221
 オルチン(Allchin, G.) 281
 オールズ(Olds, C. B.) 346
 長田 時行 129

- 中山 重行 386
 中里 介山 486, 489
 中沢 良夫 483
 生江 孝之 505, 1526
 難波 一 348, 352
 南波 浩 1300
 難波 紋吉 929, 931, 994-5, 1075, 1080,
 1106, 1136, 1155, 1169,
 1170, 1183, 1196, 1291, 1536
 難波宣太郎 130
 橋橋盛次郎 387, 392
 成石平四郎 493
 成瀬 シズ 307, 313
 奈須 義質 269
 新島 襄 8-27, 28-62, 63-93, 95-139,
 141-73, 174-90, 194-220,
 228-39, 240-71, 273-87,
 288-318, 345-62
 新島 公義 179-80, 232, 349, 362
 新島 みよ 113
 新島 民治(是水) 29, 35, 68, 72 74, 81-
 2, 194, 1508
 新島八重(子) 113, 208, 213, 224, 238,
 357, 359-60, 633, 688, 813-4
 根岸橋三郎 194
 二瓶 要蔵 533
 新原 俊秀 135, 137, 624
 新美卯一郎 491, 493
 新村 忠雄 493
 二階堂円造 90, 101, 129, 700
 二階堂才之助 260
 ニコルズ(Nichols, S. B.) 1018-21,
 1023, 1032
 ニコルズ(Nichols, Mrs. S. B.) 1021
 蜷川 新 584, 776, 902
 西 周 266
 西 浩吉 617
 西田 天香 946
 西田 賀次 1430
 西島七五三太 →新島襄
 西川光二郎 481, 486-7, 489, 491
 西村 栄治 378-9
 西村 謙通 1501, 1503, 1542
 西村金三郎 660-3, 899, 991, 1039-41,
 1043-4, 1046-9, 1054, 1072-
 5, 1077, 1106
 西村七三郎 245, 247, 249
 西村 茂樹 204
 西村 捨三 362
 西邨辰三郎 1337, 1411, 1415, 1418, 1420
 西尾 文亨 129
 西尾幸太郎 130, 765, 770
 西山 教充 892, 1040, 1043
 新渡戸稲造 776-7, 910
 丹羽清次郎 450, 569, 610, 642, 1510,
 1577
 野田 市蔵 892
 野田卯太郎 262
 野手 耐 1062-3
 野口 英世 776
 野口 末彦 130
 野井 正澄 1030
 野村 治一 1071, 1136
 野村 仁作 548, 1190, 1204, 1369, 1384
 野村 重臣 930, 960, 1076, 1105-7,
 1109, 1111, 1118, 1130,
 1134-5
 野村 靖 234
 野村義太郎 821, 1578
 野中 豊次 257
 乗松 吾三 542, 545
 能勢 克男 613, 616-8, 929-30, 965,
 967, 1073, 1075, 1106
 能勢 道(子) 668, 670
 能勢 鼎(子) 674, 676
 能勢安次郎 668
 ノースロップ(Northropp, B. G.) 97
 野沢 治郎 1397, 1399
 ニューマン(Newmann, J. M.) 1327
 ニューウェル(Newell, H. B.) 569,
 576-7, 765, 892
 O
 オア(Orr, G. J.) 1327
 越智 文雄 1447-8, 1452, 1455-6
 小田美奇穂 943, 952
 小田 信士 1089
 尾田 葉子 297, 303, 306
 織田 萬 926
 大江 直吉 1071, 1295

永井 昌彦 1465
 長井 長義 386
 永井柳太郎 483, 779, 1171
 永松記一郎 256
 長岡 博明 945
 永岡 喜八 358
 永沢嘉巳男 617-9
 永島嘉三郎 1231, 1247, 1399
 永田幸太郎 265
 永田 光正 1392
 永田 伸也 906
 長谷 信篤 74
 長屋芳次郎 892
 長与 専斎 296
 ナイティンゲール(Nightingale, F.)
 296, 308
 内貴甚三郎 245, 247, 249
 内藤 啓吉 387
 内藤 省三 1160
 内藤 隆行 661, 1054
 仲 かね 197
 中堀 愛作 542, 545, 1206, 1372
 中江 兆民 480
 中川 裕 968-9, 1110-1
 中川 精吉 583, 829, 833-4, 867-9, 873,
 906, 923, 925, 929, 931, 957-
 8, 987, 991, 1035-6, 1042-3,
 1062
 中川豊次郎 164, 166-8, 171
 中桐道太郎 821, 1210, 1212
 中浜万次郎 30
 中原 賢次 1084, 1089
 中治 武二 929
 中橋徳五郎 875
 中井 正一 1141-2, 1146
 中井宗太郎 802
 中島 五郎 401
 中島 仁 929, 957-8
 中島 和子 214
 中島 健蔵 1104
 中島今朝吾 1119-20
 中島 信成 282
 中島 信行 362, 1517
 中島 力造 90, 635, 641, 1578
 中島 重 868, 870, 888-9, 894, 906-

10, 912, 921, 923-5, 927,
 929-30, 960, 965, 967, 1069-
 72, 1074-5, 1079-93, 1105-
 6, 1553
 中嶋 静恵 822, 1448
 中島(長谷川)末治 111, 210-1, 213, 219,
 821
 中島 玉吉 584
 中島 太郎 841
 中島 哲人 931, 1198, 1538
 中島与三郎 892
 中目 滝子 802
 中村 栄助 124, 224, 231, 245, 247, 249,
 288, 290-1, 294-5, 300, 310,
 313, 376, 403, 443-4, 524,
 544, 576, 603, 618, 633, 638,
 644, 654, 673, 712, 718, 765,
 781, 798, 859-60, 863, 868,
 872-3, 892, 919-20, 943,
 991, 1039, 1072, 1074, 1076-
 7, 1082, 1092, 1525
 中村 遙 1072, 1074, 1090, 1549
 中村 均 1030
 中村 健蔵 1030
 中村 熊吉 1080
 中村 正直(敬字) 68, 186
 中村 貢 684, 730, 1016-7, 1248,
 1443-4
 中村 三郎 1430
 中村 義彦 1530
 中西 仁三 1307
 中野 忠八 379
 半井 澄 289
 中瀬古 和 1337, 1445, 1454
 中瀬古六郎 168-71, 173, 323, 344, 379,
 392, 527, 531, 537, 568, 583,
 595-6, 598, 600-1, 603-5,
 615, 658, 660, 676, 703, 726,
 757, 765, 797-8, 802, 820-1,
 829, 880, 1012-3, 1028,
 1075, 1157, 1188, 1526,
 1534, 1565, 1577
 中田 守雄 1408, 1416, 1421
 中塚 種夫 1149
 中山 日吉 1080

宮下 太吉 493
 宮崎 菊次 947-8, 950-3, 956, 960-2,
 宮沢 鎮之 1295
 三宅 逸 1179
 三宅 駿一 382, 387, 393, 575, 651, 654,
 765, 777, 1039, 1157
 三宅キクノ 558
 三宅 荒穀 160-1, 330, 518
 三宅 利平 863, 892, 1524-5, 1565
 三宅 雪嶺 486, 778
 三好 退蔵 266
 溝口貞五郎 485, 1069
 溝口鹿次郎 262
 溝口 靖夫 1089-90
 溝手文太郎 130
 水野 純 1181, 1196, 1537
 水野 恭介 1220
 水崎 基一 498, 572, 575, 578, 583-4,
 650-1, 653, 757-8, 763-5,
 782, 784-5, 821, 902, 1578
 水谷長三郎 949, 952, 956, 1526
 水内数之助 1180
 望月興三郎 319, 321, 338-9, 341
 望月 満子 1221, 1455
 門田 新六 527, 531, 538, 540, 568
 モンハイム(Monheheim, C. W.) 1327
 森 有礼 49, 276, 278, 565
 森 エイ 255
 森 軍治 257
 森 順子 1417
 森 信夫 255, 258
 森 リン 256
 森近 軍平 493-4
 盛口 憲二 1247
 森口喜之助 328, 426
 盛口徳三郎 387
 森川 抱次 507
 森川 正雄 1024, 1157-8
 森本 介石 →松村介石
 森本 金石 821
 森本 俊潤 250
 森本 芳雄 1199
 森村市左衛門 773
 森中 章光(貞一) 188, 401, 620
 森田 寛太 1206

森田 金蔵 765
 森田久萬人 106, 108-9, 113, 120, 142,
 144, 148, 155-60, 179, 186,
 228, 232, 335, 422, 441, 483,
 624, 634, 638-9, 706, 1329,
 1521, 1535-6, 1577
 森戸 辰男 953
 森安 忠之 1298
 守安富太郎 327
 守住 勇魚 538
 モートン(Morton, J. T.) 294, 309
 元田 永孚 204
 本宮 啓 1388
 本宮弥兵衛 932, 990, 996, 1079, 1199
 元良(杉田)勇次郎 90, 117, 635, 646,
 700, 1578
 モット(Mott, J. R.) 1084, 1086
 棟方 文雄 1298
 宗像 政 269
 胸形 虎治 258
 宗藤 圭三 929, 931, 1071, 1075, 1080,
 1106, 1117, 1135, 1179,
 1182, 1306, 1337
 村井(坂田)貞之介 168-70, 173, 320,
 323, 401, 569, 572, 586, 648,
 748-50, 765, 892
 村井藤十郎 929-30, 1076, 1112, 1117,
 1130, 1135
 村井 知至 479, 481, 486, 707, 1577
 村上小源太 1526
 村上直次郎 111
 村上 俊 1285
 村上春太郎 527, 540, 794
 村岡 景夫 1531, 1536
 村田竹治郎 621-2, 662, 667, 1414
 村田 勤 339, 483, 598, 633, 702, 1577
 村山紀美子 892
 村山 盛敦 1315
 村山 令蔵 765
 武藤 欽 1080
 陸奥 宗光 234, 250, 362

N

永江 純一 262
 永井 秀夫 1455

- 松枝 脩蔵 260
 松枝 ツル 260
 松木 喬 792, 794
 松井 十蔵 269
 松井 七郎 931, 1135, 1181, 1196, 1206, 1306, 1330, 1332, 1334, 1536, 1544
 松井豊太郎 262
 松方幸次郎 892
 松方 正義 237, 362
 松倉 恂 280, 282
 松本文三郎 772
 松本 五平 61
 松本勘十郎 250, 260
 松本 通晴 1543
 松本亦太郎 225-6, 572, 577, 584, 635, 676, 765, 772, 798-803
 松本 誠直 1517
 松村 介石 278, 624
 松村 竹夫 129
 松波仁一郎 892
 松野新九郎 247, 250
 松尾 敬吾 111
 松尾 熊夫 137
 松尾音二郎(音次郎) 320-1, 341, 498, 511, 662, 776, 919, 1535
 松尾七三郎 179
 松尾卯一太 491, 493
 松尾 保次 892
 松岡 英士 1430
 松岡 荒村 481-6, 488
 松岡弥四郎 269
 松下幸之助 1342
 松浦 政泰 144, 185, 210, 212, 219, 224, 319-21, 337, 668, 670-1, 673, 676, 681, 702, 765, 792-3, 797-8, 800, 821, 1577
 松浦 敬子 892
 松浦 喬 892
 松山 斌 929, 931, 1075, 1105-6, 1111, 1136, 1179, 1196, 1306
 松山 守善 261
 松山 信直 1334
 松山 三郎 977
 松山 高吉 65-6, 79, 129, 278, 280, 289-90, 316-7, 337, 403, 412, 419, 538, 568-9, 633, 715, 718, 750-1, 793, 1519
 松山常次郎 1200-1
 松山 義則 27, 1358
 松好 貞夫 1295, 1306-7, 1316, 1412, 1414
 松沢 岩人 257
 松沢 兼人 949, 1089
 目賀田廉一 929
 目賀田種太郎 779
 メイヒュウ(Mayhew, T.) 689
 メリット(Merritt, R. A.) 1023-4, 1032
 道庭儀三郎 256
 三上真吾(真吉) 423-4
 三木富美子 892
 三木 清 1087
 ミークルジョン(Meiklejohn, A.) 1019
 南石福二郎 542, 545, 1128, 1553
 嶺岸 四郎 829, 834, 867-9
 美濃部達吉 1074, 1095, 1103
 蓼田 林蔵 386, 388
 ミラー(Miller, J. E., Jr.) 1333
 ミラー(Miller, J. H.) 1327
 三田村四郎 946
 箕作 阮甫 33
 満永 寅一 587
 三谷 種吉 1535
 三浦 国雄 1060-1, 1098-100
 三浦 清一 1089
 三輪 源造(花影) 343-4, 531, 538, 540, 545, 547, 588, 594, 603, 609, 784, 1577
 宮川 一男 164, 167-71
 宮川 経輝 108, 116, 139, 142, 144-6, 151, 153-7, 197, 213, 215, 228, 278, 310, 332, 359, 376, 403, 435, 524, 569, 572, 576, 578-9, 604, 610, 626-7, 633, 639, 706, 748-51, 758, 765, 772, 774-5, 786, 816, 820-1, 1201, 1577, 1583
 宮本 英修 929
 宮本 正清 1445
 宮下 千代 1448

黒田 麴廬 31
 黒田(杉浦)品子 552, 554
 クロウフォード(Crowford, D. L.) 1025
 クロイツァー(Kreutzer, L.) 684
 黒岩 周六(涙香) 486
 黒川 剛 280-1
 黒川 直也 1028-30
 黒川 芳蔵 906, 923, 929, 931, 990,
 1136, 1157, 1181, 1183,
 1306, 1366
 黒松 巖 1287, 1541
 黒水 亀 129
 クロス(Cross, A.) 1328
 クロスビー(Crosby, D.) 714
 黒住 宗忠 1518
 草川 靖 1113, 1121, 1123-4, 1126-
 30, 1137
 草野 門平 269
 草埜 茂松 260
 楡田 民蔵 923-4, 943, 953
 楠瀬 一貫 164-5
 桑木 敏翼 775, 802
 桑田 常造 335-6

M

町田甚太郎 892
 マーフィー(Murphy, U.G.) 507
 間所 兼次 1080
 前窪勝之助 542, 545, 588, 1187, 1369
 曲瀬 薦枝 197
 曲瀬 雪枝 197
 マイヤー(Meyer, M. H.) 212, 282,
 285, 793
 楨村 正直 70, 74, 77, 86-90, 92, 104,
 193, 203, 694, 733
 牧野 英一 1074
 牧野 伸顕 250, 752, 1218
 牧野 信 538, 540, 588, 782, 784
 牧野 虎次 450, 498, 550, 559, 572, 576,
 651, 663, 666-7, 680, 707,
 765, 782, 785, 1024, 1063,
 1150, 1154-5, 1159, 1168-
 70, 1179, 1183-5, 1188,
 1200-1, 1203, 1218, 1230,
 1232, 1245, 1281, 1289-90,

1369, 1414, 1419, 1565, 157
 マッカーサー(MacArthur, D.) 1239-
 40
 マッキークヴァー(McIvor, N. W.)
 448-9, 474, 524, 526
 マッキーン(McKeen, P. F.) 40
 マックリーン(McLean, D. H.) 1325
 真鍋 定造 129
 マレー(Murray, D.) 191
 マール・スミス夫人(Merle-Smith, Mrs.
 Van S.) 1015, 1017
 マロイ(Mulloy, M. S.) 1032
 丸井 清七 253
 丸山 通一 327
 正木安左衛門 245, 247, 250
 間瀬 八重 816-7
 真下 夫人 1145
 真下 信一 1127-8, 1140-6
 益田 孝 234-5, 248
 増田 豊吉 257
 増島六一郎 778
 升崎 外彦 1072
 マーティン(Martin, W. A. P.) 76
 松原孫七郎 129
 松田大三郎 179
 松田 栄治 321
 松田 順平 139
 松田 道 214, 558, 613, 662, 674, 676-
 8, 680, 765, 798, 812, 815-7,
 821-2, 1210, 1215
 松平 千秋 1455
 松平 容保 75
 松平 正直 276, 278-83, 286
 松枝元治郎 260
 松枝剛毅地郎 260
 松枝 ヒテ 260
 松枝 改蔵 260
 松枝 顕三 260
 松枝 コト 260
 松枝 マツ 260
 松枝 ナヲ 260
 松枝 慎吾 260
 松枝 シツ 260
 松枝 正造 260
 松枝 俊蔵 260

- 小栗 里 792, 794
 国領伍一郎 956
 駒井 四郎 1090, 1488, 1499
 小松堅太郎 1291
 小松 緑 780
 小松 幸雄 1348
 小森 啓助 1288, 1300
 小室 信介 354, 420, 425, 1512, 1517
 近藤 栄蔵 1526
 近藤 賢二 572, 576, 653, 765, 785
 近藤又三郎 336, 342
 近藤作次郎 320, 341-2
 近藤徳太郎 425
 近藤 恒有 315
 近藤 豊 377
 金剛 巖 549
 小西小一郎 129
 小西駒之介 873
 小西増太郎 768, 1514, 1585
 河野 重三 118
 河野 密 929, 948-9, 956, 960, 1105
 近衛 文磨 1341
 郡 定也 1530
 郡 徳隣 269
 コリンズ(Collins, A.) 1017
 コール(Cole, C. W.) 1325-6, 1342,
 1344, 1419
 小塩 高恒 505
 小滝無事郎 320
 小谷 政祐 1519
 小谷 信市 1071
 幸徳千代子 486
 幸徳 秋水(伝次郎) 479, 481-2, 486-7,
 489, 491-4
 小山熊治郎 1154, 1157-9, 1161-3, 1307
 小山松治郎 1455
 小崎 千代 1222
 小崎 弘道 105, 107-8, 116-8, 120, 142,
 238, 274, 278, 280, 300, 313-
 5, 320, 323, 329, 335, 337,
 360-1, 376, 378, 390, 403,
 405, 410-1, 413, 419, 422-3,
 426, 428, 433-5, 437-9, 441-
 4, 452, 454, 463, 469-70,
 473, 480, 522, 527, 537, 572,
 580, 627, 630-3, 636-9, 646-
 7, 652, 706, 748, 752, 765,
 772, 796, 865, 1289, 1517,
 1522, 1532, 1577, 1583
 小崎 道雄 1199, 1201, 1419
 小崎(安達)成章 111
 久保千代子 676
 久保 政義 1371, 1381, 1386, 1392
 久保 貞子 1444
 久保 誠三 1383, 1385
 久保田米麿 1519
 久保田 譲 567-8
 陸 羯南 410
 久原 躬弦 579-80
 久原庄三郎 266
 久次米哲子 1443, 1445, 1455
 九鬼 隆一 83, 86
 九鬼 隆周 83
 九鬼 隆備 197
 九鬼 隆義 83, 700
 クック(Cook, J.) 159
 熊井キヨシ(ジョージ・キヨシ・クマイ)
 (Kumai, G. K.) 1027
 国井 勘助 572
 久邇宮家彦王 1223
 蔵原 惟郭 150, 155, 158
 クラーク(Clarke, B. S.) 140
 クラーク(Clarke, B. W.) 139
 クラーク(Clarke, H. S.) 139, 631, 1522
 クラーク(Clark, M. J.) 721
 クラーク(Clark, N. G.) 17, 23, 197,
 207-9, 228, 240, 274, 395,
 692
 クラークソン(Clarkson, V. A.) 212,
 721
 クラップ(Clapp, F. B.) 731-2, 807,
 819, 1010, 1017, 1221, 1223,
 1440, 1445, 1454
 栗原 基 286, 775-6, 778
 栗原陽太郎 1090
 栗生 光謙 378, 420
 厨川 白村 775, 779
 黒田英三郎 1181
 黒田 寛 929
 黒田 謙一 931, 1136, 1198, 1538

- 川島 フサ 1222
 川島甚兵衛 425
 河島 醇 362
 ケイディー(Cady, C. M.) 329, 721, 733
 ケイディー(Cady, E. H.) 1333
 剣持 省吾 130
 ケーリ(Cary, A. E.) 1328, 1419
 ケーリ(Cary, A. S.) 1324, 1440
 ケーリ(Cary, E. E.) 220, 736-7, 802, 818
 ケーリ(Cary, F.) 737-8, 978, 1342, 1419
 ケーリ(Cary, J.) 735
 ケーリⅡ(Cary, O.) 220, 315, 317, 448, 495, 528, 531, 568-9, 695, 735-7, 750, 1018
 ケーリⅢ(Cary, O.) 77, 709, 738-9, 1288, 1293-8, 1320, 1324-6, 1328, 1334, 1345, 1419
 喜田直之助 1079
 木戸 孝允 67, 69-72, 74, 694
 木原 政治 257
 吉川 秀造 1304, 1541-2
 菊池 大麓 565, 575
 菊川 忠雄 950
 木村 栄吉 1517
 木村 清松 772, 818, 1169
 木村孫八郎 929
 木村 棗園 342
 木村 徳蔵 779
 木村 俊夫 1331, 1334
 木村 和吉 266
 木村米次郎 587
 木村 与作(経夫) 153
 木村 熊二 351
 キング(King, S.) 727, 1056, 1324
 木下金太郎 164
 木下 尚江 481, 484-7, 489, 491, 493
 木咲 弘 1455
 岸田 美郎 598
 岸本能武太 137, 336, 342, 479, 569, 707, 747
 キース(Keith, E.) 724, 728, 1028
 喜多 謙一 892
 喜多直之助 1060, 1098
 北垣 確 1526
 北垣 国道 206, 234, 249, 288-9, 298, 306, 310, 362, 733
 北垣 宗治 13, 350, 395, 702, 1331
 喜多川義比 379
 北小路龍太郎 164-5
 北村 竜蔵 213
 北村 就蔵 155
 北村 透谷 484
 北里 ユウ 307
 木山巖太郎 320
 木畑浩四郎 1148, 1179, 1181
 小林 初子 675
 小林 正直 892, 1039-40, 1043-4, 1046-9, 1526
 小林 登 871
 小林 秀知 262
 小林 輝次 943
 小林富次郎 765
 小林 康三 1319
 河内清太郎 387
 河内 周平 291
 児玉 伸児 266
 児玉 花外 489, 491
 児玉 熊吉 260
 児玉 信嘉 313, 378
 児玉亮太郎 323, 328, 423, 426, 654, 885
 児玉 実用 344, 1288, 1293, 1296, 1346, 1488
 児玉 実英 1326
 児玉 精斎 265
 コーエン(Cohen, J. A.) 1359
 甲賀 源吾 31, 370
 古賀鶴次郎 320, 361-2
 小島竜太郎 486
 小池いく子 794
 小池幸太郎 596
 小泉俊太郎 379, 389
 児島 惟謙 266, 362
 小島佐兵衛 140
 小島昌太郎 929
 小島 祐馬 906, 923-4
 古木 慶吉 533, 538
 古木虎三郎 749, 752
 小北寅之助 130

- 金田 民夫 1542-3
 金子 尚雄 505
 金子 金寿 538
 金子 喜一 479
 金子 忠吉 1080
 兼松 こと 266
 管野 スガ 493
 叶宮 貞昌 1529
 唐沢 郁夫 1445, 1455
 狩野 敏 968
 樫村 清徳 310, 360
 柏木 義圓 163-4, 167-71, 173, 240, 319
 -20, 323, 328, 332, 334, 354,
 427-8, 441-2, 444, 450-7,
 483, 493, 569, 638-9, 647,
 750, 910, 1535, 1577
 柏木 隼雄 1029
 柏井 園 1578
 柏井 広治 387
 柏屋六衛門(岡本彦八郎) 250
 片桐 君子 1530
 カタギリ・ミネオ 1032
 片桐 清治 129, 148, 161, 283-5, 287
 片桐 哲 559, 613, 1211, 1213, 1217-
 9, 1221, 1227, 1230, 1232,
 1247, 1252-3, 1295, 1397,
 1413-4, 1440, 1444, 1447-
 50, 1454, 1456-7, 1529
 片桐 芳子 558, 1395
 片岡 健吉 537, 566-7, 645-6, 748, 1574
 片山 道頼 257
 片山 潜 479, 481, 489, 491, 716, 726
 片山 幽吉 130
 カーティス(Curtis, W. L.) 971, 973
 カーティス(Curtis, W. W.) 144, 281,
 285
 加藤 秀徹 1518
 加藤 弘之 385
 加藤 寿 129, 137, 161, 265, 513
 加藤 出雲 1203
 加藤 順三 730, 1444
 加藤 謙爾 1071, 1443-5, 1451-2, 1457
 加藤小太郎 987, 1039, 1526
 加藤 雅子 1337
 加藤 延雄 542, 545, 1205-6, 1247,
 1369, 1371, 1374-6, 1381,
 1383, 1386, 1390, 1392,
 1413-5, 1421
 加藤 延年 527, 531, 538, 540, 545, 547,
 588, 784, 1378, 1577
 加藤竜太郎 344
 加藤 査 257
 加藤 さだ 1227, 1248, 1440, 1445
 加藤 てい(テイ) 1227, 1445, 1456
 加藤時次郎 486
 加藤与五郎 382, 387, 392, 1157
 加藤 美雄 1455
 加藤勇次郎 107-8, 120, 144, 151, 155,
 197, 207, 213, 379, 513, 627,
 633, 821, 1577
 勝 海舟 241-3, 354, 362
 勝俣 敏子 1017-8, 1223
 勝田 孝興 1002
 勝浦 悦 810
 河辺鎬太郎 116, 151
 河田 嗣郎 583
 川越 義雄 127
 河合 義一 483
 河井寛次郎 1445
 河合 光寛 571
 河合竜太郎 892
 川合 信水 261
 河上 肇 583, 924, 943-4, 956, 963
 河上丈太郎 956, 1072
 河上 清 479, 481, 486, 491
 川勝 原三 299
 川勝光之助 245
 川久保儀一郎 892
 川本 恂蔵 313, 518, 576, 635, 748, 765
 河本 竹松 320
 川本善五郎 871
 川村 あき(アキ) 1227, 1407
 川村利兵衛 255
 川村 得三 1196
 川中勘之助 774
 河原 政勝 929, 931, 1076, 1119, 1135-
 6, 1181, 1196
 河原林義雄 245, 247, 250
 川崎 健二 947
 河崎 洋子 1313

1414
 石渡 芳江 1445
 石塚 正治 183, 187, 195, 320, 327
 石塚 多 1230
 磯部 敏郎 130
 磯田 義治 663, 1080, 1322-3, 1385, 1427
 磯貝由太郎(雲峰) 320, 340, 342-4, 793
 磯野小右衛門 70, 72-3, 78, 231, 245
 板垣 退助 69, 170-1, 354
 板倉 勝明 29
 板倉 勝朝 929
 伊丹 義衛 344
 伊藤 銀月 487, 489
 伊藤 春子 577, 765, 798
 伊藤 博文 69, 246, 250, 275, 362, 524, 752
 伊藤規矩治 1334
 伊東 熊夫 245, 247, 250, 290
 伊藤 野枝 894
 伊藤 テツ 303
 伊藤与三郎 344
 緑屋 寿雄 494, 1526
 井瓜 良平 111
 岩淵 廉 280
 岩井 文男 916, 920, 1072, 1074, 1090
 岩井 武俊 1124
 岩倉 具視 55, 1045, 1055
 岩倉 具実 1455
 岩間松太郎 1088-9
 巖本 善治 241
 岩崎 久弥 235, 248
 岩崎 卯一 1146
 岩崎弥之助 235, 248, 444
 岩田 義道 952
 巖谷 孫三(孫藏) 424-5, 427
 巖谷 季雄 771
 岩山太次郎 1329
 泉 末治 427
 泉 隆 952

J

ジェームズ(James, A. C.) 1012-4
 ジェームズ夫人(James, Mrs. D. W.) 225, 727, 797, 1012, 1395

ジェーンズ(Janes, L. L.) 100, 113, 126, 141, 373, 434, 809, 893
 ジョーダン(Jordan, D. S.) 770, 773
 十文字 信介 281-2
 ジュリーノ 牧師(Jurino) 350

K

樺山 愛輔 1325
 樺山 資紀 444
 カーブ夫妻(Cobb, E. S.) 579, 689, 932, 971-2, 977-8, 1011, 1018, 1022, 1199, 1223
 鍋木 薫 558
 蛸堂 野史 343
 門池 義民 595
 加賀武四郎 387
 賀川 豊彦 816, 910, 944, 966-7, 1069, 1071, 1079-80, 1085-6, 1088-9, 1092-3, 1311, 1419
 梶原 保人 260
 梶山 信 258
 寛 克彦 1090
 垣田 純朗 260
 覚前 睦夫 1307
 釜田 泰介 1331
 鎌田 助 → 原田 助
 亀島 豊治(豊吉) 413, 423
 亀島 広吉 765
 亀山 昇 111, 116, 137, 479
 上嶋 敢 1080
 神谷 卓男 778
 上谷 続 559, 1119, 1125, 1150, 1578
 上司 小剣 489
 金居 信雄 542, 545, 547
 金森 観陽 185
 金森 通倫 107-8, 113, 117, 121, 142, 151, 156, 179, 228, 234, 278, 289, 306, 329, 362, 403, 496, 500, 524, 625, 627, 633, 737, 910, 1577
 金山 正信 1331, 1337
 神原 富文 262
 神戸 正雄 583, 925
 神田 兵三 950
 金田 弘義 618, 1090

人名索引 I

- 市田文次郎 245, 247, 249
 市原 兼子 224
 市原 盛宏 106, 108-9, 113, 116-7, 121, 142, 147, 151, 155, 157-60, 179-80, 186, 212, 232, 274, 281, 283-6, 290, 349, 419, 422-3, 425-6, 524, 576, 633, 639, 641, 707, 765, 775, 1329, 1518, 1577
 市川栄之助 715
 市川 まつ 715
 市村 光恵 571, 583
 一瀬 長造(蔵) 269
 井手(竹原)義久 111, 124, 135, 137, 342
 五十嵐嘉広 482
 井伊玄太郎 1089
 飯 清 1311-4
 飯井 定吉 892
 飯田逸之助 194
 飯塚恒太郎 527, 538, 540, 571, 583, 782, 784, 787
 池辺 三山 493
 池袋 清風 121, 129, 134-6, 146, 148-9, 160-1, 210, 212, 342, 344, 349
 池田賢十郎 1121
 池田庄太郎 1171, 1547
 池松 豊記 269
 池本 吉治 347
 幾尾 義一 258
 幾尾ヤヨノ 256
 生島 吉造 709, 1031-2, 1180, 1423, 1426
 生田 長江 945
 今林 則満 247, 250
 今田 知二 923-5
 今川恒二郎 169
 今川 恒吉 164, 169-70
 今井 栄吉 401
 今井 隆吉 613, 619, 1079-80
 今井 仙一 1306
 今井梅治郎 929
 今井 歌子 489
 今泉 真幸 531, 538, 568, 571, 863, 1578
 今村 勇吉 167-9
 今中 次磨 831, 843, 847-8, 853-5, 868, 870, 898-901, 906-7, 920, 926-8, 988, 1089
 今西 正雄 1332, 1356, 1488-9
 今谷逸之助 1443
 稲葉市郎右衛門 247, 250
 稲田周之助 583
 稲垣満次郎 326-7
 イングリッシュ(English, A. R.) 1032
 井上 勲 1338
 井上準之助 1059, 1094
 井上 馨 69, 204, 234, 248, 275, 358, 362
 井上権之輔 164-5
 井上 毅 565
 井上 通泰 342
 井上 操 414, 419
 井上直三郎 929
 井上誠之助 164-8
 井上哲次郎 332, 334, 411
 井上 善吉 165-6
 犬養 毅 1059, 1094
 入江節次郎 1542
 入江鷹之助 414, 419
 伊勢みや子 →海老名みや子
 伊勢 時雄 →横井 時雄
 石橋為之助 576, 765
 石田英一郎 961
 石田 英雄 1089
 石田 一良 1330, 1541
 石田 憲次 868-9, 924, 928, 1222
 石田秀一郎 929-30, 967, 1071, 1075, 1079-80, 1106
 石田季治郎 588, 923-5
 石田とし子 1221
 石黒猛次郎 773
 石原 質 868, 870
 石井 勇 401, 765
 石井 十次 307, 495-6, 498-500, 506
 石井 辰喜 307
 石井 裕二 1357
 石川 京 1075
 石川三四郎 486-7, 489
 石川 啄木 492
 石川芳次郎 662-3, 1157, 1253, 1315-6,

- 205, 293, 497, 715
 ヘール(Hale, A. D.) 493
 ヘッセル(Hessel) 1445
 ヒバード(Hibbard, E.L.) 731-2, 1010,
 1223, 1252, 1439-40, 1444-5,
 1449, 1455-7
 ヒッチコック(Hitchcock, E.) 51, 370-
 1, 752, 771
 ヒドゥン(Hidden, D.) 40
 ヒドゥン(Hidden, M. E.) 39-41, 46
 姫野 誠二 950
 日野 真澄 527-8, 531, 538, 543, 568,
 571, 578, 583-4, 610, 758-9,
 765, 782, 784, 788, 966,
 1138, 1578
 平林 一 1430, 1434-5
 平井 広五 491
 平岩 愼保 266, 770
 平沼八太郎 248
 平沼 専造 235
 平田 久 569
 平田 澄子 1221
 平田 義道 984
 平塚 益徳 206
 平山 橋二 426
 平山 玄 1036, 1428
 平山 武知 258
 広川 友吉 164-5, 317, 527, 539, 569
 弘松 宣枝 426
 弘中 又一 542, 545, 547
 広瀬源次郎 1079
 広瀬桂太郎 420
 広瀬孝二郎 320
 広津 友吉(友信) 58, 138, 238, 255,
 320, 359, 361-2, 626-7
 ヒル(Hill, A. H.) 220
 ヒル(Hill, A. L.) 802
 久永機四郎 542, 547, 588, 784, 1577
 久永 省一 1383
 菱田 冲行 129
 菱田貞三郎 892
 菱木 信興 247, 250
 菱本 丈夫 154
 人見一太郎 260, 362
 人見 牧太 168-71
 飛矢 夢弓 609
 保高 正記 167-71, 173, 320, 325
 ホーイ(Hoy, W. E.) 281
 ホイラー総長(Wheeler) 770
 ホイラー(Wheeler, J. E.) 91
 ホイットニー(Whitney) 703
 本多 文子 556
 誉田 季磨 946
 本多 虎雄 542, 545
 本多 庸一 277
 本位田祥男 1080
 本庄栄治郎 929
 本間 春子 197
 本間 重慶 90, 101, 113, 116, 120, 197,
 737
 ホプキンズ(Hopkins) 103-4, 205
 堀 俊造 309, 313, 315
 堀 周造 261
 堀 貞一(金太郎) 90, 101, 111, 117,
 137, 174-6, 178-9, 184-6,
 196, 479, 913-4, 967, 1071,
 1077, 1080, 1139, 1169, 1553,
 1577
 堀場 信吉 1307
 堀本 利慶 201
 堀内 保丸 1418
 ホール(Hall, C.) 1330
 ホール(Hall, J. W.) 1023-4, 1031-2,
 1325
 ホルブルック(Holbrook, M. A.) 315
 星名 久 684, 728, 730
 星名 秦 1307, 1354-5, 1366, 1385,
 1470, 1487-8
 星野 繁子 1530
 星野 貞軒 83
 細迫 兼光 949
 堀田 康一 943-5
 ホワイト(White, F.) 721
 ホワイト(White, F. N.) 282, 285
 I
 伊庭菊次郎(湖崖子) 782, 866, 1578
 井深梶之助 277-8, 461
 伊吹岩五郎 130
 指宿 照久 309

- 半田善四郎 1170
 ハンソン(Hanson, D. B.) 1327
 原 勝郎 802
 原 権四郎 250
 原 六郎 234, 248, 513
 原 忠美 128, 135, 137, 139, 238, 320, 357, 360
 原 敬 489, 943
 原 猛雄 1181, 1196, 1307, 1336, 1537, 1544
 原 胤昭 262, 497, 507
 原 富子 765, 798
 原田 永佐 387
 原田 二郎 334
 原田 健 787
 原田 熊雄 261
 原田 信夫 1089
 原田(鎌田)助(溪鹿) 111, 128, 146, 153-61, 181, 185, 224, 316, 447, 449, 479, 537, 540, 542-4, 569, 571-2, 574-9, 581, 583-4, 586, 610-1, 623-4, 637, 639, 643-4, 646-55, 673, 676, 747-52, 757-67, 769-70, 780-2, 784-8, 797-8, 800, 802, 816, 820-1, 859-60, 862, 884, 906, 910, 927, 933, 1009, 1025, 1149, 1289, 1329, 1366, 1514, 1524-6, 1556, 1558, 1561, 1569, 1574, 1577, 1585
 原田 虎二 255
 ハリントシ(Harrington, B. C.) 892
 ハリス(Harris, J. N.) 236, 322, 372-5, 443, 448, 473, 475, 637, 755, 983
 長谷場知亀 765, 798, 800, 814
 長谷場純孝 578-80, 800
 長谷部文雄 929-30, 1075, 1105-6, 1134-5
 長谷川又之丞 320
 長谷川如是閑 910
 長谷川専太郎 171
 長谷川末治 156
 橋本 一雄 1030
 橋本 喜作(奇策) 323, 342, 344, 1039
 橋本 正義 951
 橋本 ミツ 1445
 橋本 嘯月(嘯月散史) 342-4
 橋本 昌三 277
 橋本 綱常 351, 359
 ハッサン(Hassan, I.) 1333
 秦 孝治郎 550, 1157, 1263, 1307, 1342, 1345, 1357-8, 1413-4, 1435-6
 秦 孝道 531, 538, 540, 568, 588, 784
 畠山 一郎 765
 畠山 一松 165-71
 畠中 博 816
 波多野 鼎 948, 952
 波多野培根(勝山) 265, 320, 361-2, 531, 535-43, 588, 610, 653, 764, 782-4, 787, 817, 1171, 1188, 1553, 1569, 1577
 波多野鹿之助 1300
 波多野承五郎 157
 服部 園 792, 794
 服部 他助(他之助) 379, 793
 ハウ(Howe, A.) 556
 速水 琢巖 705
 速水 敏彦 1312
 速水 藤助 613, 647, 663, 867-8, 870, 957, 1128-9
 林 源十郎 266, 892
 林 治定 116
 林 淳一 1455-6
 林 醇平 266
 林 純蔵 1181
 林 要 929, 952, 1075, 1105-7, 1109-12, 1134-5, 1144
 林 信雄 930, 951, 1117, 1119, 1131, 1135
 林 徳(トク子) 676, 792, 794
 林 外浪 675
 林 可彦 266
 ハザード(Hazard, N.) 1328
 ヘボン →ヘップバーン
 ヘイル(Hail, J. B.) 711
 ヘンダーソン(Henderson, C. B.) 774
 ヘップバーン(Hepburn, J. C.) 65,

1118, 1130, 1135
 房前 達 260
 伏見 令子 1222
 二見鏡三郎 427
 風斗 マキ 256
 風斗 実 255, 258
 風斗 ノブ 256
 不破唯次郎(唯二郎) 106, 108, 117, 139,
 151, 359, 1577
 不破 ユウ 310, 313
 冬広 幾 810

G

ガービシュ(Garbisch, M.) 1328
 ガードナー(Gardner, F. A.) 297, 305
 ガン(Gunn, G. B.) 1327
 ガナマン(Gunnemann, J.) 1032
 ゲインズ(Gaines, M. R.) 733-4
 ギフォード(Gifford, P.) 1346
 ゴーヴ(Gove, M. E.) 718
 ゴッドヴィスキー(Godwisky, L.) 728
 ゴードン(Gordon, F.) 972
 ゴードン(Gordon, M. L.) 66, 69, 74,
 76, 91, 105, 124, 126, 144,
 148-9, 155, 203, 206, 214,
 228, 265, 288, 315, 320, 448,
 450, 495, 688, 691, 695, 710-
 4, 716, 723, 972-3, 1519
 グッドセル(Goodsell, F. F.) 687
 後藤 寿夫 949
 後藤 順 1026
 後藤 政一 1030
 後藤 新平 283, 776
 後藤 昇造 538
 後藤俊三郎 427
 グイン(Gwinn, A.) 731-2, 1342, 1360,
 1382, 1419
 グラント夫妻(Grant, R. H.) 1312,
 1332, 1361, 1414, 1440
 グリーン(Greene, D.) 693, 714
 グリーン(Greene, D. C.) 22, 63, 65-6,
 69, 79-80, 91, 136, 147, 205,
 212, 372, 374, 376, 569, 576,
 579-80, 688, 693, 699-700,
 714-6, 720, 726, 749-50, 765

グリーン(Greene, E. B.) 716, 774
 グリーシー(Griesy, P. V.) 465, 1328
 グリズウォルド(Griswald, F. E.) 721
 グローヴァー夫妻(Grover, D. I.) 531,
 538, 583, 923, 972, 975
 グルディー(Gouldy, M. E.) 91
 具島兼三郎 1111, 1117, 1131, 1135
 ギューリック(Gulick, J. T.) 975-6,
 1518
 ギューリック(Gulick, O. H.) 79-80,
 91, 695, 700, 975
 ギューリック(Gulick, P. L.) 975
 ギューリック(Gulick, S. L.) 450, 578,
 583, 610, 765, 910, 972, 975
 ギュッツラフ(Gützlauff, K. F. A.) 24

H

ハブル(Hubbell, L. W.) 1332
 八浜徳三郎 505
 ハーディー夫妻(Hardy, A.) 10-1, 13,
 18-21, 26, 31, 39-42, 56, 67,
 73, 93, 97, 112, 202, 204,
 233, 237, 274, 331, 348-52,
 361-2, 691, 720
 ハーディー(Hardy, A. S.) 10-1, 26,
 73, 76, 204
 ハーディー(Hardy, W.) 779
 ハドレー(Hadley, A. T.) 752
 ハイムズ(Hymes, J. A.) 1328
 ハインライン(Heinlein, D. A.) 1327
 灰谷キヌ子 197
 浜 玉円 338
 浜田 耕作 778-9
 浜田 正稲 362
 浜田 正雄 361
 浜田 庄司 724
 浜田 与助 868, 870, 929, 932, 1199,
 1306, 1538
 浜岡 五雄 765
 浜岡 光哲 231, 245, 247-9, 748
 花畠 健起 319, 328, 330, 341
 花田岩五郎 330
 花井 卓蔵 489
 半田 隆一 1420
 半田宇平治 250, 269

遠藤 汪吉 1356, 1491-2, 1494, 1496,
1501, 1504
遠藤 哲夫 957
榎本 修 130, 946, 1089
エリオット(Eliot, C. W.) 774
エリオット(Eliot, J.) 689
エリセーエフ(Eliseeff, S.) 1329-30
江藤源九郎 1111
エヴァーツ(Evarts, J.) 693, 714
江崎玲於奈 549, 1342

F

ファイン(Fine, J. E.) 1327
ファニング(Fanning, K.) 556-8
ファウラー(Fowler, E.) 727, 1014-7,
1210
ファウラー(Fowler, K.) 1015
フェアバンクス(Fairbanks, C. W.)
772
フェノロサ(Fenollosa, E.) 723, 772
フェノロサ(Fenollosa, M.) 772
フィードラー(Fiedler, L.) 1333
フィリップス(Phillips, S., Jr.) 45
フィーズ(Fuess, C. M.) 48
藤林 広超 1288, 1300
藤井 文樹 1312
藤井 乙男 802
藤井 寅一 531, 538
藤井 亨 1295
藤井 倒扇 344, 609
藤井 義久 1444
藤倉皓一郎 1326, 1359
藤野惣太郎 1206
藤崎 長寿 269
藤崎弥一郎 269
藤沢 穆 923-5
藤代 泰三 190, 1430
藤田 愛二 821
藤田伝三郎 266
藤田 軍太 426
藤田萬右衛門 1079, 1081
富士屋卯之吉 36
深田 康算 584
深田未来生 1032, 1342
深田 俊章 1420-1

深田 武 868-9
深井 英五 320, 707, 765, 774, 1578
深沢 利重 269
福地源一郎 327, 338
福田 英子 484, 486, 489
福田和五郎 260
福田 純郷 269
福田 徳三 777
福原 春代 556, 1444-5, 1456
福原録二郎 565
福井大三郎 387, 392-3, 538, 540, 545,
547, 588
福井 準造 479
福井(重本)信一 1030
福井 捨一 1080
福井 達雨 1550
福井 貞一 892
福井矢之輔 247, 250
福本 和夫 1087
福島 綱雄 793
福沢 諭吉 157, 186, 191
舟橋 雄 344, 996-9, 1151, 1222,
1459, 1530
船田 秀雄 387
フォーク(Foulk, G. C.) 379
フォーセット(Fawcett, H.) 478
フーパー(Hooper, F.) 210-1, 703, 721
フラー(Fuller, H. G.) 251
フリーマン(Freeman, R. T.) 1327
フレミング(Fleming, E. J.) 1419
フレイザー(Fraser, H. E.) 307, 312-3,
315, 721
フリント夫妻(Flint, E.) 41-2, 46, 370,
631, 1522-3
フルベツキ →ヴァーベック
古市 春彦 942-3
古河 力作 493
古米 淑郎 1545
古沢 滋 354
古田合二郎 179
古谷 久綱 569, 572, 575-6, 578, 584,
748, 763, 765, 774, 776, 779,
785
古屋 美貞 929-30, 992-3, 1076-7,
1105, 1107, 1109, 1111,

近松 磯子 197
中条 毅 1543

D

デイヴィス (Davis, A. Y.) 210, 721
デイヴィス (Davis, J. D.) 12-3, 65, 75,
77-80, 83-5, 87-93, 101-5,
114-6, 126, 142-3, 193, 195-
7, 199-200, 202, 206, 209,
232, 240, 274, 279, 289, 292,
295, 313, 316, 329-30, 345-
7, 350, 362, 376, 395, 438,
440, 448, 453, 495, 524, 528,
568, 613, 637, 688, 693-4,
696, 699, 701-3, 710, 715,
721, 752, 1012, 1553, 1582
デイヴィス (Davis, J. M.) 90, 194, 197
デイヴィス (Davis, N.) 697
デイヴィス (Davis, S.) 296, 699, 702
ダブニー (Dabney, F.) 1311
ダッドリー (Dudley, J. E.) 91, 193, 700
大工原銀太郎 548, 821-2, 991, 994, 996,
999-1000, 1022, 1058, 1081,
1095, 1210
ダニング (Dunning, M. D.) 531, 538,
568, 773, 971, 974-5, 1018
檀 久太郎 256
団 琢磨 262, 1059, 1094
ダウブ夫妻 (Daub, E. E.) 1362
ダウンズ (Downs, D.) 549, 971-2, 978-
9
デフォレスト (DeForest, J. H.)
17, 91, 144, 281-2, 285-7,
735, 772
デフォレスト (DeForest, L. H.) 220,
802
デクスター (Dexter, G. M.) 66
デンジャーフィールド (Dangerfield, R.)
1331
デントン (Denton, M. F.) 218-9, 312,
552, 557, 561, 617, 674, 680,
684, 694, 721-4, 726, 728-
30, 732, 765, 793, 798, 802,
815, 817-8, 971, 1011, 1013,
1015-8, 1185, 1214-5, 1221-

3, 1448, 1452, 1553, 1574

デュリー (Dury, L.) 72
百々 静子 1444
銅銀 松峰 729
土倉 政子 673
土倉庄三郎 228-9, 234, 249
土肥 昭夫 410, 432, 886, 917, 1032
土井 十二 931, 1117, 1130, 1135, 1193,
1201
ドッジ (Dodge, W. E.) 12-3, 18, 20, 25
ドーン (Doane, E. T.) 91, 105, 113-4,
120, 126, 143, 694
ドナルド (Donald, A.) 710
ドワイト (Dwight, T.) 98, 690, 703-4
デューイ (Dewey, J.) 403

E

江原 素六 773
海老名弾正 (喜三郎) 106, 108, 113, 120,
142, 278, 524, 544, 613-4,
617, 624, 633-4, 655, 657-9,
661, 677, 765, 772, 778, 806-
7, 809-10, 813, 816, 821,
835-6, 848, 853, 860-2, 883,
885-8, 892-6, 898, 901, 906,
910-21, 927, 929-30, 956,
958, 980-1, 984-5, 988, 991,
1009-10, 1016, 1020, 1026,
1041, 1048, 1069-70, 1072-
4, 1077-8, 1086, 1092-3,
1105, 1149, 1202, 1210,
1218, 1288, 1528, 1532,
1558, 1574, 1577, 1585
海老名一郎 135
海老名みや子 116, 196-7, 199, 668,
1073, 1202
海老沢 亮 130, 1199
海老沢有造 1212
エドワーズ (Edwards, J.) 45, 690, 703
江口久次郎 256
江口 信行 344, 483, 598
江口弥九郎 256
頼娃孝之助 260
遠藤 彰 1356, 1496
遠藤 敬介 282

528, 733-4, 793
 麻田 貞雄 1360, 1545
 浅香 正 1331
 浅香 敏雄 1312
 朝河 貫一 780
 朝倉 恭二 358
 浅野 恵二 588, 614-5, 677, 1119, 1125
 浅野 泰造 1288
 蘆田英太郎 153
 蘆田 慶治 153, 174-5, 179, 184, 829,
 867-9, 932, 934, 936-9, 985
 足利武千代 426, 677, 725, 1079-81, 1577
 麻生 正蔵 793, 866, 872, 1039, 1577
 飛鳥井孝太郎 378-9, 388, 793
 足助 素一 483
 跡部定次郎 929
 アトキンソン(Atkinson, J. L.) 66, 91,
 116, 144, 147, 693, 699, 715
 アーヴィング(Irving, W.) 338-9
 粟津 寿 348, 352
 東 忠統 943-5
 安積新三郎 863

B

馬場種太郎 128, 137
 ヴァーベック →V項
 バック(Buck, A. E.) 448, 524, 526
 バックリー(Buckley, E.) 733, 734
 バックリー(Buckley, S. C.) 288, 299-
 300, 313, 315, 719
 伴 直之助 427, 641
 ヴァンヴェスト →V項
 ヴァン・ダイク →V項
 阪東兵太郎 164-66
 バラ(Ballagh, J.) 277
 バートレット(Bartlett, S. C.) 79, 693,
 714, 720, 726, 733, 735, 913,
 971-2, 1011
 バートレット夫人(Bartlett, F. G.)
 557, 973
 バウン(Bowne, B. P.) 976
 ベックウィス夫妻(Beckwith, M. and A.
 B.) 1327
 ベイントン(Bainton, R.) 98
 ベネディクト(Bennedict, H. M.) 721

ベネット(Bennet, H. J.) 568
 ベリー(Berry, J. C.) 65, 79, 91, 219,
 231, 233, 289-97, 299-301,
 304-5, 307, 309-10, 312-5,
 436, 495, 497, 691, 693, 700,
 717-9, 1028
 ベリー(Berry, K. F.) 719
 ベリー(Berry, W.) 717
 ベル(Bell, F.) 688-9
 ベルツ(Baelz, E.) 310
 別所 秀子 1443, 1455-6
 ヴェッチ →V項
 ビアマン(Bierman, M. L.) 1328
 薇倉 道人 343
 ボーラー(Boller, P. F.) 196, 201, 203,
 207, 211
 ヴォーリズ →V項
 ボールドウィン(Baldwin, C. H.) 72
 ボスワース(Bosworth, E.) 346
 ブアスティン(Boorstin, D. J.) 1332
 武間 富貴 558, 560-2, 680, 685
 武間 享次 1312-3
 文 天祥 145
 ブライアン大使(Brian) 774
 ブライアン(Bryan, C. P.) 580
 ブライス(Bryce, J.) 775
 ブラウン(Brown, S. R.) 65, 277, 497
 ブラウン(Brown, W. A.) 975
 ブレイナード(Brainerd, D.) 690
 ブリッジマン(Bridgman, E. C.) 21, 31
 ブリス(Bliss, M. F.) 296
 ブロディガン(Brodigan, B.) 1327
 プロジェクト(Bloagett, H.) 692
 ブルックス(Brooks, F.) →カーブ
 ブルンナー(Brunner, E.) 1311
 ブッシュネル(Bushnell, H.) 1523
 ブース(Booth, W.) 506, 508-9, 771

C

チャンドラー(Chandler, A.) 42
 千葉 瑑 137
 千葉勇五郎 531, 600, 604, 797, 821
 千田 貞暁 412
 千田 民衛 1253, 1294-5, 1315-6, 1319
 千田時次郎 262

人 名 索 引

A

- 安部 磯雄 60, 137, 160, 320, 324, 447,
 449-57, 460, 478-9, 481-4,
 486-91, 627, 639, 641, 655,
 659, 707, 860, 865, 885, 960,
 966, 1079, 1577
 阿部 賢一 757, 868, 870, 906, 923, 925,
 927, 1105
 阿部 政恒 321, 498, 626
 阿部 充家 269
 安部 清蔵 533, 818
 阿部 矢二 1196
 足立 順市 1181
 足達又八郎 247, 250
 足立 琢 129
 アダムズ(Adams, A. H.) 17, 91
 アダムズ(Adams, H. C.) 403
 会沢 清 1079
 相沢 清吾 617
 会沢清五郎 540
 アイゼンハワー(Eisenhower, D. D.)
 1343
 赤木嘉太郎 258
 赤木 林三 265
 赤井 直吉 166, 168-71
 赤峯 久蔵 179
 赤峯瀬一郎 117
 赤尾秀之助 1423
 明石 博高 72
 明川 忠夫 1424-5
 秋守常太郎 655, 657, 863, 865, 892, 897-
 8, 1092
 秋山 健 1360
 秋山 國三 1300
 秋山 哲治 189, 1206, 1295
 秋山恒二郎 282
 芥川 光蔵 591, 594, 598, 602
 芥川 木犀 594
 天城 チカ 257
 天城 勲 838, 841
 天野 郁夫 824
 天野 茂 482
 アーモスト(Amherst, J.) 25
 阿南 里士 1425
 アンダーソン(Anderson, C. R.) 1333
 安東 長義 892, 1201, 1526
 安藤乙五郎 129
 安藤 唯一 1248, 1282, 1295
 安藤 孝雄 1455
 青木 正児 868-9
 青木 庄蔵 765
 青木 周蔵 67, 234-5, 248, 362
 青木澄十郎 527-8, 747, 797, 818, 821
 青木 要吉 285, 320, 572, 765, 785
 青津福三郎 387
 青山 霞村 →青山嘉二郎
 青山嘉二郎 186, 394, 422, 638, 644, 659-
 60, 829, 840, 1410
 青柳 栄司 780
 青柳 猛 892
 荒金 強雄 256
 荒畑 寒村 487, 945
 新井 毫 362
 荒木 良造 483, 868-9
 荒木 幸子 765, 798
 荒木 貞夫 1223
 荒木虎之助 892
 荒瀬 かつ 814
 アレン(Allen, W. C.) 776
 有賀のゆり 1456
 有賀鉄太郎 940, 976, 1032, 1089, 1179,
 1199-201, 1305-6, 1311,
 1313
 有島 武郎 780, 892, 910, 1559
 有田 武一 164-6
 アーロン(Aaron, D.) 1333
 アルブレヒト(Albrecht, G. E.) 329,

同志社百年史 通史編二

一九七九年一月二十九日 発行

編纂 上野直蔵
発行

発行所 学校法人同志社

京都市上京区今出川通烏丸東入
玄武町六〇一

同志社社史史料編集所
電話(〇七五)二五一—三〇四一

印刷所 日本写真印刷株式会社

京都市中京区壬生花井町三
電話(〇七五)八一—八一—

分 類	記 号	巻次	所 属 場 所 及 び 台 帳 番 号
			図 書 館 一 同 資
099.02	DB-5	1:2	80-110.217

[illegible]

